筑波大学
University of Tsukuba

大学院スタンダード

筑波
スタンダード

TSUKUBA STANDARDs
for Graduate Schools and Programs

大学院スタンダード

知の拠点TSUKUBAで
新たな知と個性輝く人材を共創する

建学の理念を踏まえて、大学院における教育の目標とその達成方法及び教育内容の改善の方策を含む教育の枠組みを明らかにし、学位の質の保証と持続的向上を目指す本学の教育宣言として広く社会に公表します。

建学の理念

筑波大学は、基礎及び応用諸科学について、国内外の教育・研究機関及び社会との自由、かつ、緊密なる交流連係を深め、学際的な協力の実をあげながら、教育・研究を行い、もって創造的な知性と豊かな人間性を備えた人材を育成するとともに、学術文化の進展に寄与することを目的とする。

従来の大学は、ややもすれば狭い専門領域に閉じこもり、教育・研究の両面にわたって停滞し、固定化を招き、現実の社会からも遊離しがちであった。本学は、この点を反省し、あらゆる意味において、国内的にも国際的にも開かれた大学であることを基本的性格とする。

そのために本学は、変動する現代社会に不断に対応しつつ、国際性豊かにして、かつ、多様性と柔軟性とを持った新しい教育・研究の機能及び運営の組織を開発する。更に、これらの諸活動を実施する責任ある管理体制を確立する。

筑波大学教育倫理綱領

筑波大学は、あらゆる面で「開かれた大学」となることを目指し、固定観念に捉われない「柔軟な教育研究組織」と次代の求める「新しい大学の仕組み」を率先して実現することを基本理念とし、我が国における大学改革を先導する役割を担っている。人類社会の調和のとれた発展を担う知の拠点として、大学にさらに大きな役割が求められるなか、筑波大学は、知の全ての分野において幅広い教育研究活動を展開することが可能な総合大学として、個性と自立を基軸とし、世界が直面する問題の解決に主体的に貢献する人材の創出を教育の基本的な目標に掲げ、その実現のための具体的な指針として筑波スタンダード※1を定めている。これらの目標を達成するため、筑波大学のすべての教員は、教育に係わる以下の行動規範※2に従う。

1. 教員は、すべての学生の個性と能力を開花させ、豊かな人間性と創造的な知力の獲得を促し、学生とともに知の拠点を共創することに努める。
2. 教員は、学生の人格を尊重し、成長発達を促し、学生に最善の利益がもたらされるよう努める。
3. 教員は、教養教育から専門教育にわたる教育内容・教育方法の改善を継続的に行い、かつ学生の自主的な学修を支援する。
4. 教員は、筑波スタンダードに基づく明確な学習目標と成績評価の基準を定めるとともに、学習目標に沿った公正な成績評価を行う。
5. 教員は、学生の意見や批判に耳を傾け、誠実できめ細かな学生指導に努めるとともに、個人情報の保護を遵守する。

※1: 筑波スタンダードは、学士課程に関する「学群スタンダード」と大学院課程に関する「大学院スタンダード」からなる。

※2: 5つの行動規範のうち、1は全体の指針、2は学生の人格と利益の尊重、3及び4は教育改善の義務、5は学生の個人情報の保護を定めている。

筑波大学が授与する学位の意味について

筑波大学は、学生の自主的な学修を支え、多様な個性や文化を尊重する倫理的態度を涵養し、すべての学生の個性と能力を開花させる。豊かな教養と情報リテラシー並びに創造的かつ批判的な思考を基盤として、対話により個性や文化の違いを超えた人と人との信頼を醸成し、社会の持続的な発展を目指して高潔かつ真摯に行動し、人間と自然を慈しみ、芸術やスポーツに親しむ**豊かな人間性**を育む。こうした基盤に加え、

○**学士の学位は**、世界の動向と課題の本質を理解するためにデータの調査・分析を行い、「専門の**知識・技能**」を常に更新しながら異分野の専門知識に対する**広い理解力**を持ち、「本質を究める確かな基礎力と柔軟な思考力に裏打ちされた**創造性**」を身に付け、「国際社会において課題の解決に向けて主体的に行動する**実行力**」が備わったことを認定して授与する。

○**修士の学位**は、世界の動向と課題を学術的に理解して研究を行い、「真理の発見や価値の創造に貢献できる**研究力**」または「最新の学術研究の成果を含む高度な専門知識を学際的な視座から理解し、国際社会で活かす**知の活用力**」が備わったことを認定して授与する。

○**博士の学位**は、未解決の学術的課題や社会課題に対して、「自ら問いを設定し、課題の克服に向けた学際的研究行程を描き、新たな真理の発見や価値の創造をもたらす**自立した研究力**」と「対立する概念や価値観を結びつけ、より高い次元に止揚させ統合させる**創発力**」からなる**知の創成力**に、研究成果を基に国際社会の発展に寄与する**知の活用力**が加わった**創造的な知性**が備わったことを認定して授与する。

情報リテラシー：情報を適切に収集、評価、利用、発信する能力

創発力：対立する既存の概念にとらわれず、新しい発想で異なる概念を止揚させ統合した新たな概念や価値を生み出す能力

筑波スタンダードとは何か

筑波スタンダードは本学による教育宣言です。学士課程の学群スタンダード（平成20年3月公表）と大学院課程の大学院スタンダード（平成23年6月公表）の2種類があり、各課程で筑波大学が何を目指し、その目標をどうやって達成するかを明らかにし、本学が保証する教育の質を広く社会に公表するものです。教育の質を維持するだけでなく、それを絶えず改善し、持続的に向上させるツールとして、筑波スタンダードは学内でも重要な役割を果たしています。

「学位プログラム」の意義

学位プログラムとは、学士·修士·博士といった学位の水準と学問分野に応じて達成すべき能力を明示し、その能力を学生が修得できるように体系的に設計された教育プログラムのことです。学部等の教育組織に教員が固定される従来型のシステムでは、個々の教員が提供する授業の総和としてプログラムが組まれるため、社会の要請や学生のニーズよりも教員の事情が優先されがちでした。それに対し、学位を国際的互換性のある能力の証明と位置づけた上で、学位に相応しいプログラムにするために学内外の組織の枠を超えて教員が集まり、学生視点での教育内容を提供するのが学位プログラムです。学位プログラムを中心とした教育システムとすることで、学生にとっては、自らが何を学び、どのような力を身につけるのかが明確になり、社会にとっても大学教育の方向性と成果がより明確になります。

筑波スタンダードと学位プログラム

本学は開学以来、従来の学部制に代えて「学群·学類」を設置し、柔軟な教育体制を構築してきました。また、学生の教育のための組織と教員の研究のための組織を分離する独自の体制を採用し、教育の必要に応じて全学から教員を配置できるシステムを実現しています。これにより、一つの組織内に閉じずに教育を展開できるという、本学の理念を体現した仕組みとなっています。2011年度には、新たな教員組織（系）を設置する組織改革を行い、さらに2020年度には大学院を改組再編するとともに全学的な教学マネジメントの体制と仕組みを整備し、学位プログラムを中心とした教育システムへと全面移行しました。筑波スタンダードでは、すべての教育組織において、学位ごとの「学位授与の方針」と「教育課程編成·実施の方針」、およびその質を保証する方策を明示しています。これらは、本学の建学の理念に基づく一貫した取組です。今後も、国際的互換性と協同性を備えた教育システムとして本学の学位プログラム制の確立及び教育の質のさらなる向上を目指し、教職員一同、不断の教育改革を推進しています。

筑波大学大学院の教育目標

博士課程の教育目標

学問を継承し躍進させる研究者及び
異分野を融合し先端的な新領域を
切り拓く研究者をともに育む

深い専門性、卓抜した独創性と柔軟性を兼ね備え
社会に貢献する高度専門職業人を育てる

教育・研究・組織運営の各面で鍛え抜かれた
力量を有する大学教員を養成する

修士課程の教育目標

グローバルな視野と専門的実務能力を併せ持ち、
社会に貢献する高度専門職業人を育成する

専門職学位課程の教育目標

高度の専門性が求められる職業を担うための
深い学識及び卓越した能力を有する
高度専門職業人を育成する

筑波大学の大学院教育が育成する人材像

- 鋭敏な国際感覚を基盤としグローバルにリーダーシップを発揮し得る人材
- 豊かな教養と倫理観を併せ持ち人類社会の未来に資する知を創成できる人材
- 論理的な思考力と先進的な創造力を兼ね備え
  成熟した知情意に基づいて専門的職能を切り拓く人材

図1　知の拠点TSUKUBAで新たな知と個性輝く人材を共創する

方針1

明確な教育目標と質の高い学位プログラム

3学術院6研究群による学位プログラム制

本学大学院は、2020年度に8研究科85専攻から3学術院6研究群へと改組再編し、学位プログラム制へ全面移行しました。新組織では従来の専攻の壁が取り払われ、幅広い分野の教員が協働して学位プログラムを担当します。つまり、6つの研究群がいわゆる専攻相当となり、その中では全教員が専任教員となります。これにより、研究群内では、ひとりの教員が複数の学位プログラムを担当することができ、分野を超えた担当・協働指導体制等が可能になりました(図2)。また、学生が所属する学術院・研究群を教員の所属組織である系とは明確に分離した組織としました。この学術院・研究群の下に開設される学位プログラムは、学位のレベル(修士・博士)とその系統(研究・専門・専門職)及び分野において、社会的要請を踏まえた人材養成目的を設定し、どのような知識と能力を修得すべきかを明示し、それを修得するための教育課程を体系的に設計しています。

このほかに、全学的な協力の下で運営する学位プログラムの実施・運営を行うために「グローバル教育院」を置いています。

3つのポリシーの明確化とコンピテンスの設定

本学が授与するすべての学位について、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーの3つのポリシーを明確化するとともに、学位授与時に学生が備えているべき知識・能力(以下「コンピテンス」という。)をディプロマ・ポリシーにおいて明示しました。これに基づいて各教育組織・学位プログラムは教育課程を編成・実施します。学位に相応しいコンピテンスを明示し、その達成度を評価することで学位の質保証が担保され、また本学の大学院教育による学修成果を社会に可視化することができます。

コンピテンスは「汎用コンピテンス」と「専門コンピテンス」に区分し、汎用コンピテンスは社会での活躍を支える汎用的知識・能力として修士課程・博士課程ごとに全学共通に定めています(表1)。専門コンピテンスは、専攻分野における高度な知識・能力として学術院・研究群・学位プログラムの各階層の人材養成目的に対応し、「研究力」「専門知識」「倫理観」の3項目を基軸として体系的に構成されています。全学・学術院・研究群の各階層における共通の基盤の上に各学位プログラムの特色や独自性に基づくコンピテンスを設定することで、学生は、深い専門性とともに、関連する分野の基礎的素養や広い視野、俯瞰力を涵養できる仕組みとしています。

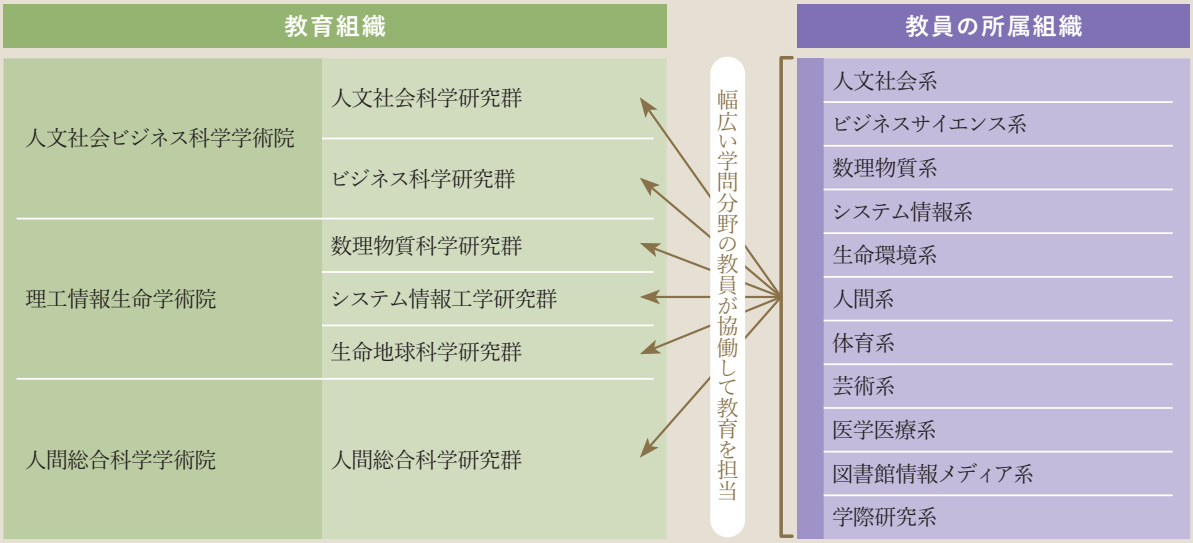


図2　幅広い分野の教員による担当・協働指導体制

体系化された教育課程編成

本学は、特定の分野における専門教育や研究を通じて身につける高度な知識・能力である「専門智」と、特定の分野に限定されず、様々な状況や分野で柔軟に応用できる普遍的で横断的な知識・能力である「汎用智」の両方をバランスよく培い、それらを統合した「総合智」を備えた人材を育てるための教育体系を「総合智教育」と定めています。この体系による教育により、予測困難な今後の社会における複雑な課題に対し、柔軟な解決案を示してそれを具現的に実践できる、深い専門性と広い視野を併せ持つ人材を育成します。各教育組織は、この総合智教育の理念に基づき、ディプロマ・ポリシーにおいて明示した汎用コンピテンスと専門コンピテンスを学生がバランスよく修得できるように教育課程を体系的に編成・実施します。このため、各学位プログラムにおける専攻分野に係る科目だけでなく、全学で編成する大学院共通科目や学術院単位で編成する学術院共通専門基盤科目、研究群の共通科目を開設しています。大学院共通科目は主に汎用コンピテンスに対応する科目であり、倫理観、情報伝達力・コミュニケーション力、国際性、キャリアマネジメント力、幅広い知的基盤、豊かな身心基盤などをバランスよく涵養するための6科目群を設定しています。学術院共通専門基盤科目は学術院の専門コンピテンスに対応した科目であり、自らの専門分野に隣接する様々な専門分野の基盤的知識を修得することができます。本学の学生は大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目及び各々の専攻分野に即した専門的科目を履修していくことによって、俯瞰的な視野で論理的に考える力と一つの分野にとどまらない広がりのある専門性を身につけることができます。

社会の要請に応える研究力と現場力の養成

複雑化した課題を多く抱える今日の社会においては、深い専門知識と研究能力に裏打ちされた高度で実践的な課題発見・解決力を持った人材を育成することが強く求められています。こうした情勢を踏まえ、本学は修士又は博士にふさわしい研究能力に加えて、特に、社会における現実の具体的課題に即した「現場力」の養成を重視した学位プログラムが授与する学位を「専門学位」として位置づけました（図3）。これは、社会の具体的課題に積極的かつ的確に対応していくために、本学が独自に設ける学位系統です。授与する学位（修士・博士）の法令上の位置づけに違いはありません。
「専門学位」を授与する学位プログラムは、現在経営学学位プログラム、サービス工学学位プログラム、山岳科学学位プログラム等の16学位プログラムです。

	汎用コンピテンス
修士課程	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識
博士課程	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲

表1　汎用コンピテンス

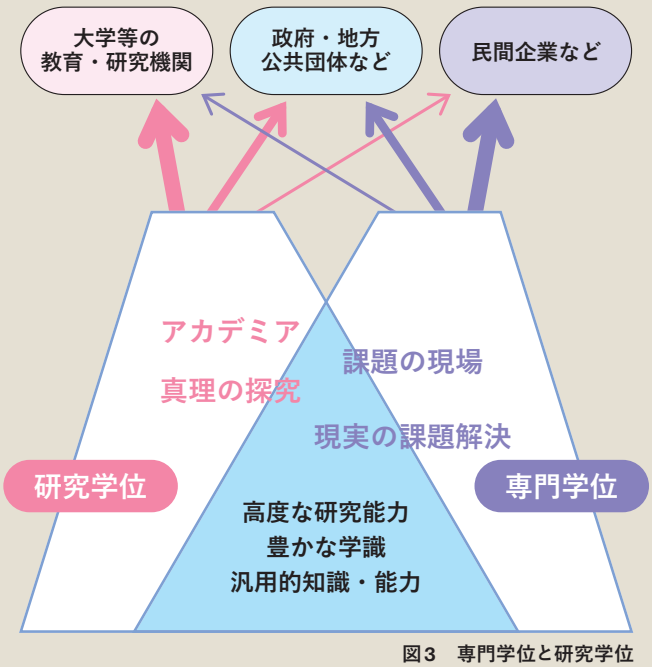


図3　専門学位と研究学位

方針2

グローバルリーダーとなる人材の育成

つくばからTSUKUBAへ

本学には開学当初から多くの留学生と外国人教員が集まり、国籍や言語の垣根を越えて学びあう学生と教員が「筑波」大学という組織や「つくば」市という地域にとらわれない知の拠点TSUKUBAを共創してきました。また、本学は体育・芸術・医学を擁する特徴ある総合大学として、スポーツ、芸術、心身の健康も含めて全人的に留学生と外国人教員を支援することにより、誰もが安心して協働できるコミュニティーづくりを推し進めています。

つくば市と筑波研究学園都市には多くの外国人が滞在しています。その中核機関として、本学は筑波研究学園都市の国際化を推進するためのハブ機能も果たしています(表2)。

国際性の日常化

本学が21世紀において果たすべき役割のひとつが、グローバルリーダーとなる人材の育成です。これを実現するために、本学は12の国・地域に14か所の海外拠点を置き、また、300件を超える交流協定を結び(図4)、優秀な留学生の受入れ、在学生の海外派遣、教員の学術交流にめざましい成果を上げています。

本学は、国際化拠点整備事業(グローバル30:平成21〜25年度)やグローバル人材育成推進事業(GGJ:平成24〜28年度)等の取組を通して、キャンパスにおける「国際性の日常化」を推進しています。そして、スーパーグローバル大学創成支援事業(SGU:平成26〜令和5年度)や大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業(令和6〜11年度)等を通して、国境や機関の壁を越え、世界中の資源を積極的に活用した教育研究の実施をめざしCampus-in-Campusなどを推進しています。

また、キャンパスにおける「国際性の日常化」と、「世界を学びの場」にする学生の海外派遣を推進するためのワンストップサービスを提供する学内組織として、スチューデントサポートセンター(国際交流支援室)を設置しています。

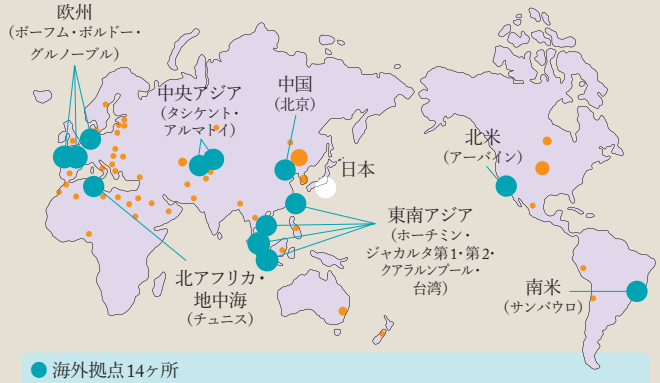
グローバルリーダーの育成

国際的なリーダーにふさわしい人材を育成するため、本学は、学びの場をキャンパスという空間に限定せず「世界を学びの場」にすることをモットーに、本学独自の支援としての奨学金や、授業、課外活動、そのほか全学的な様々な取り組みを用意しています(表3)。

つくば市には、145ヶ国から来た
13,623人(令和6年10月)の外国人が在住

大学には約3,800室の宿舎があり、約2,500名の留学生のうち
約900名が暮らす。

表2　つくば市と筑波研究学園都市の外国人滞在状況



● 海外拠点14ヶ所
● 68の国・地域の大学等とのCampus-in-Campus協定13、大学間交流協定178、部局間交流協定191

図4　海外拠点と国際交流協定国・地域(R7年10月現在)

経済的支援(渡航費支援・滞在費支援・参加費支援等)

つくばスカラシップ:留学生支援

海外留学支援事業(はばたけ!筑大生):国際交流協定校交換留学支援、キャンパスインキャンパス(CiC)等支援、海外武者修行支援、海外学会等参加支援、語学研修・海外研修参加支援

授業科目・教育プログラム等

大学院共通科目:世界に挑む産業界・官界トップリーダーによるJAPICアドバンスト・ディスカッションコース、国際研究プロジェクト、国際研究インターンシップなど

ヒューマンバイオロジー学位プログラム
エンパワーメント情報学プログラム

ヒューマニクス学位プログラム
(卓越大学院プログラム採択)

日独韓共同修士プログラム(TEACH)

日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)

AIMS(Asian International Mobility for Students)プログラム
筑波トランスパシフィックプログラム

経済・公共政策プログラム(PEPP)
(世界銀行等の協力のもと、開発途上国の若手リーダーを対象とした英語による修士プログラム)

筑波大学グローバル⁺リーダーシップ教育プログラム
(Tsukuba Global⁺(ツクバ・グローバル・プラス)/TG⁺)
地球規模課題(グローバル)の知識、新興国(ローカル)の視点、高い英語力と現地語力を身につける、全学に開かれたリーダーシップ教育プログラム

日本・ユーラシア研究プログラム(SPJES)
(日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクトの支援を受け設けられた、中央アジア地域のSDGs(持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals)の達成と当該地域社会の課題解決に貢献できる人材を育成することを目的とした英語による修士プログラム)

Japan-Expert(学士)プログラム
地球規模課題学位プログラム(学士)
総合理工学位プログラム(学士)
(スーパーグローバル大学創成支援事業による新しい教育プログラム)

場の提供

日本人学生と留学生の交流の場:
Student Commons, Global Chat Program(G-Chat/Tsuku-chat/Language Exchange(GOTCHAT)), GASSHUKU(合宿)とDOJO(道場)など

市民と留学生の交流の場
City Chat Café など

表3　グローバルリーダー育成のための取り組みなど

方針3

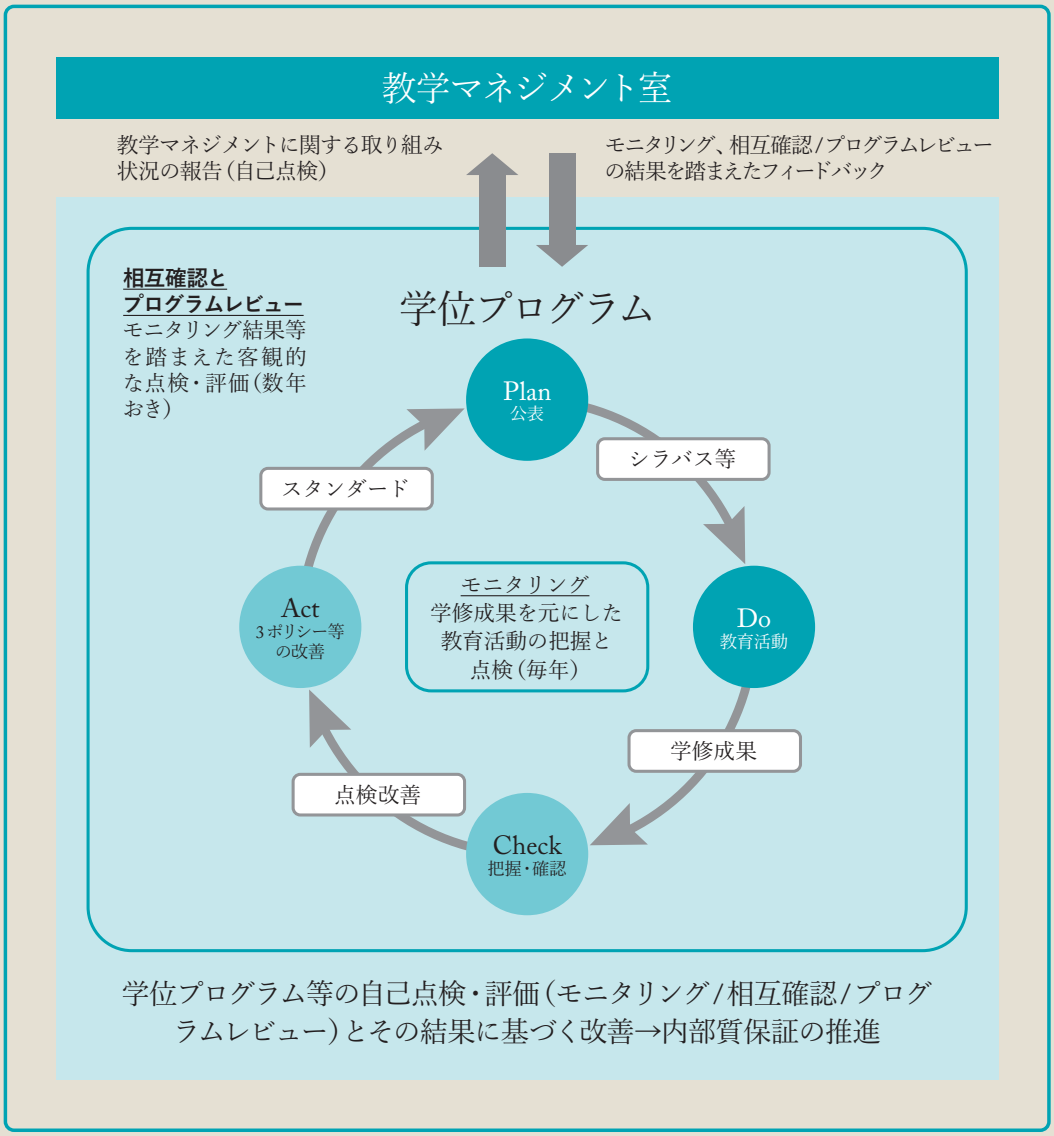
全学的な教学マネジメントの実現

全学的な教学マネジメントによるPDCAサイクルの推進

学位プログラムの教育の質を持続的に保証・向上させていくため、教学マネジメント室を設置し、全学的な教学マネジメントを実現します。

教学マネジメント室では、学位プログラムのモニタリング（毎年の自己点検）とプログラムレビュー（数年おきに実施する総合的な点検・評価）の取組を中核としつつ、学位プログラムの新設又は改組等に伴う質保証の審査、体系的なファカルティ・ディベロップメントの推進及び高等教育に関する調査研究などを行い、内部質保証の確立と高度化を図ります。

図5　モニタリングとプログラムレビューによる内部質保証の確立（イメージ図）



目 次

建学の理念 1
筑波大学教育倫理綱領／筑波大学が授与する学位の意味について 2
筑波スタンダードと学位プログラム 3
大学院の教育目標／育成する人材像 4
教育目標の達成に向けた方針 6

人文社会ビジネス科学学術院
Graduate School of Business Sciences, Humanities and Social Sciences 1-1

- 人文社会科学研究群
  Degree Programs in Humanities and Social Sciences 1-5
- ビジネス科学研究群
  Degree Programs in Business Sciences 1-47
- 法曹専攻
  Law School Program 1-72
- 国際経営プロフェッショナル専攻
  MBA Program in International Business 1-77

理工情報生命学術院
Graduate School of Science and Technology 2-1

- 数理物質科学研究群
  Degree Programs in Pure and Applied Sciences 2-6
- システム情報工学研究群
  Degree Programs in Systems and Information Engineering 2-63
- 生命地球科学研究群
  Degree Programs in Life and Earth Sciences 2-158
- 国際連携持続環境科学専攻
  Joint Master's Degree Program in Sustainability and Environmental Sciences 2-250

人間総合科学学術院
Graduate School of Comprehensive Human Sciences 3-1

- 人間総合科学研究群
  Degree Programs in Comprehensive Human Sciences 3-4
- スポーツ国際開発学共同専攻
  Joint Master's Program in International Development and Peace through Sport 3-237
- 大学体育スポーツ高度化共同専攻
  Joint Doctoral Program in Advanced Physical Education and Sports for Higher Education 3-244
- 国際連携食料健康科学専攻
  International Joint Degree Master's Program in Agro-Biomedical Science in Food and Health 3-250

グローバル教育院
School of Integrative and Global Majors 4-1

人文社会ビジネス科学学術院
Graduate School of Business Sciences, Humanities and Social Sciences

人文社会科学研究群
Degree Programs in Humanities and Social Sciences

人文学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Humanities	人文学学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Humanities
哲学・思想サブプログラム Subprogram in Philosophy	哲学・思想サブプログラム Subprogram in Philosophy
歴史・人類学サブプログラム Subprogram in History and Anthropology	歴史・人類学サブプログラム Subprogram in History and Anthropology
文学サブプログラム Subprogram in Literature	文学サブプログラム Subprogram in Literature
言語学サブプログラム Subprogram in Linguistics	言語学サブプログラム Subprogram in Linguistics
現代文化学サブプログラム Subprogram in Modern Culture Studies	現代文化学サブプログラム Subprogram in Modern Culture Studies
英語教育学サブプログラム Subprogram in English Language Education	英語教育学サブプログラム Subprogram in English Language Education
国際公共政策学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in International Public Policy	国際公共政策学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in International Public Policy
国際日本研究学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in International and Advanced Japanese Studies	国際日本研究学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in International and Advanced Japanese Studies

ビジネス科学研究群
Degree Programs in Business Sciences

法学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Law	法学学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Law
経営学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Business Administration	経営学学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Business Administration

法曹専攻（専門職学位課程）
Law School Program

国際経営プロフェッショナル専攻（専門職学位課程）
MBA Program in International Business

人文社会ビジネス科学学術院の人材養成目的

ビジネス科学、人文学、社会科学に関する多面的かつ高度な教育研究を通じて、人間の価値や人と社会のあり方を時間軸、空間軸を交差させて総合的に探究することによって、新たな知を創造し具現化できる研究者、大学教員、高度専門職業人を養成する。

人文社会ビジネス科学学術院コンピテンス

修士	1.研究力	人文社会ビジネス科学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力
	2.専門知識	人文社会ビジネス科学分野における高度な専門知識と運用能力
	3.倫理観	人文社会ビジネス科学分野の基礎的研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識
博士	1.研究力	人文社会ビジネス科学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力
	2.専門知識	人文社会ビジネス科学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力
	3.倫理観	人文社会ビジネス科学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識
博士	・企業・組織の経営や法務に関する深い専門知識を持ち、多角的に思考する能力 ・社会や実務の現場から自ら問題を発見し、明確化した上で解決する能力 ・学術研究に基づく理論と実務に関する知識や経験を融合して、自らの主張を組み立て、コミュニケーションする能力 ・経営や法務に関する新たな知を創造するとともに、社会や実務でそれを実践する能力	

人文社会科学研究群
Degree Programs in Humanities and Social Sciences

人材養成目的

人や社会の営み、人と社会の関係の考察・分析に係わる人文社会科学の基礎研究において優れた能力を有し、学問の進展や社会的要請の変化に応じて人類の知の継承に貢献し得る人材、またグローバル化の進展に伴う地球規模の課題や社会的課題に果敢に挑戦し、人間の存在や人と社会との関係の望ましいあり方を構想し得る独創性と柔軟性を併せ持つ研究者・教育者、及び高い専門性と実務能力を有する職業人を養成する。

	研究群コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
修士	1. 研究力：人文社会科学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①人文社会科学分野における研究課題を設定する能力を身につけたか ②人文社会科学分野における研究計画を遂行する能力を身につけたか	学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、研究法入門、専門科目（演習科目）、修士論文作成、研究会発表など
	2. 専門知識：人文社会科学分野における高度な専門知識と運用能力	①人文社会科学分野における高度な専門知識を身につけたか ②人文社会科学分野における専門知識の運用能力を身につけたか	学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、専門基礎科目、専門科目（講義科目、演習科目）、修士論文作成、研究会発表など
	3. 倫理観：人文社会科学分野の基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理観と倫理的知識	①人文社会科学分野において必要な倫理観を身につけたか ②人文社会科学分野において必要な倫理的知識を身につけたか	大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、学術院共通専門基盤科目、研究法入門、専門科目（演習科目）、研究指導など
博士	1. 研究力：人文社会科学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①人文社会科学分野における先端的な研究課題を設定する能力を身につけたか ②人文社会科学分野において自立して研究計画を遂行する能力を身につけたか	大学院共通科目、専門科目（演習科目）、研究指導、博士論文作成、学会発表など
	2. 専門知識：人文社会科学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①人文社会科学分野における先端的かつ高度な専門知識を身につけたか ②人文社会科学分野における専門知識の総合的な運用能力を身につけたか	大学院共通科目、専門科目（演習科目）、研究指導、博士論文作成、学会発表など
	3. 倫理観：人文社会科学分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①人文社会科学分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識を身につけたか ②専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識を身につけたか	大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、専門科目（演習科目）、研究指導など

ビジネス科学研究群
Degree Programs in Business Sciences

人材養成目的

社会人を主たる対象にして、社会やビジネスで求められる高度専門職業人として必要な深い学識と卓越した能力を持ち、現代社会や組織が直面する諸課題の背景を探求し、かつ実効性の高い解決策を策定・実行することによって、社会の持続可能な発展に寄与しうる高度専門職業人を養成する。

	研究群コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
修士	1. 研究力：ビジネス科学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	職業生活において得た知識や経験を体系化して、現代社会におけるさまざまな課題を新たな視点から再構築できる研究力を有するか。	経営基礎、会計基礎、コーポレートガバナンス、コーポレート・ファイナンス、企業法学特別研究Ⅰ～Ⅵ、法文献学、論文発表会、学会発表
	2. 専門知識：ビジネス科学分野における高度な専門知識と運用能力	職業生活において得た知識や経験を体系化して、現代社会におけるさまざまな課題を新たな視点から再構築できる専門知識と運用能力を有するか。	民事法研究Ⅰ～Ⅱ、商事法研究Ⅰ～Ⅱ、租税法研究Ⅰ～Ⅱ、労働判例研究Ⅰ～Ⅱ、論文発表会、学会発表
	3. 倫理観：ビジネス科学分野の基礎的研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	ビジネス科学分野の研究者または高度専門職業人としてふさわしい倫理的知識を修得し、倫理観として体得しているか。	コーポレートガバナンス、コーポレート・ファイナンス、企業法学特別研究Ⅰ～Ⅵ、法文献学、論文発表会、学会発表
博士	1. 研究力：ビジネス科学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	企業や社会が直面する新たな類型の問題の認識、分析、解決策の策定等を自立して創造的に行い得る研究力を有するか。	マーケティング・サイエンス特論、経営戦略総論、財務会計特論、知能情報システム、企業法特別研究Ⅰ～Ⅸ、論文発表会、学会発表
	2. 専門知識：ビジネス科学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	企業や社会が直面する課題に対して、先端的かつ高度な専門知識を用いて分析および解決策を策定する能力を有するか。	論文発表会、学会発表
	3. 倫理観：ビジネス科学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	ビジネス科学分野の研究者または高度専門職業人としてふさわしい高度な倫理的知識を修得し、倫理観として体得しているか。	ビジネスマネジメント特別演習Ⅰ‐Ⅰ、企業法特別研究Ⅰ～Ⅸ、論文発表会、学会発表

人文学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Humanities

■ 修士（文学）
■ Master of Arts in Humanities

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人文学の研究・教育を取り巻く環境の変化及びグローバル化に伴う社会の変化に対応するため、哲学、倫理学、宗教学、歴史学、人類学、文学、言語学、文化学、英語教育学などの人文学諸分野における優れた専門的知識を身に付けると共に、地球規模の新たな問題の発見と解決をめざし、専門の異なる人々と共同して問題解決に貢献できる研究能力及び教育能力を兼ね備えた研究者、大学教員となる博士後期課程への進学を目指す者を養成する。

養成する人材像	人文学諸分野に関する専門的知識のみならず関連する分野に関する知識も身に付け、学際的なアプローチにより研究課題に取り組む、高い研究能力を有するとともに、現代の諸問題を解決するための広い視野を有し、そのような研究成果を社会に還元することのできる人材。
修了後の進路	博士後期課程への進学。それ以外に、中学校・高等学校教員、官公庁・自治体職員、博物館学芸員、学術出版業、教育関連会社、NGO・NPO など。

人文学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（文学）
Master's Program in Humanities / Master of Arts in Humanities

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（文学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	大学院共通科目、修士論文合同演習、研究法入門、研究指導科目、講義科目、修士論文作成、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	大学院共通科目、研究指導科目、演習科目、他研究室と共同の演習科目、達成度自己点検、インターンシップ科目、修士論文作成、中間発表等
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	大学院共通科目、修士論文合同演習、研究指導科目、演習科目、研究発表に関する科目、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	大学院共通科目、インターンシップ科目、研究指導科目、演習科目、他研究室と共同の演習科目、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問等
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、人 文社会科学のためのグラントライティング入門、語学力養成科目、外国語の講義科目、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、外国語文献を利用した修士論文作成、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点等
	6. 研究力：人文学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①人文学分野における研究課題を設定する能力を身につけたか ②人文学分野における研究計画を遂行する能力を身につけたか	学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、研究法入門、演習科目、修士論文作成、研究会発表、学会発表、ポスター発表等

人文学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（文学）
Master's Program in Humanities / Master of Arts in Humanities

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：人文学分野における高度な専門知識と運用能力	①人文学分野における高度な専門知識を身につけたか ②人文学分野における専門知識の運用能力を身につけたか	学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、専門基礎科目、講義科目、演習科目、修士論文作成（口述試験を含む）、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	8. 倫理観：人文学分野の基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理観と倫理的知識	①人文学分野において必要な倫理観を身につけたか ②人文学分野において必要な倫理的知識を身につけたか	大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、学術院共通専門基盤科目、研究法入門、演習科目、研究指導、修士論文（口述試験を含む）、中間発表、INFOSS 情報倫理、APRIN e-learning 等
	9. 思考力：専門分野に関する知識をもとに物事を論理的に考え、結論を導き出す能力	専門分野に関する知識をもとに物事を論理的に考え、結論を導きだす能力を身につけたか	演習科目、修士論文作成、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	10. 総合力：研究成果を関連分野の中に位置づけ、応用、実践する能力	研究成果を関連分野の中に位置づけ、応用、実践する能力を身につけたか	大学院共通科目、学術院専門基盤科目、演習科目、他学位プログラム科目、研究指導等
学修成果の評価に関する方針	− 学修成果の評価は、学位授与方針に基づくコンピテンスの修得状況を「達成度評価表（ルーブリック）」により、各学期末、ならびに修士論文提出時点等に確認・評価することで行う。 − 1 年次での修士論文指導に関わるゼミにおける指導を経て、2 年次秋学期に修士論文構想の発表を行い、ルーブリックに基づき第一段階達成度審査を行い、主査・副査候補者や関連教員による審査を行う。 − 修士論文提出後、主査および副査 2 名以上で構成される学位論文審査委員会において公開審査ならびに、ルーブリックに基づき第 2 段階達成度審査を行う。		
学位論文に関する評価の基準	1. 研究テーマが適切に設定され、意義・位置づけが明確であること。 2. 関連する先行研究を網羅し、批判的検討を加えていること。 3. 研究方法が明確に提示されていること。 4. 論の構成が適切で、実証的、論理的であること。 5. 新たな学術的な知見が含まれること。 6. 学位論文として適切な形式を具え、研究倫理が順守されていること。 修士論文の審査は、主査 1 名、副査 2 名以上で構成される審査委員会を設けて公開で行う。		

人文学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（文学）
Master's Program in Humanities / Master of Arts in Humanities

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

哲学、倫理学、宗教学、歴史学、人類学、文学、言語学、文化学、英語教育学の 9 領域を横断する人文学の研究力・専門知識・倫理観とともに、人文社会科学の幅広い基礎的素養、人文社会ビジネスにわたる広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目から 2 単位を選択必修とする。このほか、研究群共通科目のうち「修士論文合同演習」、「研究法入門または Academic Writing and Research Ethics」の 2 単位を必修とする。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制（必要に応じて他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や副指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 – 大学院共通科目、修士論文合同演習、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics などにより、高度な知識を社会に役立てる能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、人文社会科学のためのインターンシップ（1）（2）などにより、広い視野に立ち課題に的確に対応する能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、修士論文合同演習などにより、専門知識を的確に分かり易く伝える能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、人文社会科学のためのインターンシップ（1）（2）などにより、チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、人文社会科学のためのグラントライティング入門などにより、国際社会に貢献する意識を身に付ける。 – 学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics、専門科目（演習科目）、修士論文作成、研究会発表などにより、人文社会科学分野及び人文学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力を身に付ける。 – 学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、専門基礎科目、専門科目（講義科目、演習科目）、修士論文作成、研究会発表などにより、人文社会科学分野及び人文学分野における高度な専門知識と運用能力を身に付ける。 – 大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、学術院共通専門基盤科目、研究法入門または AcademicWriting and Research Ethics、専門科目（演習科目）、研究指導などにより、人文社会科学分野及び人文学分野の基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理観と倫理的知識を身に付ける。 – 専門科目（演習科目）、修士論文作成、研究会発表などにより、専門分野に関する知識をもとに物事を論理的に考え、結論を導き出す能力を身に付ける。 – 専門科目（演習科目）、他学位プログラム科目、研究指導などにより、研究成果を関連分野の中に位置づけ、応用、実践する能力を身に付ける。

学修の方法 **特色的な教育**	− 入学時、加えて年度当初に、学生の個々の研究テーマに基づき「履修計画」および指導体制を設定し、授業履修、研究指導を行う。 − 1 年次に「研究法入門」の履修を通じて、研究倫理や基本的な研究手法を学び、汎用コンピテンス「知の活用力」、専門コンピテンス「研究力」、「倫理観」を身に付ける。また、入学時の早い段階で、その他の研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目を含む基礎科目の履修を通じて、汎用コンピテンス「知の活用力」、「マネジメント能力」、「コミュニケーション能力」、「チームワーク力」、「国際性」を身に付ける。 − 主に 1 年次に専門基礎科目の履修を通じて、それぞれの専門の基礎的な知識を学び、専門コンピテンス「専門知識」などを身に付ける。 − 主に 2 年次に専門科目（講義科目、演習科目）の履修を通じて、研究に必要な高度な専門知識とその運用を学び、汎用コンピテンス「知の活用力」、専門コンピテンス「研究力」、「専門知識」、「思考力」などを身に付ける。また、専門科目（演習科目）、研究指導を中心に、汎用コンピテンス「マネジメント能力」、「コミュニケーション能力」、「チームワーク力」、専門コンピテンス「倫理観」、「総合力」を身に付ける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	人文学諸分野への強い関心、研究課題に真摯に取り組む情熱、研究に必要な基礎的知識、語学力、論理的思考力、論述力を持ち、研究成果を社会に還元する意欲を持つ人材を求める。
入学者選抜方針	入学者の選抜にあたっては、一般入試、推薦入試などの入学者選抜方式によって多様な入学志願者に対応するとともに、募集人員を分割し、同一年度に複数回の入学試験を実施する。 − 一般入試では、専門科目の筆記試験、及び口述試験を実施し、総合的に判定する。専門科目は、出願時に申し出た哲学・思想、歴史・人類学、文学、言語学、現代文化学、英語教育学など人文学に関係する分野から 1 つを選択し、外国語（1 カ国語）で書かれた専門文献を使った設問を含む出題を行い、人文学諸分野の研究に必要な基礎的知識、論理的思考力、研究しようとしている分野の専門的知識、研究に必要な語学力を判定する。口述試験は、卒業論文（ないしはそれに準ずる論文）や研究計画書等の提出書類を参考とし、志願者の基礎的研究能力、研究に対する関心・情熱・適性、研究を通して社会に貢献しようとする意欲、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。提出書類のうち、卒業論文（ないしはそれに準ずる論文）により、専門分野に関する論述力を判定する。 − 推薦入試では、小論文の筆記試験、及び口述試験を実施し、総合的に判定する。推薦入試は、学士課程等において志願者を指導し、その諸能力や性格、資質などを知悉する教員から、人文学諸分野の研究に必要な基礎的知識や論理的思考力をすでに身に付けているとして推薦された者を対象としている。このため、専門科目の筆記試験は行わず、修士論文の執筆を進めるのに十分な論理的思考力、論述力、語学力があるかどうかを判定するために、外国語（1 カ国語）で書かれた専門文献を読ませ、それに基づいて論述させる小論文の筆記試験を行う。口述試験は、推薦書および研究計画書を参考とし、専門分野の基礎的知識と研究遂行能力、研究しようとしている分野の専門的知識を確認し、研究に対する関心・情熱・適性、研究を通して社会に貢献しようとする意欲に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 学修の達成度を把握するため、すべての院生に対し学期毎にコンピテンス達成度評価表の作成・提出を義務付けている。指導教員は、院生から提出されたコンピテンス達成度評価表をもとに個別面接を実施し、汎用コンピテンスと専門コンピテンスの達成状況を確認しながら効果的な学修の進め方について指導を行っている。 −「研究法入門」において、ライティングサポートやプレゼンテーション指導を行っている。さらに論文執筆のために必要なアプリケーションの使い方、辞書の使い方、引用の仕方などの指導も行っている。 − 履修規定等に履修モデルを明示し、段階的かつ効果的な学修が達成できるよう工夫している。 − 論文提出に到るスケジュールを明示し、中間発表（ヒアリング）、最終発表会（公開審査）では、下級生も参加し、自身の研究や論文執筆の参考としている。 − 院生は毎年度初めに主指導教員と面談の上、研究計画書を作成し提出している。その後も、主指導教員や関連する専門分野の教員と随時面談し、学位論文の作成に活かしている。 − 年度末に開催される修士論文合同演習に一年生の院生全員を参加させ、その年度の優れた修士論文についての研究発表を聴講させ、自身の修士論文執筆に活かすよう指導している。 − 優れた修士論文を執筆した院生を修士論文合同演習で発表させ、特に優れた発表を表彰している。 − 一部のサブプログラム（SP）では、学会参加（研究発表）費用支援、他大学図書館雑誌論文コピー・図書貸借費用支援、外国語での発表（論文、口頭発表）原稿の語学支援（校閲）等を行っている。 − 一部の SP では、学内雑誌に卒業論文を投稿するための修正指導を行っている。 − 学振など外部資金による研究支援の申請を推奨し、主指導教員が申請書作成に当たってアドバイスを与えている − 各教員が実施する一部の授業では、国際会議に投稿するための英語アブストラクトの書き方、学術雑誌に投稿するための論文執筆指導を行っている。 − 学生と教員による「大学院懇談会」を開催し、学生からの様々な要望を受けとめたうえで、学修環境や学生生活の支援を行っている。 − researchmap への研究業績の登録を推奨している。
学生同士の交流機会	− 修士論文執筆に関わる科目（ゼミ）において、院生同士の研究上の討論を行い、各々の研究を深化させている。 − 院生主体の研究会や読書会が開催され、院生同士の研究交流を深めている。 − 一部の SP では、院生主体で運営、出版する雑誌の編集・刊行・配布を通じて、学生たちが自ら話し合いを実践している。 − 一部の SP では、学類生と院生合同の実習に際して、学類生指導の補助的な役割を通じて交流を深めている。 − 一部の SP では、院生主体のレクリエーションを開催し、院生同士の交流を深めている。 − チューター制度を中心として、留学生と日本人院生との交流を深め、日常的にも学生同士が協力し合いながら、安心して研究に取り組める環境を形成している。

教員との交流機会	− 新年度オリエンテーションを実施し、新入生を含めた院生と教員との懇談を行っている。 − 年間を通しての指導教員、副指導教員をはじめとする教員と院生との面談を随時行い、指導の充実を図っている。 − 学生と教員による「大学院懇談会」を開催し、学生からの様々な要望を受けとめたうえで、学修環境や学生生活の支援を行っている。 − 一部の SP では、学生選出委員と教員選出委員によるレクレーション実行委員会を組織し、あらたな枠組みのもとで、学生と教員の交流を図るより有効な機会の創出を検討している。 − 一部の SP では、学生の修了後の進路選択に役立てるため、研究職や専門職に就職した修了生や博士後期課程進学者などを講師とした公開講座を年に複数回開催し、学生、修了生及び教員による交流の場を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

− 大学院担当教員の資格認定にあたっては、定められた基準と手続きにしたがって研究業績及び教育業績を精査し、十分な資質と能力を備えた教員を適切な担当業務（研究指導、研究指導補助、授業担当）に配置している。
− 授業科目のシラバス作成にあたっては、すべての科目のシラバスが適切に作成されているかをチェックシートを用いて確認し、教育の質の保証と改善に役立てている。
− 学修の達成度を把握するため、すべての所属学生に対し学期毎にコンピテンス達成度評価表の作成・提出を義務付け、個別指導を行っている。
− 複数教員が参加する論文指導ゼミや博士論文構想発表会を開催し、主指導・副指導教員以外の教員からの意見も得ることが出来るようにしている。
− 授業評価アンケートを実施し、その回答から授業計画、授業運営に関して改善を行っている。
− 各 SP の運営委員会、カリキュラム委員会等において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
− 教育成果の可視化としては、口頭発表・ポスター発表・論文発表などの計画的な研究遂行を指導している。
− TA や RA 制度を活用し、教育・研究補助業務を通じて院生の教育・研究力向上とキャリア意識の醸成を図っている。

国際公共政策学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in International Public Policy

■ 修士（国際公共政策）
■ Master of Arts in International Public Policy

人材養成目的 / Program Educational Objectives

国際関係論や地域研究、社会学、政治学、経済学、人類学、公共政策学など国際公共政 策に関わる各分野の高度の専門性と、それらを横断する学際性とを備えた教育と研究指導を通じて、専門知識を基盤とし、グローバル化、複雑化する現代の国際問題や個別地域の諸問題、また社会・文化問題へと柔軟に適用できる研究能力と、それらを公共政策へと導く実践的問題解決能力を身に付けた大学教員、研究者等となる博士後期課程への進学を目指す者を養成する。

養成する人材像	国際公共政策に関わる各分野に関する専門知識を生かし、理論・実証に関わる論理的思考力・分析力に基づいた高度な研究能力を踏まえ、国内外の政治経済や社会政策上の諸問題、また個別地域や国際関係に関わる諸問題に関し、公共政策へと結びつける観点から問題解決能力・実践的能力を有する人材。有職社会人向けの公共経営履修モデルについては、以上の能力に加え、経営学の専門知識および論理的に深く思考する能力やその内容を論理的に構成するための能力も併せ持つ人材。
修了後の進路	博士後期課程への進学。それ以外に、官公庁・自治体職員、国際機関職員、金融機関やメディア等の民間企業、NGO・NPO など、研究力を生かした職業人。有職社会人向けの公共経営履修モデルについては、有職者の一部は、博士後期課程への進学や転職をすることが考えられる。

国際公共政策学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（国際公共政策）
Master's Program in International Public Policy / Master of Arts in International Public Policy

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（国際公共政策）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	大学院共通科目、修士論文合同演習、研究法入門、国際公共政策論、講義科目、修士論文作成、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する力はあるか	大学院共通科目、国際公共政策リサーチワークショップ、国際公共政策論、専門基礎科目、達成度自己点検、インターンシップ科目、修士論文作成、中間発表等
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	大学院共通科目、修士論文合同演習、国際公共政策リサーチワークショップ、演習科目、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	大学院共通科目、国際公共政策リサーチワークショップ、演習科目、インターンシップ科目、TA 経験、学会での質問、セミナーでの質問等
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、人文社会科学のためのグラントライティング入門、専門基礎科目、外国語の講義科目、外国語の演習科目、外国語文献を利用した修士論文作成、外国語による中間発表、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：国際公共政策分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①国際公共政策の各分野に関する専門性を生かして課題にアプローチし、自らの研究プロセスを管理する能力を持つか ②国際公共政策に関わる研究成果を内外に発信するとともに、それに基づいた問題解決や実践を行う能力があるか	学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、研究法入門、国際公共政策リサーチワークショップ、専門基礎科目、専門科目における演習科目、修士論文作成、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	7. 専門知識：国際公共政策分野における高度な専門知識と運用能力	①国際公共政策に関わる各分野の専門知識や理論的思考に裏付けられた分析力を持つか ②国際公共政策に関わる複数のディシプリンに通じた柔軟な思考力を持つか	学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、専門科目における講義科目、演習科目、修士論文作成（口述試験を含む）、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	8. 倫理観：国際公共政策分野の基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理観と倫理的知識	高い倫理観に基づいて自らの研究プロセスを管理する力を持つか	大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、学術院共通専門基盤科目、研究法入門、国際公共政策リサーチワークショップ、演習科目、研究指導、修士論文（口述試験を含む）、中間発表、INFOSS 情報倫理、APRIN e-learning 等
学修成果の評価に関する方針	– 各授業科目、とりわけ国際公共政策リサーチ・ワークショップなどの必修科目では、担当教員が研究の進捗をチェックしながら、厳正な教育評価を実施している。 – 各学期末のコンピテンス達成度評価のチェック、2 年次における国際公共政策リサーチワークショップ、および修士論文中間発表会、口頭試問を通じて、段階的に研究能力の修得を可能にする主指導、副指導教員による評価体制、およびそれらに対するカリキュラム委員会や事務のサポートによるチェックを行っている。		

学位論文に関する評価の基準	1. 特定の研究課題を設定し、研究の意義及び必要性が明確に記述されていること。 2. 研究課題にふさわしい研究方法及び分析が用いられていること。 3. 当該研究分野の先行研究を十分に踏まえていること。 4. 論文の全体にわたって一貫した論理展開がなされていること。 5. 学術論文として体系的・統一的に構成されたものであること。 6. 引用文献・参照文献を明示し、適切な表現・表記法に従って記述されていること。 7. 個人情報や倫理に関して適切な配慮がなされていること。 上記項目すべてを満たしていると認められる学位申請論文を、口述審査を経た上で合格とする。 【審査委員の体制】 審査委員会は、主査 1 名、副査 2 名以上の研究指導担当教員または授業担当教員で構成される。審査委員会の半数以上は本学位プログラムの教員でなければならないが、必要に応じて本学位プログラムの教員でない者（他大学の大学院や研究所等の教員等も含む）を副査として加えることもできる。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

国際関係論や地域研究、社会学、政治学、経済学、人類学、公共政策学の各分野を横断する国際公共政策研究の研究力・専門知識・倫理観とともに、人文社会科学の幅広い基礎的素養、人文社会ビジネスにわたる広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目から 1 単位、学術院共通専門基盤科目から 1 単位、研究群共通科目のうち「修士論文合同演習」、「研究法入門または Academic Writing and Research Ethics」の 2 単位を必修とし、そのほかの研究群共通科目の履修を推奨する。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制（必要に応じて他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や副指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 – 大学院共通科目、修士論文合同演習、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics などにより、高度な知識を社会に役立てる能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、人文社会科学のためのインターンシップ（1）（2）、専門基礎科目などにより、広い視野に立ち課題に的確に対応する能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、修士論文合同演習、専門科目（演習科目）などにより、専門知識を的確に分かり易く伝える能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、人文社会科学のためのインターンシップ（1）（2）、専門科目（演習科目）などにより、チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、人文社会科学のためのグラントライティング入門、専門基礎科目などにより、国際社会に貢献する意識を身に付ける。

教育課程の編成方針	– 学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics、専門基礎科目、専門科目（演習科目）、修士論文作成、研究会発表などにより、人文社会科学分野及び国際公共政策分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力を身に付ける。 – 学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、専門科目、修士論文作成、研究会発表などにより、人文社会科学分野及び国際公共政策分野における高度な専門知識と運用能力を身に付ける。 – 大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、学術院共通専門基盤科目、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics、国際公共政策リサーチワークショップ、専門科目（演習科目）、研究指導などにより、人文社会科学分野及び国際公共政策分野の基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理観と倫理的知識を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	– 入学直後の早い段階での大学院共通科目・学術院共通専門基盤科目を含む基礎科目の履修を通じて、知の活用力、マネジメント能力、コミュニケーション力といった汎用的な能力や倫理性を修得する。 – 主に 1 年次の段階における専門基礎科目の履修を通じて、国際公共政策に関わる各分野の基礎的な方法や学際的な視野を獲得し、国際性や基本的な研究力を修得する。 – 専門科目は、講義科目と演習科目とに分かれる。講義科目では主に高度な専門知識の獲得を、演習科目ではディスカッションなどを通じて、自らの取り組む課題に対する研究力を高めるとともに、問題解決能力およびコミュニケーション能力、チームワーク力を養成する。国際公共政策に関わる分野の中でも、各人が特に重視する分野の科目を中心に、1・2 年次を通じて計画的に履修する。 – 2 年次においては、修士論文執筆に向けて、「国際公共政策リサーチワークショップ」における指導教員による論文指導を通じて、倫理性の養成を含めた形で研究プロセスを支援する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	卒業論文の執筆やその他の学修の成果、または社会的経験を踏まえ、複雑化する現代社会や国際問題について、人間が共に生きることができるよう、継続的に理論的・実践的な研究を遂行する能力と専門的知識、またその研究への情熱、高度な知識をただ吸収するだけでなく、自らの関心から積極的に課題を発見し、専門実務へ応用できる柔軟性を持った人材を求める。

入学者選抜方針	入学者の選抜にあたっては、一般入試、推薦入試、英語の授業のみを履修して修了することを希望する者への特別選抜などの入学者選抜方式によって多様な入学志願者に対応するとともに、募集人員を分割し、同一年度に複数回の入学試験を実施する。 – 一般入試では、専門科目及び外国語の筆記試験、並びに口述試験を実施し、総合的に判定する。専門科目は、出願時に申し出た国際関係論・社会開発論・人類学・社会学・政治学・地域研究・経済学など国際公共政策に関係する分野から１つを選択して解答させ、修士論文執筆に十分な継続的研究能力、専門的知識、専門実務へ応用できる柔軟性を判定する。外国語の筆記試験は、研究・実務に必要不可欠な外国語運用能力を判定する。口述試験では、研究計画書等を参考とし、研究計画の実現可能性、研究への情熱・意欲、研究しようとしている分野の専門的知識、専門実務へ応用できる柔軟性などの資質、研究計画の実現性に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。 – 推薦入試では、小論文の筆記試験、及び口述試験を実施し、総合的に判定する。推薦入試は、学士課程等において志願者を指導し、その諸能力や性格、資質などを知悉する教員から、国際公共政策研究に必要な専門的知識や継続的研究能力、外国語運用能力をすでに身に付けているとして推薦された者を対象としている。このため、専門科目や外国語の筆記試験は行わず、研究しようとしている分野の専門的知識や専門実務へ応用できる柔軟性を判定するために小論文の筆記試験を行う。口述試験は、推薦書および研究計画書を参考とし、研究計画の実現可能性、研究への情熱・意欲、研究しようとしている分野の専門的知識、研究に対する資質に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。 – 開発途上国・新興国の若手行政官や有職者など、英語の授業のみを履修して修了を希望する者に対しては特別選抜を実施する。特別選抜では、書類審査と口述試験を行い、総合的に判定する。書類審査は、研究計画書や推薦書などに基づき、研究計画の実現可能性、研究への情熱・意欲などを判定する。口述試験では、書類を参考にし、継続的研究能力、研究しようとしている分野の専門的知識、研究に対する情熱・意欲、英語の運用能力、研究計画の実現可能性に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 全学レベルの取り組み（ライティングサポート）等を紹介し、積極的な活用を勧める。 – 入学時のガイダンスで学修の進め方を説明するほか、主指導教員１名、副指導教員２名以上が共同で学修支援を行う。指導教員、カリキュラム委員会、学生委員会、学生担当の事務体制が必要に応じて学生へのサポートを行う。 – 学外講師によるセミナーの広報や積極的な開催を通じて、学生の多様な研究関心に対応できる学習空間を創出している。
学生同士の交流機会	国際公共政策学位プログラムでは、年に 1-2 度、修士・博士の学生と教員が日頃の環境等について議論し、学習環境の改善を行うためのミーティングを行っている。
教員との交流機会	学生と教員の交流を図り、研究環境などに関する学生の要望を聞く機会を作るため、年最低２回の茶話会を実施している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

- カリキュラム委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。とくにシラバスチェックを行い、授業内容が教育課程目的から見て適切か、学生に必要な情報を提供しているかを確認している。
- またカリキュラム委員会を中心に、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に検討することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。

国際日本研究学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in International and Advanced Japanese Studies

■ 修士（国際日本研究）
■ Master of Arts in International and Advanced Japanese Studies

人材養成目的 / Program Educational Objectives

21 世紀の世界は、人口減少や高齢化、経済格差、環境危機、民主主義の変容といった社会的課題に加え、言語や文化の多様化、異文化理解の必要性といった文化的課題にも直面している。日本もまた、多文化共生やデジタル化による社会変動に向き合う中で、その経験は国際社会にとって重要な比較対象となっている。こうした状況は、日本を国際的文脈に位置づけ直し、比較研究を通じて世界の課題解決に資する知を創出することを求めている。

本学位プログラムは、人文科学・社会科学・日本語教育学を融合させた学際的研究を通じて、日本語・日本文化の発展と国際的発信に貢献できる研究者および高度専門人材を養成する。文学・言語・歴史・思想の人文学的知見、社会科学的分析、日本語教育学の実践的研究を統合することで、日本語・日本文化の価値を刷新し、普遍的知見を国際社会に発信する。世界各地から集う多様な学生とともに学ぶことで、国境や専門分野を越えて活躍できる「知日派」人材を輩出し、持続可能で包摂的な多文化共生社会の構築に寄与する。

養成する人材像	グローバルな視点から現代日本の特質を解明するために、幅広い専門的知識と俯瞰的な視座を涵養し、その基礎的素養と関連領域の学修を通じて、研究職をめざして後期課程に進学し得る能力を有する人材。
修了後の進路	博士後期課程への進学。それ以外に、国際関係組織、日本語教育機関、情報メディア産業、日本やアジアをマーケットとする製造業や商社、金融機関などの民間企業。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（国際日本研究）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てようとしている意欲があるか ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見し、解決策を提案できるか	大学院共通科目、修士論文合同演習、研究法入門、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、講義科目、修士論文作成、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①国際日本研究分野に関連する課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	大学院共通科目、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、達成度自己点検、インターンシップ科目、外部コンテスト等への参加、修士論文作成、中間発表等
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	大学院共通科目、修士論文合同演習、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、演習科目、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	大学院共通科目、演習科目、インターンシップ科目、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問等
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意欲があるか ②国際的な活動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、人文社会科学のためのグラントライティング入門、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、外国語の講義科目、外国語の演習科目、外国語文献を利用した修士論文作成、外国語による中間発表、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：国際日本研究分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①国際日本研究分野における研究課題を設定する能力を身につけたか ②国際日本研究分野における研究計画を遂行する能力を身につけたか	学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、研究法入門、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、演習科目、修士論文作成、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	7. 専門知識：国際日本研究分野における高度な専門知識と運用能力	①国際日本研究分野における専門知識を身につけたか ②国際日本研究分野における専門知識の運用能力を身につけたか	学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習等の専門基礎科目、日本社会と家 1 などの専門科目、演習科目、修士論文作成、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	8. 倫理観：国際日本研究分野の基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理観と倫理的知識	①国際日本研究分野において必要な倫理観を身につけたか ②国際日本研究分野において必要な倫理的知識を身につけたか	大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、学術院共通専門基盤科目、研究法入門、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、演習科目、研究指導、修士論文、中間発表、INFOSS 情報倫理、APRIN e-learning 等
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 本学位プログラムでは、「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」に掲げる知識・能力（コンピテンス）の修得状況を的確に把握し、学修成果の評価と教育指導に反映させるための仕組みを整えている。具体的には、学生による「コンピテンスシート」の記入を学期ごとに実施し、各コンピテンスに関連づけられた修得単位の進捗や、学修の到達状況を振り返る機会を設けている。提出されたシートには事務室による確認とコメントが加えられた後、担当教員と学生との間でレビューを行い、修了までに確実に達成できる見通しを立て、教員からの所見にをカリキュラム委員会で確認し、最終的にはコンピテンススコア到達状況は、各自の学位論文審査委員会が論文審査時に審査することで、学修支援と学習計画の調整に役立てている。このプロセスを通じて各コンピテンス領域ごとの修得状況を数値化し、進捗のバランスを図表（レーダーチャート等）により可視化している。これにより、学生自身が今後の履修や学修の重点を把握しやすくなり、計画的・主体的な学びの促進につながっている。		

学位論文に関する評価の基準	**（審査体制）** (1) 専門委員会委員（審査専門委員）のうち、少なくとも主査１人（研究指導）と副査２人（研究指導または授業担当）の合計３人は、当該審査研究群教員会議の構成員から指名するものとし、主査１人と副査の半数以上は、人文社会科学研究群（博士前課程）国際日本研究学位プログラム教育会議の構成員から指名するものとする。 (2) 人文社会科学研究群（博士前期課程）国際日本研究学位プログラムに所属する審査専門委員のうち少なくとも１人は、博士の学位を有する者であるものとする。 (3) 人文社会科学研究群（博士前期課程）国際日本研究学位プログラムに所属する審査専門委員のうち少なくとも１人は、審査専門委員会解散後引き続き１年以上にわたって国際日本研究学位プログラム（博士前期課程）教育会議構成員の研究指導担当教員であるものとする。 (4) 本学教員で学術院・研究群の授業担当教員でない場合にも、当該学位論文審査に不可欠であると認定される場合には、その者を審査専門委員会の副査に加えることができる。 (5) 当該学位論文審査専門委員会に不可欠であると認定される場合には、本学の他の学術院・研究群等、他大学の大学院又は他の研究所等の教員等を審査専門委員会の副査に加えることができる。 **（評価項目）** 学位論文の審査は次の項目に基づいて行っていること ①課題の設定が適切であること ②論旨が明確であり、かつ一貫性を有していること ③正確な用語を用いて適切な分析を行っていること ④先行研究の成果を十分に把握していること ⑤文献・資料を適切に使用していること ⑥体裁及び構成が適切であること ⑦相応の学術的貢献が認められること **（評価基準）** 上記の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、審査を経た上で、合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

（人文社会ビジネス学術院人文社会研究群に属する国際日本研究学位プログラムは、）人文科学・社会科学・日本語教育学を架橋する学際的研究を基盤とし、研究力・専門知識・倫理観を涵養するとともに、人文社会科学の基礎的素養、ビジネスを含む幅広い視野、社会の多様な場で活躍するための汎用的知識・能力を育成する教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学生の主たる研究関心を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目また学術院共通専門基盤科目から１単位、研究群共通科目のうち「修士論文合同演習」、「研究法入門」または「Academic Writing and Research Ethics」の２単位を必修とする。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制（必要に応じて他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や副指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。

教育課程の編成方針	− 大学院共通科目、修士論文合同演習、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、リサーチ・プログラム開発、修士論文作成、学会発表などにより、高度な知識を社会に役立てる能力（1. 知の活用力）を身に付ける。 − 大学院共通科目、人文社会科学のためのインターンシップ（1）（2）、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、達成度自己点検、外部コンテスト等への参加などにより、広い視野に立ち課題に的確に対応する能力（2. マネジメント能力）を身に付ける。 − 大学院共通科目、修士論文合同演習、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、学会発表などにより、専門知識を的確に分かり易く伝える能力（3. コミュニケーション能力）を身に付ける。 − 大学院共通科目、人文社会科学のためのインターンシップ（1）（2）、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問などにより、チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力（4. チームワーク力）を身に付ける。 − 大学院共通科目、人文社会科学のためのグラントライティング入門、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC、国際会議発表、外国人との共同研究などにより、国際社会に貢献する意識（5. 国際性）を身に付ける。 − 学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、専門科目（演習科目）、修士論文作成、研究会発表などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力（6. 研究力）を身に付ける。 − 学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、専門基礎科目、専門科目（講義科目、演習科目）、リサーチ・プログラム開発、修士論文作成、研究会発表などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野における高度な専門知識と運用能力（7. 専知識）を身に付ける。 − 大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、学術院共通専門基盤科目、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics、専門科目（演習科目）、研究指導などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野の基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理観と倫理的知識（8. 倫理観）を身に付ける。

学修の方法 **特色的な教育**	– 基礎科目：「研究法入門」または「Academic Writing and Research Ethics」では、研究倫理・情報倫理の基礎、国際日本研究分野の研究の特質を学ぶ。「大学院共通科目」や「学術院共通基盤科目」で研究に資する幅広い視野を修得する。 – 専門基礎科目：「国際日本研究のための日本語」「国際日本研究のための英語」においては、日本語（非母語）や英語を使った研究に必要な知識やスキルを身につける。他の専門基礎科目においては、学際的な人文科学、社会科学、日本語教育学の各ディシプリンの基礎を系統的に学ぶとともに、人文科学と社会科学の融合を目指す複合研究によって特定のディシプリンにとらわれない幅広い視野や問題意識を涵養する。また演習科目では、院生は各科目において専門の基礎的知識に根ざした議論や発表、分析等を学び実践する。 – 専門科目：「プロジェクト演習」においては、学生が研究プロジェクトの構想・研究過程・成果を発表し、教員や他の学生との議論を行う。「リサーチ・プログラム開発」では、学会発表、研究交流、学術的な社会貢献などの学生の自主的な研究活動を支援する。他の専門科目においては、学際的な人文科学、社会科学、日本語教育学の各ディシプリンを系統的に学ぶとともに、特定のディシプリンにとらわれない幅広い視野や問題意識を深化させる。また演習科目では、学生は各科目において専門知識に根ざした議論や発表、分析等を学び実践する。 – 8つのコンピテンスそれぞれについて修得基準を設け、1年次終了までに基準の6割以上、2年次前半終了までに基準の8割以上、2年次終了時に基準を満たすことを目指して学修する。修得基準は学生に対して別途提示する。 1. 知の活用力 2. マネジメント能力 3. コミュニケーション能力 4. チームワーク力 5. 国際性 6. 研究力 7. 専門知識 8. 倫理観

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	国際的かつ比較研究の視野のもとで日本の文化・社会や日本語教育を研究し、その成果を活かして、日本や東アジアを中心に世界が直面する課題に主体的に取り組む意欲をもつ人材を求める。前期課程では、こうした課題に対し、基礎的な研究者としての素養を培おうとする者、あるいは職業人として実践的に取り組もうとする者を、学生・社会人を問わず広く受け入れる。

入学者選抜方針	入学者の選抜にあたっては、一般入試、推薦入試、社会人特別選抜などの入学者選抜方式によって多様な入学志願者に対応するとともに、募集人員を分割し、同一年度に複数回の入学試験を実施する。また、入学機会を 4 月だけではなく、10 月にも提供する。 – 一般入試では、専門科目及び外国語の筆記試験、並びに口述試験を実施し、総合的に判定する。専門科目は、国際日本研究に関係する「政治」「経済」「文学・文化・思想」「法律・社会・メディア・情報」「言語学」「日本語教育学」の分野から 1 つ出願時に選択した科目について日本語または英語（「日本語教育学」は日本語のみ）で解答させ、博士前期課程において国際日本研究を遂行しうる能力、研究しようとしている分野の専門的知識を判定する。外国語の筆記試験は、国際日本研究に必要な外国語運用能力を判定する。口述試験は、研究計画書等を参考とし、学修成果や思考力、研究に対する情熱・意欲、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力も判定する。 – 推薦入試では、小論文の筆記試験、及び口述試験を実施し、総合的に判定する。推薦入試は、学士課程等において志願者を指導し、その諸能力や性格、資質などを知悉する教員から国際日本研究に必要な専門的知識や研究遂行能力、外国語運用能力をすでに身につけているとして推薦された者を対象としている。また、受験者は、学士の学位を取得しているか、取得予定であるため、専門科目や外国語の筆記試験は行わず、小論文により、専門分野に関する知識、理解力、論理的思考能力等、博士前期課程において国際日本研究を遂行しうる専門的能力を判定する。口述試験は、研究計画書や推薦書等を参考とし、国際日本研究に真摯に取り組む意欲、研究計画、本学位プログラムを志望する理由、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力や語学力を含むコミュニケーション能力も判定する。 – 社会人特別選抜では、専門科目の筆記試験及び口述試験を実施する。社会人特別選抜は、社会人としての経験を有している者を対象としている。専門科目は、国際日本研究に関係する「政治」「経済」「文学・文化・思想」「法律・社会・メディア・情報」「言語学」「日本語教育学」の分野から 1 つ出願時に選択した科目について日本語または英語（「日本語教育学」は日本語のみ）で解答させ、国際日本研究を遂行しうる専門的能力を判定する。口述試験は、研究計画や社会人として得られた問題意識、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	本学位プログラムでは、学生が効果的に研究を進め、その成果を学内外に発信できるよう、さまざまな学修支援を実施する。 学会発表にかかる旅費の支援制度を整備し、国内外の学会での発表機会を積極的に提供することで、学生の研究活動を広く社会と接続するための環境を整えている。 また、指導教員の助言のもと、学会発表を見据えた発表資料の作成や発表練習を通じて、自らの研究を他者にわかりやすく伝える力を涵養しており、これらは「リサーチ・プログラム開発」の科目として位置づけられている。 さらに、必修科目である「国際日本研究のための日本語／英語」においては、論文執筆や学術的プレゼンテーションの指導を行い、アカデミックスキルの基礎力育成にも力を入れている。

学修支援	こうした支援を通じて、学生は研究成果を的確かつ効果的に発信する力のみならず、異なる文化的・社会的背景をもつ人々と学術的成果を共有し、対話を通じて新たな価値を創出する能力を身につけていく。
学生同士の交流機会	本学位プログラムでは、学生同士の主体的な交流を促進することにより、学修意欲や研究の質の向上を図っている。その一環として、教員と学生が一同に会する全体集会では、修士課程に在籍する学生が、自身の学修や研究活動、留学・インターンシップ等の経験を互いに共有する機会を設けている。これにより、異なる背景や専門性をもつ学生間での相互理解や刺激が生まれ、学際的な視点の育成にもつながっている。 また、修士論文執筆に取り組む学生を支援するために、秋学期に修了生や執筆経験のある在学生による「修士論文執筆ミニ経験談」を実施しており、構想段階から提出・口述試験に至るまでの実践的なアドバイスを共有している。こうしたピア・サポートにより、執筆に対する不安の軽減とともに、学び合いの環境づくりが促進されている。このように、学生同士の知見と経験を循環させる交流の場を通じて、相互啓発の機会を提供し、より高い水準での研究遂行を支えている。
教員との交流機会	学生と教員の円滑なコミュニケーションを通じて、学修意欲の喚起や研究の質の向上を図るための環境整備に努めている。全体集会では、教員と学生が一堂に会し、日頃の研究や学修に関する意見交換を行う機会を設けており、学生の声を教育運営に反映させる仕組みづくりを進めている。 また、学生を対象としたアンケート調査を実施し、学位プログラムへの要望や意見を収集するとともに、その結果については全体集会において教員側からフィードバックを公開する機会を設けている。これにより、教育環境の改善や相互理解の促進が図られている。 さらに、教員によるキャリア支援にも力を入れており、進学・就職・研究職への道を含めた多様なキャリア情報の提供や、個別相談を通じて、学生一人ひとりの進路に応じたサポートを行っている。 このように、教員との継続的な対話の機会を通じて、学生の主体的な学びと将来設計を支える体制を整えている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

本学位プログラムでは、教育の質を継続的に保証し、改善していくための体制と取り組みを整えている。FD 委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。具体的には、教員間での定期的な FD 活動を通じて、授業内容や指導方法、カリキュラム構成等に関する情報交換を行い、プログラム全体としての教育内容の検討・見直しを図っている。また、授業評価アンケートの結果をもとに、学生から寄せられた意見を受け止め、必要に応じて授業方法の改善や内容の再構成を行うなど、教育の質の向上に向け、柔軟かつ継続的に対応している。

人文学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Humanities

■ 博士（文学）
■ Doctor of Philosophy in Humanities

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人文学の研究・教育を取り巻く環境の変化及びグローバル化に伴う社会の変化に対応するため、哲学、倫理学、宗教学、歴史学、人類学、文学、言語学、文化学、英語教育学などの人文学諸分野における国際的レベルの高度な研究・教育能力を有すると共に、地球規模の新たな問題の発見と解決をめざし、領域横断的な研究を遂行し、学際的な研究・教育に従事できる大学教員、研究者等を養成する。

養成する人材像	人文学諸分野に関する高度な専門的知識を身につけ、独創的な研究を自立して遂行する能力を有し、現代の諸問題を解決するための広い視野を有する人材。
修了後の進路	研究職・教育職（大学等の教員、研究所の研究員）。それ以外に、官公庁・自治体職員、国際機関職員、博物館学芸員、学術出版業、教育関連会社、NGO・NPO など。

人文学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（文学）
Doctoral Program in Humanities / Doctor of Philosophy in Humanities

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（文学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	大学院共通科目、研究指導科目、論文発表に関する科目、博士論文作成、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表、論文投稿等
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	大学院共通科目、研究指導科目、演習科目、他研究室と共同の演習科目、インターンシップ科目、達成度自己点検、博士論文作成、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表、論文投稿等
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	大学院共通科目、研究指導科目、演習科目、研究発表に関する科目、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	研究指導科目、演習科目、大学院共通科目（JAPIC 科目）、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験等
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、外国語の講義科目、外国語の演習科目、外国語文献を利用した博士論文作成、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文投稿等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：人文学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①人文学分野における先端的な研究課題を設定する能力を身につけたか ②人文学分野において自立して研究計画を遂行する能力を身につけたか	大学院共通科目、演習科目、研究指導、博士論文作成、論文投稿、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	7. 専門知識：人文学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①人文学分野における先端的かつ高度な専門知識を身につけたか ②人文学分野における専門知識の総合的な運用能力を身につけたか	大学院共通科目、演習科目、研究指導、博士論文作成、中間発表、論文投稿、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	8. 倫理観：人文学分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①人文学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識を身につけたか ②専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識を身につけたか	大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、演習科目、研究指導、博士論文作成、中間発表、INFOSS 情報倫理、APRIN e-learning 等
	9. 思考力：専門分野に関する知識及び関連する分野に関する深い学識をもとに、物事を論理的に考え、結論を導き出す能力	専門分野に関する高度な知識及び関連する分野に関する深い学識をもとに、物事を論理的に考え、結論を導きだす能力を身につけたか	演習科目、博士論文作成、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	10. 総合力：研究成果を人 文知の中に位置づけ、広範な視野で研究を遂行する能力	研究成果を人文知の中に位置づけ、広範な視野で研究を遂行する能力を身につけたか	大学院共通科目、演習科目、他学位プログラム科目演習科目、研究指導等

学修成果の評価に関する方針	− 学修成果の評価は、学位授与方針に基づくコンピテンスの修得状況を「達成度評価表（ルーブリック）」により、各学期末、ならびに博士論文提出時点等に確認・評価することで行う。 − 1 年次、2 年次での博士論文指導に関わるゼミにおける指導を経て、2 年次後半に学会発表、論文投稿の状況、博士論文概要に基づき、主指導教員、副指導教員が中間評価を行う。 − 3 年次に博士論文構想の発表を行い、博士論文予備審査論文について、主指導教員、副指導教員が予備審査および、ルーブリックに基づき第一段階達成度審査を行う。 − 博士論文提出後、主査および副査 2 名以上で構成される学位論文審査委員会において公開審査、ならびに、ルーブリックに基づき第 2 段階達成度審査を行う。
学位論文に関する評価の基準	1. 研究テーマが適切に設定され、意義・位置づけが明確であること。 2. 関連する先行研究を網羅し、批判的検討を加えていること。 3. 研究方法が明確に提示されていること。 4. 論の構成が適切で、実証的、論理的であること。 5. 新たな学術的な知見が含まれること。 6. 学位論文として適切な形式を具え、研究倫理が順守されていること。 − 博士論文の審査は、主査 1 名、副査 2 名以上で構成される審査委員会を設けて公開で行う。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

哲学、倫理学、宗教学、歴史学、人類学、文学、言語学、文化学、英語教育学の 9 領域を横断する人文学の高度な研究力・先端的な専門知識・深い倫理観とともに、人文社会科学の幅広い基礎的素養、人文社会ビジネスにわたる広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目、研究群共通科目から 1 単位を履修することを推奨する。 − 大学院共通科目などにより、未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力を身に付ける。 − 大学院共通科目などにより、俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力を身に付ける。 − 大学院共通科目などにより、学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力を身に付ける。 − 大学院共通科目などにより、リーダーシップを発揮して目的を達成する能力を身に付ける。 − 大学院共通科目などにより、国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲を身に付ける。 − 大学院共通科目、専門科目（演習科目）、研究指導、博士論文作成、学会発表などにより、人文社会科学分野及び人文学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力を身に付ける。 − 大学院共通科目、専門科目（演習科目）、研究指導、博士論文作成、学会発表などにより、人文社会科学分野及び人文学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力を身に付ける。 − 大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、専門科目（演習科目）、研究指導などにより、人文社会科学分野及び人文学分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識を身に付ける。

教育課程の編成方針	– 専門科目（演習科目）、博士論文作成、学会発表などにより、専門分野に関する高度な知識及び関連する分野に関する深い学識をもとに、物事を論理的に考え、結論を導きだす能力を身に付ける。 – 専門科目（演習科目）、研究指導などにより、研究成果を人文知の中に位置づけ、広範な視野で研究を遂行する能力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	– 入学時、加えて年度当初に、学生の個々の研究テーマに基づき「履修計画」および指導体制を設定し、授業履修、研究指導を行う。 – 各年次の演習科目を中心に、より高度で幅広い専門知識を得ながら、自らの研究を構築し、プレゼンテーションを行うことで、汎用コンピテンス「知の創生力」「マネジメント能力」「コミュニケーション能力」「リーダーシップ力」「国際性」、専門コンピテンス「研究力」「専門知識」「思考力」「総合力」を身に付ける。演習科目とともに研究指導を通じて、専門コンピテンス「倫理観」を身に付ける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	人文学諸分野への強い関心、研究課題に真摯に取り組む情熱、研究に必要な専門的知識、語学力、論理的思考力、論述力を持ち、専門性を追求するのみならず、自らの研究を人文学の中に位置づけ、学際的な新たな領域を開拓する意欲を持つ人材を求める。
入学者選抜方針	入学者の選抜にあたっては、一般入試を行う。 – 一般入試では、専門科目の筆記試験、並びに口述試験を実施し、総合的に判定する。専門科目は、出願時に申し出た哲学・思想、歴史・人類学、文学、言語学、現代文化学、英語教育学など人文学に関係する分野から 1 つを選択し、外国語（1 カ国語）で書かれた専門文献を使った設問を含む出題を行い、人文学諸分野の研究に必要な専門的知識、論理的思考力、研究しようとしている分野の専門的知識、研究に必要な語学力を判定する。口述試験は、提出された修士論文（ないしはそれに準ずる論文）や研究計画書等を参考としつつ、志願者の研究しようとしている分野の専門的知識、研究に対する関心・情熱・適性、研究を通して社会に貢献しようとする意欲に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。提出書類のうち、修士論文により、専門分野に関する論述力を判定する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 学修の達成度を把握するため、すべての院生に対し学期毎にコンピテンス達成度評価表の作成・提出を義務付けている。指導教員は、院生から提出されたコンピテンス達成度評価表をもとに個別面接を実施し、汎用コンピテンスと専門コンピテンスの達成状況を確認しながら効果的な学修の進め方について指導を行っている。 − 履修規定等に履修モデルを明示し段階的かつ効果的な学修が達成できるよう工夫している。 − 論文提出に到るスケジュールを明示し、中間発表（ヒアリング）の後、予備審査委員会を立ち上げ、予備審査合格の後、本審査委員会を設置し、論文受理、公開審査を実施している。公開審査には、下級生も参加し、自身の研究や論文執筆の参考としている。 − 院生は、毎年度初めに主指導教員と面談し、研究計画書を作成し提出している。その後、院生は、主指導教員や関連する専門分野の教員と随時面談し、学位論文の作成に活かしている。 − 院生の博士論文提出条件である査読付き論文の学会誌掲載に向けて、主指導教員、副指導教員による稠密な指導を行っている。 − 一部のサブプログラム（SP）では、学会参加（研究発表）費用支援、他大学図書館雑誌論文コピー・図書貸借費用支援、外国語での発表（論文、口頭発表）原稿の語学支援（ライティングサポート、校閲）等を行っている。 − 一部の SP では、「海外研究プロジェクト実習」という科目を SP リーダー担当授業として建て、海外の国際学会参加や資料探索、協定大学への研究留学（超短期）などを単位化している。実施に際しては主指導教員の指導の下に作成して提出することを義務付け、履修者の学位取得に結びつく研究計画のなかで有効であるようにしている。 − 学振など外部資金による研究支援の申請を推奨し、主指導教員が申請書作成に当たってアドバイスを与えている。 − 各教員が実施する一部の授業では、国際会議に投稿するための英語アブストラクトの書き方、学術雑誌に投稿するための論文執筆指導を行っている。 − researchmap への研究業績の登録を推奨している。
学生同士の交流機会	− 博士論文執筆に関わる科目（ゼミ）において、修士を含む院生同士の研究上の討論を行い、各々の研究を深化させている。 − 院生主体の研究会や読書会が開催され、院生同士の研究交流を深めている。 − 一部の SP では、院生主体で運営、出版する雑誌の編集・刊行・配布を通じて、学生たちが自ら話し合いを実践している。 − 一部の SP では、学類生と院生合同の実習に際して、学類生指導の補助的な役割を通じて交流を深めている。 − 一部の SP では、院生主体のレクリエーションを開催し、院生同士の交流を深めている。 − チューター制度を中心として、留学生と日本人院生との交流を深め、日常的にも院生同士が協力し合いながら、安心して研究に取り組める環境を形成している。

教員との交流機会	− 新年度オリエンテーションを実施し、新入生を含めた院生と教員との懇談を行っている。 − 年間を通しての指導教員、副指導教員をはじめとする教員と院生との面談を随時行い、指導の充実を図っている。 − 院生と教員による「大学院懇談会（院生懇談会）」を開催し、学生からの様々な要望を受けとめたうえで、学修環境や学生生活の支援をおこなっている。 − 一部の SP では、学生選出委員と教員選出委員によるレクレーション実行委員会を組織し、あらたな枠組みのもとで、学生と教員の交流を図るより有効な機会の創出を検討している。 − 一部の SP では、学生の修了後の進路選択に役立てるため、研究職や専門職に就職した修了生などを講師とした公開講座を年に複数回開催し、院生、修了生及び教員による交流の場を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

− 大学院担当教員の資格認定にあたっては、定められた基準と手続きにしたがって研究業績及び教育業績を精査し、十分な資質と能力を備えた教員を適切な担当業務（研究指導、研究指導補助、授業担当）に配置している。
− 授業科目のシラバス作成にあたっては、すべての科目のシラバスが適切に作成されているかをチェックシートを用いて確認し、教育の質の保証と改善に役立てている。
− 学修の達成度を把握するため、すべての院生に対し学期毎にコンピテンス達成度評価表の作成・提出を義務付け、個別指導を行っている。
− 各 SP の運営委員会、カリキュラム委員会等において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
− 授業評価アンケートを実施し、その回答から授業計画、授業運営に関して改善を行っている。
− 複数教員が参加する論文指導ゼミや博士論文構想発表会を開催し、主指導・副指導教員以外の教員からの意見も得ることが出来るようにしている。
− 教育成果の可視化としては、口頭発表・ポスター発表・論文発表などの計画的な研究遂行を指導している。
− TA や RA 制度を活用し、教育・研究補助業務を通じて院生の教育・研究力向上とキャリア意識の醸成を図っている。

国際公共政策学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in International Public Policy

■ 博士（国際公共政策）
■ Doctor of Philosophy in International Public Policy

人材養成目的 / Program Educational Objectives

国際関係論や地域研究、社会学、政治学、経済学、人類学、公共政策学など国際公共政策に関わる各分野のディシプリンに基づく高度の研究能力を基礎としながら、複数の分野を横断した俯瞰的・学際的視野をもって、国際問題、国内外の政治経済、社会問題等の本質を理解・分析することによって、変化する諸課題に対する問題解決・政策提言能力を備え、グローバルオピニオンを形成できる大学教員、研究者等を養成する。

養成する人材像	国際公共政策に関わる専門知識や、理論・実証に関わる論理的思考力・分析力に基づいた国際水準の研究能力および、国内外の政治経済や社会政策上の諸問題、または個別の地域や国際関係の諸問題に関する政策分析・立案・実施に資する高度の実践的能力を有する人材。
修了後の進路	社会科学・国際関係の研究職・教育職（大学等の教員、研究所の研究員）。それ以外に、官公庁・自治体職員、国際機関職員、金融機関やメディア等の民間企業、NGO・NPO など、高度な研究力を生かした職業人。

国際公共政策学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（国際公共政策）
Doctoral Program in International Public Policy / Doctor of Philosophy in International Public Policy

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（国際公共政策）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	大学院共通科目、研究指導科目、演習科目、博士論文作成、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表、論文投稿等
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	大学院共通科目、国際公共政策プロジェクト演習、研究指導科目、演習科目、インターンシップ科目、達成度自己点検、博士論文作成、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表、論文投稿等
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	大学院共通科目、国際公共政策プロジェクト演習、研究指導科目、演習科目、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	国際公共政策プロジェクト演習、研究指導科目、演習科目、大学院共通科目（JAPIC 科目）、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験等
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、国際公共政策プロジェクト演習、国際関係分野を中心とした演習科目、外国語文献を利用した博士論文作成、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文投稿等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：国際公共政策分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①国際公共政策に関する高度な専門性を生かして課題にアプローチし、オリジナリティのある研究成果を生み出しているか ②国際公共政策に関わる研究成果を内外に発信するとともに、それに基づいた教育や指導を行う能力を持つか	国際公共政策プロジェクト演習、演習科目、博士論文作成、研究指導、論文投稿、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	7. 専門知識：国際公共政策分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①国際公共政策の分野における高度な専門性や理論的思考に裏付けられた分析力を持つか ②国際公共政策上の諸問題に関し、政策提言や解決方策を志向する能力を持つか	演習科目、博士論文作成、研究指導、中間発表、論文投稿、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	8. 倫理観：国際公共政策分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	高い倫理観に基づいて自らの研究プロセスを管理する力を持つか	大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、国際公共政策プロジェクト演習、演習科目、研究指導、博士論文作成、中間発表、論文投稿、学会発表、INFOSS 情報倫理、APRIN e-learning 等
学修成果の評価に関する方針	– 各授業科目、とりわけプロジェクト演習などの必修科目では、担当教員が研究の進捗をチェックしながら、厳正な教育評価を実施している。 – 各学期末のコンピテンス達成度評価のチェック、3 年次におけるプロジェクト演習、および博士論文の予備審査・本審査を通じて、段階的に研究能力の修得と成果の公表を可能にする主指導、副指導教員による評価体制、およびそれらに対するカリキュラム委員会や事務のサポートによるチェックを行っている。		

学位論文に関する評価の基準	1. 特定の研究課題を設定し、研究の意義及び必要性が明確に記述されていること。 2. 研究課題にふさわしい研究方法及び分析が用いられていること。 3. 当該研究分野の先行研究を十分に踏まえていること。 4. 論文の全体にわたって一貫した論理展開がなされていること。 5. 学術論文として体系的・統一的に構成され、単行本または学術雑誌掲載論文として発表できる内容と体裁を有するものであること。ただし既発表のものを含んでもよい。 6. 引用文献・参照文献を明示し、適切な表現・表記法に従って記述されていること。 7. 独創性を有し、今後、自立して研究活動を行い、学界に対して新たな知見をもって貢献する能力を有すると判定されるものであること。 8. 個人情報や倫理に関して適切な配慮がなされていること。 上記項目すべてを満たしていると認められる学位申請論文を、口述審査を経た上で合格とする。 【審査委員の体制】 (1) 審査委員会は、主査 1 名（必ず研究指導担当教員であること）、副査 2 名以上（研究指導担当教員または授業担当教員）、計 3 名以上の本学位プログラムの教員から構成される。なお必要に応じて、本学位プログラムの教員でない者（他大学の大学院や研究所等の教員等も含む）を副査として加えることもできる。 (2) 審査委員会には、原則として 2 名以上の教授を含んでいなければならない。その 2 名の教授のうち 1 名を本学位プログラムの教員でない教授とすることもできるが、2 名以上の教授の半数は本学位プログラムの教授でなければならない。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

国際関係論や地域研究、社会学、政治学、経済学、人類学、公共政策学等の各分野を横断する国際公共政策研究の高度な研究力・先端的な専門知識・深い倫理観とともに、人文社会科学の幅広い基礎的素養、人文社会ビジネスにわたる広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目、研究群共通科目から 1 単位を履修することを推奨する。 – 大学院共通科目、専門科目（演習科目）などにより、未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、専門科目（演習科目）などにより、俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策 を計画し実行する能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、専門科目（演習科目）などにより、学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、専門科目（演習科目）などにより、リーダーシップを発揮して目的を達成する能力を身に付ける。 – 大学院共通科目、専門科目（演習科目）などにより、国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲を身に付ける。

教育課程の編成方針	− 専門科目（演習科目）、国際公共政策プロジェクト演習、研究指導、博士論文作成、学会発表などにより、人文社会科学分野及び国際公共政策分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力を身に付ける。 − 専門科目（演習科目）、研究指導、博士論文作成、学会発表などにより、人文社会科学分野及び国際公共政策分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力を身に付ける。 − 大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、国際公共政策プロジェクト演習、研究指導などにより、人文社会科学分野及び国際公共政策分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 学修は専門科目（演習科目）の履修を基本とし、演習でのディスカッションを通じて、自らの取り組む課題に対する高度の専門知識・研究力・国際性を身につけると同時に、知の創成力、コミュニケーション能力、リーダーシップ力といった汎用的な能力を養成する。 − 大学院共通科目の履修を推奨し、汎用的能力や倫理性の養成を補完する。 − 博士論文執筆に向けて、「国際公共政策プロジェクト演習」等を通じた指導教員による論文指導を通じて、マネジメント能力や倫理性の養成を含めた形で各自の研究プロセスを支援するとともに、国内外の学会発表や専門学術誌への投稿といった研究成果の発信を目指すことで、人文社会科学・国際公共政策分野に関わる高度な研究力を高める。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	修士論文の執筆や社会的経験を通じ、グローバル化・複雑化する世界における現代社会や国際問題について洗練された論理的思考力や専門的知識、多様な社会問題・政治情勢を把握できる感性を身に付け、また、それを基盤として、高度な専門性を実務に積極的に活用し、現代社会や国際関係の諸問題について具体的な政策提言や解決方策を言語化できる高度かつ柔軟な思考力、意欲を備えた人材を求める。
入学者選抜方針	入学者の選抜にあたっては、一般入試、推薦入試、英語の授業のみを履修して修了することを希望する者への特別選抜などの入学者選抜方式によって多様な入学志願者に対応する入学試験を実施する。 − 一般入試では、専門科目及び外国語の筆記試験、並びに口述試験を実施し、総合的に判定する。専門科目は、出願時に申し出た国際関係論・社会開発論・人類学・社会学・政治学・地域研究・経済学など国際公共政策に関係する分野から一つを選択して解答させ、志願者の論理的思考力、研究しようとしている分野の専門的知識、社会・政治問題に対する感性を判定する。口述試験では、修士論文と研究計画書を参考とし、高度な専門性を実務に積極的に活用する能力、社会・政治問題への政策提言を行える高度かつ柔軟な思考力、意欲、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。

入学者選抜方針	– 推薦入試では、小論文の筆記試験と口述試験を実施し、総合的に判定する。推薦入試は、修士課程等において志願者を指導し、その諸能力や性格、資質などを知悉する教員から、国際公共政策研究に必要な専門的知識や継続的研究能力、外国語運用能力をすでに身に付けているとして推薦された者を対象としている。このため、専門科目や外国語の筆記試験は行わず、研究しようとしている分野の専門的知識や専門実務へ応用できる柔軟性を判定するために小論文の筆記試験を行う。口述試験では、推薦書と研究計画書を参考とし、研究計画の実現可能性、研究への情熱・意欲、研究しようとしている分野の専門的知識、研究に対する資質に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。 – 英語特別選抜では、世界各国の若手行政官、有職者、若手研究志望者など、英語による授業のみを履修して修了を希望する者への特別選抜を実施する。特別選抜では書類審査と口述試験を実施し、総合的に判定する。書類審査は、成績書及び推薦書、並びに研究計画書などに基づき、研究テーマの妥当性、研究計画の実現可能性、研究しようとしている分野の基礎的知識などを判定する。口述試験では、書類審査を踏まえ、研究テーマの妥当性、研究計画の実現可能性、研究への情熱・意欲、研究しようとしている分野の専門的知識、研究に対する資質に加え、英語の運用能力を含むプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 全学レベルの取り組み（ライティングサポート）等を紹介し、積極的な活用を勧める。 – 入学時のガイダンスで学修の進め方を説明するほか、主指導教員 1 名、副指導教員 2 名以上が共同で学修支援を行う。指導教員、カリキュラム委員会、学生委員会、学生担当の事務体制が必要に応じて学生へのサポートを行う。 – 学外講師によるセミナーの広報や積極的な開催を通じて、学生の多様な研究関心に対応できる学習空間を創出している。
学生同士の交流機会	国際公共政策学位プログラムでは、年に 1-2 度、修士・博士の学生と教員が日頃の環境等について議論し、学習環境の改善を行うためのミーティングを行っている。
教員との交流機会	学生と教員の交流を図り、研究環境などに関する学生の要望を聞く機会を作るため、年最低 2 回の茶話会を実施している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– カリキュラム委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。とくにシラバスチェックを行い、授業内容が教育課程目的から見て適切か、学生に必要な情報を提供しているかを確認している。
– またカリキュラム委員会を中心に、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に検討することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。

国際日本研究学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in International and Advanced Japanese Studies

■ 博士（国際日本研究）
■ Doctor of Philosophy in International and Advanced Japanese Studies

人材養成目的 / Program Educational Objectives

グローバル化の進展する社会において、国際的かつ比較研究の視座から日本の文化・社会を探究し、人文科学・社会科学・日本語教育学を架橋する研究力と教育力を備えた研究者・教育者を養成する。さらに、これら三領域における専門的かつ国際的な学識を涵養し、その成果を国内外に発信しうる世界的水準の人材を育成する。

養成する人材像	グローバルな視点から現代日本の特質を解明するために、幅広い専門知識と俯瞰的な視座を涵養し、基礎的素養と関連領域の学修を通じて、高度専門職および研究職を担いうる能力を有する人材。さらに日本語教育においては、国際的な研究・教育領域を深化させ、専門的学識を世界に発信し得る研究力・教育力を備えた高度専門人材。
修了後の進路	卒業後の進路は幅広く、大学・研究所・民間シンクタンク等の研究職・教育職に加え、海外拠点を有する日本企業や商社、外国企業、官公庁・自治体、国際公務員、日本語教育機関、国際関係組織、メディア関連機関などが挙げられる。進路は日本国内のみならず、シンガポール、ベトナム、中央アジア、南米、中国、タイ、韓国、台湾など、広く海外にも開かれている。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（国際日本研究）の学位を授与する

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導科目、論文発表に関する科目、博士論文作成、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表、論文投稿等
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①国際日本研究分野に関連する課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導科目、演習科目、他研究室と共同の演習科目、インターンシップ科目、達成度自己点検、博士論文作成、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表、論文投稿、外部コンテス等への参加等
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導科目、演習科目、研究発表に関する科目、中間発表、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①社会的意義と説得力を備えた目標を設定することができるか ②その目標を実現するために必要な体制を整え、リーダーとして計画を推進し成果を達成する能力があるか	大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導科目、特別指導科目、他研究室と共同の演習科目、大学院共通科目（JAPIC 科目）、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験等
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な活動に十分な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、比較文学論 2A などの専門科目、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、外国語文献を利用した博士論文作成、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文投稿等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：国際日本研究分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①国際日本研究分野における先端的な研究課題を設定する能力を身につけたか ②国際日本研究分野において自立して研究計画を遂行する能力を身につけたか	大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導、博士論文作成、論文投稿、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	7. 専門知識：国際日本研究分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①国際日本研究分野における先端的かつ高度な専門知識を身につけたか ②国際日本研究分野における専門知識の総合的な運用能力を身につけたか	大学院共通科目、比較文学論 2A などの専門科目、研究指導、博士論文作成、中間発表、論文投稿、学会発表、研究会発表、ポスター発表等
	8. 倫理観：国際日本研究分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①国際日本研究分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識を身につけたか ②専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識を身につけたか	大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、研究法入門、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、演習科目、研究指導、博士論文作成、中間発表、INFOSS 情報倫理、APRIN e-learning 等
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 本学位プログラムでは､「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」に掲げる知識･能力（コンピテンス）の修得状況を的確に把握し、学修成果の評価と教育指導に反映させるための仕組みを整えている。具体的には、学生による「コンピテンスシート」の記入を学期ごとに実施しており、各コンピテンスに関連づけられた修得単位の進捗や、学修の到達状況を振り返る機会を設けている。提出されたシートには事務室による確認とコメントが加えられた後、担当教員と学生との間でレビューを行い、修了までに確実に達成できる見通しを立て、教員からの所見が記入されるにをカリキュラム委員会で確認し、最終的にはコンピテンススコア到達状況は、各自の学位論文審査委員会が論文審査時に審査することで、学修支援と学習計画の調整に役立てている。このプロセスを通じて各コンピテンス領域ごとの修得状況を数値化し、進捗のバランスを図表（レーダーチャート等）により可視化している。これにより、学生自身が今後の履修や学修の重点を把握しやすくなり、計画的・主体的な学びの促進につながっている。		

学位論文に関する評価の基準	**（審査体制）** (1) 専門委員会委員（審査専門委員）のうち、少なくとも主査１人（研究指導）と副査２人（研究指導または授業担当）の合計３人は、当該審査研究群教員会議の構成員から指名するものとし、主査１人と副査の半数以上は、人文社会科学研究群（博士後期課程）国際日本研究学位プログラム教育会議の構成員から指名するものとする。 (2) 人文社会科学研究群（博士後期課程）国際日本研究学位プログラムに所属する審査専門委員のうち少なくとも１人は、博士の学位を有する者であるものとする。 (3) 人文社会科学研究群（博士後期課程）国際日本研究学位プログラムに所属する審査専門委員のうち少なくとも１人は、審査専門委員会解散後引き続き１年以上にわたって国際日本研究学位プログラム（博士後期課程）教育会議構成員の研究指導担当教員であるものとする。 (4) 本学教員で学術院・研究群の授業担当教員でない場合にも、当該学位論文審査に不可欠であると認定される場合には、その者を審査専門委員会の副査に加えることができる。 (5) 当該学位論文審査専門委員会に不可欠であると認定される場合には、本学の他の学術院・研究群等、他大学の大学院又は他の研究所等の教員等を審査専門委員会の副査に加えることができる。 **（評価項目）** 学位論文の審査は次の項目に基づいて行っていること ①課題の設定が適切であり、かつ独創性を有していること ②論旨が明確であり、かつ一貫性を有していること ③正確な用語を用いて完成度の高い分析を行っていること ④先行研究の成果を十分に把握し、かつ発展的に運用していること ⑤文献・資料を適切に使用していること ⑥体裁及び構成が適切であること ⑦当該分野において高度な学術水準に達し、かつ新たな学術的貢献が認められること **（評価基準）** 上記の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、審査又はコンピテンスの確認を経た上で、合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

人文科学、社会科学、日本語教育学の３領域を横断する国際日本研究の高度な研究力・先端的な専門知識・深い倫理観とともに、人文社会科学の幅広い基礎的素養、人文社会ビジネスにわたる広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学生の主たる研究関心を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう大学院共通科目、研究群共通科目から１単位を履修することを推奨する。 – 大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、リサーチ・プログラム開発、博士論文作成、学会発表などにより、未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力（1. 知の創成力）を身に付ける。 – 大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、達成度自己点検、外部コンテスト等への参加などにより、俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力（2. マネジメント能力）を身に付ける。

教育課程の編成方針	− 大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、学会発表、ポスター発表などにより、学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力(3. コミュニケーション能力）を身に付ける。 − 大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験などにより、リーダーシップを発揮して目的を達成する能力（4. リーダーシップ力）を身に付ける。 − 大学院共通科目、比較文学論 2A などの専門科目、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC、国際会議発表、英語論文作成などにより、国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲（5. 国際性）を身に付ける。 − 大学院共通科目、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、リサーチ・プログラム開発、研究指導、博士論文作成、学会発表などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力（6. 研究力）を身に付ける。 − 大学院共通科目、比較文学論 2A などの専門科目、リサーチ・プログラム開発、研究指導、博士論文作成、学会発表などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力（7. 専門知識）を身に付ける。 − 大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群)、プロジェクト演習 3A、3B、4A、4B などの専門科目、研究指導などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識（8. 倫理観）を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	−「プロジェクト演習」は、博士論文の構想や中間成果を多数の教員や博士後期課程の学生たちの前で発表することで、プレゼンテーション能力を高めつつ研究を深めてゆくことをめざす。 − 他の専門科目は研究テーマと関連の深い領域の高度な演習を通じて、関連する幅広い知識を習得しつつ博士論文の構想を彫刻することをめざす。 − 8 つのコンピテンスそれぞれについて修得基準を設け、1 年次終了までに基準の 5 割以上、2 年次終了までに基準の 7 割以上、3 年次終了時に基準を満たすことを目指して学修する。修得基準は学生に対して別途掲示する。 1. 知の創成力 2. マネジメント能力 3. コミュニケーション能力 4. リーダーシップ力 5. 国際性 6. 研究力 7. 専門知識 8. 倫理観

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	国際的・比較的な視野のもとに日本の文化・社会について研究し、その成果をもとに、日本や東アジアを中心に世界が抱えるさまざまな問題に主体的に取り組んでいく意欲をもつ学生および社会人。後期課程ではこうした課題に対して研究者としてあるいは高度な研究能力を持つ職業人として、真摯に取り込む意欲を持つ学生や社会人を広く求める。
入学者選抜方針	入学者の選抜にあたっては、一般入試、推薦入試、社会人特別選抜などの入学者選抜方式によって多様な入学志願者に対応するとともに、募集人員を分割し、同一年度に複数回の入学試験を実施する。また、入学機会を 4 月だけではなく、10 月にも提供する。 – 一般入試では、専門科目の筆記試験、及び口述試験を実施し、総合的に判定する。専門科目は、国際日本研究に関係する「政治」「経済」「文学・文化・思想」「法律・社会・メディア・情報」「言語学」「日本語教育学」の分野から 1 つ出願時に選択した科目について日本語または英語（「日本語教育学」は日本語のみ）で解答させ、博士後期課程において高度な国際日本研究を遂行しうる専門的能力、研究しようとしている分野の専門的知識を判定する。専門科目は、博士論文を執筆する言語で解答させるので、解答における語学力、及び修士論文や研究計画書等の書類の語学力で判定するため、外国語の筆記試験は行わない。口述試験は、研究計画書等を参考とし、学修成果や思考力、語学力、研究に対する情熱・意欲、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力も判定する。 – 推薦入試では、小論文の筆記試験、及び口述試験を実施する。推薦入試は、研究者として大学等研究機関に就職することを目指す修士の学位を取得した、あるいは取得予定の学生、もしくは海外の大学教員や高度職業人を対象とする。受験者は、修士の学位を取得しているか、取得予定であるため、専門科目の試験に代えて、小論文により、専門分野に関する知識、理解力、論理的思考能力等、博士後期課程において高度な国際日本研究を遂行しうる専門的能力を判定する。口述試験は、研究計画書等を参考とし、国際日本研究に真摯に取り組む意欲、研究計画、本学位プログラムを志望する理由、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。 – 社会人特別選抜では、専門科目の筆記試験及び口述試験を実施する。社会人特別選抜は、社会人としての経験を有している者を対象としている。専門科目は、国際日本研究に関係する「政治」「経済」「文学・文化・思想」「法律・社会・メディア・情報」「言語学」「日本語教育学」の分野から 1 つ出願時に選択した科目について日本語または英語（「日本語教育学」は日本語のみ）で解答させ、高度な国際日本研究を遂行しうる専門的能力を判定する。口述試験は、研究計画や社会人として得られた問題意識、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	本学位プログラムでは、博士後期課程における高度な研究活動を支援し、学術的成果の創出と発信を促進するための学修支援を実施している。学会発表にかかる旅費の支援制度を整備し、国内外の学会での発表機会を積極的に提供することにより、学生が自身の研究成果を国際的な学術コミュニティに発信する力を培う。 また、博士後期課程に設けられている演習科目においては、研究の進捗状況を報告・検討し、他の教員や学生との意見交換を通じて、研究成果の精緻化と学術的な思考力の深化を図っている。 さらに、指導教員の助言のもと、学会発表を見据えた発表資料の作成や発表練習を行い、専門外の聴衆にも自身の研究内容を的確に伝えるプレゼンテーション能力の涵養にも力を入れている。 こうした取り組みは、「リサーチ・プログラム開発」の科目として位置づけられている。 このように、研究の創出・深化・発信の各段階を支える多層的な支援体制を通じて、博士後期課程の学生が自立した研究者として成長できる環境を整えている。
学生同士の交流機会	本学位プログラムでは、学生同士の主体的な交流を促進することにより、学修意欲や研究の質の向上を図っている。その一環として、教員と学生が一同に会する全体集会では、博士後期課程に在籍する学生が、自身の研究内容や学会発表、フィールドワーク等の経験を互いに共有する機会を設けており、異なる分野・関心をもつ学生間での学術的刺激が生まれている。 また、博士後期課程の演習科目においては、複数教員の指導のもとで学生が研究発表を行い、他の大学院生との意見交換を通じて、相互にフィードバックを行う環境が整えられている。このような場を通じて、学生同士が専門的知見や研究の進め方を学び合うことができ、思考の深化や視野の拡張にもつながっている。
教員との交流機会	本学位プログラムでは、博士後期課程における高度な研究活動を支えるため、学生と教員の密接な交流を通じて、研究能力の向上および学術成果の発信力を高める体制を整えている。 全体集会では、教員と学生が集まり、研究活動における悩みや課題について率直に意見を交わす機会を設けている。加えて、事前に実施される学生アンケートの結果に基づき、教員からのフィードバックを集会の場で共有することで、教育運営に対する透明性と双方向性を高めている。 また、博士後期課程の演習科目においては、指導教員との継続的な対話を通じて、研究の進捗や課題を深く掘り下げることが可能な環境が整えられている。ゼミナールでは、学生が自身の研究成果について発表を行い、それに対して教員が専門的かつ実践的な観点から助言を行うことで、研究の精緻化や成果発信の洗練が図られている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

本学位プログラムでは、博士後期課程における高度な研究指導と専門教育の質を継続的に保証・向上させるための体制と取り組みを整えている。

FD 委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。教員間での定期的な FD 活動を通じて、カリキュラムの構成、研究指導の方法等に関する情報共有を行い、教育研究環境の検証と改善を継続的に進めている。

また、授業評価アンケートを通じて学生から寄せられた意見を検討し、必要に応じて演習や科目内容の見直し、指導体制の調整を行うなど、学生の研究活動を効果的に支援するための改善を実施している。

法学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Law

■ 修士（法学）
■ Master of Laws

人材養成目的 / Program Educational Objectives

企業法学の分野における人材需要に応えて、現代社会において企業が直面する法的諸問題について適切な解決策を提示できる法学的専門能力を有する高度専門職業人の育成・再教育を目的とする。

養成する人材像	企業において一定の実務経験を有し、現代社会において生じる多様な諸問題を法学的専門知識と法的思考方法によって解決することができる、高度専門職業人を育成する。
修了後の進路	学生の大部分については、在学中から民間会社・官公庁・弁護士事務所・会計事務所等に勤務しているか、弁護士・公認会計士・税理士等として開業していると思われるが、学位取得後に大学等の高等教育機関の教員となる者も一定数いるものと想定される。

法学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（法学）
Master's Program in Law / Master of Laws

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（法学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	企業法学特別研究Ⅰ～Ⅵ、修士論文中間報告、修士論文作成等
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	商事法研究Ⅰ・Ⅱ、民事法研究Ⅰ・Ⅱ、租税法研究Ⅰ・Ⅱ、修士論文中間報告、修士論文作成等
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	社会保障法演習、会社法演習、知的財産法演習、修士論文中間報告、修士論文作成等
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	法文献学、民法演習Ⅰ～Ⅳ、労働法演習Ⅰ・Ⅱ、民事手続法演習Ⅰ・Ⅱ、知的財産法判例演習、修士論文中間報告、修士論文作成等
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	国際私法、ヨーロッパ契約法、国際民事訴訟法、修士論文中間報告、修士論文作成（必修科目）等
	6. 基礎的専門知識：法律学の基本的な考え方及び企業法学の各分野に係る基礎的専門知識	①法律学の基礎的な考え方が身についているか ②企業法学各分野の基礎的な知識を獲得できているか	現代民法の基礎、現代商法の基礎等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 文献・判例の調査・分析能力：企業法学の研究に必要な諸文献・裁判例等の調査・分析能力	①企業法学の学習・研究に必要な諸文献や裁判例等を自ら検索・調査して、入手するリテラシーを体得しているか ②入手した諸文献や裁判例等を正確に読解・分析して、内容を整理することができるか	法文献学、修士論文中間報告、修士論文作成等
	8. 特定の企業法学分野に係る深い知識：企業法学の少なくとも1つの主要分野に係る理解・研究に必要な専門的知識	①企業法学の少なくとも1つの主要分野についての深い知識を獲得し、その内容を理解しているか ②企業法学の少なくとも1つの主要分野についての深い知識及び理解を基に研究を遂行する能力を体得しているか	契約法、担保法、会社法、金融商品取引法、民事訴訟法、国際私法、国際経済法、著作権法、特許法、独占禁止法、労働関係法、社会保障法、実務租税法学、租税手続法、修士論文中間報告、修士論文作成等
	9. 論文執筆能力：企業法学の少なくとも1つの主要分野についての深い知識を基にした論文（とりわけ、社会人としての経験などを背景とする問題意識に支えられた論文）を執筆する能力	①企業法学の少なくとも1つの主要分野についての深い知識を基に適切な研究テーマを設定の上で研究を行い、論文としてまとめることができるか ②社会人としての経験などを背景とした問題意識を取り入れた研究を行い、論文に反映させることができるか	企業法学特別研究Ⅰ～Ⅵ、修士論文中間報告、修士論文作成等
学修成果の評価に関する方針	学修成果の到達度については、「達成度評価表」を用いた達成度評価をもとに、次の2つの審査機会において、学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認して評価する。第一に、2年次の秋に実施する全研究指導教員による修士論文中間報告会において、学修状況の中間審査と指導を行う。第二に、2年次末に実施する全研究指導教員による最終試験において、最終達成度審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	学位論文の評価項目 1. オリジナリティを有していること（とりわけ、社会人としての経験等を背景とする問題意識に支えられた論文であること） 2. 重要文献を渉猟し、その理解の上で、自分の理解を展開していること 3. 参考文献・引用文献を適切に表示していること 審査委員の体制・審査方法 学位論文の審査は、主査 1 名及び副査 2 名以上の審査委員の合議で行う。副査には、本学位プログラムの専任教員以外の者を加えることができる。上記評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

- 基礎的専門知識：企業法学の分野における基本的な科目から、「企業関係法」「国際ビジネス法」、「知的財産法」、「社会・経済法」及び「租税法」の各分野における応用的な科目までを広範囲に開講する。
- 諸文献等の調査・分析能力：諸文献の調査・分析能力を培うために、法文献学を開講する。
- 深い専門的知識の習得：専任教員による演習等の高度に専門的な科目を設置するとともに、最新の実務の現状を学ぶ観点から、実務家の非常勤講師による科目を開講する。さらに、民事法研究、商事法研究、租税法研究、労働判例研究等の、修了者、博士後期課程の学生等が参加する科目を設ける。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するように、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目を開講して、学生の研究能力を支援する。共通専門科目を開講するとともに、「企業関係法」「国際ビジネス法」、「知的財産法」、「社会・経済法」及び「租税法」の各分野について専門知識を習得できるよう分野設定を行い、さらに演習等により高度な専門的知識の習得を図る。具体的には、次のような科目を開講する。なお、学生は、どの分野に属する科目も自由に履修することができる。 – 共通専門科目 法文献学、ビジネス法入門、企業法学特別研究等 – 専門科目【企業関係法分野】契約法、不動産法、担保法、会社法、企業会計法、金融商品取引法、民事訴訟法等 – 専門科目【国際ビジネス法分野】国際私法、国際経済法、国際民事訴訟法等 – 専門科目【知的財産法分野】著作権法、特許法、不正競争防止法、商標法、デザイン法、国際知的財産法等 – 専門科目【社会・経済法分野】独占禁止法、労働関係法、社会保障法、憲法等 – 専門科目【租税法分野】実務租税法学、租税手続法、国際課税法等 – 演習等 民法演習、会社法演習、民事手続法演習、国際私法演習、知的財産法演習、独占禁止法演習、労働法演習、社会保障法演習、憲法演習、租税計画演習等

学修の方法 **特色的な教育**	– 入学時点で、各学生の研究計画等で示された研究テーマにもっとも近い専門領域の指導教員を定め、必修科目である「企業法学特別研究 I ～ VI」の履修を通じて、各指導教員がマンツーマン体制で学修指導を行う。 – 各専門科目の学修については、共通専門科目の履修はもちろん、自らの研究計画や問題関心に応じた分野の専門科目を中心に選択することが推奨され、分野内の科目の履修選択にあたっても、指導教員によるアドバイスを受けながら、そのニーズに応じた履修計画を作成して、それに沿った履修を行う。 – 修了には、必修科目 6 単位（企業法学特別研究 I ～ VI）の履修を含めて、30 単位以上を取得し、加えて、中間報告を行った上で、専攻の定める規則に従って修士論文を提出し、その審査および最終試験に合格することが必要とされる。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	企業において一定の実務経験を有しており、現代社会において生じる多様な諸問題を法学的専門知識と法的思考方法によって解決できる高度専門職業人としての能力を涵養しうる、強い学習意欲と熱意を有する人材が望まれる。
入学者選抜方針	研究計画書及び面接試験により選抜する。 – 研究計画書　研究に対する問題設定能力、計画策定能力、専門知識等を中心に評価する。 – 面接試験　基礎的な法的思考力、論理的思考力、批判的思考力、研究能力、専門知識、コミュニケーション能力等を中心に評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	入学時期に開講する「法文献学」において、法令・判例・文献のリサーチ方法、リサーチに必要な基本的知識、及び、先行研究の引用作法について、法学未修者にも分かりやすく解説する。1 年次の 2 月に修士論文の作成のための説明会を実施し、学術論文の意義、論文作成の基本的な流れ、法律学論文の基本的な構成・書き方などを説明する。また、外国法との比較研究が求められる研究活動やレポート執筆の支援のために、アメリカ法を中心とする外国文献や外国裁判例のリサーチ方法に関する「英米法文献学ワークショップ」を開設している。このワークショップはオンデマンドで学修できるようにしている。
学生同士の交流機会	在学生であればいつでも利用可能な修士研究室と法情報室があり、学生同士での討議や情報交換の場として利用できる。また、研究会形式の授業には修了生も参加しており、修了生から在学生への研究上の助言や学修に関する情報提供が行われている。さらに、年に一度開催されるホームカミングデーにおける在学生と修了生との対話会は、同窓生としてのつながりを強めるとともに、年齢・性別・社会的地位を問わない異業種交流の機会として活用されている。
教員との交流機会	少人数による演習形式や複数教員による研究会形式の授業を実施し、指導教員以外の教員とも討議し、あるいは、研究上の助言を得られる機会が提供されている。また、専攻する法領域ごとに共同の研究報告会を開催し、副指導教員からも助言・指導を受けることができる。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

- 学修成果の評価結果及び修了生を対象とするアンケートに基づき、在学中に修得した知識や法解釈の技能などが修了後に活かされているかを確認して、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
- 学生による個々の授業に関する評価アンケート及び学位プログラム全体に関するアンケートの結果を点検し、これをもとに適正な授業運営のための FD を実施することで、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

経営学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Business Administration

■ 修士（経営学）
■ Master of Business Administration

人材養成目的 / Program Educational Objectives

ビジネスの変革、技術の複雑化に伴う新たな経営課題に対応可能な高度専門職業人の養成を目的とする。

養成する人材像	修士（経営学）の学位に相応しい専門知識、および論理的に深く思考する能力やその内容を論理的に構成するための能力を有する人材を育成する。具体的には、ビジネス上の問題を発見する能力、研究とビジネスを融合する能力を持ち、自ら積極的に解を探求し専門領域を超えて幅広い関心を持つことができる人材、ビジネスに根差した問題意識はもちろんのこと、学術的なアプローチに対する関心や知識を有し、かつそれらをビジネス上の課題に基づく研究テーマに適用する能力を有する人材を育成する。
修了後の進路	社会人大学院であるため、民間企業だけでなく官公庁や教育機関など学生のバックグラウンドは幅広く、さまざまな業種の企業からさまざまな職種の学生が集まることが想定される。在学中あるいは修了後に転職するケースもあり、起業や大学教員に転ずる学生など幅広い進路が考えられる。

経営学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（経営学）
Master's Program in Business Administration / Master of Business Administration

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（経営学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	経営システム科学研究・Ⅰ - Ⅰ、同Ⅰ - Ⅱ、同Ⅰ - Ⅲ、同Ⅱ - Ⅰ、同Ⅱ - Ⅱ、同Ⅱ - Ⅲ、修士論文作成、研究計画発表・中間発表・予備審査・最終発表、学会発表
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	経営システム科学研究・Ⅰ - Ⅰ、同Ⅰ - Ⅱ、同Ⅰ - Ⅲ、同Ⅱ - Ⅰ、同Ⅱ - Ⅱ、同Ⅱ - Ⅲ、専門科目、研究計画発表・中間発表・予備審査・最終発表、学会発表等
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	経営システム科学研究・Ⅰ - Ⅰ、同Ⅰ - Ⅱ、同Ⅰ - Ⅲ、同Ⅱ - Ⅰ、同Ⅱ - Ⅱ、同Ⅱ - Ⅲ、専門科目、研究計画発表・中間発表・予備審査・最終発表、学会発表等
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	経営システム科学研究・Ⅰ - Ⅰ、同Ⅰ - Ⅱ、同Ⅰ - Ⅲ、同Ⅱ - Ⅰ、同Ⅱ - Ⅱ、同Ⅱ - Ⅲ、専門科目、学会での質問、セミナーでの質問等
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群 ）、専門科目、研究指導における外国語の論文・書籍の輪読等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 経営に関する多角的思考能力：職業生活に関して深い専門知識を持ち、戦略、組織、財務、マーケティングなどの観点から多角的に思考する能力	①幅広い経営学・経営科学の知識の獲得がなされたか ②専門分野（業種・職種等を含む）以外における経営課題等を理解し議論することができるか	トップレクチャーⅠ、同Ⅱ、専門科目、学会での質問、セミナーでの質問等
	7. 経営に関する問題発見能力：職業生活の現場から自ら問題を発見し明確化する能力	①経営上の課題の所在を、獲得した知識をもとに、自ら同定することができるか ②同定した課題の本質を明確化し自らの言葉で語り他と共有することができるか	専門科目、修士論文作成
	8. 経営に関する問題解決能力：知識や経験を体系化し、現代社会における課題を新たな視点から再構築できる能力	①定量的あるいは定性的な分析手法の理論を理解し適切に適用できるか ②得られた結果を解釈し、自らの言葉で表現し、他と議論することができるか	専門科目、修士論文作成
	9. 経営に関する知の創造能力：職業に関する新たな知識を創造する能力	①獲得した幅広い知識をもとに、経営上の新な仮説や課題を設定できるか	専門科目、起業等
	10. 経営に関する現場実践能力：創造した知識を、職業生活の現場で実践する能力	①獲得した幅広い知識を、理論と実践の間 に橋渡しすることができるか ②獲得した知識の適用限界等を把握しているか	専門科目、特許の取得、起業等

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価シート」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 ディプロマ・ポリシーに係る 10 項目の知識・能力について、1 年次 7 月から 9 月、1 年次秋学期末（概要発表前）、2 年次 9 月ごろ（中間発表前）、2 年次 12 月ごろ（予備審査前）に、それぞれの評価の観点に基づいた達成度評価を行う。
学位論文に関する評価の基準	評価項目を下記の 7 つとし、 1. 経営の現場における重要な問題の発見あるいは、学術的に未解決の問題の発見 2. 基本的な先行研究の把握と、研究課題の位置づけの提示 3. 研究目的および方法の提示 4. 構成・論旨展開の適切さ 5. 学術的貢献および実務的貢献への言及 6. 研究倫理の遵守 7. 文献の適切な引用および規定に沿った体裁 主査 1 名および副査 2 名以上で構成される学位論文審査委員会が、上記の評価項目を内容として含む学位申請論文を、学位論文としての水準の観点から、論文審査ならびに最終試験において評価し、合否の判定を行う。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

高度専門職業人として求められる、経営学、数理科学、情報科学の 3 領域における研究力・専門知識・倫理観を修得させるとともに、研究群共通科目を中心に企業法学における基礎的素養および汎用的知識を加味した教育を行う。

講義科目は経営学において一般的にコア領域とされる戦略・組織、マーケティング、会計、ファイナンスを中心に据えつつ、現代の経営を考える上で重要となる計量分析関連領域や情報技術関連領域も含めて体系化されている。研究面では、各学期に配置されている研究科目や各ステージ発表を通して、課題の明確化、専門的な分析、結果の総括、最終的にはビジネスへのフィードバック検討と段階的に進める。また、複数教員による研究指導体制により、問題発見力、論理構成力、新たな知の創造力を養い、多角的に思考する能力を身につける。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目を履修することを強く推奨する。 経営学において一般的にコア領域とされる経営戦略・経営組織、マーケティング、会計、ファイナンスを中心に備えつつ、数理、情報関連領域の科目を配置するとともに、研究を介して、ディプロマ・ポリシーに示した能力を育成する。研究面では、研究計画発表、概要発表、中間発表、予備審査、最終試験のステージを用意することで、計画的な研究活動を支援する。複数教員による指導体制を通して、多角的な思考能力を身につける。 – 学術院共通専門基盤科目「トップレクチャー Ⅰ・Ⅱ」等により、経営に関する多角的思考能力を身に付ける。

教育課程の編成方針	− 研究群共通科目「経営基礎」、「会計基礎」等により経営に関する問題発見能力を身に付ける。 − 専門科目「消費者行動」等により経営に関する問題解決能力を身に付ける。 − 専門科目「オペレーションズ・リサーチ」等により経営に関する知の創造能力を身に付ける。 − 専門科目「マーケティングリサーチ」等により経営に関する現場実践能力を身に付ける。 − 研究科目「経営システム科学研究」等により経営に関する多角的思考能力、経営に関する問題発見能力、経営に関する問題解決能力、経営に関する知の創造能力、経営に関する現場実践能力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 経営学分野の基礎教育を行う「基礎科目」、専門的内容を講義する「専門科目」、学術院の共通の基礎的リテラシーを講義する「学術院共通専門基盤科目」および研究群の共通の基礎的リテラシーを講義する「研究群共通科目」から授業科目を履修する。 − 研究においては「研究科目」の履修を通して、主指導教員を中心に指導が行われる。2 年次からは、他領域も含めた 2 名の副指導教員が指導に加わり、多角的な視点から支援する。 − 修士論文については、概要（研究計画）発表、中間発表、予備審査を経て論文審査委員会が構成され、論文審査および最終発表と最終試験が実施される。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	社会人大学院であるためビジネスに根差した問題意識を持つことはもちろんのこと、研究として行う以上は学術的なアプローチに対する関心や知識も重要になる。また、研究を計画し遂行する過程では、自ら文献等調査の上、考察し解を導く積極的な姿勢が求められる。年齢も経歴も異なる多様な学生が集まるため、担当業務や専門領域を超えて幅広い関心を持つことが大切である。
入学者選抜方針	以下を評価し、総合的に判定する。 − 研究計画書により：問題意識、研究のアプローチ、専門的知識、研究の有用性・実現可能性および独創性、文章表現能力 − 小論文試験により：ビジネスや社会の諸問題に対する関心の広さと理解の深さ、論理的思考能力、文章表現能力 − 口述試験により：研究計画書の理解度、専門的知識、学習や研究への意欲、考えを表現する能力

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	学会発表旅費補助、英文校正費補助、財務データベースを用意することで学生の意欲向上に努めている。
学生同士の交流機会	グループワークを取り入れた授業や、学生の研究発表に対して学生同士で意見交換を行う授業、学生からの積極的な意見を募る学生研究発表会、複数の学生が合同で研究指導を受ける機会を設けることで、学生同士の交流を促している。
教員との交流機会	学生から学位プログラムの教育全般についてアンケートで意見を聴取し、その結果を踏まえて学生と対話する機会を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

［知識・能力］
学位プログラム教育会議において、学生の学修状況に照らし合わせて、ディプロマ・ポリシーに係る 10 項目の知識・能力の評価の観点について点検を行っている。
［研究指導と論文審査］
学位プログラム教育会議において、在学生の発表会ステージ進捗状況と修了率を確認し、研究指導と論文審査に関する問題の発見と改善の検討を行っている。
［単位］
各専任教員が、担当科目の到達度評価分布を検証することで、到達度評価分布の偏りと、科目の到達目標と教授内容・方法の整合性を確認している。また個々の検証結果は学位プログラム教育会議において共有し、教育活動の改善に資するものとしている。
［カリキュラムと学生支援］
カリキュラム・マップの確認、在学生に対するアンケート、修了後 2 年経過した修了生へのアンケート、企業等関係者への意見聴取、そして学生の外国語論文件数の確認といった情報をもとに、学位プログラム教育会議において、カリキュラムの構成や学生支援活動の改善を行っている。
［FD］
FD 担当教員が、年度始めに FD 実施計画を立て、組織の教育課題の改善を目的とした活動を行っている。

法学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Law

■ 博士（法学）
■ Doctor of Philosophy in Law

人材養成目的 / Program Educational Objectives

高度専門職業人の養成・再教育に対する社会的要請に応え、企業や社会が直面する新たな類型の法的諸問題について、総合的かつ高度な判断能力を持ち適切な解決策を提示できる高度専門職業人、及び、その経験を有効に活用し得る研究者の養成を目的とする。

養成する人材像	現代社会において生じる多様かつ複雑な諸問題を、企業・官公庁・専門職事務所等における職務経験を基に、法学的専門知識と法的思考方法によって解決し、かつ、法律学や法律実務の発展を牽引する高度専門職業人を養成する。
修了後の進路	在学中に修得した知見を礎として、企業・官庁・専門職事務所等における法務等様々な部門におけるジェネラリストまたはスペシャリストとして活躍する者の外、大学等の高等教育機関の教員として研究を行う者が想定される。また、在学中や修了後に転職を経験する者や、起業する者も想定される。

法学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（法学）
Doctoral Program in Law / Doctor of Philosophy in Law

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（法学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	企業法特別研究Ⅰ～Ⅸ、博士論文中間報告、博士論文作成、学会発表等
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	現代株式会社法、民事法上級演習Ⅰ・Ⅱ、知的財産法による情報財保護、博士論文中間報告、博士論文作成、学会発表等
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	企業ノウハウと従業員、知的財産法の現代的課題、現代社会保障法、民事法特別研究 Ⅰ～Ⅲ、博士論文中間報告、博士論文作成、学会発表等
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	企業法特別研究Ⅰ～Ⅸ、博士論文中間報告、博士論文作成、学会発表等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
			外国会社法、国際租税計画Ⅰ・Ⅱ、国際取引と国際私法、米国民事訴訟法、ドイツ民事訴訟法、アメリカ知的財産法、博士論文中間報告、博士論文作成、学会発表等
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	博士論文では、原則として、少なくとも１か国の外国法に関する比較法研究が必要である。そのため、外国語文献を読みこなし、外国法の調査研究を行って博士論文を作成することになり、研究指導でもこれらを指導することになる。また、講義・演習でも外国文献講読等を通じて、比較法研究のための基礎的素養の習得を図る。
知識・能力 **知識・能力**	6. 高度な専門知識、方法論、分析力：研究課題を設定し、論理と客観的証拠に基づいた先端的かつ独創的な研究を遂行するための高度で専門的な知識、方法論、分析力	①研究課題を設定して、論理と客観的証拠に基づいた先端的かつ独創的な研究を遂行できるか ②研究課題を設定して、先端的かつ独創的な研究を遂行するために必要な専門知識、基本的な研究の方法論及び分析能力を体得しているか	企業法特別研究Ⅰ～Ⅸ、博士論文中間報告、博士論文作成、学会発表等
	7. 文献・判例等の調査・分析を通して新たな知を創造する能力：人間や社会における諸問題を多角的・重層的・総合的に捉え、新たな知を創造する能力	①文献・判例等の適切な調査・分析を行って、人間や社会における諸問題を多角的・総合的に捉えることができるか ②文献・判例等の調査分析を基に、新たな知を創造することができるか	米国民事訴訟法、ドイツ民事訴訟法、博士論文中間報告、博士論文作成、学会発表等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	8. 専門分野に関する深い理解と学識：専門分野に関する深い理解と学識に基づいて、現代が直面する諸問題の解決と社会の持続的な発展に貢献しようとする実践的な能力	①専門分野に関する深い理解と学識を基に、現代が直面する諸問題の解決に対する実践的な能力を体得しているか ②社会の持続的な発展に貢献しようとする実践的な能力を体得しているか	外国会社法、国際租税計画Ⅰ・Ⅱ、現代株式会社法、現代知的財産法、市場経済と独占禁止法、比較労働法の基礎、博士論文中間報告、博士論文作成、学会発表等
	9. 専門分野の隣接領域に関する幅広い基礎的知識：専門分野の隣接領域に関する幅広い基礎的知識に基づいて、現代が直面する諸問題の解決と社会の持続的な発展に貢献しようとする実践的な能力	①専門分野のみならず隣接領域に関する幅広い基礎的知識を基に、現代が直面する諸問題の解決に対する実践的な能力を体得しているか ②社会の持続的な発展に貢献しようとする実践的な能力を体得しているか	企業ノウハウと従業員、電子社会と法、知的財産法による情報財保護、博士論文中間報告、博士論文作成、学会発表等
	10. 論文執筆等を通して次世代に知を伝承できる能力：論文執筆等を通して高度な学術的成果を国内外の専門家に的確に伝達し、次世代に知を伝承できる能力	①論文執筆を中心として高度な学術的成果を国内外の専門家に的確に伝達し、次世代に知を伝承できる能力を体得しているか	企業法特別研究Ⅰ～Ⅸ、博士論文中間報告、博士論文作成、学会発表等

学修成果の評価に関する方針	学修成果の到達度については、「達成度評価表」を用いた達成度評価をもとに、次の３つの審査機会において、学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認して評価する。第一に、２年次に実施する全研究指導教員による博士論文中間報告会において、学修状況の中間審査と指導を行う。第二に、３年次に実施する全研究指導教員による博士論文中間報告会において、学修状況の中間審査と指導を行う。第三に、複数教員による予備審査において、最終達成度審査を行う。
学位論文に関する評価の基準	学位論文の評価項目 1. テーマについて、少なくとも１つの主要な国との比較法的手法を用いた研究、または、実証研究・実態調査・歴史研究・経済学的手法を用いた研究が行われていること 2. 文献・資料を組織的に収集・調査し、批判的に分析されていること 3. テーマに関連する専門的知識を有していること 4. テーマについて、高いオリジナリティを有していること審査委員の体制・審査方法 学位論文の審査は、主査１名および副査４名以上の審査委員の合議で行う。副査には、本学位プログラムの専任教員以外の者を１名以上含まなければならない。少なくとも１回以上の公開審査会を開催しなければならない。上記の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験又は学力の確認を経た上で、博士論文として合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

上述した学位授与の方針等（DP）の能力を養うために、企業法特別研究ⅠからⅨを設置するほか、外国法文献購読を主たる内容とする科目あるいは外国法科目を多数開講する。

また、関連する学位プログラムの科目の聴講・履修等を認める。とりわけ、法学学位プログラム（博士前期課程）の科目である租税法研究、労働判例法研究、商事法研究など、修了者・単位取得満期退学者や一般実務家などが参加する科目の履修を認める。

さらに、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するための研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目を開講するほか、必要に応じて、経営学学位プログラム（D）担当教員の協力を得るなどして、オリジナリティのある博士論文の執筆を支援する。

教育課程の編成方針	共通専門科目および専門科目を開講する。なお、専門科目は、法学学位プログラムにおける４つの教育研究分野である「企業のグローバル化」、「企業組織と金融」、「情報テクノロジーと企業」、「社会・経済法」のそれぞれに対応して、様々な研究テーマに関連した科目である。具体的には、次のような科目を開講する。 – 共通専門科目：企業法特別研究Ⅰ～Ⅸ – 専門科目（企業のグローバル化分野）：外国会社法、国際租税計画Ⅱ、国際租税計画Ⅳ、米国民事訴訟法、ドイツ民事訴訟法、国際取引と国際私法、外国資本市場法 – 専門科目（企業組織と金融分野）：現代株式会社法、国際会社法、比較金融法、現代契約法、民事法上級演習Ⅰ・Ⅱ、民事法特別研究Ⅰ～Ⅲ – 専門科目（情報テクノロジーと企業分野）：知的財産法による情報財保護、電子社会と法、現代知的財産法、企業ノウハウと従業員、欧米知的財産法、アメリカ知的財産法、比較知的財産法、知的財産法の現代的課題、外国知的財産法

法学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（法学）
Doctoral Program in Law / Doctor of Philosophy in Law

教育課程の編成方針	– 専門科目（社会・経済法分野）：市場経済と独占禁止法、比較労働法の基礎Ⅰ・Ⅱ、現代社会保障法
学修の方法 特色的な教育	– 博士論文執筆に必要な専門科目群を、指導教員の指導・助言のもと、履修する。 – 法学分野の博士として必要となる広範な専門的知識や能力を、履修者の興味・関心に基づいて履修する。 – 研究指導の面では、研究計画、中間発表（2 年次と 3 年次に各 1 回）、予備審査、最終試験というステージを踏むことによって、研究活動を計画的に遂行できるようにする。テーマによっては、複数教員による指導体制を通して、多角的な思考能力を身につける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	企業や社会が直面する新たな類型の法的諸問題について、総合的かつ高度な判断能力と健全な批判精神を持ち適切な解決策を提示できる高度専門職業人、及び、その経験を有効に活用し得る研究者となる人材を求める。
入学者選抜方針	以下を評価し、それぞれに対応する能力評価を踏まえて総合的に判定する。 – 研究計画書、論文審査（修士論文又はそれに相当する学術論文）：研究課題設定能力、計画策定能力、専門知識及び論理的思考等の能力、実務経験に基づく法的紛争の解決能力。 – 筆記試験（外国語、専門科目（法学））：外国語で書かれた法学に関連する文章の大意を比較的短い時間で把握する能力。法学についての専門的知識及び論述能力。なお、法曹資格者（裁判官、検察官、弁護士のいずれかの実務経験を有する者）は免除とする。 – 口述試験：研究意欲や専門知識に関する能力、コミュニケーション能力

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	外国法との比較研究が求められる研究活動やレポート執筆の支援のために、アメリカ法を中心とする外国文献や外国裁判例のリサーチ方法に関する「英米法文献学ワークショップ」を開設している。このワークショップはオンデマンドで学修できるようにしている。
学生同士の交流機会	在学生であればいつでも利用可能な博士研究室と法情報室があり、学生同士での討議や情報交換の場として利用できる。また、研究会形式の授業には修了生も参加しており、修了生から在学生への研究上の助言や学修に関する情報提供が行われている。さらに、年に一度開催されるホームカミングデーにおける在学生と修了生との対話会は、同窓生としてのつながりを強めるとともに、年齢・性別・社会的地位を問わない異業種交流の機会として活用されている。
教員との交流機会	少人数による演習形式や複数教員による研究会形式の授業を実施し、指導教員以外の教員とも討議し、あるいは、研究上の助言を得られる機会が提供されている。また、専攻する法領域ごとに共同の研究報告会を開催し、副指導教員からも助言・指導を受けることができる。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

- 学修成果の評価結果及び修了生を対象とするアンケートに基づき、在学中に修得した知識や法解釈の技能などが修了後に活かされているかを確認して、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
- 学生による個々の授業に関する評価アンケート及び学位プログラム全体に関するアンケートの結果を点検し、これをもとに適正な授業運営のための FD を実施することで、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

経営学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Business Administration

■ 博士（経営学）
■ Doctor of Philosophy in Business Administration

人材養成目的 / Program Educational Objectives

高度専門職業人の養成・再教育に対する社会的要請に応え、企業や社会が直面する新たな類型の問題について、経営学における高度な専門知識と客観的な経営データ分析能力に基づく総合的かつ高度な判断能力を持ち、適切な解決策を提示できる高度専門職業人、及びその経験を有効に活用し得る国際性を備えた研究者を養成する。

養成する人材像	博士（経営学）の学位に相応しい専門知識を有する人材を育成する。加えて、課題発見能力、概念構成能力をはじめとする論理的思考能力や課題解決のための発想力および十分な議論が可能なコミュニケーション能力を具備する人材
修了後の進路	多種多様な業界、職種をバックグランドとする現役の社会人が対象であり、在学中に修得した知見を礎として、企業・官庁・団体における経営管理、研究開発等様々な部門におけるジェネラリストまたはスペシャリストとして活躍する者の外、大学等の高等教育機関の教員として研究を行う者、あるいは、在学中や修了後に転職を指向する者や、起業する者など

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（経営学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	ビジネスマネジメント特別演習、ビジネスマネジメント講究、専門科目、博士論文作成、研究計画発表・中間発表・ドラフト発表・予備審査・最終発表、学会発表等
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	ビジネスマネジメント特別演習、ビジネスマネジメント講究、専門科目、研究計画発表・中間発表・ドラフト発表・予備審査・最終発表、学会発表等
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	ビジネスマネジメント特別演習、ビジネスマネジメント講究、専門科目、研究計画発表・中間発表・ドラフト発表・予備審査・最終発表、学会発表等
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	ビジネスマネジメント特別演習、ビジネスマネジメント講究、専門科目、学会での質問、セミナーでの質問等
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、専門科目、ビジネスマネジメント輪講での外国語文献・国際学術論文輪講、ビジネスマネジメント講究での国際学術論文執筆演習や国際会議発表演習等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 経営に関する研究遂行能力：経営学の高度な専門知識を習得し、高度専門職業人として経営学的観点と客観的な定性分析・定量分析に基づく研究を遂行できる能力	①重要な課題に対して、専門知識に基づいて長期的な研究計画を立てることができるか ②研究計画を自立して的確に実行することができるか	ビジネスマネジメント特別演習、ビジネスマネジメント講究、専門科目、研究計画発表、ドラフト発表、学会発表等
	7. 経営に関するエビデンスベース分析能力：問題分析に際して経営学分野に含まれる多面的な観点と高度な専門知識に基づく客観的な定性的・定量的データを用いた分析が行える能力	①重要な課題に対して、客観的事実を収集することができるか ②収集した客観的事実をもとに分析が行えるか	ビジネスマネジメント特別演習、ビジネスマネジメント講究、専門科目、中間発表、ドラフト発表、予備審査、最終発表、学会発表等
	8. 経営に関する課題解決能力：問題解決に際して経営学分野に含まれる多面的な方策と高度な専門知識を組み合わせた経営分析モデルを構築し解を提示できる能力	①定量的あるいは定性的な分析手法の理論を理解し、適切に適用できるか ②得られた結果を解釈し、自らの言葉で表現し、他と議論することができるか	ビジネスマネジメント特別演習、ビジネスマネジメント講究、専門科目、中間発表、ドラフト発表、予備審査、最終発表、学会発表等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	9. 経営に関する知の伝達能力：学術・実務いずれの場においても経営学の高度な専門知識と研究成果を的確に伝達し発展させる能力	①専門知識の本質を論理的に説明することができるか ②専門知識の本質を他と共有することができるか	ビジネスマネジメント特別演習、ビジネスマネジメント講究、専門科目、サーベイ発表、学会発表等
	10. 経営に関する知の伝承能力：自らの知見や経営学の高度な専門知識、研究成果を受け継ぎ発展させ得る後進を育てられる能力	①専門知識の本質を理解することができるか ②専門知識を運用し、研究に反映できるか	ビジネスマネジメント特別演習、ビジネスマネジメント講究、専門科目、研究計画発表、ドラフト発表、学会発表等
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価シート」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 ディプロマ・ポリシーに係る 10 項目の知識・能力について、研究計画発表時、課程 2 年次の終了時、そしてドラフト発表時に、それぞれの評価の観点に基づいた達成度評価を行う。		
学位論文に関する評価の基準	主査 1 名および副査 4 名以上（論文審査委員会の設置母体となる組織の専任教員以外を 1 名以上含む）の論文審査委員会の合議で行う。 次の評価項目 1. 研究課題の意義、 2. 内外の先行研究の包括的な理解と把握、 3. 研究方法の厳密な提示とその妥当性、 4. 論証方法や結論の妥当性と意義、 5. 論文の形式・体裁、 上記の評価項目を内容として含む学位申請論文を、学位論文としての水準の観点から、論文審査ならびに最終試験において評価し、合否の判定を行う。		

経営学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（経営学）
Doctoral Program in Business Administration / Doctor of Philosophy in Business Administration

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

経営学分野に関するより高度で専門的な知識及び能力を修得させるとともに、当該専攻分野に関連する幅広い基礎的素養、ビジネスおよび人文社会における広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を涵養するように適切に配慮して、理論と実践のいずれか一方に偏ることない体系的なカリキュラムを提供する。特に、ビジネス科学をめぐる現代的な課題への理解を深める機会を積極的に設ける。また、社会人のための夜間大学院として、平日の夜間及び土曜日を基本とした開講時間帯の中に科目を合理的に配置するなど、効率的で実効的な教育課程を編成する。

教育課程の編成方針	経営学において一般的にコア領域とされる経営戦略・経営組織、マーケティング、会計、ファイナンスを中心に据えつつ、現代の経営を高度化する上で重要となる計量分析に代表される数理科学やシステム科学、情報学関連領域の講義科目を配置するとともに、特別研究や講究等を介して、ディプロマ・ポリシーに示した能力を育成する。研究面では、研究計画、サーベイ論文、中間論文、ドラフト、予備審査、最終試験からなる 6 ステージ制によるマイルストーンを用意することで、計画的な研究活動を支援する。複数教員による指導体制を通して、多角的な思考能力を身につける。 －「経営戦略総論」等の専門科目群により、研究遂行能力、エビデンスベース分析能力や課題解決能力を身につける。 －「ビジネスマネジメント特別演習」等の研究科目群により、研究遂行能力、エビデンスベース分析能課題解決能力に加え、知の伝達能力や知の伝承能力を身につける。 － 学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目から 1 単位を履修することを推奨する。 － 研究指導により、研究遂行能力、エビデンスベース分析能力、課題解決能力に加え、知の伝達能力や知の伝承能力を身につける。
学修の方法 特色的な教育	－ 博士論文研究の推進に必要な専門科目群を、指導教員の指導・助言のもと、履修する。 － 経営学分野の博士として必要となる広範な専門的知識や能力を、履修者の興味・関心に基づいて履修する。 － 研究指導の面では、研究計画、サーベイ論文、中間論文、ドラフト、予備審査、最終試験からなる 6 ステージ制によるマイルストーンを用意することで、計画的な研究活動を支援する。複数教員による指導体制を通して、多角的な思考能力を身につける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	社会人としてビジネスにおける問題意識に根ざした博士論文研究を実践する上で、現代の経営学分野の先進的な学術上のアプローチに強い関心があり専門的な知識・能力を有する人材を求める。加えて、研究を計画し遂行する過程では、自ら調べたり考えたりする積極的な姿勢を有し、担当業務や専門領域を超えて幅広い関心を持つ人材を求める。

入学者選抜方針	以下を評価し、総合的に判定する。 – 提出論文と研究計画書：研究目的、研究方法の妥当性、研究の有用性・新規性ならびに文章表現能力 – 外国語試験（TOEIC で代替）：英語でのコミュニケーション能力 – 面接試験：プレゼンテーション能力、研究意欲やディスカッション能力

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	学会発表旅費補助、英文校正費補助、財務データベースを用意することで、学生の意欲向上に努めている。
学生同士の交流機会	グループワークを取り入れた授業や、学生の研究発表に対して学生同士で意見交換を行う授業、学生からの積極的な意見を募る学生研究発表会、複数の学生が合同で研究指導を受ける機会を設けることで、学生同士の交流を促している。
教員との交流機会	学生から学位プログラムの教育全般についてアンケートで意見を聴取し、その結果を踏まえて学生と教員が対話する機会を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

［知識・能力］
学位プログラム教育会議において、学生の学修状況に照らし合わせて、ディプロマ・ポリシーに係る 10 項目の知識・能力の評価の観点について点検を行っている。
［研究指導と論文審査］
学位プログラム教育会議において、在学生の発表会ステージ進捗状況と修了率を確認し、研究指導と論文審査に関する問題の発見と改善の検討を行っている。
［単位］
各専任教員が、担当科目の到達度評価分布を検証することで、到達度評価分布の偏りと、科目の到達目標と教授内容・方法の整合性を確認している。また個々の検証結果は学位プログラム教育会議において共有し、教育活動の改善に資するものとしている。
［カリキュラムと学生支援］
カリキュラム・マップの確認、在学生に対するアンケート、修了後 2 年経過した修了生へのアンケート、企業等関係者への意見聴取、そして学生の外国語論文件数の確認といった情報をもとに、学位プログラム教育会議において、カリキュラムの構成や学生支援活動の改善を行っている。
［FD］
FD 担当教員が、年度始めに FD 実施計画を立て、組織の教育課題の改善を目的とした活動を行っている。

法曹専攻（専門職学位課程）
Law School Program

■ 法務博士（専門職）
■ Juris Doctor

人材養成目的 / Program Educational Objectives

以下の 4 つをすべて満たす法曹を養成する。
- 社会人として既に獲得した知識・経験・技能を法曹としての実務の中に活用できる法曹
- 豊かな人間性と感性を備え、法曹として高い倫理観を備える法曹
- 専門的な法知識を具体的な紛争解決に応用する能力、および、既存の考え方を批判し、新たな問題を柔軟に解決できる能力を備えた法曹
- 先端的な法分野について十分に理解し、社会の発展に貢献できる法曹

養成する人材像	具体的には、主として以下（各人のバックグラウンドや目標によりいずれか）の法曹を養成するが、いずれにおいても社会人の有する知識・経験・技能の活用を図る。 - 一般市民が、一般民事・刑事、家事紛争、不法行為、消費者問題等の法的紛争を解決するために、容易にアクセスできる人材 - 国または地方自治体の政策立案に際して高度の専門知識を活用できる人材 - 企業法務担当者などが、グローバルビジネス、社会保障法、知的財産法等の最先端の法分野に関する高度の専門知識を活用できる人材 - 社会経験に裏打ちされた人間性豊かな人材
修了後の進路	修了後、司法試験に合格した者は 1 年間の司法修習を経て弁護士、検察官、裁判官といった一般法曹実務家の道に進み、合格しなかった者は従前から所属する組織にとどまる等して、法科大学院での学修の成果を社会において活用する。

法曹専攻（専門職学位課程）　／　法務博士（専門職）
Law School Program / Juris Doctor

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する専門職学位課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、法務博士（専門職）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. リーガルマインド：実務法曹として、具体的事案について法的問題点を的確に把握し、問題を解決する能力	①基本法の基礎的・体系的知識と法的思考能力があるか ②基本法の法律問題について応用的・典型的法知識と総合的な解釈能力があるか ③実定法とは異なる法に対する理解があるか。	実定法基礎科目、実定法発展科目、基礎法学・隣接科目、共通到達度確認試験
	2. 使命自覚、倫理観養成、実務処理・解決：法的な紛争事案を実務的に処理、解決するための高度な職業意識と専門的な能力	①法曹に必要な基礎的スキルを修得しているか ②訴訟実務に関する具体的問題を通じて訴訟の全体像を理解しているか ③生の事件や模擬裁判を通じて、訴訟実務を体験しているか。	法務基礎科目、法務展開科目、法務臨床科目
	3. 最先端問題対応：社会の変遷に伴って現れる先端的な法律問題にも適切に対応し得る能力	先端的・応用的法分野についての専門知識を修得しているか。	展開・先端科目

※法曹専攻は専門職大学院であり、5年毎に分野別認証評価を受審していることから、分野別認証評価で示してきた内容を踏まえてこれまでのコンピテンス（ディプロマ・ポリシーに掲げる知識・能力）を維持している。

学修成果の評価に関する方針	司法試験科目においては筆記試験によって起案（文章作成）能力の有無、その他の科目においては主としてレポートによる法曹としての感性・倫理観や先端的な法分野についての法的知識・応用能力の有無を判断する。起案（文章作成）能力の有無は、特定の事例における問題発見能力、条文の解釈能力、解決規範の作成能力、法的三段論法による答案の構成能力などによって判断される。

法曹専攻（専門職学位課程）　／　法務博士（専門職）
Law School Program / Juris Doctor

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

有職社会人学生が日常において現実に割くことのできる極めて限定的な学習時間内において法学の体系的知識を効果的に獲得するため、特に体系的知識が要求される法律基本科目群について、三段階の科目体系を採用し、体系的・反復的教育を通じ、法曹としての実務に必要な専門的な法知識、思考力、分析力、表現力等の修得を完結させることを目指している。

教育課程の編成方針	社会人としての実務経験等を有する者に対し、司法試験に合格して法曹実務家となった場合はもちろん、そうでない場合にも多様なリーガル・サービスを提供することができるように教育課程を編成している。 － 法律基本科目群では、広く法学的な素養、いわゆるリーガルマインドを身につける。 － 法律実務基礎科目群では、具体的な紛争事案を素材として法的な問題を実務的に処理し、解決に導くための手法を身につける。 － 基礎法学・隣接科目群では、実定法とは異なる視点から法に対する理解の視野を広げる。 － 展開・先端科目群では、実社会の最先端で生じている法的な問題にも対応することができる実力を身につける。
学修の方法 特色的な教育	－法学未修者（3 年間修了予定）を対象とした「法学未修者コース」と、法学既修者（2 年間修了予定）を対象とした「法学既修者コース」を併設する。 －働きながら法曹資格の取得を目指す社会人のニーズに合わせて、「長期履修制度」を用意している。 法学未修者の場合、勤務等の都合により標準修業年限の 3 年間では修了が困難と見込まれる際に、この制度を利用することで 4 年間での長期履修を認めている。なお、法学既修者は 3 年間の長期履修となる。 － 入学まで本格的に法学を学んだことのない純粋未修者のため、基礎ゼミ等の導入教育にも力を入れている。 － ＩＣＴ（情報通信技術）を通じ、社会人学生が教室の外（出張先等）からでも授業を受講できる仕組作りに取り組んでいる。 － 実務法曹として活動するためには、紛争当事者との会話を通じて当該事案のどこに法的な問題が存するかを的確に把握し、その問題に対処する方針を定め、そこから実際の交渉に入り、問題を解決に導くという姿勢が求められる。そこで、こうした能力を修得しているか否かを判定するため、基本的に対話形式を採っている授業の中での応答を重視する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	社会人としての実務経験等を有する者であって、法的な問題を発見し、理論的に分析する能力を獲得することによって、将来、すでに獲得した知識・経験・技能と法的な知識・技能とを結びつけて、リーガル・サービスを提供しようと希望する人材を求める。

入学者選抜方針	【法学未修者】 ①1 次試験：筆記試験 筆記試験の点数により合格者を決定している。なお、筆記試験は、読解力、論理的思考力、分析力、論述能力を適確に評価できる問題を出題している。 ②2 次試験：口述試験及び書面審査（1 次試験合格者のみ対象） 個別面接を実施し、法曹になるための資質、高い志、熱意があるか等を評価する。その上で、口述試験の評価と出願の提出書類に記載された、大学学部等での成績、顕著な語学資格、各種資格、志願者の社会人経験と本学・法曹志望理由との関係などを総合評価して合否（最終合格者）を決定している。 【法学既修者】 1 次試験（筆記試験）として法律科目論文試験を実施し、必要とされる法学の基礎的な学識を有する者と認められるか否かを判定する。筆記試験（法律科目論文試験）の点数により 1 次試験の合格者を決定する。この 1 次試験の合格者に対し 2 次試験（口述試験及び書面審査）を課し、最終合格者を決定することは法学未修者と同様である。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	法曹専攻で学ぶ夜間社会人学生、とりわけ法学未修者の学修上の制約条件を克服するためのきめ細かい支援活動を行うこと、並びに学生が法実務家と身近に触れ合う機会をより多く提供することを通じ、法実務感覚の涵養並びに法実務家を志す者としての目標の再確認及び意識啓発を促すことを目的として、若手・中堅を中心とした弁護士が担当するチューターゼミを正課授業外で開講している。チューターゼミでは、条文の読み方など法内容の理解に資する解説のほか、文章作成能力向上のために学生の起案の添削などがなされている。また、適宜、チューターによる個別の学習相談が実施され、成績向上のために何が不足しているのか、仕事との両立をいかに進めるか等についてのアドバイスが受けられる体制となっている。
学生同士の交流機会	学生同士の交流を促進するために、適宜学年ごとないしは学年横断型のランチミーティングや司法試験報告会を実施している。こうした機会を通じて、自主ゼミグループが形成されるように支援している。
教員との交流機会	各学生に 1 名の担当教員を割り当て、学修相談等を受け付けている。また、ランチミーティングの際に教員に質問をすることも可能である。各教員はオフィスアワーを設定しているが、それ以外の時間にも随時、質問や学修相談を受け付けている。オフィスアワーは「履修ガイド」により学生に周知されている。教員との交流機会が希薄となりがちなオンデマンド科目においても、任意参加の質問会を開催する等により交流は可能である。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育の質向上のために、FD 企画運営委員会の主導のもと年に 2 回、教員による相互の授業参観を行い、専任教員全員が出席する FD 会議において議論を行っている。また、FD 会議においては未修 1 年次の共通到達度確認試験の結果を分析することで、憲法・民法・刑法の授業科目の成果を検証している。以上の活動が適切になされていることは、自己点検評価委員会が人文社会ビジネス科学学術院法曹専攻における自己点検評価に関する申合せ（内規）に基づいて実施する自己点検評価において検証される。

このほか、千葉大学・金沢大学・九州大学との間で合同の FD 会議を実施し、その結果を参加教員が専任教員全員に共有することを通じて教育方法の改善を図っている。

以上に掲げた教育の質保証と改善の方策が適切なものであることは、令和 6 年度に受審した独立行政法人大学改革支援・学位授与機構による認証評価においても確認されている。

国際経営プロフェッショナル専攻（専門職学位課程）
MBA Program in International Business

■ 国際経営修士（専門職）
■ Master of International Business Administration

人材養成目的 / Program Educational Objectives

「高度専門職業人」として、国際社会や文化の多様性を理解し、変化するビジネス環境に適合した適切な行動を導くことができる知識・技能・資質をもった経営専門職、特に、経営に関するコア力量を持つビジネスマネジャー、国際対応力量に秀でたカントリーマネジャー、応用情報技能に秀でたプロジェクトマネジャーの３タイプのグローバルリーダーを養成する。

養成する人材像	多様性の高い学習環境において、文化的感受性と創発的なコミュニケーションができる英語力を持ち、主体的な問題意識や自律的な行動様式を備え、将来、営利又は非営利グローバル組織の国際本部および現地事業所、あるいは地域横断的なプロジェクトにおいて、中枢マネジメント人材として活躍するキャリアを目指す社会人有職者。
修了後の進路	本専攻は、有職社会人を対象とした大学院であるため、基本的には従前の勤務先に継続して就業する。但し、毎年、一定数の修了生は、学修内容を通して、それまでの職業経験を活かしつつ、キャリアチェンジをしている。また、チェンジパターンとして、異業種、日本企業から外資系企業、国内企業から海外企業への地域間移動、同級生との起業、あるいは民間企業から国連など国際公務員への転身等、多様性がある。さらに、専門職大学院の学習内容をさらに発展させるため、大学院博士課程に進学する修了生もいる。

国際経営プロフェッショナル専攻（専門職学位課程）　／　国際経営修士（専門職）
MBA Program in International Business / Master of International Business Administration

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する専門職学位課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、国際経営修士（専門職）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 多様性受容力：異なる視点を検討し、異なる意見を傾聴することにより、様々な可能性を考慮に入れる力	①異なる文化、異なる業界・職務など他領域に属する者の考えや視点を理解することができるか ②様々な異なる考え方を受け入れ、課題解決の可能性を広げることができるか	Cross Cultural Management I 等
	2. 達成力：不確実性が高く、解決が困難な状況において、課題達成の手段を探索する力	①不確実性が高い状況においても、適切に課題を認識し、解決策を見出せるか ②困難な状況においても、主体的・能動的に行動し、目標を達成することができるか	Business Project、学会発表等
	3. 先見力：解決すべき課題に影響を与える現在および、将来の諸要因を見通す力	①将来に影響を与える様々な要因を的確に把握、理解、整理することができるか ②長期的な視野に立ち、社会への価値創造のために新たなアイデアを着想する力があるか	Business Model Innovation 等
	4. 情報収集力：意思決定に必要な質的に高い情報を効率的に収集する力	①正しい意思決定に必要となる情報とは何かを特定することができるか ②多様な手段を活用し、必要な情報を効果効率的に収集することができるか	Data Analysis II 等
	5. 創造力：既存の概念を組み合わせたり、新たな発想にもとづいて課題に取り組む力	①新たな知識、価値の創造の重要性を理解し、そのための方法論に関する理解があるか ②社会に対して、新な知の創造を通じた貢献を行うことが期待できるか	Technology Management 等、学会発表、賞の受賞等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 分析思考力：課題解決に適合的な情報と手法を選択して分析する力	①論理的思考法を理解し、活用することができるか ②論理的思考力を社会における実課題に適用し、解決していける能力があるか	Finance Ⅰ、Marketing Ⅰ等、MBA スクール間のコンペティション参加等
	7. 戦略立案力：複数の評価尺度の検討から、高い成果が期待される施策を作成する力	①多面的な視座・視点を持ち、社会・企業等が抱える課題を適切に把握することができるか ②社会・企業等のあるべき姿を設定し、そこに至るための道筋を描くことができるか	Business Strategy Ⅰ等、MBA スクール間のコンペティション参加等
	8. 組織マネジメント力：与えられた経営資源の配分やメンバーの意識に配慮し、統括部門の目標を達成する力	①社会に存在する様々な組織形態ならびにその本質を理解する能力があるか ②組織行動・管理、リーダーシップについて理解し、組織を適切に運営していく能力があるか	Organizational Management Ⅰ等、海外での活動等
	9. コミュニケーション力：意思疎通における曖昧な状況を排除するとともに、関係者から支持や理解を得る力	①様々な業務を円滑に進めるために必要となる適切なコミュニケーションを行えるか ②相互理解を促進し、目標達成に向けた主体的・能動的なコミュニケーションができるか	Cross Cultural Management II 等、留学生との交流等
	10. 危機管理力：客観的にリスク発生の確度およびその影響を把握し、発生時に適切な対処ができる力	①社会・企業等に潜む潜在的リスク要因を把握する力を有しているか ②危機発生時に、適切な状況把握、指示、行動を行うことができるか	Operations Management Ⅰ等

※国際経営プロフェッショナル専攻は専門職大学院であり、5 年毎に分野別認証評価を受審していることから、分野別認証評価で示してきた内容を踏まえてこれまでのコンピテンス（ディプロマ・ポリシーに掲げる知識・能力）を維持している。

学修成果の評価に関する方針	すべての学生は Final Report の提出および Final Presentation を行い、教員による質疑応答を経た後、専攻の全専任教員が参加する判定会議において、その成果を総合的に評価される。この最終審査結果に加え、在学期間中の GPA が 3.0 以上であることを修了要件としており、これらにより、学位授与の方針に基づく学修成果の達成状況を総合的かつ客観的に確認・評価している。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本専攻の教育目標を実現し、国際競争力のある専門職大学院にふさわしい教育プログラムを提供するため、以下のような 3 点の具体的な教育方針を設定する。

第 1 の教育方針は、新たな経営環境に関連して設置する 5 教育領域（「事業戦略領域」、「組織経営領域」、「国際対応領域」、「応用情報領域」「共通領域」）間の教育が、互いに関連し、補完することを通じて、変化の激しい国際経営において迅速かつ最適な意思決定ができる技能が身についていることである。

第 2 の教育方針は、5 教育領域が層の厚い科目を開講することにより、国際経営プロフェッショナルを目指す修了生の多様なキャリアプランのニーズへの対応を可能にし、自律的にキャリアプランを立て、その実現に向けて行動する精神をもっていることである。

第 3 の教育方針は、国内外における実習科目を通して、国際経営プロフェッショナルとしての実践的な職務遂行能力を養成し、国際的な経営環境における職務遂行能力が身についているとともに、その能力を本社あるいは、現地法人において効果的に発揮できることである。

教育課程の編成方針	本専攻において、国際競争力のある専門職大学院にふさわしい教育プログラムを提供するため、言語、講義、実習に関して 4 つの特色ある教育課程を編成する。 – 必修科目、選択科目、演習科目、及びビジネスプロジェクトを設定し、ディプロマ・ポリシーで示した 10 のコンピテンスを身につける。 – 国際ビジネスの各領域で活躍する実務家、専門的研究者による、理論と実践が統合された講義を提供することにより、学生の多様性受容力、先見力やコミュニケーション力を身につける。 – 最終学期に行われるビジネスプロジェクトでは、①企業内プロジェクト、②日本インターンシップ、③海外インターンシップ、④リサーチレポート、⑤ビジネスプラン開発の中から個人のニーズに合ったプログラムの選択が可能であり、講義科目で習得した知識や技能を実践に反映するための統合プロジェクトが行われる。ビジネスプロジェクトにより、学生の創造力、戦略立案力、達成力、情報収集力や分析思考力などを身につける。 – 学生の約 4 分の 1 は外国人学生であり、また海外の大学で学位を取得した日本人学生も在籍することから、多様性と国際性の高い学習環境の中で、創発的な教育メソッド（討論、グループワーク、シミュレーション）に基づく学習が行われる。また、社会人学生でも参加しやすい 1 週間程度の短期海外研修プログラムも開講している。これらの教育により、学生の組織マネジメント力、コミュニケーション力や危機管理力などを身につける。
学修の方法 特色的な教育	– 学生が必修科目、選択科目及び演習科目を、複数の指導教員のアドバイスのもと、履修する。 – 学生が講義・演習で学習した理論をより実践的に応用し、現場で応用可能な知識や技能に発展するため、演習の段階より、「Preliminary Report/Presentation」、「Interim Report/Presentation」のマイルストーンを用意することで計画的な学習をサポートするとともに、実習として修了学期の 1 学期間のビジネスプロジェクトを、複数の指導教員のアドバイスのもと、実施する。

国際経営プロフェッショナル専攻（専門職学位課程）　／　国際経営修士（専門職）
MBA Program in International Business / Master of International Business Administration

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	①多様性の高い学習環境において、文化的感受性と創発的なコミュニケーションができる英語力を持ち、②主体的な問題意識や自律的な行動様式を備え、③将来、営利又は非営利グローバル組織の国際本部及び現地事業所、あるいは地域横断的なプロジェクトにおいて、中枢マネジメント人材として活躍するキャリアを目指す社会人有職者（もしくは職務経験者）を求める。
入学者選抜方針	出願書類の審査と英語能力の審査及び口述試験に基づいて受験者を総合的に評価する。 – 第 1 段階選抜：出願書類の審査と英語能力の審査 出願書類には所定様式の願書、ビジネスプロジェクトの実習計画等を記したエッセイ、卒業大学における成績証明書、推薦状等が含まれる。 – 第 2 段階選抜：口述試験（第 1 段階選抜の合格者のみ） 口述試験では、受験者の職業経験、出願動機、分析・コミュニケーション技能、将来へのビジョン等を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	国際経営プロフェッショナル専攻では、以下のような多様な学習支援の機会を提供している。 1. 新入生に対する Preliminary Advisor、およびビジネスプロジェクトにおける Chief Advisor・Second Advisor の割り当て 2. 学会参加、海外渡航、英文校正に関する経済的支援 3. 1 年次の春学期に基礎経済学および基礎数学のリフレッシャーコースを提供
学生同士の交流機会	大半の科目において学期を通じてのグループ課題やプレゼンテーションが課されており、学生同士の協働的な学修を促進している。また、在学中に履修が必須となる 5 つのセミナー科目は主としてグループ形式で行われ、ディスカッションを通じて学生間の交流を活性化している。
教員との交流機会	各学生に Chief Advisor および Second Advisor を配置し、少人数体制のセミナー活動を通じて、低い教員対学生比率を生かした教員との継続的な交流機会を確保している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

1. 国際経営プロフェッショナル専攻は、専門職大学院として定期的に ABEST21 の認証を受けている。認証の際に得られるフィードバックは教育の質向上に役立てられ、Education Committee を中心に教員が改善策を実施している。
2. Education Committee は毎年、各科目の学生アンケート結果を検討し、月例の教員会議で議論するためのカリキュラム改善の方針を策定している。
3. 国際経営プロフェッショナル専攻では、教員一人ひとりの教育力向上に向けた取り組みを支援している。

理工情報生命学術院
Graduate School of Science and Technology

数理物質科学研究群
Degree Programs in Pure and Applied Sciences

数学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Mathematics	数学学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Mathematics
物理学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Physics	物理学学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Physics
化学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Chemistry	化学学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Chemistry
応用理工学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Engineering Sciences	応用理工学学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Engineering Sciences
電子・物理工学サブプログラム Subprogram in Applied Physics	電子・物理工学サブプログラム Subprogram in Applied Physics
物性・分子工学サブプログラム Subprogram in Materials Science	物性・分子工学サブプログラム Subprogram in Materials Science
	NIMS連係物質・材料工学サブプログラム Subprogram in Materials Science and Engineering
国際マテリアルズイノベーション学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Materials Innovation	国際マテリアルズイノベーション学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Materials Innovation

システム情報工学研究群
Degree Programs in Systems and Information Engineering

社会工学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Policy and Planning Sciences	社会工学学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Policy and Planning Sciences
サービス工学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Service Engineering	リスク・レジリエンス工学学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Risk and Resilience Engineering
リスク・レジリエンス工学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Risk and Resilience Engineering	情報理工学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Computer Science
情報理工学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Computer Science	知能機能システム学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Intelligent and Mechanical Interaction Systems
知能機能システム学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Intelligent and Mechanical Interaction Systems	構造エネルギー工学学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Engineering Mechanics and Energy
構造エネルギー工学学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Engineering Mechanics and Energy	ライフイノベーション（生物情報）学位プログラム（博士後期課程） Doctoral Program in Life Science Innovation (Bioinformatics)
ライフイノベーション（生物情報）学位プログラム（博士前期課程） Master's Program in Life Science Innovation (Bioinformatics)	エンパワーメント情報学プログラム（一貫制博士課程） Doctoral Program in Empowerment Informatics

生命地球科学研究群
Degree Programs in Life and Earth Sciences

生物学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Biology

生物資源科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Agro-Bioresources Science and Technology

地球科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Geosciences

環境科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Environmental Sciences

山岳科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Mountain Studies

ライフイノベーション（食料革新）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation (Food Innovation)

ライフイノベーション（環境制御）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation (Environmental Management)

ライフイノベーション（生体分子材料）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation (Biomolecular Engineering)

生物学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Biology

農学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Agricultural Sciences

NARO連係先端農業技術科学サブプログラム
Subprogram in Advanced Agricultural Technology and Science cooperated with NARO

生命農学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life and Agricultural Sciences

生命産業科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Bioindustrial Sciences

地球科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Geosciences

環境学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Environmental Studies

ライフイノベーション（食料革新）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation (Food Innovation)

ライフイノベーション（環境制御）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation (Environmental Management)

ライフイノベーション（生体分子材料）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation (Biomolecular Engineering)

国際連携持続環境科学専攻（博士前期課程）
Joint Master's Degree Program in Sustainability and Environmental Sciences

理工情報生命学術院の人材養成目的

総合科学技術を支える理学・工学・農学の基礎と応用、システム・情報・社会が融合・複合する学際新領域において、人間を取り巻く複雑で困難な問題を発見・解決できる独創的かつ行動的な研究者、大学教員、高度専門職業人を養成する。

理工情報生命学術院コンピテンス

修士	1.研究力	理工情報生命分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力
	2.専門知識	理工情報生命分野における高度な専門知識と運用能力
	3.倫理観	理工情報生命分野の基礎的研究能力を有する人材又は高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識
博士	1.研究力	理工情報生命分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力
	2.専門知識	理工情報生命分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力
	3.倫理観	理工情報生命分野の研究者又は高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、及び専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識

数理物質科学研究群
Degree Programs in Pure and Applied Sciences

人材養成目的

数理物質科学の基礎とその科学技術への応用に関し、高度な教育研究指導によって、現代社会の急激な変化に的確に対応できる基礎から応用まで幅広い視野と優れた研究能力を備えた研究者、大学教員、高度専門職業人を養成する。

	研究群コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
修士	1. 研究力：数理物質科学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①専門分野において意義のある研究課題/研究目標を設定できるか ②研究目標/研究課題を実現するための研究計画を立案することができるか ③研究計画を遂行するために必要な情報・技術・専門知識を得ることできるか、またそれらの専門知識を総合的に活用することができるか	数理物質科学コロキュウム、専門基礎科目、専門科目、特別研究、修士論文作成、学会発表
	2. 専門知識：数理物質科学分野における高度な専門知識と運用能力	①数理物質科学分野において、高度の専門知識を有しているか ②専門知識を実際の研究場面で適用・運用・活用する能力を有するか	専門基礎科目、専門科目、特別研究、修士論文作成、学会発表、講習会参加
	3. 倫理観：数理物質科学分野の基礎的研究能力を有する人材又は高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	①一般的な倫理観に加えて、研究を遂行するに必要な倫理観を持っているか ②倫理問題発生の可能性がある事柄を理解し、それに対処するための知識を有するか	専門基礎科目、専門科目、特別研究、インターンシップ、プレゼンテーション・科学英語技法、大学院共通科目、修士論文作成、学会発表、研究倫理e-learning（eAPRIN）、技能講習参加、INFOSS情報倫理
博士	1. 研究力：数理物質科学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①専門分野において重要で意義のある研究課題 / 研究目標を設定できるか ②研究目標/研究課題を実現するための研究計画を立案することができるか ③研究計画を遂行するために必要な情報・技術・専門知識を得ることできるか、またそれらの高度の知識を総合的に活用することができるか	特論、特別研究、セミナー、博士論文作成、学会発表、国際会議発表、学術論文発表
	2. 専門知識：数理物質科学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①数理物質科学分野において、高度で先端的な専門知識を有しているか ②専門知識を実際の研究場面で適用・運用・活用する高い能力を有するか	特論、特別研究、セミナー、博士論文作成、学会発表、国際会議発表
	3. 倫理観：数理物質科学分野の研究者又は高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、及び専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①一般的な倫理観に加えて、研究を遂行するに必要な高い倫理観を持っているか ②倫理問題発生の可能性がある事柄を理解し、それに対処するための高度の知識を有するか	特別研究、セミナー、インターンシップ、大学院共通科目、博士論文作成、学会発表、研究倫理 e-learning（eAPRIN）、技能講習参加、INFOSS情報倫理

システム情報工学研究群
Degree Programs in Systems and Information Engineering

人材養成目的

システム・情報・社会が融合・複合する学際領域において、グローバルな俯瞰力と多様で柔軟な思考力を持ち、現実世界の複雑で困難な問題を解決する独創力・発想力を備えてリーダーシップを発揮する研究者、大学教員、高度専門職業人を養成する。

	研究群コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
修士	1. 研究力：システム情報工学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①システム情報工学分野の研究課題を適切に設定できるか ②システム情報工学分野の研究を行うための基本的な技術はあるか ③システム情報工学分野の研究を遂行して有意義な成果を上げることができるか	特別研究、特別演習、学会発表、修士論文
	2. 専門知識：システム情報工学分野における高度な専門知識と運用能力	①システム情報工学分野の基礎的な専門知識をもつか ②システム情報工学の特定の分野における高度な専門知識を修得し、その運用能力を備えているか	研究群共通科目、学位プログラム専門科目、学会発表、修士論文
	3. 倫理観：工学分野の基礎的研究能力を有する人材又は高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	①研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか	特別研究、特別演習、INFOSS情報倫理、eAPRIN
博士	1. 研究力：システム情報工学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①システム情報工学分野の先端的な研究課題を適切に設定でき、その研究を行うための高度な技術はあるか ②システム情報工学分野の先端的研究を遂行して独創的な成果を上げることができるか	特別研究、特別演習、特許、学会発表等
	2. 専門知識：システム情報工学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①システム情報工学分野の専門知識を幅広くもつか ②システム情報工学の特定の分野における先端的かつ高度な専門知識を修得し、それを研究や問題解決のために運用できるか	特別研究、特別演習、学位プログラム専門科目、学会発表等、博士論文
	3. 倫理観：工学分野の研究者又は高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、及び専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①研究者倫理および技術者倫理について十分に理解し遵守しているか ②研究の際に必要な研究者倫理および技術者倫理に関する手続きについて十分に理解しているか。	特別研究、特別演習、一部の専門科目、INFOSS情報倫理、CITI Japan

生命地球科学研究群
Degree Programs in Life and Earth Sciences

人材養成目的

生命科学と地球科学、農学、環境科学に関する専門分野の深い知識と研究能力、研究技術を持ち、一方で、生命、人間、これらを取り巻く基盤である地球、自然、社会を幅広い視点でとらえ、独創的な発想で研究課題を発掘し、課題を解決する能力を持つ研究者、大学教員、高度専門職業人を養成する。

	研究群コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
修士	1. 研究力：生命地球科学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	生命地球科学分野において修得した専門知識を用いて新たな研究課題を設定できるか。またその研究計画を遂行するための基礎的な知識を身につけたか。	生命地球科学分野における前期課程の特別研究、学会発表
	2. 専門知識：生命地球科学分野における高度な専門知識と運用能力	生命地球科学分野における高度な専門知識を修得できたか。またその専門知識を運用する能力があるか。	生命地球科学分野における基礎科目のほとんど、研究会参加
	3. 倫理観：生命地球科学分野の基礎的研究能力を有する人材又は高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	生命地球科学分野における基礎的研究能力を有する人材、または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識を修得したか。	研究倫理、研究コンプライアンス（生命科学）、INFOSS受講など
博士	1. 研究力：生命地球科学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	生命地球科学分野において修得した最新の専門知識を用いて先端的な研究課題を設定できるか。またその研究計画を自立して遂行するための基礎的な知識を身につけたか。	生命地球科学分野における後期課程の特別研究、講究、論文公表
	2. 専門知識：生命地球科学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	生命地球科学分野における先端的かつ高度な専門知識を修得できたか。またその専門知識を運用する能力があるか。	生命地球科学分野における専門科目のほとんど、講究、学会参加
	3. 倫理観：生命地球科学分野の研究者又は高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、及び専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	生命地球科学分野における基礎的研究能力を有する人材、または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識を修得したか。	応用倫理、講究、INFOSS受講など

数学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Mathematics

■ 修士（理学）
■ Master of Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

純粋数学から応用数学まで幅広い視野を持った研究者、教育界を担うべく数学力を十分に備えた教育指導者、社会の第一線で数理科学能力を存分に発揮できる高度専門職業人等を養成する。

養成する人材像	研究者となるために必要な幅広い視野を持ち、教育界を担うに必要な数学力を十分に備え、社会の第一線で高度専門職業人として活躍できるだけの数理科学能力を備えた人材。
修了後の進路	後期課程進学、中学校・高等学校数学科教員、情報・通信企業、金融・保険業、製造業におけるソフトウェア開発担当、システムエンジニア等の研究開発職等 詳しくは下記 URL 参照 https://program.math.tsukuba.ac.jp/graduate/gakuip-policy/aftergrad/

数学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（理学）
Master's Program in Mathematics / Master of Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	数理物質科学コロキュウム等の基礎科目、数学フロンティア等の専門基礎科目、特別研究等の専門科目、修士論文作成・学会発表
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	研究科修了生によるオムニバス講座、数理物質科学コロキュウム等の基礎科目、数学インターンシップⅠ・II 等の専門基礎科目、特別研究等の専門科目、総合研究交流会等への参加
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	プレゼンテーション・科学英語技法等の基礎科目、大学院共通科目（情報伝達力・コミュニケーション力養成科目群）、数学インターンシップⅠ・II 等の専門基礎科目、特別研究等の専門科目、学会・異分野交流会等での発表、TA 経験
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	数学インターンシップⅠ・II、数学セミナー等の専門基礎科目、特別研究、TA 経験・学会やセミナー等での討論
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、プレゼンテーション科学英語技法・Science in Japan Ⅰ・II 等の基礎科目、数学セミナー等の専門基礎科目、特別研究、国内外での活動経験・留学生との交流・国際会議発表・英語による論文執筆など
	6. 数理的分析力：数学に関する幅広い視野を持ち、諸課題の本質を捉え数理的に分析する能力	①様々な研究領域における諸問題についての基本的理解をもっているか ②数学の基礎的知識を十分に運用できるか	専門基礎科目、数学フロンティア、専門科目、特別研究、修士論文作成、総合研究交流会発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 数理的研究遂行能力：高度な知識に基づいて研究課題を設定し、研究を遂行する能力	①専門分野についての高度な知識に基づき、問題を発見することができるか ②課題に対して計画的に研究を遂行することができるか	数学インターンシップI・II、特別研究、修士論文作成、学会発表
	8. 数理的課題解決能力：幅広い視野を持ち、高度な数学的知識を活用し課題に対応する能力	①高度な数学的知識を活用しようとしているか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力があるか	専門基礎科目、数学フロンティア、専門科目、特別研究、学会発表、総合交流会発表
	9. 数理的探究力：数理的視点から諸課題に取り組み、背後にある数学的原理を探求する能力	①諸課題の本質となる数学的原理を探求し、新たな知見を得ようとしているか ②数学を通じた社会貢献活動に対する意識があるか	数理物質科学コロキュウム、数学フロンティア、専門基礎科目、専門科目、特別研究、学会発表、総合交流会発表
	10. 数理的表現力：専門分野の異なる人と討議できるコミュニケーション能力	①コミュニケーションを円滑に行うために必要な語学力を持つか ②専門の異なる人との間で討議するための説明力及び理解力を持つか	数学インターンシップI・II、数学フロンティア、専門科目、特別研究、国際会議発表、共同研究、TA 経験
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 修士（理学）の学位にふさわしい能力を有しているかを、修了時の修士論文発表会に加えて、二年次の春学期が終わる頃に分野別の中間発表会により評価する。 – 修士（理学）の学位にふさわしい学術的研究成果を挙げているかを論文審査により評価する。 学位論文審査と最終試験において、これらの項目について達成度の最終審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	【審査委員の体制】 論文審査委員会の構成 主査 1 名及び副査 2 名以上より構成される。 【審査方法】 論文審査委員会では、論文審査及び最終試験を行う。 【審査項目】 1. 研究主題が明確に示され、学術的な意義を有すること 2. 研究主題に関連する先行研究が適切に提示されていること 3. 結論に至る論旨が論理的かつ明瞭に記述されていること 4. 学位論文の論旨・結論は、新規性あるいは独創性をもつ、当該分野における新しい知見をもたらす内容を含む学術的貢献、または独自の考察を含んだ総説であること 5. 学位論文として適切な文章表現・論文構成であること 【学位論文が満たすべき水準】 上記の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

代数学・幾何学・解析学・情報数学の 4 分野からなる教育・研究指導体制で多様な人材教育を行う。

各分野における研究力・専門知識・倫理観とともに、数理物質科学における幅広い基礎的素養、理工情報生命にわたる自然科学および工学における広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	豊富な基礎科目授業、丁寧な専門科目授業および学生一人一人の能力に応じた専門分野でのセミナーにより、現代数学の基礎から理学の諸分野への応用、現代数学の最先端に至るまで幅広い視野を持てる様な教育を行う。教員のアドバイスの下で研究を行うことにより、修士（理学）の学位にふさわしい基礎力、応用力を養い、理学を通じて社会で活躍できる人材を養成する。 学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、研究群共通科目から数理物質コロキュウム（1 単位）を必修科目とするとともに、この他の研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目の履修を推奨する。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制とする。 – 代数学概論 I、代数学概論 II、代数学特論 I、代数学 I、代数学 II により数理的問題の代数的な構造を抽出する能力を身に付ける。 – 幾何学概論 I、幾何学概論 II、幾何学特論 I、幾何学 I、幾何学 II、により数理的問題を幾何学的に把握する能力を身につける。 – 解析学概論 I、解析学概論 II、解析学特論 I、解析学 I、解析学 II、確率解析により数理的問題の解析学的分析を行う能力を身に付ける。 – 情報数学概論 I、情報数学概論 II、情報数学特論 I、数理論理学、数理統計学、計算機数学により数理的問題を情報数理的側面から考察する能力を身に付ける。

教育課程の編成方針	– 数学インターンシップ I、数学インターンシップ II、数学フロンティアにより自らの将来のキャリアパス形成の基礎的な力を身に付ける。 – 当該分野の特別研究 IA、特別研究 IB、特別研究 IIA、特別研究 IIB により修士（理学）の学位にふさわしい基礎力、応用力を養いプレゼンテーション・コミュニケーション能力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	– 各学年が終了する段階で、研究計画や研究成果の発表会を実施し、教育の充実・研究の一層の促進を図るきめ細やかな指導を行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	大学卒業レベルの数学の知識の修得者で、更に高度な数学を習得することに強い関心と意欲のある人、現代数学の研究を行う意欲を持ち、将来、数学の研究経験や研究能力を活かし「研究者」・「教育者」・「高度専門職業人」を目指す人を求める。
入学者選抜方針	数学に関する大学卒業程度の内容の理解と、数学の研究を遂行する上で必要な英語能力を有する者を選抜する。推薦入試では、受験生が数学の諸分野でこれまで行ってきた活動や、入学後の抱負・研究計画を重視して選抜を行う。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 修士論文に向けた研究指導にあたる大学院科目「特別研究」は、ほぼ毎週の頻度で学生が研究室でプレゼンテーションを行う形態で実施されている。この中で、プレゼンテーション指導を行うほか、研究の進度や時間管理についても、密に指導を行っている。 – 二年次の春学期終了ごろに、修士論文に向けた研究に関する中間発表会を行い、指導教員以外の教員からも、プレゼンテーションに関する指導を受ける機会としている。 – 修士論文発表会の直前に、「修士論文プレ発表会」と題して、海外の若手研究者も招いて研究集会形式での発表会を行うことで、英語でのプレゼンテーションを行う機会としている。 – 副指導教員を定めることにより、学修に関する様々な相談を指導教員以外にも相談できる体制をとっている。
学生同士の交流機会	– 二年次の春学期終了ごろに、修士論文に向けた研究に関する中間発表会を行い、学生がお互いの研究を理解し、交流する場としている。 – 数学域として行っている談話会の一部を、大学院科目「数学フロンティア」としている。談話会には多くの学生が参加しており、開始前にはティータイムを設けることで、学生同士の交流の機会になっている。 –「数理の交差点」や「RCMS サロン」という、談話会に類似のイベントも開催して、学生同士の交流の機会としている。 – 学類生向けの「数学手習い塾」という学修相談の場に、大学院生をチューターとして配置することで、学類生との交流や大学院生同士の交流の場としている。

教員との交流機会	– 数学域として行っている談話会の一部を、大学院科目「数学フロンティア」としている。談話会には多くの教員が参加しており、開始前にはティータイムを設けることで、学生と教員の交流の機会になっている。 –「数理の交差点」や「RCMS サロン」という、談話会に類似のイベントも開催して、学生と教員の交流の機会としている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 修士（理学）の学位論文に向けた研究について、修了時の修士論文発表会に加えて、二年次の春学期が終わる頃に分野別の中間発表会を行うこととしている。
– 授業評価アンケートおよび修了時アンケートを実施し、学生からのフィードバックを講義の改善に役立てている。
– 中間時と修了時の二度にわたって、コンピテンスの達成度評価を、学生が自己評価を行い、指導教員がそれを確認する形で行っている。
– 学位判定会議において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

物理学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Physics

■ 修士（理学）
■ Master of Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

自然科学の基礎である物理学について専門的な知識と幅広い視野を持ち、物理学関連分野における研究を行う基礎的能力と高度な専門的職業を担うための柔軟な応用力を持つ人材を養成する。

養成する人材像	物理学の素養だけでなく関連学問分野の知識を身に着け、解明・解決すべき問題に科学的に立ち向かう突破力を身に着け、後期課程において自立した研究を推進できる人材。宇宙史教育領域では、素粒子・原子核・宇宙の物理学諸分野を宇宙の進化の過程と捉える視点に基づき、国際的な研究拠点をまたいだ教育システムにより、高い専門性とともにこれら諸分野を横断する能力を持ち、宇宙史に関して国際的に活躍できる人材。 加速器科学領域では、高エネルギー加速器研究機構の B ファクトリー、J-PARC、放射光科学研究施設などを用いた研究および次世代加速器の開発を行い、将来、加速器分野で活躍できる人材。 放射光物質科学領域では、放射光施設等（例えば、PF、J-PARC、SPring-8、さらに、海外の施設）を活用した研究を行い、物質科学の知識・技術に加えて放射光等の知識・技術の両方を修得し、放射光施設、民間企業で物質開発を推進できる人材。
修了後の進路	後期課程への進学、または、公的研究・教育機関、産業界における研究開発職。近年の就職先としては、日本電気・ソニー・キャノンなどが挙げられる。

物理学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（理学）
Master's Program in Physics / Master of Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	研究指導科目、他研究室と共同の演習科目、インターンシップ科目、修士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	研究指導科目、演習科目、他研究室と共同の演習科目、インターンシップ科目、達成度自己点検、外部コンテスト等への参加など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	研究指導科目、演習科目、研究発表に関する科目、学会発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	研究指導科目、演習科目、他研究室と共同の演習科目、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、語学力養成科目、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 活用力：自然の中に普遍的な構造を見出すことで物理学的な知を人類社会の発展に活用する基礎的能力	①物理学分野の幅広い知識を踏まえて、物理学と社会との関係を考察できるか ②自分の専門分野の知識を用いて社会に寄与する例を想像できるか	大学院共通科目、基礎科目、セミナー科目、専門基礎科目
	7. 物理力：最先端の学識を有し、国内外の研究者と議論・共同研究を行う能力	①物理学分野の基礎的な専門知識を持ち、物理現象に対して論理的な思考で取り組めるか ②自身の研究分野の専門知識を習得し、研究を推進できるか	専門基礎科目、専門科目、特別研究、修士論文、学会発表
	8. 発信力：自身の研究について、専門分野以外の人々にもわかりやすく情報を発信する能力	①自身の研究の学術的な重要性を説明できるか ②物理学に特有の概念を非専門家に説明できるか	大学院共通科目、基礎科目、セミナー科目、専門基礎科目、学会発表、インターンシップ
	9. 論理力：科学者としての使命感、論理性を有すること	①自然界の真理を探究することに情熱を持つか ②研究に対する取り組みが、科学的かつ真摯なものであるか	特別研究、修士論文
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価している。達成度評価の段階・方法を以下に示す。達成度評価は、1 年次修了時（中間審査）、及び 2 年次修了時に実施し、その結果を指導教員等が確認を行っている。知識・能力の評価は、修士論文の提出及び修士論文発表会での口頭発表により行っている。		

学位論文に関する評価の基準	【審査委員の体制】 論文審査委員会の構成 主査 1 名及び副査 2 名以上より構成される。 【審査方法】 論文審査委員会では、論文審査及び最終試験を行う。最終試験では、専門分野外の人々に対する研究内容のプレゼンテーション能力も確認する。 【審査項目】 1. 研究内容に関連する先行研究の把握と理解、およびその文献・資料に対する適切な評価と引用 2. 研究の背景・目的・方法の明確な提示 3. 得られた結果の再現性、あるいは第三者による検証可能性 4. 明快な論文構成と結論に至るまでの論旨の適切な展開 【学位論文が満たすべき水準】 研究倫理を遵守のうえ、上記の評価項目のすべてを満たすこと。以上と併せて、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

素粒子理論、素粒子実験、宇宙理論、宇宙観測、原子核理論、原子核実験、物性理論、物性実験、生命物理学、プラズマ物理の専門に分かれた計 10 の専門分野、および、宇宙史教育、加速器科学、放射光物質科学の計 3 つの領域から構成される。

各専門分野における研究力・専門知識・倫理観とともに、数理物質科学における幅広い基礎的素養、理工情報生命にわたる自然科学および工学における広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、研究群共通科目から数理物質コロキュウム（1 単位）を必修科目とするとともに、この他の研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目の履修を推奨する。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制とする。 – 学生は各専門分野に所属し、高い専門性を身につける。 – 素粒子、原子核、宇宙物理学分野では、国際的な研究拠点をまたいだ教育を行う宇宙史教育領域を開講している。物性物理学分野では、高輝度光科学研究センターやフォトンファクトリーの協力により、物質科学探究の強力な手法となる放射光利用の知識と技術を修得できる放射光物質科学領域を開講している。また、高エネルギー加速器研究機構との教育研究連携により、加速器科学領域を開講している。 – 物理学は自然科学の基礎であるため、学内の他の学位プログラムや研究センター（計算科学研究センター、宇宙史研究センター、エネルギー物質科学研究センター、プラズマ研究センター、等）、さらには、国内外の主要研究機関と研究・教育上深い関係にある。この特性を生かして、連携大学院（量子科学技術研究開発機構、産業技術総合研究所、物質・材料研究機構、理化学研究所、NTT、NEC 等）、つくば共鳴教育プログラムをはじめとする様々な教育プログラムを用意している。

教育課程の編成方針	− 各分野の特別研究を履修することにより、幅広い視野を身につけるとともに、独自の研究テーマの深化を通じて、研究者として基礎力・応用力・胆力を養う。 − 大学院共通科目の情報伝達力・コミュニケーション力養成科目群の科目を履修し、実践的な能力を身につける。
学修の方法 特色的な教育	− 専門基礎科目で幅広く物理の基礎を学び、専門科目で各分野における高度な専門知識を習得する。 − 特に広範な現代物理学の最新のトピックスを学ぶ「物理学セミナー」を必修科目として開講している。 − 各分野のセミナー・特別研究を履修することにより、所属する分野の最先端の研究の現場において教員による密接な指導の下に専門領域の学識を深めると共に、学位論文のための研究を行う。 − 専門の教科以外に、大学院共通科目や研究科共通科目によってコミュニケーション力などを習得する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	物理学とその関連科学分野及び英語能力において学士レベルの素養を有するとともに、物理学の諸分野で先端の研究を行うことに強い関心と意欲を持ち、学界や産業界で研究者を目指す人を求める。
入学者選抜方針	− 筆記試験および口述試験で選抜を行う。 − 一般入試では、物理学及び基礎的な数学に関する大学卒業程度の内容の理解と、物理学の研究を遂行する上で必要な英語の能力を有するものを選抜する。 − 推薦入試では、受験生が物理学の諸分野でこれまで行ってきた活動や入試後の抱負・研究計画を重視して選抜を行う。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	副指導教員制度を実施している。副指導教員により定期的な面談を行い、指導教員とは別な側面から効果的な学修について指導を行っている。
学生同士の交流機会	研究室を超えた大学院生同士の交流促進を目的として、年に 1 回、大学院生間の交流会を実施している。
教員との交流機会	大学院生と教員、特に指導教員以外の教員との交流促進を目的として、年に 1 回、大学院生と教員との交流会を実施している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

カリキュラム委員会を設置し、月に 1 回開催している。また、全教員による教育会議も月に 1 回開催している。カリキュラム委員会と教育会議により、学生の学修成果に関する評価を行うとともに、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施し、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。

化学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Chemistry

■ 修士（理学）
■ Master of Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

化学とは、電子・分子のレベルで物質の構造や反応を解明し、自然界における現象への理解を深めると共に、新物質の創製とそれらの持つ新しい機能の発現について研究を行う学問分野である。本分野で、世界的視野を持って独創性を発揮できる人材の養成を目的としている。特に前期課程では、高度専門職業人として、さまざまな化学に関連する分野における研究の担い手となる人材を養成する。

養成する人材像	化学を通じて世界に貢献するという明確な意思と真摯な態度、社会の発展に寄与する研究で問題解決を図る能力、国際社会で交渉できるコミュニケーション能力と語学力を有する人材。
修了後の進路	博士後期課程への進学、民間企業の研究所や国内の研究機関などの研究開発職等

化学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（理学）
Master's Program in Chemistry / Master of Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	研究指導科目、論文発表に関する科目、修士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	研究指導科目、論文発表に関する科目、修士論文作成、学会発表など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	研究指導科目、論文発表に関する科目、修士論文作成、学会発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	研究指導科目、論文発表に関する科目、修士論文作成、学会発表など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	研究指導科目、論文発表に関する科目、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、国際会議発表、英語論文など
	6. 化学専門知識：物理化学、有機化学、無機・分析化学の理論的・実践的知識を有し、研究の現場で活用する能力	物理化学、有機化学、無機・分析化学の理論的・実践的知識を有し、研究の現場で活用する能力を有しているかどうか	先端分子化学特論、先端無機化学特論、先端有機化学特論

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 論理的思考力と問題解決能力：問題を分析し論理的な思考によって解決を図る能力	問題を分析し論理的な思考によって解決を図る能力を有しているかどうか	化学セミナー、化学特別演習、特別研究
	8. 専門化学英語力：化学研究に関して、英語で発表・質疑応答・論文執筆をする能力	化学研究に関して、英語で発表・質疑応答・論文執筆をする能力を有しているかどうか	化学セミナー、化学特別演習、特別研究
	9. 研究推進能力：研究課題設定能力と長期・短期的な研究計画の策定の能力	研究課題設定と長期・短期的な研究計画の策定の能力を有しているかどうか	化学セミナー、化学特別演習、特別研究
	10. 良質な研究倫理観：研究データの適切な扱いと保存、他の研究者の成果の適切な引用の能力	研究データの適切な扱いと保存を実践しているかどうか．他の研究者の成果の適切な引用を実践しているかどうか	化学セミナー、化学特別演習、特別研究
学修成果の評価に関する方針	− 修士論文提出時に「達成度評価表」に基づく達成度評価によって、ディプロマ・ポリシーに基づくコンピテンスの獲得状況を全研究指導担当教員により確認・評価する。 − 最終年度の修士論文審査会の口頭発表に対し、ディプロマ・ポリシーに掲げたコンピテンスの獲得状況をルーブリックに基づいて、全研究指導担当教員により評価する。 − 研究の進捗状況を把握し適切な支援を行うために、入学 1 年後に達成度評価を行い、指導教員による確認・指導を行ったのちに、全研究指導担当教員により確認・評価する。		

学位論文に関する評価の基準	【審査委員の体制】 主査（指導教員）、及び 2 名の副査からなる論文審査委員会を発足させる。 主査及び副査は、博士号を有し、主査については本学（連携大学院も含む）、副査については本学（連携大学院も含む）又は化学域教授懇談会が認める研究機関に所属する者とする。 【審査方法】 主査、副査は提出された修士論文を査読する。 修士論文審査会を開催し、修士号取得候補者の口頭発表、並びに口頭試問を行い、研究内容に対する理解度と研究達成度を審査する。審査会終了後、論文審査委員による判定会議を開催し、最終的な合否を決定する。 【審査項目】 1. 提出された修士学位論文が、記述、論理展開、図表を含めて完成度が高いこと。 2. 修士学位論文の内容が、化学分野の研究として十分に高いレベルにあること。 3. 修士学位論文に参考文献が適切に引用されていること。 4. 修士論文の研究内容に対する修士号申請者の貢献が十分に認められること。 5. 先行研究を深く理解し、研究主題の学問的位置付けが明確であること。 6. 修士学位論文の内容について深く理解し、プレゼンテーションでは適切に質疑応答を行えること。 【学位論文が満たすべき水準】 1 ～ 5 の項目すべてについて、修士論文として水準に達していると認められるとともに、修士論文審査会における発表と口頭試問において項目 6 を満たし、修士号取得にふさわしい水準に達していると認められるものを合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

化学の基礎を構成する無機・分析化学、物理化学、有機化学の他に、生命科学や工学などとの境界領域化学も含め、4 つの大きな枠組みを設けている。したがって、幅広い化学の分野の研究をテーマとして選択することが可能である。

各分野における研究力・専門知識・倫理観とともに、数理物質科学における幅広い基礎的素養、理工情報生命にわたる自然科学および工学における広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

この専門的研究を通して、様々な化学物質の構造や性質、および化学反応のメカニズムなどを電子・分子レベルで実験的・理論的に解明することを目指して、最先端の研究を行う。これにより、化学物質の基礎から応用に至る化学の概念を学び、化学分野における汎用性の高い実験手法・研究手法を修得することができる。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、研究群共通科目から数理物質コロキュウム（1 単位）を必修科目とするとともに、この他の研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目の履修を推奨する。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制とする。

教育課程の編成方針	– カリキュラムはきめ細かな授業編成となっており、専門基礎科目と専門科目で化学の基礎的・専門的な内容を幅広く身に付けて問題解決を図る能力を培い、大学院共通科目や研究科共通科目によってコミュニケーション能力と語学力を修得する。 – さらに各自の研究分野については、担当指導教員の個別指導のもとで高度な内容を修得する。
学修の方法 特色的な教育	– 化学の基礎を構成する物理化学、無機・分析化学、有機化学の他に、生命科学や工学などとの複合分野も含め、4つの大きな枠組みを設ける。 – 各分野における専門的研究を通して、化学物質の基礎から応用に至る化学の概念を学び、化学分野における汎用性の高い実験手法・研究手法を修得することができる。 – 化学の基礎的・専門的な内容を幅広く身に付けて問題解決能力を培うと共に、コミュニケーション能力と語学力を修得する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	学士課程で培った科学的素養と論理的・合理的思考力および語学力を持ち、問題解決に向けて粘り強く挑戦できる人材を求める。最前線の研究現場において社会に貢献できる実務能力を備えた高度専門職業人の育成を目指しているため、これに向けて積極的に学問・研究に取り組める向学心の高い人を歓迎する。
入学者選抜方針	– 求める人材に鑑みて、入学を希望する多様な人材の中から、研究者や高度専門職業人の候補者として相応しい資質と能力をもつ人を選抜する。 – 選抜にあたっては、公平性と多様性に配慮し、多面的で総合的な選抜方法を実施する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	副指導教員体制および分野（無機・分析化学、物理化学、有機化学）のサポート体制により、研究指導の客観性とさまざまな相談への対応体制を整えている。 自身の専門研究分野以外の講義・演習や、研究発表会、勉強会への参加機会を通し、研究の深化を支援するとともにプレゼンテーション指導、ライティングサポートを行っている。
学生同士の交流機会	所属年次以外の学生が集まる研究発表会、キャリアパス講演会などへの参加機会を通じ、質疑応答の場や自由討論などを通じて、学年 / 組織を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みをつくっている。 舎密会（学位プログラム全体セミナー）を通じ、研究分野や学年を超えた学生同士の交流機会を提供している。
教員との交流機会	舎密会（学位プログラム全体セミナー）を通じ、指導教員 / 副指導教員以外の教員との交流機会を提供している。 大学院生と教員会の懇談会を開催し、指導教員 / 副指導教員以外の教員との交流機会を提供している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

大学院生と教員の懇談会等において、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

応用理工学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Engineering Sciences

■ 修士（工学）
■ Master of Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

物質、材料からデバイス、計測技術に至る多様な工学的分野において、十分な理学的基礎力を備えた上で、多様な現実の問題にしなやかに対応できる、オリジナルの技術を作り上げ、後進を育成できる工学的応用力、適用力を有する高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	物質、材料からデバイス、計測技術に至る多様な工学的分野において、十分な理学的基礎力を養うとともに、複数指導教員体制での多様な価値観での教育、研究活動を通して、高い研究開発能力を有し社会に貢献できる高度専門職業人材。 ＜電子・物理工学サブプログラム＞ 物理学を中心とする自然科学を基礎とした応用物理計測、ナノ工学、電子デバイスの分野において、世界的レベルの研究および技術開発、さらに工学的実践を先導する、高度な専門知識・能力をもつ高度専門職業人材。 ＜物性・分子工学サブプログラム＞ 量子物性、量子理論、材料物性及び物質化学・バイオ工学等の物質工学における専門分野についての深い知識を有し、高度な研究能力を持って社会に貢献できる高度専門職業人材。
修了後の進路	応用物理、エレクトロニクス、計測、物質化学、材料科学を中心とする学問分野および応用分野における、民間企業および公的な研究･開発機関の研究者、技術者、製造業（自動車関連、電器、金属、化学、情報・IT 関連等）、ガス、電力、鉄道輸送などの研究開発職、国家公務員（特許庁など）

応用理工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（工学）
Master's Program in Engineering Sciences / Master of Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	特別研究、基礎科目、大学院セミナー、インターンシップ、修士論文作成、学会発表、論文等執筆、特許
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	特別研究、基礎科目、インターンシップ、TA 経験、達成度自己点検（修士論文中間報告時）
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	特別研究、大学院セミナー、学会発表、他研究室と共同研究、TA 経験、科学・産業イベント等での討議・発表、学術論文作成・発表
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	特別研究、TA 経験、学会発表、インターンシップ参加体験、プロジェクト参加体験
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、語学力養成科目、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、学術論文執筆、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 等得点、国際会議発表、外国人との共同研究、英語論文執筆公表
	6. 工学基礎力：工学分野の高度専門職業人にふさわしい基礎知識と学力	工学分野の世界動向に関心をもち、知識を習得しているか	大学院共通科目、基礎科目、専門基礎科目。インターンシップ、TA 経験、学会発表、論文等執筆発表、各種講習会参加

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 工学分野の理解に欠かせない基礎学力	工学で広く用いられる数理的な知識と能力を備えているか	専門基礎科目、特別研究、インターンシップ、TA 経験、学会、講習会、セミナー参加と発表
	8. 専門知識：工学分野の理解に求められる基礎知識	工学分野の研究動向に関心をもち、専門知識を幅広くもつか	専門科目、特別研究、インターンシップ、学会、講習会、セミナー参加と発表
	9. 倫理観：工学分野の高度職業人に求められる倫理観	研究者倫理および技術者倫理、ヒトを対象とする研究に関する倫理と研究に必要な手続きについて十分理解しているか	数理物質科学コロキュウム、大学院共通科目、基礎科目、専門基礎科目、特別研究、インターンシップ、INFOSS 情報倫理、eAPRIN
	10. 工学分野の問題を実際に解決するために求められる見識と問題解決	工学分野の英語論文等を読んで理解するとともに、研究を遂行して有意義な成果を上げることができるか	専門基礎科目、専門科目、特別研究、インターンシップ、大学院セミナー、学会発表、海外派遣、論文作成・発表

学修成果の評価に関する方針

〈電子・物理工学サブプログラム〉

学修成果の評価は、「達成度評価表（ルーブリック）」により、客観的に確認・評価をすることで行う。修士論文審査後に、以下の要領で口頭試問により最終試験を行う。

- 最終試験で修士論文（特別研究）における研究の目的、方法、進め方について口頭試問を行い、知の活用力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力を有するかどうか確認する。
- 最終試験において外国語による口頭試問を行い、適切な回答ができるかどうか確認する。
- 最終試験において、工学基礎力、基礎学力、専門知識について口頭試問し、適切な回答ができるかどうか評価する。
- 最終試験において研究倫理に関する試問を行い、十分理解しているかどうか確認する。
- 最終試験において工学分野における問題について口頭試問し、適切に回答できるかどうか確認する。

〈物性・分子工学サブプログラム〉

学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。

- 1 年次、2 年次の前期課程セミナーの発表に対して、コンピテンスの獲得状況を主査および複数の教員による評価を行う。
- 1 年次の秋学期末に修士論文の中間報告を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。
- 2 年次末に修士論文の公開発表会および主査、副査 2 名以上で構成される学位論文審査委員会による修士論文の審査を行うとともに、最終試験として最終達成度審査を行う。

学位論文に関する評価の基準	【審査委員の体制】 主査 1 名及び副査 2 名以上より構成される。 【審査方法】 各サブプログラムが定める審査方法に従い、論文審査及び最終試験を行う。 1）電子・物理工学サブプログラム 論文審査委員会では、論文審査および最終試験を行う。 2）物性・分子工学サブプログラム 論文審査委員会では、論文審査及び最終試験により、物質工学のすべての分野の基礎となる学力と知識ならび物質工学のいずれかの分野の専門知識を有し、物質工学のいずれかの分野で特定のテーマに沿って研究を遂行し、一定の成果をおさめることができたかどうかの審査を行う。 【審査項目】 1. 研究課題設定と研究方法の選択が妥当であること。 2. 結果の解釈と、結論に至るまでの論旨展開が妥当かつ明確であること。 3. 研究課題に関する先行研究の把握と理解、それに対する適切な評価と引用がなされていること。 4. 研究倫理が遵守され、得られた結果ならびに結論について、第三者による検証が可能であること。 5. 研究課題成果の学術的な意義が認められること。 【学位論文が満たすべき水準】 上記の評価項目のすべてを満たし、各サブプログラムが定める基準を満たすこと。 1）電子・物理工学サブプログラム 最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。 2）物性・分子工学サブプログラム 筑波大学大学院学則第 3 条の 2 で規定する課程の目的を充足すること。併せて、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

物理学を中心とする自然科学を基礎とした応用物理計測、ナノ工学、電子デバイスの分野、量子物性、量子理論、材料物性及び物質化学・バイオ工学等の物質工学における専門分野について、専門基礎科目、専門科目、研究室のゼミ等、大学院セミナー、研究活動で構成する。

各専門分野における研究力・専門知識・倫理観とともに、数理物質科学における幅広い基礎的素養、理工情報生命にわたる自然科学および工学における広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう､研究群共通科目から数理物質科学コロキュウム（1 単位）を必修科目とするとともに、この他の研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目の履修を推奨する。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制とする。 – 専門基礎科目は、共通科目とサブプログラムごとに科目を編成し、将来にわたり技術分野の基礎となる基幹科目を学類レベルから発展させる。 – 専門科目では、サブプログラムにおいて特定分野の深い専門知識を修得する。

教育課程の編成方針	＜電子・物理工学サブプログラム＞ − 専門科目では、各専門分野で共通して求められる専門的学問分野を学ぶ。各研究室のゼミは他研究室の学生も参加でき、より専門的な内容を学ぶ。 − 大学院セミナーでは、日頃の研究活動に依る成果を発表するが、その中で、論理の構成力、プレゼンテーションスキル、コミュニケーション能力の涵養を図る。 ＜物性・分子工学サブプログラム＞ −「量子物性」、「量子理論」、「材料物性」、「物質化学・バイオ」の 4 分野からなっている。各分野の「特別研究ＩA、ＩB、ⅡA、ⅡB」（合計 12 単位）は必修科目であり、これらの科目では修士論文作成のための各自のテーマの研究活動に加え、サブプログラム所属の学生と教員が参加する「前期課程セミナー」で年 1 回の研究発表が課している。 − これにより、自ら取り組んだ研究テーマの意義、成果、位置づけを理解し、自らの言葉で説明する能力及び自らの言葉で説明できるプレゼンテーション能力ならびにコミュニケーション能力を身に付ける。 − 専門基礎科目及び専門科目の履修により、基礎学力と特定分野の深い専門知識を修得する。 − 他の学位プログラムや他コースの専門科目および大学院共通科目を履修することにより、幅広い視野を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 共通の専門基礎科目である量子力学、統計力学、電磁気学、固体物理学に加え、電子・物理工学サブプログラムでは生物医工学、ナノ物性により、将来にわたり当該分野の基礎となる基幹科目を学類レベルから発展させる。物性・分子工学サブプログラムでは、物質化学、生体関連化学により、「量子物性」、「量子理論」、「材料物性」、「物質化学・バイオ」の当該 4 分野の基礎となる基幹科目を学類レベルから発展させる。 − 専門科目は次のとおり。 ＜電子・物理工学サブプログラム＞ − 専門科目（最先端表面計測科学、ビーム・プラズマ工学、物理計測工学、デバイス工学等）において、各専門分野で共通して求められる専門的な学問分野を学ぶ。 − 当該分野の特別研究ＩA等における研究活動、セミナー発表を通して、高度専門分野の理解と発展に欠かすことのできない基礎能力、当該分野の研究者、高度専門職業人として求められる高い専門的基礎能力、実践的見識と実行力、広い視野、問題解決能力、世界の専門家と討論できるプレゼンテーション能力及びコミュニケーション能力を身に付ける。 ＜物性・分子工学サブプログラム＞ − 専門科目（固体光物性論、物質の対称性と群論、機能材料特論、高分子化学、エネルギー・環境材料、生体材料等）において、当該分野で普遍的に求められる専門知識の獲得を目指す。 − 当該分野の特別研究ＩA等における研究活動、セミナー発表を通して、高い専門的基礎能力・実践力、広範な視野、問題解決能力、情報発信力など高度専門職業人として求められる能力を身に付ける。

応用理工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（工学）
Master's Program in Engineering Sciences / Master of Engineering

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	高度な工学を学ぶ上で必要とされるしっかりした基礎学力、英語力を有するとともに、広範で豊かな好奇心、目的実現のために努力を惜しまない精神力、高い倫理感としっかりした学問的基盤、十分なコミュニケーション能力を有し、当該学問分野を発展させる意欲のある学生を求める。
入学者選抜方針	基礎学力および基礎知識、及びこれらを基にした深い考察力を基本パラメータとし、自律的かつ熱意をもって研究を遂行する意欲と集中力を持つ者を筆記試験、口述試験により選抜する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	〈電子・物理工学サブプログラム〉 – 複数指導教員体制により、研究指導の客観性と多様な相談への対応体制を整えている。 – 修士 1、2 年生必修の大学院セミナーを開講している。そこでは、自身の研究内容を発表し、また他者の発表を聴講することを通して、自身の研究内容を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。 〈物性・分子工学サブプログラム〉 – 副指導教員体制により、研究指導の客観性と多様な相談への対応体制を整えている。 – 学外での研究成果発表会への参加機会を供し、旅費の支援を行っている。自身の研究体制を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。 – 論文執筆、英語でのプレゼンテーション能力向上のための集中講義を開講している。 – 幅広い見識の拡大を目指し、学内外の講師を招き、物質工学域セミナーを開催している。
学生同士の交流機会	〈電子・物理工学サブプログラム〉 – 修士 1、2 年生必修の大学院セミナーを開講している。そこでは、自身の研究内容を発表し、また他者の発表を聴講し、質疑応答を通して、学年／組織を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みを教育課程に組み込んでいる。 – 学類の講義・実験の TA により、学生同士が学び合う機会を継続的に生み出す仕組みを創出している。 – 学術院で開催される学生の集いを通じて、専門を超えた学生同士の交流機会を供している。 〈物性・分子工学サブプログラム〉 – 所属年次以外の成果発表会への参加機会を供し、質疑応答の場などを通じて、学年を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みを教育課程に組み込んでいる。 – TA や留学生に対するチューター制度により、学生同士が学び合う機会を継続的に生み出す仕組みを創出している。 – 学術院や研究センターで開催される学生の集いを通じて、専門を越えた学生同士の交流機会を供している。

教員との交流機会	〈電子・物理工学サブプログラム〉 – 学術院で開催される学生の集いを通じて、専門を超えた学生同士の交流機会を供している。 – 大学院セミナーでは指導教員、副指導教員のほか、他の教員の前でプレゼンテーションを行い、質疑応答することで、指導教員／指導以外の教員との交流機会を供している。 – 年に 1 度、大学院生と教員の懇談会を開催して、学生と教員の交流を促進している。 〈物性・分子工学サブプログラム〉 – 学術院や研究センター等で開催される集いを通じて、専門を越えた教員との交流機会を供している。 – 修士論文発表会等に学位プログラム担当教員全員が参加し意見交換などを通じて指導教員 / 指導以外の教員との交流機会を供している。 – 年に 1 回、教員と学生の懇談会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

〈電子・物理工学サブプログラム〉
– 修士論文審査後に、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
– 講義（専門科目、専門基礎科目等）終了後にアンケートを行い、検証と改善の参考にしている。
– 学務委員を中心にシラバスのチェックが毎年行われており、必要に応じて教員に修正や改善を促すことで質を保証している。

〈物性・分子工学サブプログラム〉
– 修士論文発表会は全教員が参加することで、教育の質を確認する。
– 運営委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

国際マテリアルズイノベーション学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Materials Innovation

■ 修士（工学）
■ Master of Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

自然界を材料科学・工学の見地から深く探求するとともに地球規模の問題を把握し、最先端の材料科学・技術を応用することによって、イノベーション能力を有し国際社会で活躍する人材を、つくば地区の研究機関と強く連携することによって養成する。

養成する人材像	未来型の革新的エネルギー材料やエレクトロニクスにおけるイノベーションを導き、社会の価値の創造に貢献できる人材の育成を目指して、物質・材料に関する、設計、解析、創出するための能力を有し、地球規模の社会的ニーズを把握し、国際社会で英語を駆使して活躍する人材。
修了後の進路	製造業（自動車関連、エレクトロニクス、金属、化学、情報・IT 関連等）、ガス、電力、鉄道輸送などの研究開発職

国際マテリアルズイノベーション学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（工学）
Master's Program in Materials Innovation / Master of Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	Research in MI、インターンシップ、修士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	Research in MI、インターンシップ、TA 経験
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	Research in MI、Open Seminar、Joint Seminar、学会発表、他研究室と共同研究、TA 経験
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	Research in MI、TA 経験
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	Open Seminar、Joint Seminar、大学院共通科目（国際性養成科目群）、語学力養成科目、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、学術論文執筆、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究など
	6. 物質設計能力：量子力学についての基礎を習得し、物質・材料を設計する方法論を身につける	①量子力学研究に必要な基礎知識を習得しているか ②物質・材料を設計する方法論を習得しているか	大学院専門科目、Research in MI、インターンシップ、学会発表、講習会・セミナー参加、技術研修

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 物質機能解析力：放射光物質解析、分光法、走査プローブ顕微鏡、電子顕微鏡などの解析についての基礎を習得し、物質機能を原子・電子レベルで解析する手法を身につける	①放射光物質解析、分光法、走査プローブ顕微鏡、電子顕微鏡などの解析についての基礎を習得しているか ②物質機能を原子・電子レベルで解析する手法を習得しているか	大学院専門科目、Research in MI、インターンシップ、学会発表、講習会・セミナー参加、技術研修
	8. 物質・材料創生力：新規物質の合成および高性能デバイスの構築の基礎および方法論を身につける	①新規物質の合成および高性能デバイスの構築の基礎を習得しているか ②新規物質の合成および高性能デバイスの構築の方法論を習得しているか	大学院専門科目、Research in MI、インターンシップ、学会発表、講習会・セミナー参加、技術研修
	9. 工学基礎力：工学分野の高度専門職業人にふさわしい基礎知識と学力および研究倫理を身に付ける	①応用理工学分野の基礎的な専門知識を備えているか ②応用理工学分野研究の応用展開に必要な幅広い専門知識を習得しているか ③研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか	大学院共通科目、専門基礎科目、論文作成・公表、APRIN e-learning、他倫理講習受講
	10. 英語コミュニケーション能力：英語で研究について積極的に世界中の研究者にアクセスする能力	応用理工学分野の世界的な研究動向に関心を持ち、世界中の研究者と英語によるコミュニケーションをする能力を身に付けているか	Research in MI、Open Seminar、Joint Seminar、英語授業、TOEIC 等英語技能演習、英語による研究発表演習、留学生・国外研究者との交流、TOEIC・TOEFL や IELTS の得点

学修成果の評価に関する方針	最終試験（修士論文発表会）で修士論文（特別研究）における研究の目的、方法、結果と考察について口頭発表を行い、知の活用力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力を（5 段階で）評価する。 また、発表後の口頭試問において、物質設計能力、物質機能解析力、物質・材料創成力、工学基礎力について、適切な回答ができるかどうかを（5 段階で）評価する。 さらに、英語による発表と口頭試問を通じて、国際性および英語コミュニケーション能力が身についたことを確認する。
学位論文に関する評価の基準	【審査委員の体制】 論文審査委員会の構成 主査 1 名および副査 2 名以上より構成される。 【審査方法】 論文審査委員会では、論文審査および最終試験または学力の確認を行う。 【審査項目】 1. 研究課題の設定および研究方法の選択が妥当であること。 2. 研究目的から結論に至るまでの論旨が英語で明確に展開されていること。 3. 研究課題に関する先行研究の把握と理解、それに対する適切な評価と引用がなされていること。 4. 研究倫理が遵守され、得られた結果ならびに結論について、第三者による検証が可能であること。 5. 研究成果の学術的な意義が認められること。 【学位論文が満たすべき水準】 上記の評価項目すべてを満たすこと。最終試験または学力の確認を経た上で合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

教育研究の柱となる領域：エネルギー材料工学、環境材料工学、電子材料工学により構成される。
各専門分野における研究力・専門知識・倫理観とともに、数理物質科学における幅広い基礎的素養、理工情報生命にわたる自然科学および工学における広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育プログラムは全て英語で行い、学問的基礎の充実を図る専門基礎科目と、最先端の学術研究を内容とする専門科目で構成する。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、研究群共通科目から数理物質コロキュウム（1 単位）を必修科目とするとともに、この他の研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目の履修を推奨する。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制とする。 – このような科目設定は、一方では、将来、博士課程の進学し、一流研究者として活躍するに不可欠な基礎概念を習得させ、他方では、企業における研究開発に直結する実践的能力を養うことを念頭に置いている。 – セミナーは自分の研究を紹介するオープンセミナーと研究室間を相互に移動して行う融合セミナーから成り、英語による幅広い討論力を養う。

学修の方法 特色的な教育	– 国際マテリアルズイノベーション特別研究 IA・IB・IIA・IIB（必修科目：各 3 単位）で自らの専門分野の研究に取り組み、修士課程終了時までに基礎的な知識を身に付ける。将来、博士課程へ進むための研究能力の向上を探求し、世界トップレベルの研究成果を挙げるためのポテンシャルを築く。 – オープンセミナー IA・IB・IIA・IIB（必修科目：各 1 単位）で、自分の研究を英語で紹介し、英語で活発にディスカッションをする。英語で発表のレジメを作成する。英語でのコミュニケーション能力を身に付ける。 – Joint Seminar IA・IB・IIA・IIB（選択科目：各 1 単位）で、一学期にわたり、他研究室または海外での研究活動に参加し、自らの研究テーマに関する研究レベルの深化と学際的視野の拡大を図る。所属する研究室とは分野の異なる他研究室のセミナーを聴講することで、多様な研究環境を体験する。そこで学んだことをレポートで報告する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	優れた基礎的な能力と知力があり、研究に意欲的に新たな領域を積極的に開拓し、将来に対して優れた研究者としての大志を抱く人材を求める。英語のみで開講するプログラムであるため十分な英語能力を有することが必須である。
入学者選抜方針	– 募集学生の対象は国内のみならず全世界とする。さまざまなバックグラウンドの応募学生であることを考慮し、出身地域、人種や性別による違いとは関係なく、大学 4 年間における基礎知識と基礎実験における積極性を特に重視し、世界トップレベルの大学院修士課程で必要不可欠な能力を判定し、選抜する。 – 面接試験（オンライン）によって、基礎学力、英語による討論力、論理構成能力を評価し、さらに、修士課程やさらにその後の将来における抱負から、受験者の研究意欲を判断する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	物質・材料分野の国際会議、国際シンポジウム等での発表に際し、旅費や参加費を支援している。また、国際会議、国際シンポジウム等での発表に関して、プレゼンテーション（口頭、ポスター）の指導に加え、質疑応答の練習などを行っている。
学生同士の 交流機会	Open Seminar における研究交流、および全員参加型の修士論文発表会とその後の意見交換会を実施している。
教員との交流機会	他研究室との共同研究を通じた異分野研究の体験、および全員参加型の修士論文発表会とその後の意見交換会を実施している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

中間および修了時に実施する達成度評価および修士論文発表会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

数学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Mathematics

■ 博士（理学）
■ Doctor of Philosophy in Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

純粋数学から応用数学まで幅広い視野を持った国際的に活躍できる研究者や大学教員を育成し、教育界や産業界などの社会的指導者と数学的知識を様々な分野に応用できる高度職業人を養成する。

養成する人材像	純粋数学から応用数学まで幅広い視野を持った国際的に活躍できる研究者、教育界や産業界などの社会的指導者および高度な数学的知識を様々な分野に応用できる人材。
修了後の進路	研究職（大学・高等専門学校教員・企業研究所の研究員）および中・高等学校教員

数学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（理学）
Doctoral Program in Mathematics / Doctor of Philosophy in Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	特別研究、博士論文作成・学会発表
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	数学インターンシップ III・IV、特別研究、異分野・総合研究交流会等への参加
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	大学院共通科目（情報伝達力・コミュニケーション力養成科目群）、数学インターンシップ III・IV、特別研究、学会発・異分野異業種研究交流会等での発表、TA・RA 経験
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	大学院共通科目（キャリアマネジメント科目群）、数学インターンシップ III・IV、特別研究、TA（大学院セミナー）・RA 経験・研究型インターンシップ等参加経験
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	特別研究、国内外での活動経験・国内外共同研究・英語運用能力試験・国際会議発表など
	6. 数理的分析力：（数学に関する）俯瞰的視野を持ち、諸課題の本質を捉え数理的に分析する能力	①様々な研究領域における重要な諸問題についての深い理解をもっているか ②数学の基礎的知識を十分に運用できるか	特別研究、博士論文作成、学会発表、RA 経験

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 数理的研究遂行能力：先端的かつ高度な知識に基づいて研究課題を設定し、自立して研究を遂行する能力	①専門分野についての先端的かつ高度な知識に基づき、自ら問題を発見することができるか ②課題に対して長期的計画を立て、自立して研究を遂行することができるか	特別研究、博士論文作成、学会発表
	8. 数理的課題解決能力：俯瞰的視野を持ち、先端的かつ高度な数学的知識を活用し課題に対応する能力	①先端的かつ高度な数学的知識を活用しようとしているか ②俯瞰的視点から問題を捉え、長期的計画の下、解決する能力があるか	特別研究、博士論文作成、学会発表、異分野交流会発表
	9. 情報発信力：学術論文・学術講演等によって研究成果を社会に発信する能力	①学術論文・学会発表により専門家との研究討議が十分に行えるか ②専門家以外の人々に自身の研究成果を分かりやすく伝えるとともに、数学を通じて社会に貢献しようとしているか	特別研究、数学インターンシップ III・IV、総合交流会、異分野交流会発表
	10. 数理的表現力：国内外の諸分野の専門家と討議する能力	①海外の研究者とも円滑なコミュニケーションができる能力を持つか ②諸分野の専門家との間で専門的討議を行うための説明力及び理解力を持つか	特別研究、数学インターンシップ III・IV、国際会議発表、共同研究、TA・RA経験
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 博士（理学）にふさわしい能力を有しているかを、修了時の学位論文公聴会に加えて、予備審査の一環として行う学位談話会により評価する。 – 博士（理学）の学位にふさわしい研究成果を挙げているかを国際学術論文の査読により評価する。学位論文審査と最終試験において、これらの項目について達成度の最終審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	【審査委員の体制】 論文審査委員会の構成 主査 1 名及び副査 3 名以上より構成される。 【審査方法】 学位論文を受理する前に予備審査を行い、学位論文提出の可否を決定する。論文審査委員会では、論文審査及び最終試験、又は学力の確認を行う。 【審査項目】 1. 研究主題が明確に示され、学術的な意義を有すること 2. 研究主題に関連する先行研究が適切に提示されていること 3. 結論に至る論旨が論理的かつ明瞭に記述されていること 4. 学位論文は当該分野において高い学術的価値をもつ学術的貢献であること 5. 学位論文として適切な文章表現・論文構成であること 【学位論文が満たすべき水準】 上記の評価項目のすべてを満たすこと。併せて、最終試験又は学力の確認を経た上で、博士論文として合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

代数学・幾何学・解析学・情報数学の 4 分野からなる教育・研究指導体制で多様な人材教育を行う。

教育課程の編成方針	学生一人一人の能力に応じたきめ細かな研究指導、専門分野でのセミナーにより、関連分野の基礎から応用、現代数学の最先端に至るまで幅広い視野を持てる様な教育を行う。 – 代数学特別研究 IIIA ～ VB により代数構造把握に関する高度な思考力を身に付ける。 – 幾何学特別研究 IIIA ～ VB により幾何学構造把握に関する高度な思考力を身に付ける。 – 解析学特別研究 IIIA ～ VB により解析構造分析に関する高度な思考力を身に付ける。 – 情報数学特別研究 IIIA ～ VB により情報数理に関する高度な思考力を身に付ける。 – 数学インターンシップ III、数学インターンシップ IV により自らの将来のキャリアパス形成に必要な力を高める。 – 当該分野の特別研究Ⅲ A、特別研究Ⅲ B、特別研究Ⅳ A、特別研究Ⅳ B、特別研究Ⅴ A、特別研究Ⅴ B により、上述の思考力を獲得すると同時に自らの力で研究課題を設定し研究を遂行できる能力、専門分野外の人々の問題意識を把握しかつ自身の持つ専門知識についてわかりやすい説明を行うコミュニケーション能力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	指導教員のアドバイスの下で最先端の研究を行うことにより、博士（理学）の学位にふさわしい基礎力、応用力を養い、独創性の高い研究を行うことのできる人材を養成する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	大学院修士課程修了レベルの数学の知識の修得者で、数学の研究を行うことに強い関心と意欲のある人や、最先端の現代数学を研究することに高い意欲を持ち、将来、数学の研究能力を活かし「研究者」・「教育者」・「高度専門職業人」を目指す人を求める。
入学者選抜方針	修士論文の内容と入学後の研究計画を重視して選抜を行う。

数学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（理学）
Doctoral Program in Mathematics / Doctor of Philosophy in Science

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 博士論文に向けた研究指導にあたる大学院科目「特別研究」は、ほぼ毎週の頻度で学生が研究室でプレゼンテーションを行う形態で実施されている。この中で、プレゼンテーション指導を行うほか、研究の進度や時間管理についても、密に指導を行っている。 – 学位論文の予備審査を、学位談話会として行うことで、指導教員以外の教員からも、プレゼンテーションに関する指導を受ける機会としている。
学生同士の交流機会	– 数学域として行っている談話会の開始前にはティータイムを設けている。談話会には多くの学生が参加しており、学生同士の交流の機会になっている。 – 学類生向けの「数学手習い塾」という学修相談の場に、大学院生をチューターとして配置することで、学類生との交流や大学院生同士の交流の場としている。 –「数理の交差点」や「RCMS サロン」という、談話会に類似のイベントも開催して、学生同士の交流の機会としている。
教員との交流機会	– 数学域として行っている談話会の開始前にはティータイムを設けている。談話会には多くの教員が参加しており、学生と教員の交流の機会になっている。 –「数理の交差点」や「RCMS サロン」という、談話会に類似のイベントも開催して、学生と教員の交流の機会としている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 博士（理学）の学位論文に向けた研究について、修了時の学位論文公聴会に加えて、予備審査の一環として学位談話会を開催することで、全教員が学術的価値の確認とフィードバックを行える体制をとっている。
– 授業評価アンケートおよび修了時アンケートを実施し、学生からのフィードバックを講義の改善に役立てている。
– 中間時と修了時の二度にわたって、コンピテンスの達成度評価を、学生が自己評価を行い、指導教員がそれを確認する形で行っている。
– 学位判定会議において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

物理学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Physics

■ 博士（理学）
■ Doctor of Philosophy in Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

最先端の物理学研究を主体的に遂行することを通して、自ら問題を見出し、それを探求し、解決する能力を培い、学界のみならず産業界において自立した研究者として活躍できる人材を養成する。

養成する人材像	物理学の素養だけでなく関連学問分野の知識を身に着け、解明・解決すべき問題に科学的に立ち向かう突破力を身に着けている人材。学界においては、高度な専門的知識と確かな研究力を身につけ、宇宙の成り立ちから物質の世界まで広がる幅広い物理学の諸分野や他の学問との境界領域において、科学のフロンティアを発展させることができる人材。産業界においては、だれも解決し得なかった困難な課題に立ち向かい、物事の根本原理に立ち返って産業技術のイノベーションを実現できる人材。 宇宙史教育領域では、素粒子・原子核・宇宙の物理学諸分野を宇宙の進化の過程と捉える視点に基づき、国際的な研究拠点をまたいだ教育システムにより、高い専門性とともにこれら諸分野を横断する能力を持ち、宇宙史に関して国際的に活躍できる人材を育成する。加速器科学領域では、高エネルギー加速器研究機構の B ファクトリー、J-PARC、放射光科学研究施設などを用いた研究および次世代加速器の開発を行い、将来、加速器分野で活躍できる人材。 放射光物質科学領域では、放射光施設等（例えば、PF、J-PARC、SPring-8、さらに、海外の施設）を活用した研究を行い、物質科学の知識・技術に加えて放射光等の知識・技術の両方を修得し、国内外の大学、研究所、放射光施設、民間企業で物質開発を推進できる人材。
修了後の進路	国内外の大学及び公的研究機関における研究・教育職。産業界における研究開発職

物理学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（理学）
Doctoral Program in Physics / Doctor of Philosophy in Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	研究指導科目、論文発表に関する科目、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	研究指導科目、演習科目、他研究室と共同の演習科目、インターンシップ科目、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	研究指導科目、演習科目、研究発表に関する科目、学会発表、ポスター発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	特別指導科目、他研究室と共同の演習科目、大学院共通科目（JAPIC 科目）、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 創成力：自然の中に普遍的な構造を見出すことで物理学的な知を創成し、人類社会の発展に寄与する基礎的能力	①物理学分野の幅広い知識を用いて物理学と社会との関係を考察し問題を提起できるか ②自分の専門分野の知識を用いて社会に寄与する具体策を提案できるか	大学院共通科目、セミナー科目
	7. 物理力：最先端の学識を有し、国内外の研究者と議論・共同研究を行う能力	①物理学分野の基礎的な専門知識を持ち、物理現象に対して論理的な思考で取り組めるか ②自身の研究分野の高度な専門知識を習得し、研究を遂行できるか	特別研究、実習、博士論文、研究会・学会・国際会議発表
	8. 遂行力：自身の専門分野をさらに発展させる独創的な研究を自立的に遂行する能力	①専門分野の動向を注視し、大局的な視野をもって学術的意義を把握できるか ②自己の研究を客観的に判断し、新たな展開を生み出せるか	特別研究、原著論文
	9. 発信力：自身の研究について、専門分野以外の人々にもわかりやすく情報を発信する能力	①自身の研究の学術的な重要性を説明し、相手の興味を引き出せるか ②物理学に特有の概念を非専門家に説明し納得させられるか	大学院共通科目、セミナー科目、研究会・学会・国際会議発表、インターンシップ
	10. 論理力：科学者としての使命感、論理性、自立性を有すること	①自然界の真理を探究することに情熱を持ち、それを実行しているか ②研究の立案・手法・遂行・検証が、科学的かつ真摯なものであるか	特別研究、博士論文
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価している。達成度評価の段階・方法を以下に示す。達成度評価は、2 年次修了時（中間審査）、及び 3 年次修了時に実施し、その結果を指導教員等が確認を行っている。知識・能力の評価は、予備審査、博士論文の提出及び博士論文公開発表会により行っている。		

学位論文に関する評価の基準	【審査委員の体制】 論文審査委員会の構成 主査 1 名及び副査 3 名以上より構成される。 【審査方法】 学位論文を受理する前に、予備審査を行い学位論文提出の可否を決定する。論文審査委員会では、論文審査及び最終試験、又は学力の確認を行う。最終試験では、専門分野外の人々に対する研究内容のプレゼンテーション能力、および、分野外の研究者との学問的なコミュニケーション能力も確認する。 【審査項目】 1. 研究内容に関連する先行研究の把握と理解、およびその文献・資料に対する適切な評価と引用 2. 適切な研究課題設定および研究方法の明確な提示とその妥当性 3. 得られた結果の再現性、あるいは第三者による検証可能性 4. 明快な論文構成と結論に至るまでの論旨の適切な展開 5. 国際水準での学術的貢献 【学位論文が満たすべき水準】 研究倫理を遵守のうえ、上記の評価項目のすべてを満たすこと。評価項目⑤　　に関しては、原則として学位論文は英語で記述するものとし、その概要が国際学術誌に発表済みでない場合は学位取得後 1 年以内に発表すること。以上と併せて、最終試験又は学力の確認を経た上で、博士論文として合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

素粒子理論、素粒子実験、宇宙理論、宇宙観測、原子核理論、原子核実験、物性理論、物性実験、生命物理学、プラズマ物理の専門に分かれた計 10 の専門分野、および、宇宙史教育、加速器科学、放射光物質科学の計 3 つの領域から構成される。

教育課程の編成方針	素粒子、原子核、宇宙物理学分野では、国際的な研究拠点をまたいだ教育を行う宇宙史教育領域を開講している。物性物理学分野では、高輝度光科学研究センターやフォトンファクトリーの協力により、物質科学探究の強力な手法となる放射光利用の知識と技術を修得できる放射光物質科学領域を開講している。また、高エネルギー加速器研究機構との教育研究連携により、加速器科学領域を開講している。 物理学は自然科学の基礎であるため、学内の他の学位プログラムや研究センター（計算科学研究センター、宇宙史研究センター、エネルギー物質科学研究センター、プラズマ研究センター、等)、さらには、国内外の主要研究機関と研究・教育上深い関係にある。この特性を生かして、連携大学院（量子科学技術研究開発機構、産業技術総合研究所、物質・材料研究機構、理化学研究所、NTT、NEC 等)、つくば共鳴教育プログラムをはじめとする様々な教育プログラムを用意している。 – 学生は各専門分野に所属し、高い専門性を身につける。 – 各分野の特別研究を履修することにより、幅広い視野を身につけるとともに、独自の研究テーマの深化を通じて、研究者として基礎力・応用力・胆力を養う。 – また、大学院共通科目の情報伝達力・コミュニケーション力養成科目群の科目を履修し、実践的な能力を身につける。

学修の方法 特色的な教育	学生はいずれかの専門分野の研究室に所属する。各分野の特別研究を履修することにより、幅広い視野を身につけるとともに、独自の研究テーマの深化を通じて、研究者として基礎力・応用力・胆力を養い、独立した研究者として歩んで行けるようになる。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	物理学とその関連科学分野及び英語能力において修士レベルの素養を有するとともに、物理学の諸分野で先端の研究を行うことに強い関心と意欲を持ち、学界や産業界で研究者を目指す人を求める。
入学者選抜方針	修士論文の内容と入学後の研究計画を重視して選抜を行う。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	副指導教員制度を実施している。副指導教員により定期的な面談を行い、指導教員とは別な側面から効果的な学修について指導を行っている。
学生同士の 交流機会	研究室を超えた大学院生同士の交流促進を目的として、年に 1 回、大学院生間の交流会を実施している。
教員との交流機会	大学院生と教員、特に指導教員以外の教員との交流促進を目的として、年に 1 回、大学院生と教員との交流会を実施している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

カリキュラム委員会を設置し、月に 1 回開催している。また、全教員による教育会議も月に 1 回開催している。カリキュラム委員会と教育会議により、学生の学修成果に関する評価を行うとともに、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施し、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。

化学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Chemistry

■ 博士（理学）
■ Doctor of Philosophy in Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

化学分野における最先端研究テーマの提案、適切な研究計画の立案、及びその研究の円滑な推進を、学界及び産業界を問わず、世界的視野、独創性、自立性をもって実践できる、汎用性の高い研究者を養成する。

養成する人材像	化学を通じて世界に貢献するという明確な意思と真摯な態度、社会のニーズを理解し、自らの力で研究を計画し推進する能力、国際社会で交渉できるコミュニケーション能力と語学力、学術論文等によって研究成果を社会に発信・還元する能力、および研究活動における高い倫理観を併せ持つ人材。
修了後の進路	高度な研究能力、専門知識、および豊かな学識をもち、我が国の科学技術の発展に寄与する優れた研究者（大学及び公的研究機関、産業界（企業等））

化学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（理学）
Doctoral Program in Chemistry / Doctor of Philosophy in Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	研究指導科目、論文発表に関する科目、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	研究指導科目、論文発表に関する科目、博士論文作成、学会発表など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	研究指導科目、論文発表に関する科目、博士論文作成、学会発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	研究指導科目、論文発表に関する科目、博士論文作成、学会発表など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	研究指導科目、論文発表に関する科目、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、国際会議発表、英語論文など
	6. 化学専門知識：物理化学、有機化学、無機・分析化学の理論的・実践的知識を有し、研究の現場で活用する能力	物理化学、有機化学、無機・分析化学の理論的・実践的知識を有し、研究の現場で活用する能力を有しているかどうか	化学セミナー、化学特別演習、特別研究

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 論理的思考力と問題解決能力：問題を分析し論理的な思考によって解決を図る能力	問題を分析し論理的な思考によって解決を図る能力を有しているかどうか	化学セミナー、化学特別演習、特別研究
	8. 専門化学英語力：化学研究に関して、英語で発表・質疑応答・論文執筆をする能力	化学研究に関して、英語で発表・質疑応答・論文執筆をする能力を有しているかどうか	化学セミナー、化学特別演習、特別研究
	9. 研究推進能力：研究課題設定と長期・短期的な研究計画の策定の能力	研究課題設定と長期・短期的な研究計画の策定の能力を有しているかどうか	化学セミナー、化学特別演習、特別研究
	10. 良質な研究倫理観：研究データの適切な扱いと保存、他の研究者の成果の適切な引用の能力	研究データの適切な扱いと保存を実践しているかどうか．他の研究者の成果の適切な引用を実践しているかどうか	化学セミナー、化学特別演習、特別研究
学修成果の評価に関する方針	2 年次の秋学期～ 3 年次の春学期に行う中間報告審査会の口頭発表に対し、ディプロマ・ポリシーに掲げたコンピテンスの獲得状況をルーブリックに基づいて、全研究指導担当教員により評価する。 博士論文提出時に「達成度評価表」に基づく達成度評価によって、ディプロマ・ポリシーに基づくコンピテンスの獲得状況を全研究指導担当教員により確認・評価する。 最終年度の博士論文最終試験の口頭発表に対し、ディプロマ・ポリシーに掲げたコンピテンスの獲得状況をルーブリックに基づいて、主査 1 名副査 2 名以上により評価する。 研究の進捗状況を把握し適切な支援を行うために、入学 1 年後に達成度評価を行い、指導教員による確認・指導を行ったのちに、全研究指導担当教員により確認・評価する。		

学位論文に関する評価の基準	【審査委員の体制】 主査（指導教員）、及び 3 名の副査からなる論文審査委員会を発足させる。 主査及び副査は、博士号を有し、主査については本学（連携大学院も含む）、副査については本学（連携大学院も含む）又は化学域教授懇談会が認める研究機関に所属する者とする。 【審査方法】 主査、副査は提出された博士論文を査読する。 博士論文審査会を開催し、博士号取得候補者の口頭発表、並びに口頭試問を行い、研究内容に対する理解度と研究の達成度を審査する。審査会終了後、論文審査委員による判定会議を開催し、最終的な合否を決定する。 【審査項目】 1. 提出された博士学位論文が、記述、論理展開、図表を含めて完成度が高いこと。 2. 博士学位論文の内容が、化学分野の研究として世界的にも高いレベルにあること。 3. 博士学位論文に参考文献が適切に引用されていること。 4. 博士学位論文の研究内容に対する博士号申請者の貢献が十分に認められること。 5. 先行研究を深く理解し、研究主題の学問的位置付けが明確であること。 6. 博士学位論文の内容について深く理解し、プレゼンテーションでは適切に質疑応答を行えること。 【学位論文が満たすべき水準】 1 ～ 5 の項目すべてについて、博士論文として水準に達していると認められるとともに、博士論文審査会における発表と口頭試問において項目 6 を満たし、博士号取得にふさわしい水準に達していると認められるものを合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

化学の基礎を構成する無機・分析化学、物理化学、有機化学の他に、生命科学や工学などとの境界領域化学も含め、4 つの大きな枠組みを設ける。したがって、幅広い化学の分野の研究をテーマとして選択することが可能である。この専門的研究を通して、様々な化学物質の構造や性質、および化学反応のメカニズムなどを分子レベルで実験的・理論的に解明する、最先端の研究を行う。これにより、化学物質の基礎から応用に至る化学の概念を学び、高度で非常に専門的な実験手法・研究手法を修得する。

教育課程の編成方針	– カリキュラムは、専門科目における演習・セミナーの実施と評価を数段階に渡って懇切丁寧に行うきめ細かな編成となっており、化学の専門的な内容と共に博士（理学）の学位にふさわしい能力を身に付けさせる。 – 演習・セミナーでは自身の研究・実験及び最先端研究の論文について問題提起と解決法の提案が常に学生に求められ、厳密にまた客観的にデータを解析できる論理性や独自の研究計画が立案できる力がつくよう徹底した指導を行う。 – 中でも必須科目であるリサーチプロポーザルでは、自らの力で問題を掘り起こして研究を計画する能力を培う。 – また、演習や大学院共通科目によってコミュニケーション能力と語学力を修得する。 – さらに各自の研究分野については、担当指導教員の個別指導のもとで高度な内容を修得する。

学修の方法 特色的な教育	– 化学の基礎を構成する無機・分析化学、物理化学、有機化学の他に、生命科学や工学などとの境界領域化学も含め、4つの大きな枠組みを設けている。 – カリキュラムは、専門科目における演習・セミナーの実施と評価を数段階に渡って懇切丁寧に行うきめ細かな編成となっている。 – 中でも必須科目であるリサーチプロポーザルでは、自らの力で問題を掘り起こして研究を計画する能力を培う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	修士課程で培った十分な科学的素養と論理的・合理的思考力および語学力を持ち、問題解決に向けて粘り強く挑戦できる人材を求める。最前線の研究現場において化学の進歩を担うことにより社会に貢献できる、高度な専門的知識・能力を持つ研究者や高度専門職業人の育成を目指しているので、これに向けて積極的に学問・研究に取り組める向学心の高い人を歓迎する。
入学者選抜方針	求める人材に鑑みて、入学を希望する多様な人材の中から、研究者や高度専門職業人の候補者として相応しい資質と能力をもつ人を選抜する。選抜にあたっては、公平性と多様性に配慮し、多面的で総合的な選抜方法を実施する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	副指導教員体制および分野（無機・分析化学、物理化学、有機化学）のサポート体制により、研究指導の客観性とさまざまな相談への対応体制を整えている。 自身の専門研究分野以外の講義・演習や、研究発表会、勉強会への参加機会を通し、研究の深化を支援するとともにプレゼンテーション指導、ライティングサポートを行っている。
学生同士の 交流機会	所属年次以外の学生が集まる研究発表会、キャリアパス講演会などへの参加機会を通じ、質疑応答の場や自由討論などを通じて、学年 / 組織を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みをつくっている。 舎密会（学位プログラム全体セミナー）を通じ、研究分野や学年を超えた学生同士の交流機会を提供している。
教員との交流機会	「リサーチプロポーザル」に学位プログラム担当教員が参加し、意見交換などを通じて、専門を超えた教員との交流機会を供している。 舎密会（学位プログラム全体セミナー）を通じ、指導教員 / 副指導教員以外の教員との交流機会を提供している。 大学院生と教員会の懇談会を開催し、指導教員 / 副指導教員以外の教員との交流機会を提供している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

大学院生と教員の懇談会等において、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

応用理工学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Programin Engineering Sciences

■ 博士（工学）
■ Doctor of Philosophy in Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

物質、材料からデバイス、計測技術に至る多様な分野において、十分な理学的基礎力を備えた上で、多様な現実の問題に対応できる、深い知識と豊かな創造性を有する優れた研究者、並びに、オリジナルの技術を作り上げ、後進を育成できる工学的応用力、適用力を有する研究者、高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	十分な理学的基礎力を備えた上で、最先端工学における多様な現実の問題に対応できる、深い知識と豊かな創造性を有する優れた研究者、並びに、高い研究開発能力を有し社会に貢献できる高度専門職業人材。 ＜電子・物理工学サブプログラム＞ 物理学を中心とする自然科学を基礎とした応用物理計測、ナノ工学、電子デバイスの分野において、世界的レベルの研究および技術開発、さらに工学的実践を先導する、創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者、あるいは、高度な専門知識・能力をもつ高度専門職業人材。 ＜物性・分子工学サブプログラム＞ 研究者として自立するに必要な研究能力を備え、量子物性、量子理論、材料物性及び物質化学・バイオ工学等の物質工学における専門分野についての深い知識と高度な研究を行い得る研究者、高度な研究能力を持って社会に貢献できる高度専門職業人材。 <NIMS 連係物質・材料工学サブプログラム＞ 国立研究開発法人 物質・材料研究機構の研究者が大学院教員として研究指導を行い、金属・セラミック材料工学、ナノ材料工学、有機･生体材料工学、物理工学、半導体材料工学などの物質･材料工学分野において、創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者、様々な社会的課題に対して物質・材料工学の専門家として高度な工学的応用力、適応力を持ち貢献できる高度専門職業人材
修了後の進路	応用物理、エレクトロニクス、計測、物質化学、材料科学を中心とする学問分野および応用分野における、高等教育機関、国立研究開発法人等の公的研究機関、民間企業の教員、研究者、高度技術者、製造業（自動車関連、電器、金属、化学、情報・IT 関連等）、ガス、電力、鉄道輸送などの研究開発職、地方公務員、国家公務員（特許庁など）、大学・公的研究機関の教員、常勤研究員、博士研究員、国立研究開発法人、大学等の公的研究機関あるいは企業の研究所などの研究者

応用理工学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（工学）
Doctoral Programin Engineering Sciences / Doctor of Philosophy in Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	特別研究、大学院セミナー、インターンシップ、博士論文作成、学会発表
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	特別研究、インターンシップ、TA 経験、他研究室と共同の演習、達成度自己点検
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	特別研究、大学院セミナー、学会発表、他研究室と共同研究、TA 経験、科学・産業イベント等での討議・発表
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	特別研究、TA・RA 経験、他研究室と共同演習、大学院共通科目、学会発表、インターンシップ、プロジュエクト参加経験、サミナー企画・開催
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、学術論文執筆、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 等得点、国際会議発表、英語論文執筆公表
	6. 工学基礎力：工学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい知識と学力	異分野・初学者に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく説明することができるか	特別研究、セミナー、TA 経験、学会発表、講習会、技術研修

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 基礎学力：工学分野の発展に欠かせない盤石な基礎学力	工学で広く用いられる高度な数理的な知識と能力を備えているか	特別研究、セミナー、TA 経験、学会発表、講習会
	8. 専門知識：工学分野および関連分野の発展に求められる高度な専門的知識	工学分野の専門知識を幅広くもち、先端的な研究を行うための高度な技術を獲得しているか	特別研究、セミナー、学会発表、論文執筆
	9. 倫理観：工学分野の研究者、高度職業人に求められる高い倫理観	研究者倫理および技術者倫理、ヒトを対象とする研究に関する倫理と研究に必要な手続きについて十分理解しているか	大学院共通科目、基礎科目、特別研究、INFOSS 情報倫理、eAPRIN、他倫理講習、応用理工学関連の各種法令
	10. 実践的見識と問題解決力：工学分野および関連分野の問題を実際に解決するために求められる見識と問題解決力	①先端的な研究課題を適切に設定し、研究を遂行して独創的な成果を上げることができるか ②世界の専門家と討論できるだけのプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力があるか	特別研究、大学院セミナー、国際会議での発表等、海外派遣、学会発表
学修成果の評価に関する方針	〈電子・物理工学サブプログラム〉 学修成果の評価は、「達成度評価表（ルーブリック）」により、客観的に確認・評価をすることで行う。 博士論文審査後に、以下の要領で口頭試問により最終試験を行う。 − 最終試験で博士論文（特別研究）における研究の目的、方法、進め方について口頭試問を行い、知の活用力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力を有するかどうか確認する。 − 最終試験において外国語による口頭試問を行い、適切な回答ができるかどうか確認する。 − 最終試験において、工学基礎力、基礎学力、専門知識について口頭試問し、適切な回答ができるかどうか評価する。 − 最終試験において研究倫理に関する試問を行い、十分理解しているかどうか確認する。 − 最終試験において工学分野における問題について口頭試問し、適切に回答できるかどうか確認する。		

学修成果の評価に関する方針	〈物性・分子工学サブプログラム〉 学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 毎年次の博士後期セミナーの発表に対して、コンピテンスの獲得状況を主査および複数の教員による評価を行う。 – 最終年次に博士論文の公開発表会および主査、副査 3 名以上で構成される学位論文審査委員会による博士論文の審査を行うとともに、最終試験として最終達成度審査を行う。 〈NIMS 連係物質・材料工学サブプログラム〉 – 学修成果の評価は、「達成度評価表（ルーブリック）」により、客観的に確認・評価をすることで行う。 – 物質・材料工学特別研究 IA、I B、IIA、IIB、IIIA、IIIB に加えて、物質・材料工学セミナー I、II において、多面的な観点から研究、基礎能力、専門知識、および研究計画遂行技能が身に付いているかを研究達成度とともに評価する。 – 予備審査を含めた学位論文審査では、主査及び 3 名以上の副査により博士論文の内容を審査する。副査には 1 名以上の本サブプログラム以外の教員が加わり、広い観点から審査を行う。最終試験では書面の審査に加えて、公開のもと口頭試問を行うことで、世界的基準での研究レベル、論文の質の高さ、評価の客観性を保証する。
学位論文に関する評価の基準	【審査委員の体制】 論文審査委員会の構成 主査 1 名及び副査 3 名以上から構成される。 【審査方法】 各サブプログラムが定める審査方法に従い、予備審査、論文審査及び最終試験を行う 1）電子・物理工学サブプログラム 学位論文を受理する前に予備審査を行い、学位論文提出の可否を決定する。論文審査委員会では、論文審査および最終試験を行う。 2）物性・分子工学サブプログラム 学位論文を受理する前に予備審査を行い、学位論文提出の可否を決定する。論文審査委員会では、論文審査及び最終試験、又は学力の確認により、物質工学のすべての分野の基礎となる学力と知識ならび物質工学のいずれかの分野の専門知識を有し、かつ物質工学のいずれかの分野で自ら課題を設定し、その解決のための研究を遂行し、すぐれた成果をおさめることができたかどうかの審査を行う。 3）NIMS 連係物質・材料工学サブプログラム 学位論文を受理する前に予備審査を行い、学位論文提出の可否を決定する。論文審査委員会では、論文審査及び最終試験を行う。 【審査項目】 1. 研究課題設定と研究方法の選択が妥当であること。 2. 結果の解釈と、結論に至るまでの論旨展開が妥当かつ明確であること。 3. 研究課題に関する先行研究の把握と理解、それに対する適切な評価と引用がなされていること。 4. 研究倫理が遵守され、得られた結果ならびに結論について、第三者による検証が可能であること。 5. 研究課題成果の学術的な意義が国際的に認められること

学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】 上記の評価項目のすべてを満たし、各サブプログラムが定める基準を満たすこと。 1）電子・物理工学サブプログラム 論文審査委員会までに、筆頭論文 1 編が、学術雑誌に出版または掲載可となっていること。併せて、最終試験を経た上で、博士論文として合格とする。 2）物性・分子工学サブプログラム 筑波大学大学院学則第 3 条の 2 で規定する課程の目的を充足すること。併せて、最終試験又は学力の確認を経た上で、博士論文として合格とする。 3）NIMS 連係物質・材料工学サブプログラム 上記の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終本審査を経た上で、博士論文として合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

応用物理計測、ナノ工学、電子デバイスの分野、量子物性、量子理論、材料物性、物質化学・バイオ工学等の分野、金属・セラミック材料工学、ナノ材料工学、有機・生体材料工学、物理工学、半導体材料工学などの物質・材料工学分野における研究者、高度専門職業人育成のための教育を行う。

教育課程の編成方針	工学分野における世界レベルで高い専門的知識・能力を身につけるための教育課程を編成する。 ＜電子・物理工学サブプログラム＞ − 複数指導教員制による研究指導を行い、多面的な観点から指導する。これにより、充実した基礎能力とその上に築かれた深い専門基礎能力を育てるとともに、実践的見識と実行力、問題解決能力の涵養を目指す。 − 電子・物理工学特別研究で実施されるセミナーにおいて、異なる専門分野の多彩な聴衆に対し発表することが義務づけられている。ここでは英語による発表が推奨され、世界の専門家と討論できるだけのプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の涵養を図る。 − インターンシップや海外研究派遣などにより、広い視野とともに世界で活躍できる国際的見識を養う。 ＜物性・分子工学サブプログラム＞ −「量子物性」、「量子理論」、「材料物性」、「物質化学・バイオ」の 4 分野からなっているが、修了のために履修すべき科目は必修科目である各分野の「特別研究Ⅲ A、Ⅲ B、Ⅳ A、Ⅳ B、Ⅴ A、Ⅴ B」（合計 18 単位）のみとなっており、これらの科目では博士論文作成のための各自のテーマの研究活動に加え、サブプログラム所属の学生と教員が参加する「後期課程セミナー」では年 1 回の英語による研究発表を課し、研究進捗状況を英語で発表・議論することを訓練する。 − これにより、高度な専門的知識や問題を実際に解決するために求められる見識と問題解決力、コミュニケーション能力を身に付ける。 − 特定分野の深い専門知識だけでなく幅広い視野を身に付けるため、前期課程の科目、他の学位プログラムやコースの専門科目および大学院共通科目の履修を奨励している。

教育課程の編成方針	＜NIMS 連係物質・材料工学サブプログラム＞ － 物質・材料研究機構での国際的で知的刺激にあふれた研究環境の中で、専門的な知識と関連分野に関する基礎知識、新概念実証の研究計画の企画・立案ができる見識、企画・立案した研究計画を実験的あるいは理論的に遂行する技能、研究活動における高い倫理観、学会・論文発表を通じた国際的な研究成果の発信や海外の研究者と闊達な議論ができる英語でのコミュニケーション能力を養う。 － 本方針を達成するため、履修すべき科目として「特別研究 IA、IB」、「特別研究 IIA、IIB」、「特別研究 IIIA、IIIB」 (計 18 単位)、「セミナー I」、「セミナー II」（計 2 単位）を用意している。 －「特別研究」では先進的・国際的な研究環境のもとで博士論文作成のための高度な研究活動を行う。 －「セミナー」では、研究進捗状況を英語で発表・議論することを訓練する。また、幅広く工学分野の知識を身につけるために、教員がそれぞれの研究分野を解説する前期課程の科目「ナノ材料工学特論 I」、「ナノ材料工学特論 II」の履修を推奨している。
学修の方法 特色的な教育	工学分野における高度専門分野の理解と発展に欠かすことのできない基礎能力をもち、博士の学位に相応しい世界レベルの優れた研究成果を学位論文にまとめることが必要であり、特別研究科目によりこれらを修得する。 ＜電子・物理工学サブプログラム＞ －「電子・物理工学特別研究ⅢＡ、ⅢＢ、ⅣＡ、ⅣＢ、ＶＡ、ＶＢ」で、応用物理計測、ナノ工学、電子デバイスの分野において、高度専門分野の理解と発展に欠かすことのできない基礎能力、当該分野の研究者、高度専門職業人として求められる高い専門的基礎能力、実践的見識と実行力、広い視野、問題解決能力、世界の専門家と討論できるプレゼンテーション能力及びコミュニケーション能力を身に付ける。 ＜物性・分子工学サブプログラム＞ －「量子物性」、「量子理論」、「材料物性」、「物質化学・バイオ」の 4 分野の「特別研究Ⅲ A、Ⅲ B、Ⅳ A、Ⅳ B、Ⅴ A、Ⅴ B」により、自ら課題を設定した上で研究を独力で遂行し、研究テーマの意義、成果、位置づけを理解し、英語による情報発信力を備えることが出来る能力を身に付ける。 <NIMS 連係物質・材料工学サブプログラム＞ －「物質・材料工学特別研究Ⅰ A、Ⅰ B、Ⅱ A、Ⅱ B、Ⅲ A、Ⅲ B」では、金属・セラミック材料工学、ナノ材料工学、有機・生体材料工学、物理工学、および、半導体材料工学分野の世界最先端レベルの研究開発に携わることにより、研究活動における高い基礎能力、倫理観に加えて、当該分野の高度な専門知識、研究計画を遂行する技能、課題解決能力を修得する。 －「物質・材料工学セミナーⅠ、Ⅱ」では、英語による研究発表と討論を通じて、研究成果の国際的なプレゼンテーション能力とコミュニケーションの能力を修得する。

応用理工学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（工学）
Doctoral Programin Engineering Sciences / Doctor of Philosophy in Engineering

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	応用理工学に対する興味と、博士前期課程で身に付けたしっかりした学問的基盤、十分なコミュニケーション能力を有し、広範で豊かな好奇心と目的実現のために努力を惜しまない強い精神力、高い倫理観を有し、深く広い視野、優れた先見性を持つ学生を求める。
入学者選抜方針	基礎学力および基礎知識、及びこれらを基にした深い考察力を選抜の基本パラメータとし、自律的かつ熱意をもって研究を遂行する意欲と集中力を持つ者を、修士論文の内容と入学後の研究計画を基にして口述試験により選抜する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	〈電子・物理工学サブプログラム〉 – 複数指導教員体制により、研究指導の客観性と多様な相談への対応体制を整えている。 – 博士 1 年生必修の大学院セミナーを開講している。そこでは、自身の研究内容を発表し、また他者の発表を聴講することを通して、自身の研究内容を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。 〈物性・分子工学サブプログラム〉 – 副指導教員体制により、研究指導の客観性と多様な相談への対応体制を整えている。 – 学外での研究成果発表会への参加機会を供し、旅費の支援を行っている。自身の研究体制を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。 – 論文執筆、英語でのプレゼンテーション能力向上のための集中講義を開講している。 – 幅広い見識の拡大を目指し、学内外の講師を招き、物質工学域セミナーを開催している。 〈NIMS 連係物質・材料工学サブプログラム〉 年に 1 回、全ての学生は物質・材料工学セミナーにおいて自分の研究内容を英語で発表することを義務付けている。発表内容が博士後期課程にふさわしいレベルか、社会的課題に応えているか、学生が物質・材料工学分野の専門家としての知識を有しているか、英語で議論できるコミュニケーション能力を有しているかなど、専攻内の全ての教員により評価する。

学生同士の交流機会	〈電子・物理工学サブプログラム〉 – 博士 1 年生必修の大学院セミナーを開講している。そこでは、自身の研究内容を発表し、また他者の発表を聴講し、質疑応答を通して、学年／組織を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みを教育課程に組み込んでいる。 – 学類の講義・実験の TA により、学生同士が学び合う機会を継続的に生み出す仕組みを創出している。 – 学術院で開催される学生の集いを通じて、専門を超えた学生同士の交流機会を供している。 〈物性・分子工学サブプログラム〉 – 所属年次以外の成果発表会への参加機会を供し、質疑応答の場などを通じて、学年を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みを教育課程に組み込んでいる。 – TA や留学生に対するチューター制度により、学生同士が学び合う機会を継続的に生み出す仕組みを創出している。 – 学術院や研究センターで開催される学生の集いを通じて、専門を越えた学生同士の交流機会を供している。 〈NIMS 連係物質・材料工学サブプログラム〉 学生の発表会終了後に懇親会を行い、学生の交流を促進している。また博士前期課程学生の発表会をポスター形式とすることで後期課程学生も交えて交流する機会を提供している。
教員との交流機会	〈電子・物理工学サブプログラム〉 – 学術院で開催される学生の集いを通じて、専門を超えた学生同士の交流機会を供している。 – 大学院セミナーでは指導教員、副指導教員のほか、他の教員の前でプレゼンテーションを行い、質疑応答することで、指導教員／指導以外の教員との交流機会を供している。 – 年に 1 度、大学院生と教員の懇談会を開催して、学生と教員の交流を促進している。 〈物性・分子工学サブプログラム〉 – 学術院や研究センター等で開催される集いを通じて、専門を越えた教員との交流機会を供している。 – 博士論文発表会等に学位プログラム担当教員全員が参加し意見交換などを通じて指導教員 / 指導以外の教員との交流機会を供している。 – 年に 1 回、教員と学生の懇談会を開催している。 〈NIMS 連係物質・材料工学サブプログラム〉 学生の発表会終了後に懇親会を行い、教員と学生の交流を促進している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

〈電子・物理工学サブプログラム〉

- 運営委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
- 講義（専門科目、専門基礎科目等）終了後にアンケートを行い、検証と改善の参考にしている。
- 学務委員を中心にシラバスのチェックが毎年行われており、必要に応じて教員に修正や改善を促すことで質を保証している。

〈物性・分子工学サブプログラム〉

- 運営委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

〈NIMS 連係物質・材料工学サブプログラム〉

- 運営委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

国際マテリアルズイノベーション学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Materials Innovation

■ 博士（工学）
■ Doctor of Philosophy in Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

学問分野の垣根を越えて広く自然科学の基礎知識を有し、環境エネルギー問題など地球規模の俯瞰的な視野を持って、よりよい高度な物質社会を構築するためのイノベーションを導く教育者、研究者、高度専門職業人を、つくば地区の研究機関と強く連携して養成する。

養成する人材像	物質・材料に関する高度な能力をもって、未来型の革新的エネルギー材料、環境材料化学、エレクトロニクスにおけるイノベーションを導き、地球規模の社会的ニーズに対応するアイデアを創出し、国際社会で英語を駆使してリーダーとして活躍する人材。
修了後の進路	製造業（自動車関連、エレクトロニクス、金属、化学、情報・IT 関連等）、ガス、電力、鉄道輸送などの研究開発職。地方公務員、国家公務員（特許庁など）、大学・公的研究機関の教員、常勤研究員、博士研究員。

国際マテリアルズイノベーション学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（工学）
Doctoral Program in Materials Innovation / Doctor of Philosophy in Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	Research in MI、キャリアアップ特論、インターンシップ、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	Research in MI、インターンシップ、TA 経験
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	Research in MI、Open Seminar、Joint Seminar、Research Proposal、学会発表、他研究室と共同研究、TA 経験
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	Research in MI、Research Proposal、TA 経験
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	Open Seminar、Joint Seminar、大学院共通科目（国際性養成科目群）、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、学術論文執筆、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 理論設計能力：量子力学または熱力学に基づいて物質・材料を設計する能力を身に付ける	①量子力学に基づいて物質・材料を設計する能力を身に付けているか ②熱力学に基づいて物質・材料を設計する能力を身に付けているか	Research in MI、論文発表演習、学会発表、論文等執筆発表、技術研修
	7. 物質機能解析力：放射光物質解析や走査プルーブ顕微鏡などの解析機器を用いて、物質機能を原子・電子レベルで解明することができる能力	①放射光物質解析や走査プルーブ顕微鏡などの解析機器を用いて、物質機能を原子・電子レベルで解明することができる能力を身に付けているか	Research in MI、論文発表演習、学会発表、論文等執筆発表、技術研修
	8. 材料創生力：新規物質または高性能デバイスを生み出す力	①新規物質または高性能デバイスを生み出す力を身に付けているか	Research in MI、論文発表演習、学会発表、論文等執筆発表、技術研修
	9. 工学基礎力：工学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい知識と学力および研究倫理を身に付ける	①応用理工学分野の研究者として欠かせない高度専門知識を備えているか ②応用理工学分野研究の応用展開に必要な幅広い専門知識を習得しているか ③研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか	Research in MI、論文発表演習、論文作成・公表、APRIN e-learning、他倫理講習受講
	10. 英語交渉能力：英語で積極的に世界中の研究者にアクセスする能力	応用理工学分野の世界的な研究動向に深い関心を持ち、世界中の研究者との英語交渉能力を身に付けているか	Research in MI、Open Seminar、Joint Seminar、英語授業、TOEIC 英語技能演習、英語による研究 Discussion、国際会議での英語によるプレゼン、英語論文執筆、外国人（ 留学生を含む）との共同研究、Discussion

学修成果の評価に関する方針	最終試験（学位論文本審査）で博士論文（学位論文）における研究の目的、方法、結果と考察等について口頭発表を行い、知の創造力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ力を（5段階で）評価する。 また、発表後の口頭試問において、理論設計能力、物質機能解析力、材料創成力、工学基礎力について、適切な回答ができるかどうかを（5段階で）評価する。 さらに、英語による発表と口頭試問を通じて、国際性および英語交渉能力が身についたことを確認する。
学位論文に関する評価の基準	【審査委員の体制】 論文審査委員会の構成 主査1名および副査3名以上より構成される。 【審査方法】 学位論文を受理する前に、予備審査を行い学位論文提出の可否を決定する。論文審査委員会では、論文審査および最終試験または学力の確認を行う。 【審査項目】 1. 研究課題の設定に独創性があり、研究方法の選択が妥当であること。 2. 研究目的から結論に至るまでの論旨が英語で明確に展開されていること。 3. 研究課題に関する先行研究の把握と理解、それに対する適切な評価と引用がなされていること。 4. 研究倫理が遵守され、得られた結果ならびに結論について、第三者による検証が可能であること。 5. 研究成果の学術的な意義が国際的に認められること。 【学位論文が満たすべき水準】 上記の評価項目のすべてを満たし、論文審査委員会までに、筆頭論文1編が、学術雑誌に出版または掲載可となっていること。併せて、最終試験を経た上で、博士論文として合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

教育研究の柱となる領域：エネルギー材料工学、環境材料工学、電子材料工学により構成される。
従来の理学や工学の区分を取り払い、基礎科学に基づく工学的応用を実践できる人材の育成を目指す。

教育課程の編成方針	基礎研究から製造や実装現場にいたる多様な研究者を、産総研、物材機構、高エネ研との連携し、かつ世界中の優れた成果を上げている学術機関や産業界から講師として呼びセミナーを開講し、実践力を養うとともにさまざまな課題に挑戦し、克服できる力を有するグローバルな人材を育成する。

学修の方法 **特色的な教育**	– 国際マテリアルズイノベーション特別研究 IIIA・I I IB・IVA・IVB・VA・VB（必修各 3 単位）で自らの専門分野の研究を積極的に深め、博士課程修了のための研究能力の向上を探求し、世界トップレベルの研究成果を上げる事に専念する。 – リサーチプロポーザル（後期 1 年必修科目：1 単位）で、後期課程の 1 年次において、後期課程で遂行する自分の研究テーマ以外の研究について、その背景や意義、予想される成果を立案する。立案した研究計画をセミナー形式で発表しディスカッションを行う。異分野の研究について積極的に情報を収集し、自身の研究に取り入れるなど、研究計画を立案する能力を養う。学位プログラム所属の教員および学生全員がプロポーザル発表会に出席し、ディスカッションを行うとともに、発表学生の評価をする。 – Open Seminar IIIA・IIIB・IVA・IVB・VA・VB（必修科目：各 1 単位）で、世界の第一線で活躍する外部研究者の講演、および学生の研究紹介のセミナーに参加し、レポートにまとめる。英語でのディスカッションに活発に参加し、国際的な英語でのコミュニケーション能力を身に付ける。 – Joint Seminar IIA・IIIB・IVA・IVB・VA・VB（選択科目：各 1 単位）で、一学期にわたり、他研究室または海外での研究活動に参加し、自らの研究テーマに関す研究レベルの深化と学際的視野の拡大を図る。 所属する研究室とは分野の異なる他研究室のセミナーを聴講することで、多様な研究環境を体験する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	優れた基礎的な能力と知力があり、研究に意欲的で、将来に対して優れた研究者としての大志を抱く人材を求める。英語のみで開講するプログラムであるため十分な英語能力を有することが必須である。
入学者選抜方針	世界規模で学生を公募し、これまでの研究成果および入学後の研究計画に関して面接試験により選抜する。英語によるコミュニケーション能力を評価する。面接試験はオンラインで行う。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	物質・材料分野の国際会議、国際シンポジウムでの発表に際し、旅費や参加費を支援している。また、国際会議、国際シンポジウム等での発表に関して、プレゼンテーション（口頭、ポスター）の指導に加え、質疑応答の練習などを行っている。また、学術論文執筆に関して、論文の書き方の指導、および査読過程の体験等を通して国際的な研究者として自立できるよう支援を行っている。
学生同士の交流機会	Open Seminar における研究交流を実施している。
教員との交流機会	他研究室との共同研究を通じた異分野研究の体験を実施している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

中間および修了時に実施する達成度評価および学位論文審査会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

社会工学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Policy and Planning Sciences

■ 修士（社会工学）
■ Master of Science in Policy and Planning Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

「社会工学学位プログラム（修士）」を通して、専門的な見地から社会要請に提言・寄与できる国際的なスペシャリスト「未来構想のための工学に立脚した問題解決型人材（モード 1 型人材）」を養成する。

養成する人材像	「未来構想のための工学に立脚した問題解決型人材（モード 1 型人材）」社会的知識、論理的思考力、各種の工学的スキルを基盤とする「問題解決能力」を有し、IT エンジニア、生産管理・マーケティング技術者、政府系銀行、金融アナリスト、コンサルタント、シンクタンク研究員、都市計画・まちづくりコンサルタント、組織管理職、ファイナンシャル・プランナー、建設・不動産業企画 / 開発プランナー、タウンアーキテクト、国・都道府県・市町村企画部門公務員等として活躍できる人材。
修了後の進路	IT エンジニア、生産管理・マーケティング技術者、政府系銀行、金融アナリスト、コンサルタント、シンクタンク研究員、都市計画・まちづくりコンサルタント、組織管理職・ファイナンシャル・プランナー、建設・不動産業企画 / 開発プランナー、タウンアーキテクト、国・都道府県・市町村企画部門公務員等

社会工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（社会工学）
Master's Program in Policy and Planning Sciences / Master of Science in Policy and Planning Sciences

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（社会工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	社会工学修士基礎演習 I・II、社会工学修士特別演習 I・II、社会工学修士特別研究 I・II、社会工学ワークショップ I・II、社会工学インターンシップ、地域未来創生アクティブラーニング I・II・III、学会発表、ポスター発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	社会工学修士基礎演習 I・II、社会工学修士特別演習 I・II、社会工学修士特別研究 I・II、社会工学ワークショップ I・II、地域未来創生アクティブラーニング I・II・III、社会工学インターンシップ、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	社会工学修士基礎演習 I・II、社会工学修士特別演習 I・II、社会工学修士特別研究 I・II、社会工学ワークショップ I・II、地域未来創生アクティブラーニング I・II・III、社会工学インターンシップ、学会発表、ポスター発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	社会工学修士基礎演習 I・II、社会工学修士特別演習 I・II、社会工学修士特別研究 I・II、社会工学ワークショップ I・II、地域未来創生アクティブラーニング I・II・III、社会工学インターンシップ、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	社会工学修士基礎演習 I・II、社会工学修士特別演習 I・II、社会工学修士特別研究 I・II、社会工学ワークショップ I・II、大学院共通科目（国際性養成科目群）、語学力養成科目、国際的な活動を伴う科目、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：社会工学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①社会工学分野の研究課題を適切に設定できるか ②社会工学分野の研究を行うための基本的な技術はあるか ③社会工学分野の研究を遂行して有意義な成果を上げることができるか	社会工学修士基礎演習Ⅰ・II、社会工学修士特別演習Ⅰ・II、社会工学修士特別研究Ⅰ・II、社会工学ワークショップⅠ・II、社会工学ファシリテーター育成プレプログラムⅠ・II、地域未来創生アクティブラーニングⅠ・II、社会工学修士特別演習Ⅰ・II、社会工学修士特別研究Ⅰ・II、学会発表、ポスター発表など
	7. 専門知識：社会工学分野における高度な専門知識と運用能力	①社会現象理解（Find）：社会工学分野における基本的な理論や経験則についての高度な知識にもとづき、社会現象を演繹的に理解できるか ②データ解析（Analyze）…データの分析に基づき社会現象を帰納的に理解できるか ③制度設計（Plan）…社会現象の理解にもとづき社会を改革する制度を設計できるか ④実験と提言（Do）…設計した制度にもとづき具体的な提言や社会実験を行えるか ⑤評価と測定（See）…社会実験や提言の結果を自ら批判的に測定・評価し、社会現象理解を深化させられるか	社会工学修士基礎演習Ⅰ・II、社会工学修士特別演習Ⅰ・II、社会工学修士特別研究Ⅰ・II、研究群共通科目、社会工学特別講義、学会発表、ポスター発表など
	8. 倫理観：社会工学分野の高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	①研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか ②ヒトを対象とする研究に関する倫理と研究に必要な手続きについて理解しているか	社会工学修士基礎演習Ⅰ・II、社会工学インターンシップ、INFOSS 情報倫理、修論ガイダンス（研究倫理について）

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価シート」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。学期ごとに計4回実施する。評価シートは「社会現象理解」「データ解析」「制設度計設」「実験と提言」「測定と評価」それぞれの能力と、「資産・資源のデザイン」「組織・行動のデザイン」「空間・環境のデザイン」の各分野の知識・能力（コンピテンス）が履修によってバランス良く身についたかを評価するものとなっている。この評価は毎回、指導教員と院生が面談し、シートの内容を確認する形で行われる。特に、中間発表後に実施される3回目の評価では、副指導教員から過去に受けた助言を研究に反映させているか、中間発表の質疑応答において副指導教員との意見交換を行ったか、修士論文の完成に向け概ね順調に研究を進めているか、についての評価が行われる。 修士基礎演習、修士特別演習、修士特別研究は、1 年次の研究計画発表会、2 年次の中間発表会、最終審査会の 3 つの段階で審査・評価を受ける。
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 研究テーマの意義：社会の諸事象に関わる問題を発見し、それを解決することが学術的、もしくは、社会に対する貢献に繋がる十分な意義を有すると認められるか。 2. 先行研究の理解：研究テーマと関連する既存の理論と研究を精確に理解し、客観的に評価が行われているかが問われる。その上で、自己の研究が文献に対していかなる理論的貢献を付加し得るのか、或いは社会・経済、都市環境、経営組織とそこで働く人々にとって如何なる実際的意義を果たし得るか、等について深く議論されているか。 3. 研究方法の理解と妥当性:研究テーマを探求するための方法（論証、実験、シミュレーション、調査、サーベイ等の設計とデータの解析、等）を深く理解し、研究テーマの探求に向け、それを使いこなすスキルを十分に修得したと評価し得るか。 4. 研究結果の提示と解釈の妥当性：研究結果を学術的に提示するスキル、及びそれを演繹的、或いは帰納的に解釈する思考力を備えていると評価し得るか。 5. 研究総括：上記 1 ～ 4 のステップを俯瞰し、また、自己の研究の強みと弱みを客観的に評価したうえで、社会に貢献し得る提言を行えるか、或いは将来の研究動向に向けて意義のある議論を展開出来ているか。 6. 論文の形式：論文に用いられた文章表現の的確さ、図表・文献の提示や引用、及び文献リストの作成が学術論文としてふさわしい水準に達しているか。 ＜最終試験に係る基準＞ 1.【研究力】社会工学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力を有しているか。 2.【専門知識】社会工学分野における高度な専門知識と運用能力を有しているか。 3.【倫理観】社会工学分野の高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識を有しているか。 ＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 修士論文審査委員会は、システム情報工学研究群大学院担当教員のうちから、主査 1 名及び副査 2 名以上で組織するものとする。 主査は、修士論文審査委員会を開催し、学位論文の審査に係る基準に従い論文を審査し、合否判定を行う。 上記 1. ～ 6. の評価項目すべてについて、学位論文（修士）としての水準に達していると認められるものを、最終（口述）試験を経た上で合格とする。

社会工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（社会工学）
Master's Program in Policy and Planning Sciences / Master of Science in Policy and Planning Sciences

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

社会的知識、論理的思考力、各種の工学的スキルを基盤とする「問題解決能力」を育むため、①資産・資源のデザイン（ファイナンス／最適化）②空間・環境のデザイン（都市計画）③組織・行動のデザイン（行動科学）の三つの柱からなる教育課程を編成し、これらに関する専門知識と研究能力、工学分野の幅広い基礎知識と倫理観を備えるとともに、理工情報生命の中の複数分野にわたる広い視野に立って問題を発見し解決できる人材を養成するための教育を行う。

教育課程の編成方針	教育課程は、社会問題に関する「問題解決能力」を身につけられるように設計する。 基礎的な社会工学的基礎能力を涵養するため、コア科目群として研究群共通科目群の専門基礎科目を編成する。そのうえで、現象理解からモデル構築・データ解析の専門的な知識・能力を育むため、①資産・資源のデザイン（ファイナンス／最適化）②空間・環境のデザイン（都市計画）③組織・行動のデザイン（行動科学）の３分野と各分野相互の共通部分の科目として、研究群共通科目群の専門科目を編成する。さらに、学位プログラム科目群に専門基礎科目及び専門科目を編成し、学生と教員が共有する物理的・仮想的研究資源である「社会工学コモンズ」を利用しながら、リサーチユニットなどの研究者集団による複眼的な指導が受けられる研究体制のもとで修士論文作成を行うことにより、基礎・専門双方の能力の定着を図る。なお、本プログラム内に開設されている社会人向けの地域未来創生教育コースでは、「地域未来創生概論」を必修科目として位置付けており、特に今後の地域づくりの人材育成に力点を置いている。 （汎用的知識・能力）については、 大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、専門基礎科目の履修により身に付ける。特にコア科目群や、ファシリテーター育成科目群では以下のような知識・能力の修得が期待される。 – 「社会工学のための数学」「ミクロ経済」「社会シミュレーション」「統計分析」「空間情報科学」などのコア科目群、また「社会工学インターンシップ」により、知の活用力を身に付ける。 – アクティブラーニングをグループ・ワークで行う「社会工学ワークショップ I・II」「社会工学インターンシップ」「社会工学ファイシリテーター育成プログラム」科目群、「地域未来創生アクティブラーニング」科目群により、マネジメント能力・コミュニケーション能力・チームワーク力を身に付ける。 – 国際的な研究状況を踏まえて平易に教授するコア科目群、また留学生とアクティブラーニングをグループ・ワークで実施する「社会工学ワークショップ I・II」「社会工学インターンシップ」「社会工学ファシリテーター育成プログラム」科目群、「地域未来創生アクティブラーニング」科目群により、国際性を身に付ける。

教育課程の編成方針	（専門的知識・能力）については、 – 大学院共通科目群、学術院共通専門基盤科目群、コア科目群により基礎的な研究的知識を得たうえで、「社会工学修士基礎演習 I・II」「社会工学修士特別演習 I・II」「社会工学特別研究 I・II」により研究力を身につける。 –「ゲーム理論」「都市と環境」などの履修により社会現象の理解ができる能力を、「社会工学のための数学」「統計分析」などの履修によりデータ解析できる能力を、「ミクロ経済」「制度・政策決定論」などの履修により、制度設計できる能力を、「社会シミュレーション」「空間情報科学」などの履修により、実験と提言できる能力を、「企業評価論」などの履修により評価と測定ができる能力をそれぞれ身に付け、全体として社会工学分野で必要とされる「問題解決能力」に必要な専門知識を体得する。 –「社会工学インターンシップ」「社会工学ファシリテーター育成プログラム」科目群により特に社会の中で活動する時に必要となる倫理観を、「社会工学修士基礎演習 I・II」「社会工学修士特別演習 I・II」「社会工学特別研究 I・II」により研究に関する倫理観を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	– 履修モデル①：（経営）コンサルタントあるいは組織管理職、ファイナンシャル・プランナー、履修モデル②：IT コンサルティング企業のシステムエンジニア、履修モデル③：シンクタンク研究員を参考に、研究群共通科目群の専門基礎科目を主に 1 年次春学期に履修する。大学院共通科目及び学術院共通専門基盤科目はこの科目群の一部として位置づけ、履修を推奨する。 – ①資産・資源のデザイン（ファイナンス／最適化）②空間・環境のデザイン（都市計画）③組織・行動のデザイン（行動科学）の 3 分野と各分野相互の共通部分の科目として体系化された研究群共通科目群の専門科目から、3 種類の履修モデルを参考に、主に 1 年次秋学期に履修する。 – 上記と並行して指導教員ならびにアドバイザリー・グループ（AG）、リサーチユニットなどの研究者集団による複眼的な修士論文の指導が行われ、各研究課題について研究を進め、論文執筆にかかる学位プログラム科目群の専門科目 12 単位を取得する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	工学的基礎能力（数学あるいは論理的思考力）を有し、資産・資源のデザイン（ファイナンス・最適化）、空間・環境のデザイン（都市計画）、組織・行動のデザイン（行動科学）の 3 つの分野のうち 1 つの分野に関する基礎的知識を備えた人材を求める。
入学者選抜方針	– 学内外から優秀かつ多様な人材を受け入れるため、推薦入試、一般入試、及び、社会人特別選抜等、時期および定員の異なる複数の入学試験を実施する。 – 入試の種別に関わらず口述試験を必須とする。 – 外国語の成績には英語能力検定試験（TOEIC、TOEFL 等）のスコアを利用する。 – 推薦入試では、成績が優秀で社会工学分野の研究に必要な能力が特に優れた者を選抜する。 – 一般入試では、一定の基礎力及び研究能力を備えた人材を選抜する。 – 社会人特別選抜では、基礎力及び研究能力に加え、社会人としての実績や経験を評価する。

社会工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（社会工学）
Master's Program in Policy and Planning Sciences / Master of Science in Policy and Planning Sciences

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	達成度評価シートを用いて定期的に指導教員と学修内容を確認する。リサーチユニット等を活用したセミナーや社会工学特別演習 II、社会工学特別研究 I 及び II により複数教員のもとでプレゼンテーション能力を養う。
学生同士の交流機会	アクティブ・ラーニングをグループ・ワークで実施する「社会工学ワークショップ」「社会工学ファシリテーター育成プログラム」科目群や、リサーチユニットを活用した分野横断的な研究活動により学生同士の交流機会を促進する。
教員との交流機会	副指導やリサーチユニット等を活用した複数教員との研究交流体制や、複数教員と院生が参加する研究会を学位プログラムとして支援することで交流機会を促進する。院生・教員連絡会を毎年開催し、交流の機会としている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

- 学位プログラムリーダー、および、カリキュラム委員会において学修成果の評価結果を分析・検討し、教育の質の継続的な向上に努めている。
- 教学マネジメント委員会において、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施し、研修会を開催するなどして教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。
- 関係者の方からの直接意見の聴取やアンケート調査など外部評価の機会を設け、社会工学学位プログラムで養成する人材像に沿った教育となっているかを確認している。

サービス工学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Service Engineering

■ 修士（サービス工学）
■ Master of Engineering in Service Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

「サービス工学学位プログラム」を通して、高度な専門知識と豊かな人間性を兼ね備えた高度専門職業人「サービス分野の未来開拓者（モード２型人材）」を養成する。

養成する人材像	「サービス分野の未来開拓者（モード２型人材）」すなわち、サービス分野における現在・将来の社会問題に立ち向かい、新たなやり方を創造・実践し、結果を科学的に検証できる人材を育成する。彼らは、企業のサービス開発エンジニアや経営企画担当者、官公庁の地域サービス振興担当者、起業家等として活躍する人材。
修了後の進路	企業のサービス開発エンジニアや経営企画担当者、官公庁の地域サービス振興担当者、起業家等

サービス工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（サービス工学）
Master's Program in Service Engineering / Master of Engineering in Service Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（サービス工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	消費者心理分析、地域データ解析、ビッグデータアナリティクス、応用最適化、公共インフラ計画、情報ネットワーク、サービスサイエンス、プレイスメイキング、技術経営、サービス工学特別演習Ⅰ・Ⅱ、サービス工学特別研究Ⅰ・Ⅱ、学会発表、ポスター発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	消費者心理分析、地域データ解析、ビッグデータアナリティクス、応用最適化、公共インフラ計画、情報ネットワーク、サービスサイエンス、プレイスメイキング、技術経営、サービス工学特別演習Ⅰ・Ⅱ、サービス工学特別研究Ⅰ・Ⅱ、達成度自己点検、外部コンテスト等への参加など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	消費者心理分析、地域データ解析、ビッグデータアナリティクス、応用最適化、公共インフラ計画、情報ネットワーク、サービスサイエンス、プレイスメイキング、技術経営、サービス工学特別演習Ⅰ・Ⅱ、サービス工学特別研究Ⅰ・Ⅱ、学会発表、ポスター発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	消費者心理分析、地域データ解析、ビッグデータアナリティクス、応用最適化、公共インフラ計画、情報ネットワーク、サービスサイエンス、プレイスメイキング、技術経営、サービス工学特別演習Ⅰ・Ⅱ、サービス工学特別研究Ⅰ・Ⅱ、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	消費者心理分析、地域データ解析、ビッグデータアナリティクス、応用最適化、公共インフラ計画、情報ネットワーク、サービスサイエンス、プレイスメイキング、技術経営、サービス工学特別演習Ⅰ・Ⅱ、サービス工学特別研究Ⅰ・Ⅱ、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究など
	6. 研究力：サービス工学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①科学的分析力：現状を科学的に分析し工学的に解決できるスキルを持っているか ②現実問題に立ち向かう能力：現実問題に立ち向える積極性・社会性・協調性を持っているか	消費者心理分析、地域データ解析、ビッグデータアナリティクス、応用最適化、公共インフラ計画、情報ネットワーク、サービスサイエンス、プレイスメイキング、技術経営、サービス工学特別演習Ⅰ・Ⅱ、サービス工学特別研究Ⅰ・Ⅱ、学会発表
	7. 専門知識：サービス工学分野における高度な専門知識と運用能力	技術応用力：多様なサービスフィールドにおいてスキルを使いこなすノウハウを知っているか	観光の科学、サービス満足度解析、金融サービスと意思決定、サービス工学：技術と実践、ウエルネスサービスサイエンス、交通サービスデザイン、システム開発論、デジタルガバメントとスマートシティ、学会発表
	8. 倫理観：サービス工学分野の高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	①研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか ②ヒトを対象とする研究に関する倫理と研究に必要な手続きについて理解しているか	サービス工学特別演習Ⅰ・Ⅱ、サービス工学特別研究Ⅰ・Ⅱ、サービス工学インターンシップ、サービス工学ファシリテーター育成プログラム、INFOSS 情報倫理、修論ガイダンス（研究倫理について）

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価シート」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。達成度評価は学期ごとに計 4 回実施する。達成度評価シートでは、修得したコンピテンスを視覚的に確認できる。達成度評価は毎回、指導教員と院生が面談し、シートの内容を確認する形で行われる。第 1 回目は、基礎の必修 9 科目の履修を確認するもの、第 2 回目は専門科目にかかるコンピテンス修得と修士論文の進行状況を確認するものである。中間発表会後に実施される第 3 回目の評価では、AG 教員から過去に受けた助言を研究に反映させているか、中間発表の質疑応答において副指導教員との意見交換を行ったか、修士論文の完成に向け概ね順調に研究を進めているか、についての評価が行われ、第 4 回目では修士論文の内容と学修したコンピテンスの全体評価が行われる。 サービス・ラーニング：産官学連携修了研究は、1 年次秋学期末の研究計画発表会、2 年次春学期末の中間発表会、2 年次秋学期末の最終審査会の 3 つの段階で審査・評価を受ける。
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 研究テーマの意義：サービス工学分野における現在と未来の生きた問題に立ち向かい、新たなサービスの方法の創造と実践に向けた意義を有すると認められるか。 2. 先行研究の理解：研究テーマと関連する既存の理論と研究を精確に理解し、評価が行われているか。その上で、自己の研究が如何に文献に対して貢献し得るのか、或いはサービス工学分野において如何なる実際的意義を果たし得るかについて深く議論されているか。 3. 研究方法の理解と妥当性:研究テーマを探求するための方法（論証、実験、シミュレーション、調査、サーベイ等の設計とデータ解析、等）を深く理解し、研究テーマの探求に向け、それを使いこなすスキルを十分に修得したと評価し得るか。 4. 研究結果の提示と解釈の妥当性：研究結果を学術的に提示するスキル、及びそれを演繹的、或いは帰納的に解釈する思考力を備えていると評価し得るか。 5. 研究総括:上記 1 ～ 4 のステップを俯瞰し、自己の研究の強みと弱みを客観的に評価したうえで、サービス工学分野に貢献し得る提言を行えるか、或いは将来の研究動向に向けて意義のある議論を展開出来ているか。 6. 論文の形式：論文に用いられた文章表現の的確さ、図表・文献の提示や引用、及び文献リストの作成が学術論文としてふさわしい水準に達しているか。 ＜最終試験に係る基準＞ 1.【研究力】サービス工学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力を有しているか。 2.【専門知識】サービス工学分野における高度な専門知識と運用能力を有しているか。 3.【倫理観】サービス工学分野の高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識を有しているか。 ＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 修士論文審査委員会は、システム情報工学研究群大学院担当教員のうちから、主査 1 名及び副査 2 名以上で組織するものとする。 主査は、修士論文審査委員会を開催し、学位論文の審査に係る基準に従い論文を審査し、合否判定を行う。上記 1. ～ 6. の評価項目すべてについて、学位論文（修士）としての水準に達していると認められるものを、最終（口述）試験を経た上で合格とする。

サービス工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（サービス工学）
Master's Program in Service Engineering / Master of Engineering in Service Science

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

サービス工学（効果性のサイエンス（顧客や社会が必要とするサービスを発見する計量分析スキル）、効率性のサイエンス（組織が適正利益を確保するための効率化スキル）、統合のアート（上記の効果性・効率性のトレードオフ問題を克服する統合スキル））に関する専門知識と研究能力、工学分野の幅広い基礎知識と倫理観を備えるとともに、理工情報生命の中の複数分野にわたる広い視野に立って問題を発見し解決できる高度専門職業人を養成するための教育を行う。

サービス工学学位プログラムは、サービス分野における現在・将来の社会問題に立ち向かい、新たなやり方を創造・実践し、結果を科学的に検証できる人材を育成することを目的としている。このため、企業、国や自治体の実務担当者を積極的に教員として迎えるなど、産官学連携教育研究を強力に推進し、地域社会にも貢献でき、研究成果も蓄積され、その中でよい学生が育つ三位一体プログラムを構築する。

教育課程の編成方針	研究群共通科目群に専門科目と専門基礎科目を、学位プログラム科目群に専門科目と専門基礎科目を編成する。 （汎用的知識・能力）については、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、専門基礎科目の履修により身に付ける。特に学位プログラム科目群では以下のような知識・能力の修得が期待される。 「消費者心理分析」「地域データ解析」「ビッグデータアナリティクス」などのグループワークを伴う必修科目（マトリックス型コースワーク、9 科目・18 単位）及び「サービス工学ファシリテーター育成プログラム」「サービス工学インターンシップ」などの履修により知の活用力・マネジメント能力・コミュニケーション能力・チームワーク力・国際性を身につける。 （専門的知識・能力）については、 – 大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目の履修に加え、マトリックス型コースワークにより、現状を科学的に分析し工学的に解決できる基礎的スキルを身に付け「サービス工学特別演習 I・II」「サービス工学特別研究 I・II」（サービス・ラーニング＝産官学連携修了研究）により研究力を身につける。 – 選択科目により、基礎的スキルを使いこなす方法論とノウハウについての専門知識を身につける。 –「サービス工学ファシリテーター育成プログラム」「サービス工学インターンシップ」及びサービス・ラーニング＝産官学連携修了研究を通じて、倫理観を身につける。
学修の方法 特色的な教育	– リアルサービス（人が人に行うサービス）・地域サービス（組織が地域に行うサービス）・バーチャルサービス（IT 技術を通じて組織が人々に行うサービス）という 3 つの対象と、効果性のサイエンス（顧客や社会が必要とするサービスを発見する計量分析スキル）・効率性のサイエンス（組織が適正利益を確保するための効率化スキル）・統合のアート（上記の効果性・効率性のトレードオフ問題を克服する統合スキル）という 3 つのスキルからなる、9 つの必修科目（2 単位× 9 科目）を主に 1 年次春学期に履修する。 – 3 つの対象それぞれの専門的知識を扱う科目、仮説検証とサービス進化（解決策を実践し、結果を科学的に検証するスキル）をも含む 4 つのスキルそれぞれの専門知識を扱う科目等を、1 年次秋学期以降に履修する。 – 上記がおおよそ修了する 1 年次秋学期 C 以降は、産官学連携修了研究による実践的な研究生活が学生生活の中心となり、論文執筆にかかる専門科目 8 単位を履修する。

サービス工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（サービス工学）
Master's Program in Service Engineering / Master of Engineering in Service Science

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	工学的基礎能力（数学あるいは論理的思考力）を有し、資産・資源のデザイン（ファイナンス・最適化）、空間・環境のデザイン（都市計画）、組織・行動のデザイン（行動科学）の 3 つの分野のうち 1 つの分野に関する基礎的知識を備えた人材を求める。
入学者選抜方針	– 学内外から優秀かつ多様な人材を受け入れるため、推薦入試、一般入試、及び、社会人特別選抜等、時期および定員の異なる複数の入学試験を実施する。 – 入試の種別に関わらず口述試験を必須とする。 – 外国語の成績には英語能力検定試験（TOEIC、TOEFL 等）のスコアを利用する。 – 推薦入試では、成績が優秀でサービス工学分野の研究に必要な能力が特に優れた者を選抜する。 – 一般入試では、一定の基礎力及び研究能力を備えた人材を選抜する。 – 社会人特別選抜では、基礎力及び研究能力に加え、社会人としての実績や経験を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	達成度評価シートを用いて定期的に指導教員と学修内容を確認する。リサーチユニット等を活用したセミナーやサービス工学特別演習 II、サービス工学特別研究 I および II により複数教員のもとでプレゼンテーション能力を養う。
学生同士の交流機会	「消費者心理分析」「地域データ解析」「ビッグデータアナリティクス」などのグループワークを伴う必修科目や、「サービス工学ファシリテータ育成プログラム」のアクティブラーニング、および、リサーチユニットを活用した分野横断的な研究活動により学生同士の交流機会を促進する。
教員との交流機会	副指導やリサーチユニット等を活用した複数教員との研究交流体制や、複数教員と院生が参加する研究会を学位プログラムとして支援することで交流機会を促進する。院生・教員連絡会を毎年開催し、交流の機会としている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 学位プログラムリーダー、および、カリキュラム委員会において学修成果の評価結果を分析・検討し、教育の質の継続的な向上に努めている。
– 教学マネジメント委員会において、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施し、研修会を開催するなどして教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。
– 学生の研究発表や教育内容について、サービス工学シンポジウムにおける直接のフィードバックやアンケート調査など関係者による外部評価の機会を設け、サービス工学学位プログラムで養成する人材像に沿った教育となっているかを確認している。

リスク・レジリエンス工学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Risk and Resilience Engineering

■ 修士（工学）
■ Master of Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

不安定化する昨今の社会情勢の中で、適切なリスクマネジメントに基づく「強さ」と「しなやかさ」を兼ね備えた安心・安全な国土と地域・経済・情報社会、すなわちレジリエントな社会システムの実現は最も重要な課題である。本学位プログラムでは、「工学的視点から、不測の事態や状況の変化に柔軟に対応し、求められる機能を維持提供し続け、回復する能力」、すなわち、リスクを工学的方法により分析・評価した結果をレジリエンス社会の実現のために活用できる高度な技術をもち、現実社会の問題を見据えて教育研究成果等を社会還元できる高度専門職業人の養成を目的とする。

養成する人材像	工学基礎力をベースにリスク・レジリエンス解析・評価のための基礎理論および関連情報処理技術を修得し、それを広い視野でリスク・レジリエンス工学の対象である現実の問題に対応させ、十分なコミュニケーション能力で研究チームや研究プロジェクトの中で与えられた役割分担を果たし、必要に応じてリーダーシップをとりつつ、工学的手段による問題設定から解決までの具体的方法を考案・開発することができる人材
修了後の進路	情報通信業・運輸業・エネルギー産業・製造業・建設業・金融業・保険業・コンサルタント業・その他サービス業、大学教職員、国・民間の研究所、国家公務員、地方公務員など

リスク・レジリエンス工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（工学）
Master's Program in Risk and Resilience Engineering / Master of Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	学位プログラム提供科目、大学院共通専門基盤科目、特別研究、特別演習、特定課題研究、特別講義、インターンシップ、グループ PBL 演習、輪講、修士論文作成（特定課題研究報告書作成）、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	特別研究、特別演習、特定課題研究、インターンシップ、グループ PBL 演習、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	特別研究、特別演習、特定課題研究、インターンシップ、グループ PBL 演習、学会発表、ポスター発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	特別演習、グループ PBL 演習、TA 経験、学会・セミナーでの質疑応答など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、研究群共通科目、特別研究、特別演習、特定課題研究、国外での活動経験、外国人との共同研究、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 工学基礎力：工学分野の高度専門職業人にふさわしい基礎知識と学力	①リスク・レジリエンス工学分野の基礎知識を有しているか ②リスク・レジリエンス工学分野の高度専門職業人としての学力を備えているか	学位プログラム提供科目、大学院共通専門基盤科目、特別研究、特別演習、特定課題研究、修士論文作成（特定課題研究報告書作成）
	7. 基礎理論・関連技術に関する知識：リスク・レジリエンス解析・評価のための基礎理論の知識並びにリスク・レジリエンス解析・評価に関連する情報処理技術の知識	①複雑な現象に内在するリスクを解析し、レジリエンスの観点から評価するための基礎理論を修得しているか ②複雑な現象に内在するリスクを解析し、レジリエンスの観点から評価するための情報処理技術を修得しているか	学位プログラム提供科目、研究群共通科目、特別研究、特定課題研究、修士論文作成（特定課題研究報告書作成）
	8. 現実問題に関する知識:リスク・レジリエンス工学が対象とする現実の問題に係る知識	リスク・レジリエンス工学が対象とする現実の問題に関する知識を有しているか	学位プログラム提供科目、特別研究、特定課題研究、学会・国際会議・セミナー参加、調査等
	9. 広い視野と俯瞰力：リスク・レジリエンス工学の対象を広い視野で捉える能力	リスク・レジリエンス工学の対象を捉えるための広い視野を有しているか	協働大学院教員提供科目、研究群共通科目、特別講義、インターンシップ、グループ PBL 演習、学会・国際会議・セミナー参加、調査等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	10. 問題設定・解決能力：リスク・レジリエンスにかかわる問題について、問題設定から工学的手段による解決までのプロセスを理解し、具体的解決手段を考案・開発する能力	①専門的応用能力である問題設定から解決までのプロセスを理解し、具体的解決に導くことができるか ②研究者倫理および技術者倫理について十分に理解し遵守しているか	特別研究、特定課題研究、インターンシップ、グループ PBL 演習、INFOSS 情報倫理、APRIN、TA 経験など
	11. グローバル・コミュニケーション能力：研究チームや研究プロジェクトの中で、与えられた役割分担を果たし、十分なコミュニケーション能力を発揮し、かつ必要に応じてリーダーシップをとる能力	①研究チームや研究プロジェクトの中で、与えられた役割分担を果たすことができるか ②研究チームや研究プロジェクトの中で、十分なコミュニケーション能力を発揮し、かつ必要に応じてリーダーシップをとることができるか	特別研究、特別演習、特定課題研究、インターンシップ、グループ PBL 演習、学会・国際会議等での発表・質疑応答、共同研究

学修成果の評価に関する方針	次に述べる達成度評価システムによって、教育の質保証を行う。達成度評価項目として、前期課程では以下の 6 項目について達成度評価を行う。 ①工学基礎力：工学分野の高度専門職業人にふさわしい基礎知識と学力を備えているか。 ②基礎理論・関連技術に関する知識：リスク・レジリエンス解析・評価のための基礎理論の知識並びにリスク・レジリエンス解析・評価に関連する情報処理技術の知識を備えているか。 ③現実問題に関する知識：リスク・レジリエンス工学が対象とする現実の問題に係る知識を備えているか。 ④広い視野と俯瞰力：リスク・レジリエンス工学の対象を広い視野で捉える能力を有しているか。 ⑤問題設定・解決能力：リスク・レジリエンスにかかわる問題について、問題設定から工学的手段による解決までのプロセスを理解し、具体的解決手段を考案・開発する能力を有しているか。 ⑥グローバル・コミュニケーション能力：研究チームや研究プロジェクトの中で、与えられた役割分担を果たし、十分なコミュニケーション能力を発揮し、かつ必要に応じてリーダーシップをとる能力を有しているか。 達成度評価は、毎年度 2 回実施される達成度評価委員会において、各学生が 3 名以上の教員と面談し、評価を受けることになる。評価結果は学生にフィードバックされ、その後の学修改善に利用する。達成度評価表（ルーブリック）により、すべての項目について修士（工学）の学位にふさわしい水準に達しているかを客観的に判定することによって行う。
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。なお、特定の課題についての研究成果（「特定課題研究報告書」という。）の審査をもって修士論文の審査に代えることができる。ただし、修士論文は研究成果の結実をまとめたもの、特定課題研究は実践的な教育研究の成果をまとめたものとする。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 学位申請者が研究倫理に則り、主体的に取り組んだ研究成果であること。 2. 研究内容が新規性、または有用性を有していること。 3. 論文の構成が適切であり、内容が正しいこと。 (1) 論文題目が適切であること。 (2) 研究の背景・目的が明確であること。 (3) 研究の方法が目的に合致していること。 (4) 結果が正しく導出されていること。 (5) 考察が結果に基づいて検討されていること。 (6) 結論が明確であること。 (7) 引用が適切であること。 ＜特定課題研究報告書の審査に係る基準＞ 1. 学位申請者が研究倫理に則り、主体的に取り組んだ研究成果であること。 2. 設定した特定課題とその研究内容が新規性、または有用性を有していること。 3. 研究報告書の構成が適切であり、内容が正しいこと。 (1) 報告書の題目が適切であること。 (2) 特定課題が設定された背景・目的が明確であること。 (3) 研究の方法が目的に合致していること。 (4) 結果が正しく導出されていること。 (5) 考察が結果に基づいて検討されていること。

学位論文に関する評価の基準	(6) 結論が明確であること。 (7) 引用が適切であること。 ＜最終試験に係る基準＞ 学位論文または特定課題研究報告書についての説明、関連事項に係る質疑応答の結果と達成度評価の結果に基づく。 ＜学位論文または特定課題研究報告書が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 学位論文の審査は、主査 1 名、副査 2 名以上の修士論文審査委員会を設置し、審査委員会の合議で行う。主査並びに副査 2 名以上はシステム情報工学研究群担当教員とする。 主査は、修士論文審査委員会を開催し、学位論文または特定課題研究報告書の審査に係る基準に従い審査し、合議の上合否を決定する。上記 1. ～ 3. の評価項目すべてについて、学位論文（修士）としての水準に達していると認められるものを、最終試験を経た上で合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

上記に挙げた学位授与の方針（ディプロマポリシー）が達成され、リスク・レジリエンス工学（リスク・レジリエンス基盤、情報システム・セキュリティ、都市防災・社会レジリエンス、環境・エネルギーシステム）に関する専門知識と研究能力、工学分野の幅広い基礎知識と倫理観を備えるとともに、理工情報生命の中の複数分野にわたる広い視野に立って複雑な社会現象に潜むリスクを包括的に解析する即戦力をもつ人材を育成するカリキュラムを編成する。

教育課程の編成方針	博士前期課程では、研究群共通科目群に専門科目と専門基礎科目を、学位プログラム科目群に専門科目と専門基礎科目を編成する。学位プログラム科目群においては、プレゼンテーション・コミュニケーション能力や広い視野を養成する講義と演習、さらに問題設定から工学的手段による解決までのプロセスを理解し解決手段を開発するプロジェクト科目を履修する。研究群共通科目科目群では、各々の分野における基礎理論や情報処理技術を学び、リスクに関わる現実の問題についての知識を深めるための科目を履修する。学位プログラム科目群においては、各自の専門分野とは異なる分野について理解を深めることができるようにする。これらの学修と専門分野における研究を学位論文または特定課題研究報告書にまとめることによって、ディプロマ・ポリシーに挙げた各項目を達成できるようにする。

学修の方法 **特色的な教育**	ディプロマ・ポリシーに掲げた各項目を以下により達成する。 1.「工学基礎力」はほとんど全ての科目に共通しており、学位プログラムで用意した科目を履修することにより修得する。加えて、学術院共通専門基盤科目により、より幅の広い学修が可能となる。 2.「基礎理論・関連技術」はほとんど全ての科目に共通しており、学位プログラムで用意した科目を履修することにより修得する。特に修士特別研究により、複雑な現象に内在するリスクを解析しレジリエンスの観点から評価するための基礎理論および情報処理技術のより深い修得が可能となる。 3.「現実問題」はほとんど全ての科目に共通しており、特に専門科目を履修することにより修得する。 4.「広い視野」に係る能力はほとんど全ての科目に共通しており、特に企業・研究所等の協働大学院方式に係る教員による科目によって修得する。また、それらの教員によるインターンシップ関連の科目により、より深い修得が可能となる。 5.「問題設定・解決」に係る能力は、指導教員のもとで自らの研究を遂行する修士特別研究、企業・研究所等の協働大学院方式に係る教員によるインターンシップ関連の科目によって修得する。 6.「コミュニケーション」に係る能力は、修士特別演習や修士特別研究、修士特定課題研究で修得する。加えて、学生をグループ単位に分け、1 つのテーマに取り組ませるリスク・レジリエンス工学グループ PBL 演習等により、より深い修得が可能となる。 各項目の達成状況は、次に記述する達成度評価によって定期的にチェックし、到達度に応じて、当該学生の達成度評価委員を務める教員が適切な助言を与える。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	広い範囲のリスクに関する理解と対策に関心をもち、学際的立場からリスク・レジリエンスに関わる現実の問題について、分野横断的な俯瞰力をもってその解明と評価に取り組もうとする人材を求める。本学位プログラムで学ぶにあたって、特定分野の知識は必須ではないが、基礎としての数学や情報処理技術に関心をもち、一方で、実社会で活躍するためのコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力、さらに産学連携や社会連携、教育研究成果等の社会還元について向上心をもつ人を歓迎する。
入学者選抜方針	入学者の選抜にあたっては、推薦入試、一般入試、社会人特別選抜などの入学者選抜方式によって多様な入学志願者に対応するとととともに、募集人員を分割し同一年度内に複数回の入学試験を実施する。入学者は口述試験、さらに、分野の特性に応じて、出願資格を満たす成績証明書を利用して選抜するものとし、外国語については、英語能力検定試験（TOEIC、TOEFL 等）のスコアの提出によって実施するものとする。 – 推薦入試では、成績が特に優秀でリスク・レジリエンス工学分野における十分な知識と研究能力を有する者を選抜する。 – 一般入試では、一定の基礎力及び研究能力を備えた人材を選抜する。 – 社会人特別選抜では、基礎力及び研究能力に加え、社会人としての実績や経験を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	(1) リスク・レジリエンス工学修士特別演習 I・II 本演習では、毎週学生が一堂に会し、担当学生による研究発表や研究サーベイを実施し、質疑応答を通じて学修を深めている。専門分野を超えた学際的視点から議論が展開されることで、リスク・レジリエンス分野に求められる広い視野が養われ、現実の課題との連動を意識した教育が実践されている。 (2) 研究群共通科目の幅広い領域の授業履修体制 リスク・レジリエンス工学学位プログラムは、研究群共通科目として多様な分野の授業を計画的に履修できる体制を整えている。具体的には、社会工学関連科目、サービス工学関連科目、リスク・レジリエンス工学関連科目、情報理工関連科目、知能機能システム関連科目、構造エネルギー工学関連科目、エンパワーメント情報学関連科目を学生の希望に応じて選択できる。この学際的カリキュラムにより、学生は関心に沿った学習計画を構築し、広い視野と分野横断的な問題解決力を養う。
学生同士の交流機会	リスク・レジリエンス工学グループ PBL 演習 博士前期課程 1 年次の必修科目「リスク・レジリエンス工学グループ PBL 演習」では、分野の異なる 3 ～ 4 名の学生がグループを編成し、自ら設定した課題に対して PBL 型研究に取り組む。学生は打合せやディスカッションを通じて、多様なバックグラウンドを持つ仲間と交流し、専門知識や視点を共有することで、新たなアイデアや解決策を創出する。中間発表会、最終発表会およびポスター発表会には他グループや上級生も参加し、質疑応答を通じて幅広い層との意見交換を行うことが可能である。これらの活動を通じて、学際的研究小グループにおける協働能力ならびに学際的思考力の向上が期待される。
教員との交流機会	(1) リスク・レジリエンス工学修士特別演習 I・II 本演習における学生発表では、まず指導教員の確認のもとで発表資料が作成した上で実施される。その後、専門分野が必ずしも同一ではない複数の教員が参加し、学生の発表に対して評価や助言を行う。この過程により、特定の専門分野に偏らない多角的な視点がもたらされ、研究内容に多様な観点を導入できる。最終的に、こうした過程を通じて研究の一層の研磨が図られる。 (2) リスク工学研究会（RERM）の開催 本学位プログラムは、リスク工学専攻時代の 2002 年よりリスク工学研究会を継続的に開催しており、2025 年現在で 230 回を超える実績を有する。毎回、気鋭の研究者や実務者を招聘し、学生が最新の研究動向および社会的課題に触れることができ、複雑化する社会におけるリスク評価に関する知見および議論を深める環境を整えている。 (3) リスク・レジリエンス工学グループ PBL 演習 本科目では、各グループにアドバイザーとして担当教員を配置し、テーマ設定や研究手法等に関する指導・助言を行っている。アドバイザーはグループメンバーの指導教員以外から専任される。また、発表会ではアドバイザー以外の教員からも評価やコメントを受けることが可能であり、これにより専門分野を超えた学びやネットワーク形成が促進されている。

教員との交流機会	（4）定期的な教員連絡会の開催 教育・研究設備、カリキュラム、達成度評価、就職活動等に係る学生の疑問や要望を把握し、学生と教員の間で意見や情報を交換する場として、学生教員連絡会を年 2 回（春期・秋期）開催している。これにより、教育環境の改善を図るとともに、学生の学修意欲の向上に資している。 （5）レジリエンス研究教育推進コンソーシアムを活用したインターンシップ機会 本学位プログラムは、レジリエンス研究教育推進コンソーシアムに参画する機関の施設において、専門的知識や技術を有する研究者・教員（協働大学院）の指導のもとで実務経験を積むインターンシップの機会を提供している。これにより、学生は理論と実践を架橋する経験を通じて、研究能力および実務対応力を強化することが可能となっている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

（1）達成度評価システム

- 達成度評価システムを用いて学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
- 達成度評価委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。
- 次のような PDCA サイクルによって常に改善を図る。

Plan：達成度評価システムを企画し、実施内容・基準等を策定する。
Do：個別の学生ごとに複数の教員によって達成度評価を実行する。
Check：達成度評価システムの内容と実際の運用状況を点検する。
Act：発見されたシステム・運用上の課題の改善を図る。

（2）新任教員研修会

FD 委員会においては、新任教員が着任するたびに「新任教員のための研修会」を開催している。本研修会では、プログラムリーダーによる教育理念の説明に加え、リスク・レジリエンス工学学位プログラムの特色ある教育改善策（達成度評価等）を紹介している。また、研修時には PC を持ち込み、学内専用の情報サイト（TIPS まとめ、RISS、FAIR、TWINS 等）の利用方法を説明し、新任教員がその場でアクセスできるよう支援している。

（3）授業評価の実施と活用

FD 委員会では、TWINS を用いた授業評価を実施し、その結果を集計して各教員に周知している。これにより、授業運営に関する学生の意見を適切に把握し、各教員が授業改善に活用できる仕組みを整えている。

情報理工学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Computer Science

■ 修士（工学）
■ Master of Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

学位プログラムにおける教育・研究を通じて、情報技術の多様な分野に関して深い専門性を持つとともに国際的にも通用する知識と専門的研究能力・実務能力を持ち、独創性と柔軟性を兼ね備え、これらを活用して特定の領域における問題に対して情報学的アプローチによってその解決に貢献できる人材を養成することを目的とする。

養成する人材像	情報技術の幅広い分野にわたる専門的知識と技術力を持ち、専門分野に関するコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力、研究開発を遂行するための基礎的能力を備え、これらの知識と能力を応用して、実社会の様々な問題を解決することのできる研究者および高度専門職業人等の人材。
修了後の進路	本プログラムを修了した修士人材は、広範なインフォメーションサイエンスの共通基盤技術及び先端専門技術あるいは理工学の専門的知識および技術を活用し、企業・団体、教育・研究機関、官庁・自治体において社会の諸問題の情報技術による解決を先導する。また、博士後期課程へ進学し、さらなる知識・技術を身につけ、研究者・教育者、あるいは企業・団体・官庁・自治体においてリーダーシップを発揮する。

情報理工学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（工学）
Master's Program in Computer Science / Master of Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	前期特別研究、学位論文作成、学会発表、インターンシップ参加等
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	前期特別研究、達成度自己点検、外部コンテスト等への参加、インターンシップ参加等
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	前期特別研究、研究発表演習、研究群共通科目（専門基礎科目）、学会発表、インターンシップ参加等
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	前期特別研究、インターンシップ、PBL（Project Based Learning）型授業、TA業務経験、実践的ITカリキュラム履修、学会やセミナー等での質疑応答
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、研究群共通科目（専門基礎科目）、前期特別研究、研究発表演習、国際会議参加、留学生との交流、TOEIC得点、海外研究者との共同研究等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：情報技術の幅広い分野に関する高度な専門知識と技術を背景に自ら新たな課題を発見するとともに、それを解決するための計画を立案し、着実に実行できる能力	①情報理工学分野の研究課題を適切に設定できるか ②情報理工学分野の研究開発を行うための専門的な技術を有しているか ③情報理工学分野の研究計画を立案し、それを着実に遂行して有効な成果を上げることができるか	研究群共通科目（専門科目）、前期特別研究、学会発表等、学位論文作成
	7. 専門知識：情報技術の幅広い分野に関する高度な専門知識と技術、およびそれを運用する能力	①システム情報工学分野の基本的な知識を持っているか ②情報理工学分野における高度な専門知識および技能を持っているか ③自身が持つ専門知識および技術を適切に運用することができるか	前期特別研究、研究群共通科目（専門科目）、学位プログラム専門科目、学会発表等、学位論文作成
	8. 倫理観：情報技術の幅広い分野に関する教養的倫理観	①研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか ②ヒトを対象とする研究に関する倫理と研究に必要な手続きについて理解しているか	前期特別研究、INFOSS 情報倫理、APRIN
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は達成度評価シートに基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 − セミナー、修士論文中間発表会、最終審査会に加えて、達成度評価シートに基づき学修成果を評価する。 − 1 年次のセミナーにおいて、発表時時点での研究成果および今後の研究計画を発表し、評価およびフィードバックを受ける。 − 1 年次終了時点において指導教員とともに達成度評価シートをチェックし、その時点での学修成果の達成度を確認するとともに、2 年次における学修計画の見直しを行う。 − 2 年次の修士論文中間発表会において修士論文作成に向けた研究成果を発表し、中間評価およびフィードバックを受ける。 − 最終審査会において学位論文の内容に関する発表を行ない、学位審査を受けるとともに、審査委員会によって達成度評価シートをチェックし、学修成果の評価を行う。		

学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。なお、特定の課題についての研究成果（「特定課題研究報告書」という。）の審査をもって修士論文の審査に代えることができる。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. コンピュータサイエンス分野の研究や開発の動向および先行研究の把握に基づいて、当該研究の意義や位置づけが明確に述べられているか。 2. 従来の研究と比較して、新たな観点、知見、解釈あるいは応用的価値を有した研究成果が示されているか。 3. 研究の結果に対する考察が妥当であり、その信頼性が十分に検証されているか。 4. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論にいたる論旨が、論理的かつ実証的に展開されているか。 5. 論文に用いられた文章表現が的確であり、文献や図表等は引用元が明示された上で正しく引用され、学位論文（修士）として相応しい形式にまとめられているか。 ＜特定課題研究報告書の審査に係る基準＞ 1. コンピュータサイエンス分野における諸問題を、先端的な ICT を駆使して解決するための適切な問題設定が示されているか。 2. ソフトウェアやシステムを構築するための実践的な開発プロジェクトを、学生主導で企画および運営した過程が明確に述べられているか。 3. 研究成果が問題解決に資するものであることが、論理的かつ実証的に示されているか。 4. 報告書に用いられた文章表現が的確であり、文献や図表等は引用元が示された上で正しく引用され、報告書として相応しい形式にまとめられているか。 ＜最終試験に係る基準＞ 【研究力】情報技術の幅広い分野に関する高度な専門知識と技術が身についているか。 【研究力】自ら新たな課題を発見し、それを解決するための計画を立案し、着実に実行できたか。 【専門知識】情報技術の幅広い分野に関する高度かつ専門的な知識と技術、およびそれを運用する能力が身についたか。 【倫理観】情報技術の幅広い分野に関する教養的倫理観が身についたか。 【コミュニケーション能力】物事を的確にわかりやすく伝え、専門的な議論ができる能力が身についているか。 ＜学位論文または特定課題研究報告書が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 修士論文審査委員会は、システム情報工学研究群大学院担当教員のうちから、主査 1 名及び副査 2 名以上で組織するものとする。ただし、必要がある場合には、他研究群または他大学大学院の教員、研究所の研究員等を副査とすることができる。主査は研究指導担当教員とし、副査については、システム情報工学研究群大学院担当教員 2 名以上を含むものとする。 主査は、修士論文審査委員会を開催し、学位論文または特定課題研究報告書の審査に係る基準に従い審査し、合否判定を行う。上記の評価項目すべてについて、学位論文（修士）としての水準に達していると認められるものを、最終（口述）試験を経た上で合格とする。

情報理工学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（工学）
Master's Program in Computer Science / Master of Engineering

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

「情報」の生成、処理、利用を目的とした、計算機、ネットワーク、セキュリティなどの基盤的な技術から、Web アプリケーション、ユーザインターフェース、音声画像認識、高性能計算といった応用技術までをカバーする、数理情報工学、知能ソフトウェア、ソフトウェアシステム、計算機工学、メディア工学、知能・情報工学に関する専門知識と研究能力、工学分野の幅広い基礎知識と倫理観を備えるとともに、修士論文作成に向けた研究指導を通して、理工情報生命の中の複数分野にわたる広い視野に立って問題を発見し解決できる人材を養成するための教育を行う。

教育課程の編成方針	− 本学位プログラムでは、研究群共通科目群に専門科目と専門基礎科目、学位プログラム科目群に専門科目と専門基礎科目を編成する。 −「学位プログラム科目群の必修科目」及び「研究群共通科目群の専門基礎科目」により工学基礎力を身に付ける。 −「研究群共通科目群」により、情報理工学分野の専門知識を身に付ける。 −「学位プログラム科目群の必修科目」により、指導教員のアドバイスを受けながら専門分野における研究活動を行い、それを通じて知の活用力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力に加え、情報理工学分野の専門知識、専門分野の研究力、プレゼンテーション能力、倫理観を身に付ける。 −「研究群共通科目群の専門基礎科目」により、知の活用力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、国際性、情報理工学分野の専門知識、専門分野の研究力、を修得する。 − セミナー及び「修士論文中間発表会」により、プレゼンテーション能力を身に付ける。 −「PBL（Project Based Learning）型授業」においてチームによるソフトウェア開発を経験し、開発力を身に付けるとともに、コミュニケーション能力、チームワーク力を涵養する。 −「大学院共通科目」、「学術院共通専門基盤科目」、「研究群共通科目」等により、情報理工学分野を含めた幅広い分野に関する専門知識を身に付ける。 − TA（Teaching Assistant）の活動や研究室での後輩への研究指導などを通じて、マネジメント能力を身につける。 −「学位プログラム科目群の必修科目」による研究活動に加えて、e-learning の受講により倫理観を身につける。

学修の方法 特色的な教育	− 各学生は、指導教員のアドバイスを受けながら、各専門分野における研究課題を設定し研究を進める。 −「研究群共通科目群の専門基礎科目」、「大学院共通科目」を受講することで汎用的な知識・能力等を、「学術院共通専門基盤科目」、「研究群共通科目群」、「学位プログラム科目群」を受講することで専門的知識・能力等を身に付ける。 −「PBL（Project Based Learning）型授業」を受講することで、チームワーク力、コミュニケーション能力を向上させる。 − 得られた研究成果は、セミナーや「修士論文中間発表会」で発表し、指導教員だけでなく、参加学生や教員からフィードバックを得るとともに、国内外の研究集会あるいは学術雑誌等に発表する。 − インターンシップ科目を受講して企業や研究機関等へのインターンシップに参加することで、コミュニケーション能力などを向上させる。 − 英語授業を一定数以上履修することで、「情報理工学英語プログラム修了認定」を行い、国際性を向上させる。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	本プログラムでは、情報分野や数理分野に関する基礎的素養を持ち、大学院において情報分野あるいは情報数理分野に関する専門的知識や技術力、基礎的研究開発能力、実践力を身につける強い意欲を持つ人材を国内外から広く求める。
入学者選抜方針	− 学内外から優秀かつ多様な人材を受け入れるため、推薦入試、一般入試、及び、社会人特別選抜等、時期および募集人数の異なる複数の入学試験を実施する。 − 外国語の成績には英語能力検定試験（TOEIC、TOEFL 等）のスコアを利用する。 − 一般入試、推薦入試及び社会人特別選抜では、書類および口述試験によってコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等を含む総合的な能力を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 達成度評価シートにより入学時に学習計画を立て、指導教員とともに適宜見直しを行うことで、学修意欲を向上させる。 − 指定された英語授業を一定数以上履修することで認定される「情報理工学英語プログラム修了認定」制度により、英語学修の意欲を向上させる。
学生同士の 交流機会	− 留学生向けのチューター制度により学生間の交流を促進する。 − セミナーにおいて教員だけでなく、学生同士のディスカッションの機会を設けることで、学生間の交流を促進する。 − TA（Teaching Assistant）の活動や研究室での後輩への研究指導などを通じて、学生間交流の機会を設ける。

教員との交流機会	− 学生・教職員連絡会を定期的に開催し、教員との交流の機会を設ける。 − 研究室での少人数のゼミや教員が主動する研究プロジェクトへの参画を通して、教員との交流を促進する。 − TA（Teaching Assistant）の活動により授業の補助を行うことで､教員との交流の機会を設ける。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

− 達成度評価において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
− 授業評価アンケートを実施し、学位プログラム内で結果を共有することで、担当教員による授業の振り返りの機会を作ることにより、教育の質の保証と改善に努める。
− 全学 FD（Faculty Development）講演会・研修会に加えて、必要な題材に関して独自の FD 講演会・研修会を行い、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

知能機能システム学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Intelligent and Mechanical Interaction Systems

■ 修士（工学）
■ Master of Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

工学分野の基礎知識と倫理観を備えるとともに、知能機能システム（人・社会・自然界における複雑な現象を表す数理モデルや、数学・物理学・情報学などの理論に基づいて構成され、さまざまな機能をもつ要素が連携協調して実社会に貢献する工学システム）に関する専門知識と技術、研究能力を身に付け、広い視野に立って問題を発見し解決できる高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	工学分野の高度専門職業人にふさわしい基礎知識と学力、倫理観を備えるとともに、知能機能システムに関する専門知識と技術および研究力をもち、工学分野における社会的または学術的意義のある問題を見極めてその解決に向けて貢献することができる人材。
修了後の進路	大学院博士後期課程、電気・機械・情報通信分野の企業において製品・システムなどの開発に従事する専門技術者

知能機能システム学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（工学）
Master's Program in Intelligent and Mechanical Interaction Systems / Master of Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	特別研究、セミナー、コラボラトリー演習、インターンシップ、査読有論文、学会発表、特許
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	特別研究、セミナー、コアスタディ、コラボラトリー演習、計画調書作成演習、特別実験、インターンシップ、達成度自己点検、異分野の研究
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	特別研究、セミナー、コアスタディ、コラボラトリー演習、研究発表演習、インターンシップ、学会発表、TA 経験
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	特別研究、セミナー、コラボラトリー演習、特別実験、インターンシップ、チームでのコンテスト参加、TA 経験
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	特別研究、TOEIC 演習、研究発表演習 b、海外インターンシップ、国外での活動経験、外国人（留学生）との共同研究等、TOEIC ／ TOEFL 得点、英語での発表
	6. 研究力：知能機能システム分野において適切な研究課題を設定し、研究を遂行して有意義な成果を上げる能力とそのための基本的な技術	①知能機能システム分野の研究課題を適切に設定できるか ②知能機能システム分野の研究を行うための基本的な技術はあるか ③知能機能システム分野の研究を遂行して有意義な成果を上げることができるか	特別研究、セミナー、コアスタディ、コラボラトリー演習、ツール演習科目、数理系基礎科目、特別実験、研究発表演習、計画調書作成演習、TOEIC 演習、学会発表、雑誌論文、修士論文

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：工学分野の高度専門職業人にふさわしい基礎知識と学力、および知能機能システム分野における高度な専門知識と運用能力	①システム情報工学分野の基礎的な専門知識をもつか ②知能機能システム分野で広く用いられる数理的な知識と能力を備えているか ③知能機能システム分野における高度な専門知識を修得し、その運用能力を備えているか	研究群共通科目、特別研究、セミナー、数理系基礎科目、コラボラトリー演習、研究発表演習、学会発表、修士論文
	8. 倫理観：工学分野の基礎的研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	①研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか ②ヒトを対象とする研究などに関する倫理的知識をもち、研究に必要な手続きについて理解しているか	コアスタディ、特別研究、論文投稿演習、INFOSS 情報倫理、APRIN、研究倫理委員会承認
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価基準表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 知能機能システムセミナーⅠにおいて、1年次の研究成果を発表させ、評価する。 – 知能機能システムセミナーⅡにおいて、学位論文の基となる研究成果について発表させ、評価する。 – 達成度自己点検の結果を指導教員が確認する形で、達成度評価を随時実施する。 – 最終試験として達成度審査を行い、合格することを学位授与の要件とする。 達成度審査は、別途定める達成度評価基準表に基づき、指導教員が作成した評価案について、達成度審査委員会が確認する形で実施する。 ＜最終試験に係る基準＞ （汎用コンピテンス）知能機能システム学位プログラム（前期課程）修了生にふさわしい、知の活用力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力、国際性を身に付けているか。 （研究力）知能機能システム分野において適切な研究課題を設定し、研究を遂行して有意義な成果を上げる能力と、そのための基本的な技術を備えているか。 （専門知識）工学分野の高度専門職業人にふさわしい基礎知識と学力、ならびに知能機能システム分野における高度な専門知識と運用能力を備えているか。 （倫理観）工学分野の基礎的研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識を備えているか。		

学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 関連分野の先行研究の把握に基づいて、工学における当該研究の意義や位置づけが述べられているか。 2. 工学分野のオリジナルな研究成果が、学会等で発表できる程度に含まれているか。 3. 研究結果に信頼性が認められるか。 4. 研究結果に対して適切な考察がなされ、妥当な結論が導かれているか。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が修士学位論文に相応しい形式にまとめてあるか。 ＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 修士論文審査委員会は、システム情報工学研究群大学院担当教員のうちから、主査 1 名及び副査 2 名以上で組織するものとする。ただし、必要がある場合には、他研究群または他大学大学院の教員、研究所の研究員等を副査とすることができる。主査は研究指導担当教員とし、副査については、システム情報工学研究群大学院担当教員 2 名以上を含むものとする。 修士論文審査委員会は、学位論文の審査に係る基準に従い論文を審査し、合否判定を行う。上記 1. ～ 5. の評価項目すべてについて、学位論文（修士）としての水準に達していると認められるものを、口述試験を経た上で合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

知能機能システム（システムデザイン、人間･機械･ロボットシステム、計測･制御工学、コミュニケーションシステム）に関する専門知識と研究能力、工学分野の幅広い基礎知識と倫理観を備えるとともに、理工情報生命の中の複数分野にわたる広い視野に立って問題を発見し解決できる高度専門職業人を養成するための教育を行う。

教育課程の編成方針	教育課程は、知能機能システムに関する研究能力を高めることを第一の目的とし、専門知識や倫理観、汎用的知識・能力は主としてその過程で養われる（必要に応じて研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目および大学院共通科目を履修することによって補う）よう編成し、研究群共通科目群に専門科目、学位プログラム科目群に専門科目と専門基礎科目を編成する。 – 主に特別研究（知能機能特別研究 I、II）、セミナー（知能機能システムセミナー I、II）、コラボラトリー演習（知能機能システムコラボラトリー演習 Ia、Ib、IIa、IIb）により、知の活用力を身に付ける。 – 主に特別研究、セミナー、計画調書作成演習（知能機能システム計画調書作成演習 I、II）により、マネジメント能力を身に付ける。 – 主に特別研究、セミナー、研究発表演習（知能機能システム研究発表演習 Ia、Ib、IIa、IIb）により、コミュニケーション能力を身に付ける。 – 主に特別研究、論文発表演習、コラボラトリー演習、特別実験（知能システム特別実験 a、b、機能システム特別実験）および TA 経験や学外活動などにより、チームワーク力を身に付ける。 – 主に特別研究、TOEIC 演習（知能機能システム TOEIC 演習 I、II）、英語での研究発表などにより、国際性を身に付ける。

教育課程の編成方針	− 主に特別研究、知能機能システムコアスタディ、ツール演習科目（知能機能システムデータ解析演習、知能システムツール演習 a、b、機能システムツール演習）、数理系基礎科目（知能機能システム数学基礎、知能システム理論基礎、機能システム数理基礎）、TOEIC 演習、特別実験、コラボラトリー演習、計画調書作成演習などにより、研究力を身に付ける。 − 主に特別研究、数理系基礎科目、研究群共通科目（主として知能機能システム分野）、コラボラトリー演習などにより、専門知識を身に付ける。 − 主に特別研究、コアスタディ、倫理に関する e-learning などにより、倫理観を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− さまざまな学問的バックグラウンドをもつ学生に対して、入学後まず研究を行うために必要な基礎的知識や技術を習得するための授業を集中的に行う。並行して社会的・学術的に意義のある研究課題を自ら見つけ出すよう指導する。 − 各学生は、その課題について研究を行いながら、より専門的な知識や技術について授業等を通じて主体的に学ぶ。また、学位プログラムを越えた複数指導体制の利点を生かし、異なる専門分野の副指導教員のゼミに参加するなどして指導を受け、幅広い視点から問題を捉える俯瞰力を育成する。 − 得られた研究成果は、早い段階でセミナーや学会等で発表させ、多くの研究者から評価を受けるよう指導する。これによって、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を高めると共に、さらなる研究の推進やより高度な専門知識・技術の習得への原動力を与える。 − これらと並行して、各学生は達成度自己点検を随時行う。これによって、課程修了のために不足している知識や能力の修得を促す。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	知能機能システム分野の学習および研究に必要な数学力と英語力、数理的な思考力があり、修士の学位にふさわしい研究力、専門知識、倫理観を身に付ける資質をもち、かつ知能機能システム分野の専門技術者や研究者を目指す人材を求める。
入学者選抜方針	学内、学外、社会人を問わず広く優秀な人材を求めることを基本方針とする。入学者の選抜にあたっては、推薦入学試験、一般入学試験、社会人特別選抜などの入学者選抜方式によって多様な入学志願者に対応するとともに、募集定員を分割し同一年度内に複数回の入学試験を実施する。試験区分にかかわらず口述試験を必須とし、これらに加えて 8 月実施（一般入学試験及び社会人特別選抜）のみ成績証明書を加えて選抜するものとする。また、外国語の成績には英語能力検定試験（TOEIC、TOEFL 等）のスコアを利用する。 − 推薦入学試験（7 月実施）では、当学位プログラムを第一志望とし、成績が優秀で知能機能システム分野の研究に必要な能力が特に優れた者を選抜する。 − 第 1 回一般入学試験（8 月実施）では、数学・英語等の基礎学力が高く、志望理由が明確で研究計画の具体性や着想の点で優れている者を選抜する。また、第 2 回一般入学試験(1-2 月実施)では、それらに加えて卒業研究（またはそれに代わるもの）を評価して選抜する。 − 社会人特別選抜（8 月実施、1-2 月実施）では、これまでの研究または社会的経験を評価に加え、合否の判定も一般入学試験とは独立に行うことによって、意欲と能力のある社会人（または社会的経験を有する者）を積極的に受け入れる。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	学生の主体的かつ効果的な学修を支援するために、複数の取り組みを実施する。達成度自己点検シートを活用し、学生が自身の学修成果を可視化しながら進捗を自己評価することで、指導教員が学修状況を的確に把握し、適切な履修指導を行う。また、グローバル・マルチメンターシステム（GMMS）を通じて、学外の研究者との交流の機会を設け、学生の研究活動に対する多角的な批評や議論を促進し、研究の高度化を図る。「修学×キャリア」ハイブリッド支援システム（LCHS）では、企業の研究者や卒業生等との交流を通じて、学生の高度な研究モチベーションを喚起し、博士後期課程進学による専門的なキャリアパス形成への意欲を高める支援を行う。これらの支援体制により、学生が自律的に学修を進めるとともに、研究活動の質を高め、将来の進路選択においても専門性を活かしたキャリア形成を可能とする。
学生同士の交流機会	学生の学修意欲および研究の質の向上を図るため、学生同士の交流機会を提供する。大学院セミナーは、学生が順番に自身の研究内容を他の学生に分かりやすく説明し、議論を行う形式で実施する。ポスター発表会は、学生が一堂に会し、対面形式で一日かけて研究成果を発表し、活発な意見交換を行う場とする。これらの活動は、学生間の理解を深めるとともに、表現力や批判的思考力の向上を促す。 また、グローバル・マルチメンターシステム（GMMS）および「修学×キャリア」ハイブリッド支援システム（LCHS）においても、複数の学生が参加できる体制とし、研究者や企業人との対話を通じて、学生間の情報共有や相互刺激を促す。これらの活動を通じて、学生同士のピア効果を高め、学修環境の活性化と研究の深化を支援する。
教員との交流機会	学生の学修意欲および研究の質の向上を図るため、教員との交流機会を積極的に提供する。大学院セミナーにおいては、学生が自身の研究内容を発表し、教員からの助言や質問を受けることで、研究の方向性や論理構成を深める機会とする。ポスター発表会では、教員と学生が一堂に会し、対面形式で研究成果に関する議論を行うことで、研究の精度を高める。さらに、特別実験科目におけるグループプロジェクトを通じて、教員の指導のもとで学生が協働しながら課題に取り組むことで、実践的な研究能力とチームワーク力を養う。大学院懇談会では、教員と学生が自由に意見交換を行う場を設け、研究活動や進路に関する相談を可能とする。加えて、グローバル・マルチメンターシステム（GMMS）および「修学×キャリア」ハイブリッド支援システム（LCHS）においても、教員が外部の研究者や企業人と連携し、学生に対して多角的な指導と助言を行う体制を整える。これらの活動を通じて、学生と教員の密接な交流を促進し、学修環境の充実と研究の深化を支援する。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育の質の保証および継続的な改善を図るため、複数の体制と仕組みを整備する。新任教員に対しては、教育内容や指導方法に関する FD（Faculty Development）を実施し、教育力の向上を支援する。加えて、達成度評価に関する FD を含む教員向けの研修を定期的に行い、教育活動の質的向上を促進する。また、達成度審査委員会においては、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。さらに、PDCA 委員会を設置し、ポスター発表会での企業との懇談会における助言も参考に、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

構造エネルギー工学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Engineering Mechanics and Energy

■ 修士（工学）
■ Master of Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

機械、建築、社会基盤、エネルギー、航空宇宙などの工学分野において高度な専門知識を有するだけでなく、関連する周辺分野にも横断的な視野を持ち、本質的な問題を抽出して独自の解決方法が提案でき、その成果を国の内外に効果的に発信できる能力を有する研究者および高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	機械、建築、社会基盤、エネルギー、航空宇宙などの工学分野に興味を持ち、人類の発展に貢献する発想豊かな技術者あるいは研究者を志す人材。更に、高度な専門知識だけでなく、関連する周辺分野への横断的な視野を獲得する意思のある人材。
修了後の進路	機械、建築、社会基盤、エネルギー、航空宇宙分野などの民間企業、国または地方自治体、国立研究開発法人、大学院博士後期課程・博士学位プログラムなど

構造エネルギー工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（工学）
Master's Program in Engineering Mechanics and Energy / Master of Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	研究群共通・専門科目、学位プログラム専門科目、特別研究、特別演習、インターンシップ科目、修士論文作成、学会発表、論文執筆など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	特別研究、特別演習、達成度自己点検、修士論文に関わる研究計画の立案など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	特別研究、特別演習、インターンシップ、学会発表、ポスター発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	特別研究、特別演習、インターンシップ、TA 経験、研究室活動など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	特別研究、特別演習、インターンシップ、EME 国際セミナー、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文執筆など
	6. 研究力：構造エネルギー工学分野の問題を抽出して解決法を提案し実行できる能力	①構造エネルギー工学分野の研究課題を適切に設定できるか ②構造エネルギー工学分野の研究を行うための基本的な技術はあるか ③構造エネルギー工学分野の研究を遂行して成果を上げることができるか	特別演習、特別研究、学会発表、論文執筆、修士論文

構造エネルギー工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（工学）
Master's Program in Engineering Mechanics and Energy / Master of Engineering

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：構造エネルギー工学分野における基本的学力と高度な専門知識を運用する能力	①システム情報工学分野の基礎的な専門知識をもつか ②構造エネルギー工学分野における高度な専門知識を修得し、運用することができるか	研究群共通科目、学位プログラム専門科目、学会発表、論文執筆、修士論文
	8. 倫理観：工学分野の高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか	特別演習、特別研究、インターンシップ、INFOSS 情報倫理、APRIN
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は、達成度評価表に基づく達成度評価によって、以下の段階毎に、学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 構造エネルギー工学前期特別演習 I において 1 年次の研究成果を発表し、評価およびフィードバックを受ける。 – 構造エネルギー工学前期特別演習 II において、各人が取り組んでいる研究の位置づけを行うとともに、2 年次の研究成果を発表し、評価およびフィードバックを受ける。 – 春学期および秋学期に達成度評価表を確認し評価する。 – 学位論文審査及び最終試験において学位論文の内容に関する発表および学位審査を受けるとともに、達成度評価表の評価を受ける。		
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 関連分野の研究動向、先行研究のレビューを行い、当該研究の意義、位置づけが明確にされていること。 2. 工学の発展に寄与するオリジナルな研究成果が含まれていること。 3. 研究成果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究の結論が客観的な根拠、合理的な演繹に基づいていること。 5. 上記の項目の全てが適切な論文構成、明快な記述により取り纏められていること。また、論文の内容を的確に説明する題目が与えられていること。 ＜最終試験に係る基準＞ 学位論文の内容について説明を求め、上記の 1. から 5. の基準を満たすことが確認されるとともに、以下の能力、知識等を有すること。 1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力 2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力 3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力 4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力 5. 国際性：国際社会に貢献する意識 6. 研究力：構造エネルギー工学分野の問題を抽出して解決法を提案し実行できる能力		

学位論文に関する評価の基準	7. 専門知識：構造エネルギー工学分野における基本的学力と高度な専門知識を運用する能力 8. 倫理観：工学分野の高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識 ＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 修士論文審査委員会は、システム情報工学研究群大学院担当教員のうちから、主査 1 名及び副査 2 名以上で組織するものとする。ただし、必要がある場合には、他研究群または他大学大学院の教員、研究所の研究員等を副査とすることができる。主査は研究指導担当教員とする。 主査は、修士論文審査委員会を開催し、学位論文の審査に係る基準に従い論文を審査し、合否判定を行う。 上記の評価項目すべてについて、学位論文（修士）としての水準に達していると認められるものを、最終（口述）試験を経た上で合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

ディプロマ・ポリシー（DP）が達成されるようにカリキュラムを編成する。即ち、機械、建築、社会基盤、エネルギー、航空宇宙などの工学分野における基礎理論や最先端技術を深く学ぶとともに、理工情報生命の中の複数分野についても広く学修することで、通常の縦割り型の工学系専攻では得られないような広い視野を持つ人材を養成する教育を行う。

教育課程の編成方針	本学位プログラムでは、研究群共通科目群に専門科目と専門基礎科目、学位プログラム科目群に専門科目と専門基礎科目を編成する。必修科目 12 単位に加えて、「構造・防災・信頼性工学」「固体力学・材料工学」「流体・環境工学」「熱流体・エネルギー工学」の分野に専門基礎科目と専門科目を設定する。これらの科目を 18 単位以上修得する必要がある。必修の専門科目はプレゼンテーション・コミュニケーション能力や広い視野を養成する科目であり、研究群共通科目群は各々の分野における基礎理論や最先端技術を学ぶ科目である。さらに問題設定から工学的手段による解決までのプロセスを理解し解決手段を開発するプロジェクト科目も開講し、構造エネルギー工学に関わる現実の問題についての知識を深める。以上の学修と専門分野における研究を修士論文にまとめることによって、DP に挙げた各項目が達成される。なお、更に幅広い知識・研究能力の獲得を目的とした他研究群開設科目、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目等の履修も奨励する。 （汎用的知識・能力） – 研究群共通科目及び学位プログラム科目群の履修、特別研究、特別演習などにより知の活用力を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、修士論文に関わる研究計画の立案などによりマネジメント能力を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、インターンシップ、学会発表などによりコミュニケーション能力を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、インターンシップ、TA 経験、研究室活動などによりチームワーク力を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、インターンシップ、EME 国際セミナー、外国人（留学生を含む）との共同研究、国際会議発表、英語論文執筆などにより国際性を身に付ける。

教育課程の編成方針	（専門的知識・能力） – 特別演習、特別研究、学会発表、論文執筆、修士論文などにより研究力を身に付ける。 – 研究群共通科目群及び学位プログラム科目群の履修、学会発表、論文執筆、修士論文などにより専門分野の高度な知識を身に付ける。 – 研究群共通科目群及び学位プログラム科目群の履修、特別研究、特別演習などにより横断的な視点を身に付ける。 – 特別演習、特別研究などにより問題を抽出し独自の解決法を提案できる能力を身に付ける。 – 特別演習、特別研究、学会発表、修士論文などにより成果を国内外に発信できる能力を身に付ける。 – 特別演習、特別研究、倫理に関する e-learning などにより倫理観を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	– 授業科目の履修モデルに従い学修を進める。 – 各学生は、課題について研究を行いながら、より専門的な知識や技術について授業等を通じて主体的に学ぶ。 – 指導教員のアドバイスを得て、各専門分野における研究課題を設定し修士の研究を進める。 – 得られた研究成果は、セミナーや学会等で発表させ、多くの研究者から評価を受けるよう指導する。これによって、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を高めると共に、さらなる研究の推進やより高度な専門知識・技術の習得への原動力を与える。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	学士課程レベルの数学、物理学および英語の基礎学力を十分に備えた上で、機械、建築、社会基盤、エネルギー、航空宇宙などの工学分野に興味を持ち、人類の発展に貢献する発想豊かな技術者あるいは研究者を志す人材を求める。
入学者選抜方針	学外から優秀な人材を積極的に受け入れるため、他大学の出身者、社会人、外国人留学生が受験しやすい入試方法を採用する。推薦入試、一般入試および社会人特別選抜により多様な入学志願者に対応するとともに、募集定員を分割し同一年度内に複数回の入学試験を実施する。一般入試では口述試験の結果、および英語能力検定試験（TOEIC、TOEFL 等）のスコアに基づく外国語の成績を利用して選抜する。推薦入試および社会人特別選抜では口述試験の結果により総合的に選抜する。 – 推薦入試では、成績が特に優秀で構造エネルギー工学分野における十分な知識と研究能力を有する者を選抜する。 – 一般入試では、工学系の学士課程を優秀な成績で卒業できる基礎学力及び研究能力を備えた人材を選抜する。。 – 社会人特別選抜では、上記の基礎学力及び研究能力に加え、社会人としての実績や経験を評価する。

構造エネルギー工学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（工学）
Master's Program in Engineering Mechanics and Energy / Master of Engineering

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	指導教員は研究室単位のゼミ活動ならびに個別指導を行い、常に学生の学修状況を把握する。副指導教員は春学期・秋学期に学生と面談を行い、講義の履修計画、研究計画とその進捗、進路（主に就職活動）などについて報告を受け、アドバイスを行う。この際、学生は達成度評価表、履修研究等計画表を示し、自身の状況を客観化した上で面談に臨む。
学生同士の交流機会	学生は大学院セミナーで研究発表、質疑応答を行って、他学生が進めている研究活動を理解するとともに、互いに批評を得る。学位プログラムの全学生を対象に学生教員連絡会を開催し、互いの学修状況、学生生活等について問題点、改善点の共通認識を持つ。多くの学生は PBL 科目を履修し、他の受講者と協調して課題に取り組む機会を得ることができる。
教員との交流機会	指導教員は研究室単位のゼミ活動ならびに個別指導を行い、常に学生の学修状況を把握する。副指導教員は春学期・秋学期に学生と面談を行い、講義の履修計画、研究計画とその進捗、進路（主に就職活動）などについて報告を受け、アドバイスを行う。学位プログラムの全学生を対象に学生教員連絡会を開催し、講義、研究、学生生活等について意見交換を行う。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

指導教員と副指導教員による確認とフィードバックの実施状況を PDCA 委員会が確認し、全教員と学生が確実に行っていることをモニタリングする。達成度評価表及び講義の成績評価を裏付ける成績根拠資料を収集・保存し、講義内容、シラバス及び達成度評価の改善検討に用いる。学生教員連絡会であった学生からの要望への対処を適宜行う。

ライフイノベーション（生物情報）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation（Bioinformatics）

■ 修士（生物情報学）
■ Master of Bioinformatics

人材養成目的 / Program Educational Objectives

ライフイノベーション学位プログラムでは、分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度な専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いてライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、革新的医薬品・機能性食品の研究開発分野及びその保全と管理の分野でグローバルに活躍する高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	生物情報学的アプローチを通じてグローバル社会の諸問題の解決に貢献するには、国際社会で活躍できるコミュニケーション能力、語学力、生物情報学およびその関連分野の知識を身に付け、解決すべき問題に科学的に立ち向かう突破力が必要である。本プログラム前期課程を通して、「生命科学と情報科学の発展的な知識・技能を持ち、生物情報学における問題設定・解決に至るまでのプロセスを実践できる研究者を目指すための博士論文研究基礎力を有する者及び高度専門職業人」を育成する。
修了後の進路	企業や研究機関が本学位プログラム教育に携わる事により、社会が求める人材を育成することが可能となり、より即戦力をもつ人材として、本プログラム修了者の社会的需要は高まると期待される。国内外の民間企業、研究機関、教育機関、行政機関に就職し、健康科学、医薬品、食料、環境の分野において、研究者、技術者、経営者、行政官となることが期待される。

ライフイノベーション（生物情報）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（生物情報学）
Master's Program in Life Science Innovation（Bioinformatics）/ Master of Bioinformatics

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（生物情報学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、修士論文作成
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、レギュラトリーサイエンス、達成度評価
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、T-LSI student workshop
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	レギュラトリーサイエンス、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、修士論文作成
	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野における新たな展開を切り開く能力	①ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得し、諸問題を俯瞰的に捉えることができるか ②専門分野に捕らわれずに新たな技能・知識を修得する意欲はあるか ③ライフサイエンス分野に関わる社会のニーズを理解しているか ④生物情報学に関する課題解決のために適切な研究計画を立案し、遂行することができるか	バイオインフォマティクス概論、創薬概論、食品科学概論、バイオリソース概論、ライフイノベーション修士研究、セミナーへの参加

ライフイノベーション（生物情報）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（生物情報学）
Master's Program in Life Science Innovation（Bioinformatics）/ Master of Bioinformatics

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：専門分野における高度な知識と運用能力	①生物情報学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した知識を課題解決に役立てることができたか	遺伝子解析と機能ゲノミクス、ライフイノベーション修士研究
	8. 高度英語実践力：ライフサイエンス分野において通用する実践的な英語の運用能力	①ライフサイエンス分野における諸問題に関して自身の理解や意見を英語で的確に説明できるか ②研究立案書や報告書などを英語で作成することができるか	ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、達成度評価、T-LSI student workshop、修士論文作成
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法により評価する。 – 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 – 1 年次末に達成度評価 I を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 – 2 年次に達成度評価 II および最終試験を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて審査する。		
学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施した、生物情報分野の発展に貢献する新奇な研究成果であること。学位論文が、論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査 1 名、副査 2 名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査 2 名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を 1 名以上含むものとする。専門委員会 3 名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ 1 名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会 3 名以上のうち、プログラム担当以外の者を 1 名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。その際、学位論文の内容に関する発表を論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、生物情報分野の専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。		

ライフイノベーション（生物情報）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（生物情報学）
Master's Program in Life Science Innovation（Bioinformatics）/ Master of Bioinformatics

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学教員だけでなく、つくばライフサイエンス推進協議会に所属する研究機関等の協働大学院教員が積極的に教育研究に参画する事により、学生は、社会の未解決課題を学修し、生物情報分野において新たな展開を切り開くことを目指し、研究活動を行う。本学位プログラムではグローバルに活躍する高度専門職業人を養成することを目的とするため、講義は全て英語で行われ、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者による講義・セミナーを編成する。分野横断的な俯瞰力を養成するために、ライフサイエンス分野に関する全般的な基本概念を学修する基礎科目を編成する。また、キャリア教育の一環として、インターンシップ科目や研究機関等の事業内容等を学修するための科目を編成する。さらに、生物情報科学に関する専門力を養うための専門科目を編成する。

教育課程の編成方針	− 生物情報領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム 6 領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体分子材料領域）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、生物情報に関する専門力を養うための講義のほかに、各自の所属する研究室において、生物情報に関する研究指導を受ける。 − 修士論文作成等により、知の活用力を身に付ける。 −「レギュラトリーサイエンス」等により、マネジメント能力を身に付ける。 −「ライフイノベーション修士研究」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 −「ライフイノベーションチーム型演習（基礎）」等により、チームワーク力を身に付ける。 −「博士前期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 − 基礎科目、「ライフイノベーション修士研究」等により、イノベーション力を身に付ける。 − 専門科目等により、専門知識を身に付ける。 − 基礎科目、専門科目等により、高度英語実践力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 指導教員の指導のもと、情報収集方法を学び、社会のニーズを理解した上で、生物情報に関する課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行し、研究成果としてまとめる。 − 得られた研究成果は T-LSI student workshop 等で発表し、その過程において英語での発表力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得するとともに、英語によるコミュニケーション能力を向上させ、専門分野に捉われない知識の運用能力を身に付ける。 − インターンシップを行うことにより、社会人としての実践力を養う。 − 専門科目を受講することにより、専門知識を身に付ける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	生物情報分野におけるイノベーションを実現する意欲、その実現に必要な専門知識および高度英語実践力を修得するに十分な素養を持つ人材を求める。

入学者選抜方針	– 書類審査により、本学位プログラムで学ぶために必要な学士レベルの知識を有しているか、研究背景・将来の展望を英語により文章で説明できる能力があるかを評価する。 – 英語能力試験および口述試験により、生物情報分野におけるイノベーションを実現するための意欲、本学位プログラムで学ぶために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士前期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価については、面談を行い、普段の研究活動をデータに基づいてフィードバックしている。
学生同士の交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学毎年、所属教員に本学位プログラムの 3 つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための意見交換を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

社会工学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Policy and Planning Sciences

■ 博士（社会工学）
■ Doctor of Philosophy in Policy and Planning Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

資産・資源のデザイン（ファイナンス・最適化）、空間・環境のデザイン（都市計画）、組織・行動のデザイン（行動科学）の 3 つの分野全般の知識を有し、少なくとも 1 つの分野で専門家と呼ぶにふさわしい工学的なスキルを備え、自ら問題発見・問題解決のプロセスを完遂して、国際的に評価の高い研究成果を創出できる「未来構想のための工学に立脚した問題発見・解決型人材」（大学教員、高度専門職業人、研究者等）を養成する。

養成する人材像	「未来構想のための工学に立脚した問題発見・解決型人材」 社会的知識、論理的思考力、各種の工学的スキルを基盤とする「問題解決能力」と、より抽象的な事象を対象化できる「問題発見能力」を有し、工学・経済・学際系大学教員、官公庁関連職員、国際公務員、IT エンジニア、生産管理・マーケティング技術者、政府系銀行、金融アナリスト、コンサルタント、シンクタンク研究員、都市計画・まちづくりコンサルタント、建設・不動産業企画 / 開発プランナー、タウンアーキテクト、国・都道府県・市町村企画部門公務員等として活躍できる人材。
修了後の進路	工学・経済・学際系大学教員、官公庁関連職員、国際公務員、IT エンジニア、生産管理・マーケティング技術者、政府系銀行、金融アナリスト、コンサルタント、シンクタンク研究員、都市計画・まちづくりコンサルタント、建設・不動産業企画 / 開発プランナー、タウンアーキテクト、国・都道府県・市町村企画部門公務員等

社会工学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（社会工学）
Doctoral Program in Policy and Planning Sciences / Doctor of Philosophy in Policy and Planning Sciences

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（社会工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	社会工学博士特別演習 I・II・III・IV、社会工学博士特別研究 I・II、社会工学インターンシップ、学会発表、ポスター発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	社会工学博士特別演習 I・II・III・IV、社会工学博士特別研究 I・II、社会工学インターンシップ、社会工学ファシリテーター育成プログラム I・II、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	社会工学博士特別演習 I・II・III・IV、社会工学博士特別研究 I・II、社会工学インターンシップ、ファシリテーター育成プログラム I･II、学会発表、ポスター発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	社会工学博士特別演習 I・II・III・IV、社会工学博士特別研究 I・II、社会工学インターンシップ、社会工学ファシリテーター育成プログラム III・VI、大学院共通科目（JAPIC 科目）、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	社会工学博士特別演習 I・II・III・IV、社会工学博士特別研究 I・II、大学院共通科目（国際性養成科目群 ）、社会工学インターンシップ、社会工学ファシリテーター育成プログラム III・VI、国際的な活動を伴う科目、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：社会工学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①社会工学分野の研究課題を適切に設定でき、その研究を行うための高度な技術はあるか ②社会工学分野の先端的研究を遂行して独創的な成果を上げることができるか ③国際会議等において英語で研究成果を発表し議論することができるか	社会工学博士特別演習 I・II・III・IV、社会工学博士特別研究 I・II、社会工学ファシリテーター育成プログラム I・II、社会工学博士特別演習 I ～ IV、学会誌論文執筆、学会発表、ポスター発表など
	7. 専門知識：社会工学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①社会現象理解（Find）：社会工学分野における基本的な理論や経験則についての高度な知識にもとづき、社会現象を演繹的に理解できるか ②データ解析（Analyze）…データの分析に基づき社会現象を帰納的に理解できるか ③制度設計（Plan）…社会現象の理解にもとづき社会を改革する制度を設計できるか ④実験と提言（Do）…設計した制度にもとづき具体的な提言や社会実験を行えるか ⑤評価と測定（See）…社会実験や提言の結果を自ら批判的に測定・評価し、社会現象理解を深化させられるか	社会工学特別講義、社会工学インターンシップ、社会工学特別演習 I ～ IV、学会発表、ポスター発表など
	8. 倫理観：社会工学分野の高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	①研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか ②ヒトを対象とする研究に関する倫理と研究に必要な手続きについて理解しているか	社会工学博士特別演習 I・II・III・IV、社会工学博士特別研究 I・II、社会工学ファシリテーター育成プレプログラム III・IV、社会工学インターンシップ、INFOSS 情報倫理、博論ガイダンス（研究倫理について）
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価シート」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。社会工学博士特別演習 I および III 実施時には、達成度評価シートを用いて、自身の満たすべきコンピテンスの修得状況を文書化することで指導教員と伴に確認する。社会工学博士特別演習 I~IV の 4 つの段階で、履修ならびに博士論文の進捗について、指導教員を含めた複数の教員による審査・評価を受ける。さらに社会工学博士特別研究 I における論文審査委員会による予備審査、社会工学博士特別研究 II における最終試験の 2 つの段階を経て、学位審査が行われる。		

学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 研究テーマの意義：社会の諸事象に関わる問題を発見し、それを解決することが学術的、もしくは、社会に対する貢献に繋がる十分な意義を有すると認められるか。 2. 先行研究の理解：研究テーマと関連する既存の理論と研究を広範かつ精確に把握し、客観的に評価が行われているかが問われる。また、その理解にもとづき、自己の研究が文献に対していかなるユニークな貢献を果たし得るのか、社会・経済、都市環境、経営組織とそこで働く人々にとって如何なる貢献或いは価値を持ち得るか、等について深く議論されているか。 3. 研究方法の理解と妥当性: 研究テーマを探求するための方法（論証、実験、シミュレーション、調査、サーベイ等の設計とデータの解析、等）を深く理解し、研究テーマの探求に向け、それを使いこなすスキルを十分に修得したと評価し得るか。 4. 研究結果の提示と解釈の妥当性：研究結果を学術的に提示するスキル、及びそれを演繹的、或いは帰納的に解釈する思考力を備えていると評価し得るか。 5. 研究総括：上記 1 ～ 4 のステップを俯瞰し、また、自己の研究の強みと弱みを客観的に評価したうえで、学術的貢献性、及び、将来の研究動向に向けて意義のある議論を展開出来ているか。 6. オリジナリティ：既存の知見に対して新知識を付加するオリジナル・リサーチと呼ぶにふさわしいか。 7. 論文の形式：論文に用いられた文章表現の的確さ、図表・文献の提示や引用、及び文献リストの作成が学術論文としてふさわしい水準に達しているか。 ＜最終試験に係る基準＞ 1.【研究力】社会工学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できるか。 2.【専門知識】社会工学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力を有しているか。 3.【倫理観】社会工学分野の高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識を有しているか。 ＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 博士論文審査委員会の審査委員は、主査 1 名、副査 3 名以上の構成とする。主査ならびに副査 2 名以上はシステム情報工学研究群大学院担当教員とし、副査の内 1 名以上は社会工学学位プログラム担当以外から選出する。 主査は、博士論文審査委員会を開催し、学位論文の審査に係る基準に従い論文を審査し、合否判定を行う。上記 1. ～ 7. の評価項目すべてについて、学位論文（博士）としての水準に達していると認められるものを、最終（口述）試験を経た上で合格とする。

社会工学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（社会工学）
Doctoral Program in Policy and Planning Sciences / Doctor of Philosophy in Policy and Planning Sciences

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

「未来構想のための工学に立脚した問題発見・解決型人材」として問題を発見し定式化・抽象化できるような「問題発見能力」を育むため、以下の三つの柱からなる教育課程を編成し、①資産・資源のデザイン（ファイナンス／最適化）②空間・環境のデザイン（都市計画）③組織・行動のデザイン（行動科学）に関する専門知識と研究能力、工学分野の幅広い基礎知識と倫理観を備えるとともに、理工情報生命の中の複数分野にわたる広い視野に立って問題を発見し解決できる高度専門職業人を養成するための教育を行う。

- 大学院共通科目や学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目群の修得による幅広い知識の修得
- リサーチユニット等を活用した複眼的な研究指導
- 自ら研究課題を設定し研究方法を構築できる力を養成するマネジメント能力育成プログラムの提供を行い、問題発見能力の修得を支援する。

また、これらを標準的な 3 年間で履修するコース以外に、1 年で修了することが可能な早期修了コース、5 年間で修了することが可能な長期コース、さらに博士前期から一貫 3 年で修了するコース（S コース）、同じく 4 年で修了するコース（A コース）、5 年で修了するコース（標準コース）、と多様な学修が可能な課程を編成する。

教育課程の編成方針	（汎用的知識・能力）については、 - 専門科目（選択）、研究群共通科目群（博士前期課程）、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目の履修により汎用的知識を身につける。 - 直接に研究に取り組む「社会工学博士特別演習 I ～ IV」「社会工学博士特別研究 I・II」により知の創成力を身につける。 -「社会工学インターンシップ」「社会工学ファシリテーター育成プログラム」科目群により、マネジメント能力・コミュニケーション能力・チームワーク力を身に付ける。 - 留学生とアクティブ・ラーニングをグループ・ワークで実施する「社会工学ファシリテーター育成プログラム」科目群、国際的な研究状況を前提にして直接に研究に取り組む「社会工学博士特別演習 I ～ IV」「社会工学博士特別研究 I・II」により国際性を身に付ける。 （専門的知識・能力）については、 「社会工学博士特別演習」「社会工学博士特別研究」などの履修により研究力を身に付ける。 - 社会工学に関する最新かつ高度専門的な知識を教授する「社会工学特別講義 I ～ II」などの研究群共通科目群により研究に必要な専門知識を身につける。 -「社会工学インターンシップ」「社会工学ファシリテーター育成プログラム」科目群により特に社会の中で活動する時に必要となる倫理観を、直接に研究に取り組む「社会工学博士特別演習 I ～ IV」「社会工学博士特別研究 I・II」により研究に関する倫理観を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	- 履修モデル①：大学院教員、履修モデル②：シンクタンクの主任研究員を参考に、専門科目を主に 1 年次に履修する。 - 上記と並行して指導教員ならびにリサーチユニットなどの研究者集団による複眼的な博士論文の指導が行われ、各研究課題について研究を進め、論文執筆にかかる専門科目 12 単位を履修する。

社会工学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（社会工学）
Doctoral Program in Policy and Planning Sciences / Doctor of Philosophy in Policy and Planning Sciences

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	工学的基礎能力（数学あるいは論理的思考力）及び資産・資源のデザイン（ファイナンス・最適化）、空間・環境のデザイン（都市計画）、組織・行動のデザイン（行動科学）の３つの分野全般の知識を有し、うち１つの分野に関する専門的知識を備えると共に、博士前期課程または修士課程修了者程度の問題解決能力を有する人材を求める。
入学者選抜方針	− 学内外から優秀かつ多様な人材を受け入れるため、内部進学制度選抜、一般入試、及び、社会人特別選抜等、時期および定員の異なる複数の入学試験を実施する。 − 入試の種別に関わらず口述試験を必須とする。 − 内部進学制度選抜では、社会工学位プログラム（博士前期課程）の修了予定者の中から、高い基礎力及び研究能力を備えた人材を選抜する。 − 一般入試では、一定の基礎力及び研究能力を備えた人材を選抜する。 − 社会人特別選抜では、基礎力及び研究能力に加え、社会人としての実績や経験を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	汎用的知識・能力を取得するための履修授業は幅広い分野から取得できる。また、社会工学特別演習 I および III、社会工学博士特別研究 I などマイルストーンとなる発表機会を持つことで、自身の研究進捗管理を促し、プレゼンテーション能力の向上も図る。
学生同士の交流機会	アクティブ・ラーニングをグループ・ワークで実施する「社会工学ファシリテーター育成プログラム」科目群や、リサーチユニットを活用した分野横断的な研究活動により学生同士の交流機会を促進する。
教員との交流機会	副指導やリサーチユニット等を活用した複数教員との研究交流体制や、複数教員と院生が参加する研究会を学位プログラムとして支援することで交流機会を促進する。院生・教員連絡会を毎年開催し、交流の機会としている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

− 学位プログラムリーダー、および、カリキュラム委員会において学修成果の評価結果を分析・検討し、教育の質の継続的な向上に努めている。
− 教学マネジメント委員会において、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施し、研修会を開催するなどして教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。
− 社会工学博士特別演習 I-IV により、定期的に研究の内容・進捗を指導教員を含めた複数の教員が評価している。学会発表や学術雑誌投稿およびそのフィードバックなどにより、研究指導を行った学生の研究に対する外部の客観的な評価を得る機会を確保している。

リスク・レジリエンス工学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Risk and Resilience Engineering

■ 博士（工学）
■ Doctor of Philosophy in Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

不安定化する昨今の社会情勢の中で、適切なリスクマネジメントに基づく「強さ」と「しなやかさ」を兼ね備えた安心・安全な国土と地域・経済・情報社会、すなわちレジリエントな社会システムの実現は最も重要な課題である。本学位プログラムでは、「工学的視点から、不測の事態や状況の変化に柔軟に対応し、求められる機能を維持提供し続け、回復する能力」、すなわち、リスクを工学的方法により分析・評価した結果をレジリエンス社会の実現のために活用できる高度な技術をもち、現実社会の問題を見据えて教育研究成果等を社会還元でき、深い理論的基盤に基づく研究能力と高度な技能・実践力を有するアカデミックなグローバル人材の養成を目的とする。

養成する人材像	高い工学基礎力をベースにリスク・レジリエンス解析・評価のための理論的基盤および高度な関連情報処理技術を修得し、それを広く総合的な視野でリスク・レジリエンス工学の対象である現実の問題に対応させ、高いコミュニケーション能力で研究チームや研究プロジェクトの中で与えられた役割分担を果たし、リーダーシップをとりつつ、工学的手段による問題設定から解決までの具体的方法を創造・開発するのみならず、国際的な場においても高いプレゼンテーション能力を発揮しつつ活躍できる人材
修了後の進路	情報通信業・運輸業・エネルギー産業・製造業・建設業・金融業・保険業・コンサルタント業・その他サービス業、大学教職員、国・民間の研究所、国家公務員、地方公務員など

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	学位プログラム提供科目、特別研究、特別演習、ケーススタディ、特別講義、インターンシップ、博士プロジェクト研究、博士 PBL 演習、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	特別研究、特別演習、ケーススタディ、インターンシップ、博士プロジェクト研究、博士 PBL 演習、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	特別研究、特別演習、インターンシップ、博士 PBL 演習、学会発表、ポスター発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	大学院共通科目（JAPIC 科目）、特別演習、博士 PBL 演習、RA・TA 経験、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、研究群共通科目、特別研究、特別演習、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 工学基礎力：工学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい知識と学力	①リスク・レジリエンス工学分野の幅広い基礎知識を有しているか ②リスク・レジリエンス工学分野の高度専門職業人としての高い学力を備えているか ③リスク・レジリエンス工学分野の学術的成果を有しているか	学位プログラム提供科目、大学院共通専門基盤科目、特別研究、特別演習、博士論文作成、学術論文作成
	7. 理論的基盤・関連技術に関する知識：工学基礎力をベースにしたリスク・レジリエンス解析・評価のための理論的基盤の知識、並びにリスク・レジリエンス解析・評価に関連する高度な情報処理技術の知識	①複雑な現象に内在するリスクを解析し、レジリエンスの観点から評価するための理論的基盤を修得しているか ②複雑な現象に内在するリスクを解析し、レジリエンスの観点から評価するための高度な情報処理技術を修得しているか	学位プログラム提供科目、研究群共通科目、特別研究、特別演習、ケーススタディ、博士論文作成、学術論文作成
	8. 現実問題に関する知識:リスク・レジリエンス工学が対象とする現実の問題に係る深い知識	リスク・レジリエンス工学の対象である多様な現実の問題に関する深い知識を有し、様々な領域における研究課題に対して評価する力を有しているか	学位プログラム提供科目、特別研究、学会・国際会議・セミナー参加、調査等
	9. 広い視野と俯瞰力：リスク・レジリエンス工学の対象を広く総合的な視野で捉える能力	リスク・レジリエンス工学の対象を捉えるための広く総合的な視野を有しているか	協働大学院教員提供科目、研究群共通科目、特別講義、インターンシップ、学会・国際会議・セミナー参加、調査等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	10. 問題設定・解決能力：リスク・レジリエンスにかかわる問題について、問題設定から工学的手段による解決までのプロセスを深く理解し、具体的解決手段を創造し開発する能力	①専門的応用能力である問題設定から独創的解決までのプロセスを広く理解し、実社会の問題を見据え、独創的方法によって具体的解決に導くことができるか ②研究プロジェクトを実施し、研究成果にまとめていく技量を有しているか ③研究者倫理および技術者倫理について十分に理解し遵守しているか	特別研究、インターンシップ、博士プロジェクト研究、ケーススタディ、INFOSS 情報倫理、APRIN、RA・TA 経験など
	11. グローバル・コミュニケーション能力：研究チームや研究プロジェクトのなかで、与えられた役割分担を果たし、高いコミュニケーション力をもってリーダーシップをとる能力	①自らの研究や専門知識について、十分な語学力をもってプレゼンテーションを行うことできるか ②アドバイザーとしてグループ研究活動にコミットしたり、リーダーシップをとりつつ、自らを含む学生相互のコミュニケーションを促すことができるか	特別研究、特別演習、インターンシップ、博士 PBL 演習、学会・国際会議等での発表・質疑応答、共同研究

学修成果の評価に関する方針	次に述べる達成度評価システムによって、教育の質保証を行う。達成度評価項目として、後期課程では以下の 6 項目について達成度評価を行う。 ①工学基礎力：工学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい基礎知識と学力を備えているか。 ②理論的基盤・関連技術に関する知識：工学基礎力をベースにしたリスク・レジリエンス解析・評価のための理論的基盤の知識、並びにリスク・レジリエンス解析・評価に関連する高度な情報処理技術の知識を備えているか。 ③現実問題に関する知識：リスク・レジリエンス工学が対象とする現実の問題に係る深い知識を備えているか。 ④広い視野と俯瞰力: リスク・レジリエンス工学の対象を広く総合的な視野で捉える能力を有しているか。 ⑤問題設定・解決能力：リスク・レジリエンスにかかわる問題について、問題設定から工学的手段による解決までのプロセスを深く理解し、具体的解決手段を創造し開発する能力を有しているか。 ⑥グローバル・コミュニケーション能力：研究チームや研究プロジェクトの中で、与えられた役割分担を果たし、高いコミュニケーション力をもってリーダーシップをとる能力を有しているか。 達成度評価は、各年度に 2 回実施される達成度評価委員会において、各学生が 3 名以上の教員と面談し、評価を受けることになる。評価結果は学生にフィードバックし、その後の学修改善に利用する。達成度評価表（ルーブリック）により、すべての項目について博士（工学）の学位にふさわしい水準に達しているかを客観的に判定することによって行う。
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 学位申請者が研究倫理に則り、主体的に取り組んだ研究成果であること。 2. 新規性を有していること。 3. リスク・レジリエンス工学あるいは関連分野の発展に寄与する有用性を有していること。 4. 論文の構成が適切であり、内容が正しいこと。 (1) 論文題目が適切であること。 (2) 先行研究の調査が的確であり、研究の位置付けが十分に考察されていること。 (3) 研究目的が明確かつ具体的に記述されていること。 (4) 研究の方法が目的に合致しており、明確かつ具体的に記述されていること。 (5) 結果が正確かつ明瞭に導出されており、信頼性が担保されていること。 (6) 考察が結果に基づいて論理的に展開されていること。 (7) 結論が明確であり、社会的意義について記述されていること。 (8) 引用が適切であること。 ＜最終試験に係る基準＞ 学位論文についての説明、関連事項に係る質疑応答の結果と達成度評価の結果に基づく。 ＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 学位論文の審査は、主査 1 名、副査 4 名以上の学位論文審査委員会を設置し、審査委員会の合議で行う。審査委員は博士の学位を取得しているものとする。主査並びに副査 2 名以上はシステム情報工学研究群担当教員とする。副査の内、1 名以上は本学位プログラム以外から選出する。 主査は、博士論文審査委員会を開催し、学位論文の審査に係る基準に従い論文を審査し、合議の上合否を決定する。上記 1. ～ 4. の評価項目すべてについて、学位論文（博士）としての水準に達していると認められるものを、最終試験を経た上で合格とする。

リスク・レジリエンス工学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（工学）
Doctoral Program in Risk and Resilience Engineering / Doctor of Philosophy in Engineering

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

学位授与の方針（ディプロマポリシー）を達成するために、リスクを工学的方法により分析・評価した結果をレジリエンス社会の実現のために活用できる高度な技術をもち、現実社会の問題を見据えて教育研究成果等を社会還元でき、深い理論的基盤に基づく研究能力と高度な技能・実践力を有する学生を育成するカリキュラムを編成する。

教育課程の編成方針	学位授与の方針（ディプロマポリシー）が達成されるように、後期特別演習と後期特別研究という２つの科目に力点を置く。これらの他に、規定の講義科目の修得により、リスクを内包する複雑な社会問題に対する視野をさらに総合的にし、現実の問題についての知識を深める。これらの学修と専門領域における研究を博士論文にまとめることによって、ディプロマ・ポリシーに挙げた各項目を達成する。
学修の方法 特色的な教育	ディプロマ・ポリシーに掲げた各項目を以下により達成する。 1.「工学基礎力」はほとんど全ての科目に共通しており、学位プログラムで用意した科目を履修することにより修得する。加えて、学術院共通専門基盤科目により、より幅の広い学修が可能となる。 2.「理論的基盤・関連技術」はほとんど全ての科目に共通しており、学位プログラムで用意した科目を履修することにより修得する。特に博士特別研究により、複雑な現象に内在するリスクを解析しレジリエンスの観点から評価するための理論的基盤および情報処理技術のより深い修得が可能となる。 3.「現実問題」はほとんど全ての科目に共通しており、特に専門科目を履修することにより修得する。特に博士特別演習では、多様な現実の問題についての知識を得るために、様々な領域における研究発表を学修し批評することにより、より深い修得が可能となる。 4.「広い視野」に係る能力はほとんど全ての科目に共通しており、特に企業・研究所等の協働大学院方式に係る教員による科目によって修得する。また、自身の専門以外のリスク・レジリエンス工学特別講義や、協働大学院方式に係る教員によるインターンシップ関連の科目により、より深い修得が可能となる。 5.「問題設定・解決」に係る能力は、指導教員のもとで自らの研究について深く考察しつつ研究を遂行する博士特別研究、企業・研究所等の協働大学院方式に係る教員によるインターンシップ関連の科目によって修得する。特に博士特別研究では、問題設定から独創的解決までのプロセスを広く理解し、研究プロジェクトを実施し研究成果にまとめていく技量が育成される。 6.「グローバル・コミュニケーション」に係る能力のうち、「研究チームや研究プロジェクトのなかで、与えられた役割分担を果たし、高いコミュニケーション能力を発揮し、リーダーシップをとることができる能力」は博士特別研究によって修得する。加えて、博士前期課程の学生をグループ単位に分け、１つのテーマに取り組ませるリスク・レジリエンス工学グループPBL 演習において、各グループのアドバイザーとしてグループ研究活動にコミットするリスク・レジリエンス工学博士 PBL 演習により、より深い修得が可能となる。さらに博士特別演習では、研究発表の座長を務めることで、リーダーシップをとりつつ自らを含む学生相互のコミュニケーションを促す能力を培う。大学教員を志望する学生は、これらの授業科目をPFP（Preparing Future Professionals）プログラムとして活用することができる。

学修の方法 特色的な教育	また、「グローバル・コミュニケーション」に係る能力のうち、「国際的な場において高いプレゼンテーション能力を発揮し、活躍することができる能力」は、自らの研究や学修について外国語でプレゼンテーションを行うことが義務付けられている博士後期特別演習によって修得する。加えて、博士特別研究を通じて指導教員からの指導を受けつつ自らの研究を遂行し、成果を国際会議等の場で発表することにより、より深い修得が可能となる。 各項目の達成状況は、次に記述する達成度評価によって定期的にチェックし、到達度に応じて、当該学生の達成度評価委員を務める教員が適切な助言を与える。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	広くリスクに関する理解と対策に関心をもち、学際的立場からリスク・レジリエンスに関わる現実の問題について、分野横断的な俯瞰力をもってその解明と評価に取り組もうとする人材を求める。工学の基礎としての数学や情報処理技術の基礎力を備え、実社会で国際的に活躍するための語学力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力をもち、産学連携や社会連携、教育研究成果等の社会還元について向上心をもつ人を歓迎する。
入学者選抜方針	入学者の選抜にあたっては、一般入試および社会人特別選抜などの入学者選抜方式によって多様な入学志願者に対応するとともに、募集人員を分割し同一年度内に複数回の入学試験を実施する。入学者はプレゼンテーションと試問からなる口述試験により選抜する。また、社会人特別選抜の枠内において、社会人が在職のまま東京キャンパスにおいて教育を受けることができる昼夜開講制（社会人のための昼夜開講プログラム）を設ける。 – 内部進学制度選抜では、リスク・レジリエンス工学位プログラム（博士前期課程）の修了予定者の中から、特に高い基礎力及び研究能力を備えた人材を選抜する。 – 一般入試では、一定の基礎力及び研究能力を備えた人材と選抜する。 – 社会人特別選抜では、基礎力及び研究能力に加え、社会人としての実績や経験を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	(1) リスク・レジリエンス工学博士特別演習 本演習では、毎週学生が一堂に会し、担当学生による研究発表や研究サーベイを実施し、質疑応答を通じて学修を深めている。専門分野を超えた学際的視点から議論が展開されることで、リスク・レジリエンス分野に求められる広い視野が養われ、現実の課題との連動を意識した教育が実践されている。 (2) 研究群共通科目の幅広い領域の授業履修体制 リスク・レジリエンス工学学位プログラムは、研究群共通科目として多様な分野の授業を計画的に履修できる体制を整えている。具体的には、社会工学関連科目、サービス工学関連科目、リスク・レジリエンス工学関連科目、情報理工関連科目、知能機能システム関連科目、構造エネルギー工学関連科目、エンパワーメント情報学関連科目を学生の希望に応じて選択できる。この学際的カリキュラムにより、学生は関心に沿った学習計画を構築し、広い視野と分野横断的な問題解決力を養う。

学生同士の交流機会	(1) リスク・レジリエンス工学博士 PBL 演習 博士後期課程「リスク・レジリエンス工学博士 PBL 演習」は、前期課程必修科目「リスク・レジリエンス工学グループ PBL 演習」における学生グループに対し、アドバイザーとして参画し、指導力を養成することを目的とする科目である。本演習においては、問題設定、プロジェクトのマネジメント、成果のとりまとめ、発表までのプロセスを指導することにより、研究指導者として求められるリーダーシップ能力を体系的に修得することが可能となっている。 (2) 学位プログラム内の TA 学生の連携 本学位プログラムでは、必修授業科目群を支援する TA を「GP-TA」として一体的に位置づけ、教員を含めた連携体制を整備している。具体的には、とりまとめ教員が主導する定例ミーティングを通じて、授業支援の進め方や業務上の観点を共有し、役割分担や連絡体制の明確化を図っている。また、GP-TA が主体となり、業務ノウハウの共有や相互フィードバックを行うことで TA 間の連携を促進するとともに、研究講演会（リスク工学研究会）の企画・運営に参画するなど、学位プログラム全体の教育活動の質向上に資する取組を展開している。これらの活動は、TA 個々の相談や交流の場としても機能し、多国籍の学生を含む集団においても円滑な協働を支えている。結果として、学生同士のピア効果が高まり、学修意欲の向上、教育支援の質の安定化、さらには各自の研究の質的向上にも資する効果が期待される。
教員との交流機会	(1) リスク・レジリエンス工学博士特別演習 本演習における学生発表では、まず指導教員の確認のもとで発表資料が作成した上で実施される。その後、専門分野が必ずしも同一ではない複数の教員が参加し、学生の発表に対して評価や助言を行う。この過程により、特定の専門分野に偏らない多角的な視点がもたらされ、研究内容に多様な観点を導入できる。最終的に、こうした過程を通じて研究の一層の研磨が図られる。 (2) リスク工学研究会（RERM）の開催 本学位プログラムは、リスク工学専攻時代の 2002 年よりリスク工学研究会を継続的に開催しており、2025 年現在で 230 回を超える実績を有する。毎回、気鋭の研究者や実務者を招聘し、学生が最新の研究動向および社会的課題に触れることができ、複雑化する社会におけるリスク評価に関する知見および議論を深める環境を整えている。 (3) 定期的な教員連絡会の開催 教育・研究設備、カリキュラム、達成度評価、就職活動等に係る学生の疑問や要望を把握し、学生と教員の間で意見や情報を交換する場として、学生教員連絡会を年 2 回（春期・秋期）開催している。これにより、教育環境の改善を図るとともに、学生の学修意欲の向上に資している。 (4) レジリエンス研究教育推進コンソーシアムを活用したインターンシップ機会 本学位プログラムは、レジリエンス研究教育推進コンソーシアムに参画する機関の施設において、専門的知識や技術を有する研究者・教員（協働大学院）の指導のもとで実務経験を積むインターシップの機会を提供している。これにより、学生は理論と実践を架橋する経験を通じて、研究能力および実務対応力を強化することが可能となっている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

（1）達成度評価システム

- 達成度評価システムを用いて学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
- 達成度評価委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。
- 次のような PDCA サイクルによって常に改善を図る。

Plan：達成度評価システムを企画し、実施内容・基準等を策定する。
Do：個別の学生ごとに複数の教員によって達成度評価を実行する。
Check：達成度評価システムの内容と実際の運用状況を点検する。
Act：発見されたシステム・運用上の課題の改善を図る。

（2）新任教員研修会

FD 委員会においては、新任教員が着任するたびに「新任教員のための研修会」を開催している。本研修会では、プログラムリーダーによる教育理念の説明に加え、リスク・レジリエンス工学学位プログラムの特色ある教育改善策（達成度評価等）を紹介している。また、研修時には PC を持ち込み、学内専用の情報サイト（TIPS まとめ、RISS、FAIR、TWINS 等）の利用方法を説明し、新任教員がその場でアクセスできるよう支援している。

（3）授業評価の実施と活用

FD 委員会では、TWINS を用いた授業評価を実施し、その結果を集計して各教員に周知している。これにより、授業運営に関する学生の意見を適切に把握し、各教員が授業改善に活用できる仕組みを整えている。

情報理工学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Computer Science

■ 博士（工学）
■ Doctor of Philosophy in Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

学位プログラムにおける教育・研究を通じて、情報技術の多様な分野に関して深い専門性を持ち、国際的にも通用する知識と専門的研究能力・実務能力を持ち、独創性と柔軟性を兼ね備え、これらを活用して特定の領域における問題に対して情報学的アプローチによってその解決をリードすることができる人材を養成することを目的とする。

養成する人材像	情報技術の幅広い分野にわたる専門的知識と先端的技術力を持ち、専門分野に関する高いコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力、研究開発を遂行するための高度な能力を備え、これらの知識と能力を応用して、実社会の様々な問題の解決をリードすることのできる研究者および高度専門職業人等の人材。
修了後の進路	本プログラムを修了した博士人材は、教育・研究機関において情報学あるいは理工学の先端研究及び教育を主体的に行い、革新的な新技術の開発を行う。また、情報学における共通基盤技術および先端専門技術に加え、理工学のいずれかの問題領域における専門的知識を活用し、教育・研究機関、企業・団体、官庁・自治体において分野を超えた社会の諸問題の情報技術による解決を先導する。

情報理工学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（工学）
Doctoral Program in Computer Science / Doctor of Philosophy in Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	後期特別研究、後期特別演習、研究型インターンシップ、博士論文作成、学会発表、インターンシップ参加等
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	後期特別研究、後期特別演習、研究型インターンシップ、達成度評価シート、インターンシップ参加等
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	後期特別研究、後期特別演習、研究型インターンシップ、学会発表、インターンシップ参加等
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	後期特別研究、後期特別演習、研究型インターンシップ、TA/TF 業務経験、学会やセミナー等での質疑応答
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	後期特別研究、後期特別演習、国際研究プロジェクト、国際会議参加、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、海外インターンシップ等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：情報技術の幅広い分野に関する高度かつ先端的な専門知識と技術を背景に自ら新分野に関する新たな課題を発見するとともに、それを解決するための計画を自立的に立案し、着実に実行できる能力	①情報理工学分野における新たな問題を発見し、それに対して適切な研究課題を設定できるか ②情報理工学分野の研究開発を行うための先端的な専門的な技術を有しているか ③情報理工学分野の新たな問題に対して研究計画を立案し、それを着実に遂行して有効な成果を上げることができるか ④国際的な場において研究成果を英語でプレゼンテーションし、英語でディスカッションができるか	後期特別研究、後期特別演習、学会発表等、学位論文作成
	7. 専門知識：情報技術の幅広い分野に関する高度かつ先端的な専門知識と技術、およびそれを運用する能力	①システム情報工学分野の専門的な知識を持っているか ②情報理工学分野における先端的な専門知識および技能を持っているか ③自身が持つ専門知識および技術を適切に運用することができるか	後期特別研究、後期特別演習、研究群共通科目、学位プログラム専門科目、学会発表等、学位論文作成
	8. 倫理観：情報技術の幅広い分野に関する専門倫理観	①研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか ②ヒトを対象とする研究に関する倫理と研究に必要な手続きについて理解しているか ③情報理工学分野における倫理的問題に対して深い関心と知識を持っているか	後期特別研究、後期特別演習、INFOSS情報倫理、APRIN
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は達成度評価シートに基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 学修成果の評価は後期特別研究、後期特別演習、最終審査及び達成度評価シートに基づいて行われる。 – 修了予定年度の４月中に、指導教員とともに達成度評価シートをチェックし、その時点での学修成果の達成度を確認するとともに、今後の学修計画の見直しを行う。 – 後期特別研究、後期特別演習において、指導教員により、研究の進捗に関する確認を受ける。 – 最終審査においては、別途定定める学位審査基準に基づいた審査を行うとともに、審査委員会によって達成度評価シートをチェックし、学修成果の評価を行う。		

学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 情報理工学分野の国際的な研究動向および先行研究の把握に基づいて、当該研究の意義や位置づけが明確に述べられているか。 2. 情報理工学分野の学術的、社会的発展に寄与する、新規性、創造性、応用的価値を有した研究成果が、学術論文として発表するのに相応しい量含まれているか。 3. 研究結果に対する考察が妥当であり、その信頼性が十分に検証されているか。 4. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論にいたる論旨が、論理的かつ実証的に展開されているか。 5. 論文に用いられた文章表現が的確であり、文献や図表等は引用元が明示された上で正しく引用され、学位論文（博士）として相応しい形式にまとめられているか。 ＜最終試験に係る基準＞ 【研究力】情報技術の幅広い分野に関する先端的専門知識と技術が身についているか。 【研究力】自ら新たな分野の課題を発見し、それを解決するための計画を立案し、着実に実行できたか。 【専門知識】情報技術の幅広い分野に関する高度な専門知識と技術、およびそれを運用する能力が身についたか。 【倫理観】情報技術の幅広い分野に関する教養的倫理観が身についたか。 【コミュニケーション能力】物事を的確にわかりやすく伝え、高度に専門的な議論ができる能力が身についているか。 ＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 博士論文審査委員会の審査委員は 5 名以上、内 3 名以上は教授とする。主査と副査 2 名以上はシステム情報工学研究群教員とする。主査は教授（研究指導担当教員）とする。なお、主査、副査はすべての審査委員を情報理工学位プログラムの教員とするのではなく、他学位プログラム、他研究群、学外の審査委員のどれかのカテゴリの審査委員を少なくとも 1 名を加える。 主査は、博士論文審査委員会を開催し、学位論文の審査に係る基準に従い論文を審査し、合否判定を行う。上記 1. ～ 5. の評価項目すべてについて、学位論文（博士）としての水準に達していると認められるものを、最終（口述）試験を経た上で合格とする。

情報理工学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（工学）
Doctoral Program in Computer Science / Doctor of Philosophy in Engineering

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

「情報」の生成、処理、利用を目的とした、計算機、ネットワーク、セキュリティなどの基盤的な技術から、Web アプリケーション、ユーザインターフェース、音声画像認識、高性能計算といった応用技術までをカバーする、数理情報工学、知能ソフトウェア、ソフトウェアシステム、計算機工学、メディア工学、知能・情報工学に関する専門知識と研究能力、工学分野の幅広い基礎知識と倫理観を備えるとともに、博士論文作成に向けた研究指導を通して、理工情報生命の中の複数分野にわたる広い視野に立って問題を発見し解決できる人材を養成するための教育を行う。

教育課程の編成方針	− 本学位プログラムでは、「必修科目」および「専門科目」を設けている。 −「必修科目」では指導教員のアドバイスを受けながら研究活動を行うとともに、関連分野のサーベイ等を行う。これにより知の創成力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力、工学基礎力、情報理工学分野の専門知識、専門分野の研究力、プレゼンテーション能力、倫理観を修得する。 − 研究セミナーにおいて、英語での研究発表や議論を通して、コミュニケーション能力、国際性、プレゼンテーション能力を習得する。 − インターンシップ科目では、他大学や研究所等に滞在して研究活動に従事することで、マネジメント能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ力、国際性、情報理工学分野の専門知識、専門分野の研究力、プレゼンテーション能力を習得する。 −「大学院共通科目」、「学術院共通専門基盤科目」、「研究群共通科目群」等を通じて、多様な分野に関する深い専門的知識や技術力を身につける。 − TA（Teaching Assistant）や TF（Teaching Fellow）の活動や研究室での後輩への研究指導などを通じて、マネジメント能力を身につける。
学修の方法 特色的な教育	− 各学生は、指導教員のアドバイスを受けながら、各専門分野における研究課題を設定し研究を進める。 − 研究セミナーにおいて、自身の研究の中間結果を英語で発表し、参加教員および学生からフィードバックを得ることで、研究のブラッシュアップを行うとともに、英語によるプレゼンテーションおよび議論のスキルを向上させる。 − 研究成果は、国内外の査読付き雑誌論文または査読付き国際会議に投稿することで、研究の成果をアピールするとともに、論文執筆およびプレゼンテーションのスキルを磨く。 − 研究型インターンシップ科目を受講し、企業や大学、研究機関等において研究業務に従事することで、異なる環境における研究経験を積むとともにコミュニケーション能力などを向上させる。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	本プログラムでは、情報分野に関する専門的知識と技術力、および理工学のいずれかの問題領域に対する強い関心を持ち、専門的知識や技術力、専門的研究開発能力、実践力を身につける強い意欲を持つ人材を国内外から広く求める。

入学者選抜方針	− 学内外から優秀かつ多様な人材を受け入れるため、内部進学制度選抜、一般入試、及び、社会人特別選抜等、時期および募集人数の異なる複数の入学試験を実施する。 − 入試の種別に関わらず口述試験は必須とする。 − 内部進学制度選抜では、情報理工学位プログラム（博士前期課程）の修了予定者の中から、高い基礎力及び研究能力を備えた人材を選抜する。 − 一般入試では、一定の基礎力及び研究能力を備えた人材と選抜する。 − 社会人特別選抜では、基礎力及び研究能力に加え、社会人としての実績や経験を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 達成度評価シートにより入学時に学習計画を立て、指導教員とともに適宜見直しを行うことで、学修意欲を向上させる。
学生同士の交流機会	− 留学生向けのチューター制度により学生間の交流を促進する。 − セミナーにおいて教員だけでなく、学生同士のディスカッションの機会を設けることで、学生間の交流を促進する。 − TA（Teaching Assistant）の活動や研究室での後輩への研究指導などを通じて、学生間交流の機会を設ける。
教員との交流機会	− 学生・教職員連絡会を定期的に開催し、教員との交流の機会を設ける。 − 研究室での少人数のゼミや教員が主動する研究プロジェクトへの参画を通して、教員との交流を促進する。 − TA（Teaching Assistant）の活動により授業の補助を行うことで、教員との交流の機会を設ける。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

− 達成度評価において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
− 授業評価アンケートを実施し、学位プログラム内で結果を共有することで、担当教員による授業の振り返りの機会を作ることにより、教育の質の保証と改善に努める。
− 全学 FD（Faculty Development）講演会・研修会に加えて、必要な題材に関して独自の FD 講演会・研修会を行い、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

知能機能システム学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Intelligent and Mechanical Interaction Systems

■ 博士（工学）
■ Doctor of Philosophy in Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

工学分野の幅広い知識と倫理観、知能機能システム（人・社会・自然界における複雑な現象を表す数理モデルや、数学・物理学・情報学などの理論に基づいて構成され、さまざまな機能をもつ要素が連携協調して実社会に貢献する工学システム）に関する高度な専門知識と技術、独創的な研究力を備えるとともに、広い視野に立って重要な問題を発見し解決することができる研究者または高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	工学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい幅広い知識と学力、倫理観を備えるとともに、知能機能システムに関する高度な専門知識と技術をもち、知能機能システムに関する最先端の研究を行って独創的な成果を上げるとともに、学術的または社会的に重要な問題を見極めてそれを解決することによって、学術や社会の発展に貢献することができる人材。
修了後の進路	大学等の教育機関の教職員、国立研究開発法人等の研究者、電気・機械・情報通信分野の企業において研究開発に携わる高度専門技術者

知能機能システム学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（工学）
Doctoral Program in Intelligent and Mechanical Interaction Systems / Doctor of Philosophy in Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	特別研究、学術雑誌論文発表演習、国際会議論文発表演習、コラボラトリー演習、査読有論文、学会発表、特許
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	特別研究、計画調書作成演習、コラボラトリー演習、達成度自己点検、異分野の研究
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	特別研究、国際会議論文発表演習、計画調書作成演習、学会発表、ポスター発表会参加、TF 経験
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	特別研究、学術雑誌論文発表演習、国際会議論文発表演習、計画調書作成演習、コラボラトリー演習、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験等
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	特別研究、英語演習、国際会議論文発表演習、国外での活動経験、外国人（留学生）との共同研究等、TOEIC ／ TOEFL 得点、英語での発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：知能機能システム分野において先端的な研究課題を設定し、自立して研究を遂行し独創的な成果を上げて国際的に発表する能力とそのための高度な技術	①知能機能システム分野の先端的な研究課題を適切に設定でき、その研究を行うための高度な技術はあるか ②知能機能システム分野の先端的研究を遂行して独創的な成果を上げることができるか ③国際会議等において英語で研究成果を発表し議論することができるか	特別研究、学術雑誌論文発表演習、国際会議論文発表演習、論文、特許、学会発表、博士論文
	7. 専門知識：工学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい知識と学力、および知能機能システム分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①システム情報工学分野の専門知識を幅広くもつか ②知能機能システム分野における先端的かつ高度な専門知識を修得し、それを研究や問題解決のために運用できるか	特別研究、コラボラトリー演習、計画調書作成演習、学術雑誌論文発表演習、国際会議論文発表演習、論文、博士論文
	8. 倫理観：工学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、および知能機能システム分野に関する深い倫理的知識	①研究者倫理および技術者倫理について十分に理解し遵守しているか ②ヒトを対象とする研究などに関する倫理的知識をもち、研究に必要な手続きを十分に理解し実施することができるか	特別研究、学術雑誌論文発表演習、INFOSS 情報倫理、APRIN、研究倫理委員会承認

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価基準表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 知能機能システムセミナーⅠにおいて1年次の研究成果を発表させて評価する。 – 知能機能システムセミナーⅡにおいて、学位論文の基となる研究成果について発表させて評価する。 – 達成度自己点検の結果を指導教員が確認する形で達成度評価を随時実施する。 – 最終試験として達成度審査を行い、合格することを学位授与の要件とする。達成度審査は、別途定める達成度評価基準表に基づき、指導教員が作成した評価案を達成度審査委員会が確認する形で実施する。 ＜最終試験に係る基準＞ 1.（汎用コンピテンス）知能機能システム学位プログラム（後期課程）修了生にふさわしい知の創成力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ力、国際性を身に付けているか。 2.（研究力）知能機能システム分野において先端的な研究課題を設定し、自立して研究を遂行し独創的な成果を上げて国際的に発表する能力とそのための高度な技術をもつか。 3.（専門知識）工学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい知識と学力、および知能機能システム分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力を備えているか。 4.（倫理観）工学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、および知能機能システム分野に関する深い倫理的知識をもつか。
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 関連分野の国際的な研究動向および先行研究の把握に基づいて、工学における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられているか。 2. 工学の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、学術論文として発表するのに相応しい量含まれているか。 3. 研究結果の信頼性が十分に検証されているか。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいているか。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が博士学位論文に相応しい形式にまとめてあるか。 ＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 博士論文審査委員会は主査1名及び副査4名以上で構成し、主査は本研究群の研究指導教員、副査2名以上は大学院担当教員とする。なお、主査、副査はすべての審査委員を知能機能システム学位プログラムの教員とするのではなく、他学位プログラム、他研究群、学外の審査委員のどれかのカテゴリの審査委員を少なくとも1名加える。 博士論文審査委員会は、学位論文の審査に係る基準に従い論文を審査し、合否判定を行う。上記1.～5.の評価項目すべてについて、学位論文（博士）としての水準に達していると認められるものを、口述試験を経た上で合格とする。

知能機能システム学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（工学）
Doctoral Program in Intelligent and Mechanical Interaction Systems / Doctor of Philosophy in Engineering

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

知能機能システム（システムデザイン、人間･機械･ロボットシステム、計測･制御工学、コミュニケーションシステム）に関する高度な専門知識と技術、独創的な研究力、および工学分野の幅広い基礎知識と倫理観を備えるとともに、理工情報生命の中の複数分野にわたる広い視野に立って重要な問題を発見し解決することができる研究者または高度専門職業人を養成するための教育を行う。

教育課程の編成方針	教育課程は、知能機能システムに関する高度な研究能力を育成することを第一の目的とし、専門知識や倫理観、汎用的知識･能力は主としてその過程で養われる（必要に応じて研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目および大学院共通科目を履修することによって補う）よう編成する。 - 主に特別研究（知能機能特別研究 A、B、C）、論文発表演習（知能機能システム学術雑誌論文発表演習 I、II、知能機能システム国際会議発表演習）、コラボラトリー演習（知能機能システムコラボラトリー演習 III、IV）により、知の創成力を身に付ける。 - 主に特別研究、計画調書作成演習（知能機能システム計画調書作成演習 III、IV）により、マネジメント能力を身に付ける。 - 主に特別研究、計画調書作成演習および学会発表等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 - 主に特別研究、論文発表演習、コラボラトリー演習、計画調書作成演習および TA 経験や学外活動などにより、リーダーシップ力を身に付ける。 - 主に特別研究、英語演習、国際会議論文発表演習などにより、国際性を身に付ける。 - 主に特別研究、論文発表演習、計画調書作成演習などにより、研究力を身に付ける。 - 主に特別研究、論文発表演習、コラボラトリー演習などにより、専門知識を身に付ける。 - 主に特別研究、倫理に関する e-learning などにより、倫理観を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	- 入学後、指導教員は社会的・学術的に重要な研究課題を自ら見つけ出し、その解決方法を考えるよう指導する。 - 各学生は、その課題について研究を行いながら、より専門的な知識や技術について主体的に学ぶ。また、学位プログラムを越えた複数指導体制の利点を生かし、専門の異なる副指導教員の指導を受けるなどして幅広い視点から問題を捉える能力を育成する。 - 得られた研究成果をセミナーや学会等で発表するとともに、学術雑誌に論文発表するよう指導する。学生は、それらに対する評価を受けることによって研究の改善や発展の手がかりを得る。 - これらと並行して、各学生は達成度自己点検を随時行う。これによって、課程修了のために不足している知識や能力の修得を促す。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	知能機能システム分野の最先端の研究に必要な数学力と英語力、数理的な思考力があり、博士の学位にふさわしい研究力、専門知識、倫理観を身に付ける資質をもち、かつ知能機能システム分野における研究者または高度専門職業人として学術や社会の発展に貢献することを目指す人材を求める。

入学者選抜方針	内部進学制度選抜、一般入試、社会人特別選抜によって多様な入学者を選抜する。試験区分にかかわらず口述試験を必須とする。 – 内部進学制度選抜では、知能機能システム（前期課程）学位プログラムの修了予定者の中から、高い基礎力と研究力を備え、日本学術振興会特別研究員（DC1 または DC2）への採用または本学位プログラムの早期修了が見込まれる人材を選抜する。 – 一般入試では、一定の研究力およびその他の能力を備え、標準年限での修了が見込まれる人材を選抜する。 – 社会人特別選抜では、研究力その他の能力に加え、社会人としての実績や経験を評価する。また、在職のまま修了したい、長期履修制度を利用して標準年限を超えて修了したい、社会人のための早期修了プログラムを利用して 1 年で修了したい、といった希望に応じたアドミッション・ポリシーで試験を実施し、希望通りの修了が見込める人材を選抜する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士後期課程における学生の主体的かつ高度な学修を支援するため、複数の取り組みを実施する。達成度自己点検シートを活用し、学生が自身の研究進捗と学修成果を可視化することで、指導教員が適切な履修指導を行う体制を整える。グローバル・マルチメンターシステム（GMMS）を通じて、学外の研究者との交流を促進し、研究活動に対する多角的な批評や議論を通じて研究の高度化を図る。「修学×キャリア」ハイブリッド支援システム（LCHS）では、企業の研究者や卒業生等との交流を通じて、博士後期課程学生としての研究モチベーションを喚起し、専門的なキャリアパス形成への意欲を高める支援を行う。
学生同士の交流機会	博士後期課程においても学生同士の交流を促進し、学修意欲および研究の質の向上を図る。大学院セミナーでは、学生が自身の研究内容を発表し、他の学生との議論を通じて研究の理解を深めるとともに、表現力や批判的思考力を養う。グローバル・マルチメンターシステム（GMMS）および「修学×キャリア」ハイブリッド支援システム（LCHS）においても、複数の学生が参加できる体制とし、学生間の情報共有や相互刺激を促す。これらの活動を通じて、学生同士のピア効果を高め、研究環境の活性化を支援する。
教員との交流機会	本学では、博士後期課程における学生の研究活動を支援するため、教員との交流機会を積極的に提供する。大学院セミナーにおいては、学生が研究成果を発表し、教員からの助言や質問を受けることで、研究の方向性や論理構成を深める。特別実験科目におけるグループプロジェクトでは、教員の指導のもとで学生が協働して課題に取り組み、実践的な研究能力を養う。大学院懇談会では、教員と学生が自由に意見交換を行う場を設け、研究活動や進路に関する相談を可能とする。さらに、GMMS および LCHS においても、教員が外部の研究者や企業人と連携し、学生に対して多角的な指導と助言を行う体制を整える。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

博士後期課程における教育の質の保証および継続的な改善を図るため、複数の体制と仕組みを整備する。新任教員に対しては、教育内容や指導方法に関する FD（Faculty Development）を実施し、教育力の向上を支援する。加えて、達成度評価に関する FD を含む教員向けの研修を定期的に行い、教育活動の質的向上を促進する。達成度審査委員会においては、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。さらに、PDCA 委員会を設置し、ポスター発表会での企業との懇談会における助言も参考に、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

構造エネルギー工学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Engineering Mechanics and Energy

■ 博士（工学）
■ Doctor of Philosophy in Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

機械、建築、社会基盤、エネルギー、航空宇宙などの工学分野において高度な専門知識を有するだけでなく、関連する周辺分野に関する横断的な視野や国際的な情報発信能力を備え、研究プロジェクトを適切に管理・運営し、社会で主導的な役割を果たし、工学分野に学ぶ後進を適切に指導できる大学教員、研究者及び高度専門職業人を育成する。

養成する人材像	機械、建築、社会基盤、エネルギー、航空宇宙などの工学分野に対して幅広い知識を持ち、人類の発展に貢献する発想豊かな技術者あるいは研究者を志し、高度の専門知識だけでなく、関連する周辺分野への横断的な視野を有し、各分野において指導的な立場で活躍する能力を有する人材。
修了後の進路	機械、建築、社会基盤、エネルギー、航空宇宙分野などの民間企業、大学教員、国立研究開発法人、日本学術振興会特別研究員など

構造エネルギー工学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（工学）
Doctoral Program in Engineering Mechanics and Energy / Doctor of Philosophy in Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	研究群共通・専門科目、学位プログラム専門科目、特別研究、特別演習、インターンシップ科目、博士論文作成、学会発表、論文執筆など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	特別研究、特別演習、達成度自己点検、博士論文に関わる研究計画の立案など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	特別研究、特別演習、インターンシップ、学会発表、ポスター発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	特別研究、特別演習、インターンシップ、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験、研究室活動など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	特別研究、特別演習、インターンシップ、EME 国際セミナー、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文執筆など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：構造エネルギー工学分野の先端的な問題を抽出して解決法を提案し実行できる能力	①構造エネルギー工学分野における先端的な研究課題を自立して適切に設定できるか ②構造エネルギー工学分野の先端的な研究を行うための基本的・応用的な技術はあるか ③構造エネルギー工学分野の先端的な研究を自立して遂行して成果を上げることができるか	特別演習、特別研究、学会発表、論文執筆、博士論文
	7. 専門知識：構造エネルギー工学分野における基本的学力と先端的かつ高度な専門知識を運用する能力	①システム情報工学分野の基礎的な専門知識をもつか ②構造エネルギー工学分野における先端的かつ高度な専門知識を修得し、その運用能力を備えているか	研究群共通科目、学位プログラム専門科目、学会発表、論文執筆、博士論文
	8. 倫理観：工学分野の高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	研究者倫理および技術者倫理について理解し、遵守しているか	特別演習、特別研究、インターンシップ、INFOSS 情報倫理、APRIN
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は、達成度評価表に基づく達成度評価によって、以下の段階毎に、学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 構造エネルギー工学後期特別演習において研究成果を発表し、評価およびフィードバックを受ける。 – 学位論文予備審において、学位論文の概要を示し、評価およびフィードバックを受ける。 – 春学期および秋学期に達成度評価表を確認し評価する。 – 学位論文審査及び最終試験において学位論文の内容に関する発表および学位審査を受けるとともに、達成度評価表の評価を受ける。		

学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 関連分野の研究動向、先行研究のレビューを行い、当該研究の意義、位置づけが明確にされていること。 2. 工学の発展に寄与するオリジナルな研究成果が含まれていること。 3. 研究成果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究の結論が客観的な根拠、合理的な演繹に基づいていること。 5. 上記の項目の全てが適切な論文構成、明快な記述により取り纏められていること。また、論文の内容を的確に説明する題目が与えられていること。 ＜最終試験に係る基準＞ 学位論文の内容について説明を求め、上記の 1. から 5. の基準を満たすことが確認されるとともに、以下の能力、知識等を有すること。 1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力 2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力 3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力 4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力 5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲 6. 研究力：構造エネルギー工学分野の先端的な問題を抽出して解決法を提案し実行できる能力 7. 専門知識：構造エネルギー工学分野における基本的学力と先端的かつ高度な専門知識を運用する能力 8. 倫理観：工学分野の高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識 ＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 博士論文審査委員会の審査委員は主査 1 名及び副査 3 名以上で構成し、主査は本研究群の研究指導教員、副査 2 名以上は大学院担当教員とする。なお、主査、副査はすべての審査委員を構造エネルギー工学学位プログラムの教員とするのではなく、他学位プログラム、他研究群、学外の審査委員のどれかのカテゴリの審査委員を少なくとも 1 名を加える。 主査は、博士論文審査委員会を開催し、学位論文の審査に係る基準に従い論文を審査し、合否判定を行う。上記の評価項目すべてについて、学位論文（博士）としての水準に達していると認められるものを、最終（口述）試験を経た上で合格とする。

構造エネルギー工学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（工学）
Doctoral Program in Engineering Mechanics and Energy / Doctor of Philosophy in Engineering

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

ディプロマ・ポリシー（DP）が達成されるようにカリキュラムを編成する。即ち、機械、建築、社会基盤、エネルギー、航空宇宙などの工学分野における基礎理論や最先端技術を深く学ぶとともに、理工情報生命の中の複数分野についても学修することで、通常の縦割り型の工学系専攻では得られないような広い視野を養成する。

教育課程の編成方針	カリキュラムは、構造エネルギー工学に関する高度な研究能力を育成することを第一の目的として必修の専門科目を編成する。専門科目に加え、更に幅広い知識・研究能力の獲得を目的に研究群共通科目群、他研究群開設科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目の中から 2 単位以上を修得する必要がある。必修科目はプレゼンテーション・コミュニケーション能力や広い視野を養成する科目である。これらの学修と専門分野における研究を博士論文にまとめることによって DP に挙げた各項目が達成される。また前期課程 、学類講義の TA を務め、後進を指導する経験を積む機会を積極的に与える。 （汎用的知識・能力） – 研究群共通科目群及び学位プログラム科目群の専門科目、特別研究、特別演習、博士論文作成、学会発表などにより知の創成力を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、達成度自己点検、博士論文に関わる研究計画の立案などによりマネジメント能力を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、インターンシップ、学会発表、ポスター発表などによりコミュニケーション能力を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、インターンシップ、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験、研究室活動などによりリーダーシップ力を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、インターンシップ、EME 国際セミナー、外国人（留学生を含む）との共同研究、国際会議発表、英語論文執筆などにより国際性を身に付ける。 （専門的知識・能力） – 特別演習、特別研究、学会発表、論文執筆、博士論文などにより研究力を身に付ける。 – 研究群共通科目群及び学位プログラム科目群の専門科目の履修、学会発表、論文執筆、博士論文などにより専門分野の高度な知識を身に付ける。 – 研究群共通科目群の履修、特別演習、特別研究、学会発表などにより横断的な視点を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、インターンシップ、プロジェクトの参加経験、研究室活動などにより問題抽出と解決法提案能力を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、インターンシップ、外国人（留学生を含む）との共同研究、国際会議発表、英語論文執筆などにより成果を国内外に発信できる能力を身に付ける。 – 特別研究、特別演習、インターンシップ、プロジェクトの参加経験、研究室活動などにより研究プロジェクトを管理・運営する能力を身に付ける。 – 特別演習、特別研究、倫理に関する e-learning などにより倫理観を身に付ける。

学修の方法 特色的な教育	– 授業科目の履修モデルに従い学修を進める。 – 指導教員のアドバイスを得て、各専門分野における研究課題を設定し博士の研究を進める。 – 得られた研究成果をセミナーや学会等で発表するとともに、学生はそれらに対する評価を受けることによって研究の改善や発展の手がかりを得る。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	修士学位を取得済みまたは取得予定であり、構造エネルギー工学関連分野の基礎学力を十分に備えた上で、機械、建築、社会基盤、エネルギー、航空宇宙などの工学分野に興味を持ち、人類の発展に貢献する発想豊かな技術者あるいは研究者を志し、各分野において指導的な立場で活躍することを目指す人材を求める。
入学者選抜方針	学外から優秀な人材を積極的に受け入れるため、他大学の出身者、社会人、外国人留学生が受験しやすい入試方法を採用する。一般入試および社会人特別選抜では、これまでの研究内容および今後の研究計画のプレゼンテーションの後、関連事項について試問を行う。 – 内部進学制度選抜では、構造エネルギー工学学位プログラム（博士前期課程）の修了予定者の中から、特に高い基礎学力及び研究能力を備えた人材を選抜する。 – 一般入試では、工学系の修士課程を優秀な成績で修了できる基礎学力及び研究能力を備えた人材を選抜する。 – 社会人特別選抜では、上記の基礎学力及び研究能力に加え、社会人としての実績や経験を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	指導教員は研究室単位のゼミ活動ならびに個別指導を行い、常に学生の学修状況を把握する。副指導教員は春学期・秋学期に学生と面談を行い、講義の履修計画、研究計画とその進捗、進路（主に就職活動）などについて報告を受け、アドバイスを行う。この際、学生は達成度評価表、履修研究等計画表を示し、自身の状況を客観化した上で面談に臨む。
学生同士の 交流機会	学生は大学院セミナーで研究発表、質疑応答を行って、他学生が進めている研究活動を理解するとともに、互いに批評を得る。学位プログラムの全学生を対象に学生教員連絡会を開催し、互いの学修状況、学生生活等について問題点、改善点の共通認識を持つ。多くの学生はティーチングアシスタントを務め、受講者への指導を通して、他研究室の学生と交流する機会を持つことができる。
教員との交流機会	指導教員は研究室単位のゼミ活動ならびに個別指導を行い、常に学生の学修状況を把握する。副指導教員は春学期・秋学期に学生と面談を行い、講義の履修計画、研究計画とその進捗、進路（主に就職活動）などについて報告を受け、アドバイスを行う。学位プログラムの全学生を対象に学生教員連絡会を開催し、講義、研究、学生生活等について意見交換を行う。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

指導教員と副指導教員による確認とフィードバックの実施状況を PDCA 委員会が確認し、全教員と学生が確実に行っていることをモニタリングする。達成度評価表及び講義の成績評価を裏付ける成績根拠資料を収集・保存し、講義内容、シラバス及び達成度評価の改善検討に用いる。学生教員連絡会であった学生からの要望への対処を適宜行う。

ライフイノベーション（生物情報）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Bioinformatics）

■ 博士（生物情報学）
■ Doctor of Philosophy in Bioinformatics

人材養成目的 / Program Educational Objectives

分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いてライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、革新的医薬品・機能性食品の研究開発分野及びその保全と管理の分野で、国際的に評価の高い研究成果を創出し、グローバルに活躍する高度専門職業人または研究者を養成する。

養成する人材像	博士後期課程では博士前期課程で修得した生物情報学の深い知識や技能だけでなく関連分野の幅広い知識を用いて、「生命情報学におけるイノベーションを創発するような国際的通用性の高い研究成果を創出できる研究者および高度専門職業人」を育成する。
修了後の進路	ライフサイエンス分野における実験技術、研究マネジメントスキル、国際レベルの高い研究成果を基盤として、「課題解決能力」と「課題発見能力」を駆使し、ライフサイエンス分野の課題を解決するグローバル人材として、国内外の民間企業、研究機関、教育機関、行政機関に就職し、健康科学、医薬品、食料、環境の分野において、研究者、技術者、経営者、行政官として国際的に活躍する事が期待される。研究のグローバル化に伴い、海外との共同研究やコーディネートをする機会が今後さらに増加すると考えられ、博士課程修了者の需要は高まると考えられる。

ライフイノベーション（生物情報）学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（生物情報学）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Bioinformatics）/ Doctor of Philosophy in Bioinformatics

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（生物情報学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、博士論文作成
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、博士論文作成
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、学術論文発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野のおけるイノベーションを実現する能力	①ライフサイエンス分野における新たな知を創出し、社会に還元する意識と意欲があるか ②ライフサイエンス分野におけるイノベーションの創出に繋がる理論や実践に関する研究手法および論理展開力を修得したか ③生物情報学における顕在化していない課題を発見し、解決できたか ④分野外の研究者と協働して、分野横断的な研究課題を発見・解決する意欲があるか	人を対象とした研究：基盤編、博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	7. 専門知識：専門分野における最先端知識	①生物情報学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した専門知識に基づき未解決課題を解決するための研究計画を立案できたか	ライフイノベーション博士研究、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	8. 高度英語実践力：国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力	①英語による研究成果の報告や発信に際し、国際社会にインパクトを与えられる発表能力を有しているか ②第一線級の研究者と対等に議論できるだけの英語力および知識を有しているか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、学術論文発表
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法を主体として評価する。 – 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 – 1 年次末に達成度評価 I 、修了予定の 1 年前に達成度評価 II および中間審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 – 修了予定の 5 ヶ月前に達成度評価III および学位論文予備審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価し、最終試験の受験資格について審査する。 – 最終試験を実施し、論文審査・口頭試験によって学位論文を評価し、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて最終的に審査する。		

学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施し、生物情報分野の発展に貢献する、新奇かつ国際的に高い評価を得られる研究成果であること。学位論文が、英語で論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査１名、副査３名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査３名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を２名以上含むものとする。専門委員会４名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ１名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会４名以上のうち、プログラム担当以外の者を１名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。最終試験のうち、論文内容の発表と質疑応答を公開で行う。その際、学位論文の内容に関する発表を英語で論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、最新の研究動向を含めて、生物情報分野の高度な専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

生物情報領域におけるイノベーション創出のための未解決課題を発見し、それを解決するための研究活動を行う。イノベーション創出のためには、専門分野外の研究者と協働して、全く異なる分野における研究課題や分野横断的な研究課題に取り組む高い意識と意欲が必要であり、インターンシップ科目を編成する。分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を養成するために、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者によるセミナーを編成する。

教育課程の編成方針	− 生物情報領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム６領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体分子材料領域）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、生物情報に関する研究指導を受ける。 − 博士論文作成等により、知の創成力を身に付ける。 −「博士力実践プログラム」等により、マネジメント能力を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 −「ライフイノベーション博士研究」により、リーダーシップ力を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 − 基礎科目、専門科目等により、イノベーション力を身に付ける。 −「ライフイノベーション博士研究」等により、専門知識を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、高度英語実践力を身に付ける。

学修の方法 特色的な教育	− 生物情報に関する最新の研究動向に把握した上で、顕在化していない課題を発見し、課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行する。さらに、指導教員らとの批判的な議論を通してライフイノベーション創出に繋がる研究へと展開する。 − 得られた研究成果は学術雑誌で発表し、英語力を向上させ、その過程において論理展開力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する最新の研究動向を学ぶだけでなく、英語によるプレゼンテーション能力を向上させる。 − インターンシップを行うことにより、専門分野外の研究者と協働して新たな知を創出する経験を通して、研究力を磨く。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	生物情報分野におけるイノベーションの実現が期待される研究基礎力、その実現に必要な専門知識、国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力の修得に十分な素養、を持つ人材を求める。
入学者選抜方針	− 書類審査により、修士レベルの専門知識を有しているか（在籍課程での成績が優秀であるか）、研究背景・研究計画および研究成果の社会還元について英語で具体的に説明できる能力があるかを評価する。 − 英語能力試験および口述試験により、生物情報分野におけるイノベーションを実現するための意欲および必要な研究基礎力、本学位プログラムで研究活動を行うために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士後期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価の際は、面談を行い、活動データに基づいたフィードバックを行うこととしている。
学生同士の 交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が学術的に広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学位プログラムの３つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための議論を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

エンパワーメント情報学プログラム（一貫制博士課程）
Doctoral Program in Empowerment Informatics

- 修士（人間情報学）
- Master of Human Informatics
- 博士（人間情報学）
- Doctor of Philosophy in Human Informatics

人材養成目的 / Program Educational Objectives

多様な文化的背景を有する人々が集まる国際社会において、イニシアティブを発揮し、人をエンパワーするシステムをデザインできるグローバル人材を養成する。

養成する人材像	「人の機能を補完し、人とともに協調し、人の機能を拡張する情報学」である「エンパワーメント情報学」分野における基礎的研究力に加えて、多角的で複眼的な思考ができる「分野横断力」、産学官にわたる実問題を解決する「現場力」、研究成果の本質を効果的かつ魅力的に伝える「魅せ方力」といった実践力を有する人材。
修了後の進路	人機能の「補完」「協調」「拡張」の融合業界として、医療福祉介護産業、先進自動車産業、スマート家電産業、クリエイティブインダストリ等。

エンパワーメント情報学プログラム（一貫制博士課程） ／ 修士（人間情報学）、博士（人間情報学）
Doctoral Program in Empowerment Informatics / Master of Human Informatics, Doctor of Philosophy in Human Informatics

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する一貫制博士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（人間情報学）の学位を授与する。また中間評価において、筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する修士課程の修了の要件を充足したうえで、博士基礎力審査に合格した者に、修士（人間情報学）を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	エンパワーメント情報学特別研究Ⅰ～Ⅴ、エンパワーメントプロジェクト研究、学術雑誌論文発表演習、国際会議・学術雑誌論文発表演習、エンパワーメント研究発表演習、特定課題研究、博士論文、アイディアコンテスト等参加
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	エンパワーメント情報学特別研究Ⅰ～Ⅴ、エンパワーメントプロジェクト研究、ポートフォリオ作成 or 達成度管理
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	エンパワーメント情報学特別研究Ⅰ～Ⅴ、エンパワーメント情報学特別演習Ⅰ～Ⅱ、エンジニアリングレジデンス実習、エンパワーメントプロジェクト研究、エンパワーメント情報学原論
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	エンパワーメント情報学特別研究Ⅰ～Ⅴ
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	エンパワーメント情報学特別研究Ⅰ～Ⅴ、エンパワーメント情報学特別演習Ⅰ～Ⅱ、国際会議発表、英語論文執筆

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 分野横断力：人間情報学分野における専門分野の知識と専門分野以外の知識を、様々な課題に対して運用する能力	①人間情報学を構成する各分野に渡って、基礎的な専門知識を備えるか ②専門とする分野以外の知識に基づく議論、研究、または実務経験を有するか	エンパワーメント情報学特別研究Ⅰ～Ⅴ、エンパワーメント情報学特別演習Ⅰ～Ⅱ、エンパワーメントプロジェクト研究、エンパワーメント情報学原論、専門科目・類 共通科目 8 単位
	7. 魅せ方力：人間情報学分野において先端的な研究課題を自ら設定し、国際的に通用する独創的な成果を上げる能力	①人間情報学の発展に貢献する独創的な研究能力を有し、その分野の専門家として認められる実績を有するか ②国際会議等において研究成果を英語で発表し、議論することが出来るか	エンパワーメント情報学特別研究Ⅰ～Ⅴ、エンパワーメント情報学特別演習Ⅰ～Ⅱ、エンパワーメント研究発表演習、学術雑誌論文発表演習、国際会議・学術雑誌論文発表演習、国際会議発表、アイディアコンテスト、ハッカソン等
	8. 現場力：人間情報学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識に基づき、実問題を解決するための方法の立案と説明を行う能力	①実問題に挑戦し、新しいプロジェクトを立案することができるか ②実問題を解決する際の障壁を適切に把握・分析し、それを克服するための方法を考察することができるか ③研究者倫理、技術者倫理、人を対象とする研究に関する倫理と研究に必要な手続きについて理解し、遵守しているか	エンパワーメント情報学特別研究Ⅰ～Ⅴ、エンパワーメント情報学原論、アントレプレナーシップ演習、エンジニアリングレジデンス実習、エンパワーメントプロジェクト研究、企業セミナー等への参加、新事業立ち上げへの参画、特許化への貢献、チャレンジし失敗を乗り越えた実績、起業・起業へ繋がる事業の実績、INFOSS 情報倫理、APRIN
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価基準表」に基づいて行われる。 – 1 年次と 2 年次の「EMP 大学院 セミナー（特別演習）」において研究経過を報告し、教員からの直接的な評価およびフィードバックを受ける。 – 1 ～ 4 年次の各年度末に達成度自己点検シートを指導教員に提出し、指導教員による達成度スコアに基づく達成度評価を受けるとともに研究進捗について確認を行う。これに基づき、履修計画と研究計画の見直しを行う。 – 2 年次に実施する博士論文研究基礎力審査において、博士論文のための研究に着手できるかどうかを審査する。専門家による直接評価によって行う。 – 達成度審査において、達成度とともに博士論文の提出を認めるかどうかを審査する。審査は達成度自己点検シートに基づいた直接評価に基づいて行う。		

学位論文に関する評価の基準	【修士】 以下の評価項目すべてが満たされていると認められるものを合格とする。 1. 関連分野の先行研究の把握に基づいて、人間情報学における当該研究の意義や位置づけが述べられているか。 2. 工学分野のオリジナルな研究成果が、学会等で発表できる程度に含まれているか。 3. 研究結果に一定の信頼性が認められるか。 4. 研究結果に対して適切な考察がなされ、妥当な結論が導かれているか。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が修士学位論文に相応しい形式にまとめてあるか。 ＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 修士論文審査委員会は、システム情報工学研究群大学院担当教員のうちから、主査 1 名及び副査 2 名以上で組織するものとする。ただし、必要がある場合には、他研究群または他大学大学院の教員、研究所の研究員等を副査とすることができる。主査は研究指導担当教員とし、副査については、システム情報工学研究群大学院担当教員 2 名以上を含むものとする。 修士論文審査委員会は、学位論文の審査に係る基準に従い特定課題研究を審査し、合否判定を行う。上記 1. ～ 5. の評価項目すべてについて､学位論文（修士）としての水準に達していると認められるものを、面接（口述）試験を経た上で合格とする。 【博士】 以下の評価項目すべてを満たす学位論文であること、最終試験が合格であることが博士の学位授与の要件である。 ＜学位論文の審査に係る基準＞ 1. 関連分野の国際的な研究動向および先行研究の把握に基づいて、人間情報学における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられているか。 2. 人間情報学の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、学術論文として発表するのに相応しい量含まれているか。 3. 研究結果の信頼性が十分に検証されているか。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいているか。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が学位論文に相応しい形式にまとめてあるか。 ＜最終試験に係る基準＞ 1.【分野横断力】人間情報学を構成する各分野に渡って、基礎的な専門知識を備えるか。 2.【分野横断力】専門とする分野以外の知識に基づく議論、研究、または実務経験を有するか。 3.【魅せ方力】人間情報学の発展に貢献する独創的な研究能力を有し、その分野の専門家として認められる実績を有するか。 4.【魅せ方力】国際会議等において研究成果を英語で発表し、議論することが出来るか。 5.【現場力】実問題を解決する際の障壁を適切に把握・分析し、それを克服するための方法を考察または立案することができるか。 6.【現場力】研究者倫理、技術者倫理、人を対象とする研究に関する倫理と研究に必要な手続きについて理解し、遵守しているか。

学位論文に関する評価の基準	＜学位論文が満たすべき水準、審査委員の体制、審査方法及び項目等＞ 博士論文審査委員会は、主査 1 名と副査 3 名以上で組織するものとする。このうち、主査および副査 2 名以上はエンパワーメント情報学プログラム担当教員（研究指導担当教員）とし、うち 2 名以上は教授とする。また、必要に応じてこのほかに達成度審査委員会が指名する 1 名がオブザーバーとして参加し、審査が適切に行われていることを確認する。 博士論文審査委員会は、学位論文の審査に係る基準に従い論文を審査し、合否判定を行う。上記 1. ～ 5. の評価項目すべてについて、学位論文（博士）としての水準に達していると認められるものを、最終（口述）試験を経た上で合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

「人の機能を補完し、人とともに協調し、人の機能を拡張する情報学」である「エンパワーメント情報学」の体系に基づき、キャリアパスとしての出口を見据えた
- 補完…障がい者や高齢者などの身体や感覚の機能が低下した人の物理的・認知的機能を補助する
- 協調…人が日常的に接する工学システムを、人と一体化するように調和させる
- 拡張…人が潜在的に有しているクリエイション機能を外在化し伸長させる

に関する 3 本分野と、ユーザ要素（人間理解）、システム要素（システム工学的理解）、コンテンツ要素（実装技術）の各要素に基づく横断的な知識を身につけるための分野横断コースワークや、社会のニーズに応えるための実践的研究訓練など、これらの多様なプログラムにより博士（人間情報学）にふさわしい高度グローバル人材に必要な能力を涵養する教育課程を編成する。

人間情報学における研究力・専門知識・倫理観とともに、システム情報工学における幅広い基礎的素養、理工学情報生命にわたる広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	教育課程は、エンパワーメント情報学に関する研究能力を高めることを第一の目的として編成するとともに、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するように編成する。必要に応じて、研究群共通科目群、学術院共通専門基礎科目、大学院共通科目から単位を履修することを推奨する。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制（必要に応じた他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や複数指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 【汎用的知識・能力】 - 主に特別研究（エンパワーメント情報学特別研究 I、II、III、IV、V）、研究発表演習（エンパワーメント研究発表演習、エンパワーメント学術雑誌論文発表演習、エンパワーメント国際会議・学術雑誌論文発表演習）により、知の創成力を身に付ける。 - 主に特別研究、エンパワーメントプロジェクト研究により、マネジメント能力を身に付ける。 - 主に特別研究、エンパワーメント情報学原論、特別演習（エンパワーメント情報学特別演習 I、II）、エンパワーメント研究発表演習、エンジニアリングレジデンス実習によってコミュニケーション能力を身に付ける。

教育課程の編成方針	【専門知識・能力】 – 主にエンパワーメント情報学原論、特別演習、特別研究、研究群共通科目（主にエンパワーメント情報学分野）などにより、分野横断力を身に付ける。 – 主に特別研究、特別演習、エンパワーメントプロジェクト研究、エンパワーメント国際会議・学術雑誌論文発表演習、エンパワーメント学術雑誌論文発表演習により魅せ方力を身に付ける。 – 主にエンパワーメント情報学原論、特別研究、エンジニアリングレジデンス実習により現場力を身に付ける。 – さまざまな学問的バックグラウンドをもつ学生に対して、入学後すみやかに研究を開始するために必要な基礎的知識や技術を習得するための授業を集中的に行う。並行して社会的・学術的に意義のある研究課題を自ら見つけ出すよう指導する。 – 各学生は、その課題について研究を行いながら、より専門的な知識や技術について授業等を通じて主体的に学ぶ。また、複数指導体制の利点を生かし、専門の異なる副指導教員のゼミに参加するなどして多様な視点から問題を捉える俯瞰力・分野横断力を育成する。 – 得られた研究成果は、最終的に学術雑誌論文で発表させ、多くの研究者から評価を受けるよう指導する。これによって、知の創成力を高めると共に、さらなる研究の推進やより高度な専門知識・技術の習得への原動力を与える。 – これらと並行して、各学生は達成度自己点検を随時行う。これによって、課程修了のために不足している知識や能力の修得を促す。
学修の方法 特色的な教育	– さまざまな学問的バックグラウンドをもつ学生に対して、入学後まずエンパワーメント情報学に関する研究を行うために必要な、人の特性に関する理解（ユーザ要素)、システム工学に対する理解（システム要素)、システム構成やインタラクションデザインに対する理解（コンテンツ要素）の各要素に関する基礎的知識や技術を習得するための授業を集中的に行う。並行して学術性、新規性、有用性を満たし、社会的インパクトのある研究課題を自ら見つけ出すよう指導する。 – 各学生は、その課題について研究を行いながら、より専門的な知識や技術について授業等を通じて主体的に学ぶ。また、複数指導体制の利点を生かし、専門の異なる副指導教員のゼミに参加するなどして多様な視点から問題を捉える俯瞰力を育成する。 – 得られた研究成果は最終的に査読付き学術雑誌論文として発表させ、高い評価を受けるよう指導する。これによって、知の創成力を高めると共に、さらなる研究の推進やより高度な専門知識・技術の習得への原動力を与える。 – これらと並行して、各学生は達成度自己点検を随時行う。これによって、課程修了のために不足している知識や能力の修得を促す。

エンパワーメント情報学プログラム（一貫制博士課程） ／ 修士（人間情報学）、博士（人間情報学）
Doctoral Program in Empowerment Informatics / Master of Human Informatics, Doctor of Philosophy in Human Informatics

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	本質を探究し実問題を解決する応用力、多角的で複眼的な俯瞰力と、最先端の新しい学問領域の地平を切り開く独創力等、専門分野における十分な研究能力を有し、現実の社会に広がるさまざまな地球規模課題に取り組むリーダーとなる資質と強い熱意を持ち、かつ産業界でのグローバルリーダーを目指すキャリア志向のある人材を求める。
入学者選抜方針	学術性と実践力の両立にふさわしい人材を選抜することを基本方針とする。入学者の選抜にあたっては、推薦入学試験と一般入学試験によって多様な入学志願者に対応するとともに、募集定員を分割し同一年度内に複数回の入学試験を実施する。試験区分にかかわらず外国語（英語能力検定試験（TOEIC、TOEFL 等）のスコアを提出）と口述試験を必須として選抜するものとする。口述試験では研究計画とキャリアプランに関する試問を行う。 – 推薦入学試験（7 月期）では、当学位プログラムを第一志望とし、成績が優秀でエンパワーメント情報学の研究に必要な能力が特に優れた者を選抜する。 – 第 1 回一般入学試験（8 月期）では、数学・英語等の基礎学力が高く、志望理由が明確で研究計画とキャリア プランの具体性や着想の点で優れている者を選抜する。また、第 2 回一般入学試験（2 月期）では、それらに加えて卒業研究（またはそれに代わるもの）を評価して選抜する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	学生の主体的かつ高度な学修を支援するため、複数の取り組みを実施する。達成度自己点検シートを活用し、学生が自身の研究進捗と学修成果を可視化することで、指導教員が適切な履修指導を行う体制を整える。学外の研究者との交流を促進し、研究活動に対する多角的な批評や議論を通じて研究の高度化を図る。また、企業の研究者や卒業生等との交流を通じて、博士課程進学者としての研究モチベーションを喚起し、専門的なキャリアパス形成への意欲を高める支援を行う。
学生同士の交流機会	学生同士の交流を促進し、学修意欲および研究の質の向上を図る。大学院セミナーでは、学生が自身の研究内容を発表し、他の学生との議論を通じて研究の理解を深めるとともに、表現力や批判的思考力を養う。また、各授業を通じて複数の学生が議論を交わせる場を提供し、学生間の情報共有や相互刺激を促す。これらの活動を通じて、学生同士のピア効果を高め、研究環境の活性化を支援する。
教員との交流機会	学生の研究活動を支援するため、教員との交流機会を積極的に提供する。大学院セミナーにおいては、学生が研究成果を発表し、教員からの助言や質問を受けることで、研究の方向性や論理構成を深める。プロジェクト研究では、教員の指導のもとで学生が協働して課題に取り組み、実践的な研究能力を養う。大学院生懇談会では、教員と学生が自由に意見交換を行う場を設け、研究活動や進路に関する相談を可能とする。さらに、教員が外部の研究者や企業人と連携し、学生に対して多角的な指導と助言を行う体制を整える。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育の質の保証および継続的な改善を図るため、複数の体制と仕組みを整備する。新任教員に対しては、教育内容や指導方法に関する FD（Faculty Development）を実施し、教育力の向上を支援する。加えて、達成度評価に関する FD を含む教員向けの研修を定期的に行い、教育活動の質的向上を促進する。達成度審査委員会においては、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。さらに、PDCA 委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

生物学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Biology

■ 修士（理学）
■ Master of Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

生物学ならびに生命科学領域の研究の基盤となる系統分類・進化学、生態学、植物発生・生理学、動物発生・生理学、分子細胞生物学、ゲノム情報学、先端細胞生物科学、先端分子生物科学の８分野において、広い学識と基本的な研究能力、問題探求能力と実践力、科学的な知を社会へ普及できる能力をもつ博士後期課程進学者、中・高等学校教員、高度職業人等を養成する。

養成する人材像	以下の能力を有する人材を育成する。 – 専門分野に関する知識と基本的な研究能力を修得している。 – 生物界や生命現象を論理的に捉え、基礎科学的な視点から設定された問題に取り組みその背後にある基本原理を探求することができる。 – プレゼンテーション・コミュニケーション能力を修得している。
修了後の進路	博士課程進学者、中・高等学校教員、企業等研究員、企業等技術者

生物学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（理学）
Master's Program in Biology / Master of Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	各分野セミナー、各分野研究法、各種演習・実習、修士論文作成、学会発表 等
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	サイエンスメディエーション実践、各分野セミナー、各分野研究法、修士論文作成、学会発表 等
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	サイエンスメディエーション実践、サイエンスコミュニケーション特論、各分野セミナー、各分野研究法、修士論文審査会、学会発表 等
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	サイエンスメディエーション実践、各分野研究法、TA 経験、研究セミナーでの経験等
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	サイエンスプレゼンテーション、サイエンスコミュニケーション特論、各分野セミナー、国外での活動経験、留学生との交流、国際会議発表、外国人との共同研究 等
	6. 自然科学の知識：自然科学全般における幅広い知識	自然科学の諸分野における基礎研究の動向を理解することができるか	研究群共通科目、各種実習、TA 経験 等
	7. 生物学の知識：生物界や生命現象を論理的に捉えるための生物学全般の幅広い基礎知識	生物界や生命現象を理解するための生物学全般の基礎学力を有しているか	各分野セミナー、各種演習、修士論文作成 等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	8. 生物学の研究力：生物学的な視点から設定された課題を研究する能力	生物学の専門分野に関する高度な知識と実験遂行能力を有しているか	各分野セミナー、各分野研究法、修士論文作成 等
	9. 生物学研究の探求力：得られた研究成果からその背後にある新たな問題や課題を探求する能力	現実の生物学の問題について、その背後にある基本原理や新たな問題の解決に向かえる能力を有しているか	各種演習、各分野研究法、修士論文作成等
	10. 生物学研究の発信力：研究成果を発信するためのプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力	専門分野の研究におけるプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を有しているか	各分野セミナー、サイエンスコミュニケーション特論、修士論文作成、学会発表 等
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 1 年次秋学期末に、主指導教員および副指導教員により中間評価を実施し、研究の進捗や関連知識、プレゼンテーション能力についてコンピテンスを満たすかどうかを総合的に評価する。 – 2 年次秋学期半ばに予備審査委員会により修士論文予備審査（公開）を実施し、学修状況の確認と最終達成度評価に向けた指導を行う。予備審査合格後、本審査論文を提出した学生について、主査、副査 3 名以上で構成される論文審査委員会により修士学位論文の審査を行う。また、本審査と同時に、最終達成度評価を行う。その際に、授業科目以外に、研究活動（国際共同研究、国内・国際学会発表経験）、各種講習会受講、学会や研究会等の運営についても対応するコンピテンスを記載させ、自主的な学修・研究活動も積極的に評価する。		
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。なお、審査は修士論文審査委員会（主査 1 名と副査 2 名以上）で行う。また、必要に応じて他学位プログラムの教員も副査として審査に参画することができる。 1. 生物学の現実の問題について、基礎科学的視点もしくは応用を見据えた視点から問題設定がなされているか。 2. 問題の探求のために用いられている理論、実験、調査などの研究方法と得られたデータの解析方法は科学的で適切なものであるか。 3. 問題設定から結論にいたる論旨が実証的かつ論理的に展開されているか。 4. 設定された問題に対して学術的成果が得られているか。 5. 学位論文としての体裁が整っているか。		

生物学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（理学）
Master's Program in Biology / Master of Science

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

生物界の多様性の理解のもとで、生命現象の基本原理を解明する能力を身につけるために、本学位プログラムを構成する系統分類・進化学、生態学、植物発生・生理学、動物発生・生理学、分子細胞生物学、ゲノム情報学、先端細胞生物科学（連携大学院）、先端分子生物科学（連携大学院）の 8 分野において生物学に重点をおいた教育課程を編成する。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目から各 1 単位以上を必修とする。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制（必要に応じた他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や副指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 – 大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、および、研究群共通科目により、自然科学の考え方を理解し、さらに、情報科学、研究倫理、生命倫理、コミュニケーション能力、研究成果の発信力などを総合的に身につける。 – プログラム共通科目群により、生物学を含む生命科学全般とサイエンスコミュニケーションに関する基本的な知識と理解力、プレゼンテーション能力を身につける。 – プログラム専門科目群により、生命科学諸領域の生物学的な研究分野における基本的な調査・解析技術を修得し、研究力と探求力、ならびに、発信力を身につける。 – 各専門分野セミナーでは、各分野における最先端の論文を精読し、研究内容に対する洞察力、分析力、プレゼンテーション能力を身につける。 – 各専門分野研究法では、実験や解析を通じてデータの取得と研究内容の結論および問題点を考察する能力を身につける。 – サイエンスメディエーション実践や TA 経験、研究セミナーでの発表経験などを通して、研究遂行におけるチームワーク力を身につける。 – 国際会議での発表、留学生との交流、外国人との共同研究などを通して、国際社会に貢献する意識を育む。
学修の方法 特色的な教育	– 標準修業年限は 2 年とする。修了要件として、以下に示す 30 単位以上を修得し、研究の成果を修士論文にまとめ、最終試験に合格する必要がある。 – 必修科目：各分野セミナー、各分野研究法、サイエンスプレゼンテーション、先端生物学セミナーによる 23 単位を必修とする。特に、各分野研究法において、研究指導ならびに修士論文作成指導を実施する。 – 選択科目とその他の科目：大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目および研究群共通科目を各 1 単位以上含む 7 単位までを修了単位として認定する。 – 1 年次開始時に全ての学生について、主指導教員および数名の副指導教員のチームで構成されるアドバイザリー・コミッティ（研究指導チーム）を設置し、各学生の研究計画の妥当性、問題点を整理する。また、履修科目や取得単位の確認等の指導を行う。アドバイザリー・コミッティは必要に応じて他学位プログラムの教員も参画する。

生物学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（理学）
Master's Program in Biology / Master of Science

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	生物界や生命現象に対する高い関心があり、生物学の基礎学力と強い探究心をもつ人材を求める。
入学者選抜方針	一般入試（一般学生、外国人留学生）、社会人特別選抜等の多様な選抜方式を採用し、大学卒業直後に進学する学生のみならず、外国人留学生や社会人を国内外から広く受け入れる。提出書類、筆記試験、口述試験等により、以下の能力を評価する。 – 生物学に関する基礎知識や基礎学力、論理的な思考力、的確な表現力、研究能力ならびに適性を評価する。 – 提出書類に含まれる英語能力検定試験のスコアにより、英語の語学力を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	主指導教員および副指導教員によるプレゼンテーションの指導、論文執筆指導を行う。また、研究時間管理についての支援も行う。また、日中韓国際大学院生アカデミックフォーラムやグローバルサイエンスウィーク、学会年会などへの参加を積極的に勧め、プレゼンテーション能力向上のための指導を行う。
学生同士の交流機会	必修科目であるサイエンスプレゼンテーションにおいて、自身の研究についてプレゼンテーションを行うことで、学生同士の交流を深める取り組みを行っている。また、いくつかの研究室が集まった形で院生セミナーを行うことで、学生同士の交流の機会としている。また、院生会を中心に、ポスター発表会や交流会を企画しており、学位プログラム内外の学生や教員に積極的な参加を促している。 学外の学生との交流には、学会や研究会等での研究成果発表を行うことで、学修意欲や研究の質の向上を行っている。
教員との交流機会	入学時のオリエンテーションおよび最終学年生への修士論文説明会を実施し、教員との交流の機会を設ける。また、院生会が中心となってポスター発表会や交流会を企画しており、教員に対して積極的な参加を促すことで、教員と学生との交流の機会を設けている。また、修士論文予備審査会を公開で行い、学生、教員の積極的な参加を促すことで教員との交流機会を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

カリキュラム委員会にて、最終学年生の研究活動状況（論文掲載、受賞歴、国際共同研究、国内・国際学会発表等）を共有し、学生への教育の質が保証されているかを議論する。また、学生アンケート、卒業率、就職状況を教育会議にて共有し、課題と改善策を議論する。また、修士論文予備審査会への教員の参加を促し、議論の活発化を図る。

生物資源科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Agro-Bioresources Science and Technology

■ 修士（農学）
■ Master of Agricultural Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

農・生物・環境に関する生物資源科学分野の研究者等の養成の一段階として、生物資源科学に関する基礎的な専門知識を修得し、食料の安定供給や生物資源の開発、保全、持続的利用等、人類の安定な生存と持続的な発展に貢献できる、創造性豊かな優れた研究・開発能力を有する人材、加えて高度の専門的な職業を担うための卓越した能力を有する人材を養成する。

養成する人材像	生物資源科学に関する基礎的な知識を有し、生物資源に関わる現実の課題について、農林生物学、農林社会経済学、生物環境工学、応用生命化学、バイオシステム学の各領域の専門知識を基盤とした課題解決の手法を理解し、グローバルな視点とローカルな視点を兼ね備え、課題解決の具体的な手段を考案・開発する能力を有する人材。
修了後の進路	食料・農業・環境に関係する国内外の公官庁、企業・研究機関・大学等教育機関、NGO 等において研究、教育、行政、技術開発、コーディネート、コンサルタント等の業務に携わる。また、修了生の一部は、さらに専門性を高め自立した研究者として能力を修得するため博士後期課程に進学する。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（農学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	生物資源科学研究法、国際生物資源科学研究法などの専門基礎科目、各領域の特別研究 IS、IF、IIS、IIF などの専門科目、修士論文作成、学会発表、学術論文発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	各領域の演習 IS、IF、IIS、IIF や特別研究 IS、IF、IIS、IIF などの専門科目、修士論文作成や学会発表に向けた計画的な取り組みなど
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	英語論文の書き方などに関する専門基礎科目、各領域の演習 IS、IF、IIS、IIF や特別研究 IS、IF、IIS、IIF などの専門科目、学会発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	生物資源科学インターンシップ I などの専門基礎科目、各領域の演習 IS、IF、IIS、IIF や特別研究 IS、IF、IIS、IIF などの専門科目、TA 経験、共同研究への参加、学会やセミナーでの質問など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、各領域の演習 IS、IF、IIS、IIF における国際的な研究情報の収集、国外でのインターンシップなどの活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、学術論文発表、外国人との共同研究など
	6. 専門性：生物資源科学に関する専門的な能力	生物資源科学の各専門分野の専門知識と研究能力を修得しているか	専門分野の特論などの専門科目、修士論文作成、学会発表、学術論文発表など
	7. 基礎的知識：生物資源科学に関連する基礎的知識	生物資源科学に関連する基礎的な知識と技術を修得しているか	生物資源科学研究法、国際生物資源科学研究法などの専門基礎科目、修士論文作成、学際的セミナーへの参加など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	8. 実践力：生物資源科学に関わる諸課題解決のための実践力	生物資源に関わる諸課題解決のため基礎および専門知識を活用して具体的な手段を考案・開発し実践できるか	各領域の特別研究 IS、IF、IIS、IIF などの研究指導科目、TA 経験、インターンシップ参加など
学修成果の評価に関する方針	2 年以上の在学と修了に必要な単位以上の習得が見込まれる者について、学位論文の審査および最終試験を行う。主査および 2 名以上の副査からなる学位論文審査委員会が、学位論文の審査、口頭試問およびコンピテンスの達成度評価を行い、上記の学位授与の方針（DP）に照らして修士（農学）学位に相応しい能力を有するか審査を行う。学修成果の評価は学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。また、領域ごとに公開発表会を行う。		
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。主査および2名以上の副査からなる学位論文審査委員会が､学位論文の審査と口頭試問を行い､審査を行う。 1. 研究の主題が明確に示され、学術的あるいは社会的な意義を有すること。 2. 研究目的が明確であり、その設定に至った研究の背景や先行研究を正確に理解し、適切に引用し、論理的に説明していること。 3. 研究方法が適切であること。 4. 研究結果が明確に示され、適切な方法で解析されていること。 5. 研究結果を論理的に考察し、学術的な新規性や社会的な有用性を持った結論を導き出していること。 6. 論文の構成、適切な文献等の引用など、学位論文としての体裁が整っていること。		

生物資源科学学位プログラム（博士前期課程）　／　修士（農学）
Master's Program in Agro-Bioresources Science and Technology / Master of Agricultural Science

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

プログラム内に、主な研究手法が異なる５つの領域「農林生物学領域」、「農林社会経済学領域」、「生物環境工学領域」、「応用生命化学領域」および「バイオシステム学領域」、および海外協定校とのダブルディグリープログラムとして「グローバルフードセキュリティー」ならびに留学生を対象とした英語プログラムの「国際農業科学」の２つのプログラムを設ける。

生物資源科学の基礎的な知識と技術、生物資源に関わる現実の課題を解決するために必要な専門的な知識、技術、研究手法を修得する。その手法による研究・調査で得られたデータの解析方法やまとめ方を修得し、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が身につけられるよう教育課程を編成する。

グローバルフードセキュリティー（ダブルディグリープログラム）では、協定校に１年間留学することにより国際的視野を備え、異文化適応力を身につける。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目から各１単位以上を必修とする。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制（必要に応じた他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や副指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 専門基礎科目として、プログラム共通の必修科目および各コース共通の選択科目に加え、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目、大学院共通科目を選択必修科目として履修し、幅広い教養と生物資源科学の基礎的な知識と技術を修得する。専門科目として各専門分野の特別講義、演習、特別研究を選択必修科目として履修し、各専門分野の基礎知識と技術を修得する。また、演習での発表、討論をおこなうことで、専門分野に関する知識を深めるとともに、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につける。特別研究を実施することで、専門分野での研究・調査方法、データの解析方法、まとめ方を学ぶとともに、マネジメント能力やチームワーク力を身につける。 － 専門基礎科目により、生物資源科学に関する幅広い基礎知識と技術を修得し、生物資源に関わる諸課題の理解や専門分野研究に応用する能力、ならびにグローバルな視点とローカルな視点を兼ね備えた柔軟な思考力を身に付ける。また、知の活用力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力、国際性等の基礎力を身に付ける。 － 専門科目の講義科目により、各学生が専門とする研究分野の講義を中心に複数の講義を選択し、各専門分野と関連分野の基礎知識と技術とそれらを活用する能力を身に付ける。 － 専門科目の演習科目により、専門分野の知識を深め、研究能力や探求力を身に付けるとともに、発表や討論を実施することで、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身に付ける。 － 専門科目の特別研究科目により、専門的手法を用いた研究・調査方法、データの解析方法、まとめ方等、基本的な研究能力を身に付ける。また、各学生が専門分野のテーマに沿った研究を進める中で、生物資源に関わる諸課題解決のための具体的な手段を考案・開発する能力やマネジメント能力、チームワーク力を身に付ける。 － 研究成果を修士論文としてまとめ、発表することにより、これらの能力をさらに高めるとともに、国際的に通用するコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、知を活用し生物資源に関わる現実の多様な課題の解決に取り組み、人類・社会へ貢献するための実践力を身につける。

学修の方法 **特色的な教育**	標準修業年限は 2 年とする。修了要件として、以下に示す 30 単位以上修得し、研究の成果を修士論文にまとめ、最終試験に合格すること。 (1) 専門基礎科目： – 生物資源科学研究法あるいは国際生物資源科学研究法（1 単位選択必修） – 大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目として開設される科目から各 1 単位以上 (2) 専門科目： – 専門科目（講義科目）：各学生が専門とする研究分野の特論（2 単位選択必修）を含め、専門分野とそれに関連する講義を 2 単位以上 – 専門科目（演習科目）：各学生が専門とする研究分野の演習を 4 科目 8 単位（選択必修） – 専門科目（特別研究科目）：研究指導・論文指導科目として、各学生が専門とする研究分野の特別研究を 4 科目 12 単位（選択必修）

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	農・生物・環境に関する生物資源科学分野に深い関心を持ち、主体的に学修する意欲が高く、生物資源科学に関する基礎知識、研究手法の基盤となる自然科学または社会経済学の基礎学力、英語文献を読み理解するなどの学修に必要な語学力、課題解決に向けて様々な情報を科学的に分析する論理的な思考力、自分の意見を的確に伝える表現力を有し、博士後期課程に進学し高度な専門的研究を行う研究者を目指す学生、また、修士の学位を取得し幅広い専門知識を活かして社会貢献を目指す学生および国際的にも活躍することを目指す学生を求める。
入学者選抜方針	一般入試、社会人特別選抜、留学生特別選抜等の多様な選抜方式を採用し、大学卒業直後に進学する学生のみならず、留学生や社会人を国内外から広く受け入れる。提出書類と口述試験により、以下の能力を評価する。 – 提出書類と口述試験により、生物資源科学に関する基礎知識や基礎学力を評価する。 – 提出書類に含まれる英語能力検定試験（TOEFL、TOEIC、IELTS）のスコアにより、英語の語学力を評価する。 – 提出書類に含まれる研究計画書と口述試験により、論理的な思考力、的確な表現力とを評価する。 – 口述試験により、生物資源科学分野に対する関心、研究に対するモチベーションと主体性を評価する。 ダブルディグリープログラムのグローバルフードセキュリティーに入学するためには、本学位プログラムに入学後、協定校が実施する選抜試験にも合格する必要がある。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	各領域の演習と特別研究において、文献検索・収集・整理スキル、プレゼンテーションスキル、ライティングスキルについて、学習支援を行う。学習スキルの向上を目指した専門基礎科目や大学院共通科目の履修を推奨している。アドバイザリー・コミッティにおいても、研究スキルの関する指導を行う。英語論文の書き方等に関する講義科目を提供する。

学生同士の交流機会	履修、修了のオリエンテーションを学年全体で実施し、交流の機会を設ける。各領域が実施する修士論文発表会では、領域以外の学生と 1 年次生も参加し、質疑に参加できる。修士論文発表会への積極的な参加を促すとともに、参加機会確保のため、5 つの領域間の発表会が重複しない形式で実施する。また研究群主催の日中韓国際大学院生アカデミックフォーラムでは学生が自ら企画、運営を行う。この経験をとおして、内外学生との国際交流の機会を与えている。
教員との交流機会	入学時のオリエンテーション、1 年次と 2 年次に実施する履修ガイダンス、修士論文説明会を学年全体で実施し、交流の機会を設ける。アドバイザリー・コミッティの課題検討会の際に教員との交流機会を設ける。さらに、研究群主催の日中韓国際大学院生アカデミックフォーラムの一環として行う「プレゼンのスキルアップ講座」において、研究群所属の教員がアドバイザーとなり、指導助言を与えるなど、学位プログラムの枠を超えた教員との交流機会も設けられている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

年度初頭の教育会議開催時に学位プログラム主催の FD セミナーを行い、昨年度の総括や当該年度の方針を全員で話し合う。全学や研究群主催の FD セミナーなどについて、参加した教員からのフィードバックを行っている。シラバスについては、教務担当教員が精査し、各担当教員に改善に関するフィードバックを行う。学位プログラムリーダー、教務委員、FD 委員等から構成される学位プログラムカリキュラム委員会が授業評価アンケートを実施する。その結果を精査すると共に、アンケート結果を各教員にフィードバックする。アンケート結果に基づき、各教員は教育の質向上のための改善を行う。また、学位プログラムカリキュラム委員会は個々の科目の改善だけでなく、カリキュラム全体としての教育の質向上に関する改善を行う。学修成果の評価については、学位プログラムカリキュラム委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

地球科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Geosciences

■ 修士（理学）
■ Master of Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

地球の過去および現在の様々な自然現象を理解し、地球規模での諸問題の解決に貢献できる幅広い基礎知識と専門的研究能力を有し、世界を舞台として現代社会の諸問題の克服に必要な科学的思考力をもつ人材を養成する。

養成する人材像	– 理学及び地球科学に関する幅広い基礎知識と優れた専門性の両面を有する人材 – 優れたフィールドワーク能力または実験・データ解析能力を有する人材 – 地球科学的諸問題に対する解決能力を有する人材 – 社会で通用する外国語能力およびコミュニケーション能力を有する人材 – 地球科学に対する社会のニーズを理解し、企業等において即戦力となる基礎知識と行動力を有する人材 – 研究活動における高い倫理観を有する人材
修了後の進路	大学院博士後期課程、民間企業、公務員、研究所研究員、中学校高校教員、博物館学芸員など

地球科学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（理学）
Master's Program in Geosciences / Master of Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	特別研究、特別演習、インターンシップ科目、修士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	特別研究、特別演習、インターンシップ科目、達成度自己点検、外部コンテスト等への参加など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	特別研究、特別演習、インターンシップ科目、学会発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	特別研究、特別演習、インターンシップ科目、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（ 国際性養成科目群）、語学力養成科目、外国語の演習科目、特別研究科目、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究など
	6. 知識と理解力：理学および地球科学に関する幅広い知識とその理解力	①理学および地球科学に関する幅広い知識をもつか ②理学および地球科学に関する様々な事象の背景にある基本原理を理解しているか	各分野の総論、特論、修士論文作成、学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 企画力：研究課題を設定し、研究計画を立案して遂行する企画力	①理学および地球科学に関する研究課題を設定できるか ②理学および地球科学に関する研究計画を立案して遂行できるか	各分野の演習、特別研究、修士論文作成、学会発表準備など
	8. 問題解決能力：諸問題に取り組み、その背後にある基本原理を理解して問題を解決する能力	①理学および地球科学に関する諸問題を認識することができるか ②理学および地球科学に関する諸問題を解決することができるか	各分野の演習、特別研究、修士論文作成、学会参加、TA など
	9. 表現力：基礎的な外国語力とコミュニケーション力をもとに自己表現する能力	①基礎的な外国語力をもつか ②理学および地球科学に関する研究成果を自己表現できるコミュニケーション力をもつか	各分野の演習、特別研究、修士論文作成、学会発表など
	10. 創造力：諸問題に取り組み、得られた研究成果を応用する創造力	①理学および地球科学に関する諸問題に取り組み、研究成果をあげることができるか ②理学および地球科学に関する研究成果を応用する創造力をもつか	各分野の演習、特別研究、修士論文作成、インターンシップなど
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の機会毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。 – アドバイザリー・コミッティによる各学期の研究進捗度審査 – 学位プログラム全体として実施する中間審査 – 学位プログラム全体として実施する研究発表会と学位論文審査委員会による最終審査		
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。なお、審査は審査委員会（主査および副査２名以上）で行う。副査は地球科学学位プログラムの担当教員とするが、他の学位プログラムの担当教員を含めることができる。 1. 提出された修士学位論文が、記述、論理展開、図表を含めて完成度が高いか。 2. 修士学位論文の内容が、地球科学分野の研究として十分に高いレベルにあるか。 3. 修士学位論文に参考文献が適切に引用されているか。 4. 修士論文の研究内容に対する修士号申請者の貢献が十分に認められるか。 5. 修士学位論文の学問的位置付け、内容、今後の展開を十分理解しているか。 6. 発表会において適切に質疑応答を行っているか。		

地球科学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（理学）
Master's Program in Geosciences / Master of Science

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学位プログラムでは、地球科学および関連する学部・学類卒業程度の知識を有する者を対象に、地球環境の様々な現象のプロセスおよびメカニズム、あるいは地球惑星の誕生から現在に至るまでの地球進化史を研究し、人間環境を含めた多様な側面を総合的に解明できる能力を有し、国際的にも活躍できる人材の養成を目指した教育課程を編成する。この目的を達成するために、必要な専門分野（連携大学院を含む）によって構成されている。いずれの分野でも、上記の学位授与方針を達成するために必要な特定分野に関する専門知識を修得し、外国語力、コミュニケーション能力、指導力、問題解決能力、倫理観、および地球科学分野の幅広い基礎知識を身につけるための教育課程を編成している。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目から各 1 単位以上を必修とする。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制（必要に応じた他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や副指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 – 科目区分の設定については、カリキュラムを「専門基礎科目」と「専門科目」に区分する。「専門基礎科目」では学位プログラム共通の内容を扱い、地球科学に関する基礎知識を得る。「専門科目」では各分野の専門的講義・演習を開講し、それらを履修するにより特定研究分野の専門的知識を得る。 – 学位取得を目指す学生は、研究指導を中心に担当する主指導教員と、アドバイザーとして研究指導に協力する副指導教員からなるアドバイザリー・コミッティにより、修了までの一連のカリキュラムにおいて、密度の高い個別指導を受けることができる。 – 専門基礎科目群により、知の活用力、広い視野を持つ力を身につける。 – 野外実験により、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力、研究能力、問題解決能力、探求力、プレゼンテーション能力を身につける。 – 外国語関連授業により、国際性、研究能力を身につける。 – 各専門分野の特論・総論により、研究能力、問題解決能力、探求力を身につける。 – 各専門分野の演習により、研究能力、問題解決能力、探求力、プレゼンテーション・コミュニケーション能力を身につける。 – インターシップにより、コミュニケーション能力、チームワーク力、広い視野を持つ力を身につける。 – 特別研究および実践実習により、10 個のコンピテンスすべての能力を身につける。
学修の方法 特色的な教育	– 1 年次に専門基礎科目およびそれぞれの専門分野に関する専門科目（特論・総論・演習等）を履修する。2 年次は引き続き各専門分野の専門科目を履修する。 – 選択科目として、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目および研究群共通科目から各 1 単位以上を修了単位として認定する。 – 特別研究は 1 年次に I を、2 年次に II を履修し、修士論文の作成に向けた研究を行う。 – 1 年次開始時に全ての学生について、主指導教員および数名の副指導教員のチームで構成されるアドバイザリー・コミッティ（研究指導チーム）を設置し、各学生の研究計画の妥当性、問題点を整理する。また、履修科目や取得単位の確認等の指導を行う。アドバイザリー・コミッティは必要に応じて他学位プログラムの教員も参画する。

地球科学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（理学）
Master's Program in Geosciences / Master of Science

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	地球科学の専門分野のうちのいずれかの分野において、学部・学類卒業程度の基礎的専門知識を有しており、地球の過去および現在における多様な諸問題を深く探求する意欲と、それらを総合的に解決するための学際的な素養を身に着けている人材を求める。特に科学的に自然現象を観察し分析することや、室内での実験・観察および野外での観察や調査といったフィールドワークに強い興味を持つ人を歓迎する。地道な基礎科学の勉学をいとわず、国際的な視野から論理的な思考ができるように努力することが要求される。
入学者選抜方針	– 書類審査と筆記試験により、地球科学に関する基礎知識や基礎学力を評価する。 – 口述試験により、研究に対する意欲と論理的思考力を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	アドバイザリコミッティ体制により複数教員が補完的に学修を支援している。また、全学的あるいは学位プログラム独自の仕組みを利用して学修活動を十分に行える経済的支援を行っている。
学生同士の交流機会	研究室・分野・学位プログラム・学会など、研究・学修活動を多層構造化することにより、多角的な自己研鑽を通じた学習意欲や研究の質の向上を図っている。
教員との交流機会	研究室の枠を超えて分野レベルでの討議・協働を活発に行うことで、主指導教員・副指導教員以外の教員との交流を促進させている。また、学位プログラム単位での意見交換の場も設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 教育会議やアドバイザリーコミッティならびに年 5 回開催の研究発表会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。
– 教務FD委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。

環境科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Environmental Sciences

■ 修士（環境科学）
■ Master of Environmental Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

地域および地球規模課題を解決していく高度職業専門人材には、俯瞰的・分野横断的な視点から問題の背景を分析・理解する研究・調査能力と、さらに当該問題の解決策を提言できる能力が必要である。具体的には、理学、工学、農学、社会科学等の融合から培われた国際水準の専門性や独創性を醸成するとともに、政策立案・履行の過程への貢献度も踏まえた、俯瞰力、実践力、即戦力、コミュニケーション力を涵養することで、グローバルリーダーとしての資質を育成する。

養成する人材像	– マネジメント人材：各専門分野において高度な専門性と環境科学全般に関する学際的視野を有し、企業の海外展開など各種事業運営にとって不可欠な人材。 – 専門性をもった実務的人材：国際機関、国際協力関連機関、企業の海外展開部門等において、高い専門性・調査能力が必要とされる国際協力案件等の実務を円滑に遂行できる人材。 – リーダーシップ人材：地域および地球規模の環境問題等の解決のため、高い専門性と分析力・問題解決能力を駆使しながら、チームワーク力と高い科学コミュニケーション力で国際交渉・ステークホルダー間折衝等を有効に遂行できる人材。
修了後の進路	– 博士後期課程進学 – 総合商社、メーカー、環境関連サービス、コンサルタントなどの民間企業、環境関連団体、マスコミなどの社員、職員、環境コンサルタント・アドバイザー – 国、地方官公庁等の公務員、学校教員 – 国際協力機関の職員・コンサルタント・調査員、企業の海外部門担当 – 環境関連事業の起業家 – 海外政府機関の行政官

環境科学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（環境科学）
Master's Program in Environmental Sciences / Master of Environmental Sciences

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（環境科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	Thesis Seminar in Environmental Sciences1S, 1F, 2S, 2F, International Field Appraisal I, II, 学会発表、学会プロシーディング掲載、学術誌掲載
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	Introduction to Environmental Sciences, Exercise in Environmental Sciences, International Field Appraisal I, II, Environmental Field Practice
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	Lab Seminar in Environmental Sciences1S, 1F, 2S, 2F, Exercise in Environmental Sciences, International Field Appraisal I, II, Introduction to English Presentation and Debate, 学会発表
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	Lab Seminar in Environmental Sciences1S, 1F, 2S, 2F, Exercise in Environmental Sciences, International Field Appraisal I, II, Environmental Field Practice, TA 経験
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	Introduction to Environmental Sciences, International Field Appraisal I, II, 学会発表、学内国際セミナー発表、修士論文作成
	6. 理解力・解析力:課題に関し、基礎的・応用的な科学・技術に基づき理解、解析、予測を行う能力	①対象とする課題を、理学、工学、農学、社会科学的な基礎力、応用力をもって理解できるか ②対象とする課題に関し、量的、質的に把握し問題解決につながる解析、予測ができるか	Introduction to Environmental Sciences, Exercise in Environmental Sciences, Lab Seminar in Environmental Sciences1S, 1F, 2S, 2F, Thesis Seminar in Environmental Sciences1S, 1F, 2S, 2F

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 課題対応力：課題に関し、学術的・社会的視点から情報収集能力し、対応する能力	①課題に関し、学術的、社会的に適切な情報収集ができるか ②課題に関し、収集した情報に基づき、適切な対策を講じ、対処することができるか	Lab Seminar in Environmental Sciences1S, 1F, 2S, 2F, Thesis Seminar in Environmental Sciences1S, 1F, 2S, 2F, 修士論文作成
	8. 提言力：課題に関し、学術的知見・社会的要請に基づき解決策を考究する能力	①課題に関し、学術的な視点とともに、制度・政策等を俯瞰することができるか ②課題に関し、学術的かつ社会的視点をもって、問題解決への目途を考究することができるか	Introduction to Environmental Sciences, Exercise in Environmental Sciences, Lab Seminar in Environmental Sciences1S, 1F, 2S, 2F, Thesis Seminar in Environmental Sciences1S, 1F, 2S, 2F
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価シート」に基づく達成度評価により、学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。コンピテンスの獲得状況については、1 年生の終わりに 1 回、2 年生の中間発表時に 1 回、修士論文提出時に 1 回、「達成度評価シート」に基づき確認をしている。		
学位論文に関する評価の基準	評価の基準としては以下の項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。 1. 環境問題の解決に、直接的あるいは間接的に貢献し得る課題である。 2. 課題に関連した従来の研究成果を十分に検討している。 3. 課題に対して、理論的あるいは実証的な面において新たな知見を示している。 評価方法としては、公開で修士論文最終発表会を開催し論文の完成度を評価する。 審査委員の体制としては、3 名以上の専門委員会によって行われる口述試験（最終試験）を実施し、さらに当該分野の知識や学力と研究の完成度を評価する。 学際的なカリキュラムを履修し、所定の単位を修得するとともに、修士論文研究を行い、合格と判断されることを要件とする。		

環境科学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（環境科学）
Master's Program in Environmental Sciences / Master of Environmental Sciences

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学位プログラムにおいては、地域および地球規模で生ずる環境問題のメカニズムを理解し、その解決策を提示することを志向し、理学、工学、農学、社会科学の基礎に加え、情報収集・解析力、コミュニケーション力、実践力、提言力を涵養するカリキュラムを構築する。具体的には、学位授与に要求される理解力・解析力、課題対応力、提言力の取得、とくに国内外のフィールドにおいて生じている水資源・水環境、生物資源・生物多様性、都市問題、災害・防災等の課題解決に必要な能力を習得するため、理学、工学、農学、社会科学の基礎と専門に基盤を置きかつ俯瞰的な洞察力を持って問題解決に資するために必要な能力の涵養に重点を置く。

教育課程の編成方針	原則全科目を英語で行う。アクティブ・ラーニングを全面的に導入し、多様な国籍や学問的背景を有する学生間で切磋琢磨する教育環境を構築する。 学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目から各 1 単位以上を必修とする。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制（必要に応じた他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や副指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 – 必修科目：全員が環境科学の基礎に関する概論・演習・実習科目を履修して環境問題を学際的に理解、分析、考察し基礎知識と学力を修得する。特に、座学と実習活動を強くリンクさせることで、環境問題を解決するための実践的な能力を醸成する。 – セミナー科目：修士論文研究に関連する科目で、研究室ごとの特色を生かしつつ、統一した基準に従って評価を行う。 – 選択科目：専攻開設の専門科目や、必要に応じて、国内外の大学を含む他の教育組織の科目を履修し、それぞれの分野における専門性を高める。課題の中で学生間の討論と協働作業を促し、国際理解とともに、新しい発想力を醸成する。 – 実習科目：環境関連の政府、企業、NPO 等におけるインターンシップや視察、ワークショップ等を組み合わせた国内外の研修などを通し、実務者能力を涵養する。
学修の方法 特色的な教育	– 専門基礎科目：必修科目として、Introduction to Environmental Sciences（2 単位）、Exercises in Environmental Sciences（1 単位）を履修する。これらは英語で行う。 – 専門科目：必修科目として、Lab Seminar in Environmental Sciences1S ～ 2F（各 2 単位）、Thesis Seminar in Environmental Sciences1S・1F（各 2 単位）及び Thesis Seminar in Environmental Sciences2S・2F（各 3 単位）、計 18 単位を履修する。その他、選択科目として、6 単位以上を履修する。 – 大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、及び研究群共通科目を必修として各 1 単位以上を履修する。 – 1 年次開始時に全ての学生について、主指導教員および数名の副指導教員のチームで構成されるアドバイザリー・コミッティ（研究指導チーム）を設置し、各学生の研究計画の妥当性、問題点を整理する。また、履修科目や取得単位の確認等の指導を行う。アドバイザリー・コミッティは必要に応じて他学位プログラムの教員も参画する。

環境科学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（環境科学）
Master's Program in Environmental Sciences / Master of Environmental Sciences

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	− 理学、工学、農学、社会科学等のいずれかの分野における、学部水準の優れた基礎学力をもつ者。 − 学際的な教育を受ける意欲がある者。 − 環境問題に対する深い関心と、その解決に向けた実践的な教育に関心を持つ者。 − 国際社会において活躍するための広い視野、基礎的教養とともに、使命感、正義感、倫理観、粘り強い継続力、柔軟で強靱な精神力等を持つ者。 − 英語で学会・国際セミナー発表を行うなど、国際的なコミュニケーション力を上達させる意欲がある者。 − 将来、英語を使って、環境科学の専門知識を国際社会の発展に貢献する意欲がある者。 − 上記に加え、社会人の場合には、これまでの実務経験等により身につけた実践力、マネジメント力等も積極的に評価する。
入学者選抜方針	− 上記「求める人材」において示した知識・素養、能力、意欲、英語能力を考査する。 − 研究計画の方針、既存研究との関係などを、論理的かつ明確に説明できるかを観察する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	履修指導、学生生活、就職、ハラスメントに関する相談についてはそれぞれカリキュラム委員会、学生相談・支援委員会、就職委員会、ハラスメント対策委員を定めて支援体制を構築する。また、全学生必修の「Lab Seminar in Environmental Sciences」、「Thesis Seminar in Environmental Sciences」を通じて、ライティングサポート、プレゼンテーション指導を実施する。
学生同士の交流機会	学位プログラムに所属する全学生が参加するオンライン上の情報交換の場を整備しており、学生同士の交流を促進する。また、留学生向けチューター制度を活用し、留学生も含めた学生同士の交流を促進する。さらに、必修科目の Excerceise in Environmental Sciences などの講義、演習等において、グループワークの時間を十分に確保する。
教員との交流機会	学位プログラムに所属する全学生及び全教員が参加するオンライン上の情報交換の場を整備しており、学生と教員の交流を促進する。修士論文の中間発表会など、学生・教員が参加する議論・交流の場を定期的に設定している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

カリキュラム委員会において、教育活動全体に対する点検、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。特に、カリキュラム委員会では、年に一度、各授業の内容と取得できるコンピテンスに齟齬がないか確認を行う。また、学生からの意見は指導教員等を通じて聴取し、カリキュラム委員会及び教育会議を通して、学位プログラム内で共有する。その上で、学位プログラム内にファカルティ―ディベロップメント委員会を設置し、体系的かつ計画的に教育の質の保証と改善を行う。さらに、中期的な教育の質に関するニーズの把握、取組みの効果の検証、課題の抽出については、学位プログラムの将来検討委員会等で継続的に検討する体制を整備する。

山岳科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Mountain Studies

■ 修士（山岳科学）
■ Master of Science in Mountain Studies

人材養成目的 / Program Educational Objectives

山岳域における自然変動や人間活動に伴う複雑な課題に対応するため、地圏・水圏・人間圏など多分野にわたる統合的な学びを通じて、山岳域の科学的理解の深化と持続可能な地域社会の発展に貢献できる高度な専門性を備えた人材を養成し、山岳域の自然環境の保全と地域社会の持続可能な発展を両立させ、山岳域の多様な課題に対応するリーダー的人材の排出を目指す。

養成する人材像	山岳域における自然科学と社会科学の知識・技術を統合的に習得し、山岳域の自然環境保全と地域社会の発展の両立に強い関心を持ち、それらの解決に貢献しうる人材
修了後の進路	山岳域の諸問題に携わる国家・地方公務員、国立研究開発法人研究所、地方自治体研究機関、気象関連企業、林業・木材関連企業、アウトドア・観光関連企業、環境コンサルタント関連企業、NPO/NGO 職員など

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（山岳科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	研究指導科目、インターンシップ科目、修士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	研究指導科目、演習科目、インターンシップ科目、達成度自己点検、外部コンテスト等への参加など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	研究指導科目、演習科目、研究発表に関する科目、学会発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	研究指導科目、演習科目、他研究室と共同の演習科目、TA 経験、学会での質問、セミナーでの質問など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、語学力養成科目、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究など
	6. 知識と技術力：山岳科学に関する基礎的な知識と技術を習得し、それらを活用する能力	山岳科学に関する基礎的な専門知識と技術を習得しているか	山岳科学概論 A、B、山岳教養論、山岳環境インターンシップ I、II、修士論文作成、学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 問題解決能力：山岳域の諸問題について科学的に理解し、問題解決の具体的な方策を策定できる能力	山岳域の諸問題を理解し、問題解決の具体的な方策を策定できるか	山岳科学研究 I、II、山岳フィールド実習 A、B、修士論文作成、学会発表など
	8. 連携及び自己表現能力：十分な意思疎通ができ、的確な自己表現ができるコミュニケーション能力	的確な自己表現ができるコミュニケーション能力を修得しているか	山岳科学セミナー IA、IB、IIA、IIB、フィールド安全管理学、学術集会や学会発表など
	9. リーダーシップ能力：山岳域の問題解決のため連携協力ができ、且つリーダーシップを発揮する能力	山岳域の問題解決のため連携協力ができ、且つリーダーシップを発揮する能力を有するか	フィールド安全管理学、山岳フィールド実習 A、B、学会での質問、セミナーでの質問など
	10. 国際性：国際的な視野で山岳域の諸問題に対応できる能力	国際的な視野で山岳域の諸問題に対応できる能力を修得しているか	Advanced lecture in Mountain studies、留学生との交流、国際会議参加発表など
学修成果の評価に関する方針	直接評価として、必修科目および選択必修科目の提出物に加えて、学術集会での成果物（ポスターおよびプレゼン資料）と質疑応答の内容を精査し、評価を行う。修士論文の評価に関しては、学生ごとに設置する複数人での研究指導体制（アドバイザリー・コミッティ）のもと、毎年 12 月に連携 4 大学で合同実施する山岳科学学術集会の場で、各学生の研究の進捗程度を評価する（修士 1 年時は中間審査、修士 2 年時は予備審査に相当）。さらに、最終発表会を公開形式かつ山岳科学 DP 関連教員によってコンピテンスの観点から評価を行い、優秀者を選出し表彰候補とする。 修了に必要な単位以上の修得が見込まれる者について、主査および 2 名以上の副査からなる学位論文審査委員会が、学位論文の審査と口頭試問を行い、上記の学位授与の方針（DP）に照らしつつ、各学生が修士（山岳科学）の学位に相応しいコンピテンスをどの程度身に付けたかを評価する。		

学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。なお、審査は審査委員会（主査および副査 2 名以上）で行う。副査は山岳科学学位プログラムの担当教員に加えて、他の学位プログラムまたは連携大学などの教員を含めることができる。 1. 提出された修士学位論文が、記述、論理展開、図表を含めて完成度が高いか。 2. 修士学位論文の内容が国際的な視野をもち、山岳科学分野の研究として十分に高いレベルにあるか。 3. 修士学位論文に参考文献が適切に引用されているか。 4. 修士論文の研究内容が、山岳域の諸問題の解決に対応できるものか。 5. 修士学位論文の学問的位置付け、内容、今後の展開を十分理解しているか。 6. 発表会において的確なプレゼンテーション能力及び十分な意思疎通ができるコミュニケーション能力をもとに、適切に質疑応答を行っているか。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

山岳科学の基礎的な知識と技術、生物資源に関わる現実の問題を解決するために必要な専門的な知識、技術、研究手法を修得する。その手法による研究・調査で得られたデータの解析方法やまとめ方を修得し、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が身につけられるよう教育課程を編成する。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目から各 1 単位以上を必修とする。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制（必要に応じた他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や副指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 – 山岳環境の保全と管理に不可欠な幅広い教養と高度な専門性を共に身につけられるよう、専門基礎科目と専門応用科目を設ける。専門応用科目は、地球圏・生物圏・人間圏の 3 つの領域における科目群と領域共通である山岳科学セミナー及び山岳科学研究で構成される。各領域における専門応用科目では、特定の分野について高度な専門知識や技能を習得できると同時に、複数領域の科目を横断的に履修することで学際的・応用的な想像力や課題発見力を養うことができる。 – これらの学修と専門分野における研究を学位論文としてとりまとめることにより、学位授与の方針に上げた各項目が達成される。

学修の方法 **特色的な教育**	標準修業年限は 2 年とし、修了要件として、以下に示す 30 単位以上修得し、研究の成果を修士論文にまとめ、最終試験に合格することで学位が授与される。 – 専門基礎科目は、山岳科学に関する基礎知識、考え方、及び実地における技術習得等を目的とした科目編成とし、概論と実習を連携大学共同開設とする。必修科目は山岳科学概論 A、B（各 1 単位）、山岳フィールド実習 A、B（各 1 単位）、フィールド安全管理学（1 単位）、大学院共通科目（1 単位以上）、学術院及び研究群の共通専門基盤科目（各 1 単位）で、合計 8 単位以上。選択科目は山岳環境インターンシップ I、II、先端研究実習 Advanced Lecture in Mountain Studies から 1 単位以上。 – 専門応用科目は、地球圏、生物圏、人間圏の各領域に高度な専門知識・技能等の修得を目的とした科目を配置する。必修科目は山岳科学セミナー I A、I B、II A、II B、山岳科学研究 I、II、山岳教養論で合計 15 単位。選択科目は山岳科学学位プログラム専門科目（地球圏領域、生物圏領域、人間圏領域）のそれぞれの領域から 2 単位以上。 – 修士論文研究指導は、主指導教員 1 名および副指導教員 2 名以上により行い、副指導教員のうち少なくとも 1 名は連携大学の教員とすることができる。また主指導及び副指導教員からなるアドバイザリー・コミッティ（AC）を設置し、課題検討会を開催して、各学生の研究計画の妥当性、問題点を整理する。また、履修科目や取得単位の確認等の指導を受ける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	– 山岳域に対する関心と山岳域が直面する課題解決に貢献する意欲を持つ人材を求める。 – 自然科学または社会科学に関する基礎的な学力を有し、専門知識に加え、山岳科学の複数の領域にまたがる知識、技術等を習得する意欲がある人材を求める。 – 社会人を含む幅広い分野から人材受け入れる。
入学者選抜方針	– 上記「求める人材」において示した知識・素養、能力、意欲、英語能力を考査する。 – 研究計画の方針、既存研究との関係などを、論理的かつ明確に説明できるかを観察する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	年 2 回開催される全学生参加必須の「山岳科学特別セミナー」において、発表する学生に対して特に異分野の方にも理解出来るようなプレゼンテーションの指導を行っている。また、時間管理の補助指導として、必修科目であるフィールド実習における多様な行事を通じて複数教員参加のもとで時間管理を支援している。
学生同士の交流機会	山岳科学学位プログラムでは、専門科目である 2 つのフィールド実習があり、この実習では少人数のグループで調査および発表することが一般的であり、こういった場を通じて学生間交流を促進している。これに加えて、連携 3 大学（信州大学・静岡大学・山梨大学）と合同で実施する山岳科学学術集会においても、異分野・異なる所属の学生の交流を促進するために懇親会を開催している。
教員との交流機会	山岳科学学位プログラムでは、入学式、修了式のみならず各種発表会等のあとに、教員を交えた懇親会を開催し交流の機会を増やしている。また、修士論文の指導は、原則として研究室単位の少人数ゼミを行い、主指導教員を中心とした教員との交流を促進している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

山岳科学学位プログラムでは、各学生の履修および学修状況等の確認を担当事務および学位プログラムリーダー等からなる山岳 DP 学修確認委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

ライフイノベーション（食料革新）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation（Food Innovation）

■ 修士（食料革新学）
■ Master of Food Innovation

人材養成目的 / Program Educational Objectives

「食品の機能性を探査する能力、その効果を効率的に出現させる食品加工に関わる能力、その機能性が人体に及ぼす効果を評価する栄養生理学的な能力、および機能性食品を市場展開していく能力を一連のものとして修得し、食品の新たな価値を創造できるグローバルに活躍する研究者を目指すための博士論文研究基礎力を有する者および高度専門職業人」を養成する。革新的な機能性食品開発は健康長寿社会の実現、国際競争力や経済成長に貢献するライフイノベーションの推進に貢献することが期待される。

養成する人材像	ライフサイエンスのイノベーションに係る分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度な専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いたライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、機能性食品・薬用化粧品等の研究開発及び管理分野において、グローバルに活躍する高度専門職業人。
修了後の進路	企業や研究機関が本学位プログラム教育に携わる事により、社会が求める人材を育成することが可能となり、より即戦力をもつ人材として、本プログラム修了者の社会的需要は高まると期待される。食品の機能性に基づく産業創成の全過程を俯瞰した中で、自らの技術・能力に基づいて問題解決に向けた役割を認識できる相対的な自己分析能力と組織貢献力を身に付けた人材として、食品関連企業、食品関連国公立研究機関、行政機関、国際協力機関、NGO、国際公務員、地域開発コンサルタント、シンクタンク研究員、官公庁の地域振興担当者等として活躍することが期待される。

ライフイノベーション（食料革新）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（食料革新学）
Master's Program in Life Science Innovation（Food Innovation）/ Master of Food Innovation

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（食料革新学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、修士論文作成
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、レギュラトリーサイエンス、達成度評価
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、T-LSI student workshop
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	レギュラトリーサイエンス、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、修士論文作成
	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野における新たな展開を切り開く能力	①ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得し、諸問題を俯瞰的に捉えることができるか ②専門分野に捕らわれずに新たな技能・知識を修得する意欲はあるか ③ライフサイエンス分野に関わる社会のニーズを理解しているか ④食料革新学に関する課題解決のために適切な研究計画を立案し、遂行することができるか	バイオインフォマティクス概論、創薬概論、食品科学概論、バイオリソース概論、ライフイノベーション修士研究、セミナーへの参加

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：専門分野における高度な知識と運用能力	①食料革新学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した知識を課題解決に役立てることができたか	食品・医薬品マネジメント学、食品機能学、食品安全学、ライフイノベーション修士研究
	8. 高度英語実践力：ライフサイエンス分野において通用する実践的な英語の運用能力	①ライフサイエンス分野における諸問題に関して自身の理解や意見を英語で的確に説明できるか ②研究立案書や報告書などを英語で作成することができるか	ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、達成度評価、T-LSI student workshop、修士論文作成
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法により評価する。 – 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 – 1 年次末に達成度評価 I を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 – 2 年次に達成度評価 II および最終試験を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて審査する。		
学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施した、食料革新分野の発展に貢献する新奇な研究成果であること。学位論文が、論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査 1 名、副査 2 名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査 2 名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を 1 名以上含むものとする。専門委員会 3 名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ 1 名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会 3 名以上のうち、プログラム担当以外の者を 1 名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。その際、学位論文の内容に関する発表を論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、食料革新分野の専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。		

ライフイノベーション（食料革新）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（食料革新学）
Master's Program in Life Science Innovation（Food Innovation）/ Master of Food Innovation

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学教員だけでなく、つくばライフサイエンス推進協議会に所属する研究機関等の協働大学院教員が積極的に教育研究に参画する事により、学生は、社会の未解決課題を学修し、食料革新分野において新たな展開を切り開くことを目指し、研究活動を行う。本学位プログラムではグローバルに活躍する高度専門職業人を養成することを目的とするため、講義は全て英語で行われ、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者による講義・セミナーを編成する。分野横断的な俯瞰力を養成するために、ライフサイエンス分野に関する全般的な基本概念を学修する基礎科目を編成する。また、キャリア教育の一環として、インターンシップ科目や研究機関等の事業内容等を学修するための科目を編成する。さらに、食料革新に関する専門力を養うための専門科目を編成する。

教育課程の編成方針	− 食料革新領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム 6 領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体分子材料領域）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、食料革新に関する専門力を養うための講義のほかに、各自の所属する研究室において、食料革新に関する研究指導を受ける。 − 修士論文作成等により、知の活用力を身に付ける。 −「レギュラトリーサイエンス」等により、マネジメント能力を身に付ける。 −「ライフイノベーション修士研究」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 −「ライフイノベーションチーム型演習（基礎）」等により、チームワーク力を身に付ける。 −「博士前期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 − 基礎科目、「ライフイノベーション修士研究」等により、イノベーション力を身に付ける。 − 専門科目等により、専門知識を身に付ける。 − 基礎科目、専門科目等により、高度英語実践力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 指導教員の指導のもと、情報収集方法を学び、社会のニーズを理解した上で、食料革新に関する課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行し、研究成果としてまとめる。 − 得られた研究成果は T-LSI student workshop 等で発表し、その過程において英語での発表力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得するとともに、英語によるコミュニケーション能力を向上させ、専門分野に捉われない知識の運用能力を身に付ける。 − インターンシップを行うことにより、社会人としての実践力を養う。 − 専門科目を受講することにより、専門知識を身に付ける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	食料革新分野におけるイノベーションを実現する意欲、その実現に必要な専門知識および高度英語実践力を修得するに十分な素養を持つ人材を求める。

入学者選抜方針	– 書類審査により、本学位プログラムで学ぶために必要な学士レベルの知識を有しているか、研究背景・将来の展望を英語により文章で説明できる能力があるかを評価する。 – 英語能力試験および口述試験により、食料革新分野におけるイノベーションを実現するための意欲、本学位プログラムで学ぶために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士前期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価については、面談を行い、普段の研究活動をデータに基づいてフィードバックしている。
学生同士の交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学毎年、所属教員に本学位プログラムの 3 つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための意見交換を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

ライフイノベーション（環境制御）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation（Environmental Management）

■ 修士（環境制御学）
■ Master of Environmental Management

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人類を含む生命は、とりまく環境条件によって生存・成長が決定され、近年、社会的注目を集める食の安全性、バイオリソースの持続可能な利用等のキーワードは環境の適切な制御が密接に関わる。そこで、「生命の生存・成長と環境条件との関係性、すなわち、微視的な環境生理学から巨視的な地球規模の環境生態学までを広く学び、環境条件が生命に及ぼす影響評価と制御に関する最新の専門知識及び研究基礎能力を修得し、環境の適切な制御に係る研究開発分野においてグローバルに活躍する、研究者を目指すための博士論文研究基礎力を有する者及び高度専門職業人」を育成する。

養成する人材像	ライフサイエンスのイノベーションに係る分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度な専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いたライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、地球規模課題である環境・エネルギーなどを対象とした研究開発及びその保全と管理の分野でグローバルに活躍する高度専門職業人。
修了後の進路	企業や研究機関が本学位プログラム教育に携わる事により、社会が求める人材を育成することが可能となり、より即戦力をもつ人材として、本プログラム修了者の社会的需要は高まると期待される。環境およびそれに伴う生命への影響をあらゆるスケールで俯瞰した中で、自らの技術・能力に基づいて問題解決に向けた役割を認識できる相対的な自己分析能力と組織貢献力を身に付けた人材として、環境関連機器メーカー、環境浄化関連企業、環境関連および生物資源管理に関わる国公立研究機関、行政機関、国際協力機関、NGO、国際公務員、環境コンサルタント、シンクタンク研究員、官公庁の環境部門担当者等として活躍することが期待される。

ライフイノベーション（環境制御）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（環境制御学）
Master's Program in Life Science Innovation（Environmental Management）/ Master of Environmental Management

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（環境制御学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、修士論文作成
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、レギュラトリーサイエンス、達成度評価
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、T-LSI student workshop
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	レギュラトリーサイエンス、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、修士論文作成
	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野における新たな展開を切り開く能力	①ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得し、諸問題を俯瞰的に捉えることができるか ②専門分野に捕らわれずに新たな技能・知識を修得する意欲はあるか ③ライフサイエンス分野に関わる社会のニーズを理解しているか ④環境制御学に関する課題解決のために適切な研究計画を立案し、遂行することができるか	バイオインフォマティクス概論、創薬概論、食品科学概論、バイオリソース概論、ライフイノベーション修士研究、セミナーへの参加

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：専門分野における高度な知識と運用能力	①環境制御学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した知識を課題解決に役立てることができたか	生育環境と機能性成分、バイオマス科学、水環境と生命科学、ライフイノベーション修士研究
	8. 高度英語実践力：ライフサイエンス分野において通用する実践的な英語の運用能力	①ライフサイエンス分野における諸問題に関して自身の理解や意見を英語で的確に説明できるか ②研究立案書や報告書などを英語で作成することができるか	ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、達成度評価、T-LSI student workshop、修士論文作成
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法により評価する。 － 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 － 1 年次末に達成度評価 I を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 － 2 年次に達成度評価 II および最終試験を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて審査する。		
学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施した、環境制御分野の発展に貢献する新奇な研究成果であること。学位論文が、論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査 1 名、副査 2 名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査 2 名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を 1 名以上含むものとする。専門委員会 3 名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ 1 名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会 3 名以上のうち、プログラム担当以外の者を 1 名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。その際、学位論文の内容に関する発表を論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、環境制御分野の専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。		

ライフイノベーション（環境制御）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（環境制御学）
Master's Program in Life Science Innovation（Environmental Management）/ Master of Environmental Management

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学教員だけでなく、つくばライフサイエンス推進協議会に所属する研究機関等の協働大学院教員が積極的に教育研究に参画する事により、学生は、社会の未解決課題を学修し、環境制御分野において新たな展開を切り開くことを目指し、研究活動を行う。本学位プログラムではグローバルに活躍する高度専門職業人を養成することを目的とするため、講義は全て英語で行われ、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者による講義・セミナーを編成する。分野横断的な俯瞰力を養成するために、ライフサイエンス分野に関する全般的な基本概念を学修する基礎科目を編成する。また、キャリア教育の一環として、インターンシップ科目や研究機関等の事業内容等を学修するための科目を編成する。さらに、環境制御に関する専門力を養うための専門科目を編成する。

教育課程の編成方針	− 環境制御領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム 6 領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体分子材料領域）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、環境制御に関する専門力を養うための講義のほかに、各自の所属する研究室において、環境制御に関する研究指導を受ける。 − 修士論文作成等により、知の活用力を身に付ける。 −「レギュラトリーサイエンス」等により、マネジメント能力を身に付ける。 −「ライフイノベーション修士研究」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 −「ライフイノベーションチーム型演習（基礎）」等により、チームワーク力を身に付ける。 −「博士前期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 − 基礎科目、「ライフイノベーション修士研究」等により、イノベーション力を身に付ける。 − 専門科目等により、専門知識を身に付ける。 − 基礎科目、専門科目等により、高度英語実践力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 指導教員の指導のもと、情報収集方法を学び、社会のニーズを理解した上で、環境制御に関する課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行し、研究成果としてまとめる。 − 得られた研究成果は T-LSI student workshop 等で発表し、その過程において英語での発表力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得するとともに、英語によるコミュニケーション能力を向上させ、専門分野に捉われない知識の運用能力を身に付ける。 − インターンシップを行うことにより、社会人としての実践力を養う。 − 専門科目を受講することにより、専門知識を身に付ける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	環境制御分野におけるイノベーションを実現する意欲、その実現に必要な専門知識および高度英語実践力を修得するに十分な素養を持つ人材を求める。

入学者選抜方針	– 書類審査により、本学位プログラムで学ぶために必要な学士レベルの知識を有しているか、研究背景・将来の展望を英語により文章で説明できる能力があるかを評価する。 – 英語能力試験および口述試験により、環境制御分野におけるイノベーションを実現するための意欲、本学位プログラムで学ぶために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士前期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価については、面談を行い、普段の研究活動をデータに基づいてフィードバックしている。
学生同士の交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学毎年、所属教員に本学位プログラムの 3 つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための意見交換を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

ライフイノベーション（生体分子材料）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation（Biomolecular Engineering）

■ 修士（生物工学）
■ Master of Bioengineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

「生体分子の機能に関する専門的な知識・理解を有し、生体分子の機能性材料への応用展開について精通し、それに係るプロジェクトマネージメント技術を学修した、革新的な分析技術、環境・生体適合性の高い機能性材料の実現などに貢献できる、グローバルに活躍する研究者を目指すための博士論文研究基礎力を有する者及び高度専門職業人」を養成する。

養成する人材像	ライフサイエンスのイノベーションに係る分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度な専門的研究能力を身に付け、あらゆるバイオリソースを駆使し、ライフサイエンス分野における新たな展開を切り開く革新的な機能性材料の研究開発分野でグローバルに活躍する高度専門職業人。
修了後の進路	企業や研究機関が本学位プログラム教育に携わる事により、社会が求める人材を育成することが可能となり、より即戦力をもつ人材として、本プログラム修了者の社会的需要は高まると期待される。生体分子の様々な分野への応用展開のプロセスを俯瞰した中で、自らの能力・技術に基づいて問題解決に向けた役割を認識できる相対的な自己分析能力と組織貢献力を身に付けた人材として、国内外の民間企業、研究機関、教育機関、行政機関において、研究者、技術者、経営者、行政官となることが期待される。

ライフイノベーション（生体分子材料）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（生物工学）
Master's Program in Life Science Innovation（Biomolecular Engineering）/ Master of Bioengineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（生物工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、修士論文作成
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、レギュラトリーサイエンス、達成度評価
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、T-LSI student workshop
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	レギュラトリーサイエンス、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、修士論文作成
	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野における新たな展開を切り開く能力	①ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得し、諸問題を俯瞰的に捉えることができるか ②専門分野に捕らわれずに新たな技能・知識を修得する意欲はあるか ③ライフサイエンス分野に関わる社会のニーズを理解しているか ④生物工学に関する課題解決のために適切な研究計画を立案し、遂行することができるか	バイオインフォマティクス概論、創薬概論、食品科学概論、バイオリソース概論、ライフイノベーション修士研究、セミナーへの参加

ライフイノベーション（生体分子材料）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（生物工学）
Master's Program in Life Science Innovation（Biomolecular Engineering）/ Master of Bioengineering

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：専門分野における高度な知識と運用能力	①生物工学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した知識を課題解決に役立てることができたか	バイオマテリアルサイエンス、生体分子工学、プロジェクトマネージメント、ライフイノベーション修士研究
	8. 高度英語実践力：ライフサイエンス分野において通用する実践的な英語の運用能力	①ライフサイエンス分野における諸問題に関して自身の理解や意見を英語で的確に説明できるか ②研究立案書や報告書などを英語で作成することができるか	ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、達成度評価、T-LSI student workshop、修士論文作成
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法により評価する。 – 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 – 1 年次末に達成度評価 I を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 – 2 年次に達成度評価 II および最終試験を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて審査する。		
学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施した、生体分子材料分野の発展に貢献する新奇な研究成果であること。学位論文が、論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査 1 名、副査 2 名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査 2 名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を 1 名以上含むものとする。専門委員会 3 名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ 1 名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会 3 名以上のうち、プログラム担当以外の者を 1 名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。その際、学位論文の内容に関する発表を論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、生体分子材料分野の専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。		

ライフイノベーション（生体分子材料）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（生物工学）
Master's Program in Life Science Innovation（Biomolecular Engineering）/ Master of Bioengineering

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学教員だけでなく、つくばライフサイエンス推進協議会に所属する研究機関等の協働大学院教員が積極的に教育研究に参画する事により、学生は、社会の未解決課題を学修し、生体分子材料分野において新たな展開を切り開くことを目指し、研究活動を行う。本学位プログラムではグローバルに活躍する高度専門職業人を養成することを目的とするため、講義は全て英語で行われ、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者による講義・セミナーを編成する。分野横断的な俯瞰力を養成するために、ライフサイエンス分野に関する全般的な基本概念を学修する基礎科目を編成する。また、キャリア教育の一環として、インターンシップ科目や研究機関等の事業内容等を学修するための科目を編成する。さらに、生体分子材料に関する専門力を養うための専門科目を編成する。

教育課程の編成方針	− 生体分子材料領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム 6 領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体分子材料領域）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、生体分子材料に関する専門力を養うための講義のほかに、各自の所属する研究室において、生体分子材料に関する研究指導を受ける。 − 修士論文作成等により、知の活用力を身に付ける。 −「レギュラトリーサイエンス」等により、マネジメント能力を身に付ける。 −「ライフイノベーション修士研究」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 −「ライフイノベーションチーム型演習（基礎）」等により、チームワーク力を身に付ける。 −「博士前期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 − 基礎科目、「ライフイノベーション修士研究」等により、イノベーション力を身に付ける。 − 専門科目等により、専門知識を身に付ける。 − 基礎科目、専門科目等により、高度英語実践力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 指導教員の指導のもと、情報収集方法を学び、社会のニーズを理解した上で、生体分子材料に関する課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行し、研究成果としてまとめる。 − 得られた研究成果は T-LSI student workshop 等で発表し、その過程において英語での発表力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得するとともに、英語によるコミュニケーション能力を向上させ、専門分野に捉われない知識の運用能力を身に付ける。 − インターンシップを行うことにより、社会人としての実践力を養う。 − 専門科目を受講することにより、専門知識を身に付ける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	生体分子材料分野におけるイノベーションを実現する意欲、その実現に必要な専門知識および高度英語実践力を修得するに十分な素養を持つ人材を求める。

入学者選抜方針	– 書類審査により、本学位プログラムで学ぶために必要な学士レベルの知識を有しているか、研究背景・将来の展望を英語により文章で説明できる能力があるかを評価する。 – 英語能力試験および口述試験により、生体分子材料分野におけるイノベーションを実現するための意欲、本学位プログラムで学ぶために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士前期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価については、面談を行い、普段の研究活動をデータに基づいてフィードバックしている。
学生同士の交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学毎年、所属教員に本学位プログラムの 3 つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための意見交換を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

生物学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Biology

■ 博士（理学）
■ Doctor of Philosophy in Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

生物界の多様性の理解のもとで、生命現象の基本原理、すなわち、普遍性と個々の生物における独自性を生物学的な観点から解明できる人材を育成することにより、生物学領域の研究者ならびに生命科学領域の研究・開発の現場で活躍できる国際的トップリーダー人材を輩出する。

養成する人材像	以下の能力を有する人材を育成する。 – 自然科学の諸分野における基礎研究の動向を広い視野をもって理解することができる。 – 生物界や生命現象を理論的に捉え、生物学的な視点から問題設定・解決に至るまでのプロセスを構築することができる。 – 問題の背後にある基本原理を解明することにより国際的に通用する学術的成果をあげることができる。
修了後の進路	大学教員、研究機関研究員、企業研究員

生物学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（理学）
Doctoral Program in Biology / Doctor of Philosophy in Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	各分野セミナー、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	各分野講究、博士論文作成、学会発表など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	各分野セミナー、博士論文審査会、学会発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	各分野講究、TA･RA 経験、研究セミナーでの経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	各分野セミナー、各分野講究、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、国際会議発表、英語論文など
	6. 自然科学の活用：自然科学の基礎研究の動向を広い視野をもって理解し、活用する能力	自然科学の諸分野における基礎研究の動向を広い視野をもって理解・活用することができるか	各分野セミナー、博士論文作成、TA 経験、RA 経験

生物学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（理学）
Doctoral Program in Biology / Doctor of Philosophy in Science

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 生物学に関する高度な研究力：生物学的な研究プロセスを構築・実施する高度な研究能力	生物界や生命現象を理論的に捉え、問題設定と解決に至るまでの研究プロセスを構築する能力、ならびに、研究プロセスを適切に実施する高度な研究能力を有しているか	各分野セミナー、博士論文作成、共同研究
	8. 博士（理学）の総合力：国際的な成果をあげるための能力	国際的に通用する学術的成果をあげるための研究力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、論文作成能力を有しているか	各分野講究、博士論文作成、学会発表、英語論文
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 2 年次秋学期末に、主指導教員および副指導教員により中間評価を実施し、研究の進捗や関連知識、プレゼンテーション能力についてコンピテンスを満たすかどうかを総合的に評価する。 – 3 年次秋学期半ばに主査、副査による博士論文予備審査（非公開）を実施し、学修状況の確認と最終達成度評価に向けた指導を行う。予備審査合格後、本審査論文を提出した学生について、主査、副査 4 名以上で構成される論文審査委員会により博士論文最終審査（公開）を行う。また、本審査と同時に、最終達成度評価を行う。その際に、授業科目以外に、研究活動（国際共同研究、国内・国際学会発表経験）、各種講習会受講、学会や研究会等の運営についても対応するコンピテンスを記載させ、自主的な学修・研究活動も積極的に評価する。		
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、予備審査、論文審査、及び、最終試験を経た上で、博士論文として合格とする。予備審査は主査 1 名と副査 3 名以上からなる予備審査委員会が、論文審査と最終試験は主査 1 名と副査 3 名以上からなる論文審査委員会が、それぞれ行う。また、必要に応じて他学位プログラムの教員や他大学の教員 も副査として審査に参画することができる。 1. 生物学の現実の問題について、基礎科学的もしくは応用を見据えた視点から問題設定がなされているか。 2. 問題の探求のために用いられている理論、実験、調査などの研究方法と得られたテータの解析方法は、国際的な水準から判断して、科学的で適切なものであるか。 3. 問題設定から結論にいたる論旨が英文で実証的かつ論理的に展開されているか。 4. 設定された問題に対して国際的に通用する学術的成果が得られており、問題の背後にある基本原理を解明、あるいは、応用を見据えた問題の解決手段を考案できているか。 5. 学位論文としての体裁が整っているか。		

生物学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（理学）
Doctoral Program in Biology / Doctor of Philosophy in Science

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

生物界の多様性の理解のもとで、生命現象の基本原理を解明する高度な能力を身につけるために、系統分類・進化学、生態学、植物発生・生理学、動物発生・生理学、分子細胞生物学、ゲノム情報学、先端細胞生物科学（連携大学院）、先端分子生物科学（連携大学院）の 8 つの生物学の専門分野からなる教育課程を編成する。

教育課程の編成方針	– 各専門分野セミナーでは最先端の論文を精読する。これを通して、生命倫理、研究マネジメント能力、コミュニケーション能力を身につけ、生命倫理および生命現象への基礎自然科学的な理解を深め、さらに、生物学に関する高度な研究力（研究内容に対する洞察力、分析力、プレゼンテーション能力）を身につける。 – 各専門分野講究にて研究論文・学位論文作成法を指導する。これにより、実際の実験・研究から導き出した結論の妥当性の吟味、先行研究との比較を指導し、国際的に通用する学術的成果をあげるための能力（博士としての総合力）を有する研究者を養成する。
学修の方法 特色的な教育	– 標準修業年限は 3 年とする。 修了要件として、各専門分野セミナーならびに講究を 12 単位以上修得し、研究の成果を博士論文にまとめ、最終試験に合格する必要がある。 – プログラムリーダーが指名する教員 1 名と研究分野に関連する教員 2 名以上を副指導教員とする。 – 指導教員による実践的な教育・研究指導に加え、3 名以上の副指導教員による研究指導体制（アドバイザリー・コミッティ）により、学生の学習効果や研究の進捗ならびに進路状況等の指導を行う。アドバイザリー・コミッティは必要に応じて他学位プログラムの教員も参画する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	生物界や生命現象に対する高い関心と知識があり、強い探究心をもって現実の問題を発見し、その課題の解決に取り組む意欲のある人材で、研究成果および活動を分かりやすく解説できるコミュニケーション能力と世界に向けて発信できる外国語能力をもつ人材を求める。
入学者選抜方針	一般入試（一般学生（外国人留学生を含む。）、内部進学者（外国人留学生を含む。））、社会人特別選抜等の多様な選抜方式を採用する。 提出書類、口述試験、内部進学者にあっては前期課程の修士論文予備審査の結果等により、以下の能力を評価する。 – 生物学に関する高い基礎知識と研究能力、適性を評価する。 – 一般入試（一般学生（外国人留学生を含む。））にあっては英語能力検定試験のスコアにより英語の語学力を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	主指導教員および副指導教員によるプレゼンテーションの指導、論文執筆指導を行う。また、研究時間管理についての支援も行う。また、日中韓国際大学院生アカデミックフォーラムやグローバルサイエンスウィーク、学会年会などへの参加を積極的に勧め、プレゼンテーション能力向上のための指導を行う。

学生同士の交流機会	いくつかの研究室が集まった形で院生セミナーを行うことで、学生同士の交流の機会としている。また、院生会を中心に、ポスター発表会や交流会を企画しており、学位プログラム内外の学生や教員に積極的な参加を促している。 学外の学生との交流には、学会や研究会等での研究成果発表を行うことで、学修意欲や研究の質の向上を行っている。
教員との交流機会	入学時のオリエンテーションを実施し、教員との交流の機会を設ける。また、院生会が中心となってポスター発表会や交流会を企画しており、教員に対して積極的な参加を促すことで、教員と学生との交流の機会を設けている。また、博士論文最終審査会を公開で行い、学生、教員の積極的な参加を促すことで教員との交流機会を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

カリキュラム委員会にて、最終学年生の研究活動状況（論文掲載、受賞歴、国際共同研究、国内・国際学会発表等）を共有し、学生への教育の質が保証されているかを議論する。また、学生アンケート、卒業率、就職状況を教育会議にて共有し、課題と改善策を議論する。また、博士論文最終審査会への教員の参加を促し、議論の活発化を図る。

農学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Agricultural Sciences

■ 博士（農学）
■ Doctor of Philosophy in Agricultural Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

総合科学としての農学のもつ幅広い知識、課題探求能力、問題解決能力を修得し、地球規模での農と食と環境にかかわる課題解決に根拠を与えるような研究を自立して遂行できる高度専門職業人・研究者を育成する。

養成する人材像	産業界はもとより、行政機関などにおいても、地球規模課題では国際的に整合性のある解決を、国内では地域社会の持続性を保証する解決を提言・実践できる人材が育成される。さらには大学における研究・教育の資源となる。
修了後の進路	本プログラムを修了した博士人材は、政府研究機関、政府行政機関、教育機関をはじめ、民間企業など産業界に進出し、国内外で基礎研究、技術開発、商品開発はもとより政策提言や研究行政に携わる。

農学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（農学）
Doctoral Program in Agricultural Sciences / Doctor of Philosophy in Agricultural Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（農学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	各講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	各講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、アドバイザリー・コミッティにおける研究活動の定期的な進行管理、個別指導など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	各講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、学会発表、ポスター発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	各講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、TA・TF（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	各講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文など
	6. 研究実行力：農学分野における最新の専門知識を備え、独創的な研究課題を設定・遂行できる能力	①専攻分野における正確な学識に基づいた新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②農学の持続的な発展に資する知を創成することが期待できるか	各講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、学位論文執筆

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識と運用力：農学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①農学分野における専門知識を幅広く備えているか ②専攻分野における先端的かつ高度な専門知識を修得し、それを研究や問題解決に運用できるか	各講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、国内外での学会発表
	8. 研究成果の社会実装力：農学分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専門分野に関する深い倫理的知識	①研究者倫理および技術者倫理と研究に必要な手続きについて十分に理解し遵守しているか ②専門分野に関する倫理的問題について、深い関心と知識をもつか	各講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、研究論文投稿、INFOSS 受講、APRIN
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表（コンピテンスシート）」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 達成度評価は、1 年次および 2 年次末において研究指導教員が確認し、予備審査委員会では、学位プログラムが定めた全てのコンピテンスを満たしていることを予備審査委員が確認する。博士論文審査において審査委員により確認された後、学位プログラム教育会議にて報告する。		
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、4 名以上からなる学位論文審査委員会における最終試験を経た上で、博士論文として合格とする。 1. 論文の問題設定が明確に示され、農学学位プログラム関連分野において学術的あるいは社会的な意義を有すると認められるか。 2. 研究主題の探求に際して、利用した文献や資料が適切に提示及び評価され、論旨の展開のうえで適切に言及されているか。 3. 研究主題探求のために採用された、理論、実験、調査、シミュレーション、試作・試行などの研究方法は適切か。 4. 問題設定から結論に至る論旨が実証的かつ論理的に展開されているか． また導き出された結論が農学学位プログラム関連分野において新規性または有用性があるか。 5. 学位論文としての体裁が整っているか。		

農学学位プログラム（博士後期課程）　／　博士（農学）
Doctoral Program in Agricultural Sciences / Doctor of Philosophy in Agricultural Science

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

総合科学としての農学が関わる各専門分野において、自らの力で研究・実践を計画して推進する能力、総括する能力、及び国際的に高い評価が得られる企画書・起案書・学術論文を公表する能力を体系的に修得するための教育課程を編成する。
＜ NARO 連係先端農業技術科学サブプログラム＞
国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構に在籍する第一線の研究者が、連係大学院の教員として学生指導を行う。我が国農業の産業基盤を支える総合的な技術体系の確立、持続的な食料供給を実現する地域社会の活性化を含む先端農業技術を修得する。

教育課程の編成方針	− 食料と環境・資源・エネルギーなど生物資源生産にかかわる専門力を習得し、地球規模課題を解決するための完結力、グローバルな視点で行われる研究と個々に異なる事情を持つ現場をつなぐローカライゼーション力を涵養するための教育課程を編成する。 − 必修科目の講究以外に大学院共通科目 2 単位以上習得することなどによりコミュニケーション能力、倫理的問題への対応力、マネジメント能力、リーダーシップとしての素養を修得させる。 − 海外フィールド演習による海外での野外観察や調査、海外研究者との交流を通じて、国際コミュニケーション能力を高め、農学を通した世界貢献に対する意欲を向上させる。
学修の方法 特色的な教育	− 講究を必修科目とし、それを通して、少人数で双方向性を持った教員・院生対話型の講義や研究発表形式のゼミを行い、専門知識に対する深い理解とプレゼンテーション能力・コミュニケーション能力、研究活動における高い倫理観、社会ニーズが高い課題を解決する能力を身に着ける。 − 国際学会での講演、国際誌への論文投稿を奨励し、英語力を持った国際的コミュニケーション能力を身に着ける指導を行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	生物資源科学の諸領域をリードする独創性と専門性を兼備した基礎的及び応用的研究素養を持ち、食料、人口、環境をめぐる今日的・国際的課題に対処できるグローバルな視野と未来を俯瞰した柔軟な思考力を併せ持ち、人類社会に貢献する意欲のある学生を求める。
入学者選抜方針	− 一般入試、社会人特別選抜、留学生特別選抜（国際農業科学プログラム）などの多様な選抜方式を採用する。 − 国際的活動に必要な語学力の評価、口述試験による自己表現能力、専門分野に関する研究能力、研究計画の適切性などの評価をもとに、本学位プログラムに適した人材を選抜する。 − 英語による教育プログラムや社会人を対象に 1 年間で修了可能な早期修了プログラムを実施する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	研究指導教員は、査読付き学術論文のライティングサポートや、国内外の学会発表等のためのプレゼンテーション指導を行う。また、各種セミナーなど研究能力向上に係る指導や、学修環境整備のための学生生活に係る支援を行う。研究指導教員と副指導教員を含む 3 名以上の教員で構成されるアドバイザリーコミッティを組織し、履修計画についての指導助言や、研究の進捗の確認、さらに、専門的見地からの研究内容への助言などを行う。
学生同士の交流機会	学修意欲や研究の質の向上に関して、研究グループ内での少人数制の対話型のゼミを実施し、大学院生によるプレゼンテーションと議論を行い、相互理解を深め、互いの研究の進捗状況や研究業績、成果を知り合うことで、研究のモチベーションにつなげるようにしている。入学時オリエンテーションや最終学年時対象の博士論文説明会を開催し、学生同士が話し合う機会を設けている。
教員との交流機会	3 名以上の教員により構成されるアドバイサリ―コミッティを定期的に開催し、研究の進捗状況や方向性などについて学生と複数の教員が話し合いを行う機会がある。また、必修科目である講究 I~III では、学生と教員により少人数制の対話型の講義や学生による研究発表が行われ、学生は教員と定期的に交流する機会がある。入学時のオリエンテーションや、最終学年対象の博士論文説明会では、指導教員以外の教員との交流機会が設けられている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

学位プログラム運営委員会で、FD 委員作成の年間 FD 計画案を審議し、教育の質の保証・改善についての課題・改善の方針について検討している。年度初めに学位プログラム主催の FD セミナーを行い、農学学位プログラムの学位スタンダードにおける 3 つのポリシーを全構成員で確認し課題について話し合う。また、シラバスについては、学位プログラム会議に原案を審議し承認して公式ホームページに掲載する。必修科目の講究 I ～ III の成績評価の基準について、毎年学位プログラム教育会議内で確認して評価する。成績評価の基準となる学会発表や論文発表については、各学生が学位論文提出時に業績リストとして学位プログラムに提出し、各年度の成果を学位プログラムが取りまとめる。学位プログラム教育会議において、アドバイサリ―コミッティ―設置や変更について審議し、研究支援体制を確認する。また、アドバイサリ―コミッティの実施報告を研究指導教員が学位プログラム会議で行い、それぞれの学生の研究の進捗および就学状況について研究指導教員が説明することで、教育の質や支援体制について検証する。また、学位プログラム会議において、修了生アンケート、授業アンケートなどを確認し、教育の質と改善について議論を行う。教育会議において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

生命農学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life and Agricultural Sciences

■ 博士（生命農学）
■ Doctor of Philosophy in Life and Agricultural Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

細胞および生体における統御された生命現象を分子レベルで理解し、その機能の利用を目的とした技術開発を実施できる専門力を修得し、人類の生存基盤の安定化と持続的発展に貢献できる研究者や大学教員を養成する。

養成する人材像	生命農学領域において、生物が有する機能の解明とその利用に関する広い見識と学際性を有し、独創的な研究で国際的に活躍できる人材。
修了後の進路	国内外の企業、団体、研究機関や大学等の研究者や教員

生命農学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（生命農学）
Doctoral Program in Life and Agricultural Sciences / Doctor of Philosophy in Life and Agricultural Sciences

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（生命農学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	各講究 III、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	各講究 I ～ III、RA 経験、プロジェクトの参加経験など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	各講究 II、III、生命農学演習、学会発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	各講究 I、大学院共通科目、RA 経験、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	各講究 II、III、外国人（留学生を含む）との共同研究、国際会議発表など
	6. 研究実行力：生命農学領域において、自らの力で研究課題を設定し、研究を計画・実行する能力	①生命農学領域における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定できるか ②設定した研究課題を解決するための研究計画を立案し、それに沿って研究を遂行できるか	各講究 I ～ III

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識と倫理観：生命農学領域における十分な専門的知識と研究活動における高い倫理観	①生命農学領域における先端的かつ高度な専門知識を修得できたか ②生命農学領域における基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理観と倫理的知識を修得したか	各講究 I ～ III、INFOSS 受講など
	8. 研究成果公表力：国際的に高い評価を得られる研究成果を公表する能力	得られた先端的な研究成果を取りまとめ、筆頭原著論文として査読付の国際学術誌に公表したか	各講究 III
	9. 研究適応力：生命農学領域における社会ニーズへの適応力	①生命農学領域における社会ニーズを広く理解できるか ②生命農学領域における他の研究課題を解決に導くための提案ができるか	各講究 III、生命農学演習、RA 経験、プロジェクトの参加経験など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 1 年次秋学期末、及び 2 年次秋学期末に、アドバイザリー・コミッティが中間評価を実施し、研究の進捗や関連知識、プレゼンテーション能力についてコンピテンスを満たすかどうかを総合的に評価する。また、生命農学演習受講者については、2 年次秋学期末に他研究室への参加、及び質疑応答を、参加研究室の指導教員が評価する。 – 3 年次秋学期半ばに、4 名以上の審査委員から構成される予備審査委員会により博士論文予備審査（非公開）を実施し、学修状況の確認と最終達成度評価に向けた指導を行う。 – 予備審査合格後、本審査論文を提出した学生について公開発表会を実施し、主査、副査 4 名以上で構成される論文審査委員会により博士学位論文の審査を行う。また、本審査と同時に、最終達成度審査を行う。研究活動報告（国際共同研究、国内・国際学会発表経験）、及び博士論文報告書を用いて授業科目以外の自主的な学修・研究活動も積極的に評価する。		

学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、予備審査、論文審査及び最終試験を経た上で、博士論文として合格とする。予備審査は、論文審査委員会委員候補者（主査 1 名及び副査 3 名以上）からなる予備審査委員会（必要に応じて他学位プログラムの教員も参画）が、論文審査と最終試験は、論文審査委員会（主査 1 名及び副査 3 名以上）が行う。 1. 自らが主体的に行った研究を主な内容とし、申請者自身によって書かれた明瞭かつ論理的な一つの新たな科学学術論文であるか。 2. 生命と農学に関する学問領域における独創性、新規性および学術的価値が高い研究成果を含むか。 – 予備審査：予備審査委員会で、学位論文の内容や体裁などについて検討し、必要に応じ修正等の指導を行う。また、学位論文の内容について発表させ、質疑応答を行う。予備審査委員会は必要に応じて他学位プログラムの教員も参画する。 – 最終試験：論文審査委員出席のもと、公開発表会を行い、学位論文の内容について発表させ、質疑応答を行う。引き続き、非公開で、口頭試問により、最終試験を行う。 審査基準は以下の通り。 1）学位論文の学術分野に関する十分な知識と高い倫理観を背景に、自らの力で研究を計画・実行し、国際的に高い評価を得られる研究成果を公表する能力を有するか。 2）生命と農学に関する学問領域において、社会ニーズが高い課題を解決する研究・教育能力を有し、国際社会で自在に交渉することができるコミュニケーション能力を有するか。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

生命農学の各研究領域において、応用を見据えた研究活動を自立して行うために必要な能力を体系的に修得するための教育課程を編成する。

教育課程の編成方針	必修科目である各研究領域の講究 I ～ III により生命農学領域の先進的教育を行い、生命農学に関連する研究課題を設定して先導的研究を複数の教員（必要に応じて他学位プログラムの主担当教員も参画）により指導することで、専門知識とその研究手法を修得させる。また、生命農学演習の履修により、各自の研究領域を越え、より広い生命農学領域における課題解決能力を養成する。更に、大学院共通科目の履修等により、コミュニケーション能力、倫理的な問題への対応力、マネジメント能力、教育能力、リーダーシップ力等の深化を促す。 ＜専門科目＞ – 講究 I：各研究領域における問題点を理解・把握する能力や、研究課題を設定し、研究を計画・実行する能力を身に付ける。 – 講究 II：研究を実行する能力や論理的な思考力を高める。また、国際学会等で研究成果を発表することで、英語力やプレゼンテーション能力を身に付ける。 – 講究 III：研究成果を取りまとめ、国際学術誌に公表する能力を身に付ける。 – 講究 I ～ III を通して、研究に取り組むことで、各研究領域の知識と研究活動における高い倫理観を身に付ける。 – 生命農学演習：広い視野で世界の持続的発展に貢献できる能力を身に付ける。 ＜教育・研究指導＞ – 入学時から修了時まで、複数の教員（必要に応じて他学位プログラムの主担当教員も参画）からなるアドバイザリー・コミッティから受ける教育・研究指導で、学位授与に求められる専門的知識・能力全般を身に付ける。

学修の方法 **特色的な教育**	− 講究 I、II 及び III の標準履修年次は、それぞれ 1 年次、2 年次及び 3 年次であり、体系的に履修させることによって、学位授与に求められる専門的知識・能力を順次身に付けさせる。 − 生命農学演習の標準履修年次は 2 年次であり、生命農学領域における諸課題を解決する力を養成すると共に、各自の研究課題やその意義を俯瞰的に理解させる。 − 3 名以上の教員からなるアドバイザリー・コミッティは、入学時に設置され、修了時まで継続して、担当する学生の教育・研究指導を行う。 − アドバイザリー・コミッティは、必要に応じ、大学院共通科目等を履修させる。 − アドバイザリー・コミッティは、原則として 2 年次の年度末には中間発表を行わせ、研究の進行状況の確認と学位論文等の取りまとめに向けたアドバイスを行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	動物、植物、微生物における種々の生命現象に対する関心と知識があり、生命農学領域の課題解決に役立つ基礎科学の探究とその応用に意欲的で、研究成果等を論理的にわかりやすく説明できる人材を求める。
入学者選抜方針	− 口述試験による選抜を実施する。 − 口述試験では、修士論文やこれまでの研究内容、入学後の研究計画等について発表させ、質疑応答により基礎・応用力、研究能力等を評価し、本学位プログラムに適した人材を選抜する。 − 修士課程修了直後に進学する日本人学生のみならず、学位取得を志す社会人や留学生を広く受け入れる。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	アドバイザリー・コミッティによる指導に加え、日中韓国際大学院生アカデミックフォーラム、及びつくばグローバルサイエンスウィークなどへの参加を積極的に勧め、英語プレゼンテーション能力向上のため指導を行う。 また、大学院説明会でのポスター説明を行わせ、研究の重要性を自覚させる。
学生同士の交流機会	生命農学演習での学生同士の企画立案を勧め、実行に向けた支援を行うことで、興味の対象が異なる学生同士の交流を活発にし、広い視野をもった学生を育成する。 博士論文発表会を公開で行い、学位プログラム以外の学生や教員の積極的な参加を促す。 日中韓国際大学院生アカデミックフォーラムでは学生が自ら企画、運営を行う。
教員との交流機会	入学時のオリエンテーションおよび最終学年生への博士論文説明会を実施し、交流の機会を設ける。アドバイザリー・コミッティが適宜交流を行うのに加え、生命農学演習での他研究室への参加を奨励して、他研究室の教員との交流機会を設ける。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育会議で前年度修了学生の研究活動状況（国際共同研究、国内・国際学会発表経験等）、並びに学生アンケート、授業評価アンケート、卒業率、就職状況を共有し、課題と改善策を議論する。また、博士論文公開発表会への教員の参加を推奨し、議論の活発化を図る。

生命産業科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Bioindustrial Sciences

■ 博士（生物工学）
■ Doctor of Philosophy in Biotechnology

人材養成目的 / Program Educational Objectives

生命科学を基盤とし、生命産業の創成およびその素材である生物資源の確保・流通・利用に関する新技術や知的財産権等の創出に寄与し得る研究開発能力を有した研究者を養成する。

さらに、生物資源の産業利用や発展途上国への技術支援・移転等に必須な国際取引や各種規制、社会的容認への対応等の社会科学的側面においても、生命倫理や多様性保護との関係を俯瞰しつつ課題解決を図る能力を有し、専門技術者や政策策定者の国際的リーダーシップのある実務的志向を持った研究者を養成する。

養成する人材像	生命産業の創成およびその素材である生物資源の確保・流通・利用に関し、生物工学的見地から新産業技術や知的財産権等の創出に寄与できる研究開発能力を持ち、かつ「生命」産業界特有のファクターである生命倫理や多様性保護、環境影響評価等の各種規制に関する各国情勢に通じ、その研究能力・知識をもって技術移転や国際戦略・政策策定の実務指導にも対応可能なリーダーシップを持つグローバル・スタンダードな人材を養成する。
修了後の進路	企業研究員、国際的研究機関研究員、大学教員、政府技官、国際産学コーディネーターなど

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（生物工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	生命産業特別研究 IA、IB、IIA、IIB、生命産業科学セミナー IIIA、IIIB、博士論文作成、中間評価会、投稿論文、学会発表
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	生命産業特別研究 IA、IB、IIA、IIB、生命産業科学セミナー IA、IB、IIA、IIB、IIIA、IIIB、生命産業規制論、生命産業技術移転論、中間評価会、RA 経験、達成度自己点検（早期修了 P）
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	生命産業科学セミナー IA、IB、IIA、IIB、IIIA、IIIB、国際生命産業科学特論、中間評価会、学会発表、市民セミナー等での講演、達成度自己点検（早期修了 P）
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	生命産業特別研究 IA、IB、IIA、IIB、国際生命産業科学特論、生命産業規制論、生命産業技術移転論、中間評価会、外部資金獲得、TA（大学院セミナー等）経験、達成度自己点検（早期修了 P）
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	生命産業特別研究 IA、IB、IIA、IIB、生命産業科学セミナー IA、IB、IIA、IIB、IIIA、IIIB、国際生命産業科学特論、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、国際会議発表、英語論文、達成度自己点検（早期修了 P）
	6. 研究力：生物工学における課題設定と知の創出に寄与し得る高度な知識と能力	①生体材料学分野における高度な知識、および関連分野における基礎的知識を広く身につけたか ②内外の研究開発動向を適切にとらえて課題設定を行い、新技術や知的財産権等の創出に寄与し得る能力があるか	生命産業特別研究 IA、IB、IIA、IIB、生命産業科学セミナー IIIA、IIIB、博士論文作成、投稿論文、学会発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 調整力：生物工学分野における国際的な規制等への深い理解を基盤とした課題解決能力	①生体材料学分野における国際取引や規制対応等において、生命倫理や生物多様性保護に関する各種規制等を深く理解したか ②説明責任を果たしつつ国際的な課題解決を図れる能力があるか	生命産業科学セミナーIA、IB、IIA、IIB、IIIA、IIIB、国際生命産業科学特論、生命産業規制論、学会発表、市民セミナー等での講演、達成度自己点検（早期修了 P）
	8. 指導力：生物工学分野における産業創成や社会対応、技術移転等で指導的立場となりうる能力	①生体材料学分野の土台となる生物資源の確保・流通・利用に関する社会対応・説明責任を果たしうる知識を持つか ②産業の創成、技術支援・移転等において、各国の技術者や為政者の指導的立場となりうる能力があるか	生命産業科学セミナーIA、IB、IIA、IIB、IIIA、IIIB、国際生命産業科学特論、生命産業技術移転論、学会発表、市民セミナー等での講演、達成度自己点検（早期修了 P）
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 2 年次春学期初頭に中間審査を実施し、アドバイザリー・コミッティがルーブリックに基づき第 1 回達成度審査を行う。 – 3 年次秋学期初頭に博士論文の予備審査（非公開）および公開発表会を実施する。アドバイザリー・コミッティに加えて、学位プログラムがランダムに指名する教員 1 名を追加した予備審査委員会が第 2 回達成度審査を実施し、最終達成度審査に向けた指導を行う。 – 予備審査合格後、本審査論文が提出されたものについて、主査、副査 3 名以上で構成される論文審査委員会により博士学位論文の審査を行う。また、本審査と同時に、最終達成度審査を行う。		
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で博士論文として合格とする。最終試験は主査 1 名、副査 3 名以上で構成された審査委員会によって、論文査読および口頭試験により行う。 1. タイトル：研究成果を簡潔かつ適切に示していること。 2. 研究目的：内外の先行研究を包括的に把握した上で研究課題との関連性を明示し、研究の独創性・進歩性が明確に引き出されていること。 3. 研究方法：研究方法が適切に選択されており、かつ第三者による検証が可能であること。選択した研究手法において各種規制や研究倫理が遵守されていること。 4. 研究成果・考察：研究方法に従って適切に行われ、図表等による明解な提示がなされていること。これまでの知見に照らして矛盾のない学術的な解釈がなされていること。データの取り扱いにおいて各種規制や研究倫理が遵守されていること。 5. 結論：研究内容が当該研究分野に新たな進展をもたらすものであると結論づけられていること。 6. 文献・資料 の引用や利用が適切になされており、研究倫理が遵守されていること。		

生命産業科学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（生物工学）
Doctoral Program in Bioindustrial Sciences / Doctor of Philosophy in Biotechnology

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学位プログラムは、「生命産業の創成」およびその素材である生物資源の「確保」・「流通」・「利用」を柱とし、生物工学分野における新技術や知的財産権等の創出に寄与し得る研究開発能力を基盤として、国際取引や各種規制、社会的容認への対応等の社会科学的側面にも通じた実務的指向の博士を養成する教育を特徴としている。そのため、本学位プログラムでは社会科学と自然科学を融合させた形態での教育・研究体制を構築する。

教育課程の編成方針	生命産業の創成およびその素材である生物資源の確保・流通・利用に関する新技術や知的財産権等の創出に寄与し得る高度な研究開発能力を身につける。また、一部科目を必修とすることで母国や出身母体の異なる学生相互の積極的な交流を促し、社会情勢や産業需要、保有資源や規制等の違いを体感させ、国際的な感覚を磨く。こうした一貫した教育課程を通じて得た研究能力・知識をもって、生物工学分野において自然科学と社会科学の両方の側面から課題解決を図れる国際的リーダーシップを持つ博士を養成する。 – 特別研究 IA、IB、IIA、IIB により、自己の専門分野においての研究活動を行い、博士の学位に相応しい研究成果をあげ、学術論文を公表する。これを通して深い知識を持ち、内外の研究開発動向を適切にとらえたうえで課題設定を行い、新技術や知的財産権等の創出に寄与し得る高度な研究開発能力を身につける。 – セミナー IA、IB、IIA、IIB、IIIA、IIIB により、生物工学における自己の専門分野においての知識を深め、内外の研究開発動向を適切にとらえたうえで課題設定を行う能力を身につける。また、生命産業に関連する他の分野において広い視野を持ち、専門外の課題についても柔軟に対応できる能力を身につける。 – 必修科目「国際生命産業科学特論」により、生物資源の産業利用に必須な国際取引や規制対応、技術移転等において、生命倫理や多様性保護との関係を俯瞰しつつ国際的な課題解決を図れる能力を身につける。また、必修化することで母国や出身母体、研究分野の異なる多様な人材との積極的な交流と議論を促す。これを通して国際感覚を磨き、グローバルな課題について柔軟に対応できる能力を身につける。 – 専門基礎科目「生命産業規制論」により、生物資源の産業利用に必須な各種規制等についてより深く理解し、国際取引や社会対応等における説明責任を果たし、調整を図れる対応力を身につける。 – 専門基礎科目「生命産業技術移転論」により、生命産業の創成や生物資源の確保・流通・利用に関する社会対応、科学的知見からの説明責任、発展途上国への技術支援・技術移転等についてより深く理解し、各国の専門技術者や政策策定者の指導的立場となりうるマネジメント力を身につける。

学修の方法 特色的な教育	個々の学生に対し、入学時に複数（3 名以上）の教員からなるアドバイザリー・コミッティを設置して、修了時まで継続的に学生の教育・研究指導を行う。アドバイザリー・コミッティは 2 年次に開催される中間評価を行い、研究の進捗状況の確認と学修達成度を確認する。また必要に応じて追加履修等の指示を行う。アドバイザリー・コミッティは必要に応じて他学位プログラムの教員も参画する。 – 入学時に必修科目として国際生命産業科学特論を受講させ、国際的な生物資源の産業利用に関する課題解決を図れる調整力・指導力を身につけるとともに、様々な国の多様な人材との積極的な交流と議論を促す。 – セミナーを 1 ～ 3 年次を通して体系的に履修させ、学位授与に求められる専門的知識・能力を順次身に付けさせる。 – 中間評価、予備審査等にあわせて学修達成度を確認し、アドバイスを与えることで本プログラムの学位授与に求められる人材像に合致するよう育成していく。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	生物工学分野における専門性はもちろんのこと、幅広い教養を持つ学生、国際的に研究・仕事を進める意思を持つ学生、国際的な研究グループや組織内で十分な意思疎通を行うことが可能な外国語能力やコミュニケーション能力を持ちたいと考えている人材を求める。社会人においては専門性の深化に加えて国際的リーダーシップを持ち、専門技術者や政策策定者の指導的立場となりうるコミュニケーション力、マネジメント力を求める人材を求める。入学者資質の厳選を図るため、「課題発表型」面接方式による口述試験に重点を置き、さらに英語能力を見るための英語での口頭試問も付加する。学生の志向・能力が本プログラムの人材養成方針と合致するかに重点を置きつつ、本専攻の趣旨に即した人材を選抜する。
入学者選抜方針	– 大学院修士課程等、これまでに行った研究内容、実務実績等を論理的に、かつわかりやすく時間内で説明できるか。また質疑応答が適切かを計量する。 – 博士入学後の研究方針について、関連する研究との関連性を踏まえてその学問的意義付け、具体的な方法、予想される結果を適切に時間内で説明できるか。また質疑応答が適切かを計量する。 – 質疑応答を通して、受験者の志向・能力と本プログラム人材養成方針との整合性、意欲、基礎学力、英語能力、ならびに人格的バランス等を総合的に計量する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	アドバイザリー・コミッティが適宜指導を行うのに加えて、英語プレゼンの向上に向けた「プレゼンのスキルアップ講座」を実施する（研究群主催の日中韓国際大学院生アカデミックフォーラムの一環）。
学生同士の 交流機会	必修講義「国際生命産業科学特論」において、グループ発表および質疑応答を行わせることで、互いに交流を深める機会を与える。博士論文発表会を公開で行い、学位プログラム以外の学生や教員の積極的な参加を促す。また研究群主催の日中韓国際大学院生アカデミックフォーラムでは学生が自ら企画、運営を行う。この経験をとおして、内外学生との国際交流の機会を与えている。

教員との交流機会	入学時のオリエンテーションおよび最終学年生への博士論文説明会を実施し、交流の機会を設ける。アドバイザリー・コミッティが適宜交流を行うのに加えて、必修講義「国際生命産業科学特論」（複数教員で担当）、複数の研究室による合同セミナーなどを開催し、交流を促している。さらに、研究群主催の日中韓国際大学院生アカデミックフォーラムの一環として行う「プレゼンのスキルアップ講座」において、研究群所属の教員がアドバイザーとなり、指導助言を与えるなど、学位プログラムの枠を超えた教員との交流機会も設けられている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

- 年度初頭の教育会議において学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
- 教育会議の審議事項に「FD について」の項目を設置し、全学や研究群主催の FD セミナーなどについて、参加した教員からのフィードバックを行う。また各授業科目について学期ごとにアンケートを行い、結果を共有することで内容改善の指標とする。上記を通して教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

地球科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Geosciences

■ 博士（理学）
■ Doctor of Philosophy in Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

地球の過去および現在の様々な自然現象を理解し、地球規模での諸問題の解決に貢献できる高度な専門的知識と研究能力を有し、国際的に活躍できる研究者として我が国の科学の発展に寄与できる人材を養成する。

養成する人材像	– 幅広い基礎知識と優れた専門性の両面を有する人材 – 優れたフィールドワーク能力または高度な実験・データ解析能力を有する人材 – 地球科学的諸問題に対する解決能力を有する人材 – 卓越した外国語能力およびコミュニケーション能力を有する人材 – 大学などの高等教育機関における教育能力を有する人材 – 研究活動における高い倫理観を有する人材
修了後の進路	大学等の高等教育機関、研究所、公務員、民間企業、博物館など

地球科学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（理学）
Doctoral Program in Geosciences / Doctor of Philosophy in Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	専門演習、インターンシップ科目、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	専門演習、インターンシップ科目、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	専門演習、インターンシップ科目、学会発表、ポスター発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	研究企画実習、専門演習、インターンシップ科目、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、特別演習、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC得点、国際会議発表、英語論文など
	6. 知識と理解力：地球科学に関する高度な専門知識とその理解力	①地球科学に関する高度な専門知識をもつか ②地球科学に関する様々な事象の背景にある基本原理を総合的に理解しているか	各分野の講究、特別演習、博士論文作成、学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 企画力：専門的な研究課題を設定し、研究計画を立案して遂行する卓越した企画力	①地球科学に関する専門的な研究課題を設定できるか ②地球科学に関する専門的な研究計画を立案して遂行できるか	各分野の特別演習、博士論文作成、学会発表準備など
	8. 問題解決能力：高度な諸問題に取り組み、その背後にある基本原理を探求して問題を解決する能力	①地球科学に関する高度な諸問題を認識することができるか ②地球科学に関する高度な諸問題を解決することができるか	各分野の特別演習、博士論文作成、学会参加、TA など
	9. 表現力：卓越した外国語力とコミュニケーション力をもとに自己表現する能力	①卓越した外国語力をもつか ②地球科学に関する研究成果を自己表現できる卓越したコミュニケーション力をもつか	各分野の特別演習、博士論文作成、学会発表など
	10. 創造力：専門的ニーズの高い諸問題に新しい視野から取り組み、得られた研究成果を応用する卓越した創造力	①地球科学に関する諸問題に新しい視野から取り組み、卓越した研究成果をあげることができるか ②地球科学に関する研究成果を応用する卓越した創造力をもつか	各分野の特別演習、博士論文作成、インターンシップなど
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の機会毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。 – アドバイザリー・コミッティによる各学期の研究進捗度審査 – 学位プログラム全体として実施する中間審査 – 学位プログラム全体として実施する予備審査 – 学位論文公開発表と学位論文審査委員会による最終審査		

学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で、博士論文として合格とする。なお、審査は審査委員会（主査および副査 3 名以上）で行う。副査は地球科学学位プログラムの担当教員とするが、他の学位プログラムの担当教員、学外の研究者を含めることができる。 1. 提出された博士学位論文が、記述、論理展開、図表を含めて完成度が極めて高いか。 2. 博士学位論文の内容が、地球科学分野の研究として世界的にも高いレベルにあるか。 3. 博士学位論文に参考文献が適切に引用されているか。 4. 博士論文の研究内容に対する博士号申請者の貢献が十分に認められるか。 5. 博士学位論文の学問的位置付け、内容、今後の展開を十分理解しているか。 6. 発表会において適切に質疑応答を行っているか。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学位プログラムでは、地球科学に関する博士前期課程修了程度の専門的能力を有する者を対象に、地球環境の様々な現象のプロセスおよびメカニズム、あるいは地球惑星の誕生から現在に至るまでの地球進化史を研究し、人間環境を含めた多様な側面を総合的に解明できる能力を有し、国際的にも活躍できる研究者および大学教員の養成を目指した教育課程を編成している。この目的を達成するために、本学位プログラムに必要な専門分野（連携大学院を含む）によって構成されている。いずれの分野でも、学位授与方針を達成するために必要な特定分野に関する高度な専門知識を修得し、外国語力、コミュニケーション能力、指導力、問題解決能力、倫理観を身につけるための教育課程を編成している。

教育課程の編成方針	− 科目区分の設定については、カリキュラムを「専門基礎科目」と「専門科目」に区分する。「専門基礎科目」では特に地球進化科学領域共通の内容を扱い、基礎知識を得る。「専門科目」では各分野の講究・演習等を開講し、それらを履修するにより特定研究分野の高い専門的知識を得る。 − 学位取得を目指す学生は、研究指導を中心に担当する主指導教員と、アドバイザーとして研究指導に協力する副指導教員からなる教員指導グループにより、修了までの一連のカリキュラムにおいて、密度の高い個別指導を受けることができる。 − 各専門分野の講究および特殊講義により、研究能力、問題解決能力、探求力を身につける。 − 各専門分野の特別演習により、10 個のコンピテンスすべての能力を身につける。 − インターシップにより、コミュニケーション能力、リーダーシップ力、問題解決能力を身につける。 − 研究企画野外実習の履修を通して、マネジメント能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ力、研究能力、問題解決能力、探求力、プレセンテーション能力を身につける。 − 大学院共通科目の履修を通してコミュニケーション能力、研究倫理を身につける。

学修の方法 特色的な教育	– 1 年次に専門基礎科目およびそれぞれの専門分野に関する専門科目（講究・特殊講義・演習・研究企画野外実習等）を履修する。 – 2 年次以降は博士論文の作成に向けた研究を行う。なお、早期修了プログラムの履修生は、1 年次より博士論文の作成を行う。 – 1 年次開始時に全ての学生について、主指導教員および数名の副指導教員のチームで構成されるアドバイザリー・コミッティ（研究指導チーム）を設置し、各学生の研究計画の妥当性、問題点を整理する。また、履修科目や取得単位の確認等の指導を行う。アドバイザリー・コミッティは必要に応じて他学位プログラムの教員も参画する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	地球科学の専門分野のうちのいずれかの分野において、大学院修士課程以上の基礎的専門知識を有しており、地球の過去および現在における多様な諸問題を深く探求する意欲と、それらを総合的に解決するための学際的な素養を身に着けている人材を求める。特に科学的に自然現象を観察し分析することや、室内での実験・観察および野外での観察や調査といったフィールドワークに強い興味を持つ人を歓迎する。地道な基礎科学の勉学をいとわず、国際的な視野から論理的な思考ができるように努力することが要求される。
入学者選抜方針	– 書類審査および口述試験により、知識と学力、研究に対する意欲、論理的思考力、プレゼンテーション能力を評価する。 – 社会人入試（社会人のための「早期修了プログラム」を含む）、海外の大学とのダブルディグリープログラム入試を実施する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	アドバイザリコミッティ体制により複数教員が補完的に学修を支援している。また、全学的あるいは学位プログラム独自の仕組みを利用して学修活動を十分に行える経済的支援を行っている。
学生同士の 交流機会	研究室・分野・学位プログラム・学会など、研究・学修活動を多層構造化することにより、多角的な自己研鑽を通じた学習意欲や研究の質の向上を図っている。
教員との交流機会	研究室の枠を超えて分野レベルでの討議・協働を活発に行うことで、主指導教員・副指導教員以外の教員との交流を促進させている。また、学位プログラム単位での意見交換の場も設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 教育会議やアドバイザリーコミッティならびに年 5 回開催の研究発表会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。
– 教務FD委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。

環境学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Environmental Studies

■ 博士（環境学）
■ Doctor of Philosophy in Environmental Studies

人材養成目的 / Program Educational Objectives

地域・地球規模課題に対し、科学的、かつ臨床的な洞察力をもとに、問題の原因、プロセスを論理的に解明するとともに、グローバルな視点から問題解決策を提示することのできる人材を育成する。理学、工学、農学、社会科学等における国際水準の専門性、独創性とともに、俯瞰力、実践力、論理構成力、説明力、コミュニケーション力を涵養し、グローバルリーダーとして活躍し得る高度専門実務者、研究者、教育者等を育成する。

養成する人材像	− 各専門分野において高度な専門性と環境学全般に関する俯瞰力を有し、併せて実践力とマネジメント力をもち大学、研究所等において研究者・教育者として活躍する人材。 − 国際機関、国際協力関連機関、企業の海外展開部門等において、専門性と俯瞰力により国際協力案件等の立案、実行に携わる高度実務者人材。 − 企業、官公庁等において、学際的、国際的視野から環境関連・地球規模課題等部門のリーダーとして、政策立案、国際交渉等を先導する人材。
修了後の進路	− 大学教員、国・民間研究所等研究員 − 国際協力機関の職員・コンサルタント・調査員、企業の海外部門担当 − 環境コンサルタント・アドバイザー − 環境関連事業の起業家 − 海外政府機関の行政官

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（環境学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	環境学博士論文演習 I、II、博士論文作成、学会発表、国際学術誌論文掲載、博士論文予備審査、博士論文最終審査
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	環境学博士論文演習 I、II、環境学フォーラム I、II、環境学実践実習 I、II、博士論文作成、学会発表、国際学術誌論文掲載
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	環境学実践実習 I、II、環境学フォーラム I、II、環境学博士論文演習 I、II、学会発表、国際共同研究
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	環境学博士論文演習 I、II、環境学フォーラム I、II、環境学実践実習 I、II、TA/RA 経験
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	環境学博士論文演習 I、II、環境学実践実習 I、II、環境学フォーラム I、II、博士論文作成、博士論文最終審査、学会発表、国際共同研究
	6. 専門理解力・解析力：課題に関する、科学技術に基づく量的、質的な現状把握、理解・解析力	①課題に関し、基礎的・応用的な科学技術に基づく量的、質的な理解・現状把握ができるか ②課題に関し、問題解決に繋がる、解析、予測ができるか	環境学フォーラム I、環境学博士論文演習 I、II、博士論文予備審査、博士論文作成、博士論文最終審査

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 応用力：学術的知見を、社会に応用するための目途や道程を考究する能力	①課題に関する科学技術的理解・解析結果を、問題解決につなげて考究できるか ②課題に関する学術的知見と社会的要請を、結びつけて考究することができるか	環境学フォーラム II、博士論文予備審査、博士論文作成、博士論文最終審査、学会発表、国際学術誌論文掲載
	8. 提言力：課題に関する、具体的解決策を提言する能力	①課題に関する制度・政策等を俯瞰的に理解することができるか ②課題に関わる地域の特性等を尊重し、解決策を考究、提言することができるか	環境学博士論文演習 I、II、環境学フォーラム I、II、環境学実践実習 I、II、博士論文予備審査、博士論文作成、博士論文最終審査
	9. 問題解決力：課題を、学術的な知見と社会的要請に基づき解決する能力	①課題に関する様々なスケールの量的、質的不均衡問題を、俯瞰的に理解できるか ②課題を、地域特性の理解と地球規模の視点に基づき、解決に導く道程を考究できるか	環境学フォーラム I、II、環境学実践実習 I、II、博士論文予備審査、博士論文作成、博士論文最終審査、学会発表、国際学術誌論文掲載
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価シート」に基づく達成度評価により、学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。コンピテンスの獲得状況については、1 年生の終わりに 1 回、2 年生の終わりに 1 回、博士論文提出時に 1 回、「達成度評価シート」に基づき確認をしている。		
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で、博士論文として合格とする。 【評価項目】 1. 当該研究分野における学術的な研究成果の位置づけ、およびオリジナリティが明確である。 2. 提示されたデータ、資料等は、結論を導く上で必要十分なものである。 3. 提示された仮説、仮定、論述は論理的かつ合理的である。 4. 研究成果は、関連領域への展開等が可能である。 【要件】 学位論文審査願提出時（学位申請時）に、学位申請者が学位論文に直接関連する筆頭原著論文 1 編以上を公表していること。但し、これらには掲載が決定している 1 編を含めることが出来る。原著論文とは、国内外の学術誌に掲載されるものとする。 学則第 44 条第 2 項の適用を受ける願出に関しては、次のいずれかの要件を満たしていること。但し、これらには掲載が決定している 1 編を含めることが出来る。 (1) 課程博士学生の場合、学位論文に直接関連する筆頭原著論文が 2 編以上公表されていること。但し、これらには入学前の 1 編に限り含めることができる。 (2) 社会人早期修了プログラム学生の場合、学位論文に直接関連する筆頭原著論文が 2 編以上公表されていること。		

学位論文に関する評価の基準	【審査体制】 審査体制としては、予備審査委員会を設置し、予備審査委員会は、学位プログラムの研究指導担当教員による委員長のほか、学位プログラム教員会議構成員 1 名以上を含む学内教員 3 名以上で構成される。予備審査委員会は少なくとも 1 回開催し、学位授与審査の願出要件を確認するとともに論文の内容、体裁などについて検討してその修正等の指導を行い、博士論文がその審査を開始するに値するか否かの判定を行う。 さらに、論文発表会は予備審査委員会の前後に公開で行われる。論文発表会の時間は約 1 時間とし、学位申請者は論文の内容を約 40 分間で発表し、その後約 20 分間の質疑応答を行う。 審査委員会を設置し、審査委員会は、研究指導担当教員による主査のほか、学位プログラム教員会議構成員 1 名以上を含む学内教員 3 名以上で構成される。審査委員会には、必要に応じて他大学大学院または学外研究所の教員等を副査として加えることが出来る。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学位プログラムにおいては、地域規模および地球規模課題の発生メカニズムを理解、予測し、その解決策を提示することを志向し、理学、工学、農学、社会科学の専門性ならびに課題に対する俯瞰性を基盤とし、情報収集・解析力、コミュニケーション力、実践力、提言力を涵養するカリキュラムを構築する。具体的には、学位授与に要求される専門理解力・解析力、応用力、提言力、問題解決力の取得、とくに国内外のフィールドにおいて生じている水資源・水環境、生物資源・生物多様性、都市問題、災害・防災等の課題解決に必要な能力を習得するため、理学、工学、農学、社会科学の専門に基盤を置きかつ俯瞰的な洞察力を持って問題解決に資するために必要な能力の涵養に重点を置く。

教育課程の編成方針	環境学に関する博士論文研究のための高度な知識と国際通用性・革新性を教育プログラムの課程で試験・評価を行い、これを単位化する。それによって、国際的に通用する博士（環境学）に必要な専門性、俯瞰性、分析能力等を担保する。また、コースワークおよびインターンシップ授業により、問題分析能力、実践力、コミュニケーション力等を醸成する。 環境学フォーラムおよび実践実習等のコースワーク、インターンシップを通じ、マネジメント能力、コミュニケーション能力、説明力、判断力、提言力等の実践的能力を涵養するとともに、環境学博士論文演習等を通じた博士論文研究の遂行により、フィールド調査能力、情報解析・分析力、ラボワーク力、チームワーク力、モデリング力等の統合的研究推進力を涵養する。
学修の方法 特色的な教育	– 環境学博士論文演習 I、II（各 1 単位）を必修とし、コースワークに関連する授業（環境学フォーラム I、II、環境学実践実習 I、II）を選択必修とする。 – 1 年次開始時に全ての学生について、主指導教員および数名の副指導教員のチームで構成されるアドバイザリー・コミッティ（研究指導チーム）を設置し、各学生の研究計画の妥当性、問題点を整理する。また、履修科目や取得単位の確認等の指導や博士論文研究の進捗の評価を行う。アドバイザリー・コミッティは必要に応じて他学位プログラムの教員も参画する。

環境学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（環境学）
Doctoral Program in Environmental Studies / Doctor of Philosophy in Environmental Studies

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	– 理学、工学、農学、社会科学等のいずれかの分野において、大学院修士水準の知識、素養を身につけている。 – 学際的な環境学研究に取り組むために必要な、知的好奇心、論理的思考力、要約力を有し、かつ周辺関連領域に関する学修を自律的に行う能力を身につけている。 – グローバルリーダーとして国際社会において活躍するために必要な、使命感、正義感、倫理観を有するとともに、自身で新たな学問分野や課題を切り拓く意欲と、それらを実現するための前向きな姿勢、粘り強い継続力、柔軟で強靱な精神を身につけている。 – 英語で国際学会発表、論文投稿、博士論文を執筆する意欲がある者。 – 持続可能な開発目標に関わる地球規模課題にグローバルリーダーとして取り組み、英語による政策作成・履行に貢献する意欲と将来ビジョンがある者。 – 上記に加え、社会人の場合には、これまでの実務経験等により身につけた実践力、マネジメント力等も積極的に評価する。
入学者選抜方針	以下の 3 項目を評価し、総合的に判断する。 – 大学院修士課程における研究内容、および（または）、これまでの研究・実務実績等を、適格にかつ論理的に説明できるか。 – 博士論文研究の方針、計画、既存研究との関係等を、論理的かつ明確に説明できるか。 – 上記「求める人材」において示した知識・素養、能力、意欲をプレゼンテーションと質疑応答により考査する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	履修指導、学生生活、就職、ハラスメントに関する相談についてはそれぞれカリキュラム委員会、学生相談・支援委員会、就職委員会、ハラスメント対策委員を定めて支援体制を構築する。また、全学生必修の「Exercise of Environmental Studies 」を通じて、ライティングサポート、プレゼンテーション指導を実施する。
学生同士の交流機会	学位プログラムに所属する全学生が参加するオンライン上の情報交換の場を整備しており、学生同士の交流を促進する。また、留学生向けチューター制度を活用し、留学生も含めた学生同士の交流を促進する。さらに、必修科目の環境学フォーラムなどの講義において、などの講義、演習等において、グループワークの時間を十分に確保する。
教員との交流機会	学位プログラムに所属する全学生及び全教員が参加するオンライン上の情報交換の場を整備しており、学生と教員の交流を促進する。主指導教員に加えて、学位プログラム内の 2 名以上の教員が各学生の研究指導委員となり、定期的に学生を指導する体制を構築することにより、主指導教員以外の教員と学生の交流も促進する。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

カリキュラム委員会において、教育活動全体に対する点検、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。特に、カリキュラム委員会では、年に一度、各授業の内容と取得できるコンピテンスに齟齬がないか確認を行う。また、学生からの意見は指導教員等を通じて聴取し、カリキュラム委員会及び教育会議を通して、学位プログラム内で共有する。その上で、学位プログラム内にファカルティ―ディベロップメント委員会を設置し、体系的かつ計画的に教育の質の保証と改善を行う。さらに、中期的な教育の質に関するニーズの把握、取組みの効果の検証、課題の抽出については、学位プログラムの将来検討委員会等で継続的に検討する体制を整備する。

ライフイノベーション（食料革新）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Food Innovation）

■ 博士（食料革新学）
■ Doctor of Philosophy in Food Innovation

人材養成目的 / Program Educational Objectives

分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いてライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、革新的医薬品・機能性食品の研究開発分野及びその保全と管理の分野で、国際的に評価の高い研究成果を創出し、グローバルに活躍する高度専門職業人または研究者を養成する。

養成する人材像	博士後期課程では博士前期課程で修得した食品機能性に基づく産業創成に関わる一連の能力の中で、いずれかの能力に着目して、それを研鑽し、「食品の新たな価値を見出すような国際的通用性の高い研究成果を創出できる研究者および高度専門職業人」を育成する。
修了後の進路	食品の機能性に基づく産業創成の全過程を俯瞰した中で、自らの技術・能力に基づいて問題解決に向けた役割を認識できる相対的な自己分析能力と組織貢献力を身に付けた人材として、食品関連企業、食品関連国公立研究機関、行政機関、国際協力機関、NGO、国際公務員、地域開発コンサルタント、シンクタンク研究員、官公庁の地域振興担当者等として活躍することが期待される。研究のグローバル化に伴い、海外との共同研究やコーディネートをする機会が今後さらに増加すると考えられ、博士課程修了者の需要は高まると考えられる。

ライフイノベーション（食料革新）学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（食料革新学）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Food Innovation）/ Doctor of Philosophy in Food Innovation

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（食料革新学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、博士論文作成
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、博士論文作成
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、学術論文発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野におけるイノベーションを実現する能力	①ライフサイエンス分野における新たな知を創出し、社会に還元する意識と意欲があるか ②ライフサイエンス分野におけるイノベーションの創出に繋がる理論や実践に関する研究手法および論理展開力を修得したか ③食料革新学における顕在化していない課題を発見し、解決できたか ④分野外の研究者と協働して、分野横断的な研究課題を発見・解決する意欲があるか	人を対象とした研究：基盤編、博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	7. 専門知識：専門分野における最先端知識	①食料革新学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した専門知識に基づき未解決課題を解決するための研究計画を立案できたか	ライフイノベーション博士研究、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	8. 高度英語実践力：国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力	①英語による研究成果の報告や発信に際し、国際社会にインパクトを与えられる発表能力を有しているか ②第一線級の研究者と対等に議論できるだけの英語力および知識を有しているか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、学術論文発表
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法を主体として評価する。 – 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 – 1 年次末に達成度評価 I 、修了予定の 1 年前に達成度評価 II および中間審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 – 修了予定の 5 ヶ月前に達成度評価III および学位論文予備審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価し、最終試験の受験資格について審査する。 – 最終試験を実施し、論文審査・口頭試験によって学位論文を評価し、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて最終的に審査する。		

学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施し、食料革新分野の発展に貢献する、新奇かつ国際的に高い評価を得られる研究成果であること。学位論文が、英語で論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査１名、副査３名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査３名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を２名以上含むものとする。専門委員会４名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ１名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会４名以上のうち、プログラム担当以外の者を１名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。最終試験のうち、論文内容の発表と質疑応答を公開で行う。その際、学位論文の内容に関する発表を英語で論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、最新の研究動向を含めて、食料革新分野の高度な専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

食料革新領域におけるイノベーション創出のための未解決課題を発見し、それを解決するための研究活動を行う。イノベーション創出のためには、専門分野外の研究者と協働して、全く異なる分野における研究課題や分野横断的な研究課題に取り組む高い意識と意欲が必要であり、インターンシップ科目を編成する。分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を養成するために、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者によるセミナーを編成する。

教育課程の編成方針	－ 食料革新領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム６領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体分子材料領域）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、食料革新に関する研究指導を受ける。 － 博士論文作成等により、知の創成力を身に付ける。 －「博士力実践プログラム」等により、マネジメント能力を身に付ける。 －「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 －「ライフイノベーション博士研究」により、リーダーシップ力を身に付ける。 －「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 － 基礎科目、専門科目等により、イノベーション力を身に付ける。 －「ライフイノベーション博士研究」等により、専門知識を身に付ける。 －「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、高度英語実践力を身に付ける。

学修の方法 特色的な教育	– 食料革新に関する最新の研究動向に把握した上で、顕在化していない課題を発見し、課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行する。さらに、指導教員らとの批判的な議論を通してライフイノベーション創出に繋がる研究へと展開する。 – 得られた研究成果は学術雑誌等で発表し、英語力を向上させ、その過程において論理展開力を身に付ける。 – 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する最新の研究動向を学ぶだけでなく、英語によるプレゼンテーション能力を向上させる。 – インターンシップを行うことにより、分野外の研究者と協働して新たな知を創出する経験を通して、研究力を磨く。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	食料革新分野におけるイノベーションの実現が期待される研究基礎力、その実現に必要な専門知識、国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力の修得に十分な素養、を持つ人材を求める。
入学者選抜方針	– 書類審査により、修士レベルの専門知識を有しているか（在籍課程での成績が優秀であるか）、研究背景・研究計画および研究成果の社会還元について英語で具体的に説明できる能力があるかを評価する。 – 英語能力試験および口述試験により、食料革新分野におけるイノベーションを実現するための意欲および必要な研究基礎力、本学位プログラムで研究活動を行うために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士後期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価の際は、面談を行い、活動データに基づいたフィードバックを行うこととしている。
学生同士の 交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が学術的に広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学位プログラムの３つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための議論を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

ライフイノベーション（環境制御）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Environmental Management）

■ 博士（環境制御学）
■ Doctor of Philosophy in Environmental Management

人材養成目的 / Program Educational Objectives

分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いてライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、革新的医薬品・機能性食品の研究開発分野及びその保全と管理の分野で、国際的に評価の高い研究成果を創出し、グローバルに活躍する高度専門職業人または研究者を養成する。

養成する人材像	博士後期課程では博士前期課程で俯瞰的に学んだ、生命の生存・成長と環境条件との関係性の中から特定のトピックに着目して、その問題解決能力を研鑽し、国際的通用性の高い研究成果を創出できる研究者および高度専門職業人を育成する。
修了後の進路	環境およびそれに伴う生命への影響をあらゆるスケールで俯瞰した中で、自らの専門に立脚しながら異なる視点からの意見を集約して総合的な解決方法を提示できる統率力と総括力を身に付けた人材として、環境関連機器メーカー、環境浄化関連企業、環境関連国公立研究機関、行政機関、国際協力機関、NGO、国際公務員、環境コンサルタント、シンクタンク研究員、官公庁の企画部門担当者として活躍することが期待される。研究のグローバル化に伴い、海外との共同研究やコーディネートをする機会が今後さらに増加すると考えられ、博士課程修了者の需要は高まると考えられる。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（環境制御学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、博士論文作成
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、博士論文作成
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、学術論文発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野におけるイノベーションを実現する能力	①ライフサイエンス分野における新たな知を創出し、社会に還元する意識と意欲があるか ②ライフサイエンス分野におけるイノベーションの創出に繋がる理論や実践に関する研究手法および論理展開力を修得したか ③環境制御学における顕在化していない課題を発見し、解決できたか ④分野外の研究者と協働して、分野横断的な研究課題を発見・解決する意欲があるか	人を対象とした研究：基盤編、博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	7. 専門知識：専門分野における最先端知識	①環境制御学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した専門知識に基づき未解決課題を解決するための研究計画を立案できたか	ライフイノベーション博士研究、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	8. 高度英語実践力：国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力	①英語による研究成果の報告や発信に際し、国際社会にインパクトを与えられる発表能力を有しているか ②第一線級の研究者と対等に議論できるだけの英語力および知識を有しているか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、学術論文発表
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法を主体として評価する。 – 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 – 1 年次末に達成度評価 I 、修了予定の 1 年前に達成度評価 II および中間審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 – 修了予定の 5 ヶ月前に達成度評価III および学位論文予備審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価し、最終試験の受験資格について審査する。 – 最終試験を実施し、論文審査・口頭試験によって学位論文を評価し、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて最終的に審査する。		

学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施し、環境制御分野の発展に貢献する、新奇かつ国際的に高い評価を得られる研究成果であること。学位論文が、英語で論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査１名、副査３名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査３名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を２名以上含むものとする。専門委員会４名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ１名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会４名以上のうち、プログラム担当以外の者を１名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。最終試験のうち、論文内容の発表と質疑応答を公開で行う。その際、学位論文の内容に関する発表を英語で論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、最新の研究動向を含めて、環境制御分野の高度な専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

環境制御領域におけるイノベーション創出のための未解決課題を発見し、それを解決するための研究活動を行う。イノベーション創出のためには、専門分野外の研究者と協働して、全く異なる分野における研究課題や分野横断的な研究課題に取り組む高い意識と意欲が必要であり、インターンシップ科目を編成する。分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を養成するために、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者によるセミナーを編成する。

教育課程の編成方針	− 環境制御領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム６領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体分子材料領域）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、環境制御に関する研究指導を受ける。 − 博士論文作成等により、知の創成力を身に付ける。 −「博士力実践プログラム」等により、マネジメント能力を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 −「ライフイノベーション博士研究」により、リーダーシップ力を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 − 基礎科目、専門科目等により、イノベーション力を身に付ける。 −「ライフイノベーション博士研究」等により、専門知識を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、高度英語実践力を身に付ける。

学修の方法 特色的な教育	− 環境制御に関する最新の研究動向に把握した上で、顕在化していない課題を発見し、課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行する。さらに、指導教員らとの批判的な議論を通してライフイノベーション創出に繋がる研究へと展開する。 − 得られた研究成果は学術雑誌等で発表し、英語力を向上させ、その過程において論理展開力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する最新の研究動向を学ぶだけでなく、英語によるプレゼンテーション能力を向上させる。 − インターンシップを行うことにより、分野外の研究者と協働して新たな知を創出する経験を通して、研究力を磨く。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	環境制御分野におけるイノベーションの実現が期待される研究基礎力、その実現に必要な専門知識、国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力の修得に十分な素養、を持つ人材を求める。
入学者選抜方針	− 書類審査により、修士レベルの専門知識を有しているか（在籍課程での成績が優秀であるか）、研究背景・研究計画および研究成果の社会還元について英語で具体的に説明できる能力があるかを評価する。 − 英語能力試験および口述試験により、環境制御分野におけるイノベーションを実現するための意欲および必要な研究基礎力、本学位プログラムで研究活動を行うために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士後期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価の際は、面談を行い、活動データに基づいたフィードバックを行うこととしている。
学生同士の 交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が学術的に広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学位プログラムの３つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための議論を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

ライフイノベーション（生体分子材料）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Biomolecular Engineering）

■ 博士（生物工学）
■ Doctor of Philosophy in Bioengineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を身に付け、あらゆるバイオリソースを駆使し、革新的な機能性材料の研究開発分野において国際的に評価の高い研究成果を創出し、ライフサイエンス分野における新たな展開を切り開く、グローバルに活躍する高度専門職業人または研究者を養成する。

養成する人材像	生体分子およびその応用展開に関連する幅広い知識および優れた課題設定能力・解決能力により、生体分子を利用した革新的な機能性材料の開発など国際的通用性の高い研究成果を創出できる研究者および高度専門職業人。
修了後の進路	生体分子材料分野における研究能力、マネジメントスキル、プレゼンテーション能力を基盤として、グローバル社会における未解決課題の解決に貢献するプロジェクト統率力および推進力を身に付けた人材として、国内外の民間企業、研究機関、教育機関、行政機関において、研究者、技術者、経営者、行政官として国際的に活躍する事が期待される。研究のグローバル化に伴い、海外との共同研究やコーディネートをする機会が今後さらに増加すると考えられ、博士課程修了者の需要は高まると考えられる。

ライフイノベーション（生体分子材料）学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（生物工学）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Biomolecular Engineering）/ Doctor of Philosophy in Bioengineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（生物工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、博士論文作成
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、博士論文作成
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、学術論文発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野におけるイノベーションを実現する能力	①ライフサイエンス分野における新たな知を創出し、社会に還元する意識と意欲があるか ②ライフサイエンス分野におけるイノベーションの創出に繋がる理論や実践に関する研究手法および論理展開力を修得したか ③生物工学における顕在化していない課題を発見し、解決できたか ④分野外の研究者と協働して、分野横断的な研究課題を発見・解決する意欲があるか	人を対象とした研究：基盤編、博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、博士論文作成、セミナーへの参加
	7. 専門知識：専門分野における最先端知識	①生物工学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した専門知識に基づき未解決課題を解決するための研究計画を立案できたか	ライフイノベーション博士研究、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	8. 高度英語実践力：国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力	①英語による研究成果の報告や発信に際し、国際社会にインパクトを与えられる発表能力を有しているか ②第一線級の研究者と対等に議論できるだけの英語力および知識を有しているか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、学術論文発表
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法を主体として評価する。 – 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 – 1 年次末に達成度評価Ⅰ、修了予定の 1 年前に達成度評価Ⅱおよび中間審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 – 修了予定の 5 ヶ月前に達成度評価Ⅲおよび学位論文予備審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価し、最終試験の受験資格について審査する。 – 最終試験を実施し、論文審査・口頭試験によって学位論文を評価し、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて最終的に審査する。		

学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施し、生体分子材料分野の発展に貢献する、新奇かつ国際的に高い評価を得られる研究成果であること。学位論文が、英語で論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査１名、副査３名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査３名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を２名以上含むものとする。専門委員会４名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ１名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会４名以上のうち、プログラム担当以外の者を１名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。最終試験のうち、論文内容の発表と質疑応答を公開で行う。その際、学位論文の内容に関する発表を英語で論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、最新の研究動向を含めて、生体分子材料分野の高度な専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

生体分子材料領域におけるイノベーション創出のための未解決課題を発見し、それを解決するための研究活動を行う。イノベーション創出のためには、専門分野外の研究者と協働して、全く異なる分野における研究課題や分野横断的な研究課題に取り組む高い意識と意欲が必要であり、インターンシップ科目を編成する。分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を養成するために、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者によるセミナーを編成する。

教育課程の編成方針	－ 生体分子材料領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム６領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体分子材料領域）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、生体分子材料に関する研究指導を受ける。 － 博士論文作成等により、知の創成力を身に付ける。 －「博士力実践プログラム」等により、マネジメント能力を身に付ける。 －「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 －「ライフイノベーション博士研究」により、リーダーシップ力を身に付ける。 －「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 － 基礎科目、専門科目等により、イノベーション力を身に付ける。 －「ライフイノベーション博士研究」等により、専門知識を身に付ける。 －「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、高度英語実践力を身に付ける。

学修の方法 特色的な教育	− 生体分子材料に関する最新の研究動向に把握した上で、顕在化していない課題を発見し、課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行する。さらに、指導教員らとの批判的な議論を通してライフイノベーション創出に繋がる研究へと展開する。 − 得られた研究成果は学術雑誌等で発表し、英語力を向上させ、その過程において論理展開力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する最新の研究動向を学ぶだけでなく、英語によるプレゼンテーション能力を向上させる。 − インターンシップを行うことにより、分野外の研究者と協働して新たな知を創出する経験を通して、研究力を磨く。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	生体分子材料分野におけるイノベーションの実現が期待される研究基礎力、その実現に必要な専門知識、国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力の修得に十分な素養、を持つ人材を求める。
入学者選抜方針	− 書類審査により、修士レベルの専門知識を有しているか（在籍課程での成績が優秀であるか）、研究背景・研究計画および研究成果の社会還元について英語で具体的に説明できる能力があるかを評価する。 − 英語能力試験および口述試験により、生体分子材料分野におけるイノベーションを実現するための意欲および必要な研究基礎力、本学位プログラムで研究活動を行うために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士後期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価の際は、面談を行い、活動データに基づいたフィードバックを行うこととしている。
学生同士の 交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が学術的に広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学位プログラムの３つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための議論を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

国際連携持続環境科学専攻（博士前期課程）
Joint Master's Degree Program in Sustainability and Environmental Sciences

■ 修士（持続環境科学）
■ Master of Sustainability and Environmental Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

熱帯アジア地域を主な対象に、水資源・水環境、水災害、生態系等の地球規模課題に対し、理学、農学、工学、社会科学等の専門的かつ俯瞰的な洞察力を持って問題解決並びに持続可能な社会の実現に寄与することのできる人材を育成する。

養成する人材像	– 熱帯アジア・モンスーン地域の、水資源・水環境、生物資源・生物多様性、都市問題等に関する、地域的かつ地球規模課題の解決に貢献できる人材 – 途上国における諸課題を理解し、持続可能でレジリエントな未来の地域社会創生に必要な知識と技術を備えた人材 – 専門性と俯瞰的な視点を持ち、困難な課題に真摯に対峙し、問題を的確に解決するための対策を講ずることができる人材
修了後の進路	– 日本のグローバル企業、環境コンサルタント企業等の海外部門における環境プラント開発の担当者 – 海外のグローバル企業、環境コンサルタント企業等の環境事業の担当者 – 国際協力機関等において、環境防災・持続可能な水資源ガバナンス・森林資源の管理・利用等に従事する者 – 上記業種に関連するシンクタンクやコンサルタント会社におけるアナリスト

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（持続環境科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. リテラシー：俯瞰的思考力及び論理構成力	①専門的知識を環境問題の中に位置づけるために必要な、俯瞰的な思考力があるか ②環境問題を専門的・俯瞰的に解析、説明するための論理構成力があるか	環境科学概論､持続性マネジメント政策、Master Project、生命科学工学討論、科学英語執筆、研究マネージメント技術、応用環境倫理学、研究方法論、修士論文研究に関する諸活動
	2. コーディネーション力：コミュニケーション力・交渉力・調整力	①多様なステークホルダーとのコミュニケーション力・交渉力があるか ②フィールド調査等における調整力、段取り力があるか ③関係機関・ステークホルダーとの会議等を仕切る能力があるか	環境科学実習、Master Project、生命科学工学討論、合同セミナー、修士論文研究に関する諸活動
	3. 実践力:実行力・表現力	①問題を整理・設定し、解決する道程を構築する実行力があるか ②プレゼンテーションや自己アピールなど表現力があるか	環境科学演習、環境科学実習、生命科学工学討論、研究方法論、合同セミナー、Master Project、修士論文研究に関する諸活動
	4. 基盤知識：熱帯アジア等地域における諸課題の理解・解析に必要な基礎知識	①諸課題に関し、理学、農学、工学、社会科学の基礎知識・技術に基づき理解・解析ができるか ②問題の所在に関し論理的に説明する能力を身につけているか	環境科学概論、環境科学演習、修士論文研究に関する諸活動
	5. 技術力：熱帯アジア等地域における諸課題の解決に必要な技術力	①環境問題に関する理解・解析に基づき、問題解決技術に関する知識を身につけているか ②技術の適用に関し想定される様々な問題を俯瞰的に考察する能力を身につけているか	環境科学特別研究 2S、2F、修士論文研究に関する諸活動
	6. 社会実装力：熱帯アジア等地域における諸課題解決に必要な学術的知見・技術を社会実装する能力	①諸課題の理解に基づき、社会実装可能なシステムを提言する能力を身につけているか。 ②関連既存技術・政策の問題点の指摘と新たな提言をする能力を身につけているか	合同セミナー、持続性マネジメント政策、修士論文研究に関する諸活動

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。 一段階目：合同セミナー終了後 二段階目：第三セメスター終了後 三段階目：修士論文仮製本提出時 一段階目では、ホーム大学（各学生の主指導教員が所属する大学）とホスト大学（各学生が留学する大学）の両大学の教員と学生が合同で実施する合同セミナーにおいて、学生が研究及び学修内容を発表し、この発表に対する質疑応答を含めて、達成度を評価する。二段階目では、ホスト大学において取得した研究データ等に関する解析や修士論文執筆の状況を聴取して、達成度を評価する。三段階目では両大学の教員が指導して作成した修士論文仮製本の完成度を基に、達成度を評価する。その後、修士論文発表の審査にあたっては、オンライン会議システムを用いて、ホーム大学とホスト大学の双方の教員から構成される論文審査委員会による審査を行う。
学位論文に関する評価の基準	専攻における学際的なカリキュラムを履修し、所定の単位を修得するとともに、修士論文研究を行い、学位申請論文が合格と判断されることを要件とする。 （学位申請論文の審査体制） 専攻内で設置される論文審査委員会は、専攻所属のホーム大学の研究指導担当教員による主査のほか、ホーム大学およびホスト大学から、それぞれ 1 名以上の副査を含む 3 名以上で構成される。但し、必要に応じて、他研究群学位プログラムの教育会議構成員を委員とする事が出来る。 論文審査委員会は、修士論文の審査を実施し、審査結果（合否判定）を専攻長に報告する。 （学位申請論文の評価項目） 1. 論文の問題設定が明確に示され、環境問題の解決に、直接的あるいは間接的に貢献しうる課題であると認められるか。 2. 研究目的の達成に際して、従来の研究成果（文献や資料）を明示しつつ、適切に評価し、論旨展開において課題探求における手順の妥当性が、示されているか。 3. 研究目的の達成に際しての研究方法（理論、実験方法・材料、調査方法、等）は適切であると認められるか。 4. 論文の問題設定から結論に至るまで、実証的かつ論理的に展開され、新たな知見を示し、導かれた結論が持続環境科学において学術的貢献が認められるか。 5. 学位論文としての体裁が整っているか。 （学位申請論文の評価基準） 上記 1 ～ 5 の評価項目の全てを満たす学位申請論文を、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本専攻では、環境問題が生ずるメカニズムを理解し、その解決策を提示することを指向し、自然科学、人文社会科学の基礎知識に加え、コミュニケーション力、実践力を涵養するカリキュラムを構築する。

具体的には、学位授与に要求される知識・能力及び高度専門職業人に求められる技術・判断力・実践力の取得及び特に熱帯アジア・モンスーン域における、気候変動、水資源、生物資源、都市問題、災害等の地域規模・地球規模課題の解決に必要な能力の取得のため、理学、農学、工学、社会科学等の専門的かつ俯瞰的な洞察力を持って問題解決に寄与することのできる人材を育成することを目的とし、教育課程の編成にあたっては、理学、農学、工学、社会科学等の基礎、及び問題理解・認識力、問題解決力、提言・実践力等を涵養することに重点を置く。

このためのカリキュラムを以下の方針で編成する。

教育課程の編成方針	①人類が直面している環境問題、特に熱帯アジア・モンスーン域に関連する重要課題に対し、学生が幅広い科学的知識と問題解決スキルを持ち、国際的に通用する研究能力と深い専門的知識及び研究者・実務家としての調査能力、問題解決力を有するとともに、それらを他の地域に応用し得る人材を養成するため、専門科目及び専門選択科目を設ける。 ②学生の学修・研究活動進捗の確認・評価、両大学の主指導教員、副指導教員間の意識共有、指導方針の確認等を行い、協働指導体制及び協働教育体制の実質化と、学修・研究成果の評価における基準化の確認等を行うため、共同開設科目として、本学及びマレーシア日本国際工科院（MJIIT）の合同によるセミナー科目を設ける。 ③地球規模課題の解決に真に貢献する、新規性の高い、国際的に通用する研究を実際に遂行するため、修論研究科目を設ける。 ④途上国における諸課題を理解し、環境科学の幅広い領域の調査や実験を文化背景の異なる海外で実施するために必要なスキル涵養を行うため、海外でのインターンシップ活動を行う。これは、筑波大学の学生がマレーシアにおいて行うフィールド調査、フィールド実習から体験型の実験学習等を修得するものであり、MJIIT の学生は日本において同様の学習を行うものである。実施するにあたっては、海外における実地的な活動であることに鑑み、MJIIT 側における日本人教員及び筑波大学から派遣される教員並びに本学における指導教員の連携を密にして海外において安全かつ効率的にインターンシップ活動が出来るように配慮を行う。また、MJIIT の学生も同様に、本学教員と MJIIT 教員との連携を密にし、安全かつ効率的なインターンシップ活動を行えるようにする。 ⑤論文の作成に必要となる専門分野の研究スキルと知識を養うセミナー科目及び、論文の完成に必要となる科学的な記述やプレゼンテーションの能力を涵養し、実際に学位論文を作成する特別研究科目を設ける。 ⑥21 世紀の科学技術とキャリア開発に欠かせない研究マネジメント力と得られた研究成果を世界に発信するための英語執筆力、そして、環境問題に関する法的、社会的、倫理的な知識の涵養を行うため、更に自らの目標達成に向けて、意見の違う相手と意見を戦わせ、他者の意見を十分理解した上で、更に自己の研究成果を発展させる研究コミュニケーション力の涵養のために教養科目を設ける。

学修の方法 **特色的な教育**	本専攻では、筑波大あるいは MJIIT をホームとする学生が、ホーム校で 1 学期を過ごしたあと、約 1 年間相手校に滞在して教育研究を行うこととなっており、それぞれの大学で指導教員を設定している。ホーム大学において 1 学期間コースワークや必修授業等を履修することにより、本専攻の理念や考え方等を理解し、コースワークやラボワークを通じて、学修・研究に必要な基礎知識、技術等を習得しつつ、連携外国大学院における学修・研究活動の準備を行う。 連携外国大学院においては、授業等を履修するとともに、修士論文研究遂行のためのフィールド調査や、ホーム大学から持参した実験用試料の分析等を行い、連携外国大学院の副指導教員のもとで、研究・学修を行い、評価する。共同セミナー等を通じて指導教員間の意思疎通を円滑にし、指導を担当する学生の習熟度に応じた指導を行う。また、学生は相手校に滞在中もホーム大学の指導教員との情報交換を密にする仕組みを構築しており、学生のケアを十分に行なっている。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	熱帯アジア地域の諸現象・諸課題への強い関心、自然科学又は社会科学の基礎的な素養と分野統合型の協働精神を持ち、地球規模課題に対して環境科学的アプローチによる解決を通じて持続可能な社会を創出する強い意志を持つ学生を求める。なお、入学者選抜については、各々の大学で行う第一次選考と 2 大学合同で行う第二次選考を経て合格者を選抜する。
入学者選抜方針	出願書類（志望動機、研究計画書、出身大学（学士課程）の成績・卒業証明書、学位取得証明書、英語能力を証明する書類等）及び面接（出願書類に基づき面接試験を行う。出願大学で実施し、連携大学はテレビ会議システムにより参画する）の結果を総合的に評価して合否を判定する。 なお、国際的なプログラムであることに鑑み、一定の英語能力を有していることを要件とする。 また、出願者への留意事項として、以下の 3 点を周知する。 – 本国際連携専攻が提供する英語による教育課程を修了するに足るコミュニケーション能力を有すること。 – 履修期間の内 1 年間を派遣大学において、1 年間を受入大学において履修できる状況にあること。 – 筑波大学及びマレーシア工科大学において学修するのにともない必要な、旅費、宿舎費、生活費等を自弁できること（奨学金獲得等含む）。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	研究マネージメント技術、研究方法論等の科目による研究計画スキルの向上支援、科学英語執筆等の科目によるライティングサポート、Master Project 1、合同セミナー等の科目によるプレゼンテーション指導により、効果的な学修を支援する。
学生同士の交流機会	両大学の教員と学生が合同に実施する合同セミナーにおいて、学生が研究及び学修内容を発表し、この発表に対する質疑応答を行うことで学生交流を促す。その際、専門外の教員・学生に対して分かりやすい研究発表を工夫すること心がけさせることで、プレゼンテーション能力の向上を図る。環境科学概論・演習においては、グループワークを取り入れ、研究背景・分野の異なる学生の間で意見調整を行う能力を涵養する。

教員との交流機会	所属する研究室において日常的に、ホーム大学およびホスト大学の指導教員から研究指導を受ける。入学後、概ね 1 年経過後の研究進捗と今後の予定についての発表を行う Master Project 1 において、ホーム大学およびホスト大学で関連分野の研究を行う教員からアドバイスを得る機会がある。さらに、両大学の教員と学生が合同に実施する合同セミナーにおいて、学生が研究及び学修内容を発表し、この発表に対する質疑応答を行うことで指導教員以外の教員との交流を促す。その際、専門外の教員・学生に対して分かりやすい研究発表を工夫すること心がけさせることで、プレゼンテーション能力の向上を図る。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

両大学の専攻長とコーディネーター教員を含む運営委員会（Steering committee）を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、専攻の目的達成に向けた体制を強化する。運営委員会では合同会議を定期的に開催し、両大学間のシステムや体制の違いを確認しながら、ジョイントディグリープログラムでの教育の質保証と改善を図る。特に、コーディネーター教員同士が密に連絡を取り合うことで情報の齟齬がないように努める。各科目における授業アンケートを実施し、関連教員に公開することにより、授業内容の改善のための資料として活用できるようにする。

人間総合科学学術院
Graduate School of Comprehensive Human Sciences

人間総合科学研究群
Degree Programs in Comprehensive Human Sciences

教育学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Education

　国際教育サブプログラム
　Subprogram in International Education

　次世代学校教育創成サブプログラム
　Subprogram in School Education for the Next Generation

　教育基礎科学サブプログラム
　Subprogram in Education Sciences

心理学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Psychology

　心理基礎科学サブプログラム
　Subprogram in General Psychology

　心理臨床学サブプログラム
　Subprogram in Clinical Psychology

障害科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Disability Sciences

カウンセリング学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Counseling

リハビリテーション科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Rehabilitation Science

ニューロサイエンス学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Neuroscience

看護科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Nursing Science

フロンティア医科学学位プログラム（修士課程）
Master's Program in Medical Sciences

公衆衛生学学位プログラム（修士課程）
Master's Program in Public Health

体育学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Physical Education, Health and Sport Sciences

スポーツ・オリンピック学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Sport and Olympic Studies

スポーツウエルネス学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Sport and Wellness Promotion

芸術学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Art

デザイン学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Design

世界遺産学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Heritage Studies

情報学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Informatics

ライフイノベーション（病態機構）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation (Disease Mechanism)

ライフイノベーション（創薬開発）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation (Drug Discovery)

教育学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Education

心理学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Psychology

　心理基礎科学サブプログラム
　Subprogram in General Psychology

　心理臨床学サブプログラム
　Subprogram in Clinical Psychology

障害科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Disability Sciences

カウンセリング科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Counseling Science

リハビリテーション科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Rehabilitation Science

ニューロサイエンス学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Neuroscience

医学学位プログラム（医学を履修する博士課程）
Doctoral Program in Medical Sciences

看護科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Nursing Science

パブリックヘルス学位プログラム（3年制博士課程）
Doctoral Program in Public Health

スポーツ医学学位プログラム（3年制博士課程）
Doctoral Program in Sports Medicine

体育科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Physical Education, Health and Sport Sciences

コーチング学学位プログラム（3年制博士課程）
Doctoral Program in Coaching Science

スポーツウエルネス学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Sport and Wellness Promotion

芸術学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Art

デザイン学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Design

世界遺産学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Heritage Studies

情報学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Informatics

ヒューマンバイオロジー学位プログラム（一貫制博士課程）
Doctoral Program in Human Biology

ライフイノベーション（病態機構）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation (Disease Mechanism)

ライフイノベーション（創薬開発）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation (Drug Discovery)

スポーツ国際開発学共同専攻（修士課程）
Joint Master's Program in International Development and Peace through Sport

大学体育スポーツ高度化共同専攻（３年制博士課程）
Joint Doctoral Program in Advanced Physical Education and Sports for Higher Education

国際連携食料健康科学専攻（修士課程）
International Joint Degree Master's Program in Agro-Biomedical Science in Food and Health

人間総合科学学術院の人材養成目的

人間の心身及び諸活動に関する基礎から応用までの豊富かつ高度な教育研究を通して、固有の学問領域において高度でグローバルな視点に基づいた研究を計画実行でき、人間に関する幅広い知識をもち優れた学際的な学術研究や国際的かつ学際的な教育研究環境を背景に異分野の先端的な融合が図れる優れた学術研究を計画実行できる研究者と大学教員、及び複合的な視点から人間を捉え、柔軟かつ適切な援助・支援を研究・設計して社会的ニーズに対応できる高度専門職業人を養成する。

人間総合科学学術院コンピテンス

修士	1.研究力	人間総合科学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力
	2.専門知識	人間総合科学分野における高度な専門知識と運用能力
	3.倫理観	人間総合科学分野の基礎的研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識
博士	1.研究力	人間総合科学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力
	2.専門知識	人間総合科学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力
	3.倫理観	人間総合科学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識

人間総合科学研究群
Degree Programs in Comprehensive Human Sciences

人材養成目的

人間の心身及び諸活動に関する基礎から応用までの豊富かつ高度な教育研究を通して、固有の学問領域において高度でグローバルな視点に基づいた研究を計画実行でき、人間に関する幅広い知識をもち優れた学際的な学術研究や国際的かつ学際的な教育研究環境を背景に異分野の先端的な融合が図れる優れた学術研究を計画実行できる研究者と大学教員、及び複合的な視点から人間を捉え、柔軟かつ適切な援助・支援を研究・設計して社会的ニーズに対応できる高度専門職業人を養成する。

	研究群コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
修士	1. 研究力：人間総合科学分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①人間の心身及び諸活動に関わる専門分野の先行研究の検討から適切な研究課題の設定ができるか ②人間の心身及び諸活動に関わる現代の研究課題をグローバルな視点から指摘できるか	各専攻分野での演習，各研究法，インターンシップ科目、公開研究会への参加，学会発表など
	2. 専門知識：人間総合科学分野における高度な専門知識と運用能力	①研究の対象やフィールドを適切な方法で探究するための専門知識を身につけているか ②当該分野の研究に必要な知識・技能を積極的に吸収・活用しようとする意欲があるか	各専攻分野での特講，各研究法、修士論文（特定課題研究報告書）作成
	3. 倫理観：人間総合科学分野の基礎的研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	①人間を対象とする研究課題に対し、適切な研究方法の選択ができるか ②人間の心身及び諸活動に関する倫理的側面に十分な注意を向けて研究を進められるか	各専攻分野での演習，各研究法、修士論文（特定課題研究報告書）作成
博士	1. 研究力：人間総合科学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①人間の心身及び諸活動に関わる専門分野の先行研究を踏まえて、未来に資する本質的な研究課題を設定できるか ②設定した先端的な課題の解決に相応しい研究方法を用いて、独創的な研究成果を産み出しているか	各専攻分野での特講，演習，各研究方法論、国外の大学との交流活動，博士論文中間発表会，国際学会発表，英語論文投稿など
	2. 専門知識：人間総合科学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①当該分野の先端的で高度な専門知識を運用できる能力を十分身につけているか ②当該分野の最新の専門知識に裏付けられた独創的な課題を新規に発見したか	各専攻分野での特講，演習，各研究方法論、投稿形式論文発表会、博士論文中間研究発表会など
	3. 倫理観：人間総合科学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①研究に関わる知的財産や情報の安全を守る知識を十分に持っているか ②当該分野に必要不可欠な倫理観と知的財産や情報の安全を守る知識を説明できるか	各専攻分野での演習，各研究方法論、投稿形式論文発表会、博士論文中間研究発表会など

教育学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Education

■ 修士（教育学）
■ Master of Arts in Education

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人間の営みと社会の発展に対して教育がもつ意義と役割を体系的に理解し、地球的規模の広がりをもつ現代の教育課題を鋭敏に捉え、教育学諸分野の学術的アプローチを用いて分析する基礎的研究能力を有し、多様な教育現場において卓越した専門的知見をもって課題解決をリードすることのできる研究力のある高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	– 学校や国内外の行政機関等において、教育学の学術的アプローチを用いて教育活動や学校の組織運営および教育開発援助等に従事し、次世代の学校教育や国際教育を構想し設計する研究力のある高度専門職業人を養成する。 – 国内外の大学・研究機関等において教育学の基礎的・基盤的な諸分野の教育・研究に従事する研究者を養成する。
修了後の進路	– 国内外の大学・研究機関等 – 国内外の行政機関・国際機関等 – 国内外の教育行政機関、学校、社会教育・生涯学習機関、NPO 等の教育関連組織等

教育学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（教育学）
Master's Program in Education / Master of Arts in Education

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（教育学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	Theory of International Education 次世代教育開発研究 教育学理論研究 国語科リテラシー教育論 a
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	Theory of International Education 次世代教育開発研究 教育学理論研究 学校経営学特講
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	Theory of International Education 次世代教育開発研究 教育学理論研究 教育学研究 II
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	Theory of International Education 次世代教育開発研究 教育学理論研究
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	Theory of International Education 次世代教育開発研究 教育学理論研究 Education and an Interconnected World
	6. 教育課題発見能力：教育の本質的意義を体系的に理解した上で、グローバルな現代の教育課題を捉える力	①先行研究を適切に踏まえた研究課題の設定ができるか ②グローバルな視野から現代の教育課題を指摘できるか	Theory of International Education 次世代教育開発研究 教育学理論研究 教育学研究 I

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 教育内容探究能力：多種多様な教育現場における教育内容を探究する能力	①教育行政機関や学校などの具体的な教育現場における教育内容を、適切な方法で探究できるか ②探究した教育内容の、教育学的な価値を説明できるか	Theory of International Education 次世代教育開発研究 教育学理論研究 社会日本語論Ⅰ a
	8. 教育学的分析能力：教育諸分野の学術的アプローチを用いて分析する基礎的研究能力	①研究課題に対して適切な研究方法の選択ができるか ②教育学に関する倫理的側面に十分な注意を向けて研究を進められるか	Theory of International Education 次世代教育開発研究 教育学理論研究 教育学研究Ⅱ 数学教育研究方法論 Research Design and Methods
	9. 教育課題解決能力：教育諸分野の学術的アプローチを用いて分析する基礎的研究能力	①教育行政機関や学校などの具体的な教育現場を想定し、適切かつ卓越した専門的知識を用いて課題を解決できるか ②集団による教育課題解決においてリーダーシップを取るために必要な専門知識を理解できるか	Theory of International Education 次世代教育開発研究 教育学理論研究 教育学研究Ⅰ～Ⅲ
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は、学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を「達成度評価表（ルーブリック）」により確認・評価することで行う。 第1段階：1年次末から2年次の春のモジュールにおいて、修士論文構想発表会において、主査・副査がルーブリックに基づき第1段階達成度審査を行う。 第2段階：2年次には、修士論文中間指導会において、主査・副査がルーブリックに基づき第2段階達成度審査を行う。 最終段階：2年次末には、修士論文予備審査会において、主査・副査がルーブリックに基づき最終達成度審査を行い、教育会議において全教員で全修了生の達成状況を審議、承認する。		
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、本人出席の最終試験を経た上で修士論文として合格とする。 1. 教育学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 研究課題の設定が適切であること。 3. 研究方法の選択が妥当であること。 4. 先行研究を踏まえ、関連する引用文献、参考文献を明示していること。 5. 確かな論拠に基づく考察がまとめられた研究論文であること。 なお、修士論文の審査等を実施するために設置する学位論文審査委員会は、本学位プログラムのプログラムリーダー1名、サブプログラムリーダー3名及びプログラムリーダーが指名する若干名で構成する。また、学位論文審査委員会で承認された本学位プログラムの担当教員が、主査（1名）及び副査（2名以上）を担当する。		

教育学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（教育学）
Master's Program in Education / Master of Arts in Education

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

教育学学位プログラム（博士前期課程）では、学生が教育学研究者に必要な基礎的な知識と、多様な教育学諸分野の専門的な知識の双方を獲得しつつ、教育研究活動を展開することを通して汎用／専門コンピテンスを獲得できるよう、授業科目を［基礎科目］、［専門基礎科目］、［専門科目］の３つに大別してカリキュラムを編成する。また、第一種教員免許状を有している学生が専修免許状を取得する際に必要な科目を広範に設置することで、教育に係る高度専門職業人としての資格を獲得できるようにする。

教育課程の編成方針	教育学研究者に必要な基礎的な知識と、汎用／専門コンピテンスを学生が獲得することを目的とする、学位プログラムの基盤となる科目を［基礎科目］として設け、必履修科目とする。 また、学生が多様な教育学諸分野の専門的な知識を獲得し、研究課題を見出したり解決したりする方法を身につけることを目的とする科目を［専門基礎科目］として設け、育成する人材像の特質に応じて設置される３つのサブプログラム（国際教育、次世代学校教育創成、教育基礎科学）の要件を満たす形で設定される履修モデルに基づく選択科目とする。ここで、サブプログラムごとの履修科目を明示的に区分して示すのではなく履修モデルとして示すのは、従来の研究科や専攻等の枠にとらわれない学際的な研究分野に応じた履修を可能にするためであり、また複合的かつ重層的な今日的教育課題に対応できる人材を育成することを目的としているからである。加えて、他の学位プログラム（研究群内、他の研究群）の開設科目の受講により学際性のある学修を達成する。 学生が多様な教育学諸分野に関する研究を実際に展開することを通して汎用／専門コンピテンスを獲得すること、その成果として修士論文を完成することを目的とする科目を、［専門科目］として設け、サブプログラムや履修モデルに基づく選択科目とする。
学修の方法 特色的な教育	［基礎科目］については、学位プログラムのすべての学生が履修し、修得する。［専門基礎科目］と［専門科目］については、サブプログラムやさらに詳細な履修モデルに応じて履修し、修得する。他のサブプログラムや人間総合科学学術院に設置される他の学位プログラムはもちろん、他の学術院に設置される学位プログラムで開設される科目も専門性に応じて履修し、教育学の学際的な特性について深い理解が得られるようにする。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	教育学学位（博士前期課程）プログラムでは、国内外の大学・研究機関等において教育学諸分野の教育・研究に従事する研究者を志す人材に加え、国内外の行政機関・国際機関等で教育学の学術的アプローチを用いて教育政策の効果分析、政策形成、教育開発援助等に従事する研究力のある高度専門職業人や、国内外の教育行政機関、学校、社会教育・生涯学習機関、NPO 等の教育関連組織等で教育活動や人材育成をリードする研究力のある高度専門職業人を志す人材を募集する。教育学部等における教育学研究の経験者や教員養成系の学部等で職業人としての教員の資質・能力を獲得した者はもちろん、理学部や人文・社会学部などで培った高度な専門性と教育という人間の基礎的な営みとの関係に関心のある者や、学校に限定されない広範な人間のコミュニティにおける教育活動に関心のある者も、入学可能である。

入学者選抜方針	入学試験は専門試験、専門外国語試験（英語）、口述試験を基本とし、社会人特別選抜や留学生等を対象とする英語による特別選抜を設け、様々な学びの形態をサポートする。各試験科目の結果を総合的に評価し、適性を審査する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	副指導教員体制により、研究指導の客観性と多様な相談への対応体制を整えている。修士論文中間指導会への参加機会を供し、自身の研究体制を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。担任制を設け学修支援を行っている（国際教育 SP 及び次世代学校教育創成 SP の一部の領域）。また学生を対象とした FD を開催し、学修に必要な研究倫理等について学ぶ機会を提供している。
学生同士の交流機会	学生の研究室又は学習室を設けることにより、SP 又は研究領域ごとに学生の交流の機会を確保している。また、修士論文指導会等への参加機会を提供し、学年を超えた交流機会を促進する仕組みをとっている。次世代学校教育創成 SP では現職教員の交流の場を設けている。研究領域を超えた読書会や情報提供の機会も推奨している。
教員との交流機会	修士論文指導会等に学位プログラム担当教員全員が参加し、指導教員以外の教員との交流機会を供している。また、学生と教員の懇談会を開催し、学生からの学修環境等の要望を聞くとともに、懇談会も開催している。また、学術院で開催される学生の集いを通じて、専門を越えた教員との交流機会を供している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

学位プログラムカリキュラム委員会において、ルーブリック評価を集約し、検討・分析することにより、教育課程の妥当性を確認するとともに改善の必要がある場合はその方策を教育会議において審議する。

心理学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Psychology

■ 修士（心理学）
■ Master of Arts in Psychology

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人の心と行動に関する様々な現象について、心理学の最新の知識と方法論を用いて理解し、説明し、問題を発見し、実証的に検討できる専門的能力を有するとともに、国境・文化、学問領域、職業分野等の壁を越えて人々と連携し、心と行動に関する日本と世界の多様な課題の解決のために、高い倫理観を持って、心理学的知見の活用や心理的支援の実践ができる高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	上記の人材養成目的を踏まえて、最新の心理学の方法論や知識・技能を体得し、民間企業、官公庁、心理臨床の現場等で、他の分野の専門家と協働して問題の解決や価値の創造に貢献できる高度専門職業人を養成する。
修了後の進路	自立した研究者となるための大学院博士後期課程への進学の他、心理基礎科学サブプログラム修了後には、自治体、コンサルティング会社や教育関係民間研究所での心理学専門職、あるいは製造・流通業・IT 関連等、広く民間企業における人間に関わる研究をベースとする心理学専門職等、心理臨床学サブプログラム修了後には、公認心理師、臨床心理士の資格を得た上で、都道府県や市町村の公務員（心理職、一般職）、家庭裁判所（調査官補）、病院や精神科クリニック、教育相談センター等、臨床心理学の実践が必要とされる職場での心理専門職等

心理学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（心理学）
Master's Program in Psychology / Master of Arts in Psychology

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（心理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	心理学特別研究、心理学方法論、修士論文作成、学会発表、インターン実習
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	心理学特別研究、各領域専門科目、達成度自己点検
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野 だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	心理学特別研究、各領域専門科目、心理学インターンシップ、学会発表、達成度自己点検
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	心理学特別研究、心理学インターンシップ、TA 経験
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	心理学特別研究における論文指導、修士論文作成（先行研究レビュー並びに研究上の問題検討）に加え、心理学方法論 1 での英語論文作成に関する授業の受講、心理学先端研究、大学院共通科目（国際性養成科目群）、心理基礎科学英語の履修、国際会議発表、海外研究者との研究交流経験
	6. 心理学的人間理解力と問題発見力：人の心と行動を科学的に理解し、未解決の心理学的問題を発見できる能力	①心理学の多様な分野における研究方法と専門的知識を獲得し、人の心と行動の様々な現象について、心理学の観点から科学的に理解できるか ②心理学の特定領域における未解決の問題を発見できるか	心理学方法論 I・II、心理学特別研究 A、同 B、同 S、修士論文作成、心理基礎科学サブプログラム共通科目、同専門科目、心理臨床学サブプログラム共通科目、同専門科目 学会発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 心理学的問題解決力：研究倫理を遵守し、人の心と行動の問題を、心理学の方法論と理論や知見を活用して解決できる能力	①人の心と行動についての未解決の問題を、心理学の方法論と知識を活用して解決する計画を立案し、実行できるか ②実行した解決策の結果や得られた知見を、客観的に観察・記録し、妥当な考察を加え、解決策や知見の評価と修正ができるか	心理学方法論Ⅰ・Ⅱ、心理学特別研究A、同B、同S、修士論文作成、心理基礎科学サブプログラム共通科目、同専門科目、心理臨床学サブプログラム共通科目、同専門科目 学会発表
	8. 心理臨床実践力：心理臨床実務者としての倫理を遵守し、心理学の知識・方法論と心理臨床技能を活用し、心理臨床的支援を実践できる能力	①心理臨床実務者としての職業倫理を理解しているか ②心理査定法や心理的支援技法を実践できるか	心理学方法論Ⅰ、同Ⅱ、臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ、同Ⅱ、発達臨床心理実習Ⅰ、同Ⅱ、心理療法特講Ⅰ、同Ⅱ、臨床心理査定演習Ⅰ、同Ⅱ、心理実践実習ⅠA、同ⅠB、同ⅡA、同ⅡB
	9. 心理学的情報発信力：研究倫理を遵守し、心理学の理論、方法論、研究知見を発信し、心理学の知識のない人に対してでも理解できるように説明できる能力	①研究倫理を遵守して、心理学の理論、方法論、研究知見を、研究会資料、学会発表抄録、論文等としてまとめ、発信することができるか ②心理学の知見を、心理学の知識のない人に対してでも理解できるように説明できるか	心理学方法論Ⅰ、同Ⅱ、心理学特別研究A、同B、同S、心理学キャリア形成、心理学インターンシップ、心理基礎科学英語Ⅰ、同Ⅱ、心理基礎科学演習Ⅰ、同Ⅱ、同Ⅲ、同Ⅳ、心理基礎科学サブプログラム領域専門科目、心理臨床学サブプログラム共通科目、同領域専門科目
	10. 多領域間コミュニケーション力：心理学の専門家として、他領域・多職種の専門家と議論・協働できる能力	①心理学の知見を、他領域・多職種の専門家が理解できるように説明し、質疑に答え、討論できるか ②他領域の専門家を尊重し、話を聴き、不明な点を質問して理解を深めることができるか	心理学キャリア形成、心理学インターンシップ、心理統計学基礎、心理基礎科学サブプログラム領域専門科目、心理臨床学サブプログラム、心理臨床学サブプログラム領域専門科目

学修成果の評価に関する方針	当該年度に行う修士論文審査会で、研究指導担当・研究指導補助担当全教員は、各学生の提出した資料、プレゼンテーション、質疑応答に基づき、ルーブリックに従って汎用コンピテンス・専門コンピテンスの到達状況を判定する。2 名の副査は論文本体の内容についてもルーブリックに従って汎用コンピテンス・専門コンピテンスの到達状況を判定する。また、論文公表、学会発表、競争的資金の申請・獲得、受賞等についても把握し、学修成果を示す補助的な成果指標として参考にする。
学位論文に関する評価の基準	筑波大学大学院学則に定められた要件をすべて満たしたうえで、学位論文が以下の評価項目に照らして妥当であると認められ、かつ、最終試験において合格と判定された場合に、修士の学位が授与される。 ＜評価項目＞ 1. 関連分野における国内外の研究動向および先行研究を的確に把握したうえで、当該研究の心理学分野における学術的意義や位置づけが明確に述べられていること。また、論文作成の全過程において、研究不正（捏造・改ざん・盗用）やその他の有害な研究活動を行っていないこと。 2. 心理学分野の発展に資するオリジナルな研究成果が、修士論文として相応しい水準および分量で含まれていること。 3. 研究結果に対する考察が妥当であり、結論が客観的かつ論理的な根拠に基づいて導かれていること。 4. 研究の背景・目的・方法・結果・考察・結論・引用文献等が、心理学分野における修士論文としてふさわしい形式と水準で適切にまとめられていること。 ＜修士論文審査体制＞ 修士論文の審査を行うために設置される学位論文審査委員会は、主査 1 名および副査 2 名以上で構成する。副査は、原則として心理学学位プログラムに所属する教員の中から 2 名以上を選出するものとする。なお、教育会議の承認を得た場合には、学位プログラム外の教員を副査として選任することも可能とする。 ＜学位論文の評価方法＞ ①学位論文本体への評価：学位論文は 2 名の副査が査読を行い、上記 4 つの評価項目につき、各項目のルーブリックに従って評定を行う。 ②最終審査会でのプレゼンテーションと質疑応答への評価：心理学学位プログラムの主担当・研究指導補助担当教員全員が最終審査会でのプレゼンテーションと質疑応答をルーブリックに従って評定する。①と②の評価を総合して修士論文全体の評価とする。

心理学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（心理学）
Master's Program in Psychology / Master of Arts in Psychology

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

心理学学位プログラムでは、人間理解の要として心とは何かを問い、心のはたらきを明らかにすることができるよう、必要な心理学領域全体の知識・方法論・技能・価値観を身につけ、同時に隣接諸領域・学際研究として展開可能な複合領域との多様かつ密接な関係性を持ちつつ、人間科学の専門家として社会に貢献できる問題解決能力を育成していく。

教育課程の編成方針	心理学学位プログラム（博士前期課程）には、心理基礎科学サブプログラム、心理臨床学サブプログラムの共通の必修科目、学位プログラム基礎科目があり、さらにサブプログラムごとに、サブプログラム共通科目、サブプログラム領域専門科目を設けている。学位プログラム基礎科目の「心理学方法論Ⅰ」「心理学方法論Ⅱ」と各サブプログラムの領域専門科目（「教育心理学特講」ほか特講科目）によって、心理学の様々な分野における幅広い方法論と専門的知識を獲得する。これらの学びにより、５つの心理学専門コンピテンスを身につけることを狙いとする。「心理学特別研究 A」「心理学特別研究 B」「心理学特別研究 S」の選択必修科目は、複数回開催される修士論文指導会と指導教員のゼミからなり、心理学的人間理解力と問題発見力、心理学的問題解決力、心理学的情報発信力を高めるとともに、知の活用力、マネジメント力、コミュニケーション能力も同時に育む。また「心理学インターンシップ」「 心理学キャリア形成 」などにより、心理学的情報発信力、多領域間コミュニケーション能力を、さらに「心理基礎科学英語１」「心理基礎科学英語２」などにより、国際性の獲得を図る。心理基礎科学サブプログラムでは、上記に加えて、「心理基礎科学演習Ⅰ」「心理基礎科学演習Ⅱ」「心理基礎科学演習Ⅲ」「心理基礎科学演習Ⅳ」で、各分野における専門的な討論を重ね、各専門分野での心理学的人間理解力と問題発見力、心理学的問題解決力、心理学的情報発信力とともに、知の活用力等の汎用コンピテンスも高める。心理臨床学サブプログラムは、サブプログラム共通科目と領域専門科目に設けられている特講、演習、実習科目により、臨床心理学・発達臨床心理学の専門的知識、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の５領域の心理的支援についての専門的知識、臨床心理面接並びに心理査定法の専門的知識と実施技能、心理臨床実務者としての実践能力獲得するとともに、５つの専門コンピテンスが獲得できるよう整備する。なお、心理臨床学サブプログラムのカリキュラムは、(公財）日本臨床心理士資格認協会の臨床心理士と、国家資格である公認心理師のそれぞれの受験資格が得られるように構成する。以上に加えて、学術院専門共通基盤科目、大学院共通科目を履修することにより、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力、国際性をさらに身につける。各科目の評価は、客観式テスト、レポート、その他の成果物、実技、実習時の行動観察等に基づいて行い、評価方法は、各科目のシラバスに記載する。

学修の方法 特色的な教育	心理学学位プログラム（博士前期課程）における学修の方法は、講義と演習と実習に大別される。必修科目の「心理学方法論Ⅰ」、「同Ⅱ」は心理学学位プログラムの各担当教員が、精通する方法論について講義するによるオムニバス科目である。特講科目は、基本的に担当教員による講義と質疑応答、受講生による討論を行う。「心理基礎科学演習Ⅰ」等の演習科目と「心理学特別研究A」等の論文指導の科目は、原則として、受講生が主体となって話題提供、担当部分の発表、実演等と討論を行う。心理学学位プログラムの特色のあるカリキュラムは以下のとおりである。 ①ニューロサイエンス学位プログラムの「神経科学基礎論A」「同B」「同C」「同D」を心理基礎科学サブプログラムの領域専門科目として履修できる ②「心理学インターンシップ」は、一定の基準を満たす企業等でのインターンシップ経験を単位として認定する ③「心理基礎科学英語Ⅰ」「同Ⅱ」は、一定の基準を満たした国際学会での発表と活動、海外大学開校の講座の履修を単位として認定する ④心理臨床学サブプログラムでは、臨床心理士第一種指定校の実習として、筑波大学心理相談室又は筑波大学子ども相談室での学内実習を行うとともに、主に公認心理師養成のために、本学附属病院精神神経科、その他地域の施設での学外実習により、心理臨床実践力の向上に努める ⑤汎用コンピテンスと専門コンピテンスの達成度評価は、入学時に自己評定を行い、その後2年進級時、修士論文提出時にTWINSの達成度評価支援システムにより自己確認を行う。コンピテンスの達成度は、各時点で指導教員が共有し、科目履修などの指導・助言を与える。 ⑥修士論文の副指導教員を入学後の早期に決定し、指導教員と副指導教員との共同指導体制で研究指導を行う

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	心理学学位プログラム（博士前期課程）では、心理学の方法論や知識・技能を意欲的に習得し、博士後期課程に進み、さらに心理学の研究を目指す研究者養成を志す人材に加え、公認心理師・臨床心理士資格を有した心理支援の実践者者を目指す人材、さらに、感性工学・人間工学・認知工学に関わる専門家、社会調査および市場調査など社会心理的状況を分析する専門家、人事管理・人事評価に関わる専門家、心理学の専門性を持った公務員等、心理学の専門的研究能力をベースとする高度専門職を目指す人材を募集する。人間理解のための心理学を深く志す者を対象とし、自律的に学んでいく人材を求め、心理学に関係した学部の出身者ばかりでなく、これから心理学を専門的に学び、追究しようとする人も募集する。
入学者選抜方針	入学試験は一般入学試験により行う。一般入学試験では、専門試験、専門外国語試験（英語）、口述試験により選抜を行う。心理学全般に関する基礎知識、専門に関する外国語能力、研究実施能力ならびにコミュニケーション力を総合的に評価する。

心理学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（心理学）
Master's Program in Psychology / Master of Arts in Psychology

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	以下の方法により、効果的な学修支援を行っている。 ①副指導教員体制を採用することによって、学生が指導教員とは異なる観点からの指導を受けられる機会を保障する。 ②学生支援チームを、学位プログラムリーダー、正副指導教員、学生相談のスタッフから構成し、一人一人の学生にとって最適の体制で、心理的適応支援を行う。 ③キャリア支援委員を設け、学内の様々なキャリア支援企画情報の提供を行っている。
学生同士の交流機会	以下の方法により学生のピア効果を高め、学修意欲と研究の質の向上を図っている。 ①全ての学生に対して院生控室に学内での居場所を提供し、前期・後期の他学生と交流しやすい学修環境を整備する。 ②1 年次には、前期課程の 2 年生が受ける修士論文の指導会と審査会への出席を義務づけ、後期課程の学生の博士論文予備審査会・審査会への参加と見学を可能にすることにより、研究についての学生間の交流を促す。 ③学術院主催の「学生の集い」への参加を推奨し、他学位プログラムの学生との交流を促す
教員との交流機会	以下の方法により、教員との交流機会を提供し、学修意欲と研究の質の向上を図っている。 ①修士論文の指導会・審査会に学位プログラムの全ての担当教員が参加し、各学生に質疑と助言をすることで指導教員以外の教員との研究交流の機会を提供する。 ②学生・教員懇談会を開催し、学生から心理学学位プログラムにおける教育、研究指導、心理臨床実習、学生生活について幅広く要望を聴取し、学位プログラムが改善に向けて努力する。 ③学術院主催の「学生の集い」への参加を推奨し、専門を超えた教員との交流を促す。 ④新入生歓迎会など、学生主催の親睦会に、教員も参加して交流を図る。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年度末に、学位プログラム教育成果検討会議を開催し、修士論文審査会の評価結果および学生の研究活動状況を踏まえ、サブプログラムごと・学位プログラム全体の教育成果を確認する。これらの結果を経年的に分析し、教育上の強みと改善点を把握した上で、必要な改善策を立案・実施し、教育の質保証につなげる。

障害科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Disability Sciences

■ 修士（障害科学）
■ Master of Arts in Disability Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

研究者養成の第一段階として、障害科学の科学的・実践的な研究を推進しうる研究基礎力をもった研究者、または科学的な基盤を有し、実践の場で的確に能力を発揮できる、国内外のリーダーとなりうる有能な特別支援教育の教員や障害者支援の高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	障害科学の基礎的、実践的な知識技能に基づいて、障害の本質の解明、また障害特性の解明を通して支援技術の開発・応用に携わることができる人材。
修了後の進路	– 博士後期課程に進学して、高等教育機関の教員あるいは独立行政法人等における研究者 – 特別支援学校や特別支援学級・通級指導教室の高度な専門性を有する教員 – 障害のある人を対象とした療育機関や福祉施設の高度な専門性を有する職員

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（障害科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	障害科学調査・実験実習Ⅰ・Ⅱ、障害科学研究法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、視覚障害学特講 Ⅰ・Ⅱ、聴覚障害学特講Ⅰ・Ⅱ、運動障害学特講Ⅰ・Ⅱ、病弱特講Ⅰ・Ⅱ、知的・発達・行動障害学特講Ⅰ・Ⅱ、言語障害学特講Ⅰ・Ⅱ、障害福祉学特講Ⅰ・Ⅱ、障害原理論特講Ⅰ・Ⅱ、理療科教育特講Ⅰ・Ⅱ、修士論文作成など（下線部は必修科目あるいは修了要件）
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	障害科学調査・実験実習Ⅰ・Ⅱ、障害科学研究法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、海外特別研修セミナー、修士論文デザイン・中間・最終発表など（下線部は必修科目あるいは修了要件）
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	障害科学調査・実験実習Ⅰ・Ⅱ、障害科学研究法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、視覚障害学演習 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、聴覚障害学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、運動障害学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、病弱演習 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、知的・発達・行動障害学演習 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、言語障害学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害福祉学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害原理論演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、理療科教育演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、修士論文デザイン・中間・最終発表、相談活動など（下線部は必修科目あるいは修了要件）
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に貢献をしたか	障害科学調査・実験実習Ⅰ、障害科学フィールドワークⅠ・Ⅱ、特別支援学校教育実習、視覚障害学演習Ⅰ・Ⅱ、聴覚障害学演習Ⅰ・Ⅱ、運動障害学演習Ⅰ・Ⅱ、病弱演習Ⅰ・Ⅱ、知的・発達・行動障害学演習Ⅰ・Ⅱ、言語障害学演習Ⅰ・Ⅱ、障害福祉学演習Ⅰ・Ⅱ、障害原理論演習Ⅰ・Ⅱ、理療科教育演習Ⅰ・Ⅱ、TA 経験、相談活動など（下線部は必修科目）

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	障害科学研究法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、海外特別研修セミナー、Special Lecture on Disability Sciences、国外での活動経験、留学生との交流など（下線部は必修科目）
	6. 研究計画実行力：障害科学に関する研究を計画実行する基礎的な知識・能力	①障害科学に関する知識に基づき、重要な課題に対して研究計画を立案することができるか ②立案した研究計画について発表を行い、適切に修正し、研究を実行することができるか	障害科学調査・実験実習Ⅰ・Ⅱ、障害科学研究法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害科学講究、視覚障害学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、聴覚障害学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、運動障害学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、病弱演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、知的・発達・行動障害学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、言語障害学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害福祉学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害原理論演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、理療科教育演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、修士論文作成、修士論文デザイン・中間・最終発表など（下線部は必修科目あるいは修了要件）
	7. 障害に関する理解力：障害科学に関する幅広い知識をもち、それを活用する能力	①障害科学に関する知識や技術および現状や課題について理解し、説明することができるか ②専門的知識に基づいた障害科学に関する研究課題を見出し、解決を図ることができるか	障害科学調査・実験実習Ⅰ、視覚障害学特講Ⅰ・Ⅱ、聴覚障害学特講Ⅰ・Ⅱ、運動障害学特講Ⅰ・Ⅱ、病弱特講Ⅰ・Ⅱ、知的・発達・行動障害学特講Ⅰ・Ⅱ、言語障害学特講Ⅰ・Ⅱ、障害福祉学特講Ⅰ・Ⅱ、障害原理論特講Ⅰ・Ⅱ、理療科教育特講Ⅰ・Ⅱ、修士論文作成、修士論文デザイン・中間・最終発表など（下線部は必修科目あるいは修了要件）
	8. 倫理に関する理解と態度：障害の理解及びそれに伴う困難の解消に向けた研究実践に必要な倫理手続きを行う能力	①障害科学に関する倫理講習を受講し、終了しているか ②障害科学に関する研究に必要な倫理観と倫理的知識を理解し、研究を実施することができるか	障害科学調査・実験実習Ⅰ・Ⅱ、障害科学研究法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害科学講究、視覚障害学演習Ⅲ、聴覚障害学演習Ⅲ、運動障害学演習Ⅲ、病弱演習Ⅲ、知的・発達・行動障害演習Ⅲ、言語障害学演習Ⅲ、障害福祉学演習Ⅲ、障害原理論演習Ⅲ、理療科教育演習、修士論文の作成、修士論文デザイン・中間・最終発表など（下線部は必修科目）

学修成果の評価に関する方針	− 学修成果の集大成としての修士論文を重視し、修士論文の作成および修士論文デザイン・中間・最終発表会（「障害科学研究法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」）を通じて、学位授与の方針に基づく学修成果の到達度を総合的に評価する。修士論文の評価は、論文指導教員（委員長、主査）、副指導教員２名（委員、副査）の計３名から構成される論文審査委員会において、審査、評価を行う。 − 学位論文に係る評価の基準、ならびに学位授与に掲げる知識・技能（コンピテンス）のうち、障害に関する高度な知識を有し、研究を通じた知見を社会に役立てる力を有しているか（「知の活用力」）、複数の視点から問題を捉え、広い視野と計画性をもって、障害に関わる諸課題の問題解決能力を有しているか（「マネジメント能力」）、自身の研究内容や専門知識を的確かつ分かり易く伝える能力を有しているか（「コミュニケーション能力」）、課題解決や研究実施において関係者と協働的に取り組む能力を有しているか（「チームワーク力」）、国際社会に貢献する意識、国際的な情報収集や国際的成果を発信するための行動に必要な語学力を有しているか（「国際性」）、障害科学の重要課題に関する研究計画の立案およびその研究実行力を有しているか（「研究計画実行力」）、障害科学に関する幅広い知識から研究課題を見出し説明する能力を有しているか（「障害に関する理解力」）、障害科学に必要な倫理観、倫理的知識に基づいて適切に研究を実施できる能力を有しているか（「倫理に関する理解と態度」）、等の観点から評価する。
学位論文に関する評価の基準	− 修士論文の指導においては、指導教員の指導による構想を経て、論文指導教員１名（委員長）、副指導教員２名(委員) の計３名で構成される研究指導委員会が指導にあたる。提出された論文に対しては、主査１名、副査２名の計３名による学位論文審査委員会において、審査、評価を行う 。 − 修士論文の評価は、提出された論文の査読と最終発表会における発表内容及び最終試験の結果により、以下の観点から総合的に行う。 1. 関連分野の国内外の研究動向及び研究の把握に基づいて、障害科学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 障害科学分野の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、修士論文に相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、当該分野の修士論文に相応しい形式にまとめてあること。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

障害科学学位プログラム（博士前期課程）においては、障害科学の基礎的、実践的な知識技能を身に付けるとともに、障害の本質や障害特性を探求し解明する力を培い、研究基礎力を身に付ける。また、この研究基礎力を基盤に、支援技術の開発・応用に携わる力を身に付ける。その際、中心的な専門領域における研究力・専門知識・倫理観とともに、関連する分野の基礎的素養や広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養うための教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	− 基礎科目は、障害科学の基盤となる中核科目群であり、3 つの進路（例 : 研究者、教員、福祉職員 ）につながる障害科学の研究基礎能力を身に付ける。専門科目（共通）は、障害や障害の特性に関する理解力と障害に関わる教育・福祉の理念・制度・支援方法に関する理解力等の高度専門職業人として必要な知識技能を身に付ける科目群として設定する。専門科目は、理念・制度・障害特性から生じる個のニーズ等の様々な観点のうち、3 つの進路に即して、学生の修学の必要性や興味関心に応じながら、特定の専門領域の知識技能を深く身に付ける科目群として設定する。 − 障害科学調査・実験実習Ⅰ・Ⅱにより、研究計画実行力と倫理に関する理解と態度を身に付ける。 − 障害科学研究法等その他の基礎科目により、研究計画実行力に加え、研究・実践の橋渡し力を身に付ける。 − 専門科目（共通）の科目群により、障害に関する理解力およびサービスの開発実行力を身に付ける。 − 専門科目群のうち、特講科目によって、各障害専門領域あるいは理念・制度等の障害横断領域ごとの研究計画実行力、障害に関する理解力を身に付ける。 − 専門科目群のうち、演習科目によって、各障害専門領域あるいは理念・制度等の障害横断領域ごとのサービスの開発実行力、研究・実践の橋渡し力、倫理に関する理解と態度を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 基礎科目の必修科目から 5 単位、専門科目における専門領域の科目（学生が特に専門に修学する領域で原則として論文指導教員が担当する特講Ⅰ・Ⅱ、演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）の 7 単位、その他の科目（大学院共通科目、基礎科目の選択科目、専門科目（共通）、専門科目における専門領域の科目以外の特講Ⅰ・Ⅱ、演習Ⅰ・Ⅱ）から 18 単位以上を修得し、合計で 30 単位以上を修得することとする。 − 修士論文作成に係る研究指導は、1 年次基礎科目「障害科学調査・実験実習Ⅰ・Ⅱ」(必修)、1・2 年次基礎科目「障害科学研究法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」(必修)、ならびに、2 年次専門科目「演習Ⅲ」(選択必修）で、組織的・体系的に行う。 − 障害科学の研究者を目指す学生は、研究者養成の第一段階として、基礎科目による研究基礎力の修得と専門科目による障害専門領域・横断領域ごとの専門的知識技能の修得に重点を置いた履修とする。 − 特別支援学校や特別支援学級の教員を目指す学生は特別支援教育分野の高度専門職業人として、基礎科目による研究基礎力の修得と専門科目（共通）群から特別支援教育に関する理念・制度、障害のある児童生徒の生理・心理・教育課程・指導法等に関する科目の履修による知識技能の修得に重点を置いた履修とする。

学修の方法 **特色的な教育**	− 障害のある人を対象とした療育機関や福祉施設の職員を目指す学生は、障害者支援分野の高度専門職業人として、基礎科目による研究基礎力の修得と専門科目（共通）群から障害発達臨床・支援等に関する科目の履修による知識技能の修得に重点を置いた履修とする。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	障害に関わる、生涯の教育・福祉的支援、行政、国際協力等への貢献を志す人材で、研究者や高度専門職として、この分野での活躍に意欲のある人材を求める。学部段階で障害科学の基礎を学習した者、または障害科学以外の専門分野の出身で、障害科学を専門的に学ぼうとする者、教員・社会人、医療系の資格を有する者、外国人留学生等を幅広く受け入れる。
入学者選抜方針	一般、推薦、社会人特別選抜（現職教員 1 年制プログラムを含む）の 3 種類の入学試験を実施する。また長期履修制度による課程修了も可能とする。 − 一般入試および推薦入試では、英語能力検定試験のスコアによる評価、障害科学に関する専門知識等の評価、研究計画の着想に至る論理性や準備状況等の評価を行う。 − 社会人特別選抜では、英語能力検定試験を免除し、出願時書類の審査、障害科学に関する専門知識等の評価、研究計画の着想に至る論理性や準備状況等の評価による特別選抜を実施する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 修士論文デザイン、中間発表、最終発表会と 3 回の研究発表会では、主指導教員や副指導教員の研究指導、学生同士のピアレビューを通して、研究プレゼンテーション指導が行われている。 − 一部の講義科目では、オンデマンド講義動画の効果的な活用により、講義内容の理解度を高め、効果的に学修できるようにしている。 − 情報収集能力、分析能力、論理的思考力等の学習スキルやライティングスキルの支援については、障害科学調査・実験実習、各障害学演習、障害科学研究法等の受講により、研究課題に関する情報収集、先行研究やデータの分析、論理的文章の作成と推敲を通して、様々な専門性を有する複数の教員からの支援が行われている。 − 効果的な学修に向けて、毎年度末に TWINS のコンピテンス修得状況を確認し、学生自身の達成度評価を自己点検する機会を設定している。 − 英文学術雑誌への掲載料・校閲費の一部を独自に助成し、大学院生の国際的な研究発信を支援している。

学生同士の交流機会	− 国際交流では、定期的に CiC パートナー校や部局間協定を締結しているアジア並びに北米大学との共同で学生が交流できる機会を設け、国際性の意識向上や国際的研究活動の意欲を高めている。 − 学生同士のグループワークを通したプレゼンテーション、レポート作成の課題を含む基礎科目、専門科目が複数あり、学生同士で講義内外で交流を深めながら学修効果を高めている。 − 年度末に前期課程・後期課程合同の学生懇談会を実施し、学位論文作成や就職活動、その他学生生活に関する情報交換の機会を設けている。 − 後期課程修了者の講話と交流を含む内部進学希望者向けの説明会「『障害科学』と歩む自分らしいキャリア」を開催し、上級生や修了生との交流機会を作り、学位取得後の活躍のあり方について考える機会を設けている。 − 大学院共通科目で本プログラムが開設（BHE 企画）している科目では、多様な専門性を有する大学院生がチームを組み、新事業を提案する試みがあり、社会課題の解決や学修意欲を高める交流ができている。
教員との交流機会	− 修士論文指導体制では、原則主指導教員 1 名と副指導教員 2 名による研究指導が行われており、多様な専門性を有する教員との交流機会がある。 − 教員主催の合同研究会や研究プロジェクトへの参加を通した交流から、研究意欲を高める機会となっている。 − Teams や manaba の活用により、講義内でのレポートまたはテストに対する学生へのフィードバック、研究指導の進捗状況の確認やフィードバックを行っている。 − 適宜個別に指導状況等についての面談を行い、論文指導教員ならびに副指導教員とも連携をとり、学位授与に向けた指導を行なっている。 − 社会で活躍する修了生との交流会を通して、進路相談や研究キャリアの相談機会を設けている。 − Microsoft Forms を用いて、コンピテンス修得状況の自己評価やカリキュラムに関する意見等に対する学生へのフィードバックは、新年度のオリエンテーションでの周知、適宜担任・指導教員から学生に個別のフィードバックを行っている。 − 年度末に学位プログラム独自の学生アンケートならびに学生懇談会を実施し、プログラムの教育・研究指導に対する意見交換を行っている。 − 修了時に修了生全員に、修了後も実際に使用するアクティブなメールアドレスの提供を求める形で、同窓会ネットワークを構築している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

− 障害科学学位プログラムの構成員全員が参加する教育会議にて、在学生のコンピテンス自己評価アンケートの結果報告、修士論文発表会の評価を教員全体に周知し、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
− 社会で活躍する修了生に本学位プログラムの外部評価委員を依頼し、修了生から学位プログラムの教育研究指導改善に関するコメントをもらい、ディスカッションを行っている。外部からのフィードバックを参考に、教育の質保証と改善の方向性を検討する。
− 年度末に学位プログラム独自の学生アンケートならびに学生懇談会を実施し、プログラムの教育・研究指導に対する意見交換を行い、教育活動の点検と次年度以降の教育改善に向けた取り組みを検討する。

カウンセリング学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Counseling

■ 修士（カウンセリング）
■ Master of Science in Counseling

人材養成目的 / Program Educational Objectives

現職社会人・心理臨床専門家に対し、心理学の一領域であるカウンセリング心理学に焦点を絞り、カウンセリングの包括的・基盤教育を行い、国際的・学際的な研究の成果と方法論を習得し、他職種と連携して職場や社会での諸問題について科学的・実践的・開発的に解決して社会に貢献する高度専門職業人や大学教員を養成する。

養成する人材像	自らの持つ豊富な職業経験を基盤としながら、心理学領域の中のカウンセリングに関する領域に焦点を当てて学修することにより、そこに関連する総合的な学識・技法を身につけ、倫理的な配慮の下に実践や研究を立案・実施する能力を持ち、直面している問題を総合的に検討し問題解決することができる、カウンセリングの総合的な能力及び研究分析能力を自らの職業環境の中で、問題解決に活用できる人材を養成する。
修了後の進路	本学位プログラムでは、医療・教育・福祉・産業・司法等の領域において、カウンセリング関連の総合的な力を発揮し、支援対象者や職場等の精神的な健康に資する取り組みを行うことのできる指導的な立場として活躍する人材を養成する。また、博士後期課程へ進学し、更に研究を深め、教育や研究に携わる人材を養成する。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（カウンセリング）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	カウンセリング方法論基礎Ⅰ～Ⅲ、カウンセリング研究法Ⅰ～Ⅱ、カウンセリング心理学、生涯発達臨床心理学Ⅰ～Ⅱ、心理･教育統計法、データ解析法、国内外学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	組織心理学、キャリア心理学、心理・教育アセスメント、事例研究法、職場のメンタルヘルス、学校心理学、非行・犯罪心理学、国内外学会発表など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	学校教育相談、ヘルピング・スキル、カウンセリング方法論、心理療法、認知行動療法 Ⅰ～Ⅱ、国内外学会発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	グループプロセス、学校教育相談、社会調査法など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	カウンセリング方法論基礎Ⅲ、カウンセリング研究法Ⅰ～Ⅱ、カウンセリング特別研究 Ⅰ～Ⅲ、国際学会発表など
	6. 研究力：カウンセリング分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①カウンセリング分野における研究課題設定ができる ②カウンセリング分野における研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力を修得している	カウンセリング方法論基礎Ⅰ～Ⅲ、カウンセリング研究法Ⅰ～Ⅱ、カウンセリング特別研究Ⅰ～Ⅲ、心理・教育統計法、社会調査法、データ解析法、事例研究法、国内外学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：カウンセリング分野における高度な専門知識と運用能力	①カウンセリング分野における高度な専門知識を修得している ②カウンセリング分野における高度な運用能力を修得している	生涯発達臨床心理学Ⅰ～Ⅱ、学校心理学、キャリア心理学、グループプロセス、組織心理学、職場のメンタルヘルス、非行・犯罪心理学、エビデンス・ベイスト・プラクティス特論、心理・教育アセスメント、国内外学会発表など
	8. 倫理観：カウンセリング分野の基礎的研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	①カウンセリング分野の基礎的研究能力を有するまたは高度専門職業人にふさわしい倫理観を修得している ②カウンセリング分野の基礎的研究能力を有するまたは高度専門職業人にふさわしい倫理的知識を修得している	カウンセリング心理学、カウンセリング方法論基礎Ⅰ～Ⅲ、ヘルピング・スキル、エビデンス・ベイスト・プラクティス特論、学校教育相談、心理療法、国内外学会発表など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階ごとに学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を確認し、評価する。 – 1年次の秋学期に提出する研究計画届について担任教員による研究準備状況の自己点検と審査および指導を行う。 – 2年次春学期に行う構想発表会における抄録および発表内容に対して、指導教員が第1段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。 – 2年次秋学期に行う中間発表会における抄録および発表内容に対して、指導教員が第2段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。 – 2年次末には、主査、副査2名が修士論文を査読するとともに、最終発表、口頭試問において最終達成度審査を行う。		
学位論文に関する評価の基準	1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、カウンセリング領域における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. カウンセリング領域の国内外の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、修士論文に相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、当該分野の修士論文に相応しい形式にまとめてあること。学位論文が満たすべき水準：主査・副査のいずれもが、上記の1～5を満たしていると判断できること 審査委員の体制：主査1名、副査2名 審査方法：修士論文、論文発表会、口頭試問により主査・副査が学位論文が満たすべき水準の観点から判断 審査項目：修士論文、論文発表会、口頭試問		

カウンセリング学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（カウンセリング）
Master's Program in Counseling / Master of Science in Counseling

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

社会人大学院生がカウンセリング関連領域の知識を身につけ、研究リテラシーを獲得して修士論文を作成することができるコースワークを編成する。

教育課程の編成方針	発達心理学、社会心理学、臨床心理学、産業・組織心理学、教育心理学、犯罪心理学等における研究力・専門知識・倫理観とともに、カウンセリング領域における幅広い基礎的素養、広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。 具体的には、必修科目で研究リテラシー力、課題発見能力、研究立案能力を身につけ、年間 3 回の研究発表会関連のコースワークにより研究遂行力、プレゼンテーション能力を習得する。また、選択の専門科目から、心身の健康に関する諸理論、人間の発達過程における心理社会的諸問題とその支援、現代社会における様々な問題や組織における課題、心理や教育におけるアセスメントや支援計画立案、心理研究法や統計解析などについて、討議や演習を交えて学ぶ。 なお、学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、学術院共通専門基盤科目から 1 単位を履修することを推奨する。
学修の方法 特色的な教育	– カウンセリングに関わる実践的な研究能力・発表能力については、1 年次から各種研究方法に関する講義・実習が行われ、個別や集団による研究指導、発表会が行われる。 – 倫理的な配慮では 1 年次に倫理審査に関わる講習会や説明会を開催するほか、倫理委員や指導教員を中心に個別の指導が行われる。 – 他分野・他領域との協力・連携については、学生や修了生の専門分野・就職先が多様であるため、在学中から、学生・修了生を交えた情報交換や研究協力が盛んに行われる。 – 国際的な視野に立った実践的な研究能力については、海外学会での活動や海外でカウンセリング領域の実践・研究で評価の高い大学との交流を行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	自らの持つ豊富な職業経験を基盤として、カウンセリング関連領域における幅広い視野の獲得と専門性の深化・開発、研究技法の習得を図り、職場や社会での諸問題について科学的・実践的・開発的に解決して、社会に貢献したいという意思と意欲を持った、現職社会人・心理臨床専門家等の人材を募集する。
入学者選抜方針	入試は 2 段階で行う。一次試験では書類審査、論述試験の結果を総合的に判断し、二次試験は一次試験合格者に対して口述試験を実施する。口述試験結果と第一次試験の結果を総合的に判断して最終合格者を決定する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 所属年次以外の演習や成果発表会への参加機会を供し、自身の研究体制を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。 − 担任を中心に全教員が、社会人大学院生固有の相談内容（仕事と学業の両立、子育て・介護等の家庭状況）について、個々に相談できる体制をとる。社会人大学院生が職場から大学に直行して学習・研究活動ができるように、データ解析室、大学院生研究室の環境を整える。職場との関係等で土日の集中講義を一定時間数確保する。
学生同士の交流機会	− 所属年次以外の発表会への参加機会を提供し、学年を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みを教育課程に組み込んでいる。 − TA を活用することにより､学生同士が学び合う機会を継続的に生み出す仕組みを創出している。
教員との交流機会	− カウンセリング方法論基礎Ⅲ、カウンセリング特別研究Ⅰ～Ⅲの発表会等に学位プログラム担当教員全員が参加し、意見交換などを通じて指導教員以外の教員との交流機会も供している。 − 毎年学生教員懇談会を開催し、学生からの意見を積極的に取り入れている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

− 学生の修学状況を運営会議で確認し、必要に応じて改善策を検討する。
− 運営会議において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
− 組織的な教育課題に関しては、学位プログラム担当教員全員が参加する FD において議論する。

リハビリテーション科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Rehabilitation Science

■ 修士（リハビリテーション科学）
■ Master of Science in Rehabilitation

人材養成目的 / Program Educational Objectives

リハビリテーション関係の研究者、専門職業人に対して、リハビリテーションの包括的基盤教育を行うとともに、国際的・学際的な研究の成果と方法論を習得し、他職種と連携して、職場や社会での諸課題について、科学的・実践的・開発的に解決し、社会に貢献する高度専門職業人や大学教員（研究者）を養成する。

養成する人材像	本学位プログラムにおいては、現職社会人が職場において遭遇し、かつ早急にその解決が求められている諸問題について、広い視野での対応と発展に必要な、総合的・包括的リハビリテーションに関する総合的な能力を有する人材を養成する。とくに、総合的・包括的リハビリテーション領域の中でも現場的課題の科学的解決に関わる実践的な研究能力・開発能力の高い高度専門職業人や大学教員などを養成する。
修了後の進路	社会人大学院生を対象にすることから、現職場（医療・保健機関、福祉・相談施設、学校関係（特別支援学校や特別支援学級を含む）、リハビリテーション従事者養成機関、職業センターや障害者を雇用する企業、法律・行政機関など）において国内・国外のリハビリテーションの指導者的立場で活躍することを目的とする。さらに、修了後、博士課程に進学し、大学や専門学校等に転じて教育・研究分野で活躍することもあわせて目的とする。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（リハビリテーション科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	リハビリテーション方法論基礎Ⅰ、修士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	リハビリテーション概説、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	リハビリテーション特別研究、学会発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	リハビリテーション方法論基礎Ⅲ、特別支援教育授業論、学会での質問、セミナーやゼミでの質問など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な研究動向に関する情報収集や行動に必要な語学力を有するか	リハビリテーション方法論基礎Ⅱ、リハビリテーション英語、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究など
	6. 研究力：リハビリテーション分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①リハビリテーションに関する適切な研究計画が立案でき、その計画を他者に適切に伝えることができるか ②リハビリテーションに関する適切な修士論文を完成させ、その成果を適切に発表することができるか	リハビリテーション方法論基礎Ⅱ、リハビリテーション方法論基礎Ⅲ、国内外の専門領域での学会発表・論文発表、修士論文作成など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：リハビリテーション分野における高度な専門知識と運用能力	リハビリテーションに関する高度な専門的知識を習得し、自らも発信できる能力を得られるか	リハビリテーション特別研究、リハビリテーション事例研究、各専門的な学会が開催する研究会や研修会への参加など
	8. 倫理観：リハビリテーション分野の基礎的研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	リハビリテーションに関する基礎的な研究能力、倫理観および倫理的知識を得られているか	リハビリテーション方法論基礎 I など、APRIN など関連する内容の e-learning の受講など
学修成果の評価に関する方針	− 学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階ごとに学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を確認し、評価する。 − 1 年次の秋学期「リハビリテーション方法論基礎 II」において文献研究発表並びにプレデザイン研究計画発表の内容を教員全員で研究準備状況の指導を行う。 − 1 年次の秋学会の「リハビリテーション方法論基礎Ⅲ」において、複数の教員グループによるプレデザイン研究計画に対する指導助言を行う。 − 2 年次春学期「リハビリテーション研究法 II」において研究の中間発表会を実施し、修士論文の進捗状況について副指導教員を中心に質疑応答を行う。これを踏まえ、主指導教員が第 1 段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。 − 2 年次秋学期「リハビリテーション特別研究」において修士論文執筆の指導助言を行った上で中間発表会を実施し、研究抄録および発表内容に対して副指導教員を中心に質疑応答を行う。これを踏まえ、主指導教員が第 2 段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。 − 2 年次末には、主査、副査 2 名が修士論文を査読するとともに、「リハビリテーション特別研究」の単位修得に関わる最終発表（口頭試問含む）において最終達成度審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、リハビリテーション科学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. リハビリテーション科学分野の国内外の発展に寄与するオリジナルな研究成果が修士論文に相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な証拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等がリハビリテーション科学分野の修士論文に相応しい形式でまとめてあること。 学位論文が満たすべき水準：主指導・副指導教員のいずれもが、上記の 1 ～ 5 を満たしていると判断できること審査委員の体制：主指導 1 名、副指導 2 名 審査方法：修士論文、論文発表会、口頭試問により主指導・副指導教員が総合的に判断 審査項目：修士論文、論文発表会、口頭試問

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

リハビリテーションの 4 分野（医学的リハビリテーション、特別支援教育、社会リハビリテーション、職業リハビリテーション）にわたる研究力、専門知識、倫理観とともに、学際的なリハビリテーションに基盤の置いた高度専門職業人とリハビリテーション専門職養成校等の高等教育教員等を育成するための基礎素養、幅広い視野、多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、学術院共通専門基盤科目から 1 単位を履修することを推奨する。 具体的な履修科目や副指導体制の配置は個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 2 年間で問題発見能力や問題解決能力、臨床研究に関する計画能力などの研究リテラシーを獲得して、修士論文を作成するとともに、プレゼンテーション、討議コミュニケーション技法を獲得するためのコースワークを充実させ、臨床研究者としての資質を高めることを念頭に置いている。また、通常の専門分野にとらわれない学際的な教育課程を編成し、高度の総合的視野を備えた有能な人材が育つようにコア・カリキュラムが組まれている。
学修の方法 特色的な教育	– リハビリテーションに関わる実践的な研究能力・発表能力については、1 年次から各種研究方法に関する講義・実習が行われ、個別や集団による研究指導、発表会が行われる。 – 倫理的な配慮では 1 年次に倫理審査に関わる講習会や説明会を開催するほか、倫理委員や指導教員を中心に個別の指導行われる。 – 他分野・他領域との協力・連携については、学生や修了生の専門分野・就職先が多様であるため、在学中から、学生・修了生を交えた情報交換や研究協力が盛んに行われる。 – 国際的な視野に立った実践的な研究能力については、「リハビリテーション英語」の講義のほか、海外でリハビリテーション領域の実践・研究で評価の高い大学との交流を行う。

リハビリテーション科学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（リハビリテーション科学）
Master's Program in Rehabilitation Science / Master of Science in Rehabilitation

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	高齢者・障害者・子どもといったライフスパンに対する総合的・包括的なリハビリテーションに関心を持ち、学際的な研究の視点のある研究者および専門職業人を対象にした教育を行う。これに加えて、リハビリテーションの 4 つの分野（医学・教育・社会・職業領域）を横断的に分析・研究できるリハビリテーションに関わる研究者と高度専門職業人の養成に力点を置いた教育をする。
入学者選抜方針	大学卒業後、リハビリテーション関連分野での実務経験を 1 年以上有している社会人に対して、入学試験を行う。入学試験は、入試情報公開、オープンキャンパス・入試説明会の実施（4 月、5 月）を経て、募集は 7 月中旬を締切とする。8 月下旬に入学試験を実施し、10 月に翌年 4 月の入学の合格者を発表する。入学試験は、書類審査、基本的な知識をみるための論述式試験、志望動機に関する面接により評価を行う

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 「リハビリテーション課題研究」の演習科目の受講により、自身の研究成果を国際学会含む関連発表会で実際に発表した内容成果をあらためて発表することで今後の研究課題を探索する機会を与え、さらに「リハビリテーション事例研究」の演習科目の受講により、自身が所属する職場でのリハビリテーション実践事例を事例研究として深化させ、自身の研究を客観的に見直す契機としている。 – 担任を中心に全教員が、社会人大学院生固有の相談内容（仕事と学業の両立、子育て・介護等の家庭状況）について、個々に相談できる体制をとる。社会人大学院生が職場から大学に直行して学習・研究活動ができるように、データ解析室、大学院生研究室の環境を整える。職場との関係等で土日の集中講義を一定時間数確保する。 – 論文投稿をはじめとする研究成果の総括の仕方や、修了後のキャリア形成の具体例などについて、他学位プログラムも交えて幅広い視点から紹介する FD プログラムを定期的に開催している（年 2 回）。
学生同士の交流機会	– 所属年次以外のデザイン・中間・最終発表会への参加機会を提供し、学年を超えた学生同士の共同研究の推進を意図し、院生の交流機会を促進する仕組みを単位取得の一要件として教育課程に組み込んでいる。 – 在籍学生同士、そして学位プログラム修了生との交流機会を図るため、同窓会を開催している。
教員との交流機会	– 「リハビリテーション方法論基礎 I」のオムニバス授業により複数の教員との交流機会を増やし、「リハビリテーション方法論基礎 II」により指導担当教員との交流機会を増やし、「リハビリテーション方法論基礎 III」におおける複数教員との合同授業により、より自身の研究テーマに近い教員との交流機会を増やしている。さらに、1 年次のプレデザイン発表会、2 年次のデザイン・中間・最終発表会には学位プログラム担当教員全員による質疑応答を経たのちに、懇談会にてさらなる意見交換の機会を増やしている。 – 毎年学生教員懇談会を開催し、カリキュラム、教育研究環境の整備、博士後期課程への進学相談等ついて比較的インフォーマルに話し合える場を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

リハビリテーション科学学位プログラム教員会議及びカリキュラム委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。

ニューロサイエンス学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Neuroscience

■ 修士（神経科学）
■ Master of Neuroscience

人材養成目的 / Program Educational Objectives

社会における高齢化、教育課題、精神的健康問題といった多様な具体的な課題に応えるため、人間の心や行動、脳機能およびその異常に関する神経科学の専門知識を活用し、卓越したチームワークとコミュニケーション能力を発揮して課題解決に貢献できる人材を養成する。また、神経科学の広範かつ深遠な学術基盤に基づく高度な専門知識と技術を修得し、大学院後期課程での研究者養成教育に繋がる国際的競争力を持つ人材の輩出を目指す。

養成する人材像	− 神経科学における学際的見識を基盤に、国内外の多様な現場で、現代社会が直面する心と行動に関連する複合的な問題の解決に対応できる能力を持つ人材 − 正常および障害を持つ脳機能に関する学術基盤を活かし、基礎研究および応用研究を推進できる人材
修了後の進路	− ニューロサイエンス学位プログラム博士後期課程への進学 − 心理学、障害科学、生命科学などの隣接諸領域の学位プログラム博士後期課程への進学 − 産官の現場での一般職、専門職 − 国内・外の高等教育機関の教員や障害科学領域の専門職

ニューロサイエンス学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（神経科学）
Master's Program in Neuroscience / Master of Neuroscience

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（神経科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	学術院共通専門基盤科目、神経科学基礎論 A･B･C･D、神経科学先端セミナー 1・2、修士論文指導 1・2・3・4、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	キャリアプランセミナー、神経科学実験・実習 A・B・C・D、実践的神経科学インターンシップ、学会発表など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	基礎科学英語 1・2、神経科学実験・実習 A・B・C・D、英語ジャーナルクラブ 1･2、実践的神経科学インターンシップ、学会発表、学会での質疑応答、セミナーでの質問など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	キャリアプランセミナー、神経科学実験・実習 A・B・C・D、実践的神経科学インターンシップ、TA での経験、学外の研究者との共同研究など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	基礎科学英語 1・2、英語ジャーナルクラブ 1・2、神経科学先端セミナー 1・2、修士論文指導 1・2・3・4、留学生との交流、外国人との共同研究など
	6. 基礎知識・専門知識：神経科学分野での課題発見、計画立案、研究実施に必須である神経科学全般にわたっての基盤的知識の習得。	①神経科学分野の基盤的知識に基づいて新たな課題を発見することができるか ②発見した課題を解決するための研究計画を立案することができるか	神経科学実験・実習 A・B・C・D、神経科学先端セミナー 1・2、学会発表、神経科学基礎論 A・B・C・D など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 研究実践スキル：研究者倫理に基づき、神経科学分野において、人や動物を対象とした基礎的な研究(実験・調査）が実施できる能力	神経科学分野における基礎的な研究手法を用いて研究課題を解決することができるか	神経科学実験・実習 A・B・C・D、神経科学先端セミナー 1・2、修士論文指導 1・2・3・4、学会発表など
	8. 研究情報収集・成果発信力：神経科学分野の論文の読解、情報収集、成果発信を行うに足る、外国語を含むコミュニケーション力	①国際誌に掲載された神経科学分野の論文を読解し、最新の知見を得ることができるか ②神経科学分野の研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも論理的思考に基づいて的確かつわかりやすく説明することができるか	基礎科学英語 1・2、英語ジャーナルクラブ 1･2、学会発表、学会での質疑応答、セミナーでの質問など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は、学位授与方針に基づくコンピテンスの修得状況を「達成度評価表（ルーブリック)」により確認・評価することで行う。 第 1 段階（1 年次秋学期末)：修士論文構想発表会において、主査・副査・指導教員がルーブリックに基づき第 1 段階達成度審査を行う。 最終段階（2 年次秋学期末)： – 修士論文研究審査会において､全研究指導担当教員がルーブリックに基づき第 2 段階達成度審査を行う。 – その後、主査および副査 2 名以上で構成される学位論文審査委員会において、ルーブリックに基づき審査を行い、教育会議において全教員で最終達成度審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	修士論文研究構想発表会での発表と修士論文研究資格試験合格を修士論文提出の要件とする。学位論文が下記の評価項目について妥当と認められ、かつ、最終試験で合格と判定されること。 （評価項目） 1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、神経科学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 神経科学分野の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、修士論文に相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、神経科学分野の修士論文に相応しい形式にまとめてあること。 （審査委員の体制・審査方法） 学位プログラム内の 3 名の教員（主査は研究指導担当教員）により学位論文審査委員会を構成し、全員の出席のもと最終試験として学位論文およびその関連分野に関する口述試験を行ったうえで、合否を判定する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

神経科学全般にわたっての基礎知識、研究手法、論理的思考力、研究企画力・遂行力、問題発見力・解決力、異分野コーディネート力・マネジメント力、コミュニケーション力・協調性、領域横断英語ディベート力を修得するためのカリキュラムとする。

教育課程の編成方針	– 神経科学の研究領域を “分子・細胞”、“システム”、“行動・認知”、“障害、臨床、支援” の 4 つに分けて、神経科学基礎論および神経科学実験・実習を開設することによって、神経科学の全領域の基礎を系統的に学ぶことのできる教育課程を編成する。 – 基礎科目（「キャリアプランセミナー」、「研究倫理」）および専門基礎科目（「神経科学基礎論」、「基礎科学英語」）の必修科目では、神経科学の基礎研究力、科学英語コミュニケーション力を養成する。また、学術院共通基盤科目の履修を必修とし、隣接諸領域の知識、物の見方、考え方を学ぶ。 – 専門科目の「神経科学実験・実習」では、神経科学の多様な研究手法を hands-on 実習を通して学ぶ。「英語ジャーナルクラブ」、「神経科学先端研究セミナー」では、神経科学研究の動向について幅広い知識を自律的に学修する。また、実践的神経科学インターンシップを開設し、神経科学の基礎研究の成果を様々な社会実践の現場でどのように応用、活用できるのかを体験的に学ぶ機会を提供する。 –「修士論文研究指導」として、4 つの必修科目の開設し、修士論文研究のテーマ決定、修士論文研究構想発表、修士論文研究資格試験、修士論文作成、修士論文最終試験、修士論文最終公開発表、修士の学位取得までの過程を段階的に指導することにより、学位の質の保証を図る。

学修の方法 特色的な教育	1 年次の学修 – 入学直後開講される「キャリアプランセミナー」を履修し、修士取得までの学修計画および修了後の進路計画を自ら考え策定する。 – 大学院共通科目「研究倫理」および「学術院共通基盤科目（科目は自由に選択）」を履修し、研究者としての倫理観や人間科学に関する幅広い教養を身につける。 –「神経科学基礎論 A・B・C・D」(Principles of Neural Science, Fifth Edition；カンデル神経科学、第 5 版をテキストとして使用）のすべて履修し、“分子・細胞”、“システム”、“行動・認知”、“障害、臨床、支援” の神経科学の全般に関する基礎知識を習得する。 – 神経科学基礎論の講義をもとに、“分子・細胞”、“システム”、“行動・認知”、“障害、臨床、支援” のいずれかの領域の「神経科学実験・実習 A・B・C・D」を 1 科目以上選択し、当該領域の基礎的研究課題や研究手法を実践的に学ぶ。 – 通年で開講される「基礎科学英語 1」、「英語ジャーナルクラブ 1」を履修し、英語コミュニケーション力、ディベート力、英語読解力を自律的に学ぶ。また、「神経科学先端研究セミナー 1」を履修し、招聘講師による研究セミナーおよびインフォーマルディスカッションを通して、神経科学の幅広い領域の先端的研究の面白さを学ぶ。 –「修士論文研究指導 1」では、修士論文研究のテーマに関連する先行研究についての文献を検索、学修する。「修士論文研究指導 2」では、修士論文研究構想発表を経て修士論文研究を進めると共に、2 年次 4 月の修士論文研究資格試験に向けての準備を進める。 2 年次の学修 – 自身のキャリアプランに応じて、「基礎科学英語 2」、「英語ジャーナルクラブ 2」、「神経科学先端研究セミナー 2」、「実践的神経科学インターンシップ」などのニューロサイエンス学位プログラム開設科目や、「学術院共通基盤科目」、他の学位プログラム開設科目を履修し、学位取得に向けてのより高度な知識、研究手法、論理的思考力、英語力、実践力を習得する。 –「修士論文研究指導 3」では、修士論文研究資格試験に合格した上で、修士論文研究を継続して進める。「修士論文研究指導 4」では、修士論文の作成を進め、修士論文最終試験合格を目指す。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	広く、人の心と行動や脳機能、およびその異常についての専門的研究に関心の高い人材。神経科学、心理学、障害科学、生物学、基礎医学などの学部教育を受けた者が望ましいが、必須ではない。
入学者選抜方針	入学試験は筆記試験と口述試問によって行い、語学力、専門分野の知識、学習に対する意欲や資質を総合的に評価する。

ニューロサイエンス学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（神経科学）
Master's Program in Neuroscience / Master of Neuroscience

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– IBRO（International Brain Research Organization）が開催するトレーニングコース（IBRO スクール）や国立台湾大学での神経科学サマーキャンプへの参加を支援し、単なる国際交流にとどまらず、将来の研究活動につながる国際的なネットワーク形成の場を提供している。 – 筑波大学・国立台湾大学・モナーシュ大学マレーシア校が共同開催する Tri-Institutional Neuroscience Graduate Seminar（TiNGS）をオンラインで実施し、海外での発表に先立ち、日常の延長で挑戦できる国際学術交流の場として、英語による 3 分間のフラッシュトークに取り組む機会を整えている。
学生同士の交流機会	– 人間総合科学学術院・研究科学生の集いには、学位プログラムとして積極的な参加を呼びかけ、学年や分野を超えた交流を促している。 – 春学期の修士論文研究資格試験口頭発表会（中間発表会）、秋学期の構想発表会や公開発表会は対面で実施し、前期・後期課程のすべての学年が互いに学び合う機会としている。 – 海外研修等の終了後には、公開報告会を開催し、学生同士が自由に交流できる場を設けている。
教員との交流機会	– 修士論文構想発表会はポスター形式としており、当該学位プログラムの主担当教員全員の参加を必須としており、研究指導にかかわらない学生とも直接交流する機会を設けている。 – 海外研修等の報告会においても、教員と学生が交流できる場を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

年度の前半に前年度の活動（学修成果の評価結果、学位取得の流れの検証および修了生進路等）を、後半に春学期（入学者、主要科目の成績分布等）の活動を、教育会議構成員全員が参加する FD で点検、検証を行っている。

看護科学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Nursing Science

■ 修士（看護科学）
■ Master of Science in Nursing

人材養成目的 / Program Educational Objectives

少子高齢化が進むわが国では、複数の疾病や障がいを抱える患者の、長期にわたる複雑な健康問題によって医療の需要が増大かつ多様化している。本学位プログラムは、看護科学における科学的根拠に基づいてこのような課題の解決に貢献できるような、幅広く深い学識をもつ研究者等の養成の一段階であるとともに、助産師などの高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	学際的及び国際的な視点をもち、確かな倫理観と科学的根拠に基づいて看護を探究し、研究者として研鑽する姿勢を持った人材。また、看護研究・実践の基礎になる専門知識・技術・実践能力を備えた看護職者及び看護学教育を支える看護学教育者となりうる人材。
修了後の進路	看護学教育者、看護学研究者、保健師、助産師、看護師等

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（看護科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門領域以外でも問題を発見することができるか	看護科学論、看護学研究法、保健統計学、看護科学特別研究、助産師養成科目の（履修生においては、その）特論や演習、病院や地域等の臨地における実践実績、修士論文作成（特定課題研究作成）、国内外学会発表
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	助産師養成科目の（履修生においては、その）特論や演習、インターンシップ、看護科学特別実習、病院や地域等の臨地における実践実績、達成度自己点検
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	看護学研究法、実習科目、助産師養成科目の（履修生においては、その）特論や演習、病院や地域等の臨地における実践実績、学会発表、ポスター発表、達成度自己点検
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	看護教育論、実習、病院や地域等の臨地における実践実績、学会での質問、学内外セミナーでのディスカッション、達成度自己点検
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、国際看護学、国際交流セミナー参加、留学生との交流
	6. 科学的根拠に基づく探究力：科学的根拠に基づいて看護を探究し、研究・実践する能力	①科学的根拠に基づいて看護科学上の問題を探究することができるか ②科学的根拠に基づいて実習計画や研究計画を立て、遂行することができるか	看護学研究法、看護科学特別研究、実習、臨地での実践実績、論文作成、学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門領域における実践力：看護科学の専門領域における知識と技術を習得し、教育・研究・看護実践する能力	①看護科学の基礎となる専門領域における知識を習得しているか ②科学的根拠を教育・研究・看護実践に適用することができるか	看護科学論、助産師養成科目の（履修生においては、その）特論や演習、実習、臨地での実践実績、論文作成など
	8. 看護の学際性：学際的視野に立ち看護を科学的に実践する能力	①他の学問領域との関連性をふまえて看護科学を理解できるか ②学際的な視野に立って科学的根拠に基づいた教育・研究・看護実践をすることができるか	看護科学論、看護科学特別研究、実習、臨地での実践実績、論文作成、学会発表など
	9. 看護の感性と倫理観：豊かな感性・確かな倫理観に基づく看護科学の研究・実践能力	①研究課題に対して、研究倫理に配慮した研究計画を立て、的確に遂行することができるか ②倫理的感受性をもって看護を実践することができるか	看護倫理学、看護科学特別研究、実習、臨地での実践実績、論文作成など
	10. 国際通用性を目指す研究力・実践力：国際的な研究成果を自らの研究・実践に活かし、看護研究・実践を志向する能力	国内外の双方の研究を活用して、研究・実践ができるか	国際看護学、看護科学特別研究、論文作成、国際交流セミナー参加、学会発表など

学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた各知識・能力（コンピテンス）について、以下の指標と方法により評価を行う。 【数値指標による評価】 各科目および学生の学修活動に対してコンピテンス項目ごとに数値指標を設定し、客観的な評価を実施する。各知識・能力項目には達成目標となる基準値を設定し、学生の到達度を定量的に測定する。 【評価プロセス】 ≪年次評価≫ 年 1 回、指導教員と教務委員会が連携し、各学生のコンピテンス到達度を確認・評価する。評価は以下の観点から実施する – 各科目における数値指標の達成状況 – 設定された基準値に対する到達度 – 研究活動における知識・能力の発揮状況 ≪最終評価≫ 学位論文審査時に学位論文審査委員会において、全てのコンピテンスが基準値を達成していることを確認する。数値指標による定量評価結果と学位論文における知識・能力の具現化を総合的に評価し、最終的な達成度を判定する。
学位論文に関する評価の基準	（評価基準） ＜修士論文＞ 1. 研究の内容が看護科学に寄与するものであること。 2. 研究の意義、目的を明確に設定し、適切な方法を用いて研究していること。 3. 先行研究が十分検討されていること。 4. 研究全体に大きな矛盾がなく、適切な形式や表記で論文が記述されていること。 5. 研究の実施、もしくは結果の公開において倫理的な問題がないこと。 ＜特定の課題についての研究成果＞ 1. 特定課題研究の内容が高度な看護実践に寄与するものであること。 2. 看護実践上の意義、目的を明確に設定し、適切な方法を用いて研究していること。 3. 先行研究および実践への適用について、十分に検討されていること。 4. 研究全体に大きな矛盾がなく、適切な形式や表記で論文が記述されていること。 5. 研究の実施、もしくは結果の公開において倫理的な問題がないこと。 （評価手順） – 2 年次春学期に、教員 1 名による研究計画書について公開の発表会と口頭試問をとおして各学生の研究進捗度を評価する。評価を行う教員は、指導教員とは専門研究領域が異なる看護科学学位プログラムの教員とする。 – 2 年以上の在学と修了に必要な単位以上の修得が見込まれる者について、学位論文の審査及び最終試験を行う。 – 主査および 2 名以上の副査からなる審査委員会を構成し、公開の発表会とその後の口頭試問をとおして各学生の研究の完成度を審査する。審査を行う教員は、指導教員とは専門研究領域が異なる看護科学学位プログラムの教員とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

看護科学分野における学際的及び国際的な視点の涵養を図り、確かな倫理観と科学的根拠に基づいて看護を探究する能力と、看護分野における高度の専門的な職業を担うために必要な、看護研究・実践の基礎になる卓越した専門知識・技術・実践能力を培う。また、学術協定をもつ大学への学生の留学や教育・研究に関する学術交流の活性化により、グローバル水準での教育・研究活動に勤しめる環境を提供する。

教育課程の編成方針	− 専門科目の基礎となり、医療技術の進歩と疾病構造の変化による多様な医療ニーズに応えられる幅広い知識を持った豊かな人間性と科学的思考を促進する科目を専門基礎科目として設定する。 − 学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目の履修を推奨する。 − 大学院共通科目のうち「研究倫理」(1 単位) を必修とする。 − 修了後の進路に対応した以下の養成課程を設定する。①博士後期課程への進学に向けて研究基礎力を育成する研究基礎課程、②研究基礎力と高度な実践能力を持つ助産師を育成する助産師養成課程。 ［研究基礎課程］ − 専門基礎科目「看護科学論」「看護学研究法」、専門科目、専門科目（共通）である実習と「看護科学特別研究」により、科学的根拠に基づいて看護を探究する能力を身につける。 − 専門基礎科目「看護学研究法」「保健統計学」、専門科目、専門科目（共通）である実習と「看護科学特別研究」等により、看護科学の基礎になる専門知識と技術をもって看護を研究・教育する能力を身につける。 − 専門基礎科目「看護科学論」、大学院共通科目、他の専門分野に関する専門科目、専門科目（共通）「看護科学特別研究」により、看護を学際的な視点から科学的に分析する能力を身につける。 − eAPRIN、臨床研究における倫理講習、専門科目、専門科目（共通）である「看護科学特別研究」等により、豊かな感性と確かな倫理観に基づく看護科学の研究能力を身につける。 − 専門基礎科目「国際看護学」の受講や学術協定校講師による特別講義等により、国際的な看護研究を志向する能力を身につける。また、専門基礎科目「看護学研究法」、各自の専門分野の専門科目における先行研究のクリティーク、専門科目（共通）「看護科学特別研究」等により、国際水準の看護研究の成果を自らの研究に活かす能力を身につける。 ［助産師養成課程］ − 専門基礎科目「看護科学論」「看護学研究法」、「助産学実習Ⅰ・Ⅱ」、専門科目、専門科目（共通）である実習と「看護科学特別研究」により、科学的根拠に基づいて助産学を探究する能力を身につける。 − 助産師国家資格の取得に必要な 31 単位のほか、専門基礎科目「看護学研究法」「保健統計学」「看護教育学」、専門科目、専門科目（共通）である実習と「看護科学特別研究」により、看護科学の基礎に助産学の専門性を融合させて、助産実践力と研究能力を身につける。 − 専門基礎科目「看護科学論」、大学院共通科目、専門科目（共通）「看護科学特別研究」により、助産を学際的な視点から科学的に分析する能力を身につける。

教育課程の編成方針	− eAPRIN、臨床研究における倫理講習、助産師国家資格の取得に必要な専門基礎科目「生殖生命倫理学」、専門科目、専門科目（共通）である実習と「看護科学特別研究」等により、助産師としての豊かな感性と確かな倫理観に基づく助産の実践能力を身につける。 − 助産師課程の指定科目である専門基礎科目「国際看護学」、学術協定校講師による特別講義等により、国際的な助産実践を志向する能力を身につける。また、専門基礎科目「看護学研究法」、助産師の国家資格取得に必要な「助産学実習Ⅰ・Ⅱ」、専門科目における先行研究のクリティーク、専門科目（共通）である「看護科学特別研究」等により、国際水準の助産研究の成果を助産実践に活かす能力を身につける。
学修の方法 特色的な教育	− 修了のために履修すべき専門基礎科目は、「看護科学論」（2 単位）を含む 8 単位以上（大学院共通科目、他専攻の開設科目を含めてよい）とする。 − 修了のために履修すべき専門科目は、各自の専門分野の「特論」（2 単位）と「演習」（2 単位）を含む 8 単位以上とする。 − 修了のために履修すべき専門科目（共通）は、「看護科学特別研究」（4 単位）のほか、「インターンシップ」（2 単位）と「看護科学特別実習」（2 単位）のいずれかを含む 6 単位とする。 − 修了に必要な単位数は 30 単位以上とする。ただし、助産師の資格試験要件を満たしたい場合は、受験要件となる 31 単位を含む 61 単位以上とする。 − 各専門研究領域で修士論文または特定の課題についての研究の成果を作成するための研究指導を行う科目として「看護科学特別研究」を必修とする。助産師養成課程に対応した進路を目指す学生は、修士論文の代わりに特定の課題についての研究の成果について審査を受けることができる。特定の課題についての研究の成果は、高度な看護実践をおこなう能力の習得を証明するものである必要がある。 − 1 年次の 4 月に、各学生の研究課題の指導教員と副指導教員を決定し、学生が論文指導を受けられる体制を整える。2 年次の 4 月に、指導教員が所属する専門研究領域とは別の専門研究領域に所属する教員 1 名を審査委員として研究計画書の審査を行い、必要な示唆を与える。人を対象とする研究課題については、研究の開始までに、該当する倫理審査委員会から計画書の承認を得たうえで実施する。 − 2 年次の 12 月に修士論文または特定の課題についての研究の成果の発表会を行い、審査委員会による論文の予備審査を経て、翌 1 月に行う論文の審査と最終試験によって合否を判定する。 − 修了のために大学院共通科目「研究倫理」1 単位と学術院共通専門基盤科目を 1 単位以上必修とする。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	看護科学に関する基礎的な素養を備えており、確かな倫理観と科学的根拠に基づいて国際水準の看護を探究する意欲をもち、修了後に、看護の指導的な役割を担う教育者、研究者、助産師を目指す人材を求める。

入学者選抜方針	− 8 月に入学試験を実施し、8 月期の入学試験において定員に満たない場合には 2 月に再度試験を実施する。 − 募集人数は 15 名（外国人留学生、社会人特別選抜の募集を含む）とする。 − 社会人特別選抜の出願資格として、次のいずれかに該当し、入学時に保健・医療・福祉関連の領域で、概ね 3 年以上の実務経験（通算可）を有する者を対象とする。①大学（4 年制）を卒業した者、あるいは入学前年度 3 月までにその見込みのある者、②学士の学位を授与された者、あるいは入学前年度 3 月までにその見込みのある者、③外国において学校教育における 16 年の課程を修了した者、あるいは入学前年度 3 月までにその見込みのある者。④本学大学院において行う出願資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、22 歳に達した者及び入学前年度 3 月までに 22 歳に達する者。 − 一般入試では、専門科目（看護科学に関連した基礎課題）と英語の筆記試験、口述試験により、学力査定と人物評価を行う。専門科目の試験の目的は、受験者の看護の基礎的知識を幅広い範囲で評価することである。英語の試験の目的は、大学生レベルの英文読解力を評価することである。口述試験では、2 年間で課程を修了する力量があるかを評価すること、また研究者あるいは教育者、実践家としての看護科学分野における適性、資質、将来的な可能性、及び明確な目的意識を有するか否かを評価する。 − 社会人特別選抜では、専門科目（看護科学に関連した基礎課題）と英語・小論文の筆記試験、口述試験により、学力査定と人物評価を行う。専門科目の試験は、一般入試と同じ問題とする。英語の試験では、大学生レベルの英文読解力を評価することを目的に試験を行う。小論文の試験では、医療に関連する考えを論理的に論述する能力を評価することを目的に出題する。口述試験の目的ならびに試験時間は一般入試と同様とする。 − 外国人留学生が受験する場合には、英語による問題ならびに設問の作成等の配慮をする。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	大学院生の効果的な学修を支援する以下の活動を実施している − 研究指導、論文執筆指導の個別支援（面談） − 学内外の演題発表前の予演会などのプレゼンテーション指導 − English ライティングサポート
学生同士の交流機会	ピア効果を高め、学修意欲や研究の質を向上につながる以下の制度や枠組みが存在する。 − 各専門研究領域におけるゼミ − 領域を跨いだ特論・演習の授業設定、学生同士のディスカッション − 計画書発表会や論文発表会での協働活動 − 学生チューター制度
教員との交流機会	教員との対話や指導を通じて、学修意欲や研究の質を高める以下の活動を実施している。 − 研究指導体制の整備、定期的な個別面談 − 教員主催の勉強会・研究会 − 年に 1-2 回の専門領域内での食事会での交流 − 教員との協働による研究プロジェクト

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育の質向上を検証・改善する以下の活動を実施している。

- FD（Faculty Development）活動
- 学生アンケートの分析とフィードバック
- 教育課程の定期的な見直し
  - 学位プログラム教育会議において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。
  - 教務委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。

フロンティア医科学学位プログラム（修士課程）
Master's Program in Medical Sciences

■ 修士（医科学）
■ Master of Science in Medical Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

フロンティア医科学は、基礎医学、臨床医学、医学物理学、橋渡し研究・レギュラトリーサイエンス、感染症危機管理学など、幅広い領域をカバーする学際的な分野である。本プログラムでは、医科学の包括的基盤教育をベースに、社会的ニーズに対応した実践的で幅広い医科学関連領域の教育・研究を行い、研究者・大学教員あるいは高度専門職業人として安心で健康な社会の実現と維持のために活躍する人材を養成する。

養成する人材像	− 医科学全般の基盤的知識と専門領域の深い学識と研究能力をもって大学等の教育研究機関において医科学分野での研究の推進や新分野の開拓に貢献し得る人材 − 医科学全般の基礎的知識と社会ニーズに合わせた専門領域の知識をもって医療に関係する企業等において研究開発や医療関連業務に携わる人材 − 医科学全般の基礎的知識と専門領域の実践的な知識をもって医療機関等において医療の安全や健康増進に資することができる人材
修了後の進路	− 博士課程への進学 − 大学、研究所及び公的機関での教育及び研究職 − 製薬、食品、医療機器等を含む企業への就職 − 病院を中心とした医療施設での専門職（医学物理士、放射線治療品質管理士など） − 福祉関係の施設での専門職 − 医薬品・医療機器などの臨床開発職（プロジェクトマネージャー、CRA、CRC など）

フロンティア医科学学位プログラム（修士課程） ／ 修士（医科学）
Master's Program in Medical Sciences / Master of Science in Medical Sciences

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する修士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（医科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	医科学特別演習、医科学特講、演習科目全般、実習科目全般、インターンシップ I、II、国際実践医科学研究特論、修士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	医科学特別演習、基礎医科学演習、演習科目、実習科目、インターンシップ I、II、研究マネジメント基礎、適正技術教育、達成度自己点検、外部コンテスト等への参加など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	English Discussion & Presentation I、II、医学英語 I、II、演習科目、実習科目、研究発表に関する科目、学会発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	English Discussion & Presentation I、II、研究マネジメント基礎、適正技術教育、演習科目、実習科目、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会・セミナー・研修会への参加など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	国際実践医科学研究特論 I ～ III、English Discussion & Presentation I、II、適正技術教育、大学院共通科目（国際性養成科目群）、語学力養成科目、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、留学生との交流、外部英語試験（TOEIC・TOEFL など）の得点、学会発表、外国人との共同研究など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 基礎知識の活用力：基礎医学、臨床医学、社会医学を横断する包括的な医科学の基盤的知識を活用する能力	医科学に関する知識とそれを活用する能力を身につけているか	基礎科目の講義・実習、医科学セミナーV（キャリアパス）、Scientific Ethics、研究マネジメント基礎、学会・セミナー・研修会への参加など
	7. 実践的能力：医科学に関する高度な専門知識と運用能力	医科学に関する高度な専門知識と運用能力を身につけているか	専門基礎科目の講義・実習、インターンシップI、II、適正技術教育、学会・セミナー・研修会への参加など
	8. 研究能力：医科学に関する先端的な研究を計画し完成させる能力	①最先端の研究方法や異分野の手法を理解し研究に応用することができるか ②研究を完成させるために必要な情報収集、体制構築、交渉などを主体的に行うことができるか	医科学特別演習、基礎医科学演習、研究指導科目、修士論文作成、学会発表など
	9. 課題解決能力：医科学分野における専門領域の深い学識を基礎として、当該分野における課題を抽出し解決する能力	医科学分野における最新の専門知識に基づいて重要課題を見出し、独創的な研究を考え出すことができるか	医科学特別演習、専門科目の講義・演習・実習、適正技術教育、修士論文作成、学会発表など
	10. 倫理観：医科学に関わる研究者・高度専門職業人にふさわしい高い意識と倫理観	①医科学に対して高い意識と意欲があるか ②医学関連の研究者や高度専門職業人としてふさわしい倫理観と倫理知識を備えているか	生命倫理学、Scientific Ethics、APRINの受講など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価はコンピテンス自己評価表及び達成度評価表に基づく達成度評価によって以下の段階毎に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 第一段階：中間審査後（1年次）に提出されたコンピテンス自己評価表について、教務委員長とプログラムリーダーがその妥当性を確認、評価する。 – 最終段階：最終審査後（2年次）に提出されたコンピテンス自己評価表について、教務委員長とプログラムリーダーがその妥当性を確認、評価する。その後、運営委員会において最終達成度審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	筑波大学大学院学則に規定された要件を充足した上で、学位論文が評価項目について妥当と認められ、かつ、最終試験で合格した者に修士（医科学）を授与する。評価項目は以下の通りである。 （評価項目） 1. 研究成果が質的にも量的にも修士論文として相応しいこと。 2. 研究の背景が述べられていること。 3. 研究の目的が明確であること。 4. 研究の方法が目的に沿っていること。 5. 研究の結果が適切に述べられていること。 6. 研究の結果に基づく考察が適切になされていること。 7. 図表が適切に作成されていること。 8. 参考文献、略語等の表記が適切であること。 9. 論文内容を十分に理解していること。 10. 質疑応答に的確に対応できること。 11. 関連分野の研究を理解していること。 12. 研究データの改ざん・捏造や剽窃などの研究不正がないこと。 修士論文研究は「医科学特別演習」として複数の教員によって指導され、1 年次後半に行われる中間審査に合格した者について最終審査が行われる。最終審査は、公開発表会における 3 名の教務委員による研究発表審査と、論文審査員（主査 1 名、副査 2 名）による個人審査で行われる。審査結果をフロンティア医科学学位プログラムの論文審査委員会と運営委員会、及び学術院運営委員会で審議して学位授与が決定される。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

医科学は、基礎医学、臨床医学、医学物理学、橋渡し研究・レギュラトリーサイエンス、感染症危機管理学など、幅広い領域をカバーする学際的な分野である。このような幅広い医科学分野における社会的ニーズに対応し、研究開発や新分野の開拓に必要となる基礎から応用までの幅広い知識および医療機関等において医療の安全や健康増進に貢献するために必要な知識を学ぶことのできるカリキュラムとする。

教育課程の編成方針	フロンティア医科学学位プログラムでは、基礎科目、専門基礎科目、専門科目を編成する。基礎科目、専門基礎科目により医科学の基盤知識を、専門科目により希望する進路に対応する専門領域の能力を修得する。基礎科目、専門基礎科目、専門科目の 5 割以上は英語で開講し、留学生が英語のみで学位を取得できるように配慮する。さらに、専門分野以外の幅広い知識・教養や倫理観は大学院共通科目等を通して身につけ、次世代の人材育成にも貢献できる力を涵養する。

学修の方法 特色的な教育	以下に標準的な履修スケジュールを示す。 1. 1 年次には、医科学特別演習（修士論文研究）以外の修了要件を満たすための多くの科目を履修する。 2. 2 年次には、医科学特別演習（修士論文研究）を中心に、医科学の知識を深めるための科目を履修する。 3. 1 年次前半には研究計画発表会を行い、各学生は今後の修士論文の研究計画を発表する。 4. 1 年次後半には研究指導教員を含まない論文審査員（主査 1 名、副査 2 名）が選定され、学生の研究の進捗状況に応じて中間個人審査を行う。 5. 2 年次後期開始時には研究成果発表会を行い、これまでの研究成果を発表する。 6. 2 年次末には最終審査を行う。最終審査は、公開発表会における 3 名の教務委員による研究発表審査と、論文審査員による論文と学力の個人審査で行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	医科学に関する基礎的な知識を有し、論理的な分析力、独創的で柔軟な着想によって積極的に研究を行う意欲を持つ人の入学を求める。入学後には、医科学の基盤知識、高度な専門知識を学修するのみではなく、当面する専門領域における諸問題について、包括的な視点でそれを解明し、解決できる能力を自ら修得する学生を求める。
入学者選抜方針	– 筆記試験および口述試験を行い、両者を総合的に評価して入学者を選抜する。 – 筆記試験では、英語の能力および医科学に関する基礎知識を評価する。 – 口述試験では、論理的分析力、独創的かつ柔軟な着想力および学修意欲を評価する。 – 筆記試験および口述試験は、受験生の希望に応じて日本語あるいは英語で行う。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	フロンティア医科学学位プログラム事務室を設置し、中間審査、最終審査、各種発表会、コンピテンス自己評価、学位審査時のサポートや随時の問い合わせ対応などの各種学修支援を行っている。加えて、研究活動に直接的に関係する科目を開講し（基礎医科学演習、Scientific Ethics、English Discussion & Presentation on Medical Sciences、医科学特別演習 等）、単位化している。
学生同士の 交流機会	– 医科学特別演習（修論研究のための科目）では、研究計画発表会（入学 3 ケ月後）、研究成果発表会（2 年次秋学期初め）、公開発表会（2 年終了時）という 3 つの発表会を実施しており、異なる分野の学生との交流の機会としている。 – 卒業生については、ホームページや facebook のグループなどの SNS を利用し、情報発信と意見交換を行う仕組みを構築している。また、キャリアパスセミナーを利用して、在学生と卒業生の交流の場を設けている。キャリアパスセミナーは単位化しており、年度末に担当教員が集まって次年度に向けた改善に関するミーティングを行っている。

教員との交流機会	– 学生からの相談については、組織の中に、学生担当委員とキャリア支援担当を設け、学位プログラム事務室を窓口とし、留学生も含めて日常的に対応している。 – 医科学特別演習（修論研究のための科目）では、研究計画発表会（入学 3 ケ月後)、研究成果発表会（2 年次秋学期初め)、公開発表会（2 年終了時）という 3 つの発表会を実施しており、異なる分野の教員からの助言を受ける機会となっている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 運営委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
– 教務委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

公衆衛生学学位プログラム（修士課程）
Master's Program in Public Health

■ 修士（公衆衛生学）
■ Master of Public Health

人材養成目的 / Program Educational Objectives

疫学、生物統計学、保健医療政策学、環境保健学、健康行動科学の５つのコアを中心としたパブリックヘルスの専門性を高めるための知識や技能の修得を目指す。また、関連領域の授業履修も積極的に推奨し、学際性の向上も目指す。

グローバルに活躍できる人材育成のために、すべての基礎科目・必修科目を英語で開講して留学生とともに学ぶ環境を整備している。

養成する人材像	保健医療政策立案者、保健・医薬行政実務者、疫学専門家、生物統計専門家、地域医療実務家、医療安全管理専門家、健康教育やヘルスプロモーションの専門家、その他公衆衛生の専門的技術を身に着けた実務家を育成する。
修了後の進路	これまで働いていた保健医療機関に復職する社会人をはじめ、本学位修得後、他職種から保健医療専門家としてキャリアアップして転職する。さらに専門性を高めるために進学する。

公衆衛生学学位プログラム（修士課程） ／ 修士（公衆衛生学）
Master's Program in Public Health / Master of Public Health

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する修士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（公衆衛生学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	研究指導科目、修士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	研究指導科目、演習科目、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	研究指導科目、演習科目、研究発表に関する科目、学会発表、ポスター発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	研究指導科目、演習科目、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、語学力養成科目、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、留学生との交流、TOEIC 得点、会議発表、外国人との共同研究など
	6. 公衆衛生学コア1：疫学応用能力公衆衛生学コアである疫学に関する基礎知識とそれを公衆衛生活動で応用する技能	人間集団の健康問題の解決のために何ができるか、またそれを検証するための研究デザイン、研究倫理、データ収集、解釈についての方法を学修し、実践応用できる能力を習得したか	疫学概論、疫学特論、修士論文作成、公開発表会、学会発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 公衆衛生学コア2：生物統計学応用能力 公衆衛生学コアである生物統計学に関する基礎知識とそれを公衆衛生活動で応用する技能	生物統計学の基本を学修し、分析計画からデータ分析法の選択と実践・解釈までの生物統計の実践応用に関する能力を習得したか	医生物統計学概論、医生物統計学特論、修士論文作成、公開発表会、学会発表
	8. 公衆衛生学コア3：保健医療政策・医療管理学応用能力公衆衛生学コアである保健医療政策・医療管理学に関する基礎知識とそれを公衆衛生活動で応用する技能	予防・医療・介護等の健康・医療に関する課題を政策学や経済学、医療管理学の手法を用いて分析し、政策提言につなげる能力を習得したか	保健医療政策学、医療管理学、修士論文作成、公開発表会、学会発表
	9. 公衆衛生学コア4：社会行動科学応用能力 公衆衛生学コアである社会行動科学に関する基礎知識とそれを公衆衛生活動で応用する技能	社会科学や行動科学の手法を学修し、健康生成のメカニズムに関する研究や、社会での介入活動に応用する技能を習得したか	健康行動科学論、修士論文作成、公開発表会、学会発表
	10. 公衆衛生学コア5：環境保健学応用能力 公衆衛生学コアである環境保健学に関する基礎知識とそれを公衆衛生活動で応用する技能	環境が人の健康に及ぼす影響について学修し、国際的枠組みで環境保健対策を計画・実行する知識と技能を習得したか	環境保健学、修士論文作成、公開発表会、学会発表

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 第 1 段階（1 年次秋学期学期末）：教務委員会・指導教員がルーブリックに基づき第 1 段階達成度審査を行い、中間個人評価を行っている主査、副査と共有する。 最終段階（2 年次秋学期末）：教務委員会・指導教員がルーブリックに基づき第 2 段階達成度審査を行い、学位論文審査を行っている主査、副査と共有する。その後、運営委員会において全委員で最終達成度審査を行う。 ディプロマ・ポリシーに掲げた知識・能力（コンピテンス）について、入学時に具体的な成果目標として、評価の観点や対応する主たる学修と共に示す。進級時に自己評価を実施し、その達成を促進する。修了時に、科目の履修状況から各コンピテンスの達成割合を計算し、発表会でのパフォーマンス、学会発表、論文投稿、TA/TF の経験、公衆衛生活動の課外実践などを加味して、総合的に評価する。
学位論文に関する評価の基準	筑波大学大学院学則に規定された要件を充足した上で、学位論文が評価項目について妥当と認められ、かつ、最終試験で合格した者に修士（公衆衛生学）を授与する。研究テーマの意義、先行研究の把握と理解、研究方法の妥当性、結論とそれに至る論理の妥当性、体裁・構成の適切さ、文献・資料の適切な引用を評価項目とする。 修士論文研究は「公衆衛生学特別演習」として複数の教員によって指導され、1 年次後半から 2 年次前半に行われる中間個人評価に合格した者について最終審査が行われる。最終審査は、公開発表会における 3 名の教務委員による研究発表審査と、論文審査員（主査 1 名、副査 2 名）による個人審査で行われる。審査結果を公衆衛生学学位プログラムの論文審査委員会と運営委員会、及び学術院運営委員会で審議して学位授与が決定される。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

公衆衛生学学位プログラムの教育課程は、基礎科目、専門科目で構成される。開設科目の中から選択して幅広く学びながら公衆衛生学の専門的知識を習得するカリキュラム編成とする。Master of Public Health（MPH）の修得に求められる国際的基準のカリキュラムにのっとり、コア学問領域を中心として必修科目が指定される。プログラムの全ての必修科目、また選択必修科目のほとんどを英語で開講し、留学生のみならず日本人学生も英語カリキュラムで学位を取得する環境を整える。また、筑波大学の TA（Teaching Assistant）や TF（Teaching Fellow）の制度を利用して、大学など教育研究機関にて将来的に教育担当となる教育能力を身につけることができる。

教育課程の編成方針	疫学、生物統計学、保健医療政策学、健康行動科学、環境保健学など、公衆衛生学のコアとなる学問についての基盤的知識については、主に筆記試験による評価を実施する。公衆衛生領域での情報収集と分析に関する能力については、主に疫学演習や生物統計解析演習を通じて、その遂行能力を筆記試験と演習レポートによって評価する。専門分野および関連分野の履修科目の達成度については、シラバスに明記された到達目標と評価基準に従って判定され、学生にフィードバックされる。修士論文については、論文審査員による中間個人評価での評価に加えて、中間発表会での教務委員によるプレゼンテーション・質疑応答能力の評価が行われ、いずれもよりよい研究にするための助言として学生にフィードバックされて、最終審査において修士（公衆衛生学）の学位にふさわしいレベルに到達するよう保証する。

学修の方法 特色的な教育	以下に標準的な履修スケジュールを示す。 1. 1 年次に、公衆衛生学特別演習（修士論文研究）以外の必修科目を中心に履修する。 2. 2 年次に、専門科目を中心に選択科目を履修する。 3. 1 年次後半には研究指導教員を含まない論文審査員（主査 1 名、副査 2 名）が選定され、学生の研究の進捗状況に応じて中間個人評価を行う。 5. 2 年次後期開始時には研究成果発表会を行い、これまでの研究成果を発表する。 6. 2 年次末には最終審査を行う。最終審査は、公開発表会における 3 名の教務委員による研究発表審査と、論文審査員による論文と学力の個人審査で行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	論理的な分析力、独創的で柔軟な着想によって積極的に公衆衛生学的課題を解決しようとする意欲を持つ人の入学を求めている。学生はカリキュラムに従って学習するのみではなく、修士論文研究やインターンシップなどを通じて、専門領域における諸問題について、包括的な視点でそれを解明し、解決できる能力を自ら修得する姿勢が求められる。
入学者選抜方針	筆記試験および口述試験を行い、入学者を選抜する。筆記試験は、英語の能力および公衆衛生に関する基礎知識の両方を評価しうる問題を作成する。口述試験は、日本語あるいは英語で行う。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	修士論文研究の中間個人評価において指導教員以外の教員が研究計画に対して助言している。学位プログラム内に学生相談担当委員を置いており、学生のメンタルヘルスに関する学生支援対応チームを構成している。
学生同士の 交流機会	新入生オリエンテーション、2 年次生ガイダンス、研究成果発表会、修士論文発表会に際して、学生同士が交流できる機会を設けている。必修科目において、全員参加のセミナー、グループプロジェクト、グループワークを行っている。同窓生との交流できる機会を設けている。
教員との交流機会	ファカルティ・ディベロップメント（FD）を学生参加型にしている。学生と教員が一堂に会する研究成果発表会や修士論文発表会において対話の機会を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

運営委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。学生による授業評価アンケートの結果を確認して改善を図っている。教育の質向上に繋がるファカルティ・ディベロップメント（FD）を行っている。

体育学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Physical Education, Health and Sport Sciences

■ 修士（体育学）
■ Master of Physical Education, Health and Sport Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

本学位プログラムは、体育・スポーツ・健康・コーチングなどをキーワードとし、人間の身体と運動、その文化や環境、さらに心身の調整に関わる諸問題に対して学際的に取り組み、世界に類を見ない規模を誇る専門分野・領域を有する教育研究機関を基盤に展開され、自立・自律して研究活動を行うに必要な能力及びその基盤となる豊かな学識を培うことで、グローバル時代のトップランナーたる高度専門職業人を、また諸科学の深化を志向する研究者としての基礎を身に付けた人材を養成する。

養成する人材像	運動文化とグローバル社会、健康増進と活力向上、身体運動のメカニズムと競技力向上など、体育・スポーツ・健康にかかわる本質論を踏まえて展開する体育学を体系的に理解し、幅広い視野と専門的な知識・技能を持って現場で生起する諸問題を解決できる高度な実践力を有する専門職業人、創造的で高度な研究能力を有する研究者としての基礎を身に付けた枢要な人材、加えて、各競技種目で国を牽引する監督・コーチなどの指導的役割に付くことが期待される人材、及び大学等の教育機関において国のコーチ教育を先導していく人材。
修了後の進路	博士後期課程進学、教員（大学、高校、中学校）、公務員（国、地方）、健康関連企業（総合職、専門職）、スポーツ関連企業（総合職、専門職）、報道・出版・メディア関連企業（スポーツジャーナリスト）、プロ選手、プロコーチ、アナリスト、トレーナー、競技団体職員など。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（体育学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	各研究方法論、各領域別演習 I･II、体育･スポーツ哲学、体育科学習指導論、トレーニング学、スポーツバイオメカニクス特講、体力学特講、健康・スポーツ科学のための統計学、中間報告会、修士論文作成、修論審査など (説明) 体育･スポーツ哲学、体育科学習指導論、トレーニング学、スポーツバイオメカニクス特講、体力学特講は、全体での必修科目ではないが、各履修モデル（系列科目）で最も履修者が多い科目であり、全体でも各学年で 100 名（8 0%）を超える履修者がいる科目を例として上げた。
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	各種インターンシップ科目、スポーツリスクマネジメント論、競技マネジメント論、学校体育経営論、以下の内容から選択（学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験）など (説明) 「以下の内容から選択」は、職業人としての実務能力を育むために適切な修学内容を含んでおり、体育学学位プログラムでは、ほぼ全員の学生が 2 つ以上は実施している。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	各種インターンシップ科目、種目別コーチング総合演習、各領域別演習Ⅰ・Ⅱ、中間報告会、修論審査、以下の内容から選択（学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験）など (説明) 「以下の内容から選択」は、体育学学位プログラムでは、ほぼ全員の学生が 2 つ以上は実施している。
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	各種インターンシップ科目、種目別コーチング総合演習、各領域別演習Ⅰ・Ⅱ、中間報告会、修論審査、以下の内容から選択（学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験）など (説明) 「以下の内容から選択」は、体育学学位プログラムでは、ほぼ全員の学生が 2 つ以上は実施している。
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	国際スポーツ政策研究など (説明) 上記の科目は、研究基礎科目に位置づけた英語で授業を行う科目で、必修ではないが本学位プログラムとして履修を推奨する科目である。
	6. 研究力：体育・スポーツ・健康・コーチング分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と技能	①研究課題を設定するための基礎的な知識を身に付けたか ②研究計画を遂行するための基礎的な技能を身に付けたか	各研究方法論、各領域別演習Ⅰ･Ⅱ、健康･スポーツ科学のための統計学、中間報告会、修士論文作成、修論審査、学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識:体育・スポーツ・健康・コーチング分野における高度な専門知識	①体育・スポーツ・健康・コーチングに関する基礎的および専門的な知識を身に付けたか	体育・スポーツ哲学、スポーツ社会学、体育科学習指導論、アダプテッド・スポーツ教育論、トレーニング学、コーチング論、スポーツバイオメカニクス特講、スポーツ栄養学特講、体力学特講、体育測定評価学特講など (説明) 上記の科目は、各履修モデル（系列科目）内で、ほぼ全員が履修する例として上げた。
	8. 実践力：体育・スポーツ・健康・コーチング分野における専門知識の実践的な運用能力	①体育・スポーツ・健康・コーチングに関する専門知識を教育現場やコーチング現場において実践的に運用できるか	各種インターンシップ科目、種目別コーチング総合演習、各領域別演習Ⅰ・Ⅱ、以下の内容から選択（学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験）など (説明) 「以下の内容から選択」は、体育学学位プログラムでは、ほぼ全員の学生が 2 つ以上は実施している。
	9. 倫理観：体育・スポーツ・健康・コーチング分野の基礎的研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理的知識と倫理観	①基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理的知識を持っているか ②高度専門職業人にふさわしい倫理観を持っているか	各研究方法論、各領域別演習Ⅰ・Ⅱ、ヘルスフィットネス橋渡し研究概論、アンチ・ドーピングなど
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 第 1 段階（1 年次 1 ～ 2 月）：教育課程委員会において、コンピテンス評価表および達成度評価表に基づき第 1 段階達成度評価を行う。 最終段階（2 年次 10 ～ 1 月）： – 教育課程委員会において、コンピテンス評価表および達成度評価表に基づき第 2 段階達成度評価を行う。 – 学位論文審査実施委員会において修士論文の審査結果の判定を行うとともに、コンピテンス評価表および達成度評価表をもとに学位を受けるために必要な知識・能力を判定する。		

学位論文に関する評価の基準	筑波大学大学院学則に規定された要件を充足した上で、学位論文が下記の評価項目について妥当と認められ、かつ、最終試験で合格と判定されること。 （審査体制） 修士論文の審査等を実施するために設置する学位論文審査委員会は、主査 1 名と 2 名以上の副査で構成する。 1. 主査は、当該学位プログラムにおける研究指導担当教員とする。 2. 主査、副査は修士以上の学位を有する者とする。ただし、副査については修士以上の学位を有していない者を例外的に 1 名まで認めることができる。 3. 副査は、学術院の構成員 2 名以上を含むものとし、必要がある場合は、当該学位プログラム教育会議が認めた学術院外の適任者を加えることができる。 4. 学術院外の適任者の数は、本学術院選出の主査及び副査の数を上回らないものとする。 （評価項目） 1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、体育学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 体育学分野の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、修士論文に相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、当該分野の修士論文に相応しい形式にまとめてあること。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学位プログラムは、体育・スポーツ・健康・コーチングなどをキーワードとした、人間の身体と運動、その文化や環境、さらに心身の調整に関わる諸問題に対して学際的に取り組む。

このため、基礎科学といわれる人文科学、社会科学、自然科学における、あるいは多くの学問分野（哲学、倫理学、歴史学、人類学、教育学、社会学、法学、経済学、経営学、心理学、物理学、工学、医学、化学、生物学、統計学）における専門知識や方法論を融合的に捉え、39 もの複合的な研究領域がある。さらに各研究領域が連携をとりながら 6 つの系列で履修モデルを提供し、体育学に関する汎用的知識・専門的知識・倫理観・研究力・実践力・指導力を養うために、専任教員を中心に全ての構成員が教育・研究指導に参画する。

また、博士後期課程、主に体育科学学位プログラム（D）、スポーツ医学学位プログラム（D）、コーチング学学位プログラム（D）などとの教育・研究指導内容における接続も図る。

教育課程の編成方針	− 本学位プログラムのディプロマ・ポリシーを担保するために、「専門科目」「専門基礎科目」「基礎科目」の 3 つの科目区分を設ける。各科目区分に対応した科目群として、「領域科目」、「系列科目、研究基礎科目」、「関連系列科目、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目」がある。 − 高度専門職業人としての専門的知識と俯瞰力・指導力を身に付けるため、また幅広い本学位プログラムの職域（人材需要）に対応するために、6 つの系列として、1）スポーツ文化・経営政策、2）健康・スポーツ教育、3）ヘルスフィットネス、4）アスレティックコンディショニング、5）コーチング、6）ナショナルリーディングコーチ養成を設ける。

教育課程の編成方針	– 「論文指導」は、39 の複合的な研究領域（体育・スポーツ哲学、体育史・スポーツ人類学、スポーツ社会学、武道学、体育・スポーツ経営学、スポーツ政策学、スポーツ産業学、体育科教育学、アダプテッド体育・スポーツ学、体育心理学、健康教育学、環境保健学、運動生理学、運動生化学、運動栄養学、体力学、健康増進学、体育測定評価学、内科系スポーツ医学、外科系スポーツ医学、スポーツバイオメカニクス、応用解剖学、コーチング論・トレーニング学、スポーツ運動学、体操コーチング論、体操競技コーチング論、陸上競技コーチング論、水泳競技コーチング論、バレーボールコーチング論、バスケットボールコーチング論、ハンドボールコーチング論、サッカーコーチング論、ラグビーコーチング論、ラケットバットスポーツコーチング論、柔道コーチング論、剣道コーチング論、弓道コーチング論、野外運動論、舞踊論）で行う。 – 領域科目により、専門的知識と研究者としての基礎力を身に付けさせる。 – 系列科目により、高度専門職業人としての専門的知識と問題解決力・指導力を身に付けさせる。 – 研究基礎科目の研究方法論により、体育学に関する各分野の基礎的素養や広い視野、倫理観、汎用的知識、基礎的研究方法などを身に付けさせる。また、大学院共通科目（特に国際性養成などの科目群）などに加え、Project-based Learning 型ディスカッション重視の演習を通して、高度専門職業人や研究者としての理解力とコミュニケーション能力ならびに国際性を身に付けさせる。 – 博士後期課程の学位プログラムとの教育・研究指導内容における円滑な接続を図るため、系列の 1）～ 3）は主に体育科学学位プログラム（D）、系列の 3）～ 4）は主にスポーツ医学学位プログラム（D）、系列の 5）～ 6）は主にコーチング学学位プログラム（D）などの教育課程を視野にいれながら各系列科目を配置する。さらに博士後期課程進学希望者には、前期課程のうちに幅広い関連知識を取得するために大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目の履修を推奨する。 – キャリアパス形成として、保健体育教員志望者には専修免許状を取得できる科目と体育センター開講の実技科目の履修を、企業・官庁などへの志望者およびコーチ志望者にはインターンシップや大学院共通科目（キャリアマネジメントなどの科目群）の履修を、ナショナルレベルのコーチ志望者には日本文化の説明やコーチングに要求される英語に特化した国際性科目の履修を推奨することで、現場のニーズに迅速にかつ的確に対応できる実践力を身に付けさせる。
学修の方法 特色的な教育	– 「専門科目」（6 ～ 8 単位）「専門基礎科目」（13 ～ 23 単位）「基礎科目」（0 ～ 6 単位）の各科目群の指定範囲から合計 30 単位以上を修得する。 – 6 つの系列から 1 つを選択し、特定の範囲の高度専門職業人に要求される知識と技能を身に付ける。 – 39 研究領域のいずれかの研究領域に所属して修士論文を作成する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	世界の平和と友好を構築し、地域社会に生きる人々の豊かな生活に貢献し、スポーツを愛し、運動文化と社会環境、体育・身体活動・スポーツにかかわる諸問題、そして身体と運動とのメカニズムを理解する能力を有し、リーダーとしてグローバルに活躍できる資質を持った人材を求める。また、各競技種目で国を牽引する監督・コーチとなり、将来各統括組織で指導的役割に付くことが期待される人材、及び大学等の教育機関において国のコーチ教育を先導していく人材を求める。

入学者選抜方針	– 推薦入試（一般・社会人特別選抜）と一般入試（一般・社会人特別選抜）を実施する。 – 推薦入試では一般・社会人特別選抜ともに書類審査と口述試験を実施する。 – 一般入試の一般では外国語、口述試験、専門科目試験を実施し、社会人特別選抜では口述試験、専門科目試験を実施する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	入学時に開催する新入生オリエンテーションにて、修士課程の修了ならびに学位取得までの２年間の学修等の過程（スケジュール）を提示する。また、4 月にキャリア形成フォーラムを開催し、本学位プログラム修了後の主要な進路先で活躍する社会人との交流の機会を供する。さらに、研究面では「学会発表支援金」制度を運用し、本学位プログラムの所属学生が演者として学会等で発表するための旅費等を支援する。なお、学生のそれぞれの研究領域の必要性に応じて、研究倫理研修会やネットワーク講習会等の各種講習会への参加を促す。
学生同士の交流機会	修士論文の中間報告会を公開で開催し、学生のプレゼンテーション能力および質疑応答能力を高めるとともに、研究領域を超えて学際的・横断的に体育・スポーツ・健康科学に関して学術的議論を行う機会を供する。また、年度末には「修士論文コンクール」を開催し、特に質の高い修士論文研究の発表および審査・表彰を行うことによって、研究への取り組み姿勢や意欲を高め、学生同士で研究の促進のために活発に議論する場を設ける。
教員との交流機会	「学生領域代表者会議（懇談会）」を開催し、本学位プログラムに所属する学生からの意見を集約しつつ、学修環境の改善に向けて教員との対話をする場を設ける。また、学術院で開催される学生の集いを通じて、専門分野を超えた教員との交流の機会を供する。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育課程委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。また、教育会議において、学生による授業評価アンケートの結果に基づきながら教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。さらに、教育の質向上に向けたファカルティ・ディベロップメント（FD）を開催し、教員の資質能力向上を図る。

スポーツ・オリンピック学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Sport and Olympic Studies

■ 修士（スポーツ・オリンピック学）
■ Master of Arts in Sport and Olympic Studies

人材養成目的 / Program Educational Objectives

これからの国際的スポーツ分野において必要とされる、高いマネジメント能力とスポーツのインテグリティ（高潔さ）を追究することができる人材養成を目的とする。国際オリンピック委員会、また国際競技連盟とも連携して今後求められるスポーツ人材の養成に当たる。

養成する人材像	– 21 世紀のスポーツ界で必要とされる先端的な知識を総合的に学び、高いマネジメント能力を活かして、社会におけるスポーツの価値を創造し、世界各地でリーダーシップを発揮できる人材 – IOC、IPC、JOC、JPC、JSC、JADA などと連携し、スポーツのインテグリティを踏まえたオリンピック・パラリンピック教育と最先端のスポーツ科学を学び、それぞれの現場に応用できるマネジメント力を習得した人材
修了後の進路	各国スポーツ庁、各国オリンピック委員会・パラリンピック委員会、IOC や IPC、国際競技連盟などのスポーツ組織や大会組織委員会、グローバルスポーツ関連企業など

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（スポーツ・オリンピック学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	研究指導科目、インターンシップ科目、修士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	研究指導科目、演習科目、インターンシップ科目、学会発表など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	研究指導科目、演習科目、インターンシップ科目、学会発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	研究指導科目、演習科目、学会での質問、セミナーでの質問など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	研究指導科目、演習科目、インターンシップ科目、国外での活動経験など
	6. オリンピック・パラリンピック学の理解：オリンピックやパラリンピックの価値とその社会的役割について理解する能力	①オリンピックやパラリンピックの歴史とそれらの価値についての理解力 ②それらの社会的役割について展開できる能力	Olympic Movement Studies、Olympic and Paralympic History、修士論文作成

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 対応する主な学修：体育・スポーツ・健康の学問におけるオリンピック学の課題や今後の活かし方を展望する能力	スポーツ諸科学におけるスポーツ・オリンピック学の位置付けについて俯瞰できる能力	Anti-Doping、Sport Technology、Biomechanics、and Exercise Physiology、修士論文作成
	8. 日本文化理解力：武道・日本文化に対する理解力と英語を基礎にしたコミュニケーション能力	①武道やマナーなど日本文化を理解し、それを各地に展開できる能力 ②英語を通して武道や日本文化を伝える事ができる能力	Budo、Japanese Culture、Cross-Cultural Communication
	9. スポーツ・オリンピック学の展開力：グローバルな俯瞰力と地域社会で生活する人々へのまなざしをもつグローカルなマネジメント力	各国におけるオリンピック教育やスポーツイベントをマネジメントする能力	Internship 、InternationalSportEvent Management、Elite Sport Coaching

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 第 1 段階（1 年次春学期）：提出された達成度評価表を基づき、教育課程委員会が評価した後、教育会議において全教員で達成度評価を行う。 第 2 段階（2 年次秋学期）：提出された達成度評価表を基づき、教育課程委員会が評価した後、教育会議において全教員で達成度評価を行う。 第 3 段階（2 年次春学期末）： 1）修士論文研究審査会において、全研究指導担当教員がルーブリックに基づき第 3 段階達成度審査を行う。 2）その後、主査および副査 2 名以上で構成される学位論文審査委員会において、ルーブリックに基づき審査を行い、教育会議において全教員で最終達成度審査を行う。 各段階に係る科目や審査会での具体的評価内容は次のとおりである。 ①研究指導科目、インターンシップ科目、修士論文作成、学会発表などを通して、知識を社会に役立てようとしているか、専門分野以外でも問題を発見することができるかについて、記述内容や発表内容の具体性に基づいて評価する。 ②研究指導科目、演習科目、インターンシップ科目、学会発表などを通して、課題に対する計画的対応、複数の視点からの問題把握とその解決に基づいて評価する。 ③研究指導科目、演習科目、インターンシップ科目、学会発表などを通して、研究等の実施に対する円滑なコミュニケーションや異分野の人に対する説明の明快さに基づいて評価する。 ④研究指導科目、演習科目、インターンシップ科目、学会での質問、セミナーでの質問などを通して、チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験、自身の研究以外のプロジェクト等の推進に対する貢献に基づいて評価する。 ⑤研究指導科目、演習科目、インターンシップ科目、海外での活動経験などを通して、国際貢献活動に対する意識や国際的な情報収集や行動に必要な語学力に基づいて評価する。 ⑥Olympic Movement Studies、Olympic and Paralympic History、修士論文作成を通して、オリンピックやパラリンピックの歴史とそれらの価値についての理解力やそれらの社会的役割に関する展開に基づいて評価する。 ⑦Anti-Doping、Sport Technology、Biomechanics、and Exercise Physiology、修士論文作成を通して、スポーツ諸科学におけるスポーツ・オリンピック学の位置づけの俯瞰の仕方に基づいて評価する。 ⑧Budo、Japanese Culture、Cross-Cultural Communication を通して、日本文化の理解とその展開や英語を通して武道や日本文化の伝達に基づいて評価する。

学位論文に関する評価の基準	＜修士論文＞ 1. 研究の内容がスポーツ・オリンピック学分野の学問的発展に寄与するものであること。 2. 研究の意義、目的が明瞭で、適切な研究方法を用いて結果を導いていること。 3. 先行研究が十分検討されていること。 4. 論文を通して執筆の表記や書き方が適切であること。 5. 研究の過程において、倫理的な問題がないこと。 〔審査方法及び審査体制〕 審査方法は論文を最終試験として口頭で発表し、それについて当学位プログラム担当 3 人が審査の基準に沿って点数で評価する。平均点 60 点以上を合格とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

体育・スポーツ学、コーチング学、健康科学の 3 領域における研究力・専門知識・倫理観とともに、オリンピック・パラリンピックムーブメントやスポーツマネジメントにおける幅広い基礎的教養、武道やスポーツ科学にわたる広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学生は 4 分野（オリンピック・パラリンピック教育、スポーツマネジメント、スポーツ医科学、ティーチング・コーチング・日本文化）の何れかに所属し、それぞれの演習を履修する。 学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力 の涵養に資するよう、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目から 1 単位を履修することを推奨する。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために 複数指導体制（必要に応じた他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や副指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 オリンピズムやスポーツの価値、日本文化などを理解し修得する専門基礎科目として 11 単位を必修として配置する。 武道・日本文化に対する理解力と英語を基礎にしたコミュニケーション能力、グローバルな俯瞰力と地域社会で生活する人々へのまなざしを持つグローカルな実践力・マネジメント力を達成するために、共通専門科目を配置し、4 週間程度のインターンシップを課す。また、外部から研究者や実務者を招いた講義や演習を通して、高度専門職業人としてのマネジメント能力やコミュニケーション力を身に付ける。国内のスポーツ組織や関連学会・研究会における積極的な参加・発表も推奨する。
学修の方法 特色的な教育	入学と同時に、学生の希望と将来の進路を考え、4 分野（オリンピック・パラリンピック教育、スポーツマネジメント、スポーツ医科学、ティーチング・コーチング・日本文化）の何れかに振り分けると同時に、指導教員も決定する。指導教員および副指導教員と相談し、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目および専門基礎科目（必修）11 単位、専門分野（演習）4 単位、専門科目（共通）8 単位、専門科目（専門分野）6 ～ 9 単位から、合計 30 単位以上を修得し、修士論文を作成する。 インターンシップ先は本人の希望に基づき、指導教員と相談の上、インターンシップ委員会にはかって決定する。

スポーツ・オリンピック学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（スポーツ・オリンピック学）
Master's Program in Sport and Olympic Studies / Master of Arts in Sport and Olympic Studies

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	次のような熱意と資質を持つ者を求める。 1. オリンピック・パラリンピックに関する基礎知識を持ち、スポーツのインテグリティを進展させることに対して意欲・使命感を持つ者 2. スポーツ・体育・健康に関連した学問に関する基礎的知識を持ち、スポーツに関わる実務経験（スポーツ実践、コーチングなど指導、イベントマネジメントなどの経験）のある者 3. オリンピック・パラリンピック教育やスポーツマネジメントに関心のある者 4. 英語によるコミュニケーション能力があり、協力して成し遂げることの大切さや公正さについて理解している者
入学者選抜方針	一般選抜のみを行う。前年 4 月に Web で募集要項を公開する。Web での出願を前年 12 月初旬から 12 月中旬までとし、志望動機や研究計画などの書類を受け付ける。1 月下旬に入試（口述試験）を行い、書類審査との総合点（400 点満点）で合否を判定する。書類審査では、志望動機、研究計画、これまでの経験などについて評価する（審査員の平均で 100 点満点）。口述試験では、志望動機、研究計画、スポーツ・オリンピック学に関する基礎的知識、英語などコミュニケーション力の合計点（審査員の合計で 300 点満点）で評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	①指導教員によるライティングサポートやプレゼンテーション指導を行っている。 ②修士論文中間報告会を通じてプレゼンテーションや質疑応答の機会を提供している。 ③外部講師との交流において、プレゼンテーション指導や助言の機会を提供している。
学生同士の交流機会	①修士論文中間報告会や修士論文最終試験の終了後に交流会を開催し、交流機会を設ける。 ②2 学年の全学生が 1 つの学生控室にて研究活動を行う環境を提供しており、学生同士の自発的な交流が可能になっている。
教員との交流機会	①外部講師を招いて実施するセミナーや SHED セミナー（Sport/Shared Educational Development Seminar）などを活用し、その場での意見交換や終了後の交流会を開催することにより、指導教員以外の教員と交流する機会を創出している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

①ファカルティ・ディベロップメント委員が企画する FD フォーラムにおいて、達成度評価結果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証し、課題の抽出や教育方法に関する情報交換などを行う。
②人間総合科学学術院等が主催する FD セミナーへの参加の呼びかけと参加により、教育方法に関する情報を取得し、自らの教育方法の改善を各授業に反映させる。

スポーツウエルネス学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Sport and Wellness Promotion

■ 修士（スポーツウエルネス学）
■ Master of Sport and Wellness Promotion

人材養成目的 / Program Educational Objectives

スポーツウエルネスの推進に携わってきた実務経験を基盤として、両者の相乗的な推進効果を生み出す理念と方法を理解し、そのための基本政策や戦略を企画・立案・分析する能力、必要な資源を査定しシステム化する能力、高度なシステムを適切にマネジメントする能力、合理的なプログラムを開発する能力等を有した実践的な高度専門職業人、地域・社会の発展や課題解決に貢献できるマネジメント人材を養成する。

養成する人材像	スポーツ団体、行政、企業等の専門家集団の中でリーダーシップを発揮しスポーツウエルネスの一層の発展に寄与する人材
修了後の進路	競技団体、国立センター、地方自治体、教員、スポーツ・ウエルネス関連企業、博士後期課程への進学等

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（スポーツウエルネス学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	スポーツウエルネス学概論、スポーツウエルネス学方法論、スポーツヘルスプロモーション研究方法論Ⅰ・Ⅱ　スポーツ・プロモーション研究方法論Ⅳ、ヘルス・プロモーション研究方法論Ⅳ、研究デザイン方法論Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ、スポーツウエルネス医科学、実践的都市データ＆医療介護データ活用論、修士論文（特定課題研究報告書）作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	スポーツシステムマネジメント論特講、スポーツシステムマネジメント論演習1、スポーツシステムマネジメント論演習2、スポーツウエルネス起業法、エビデンスベースのハイパフォーマンス支援策、スポーツ価値創造論、ウエルネスマーケティング、外部コンテスト等への参加など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	スポーツウエルネス学概論、スポーツウエルネス学方法論、スポーツヘルスプロモーション研究方法論Ⅰ・Ⅱ、スポーツシステムマネジメント論演習1、スポーツシステムマネジメント論演習2、研究デザイン演習、スポーツシステムマネジメント論実習、課題解決型実習Ⅰ・Ⅱ、スポーツウエルネスビジネスに関わる法務・会計・ファイナンス、スポーツウエルネスにおける生成AI活用法、スポーツビジネス開発論、学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	スポーツウエルネス学方法論、スポーツシステムマネジメント論演習 1、スポーツシステムマネジメント論演習 2、スポーツシステムマネジメント論実習、スポーツ価値創造論、スポーツウエルネスビジネスに関わる法務・会計・ファイナンス、スポーツビジネス開発論、学会での質問、セミナーでの質問など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	スポーツシステムマネジメント論特講、トップスポーツ論特講、健康開発プログラム論特講、コミュニティメンタルヘルス論特講、スポーツウエルネス起業法、エビデンスベースのハイパフォーマンス支援策、スポーツウエルネスにおける生成 AI 活用法、国外での活動経験、留学生との交流など
	6. 研究力：スポーツウエルネス分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①スポーツウエルネス分野に関する社会的課題について、科学的探究心、論理的思考力、俯瞰力をもって精査することができる ka ②スポーツウエルネス分野に関する社会的課題の解決に向けた適切な研究計画を立案、作成ができるか ③スポーツウエルネス分野に関する適切な修士論文を完成させ、発表することができるか	スポーツヘルスプロモーション研究方法論 I・II、スポーツ・プロモーション研究方法論IV、研究デザイン方法論 I・II・IV　スポーツシステムマネジメント論特講、スポーツシステムマネジメント論演習 1、2、研究デザイン演習、スポーツウエルネス医科学、実践的都市データ＆医療介護データ活用論、エビデンスベースのハイパフォーマンス支援策、学会発表、修士論文（特定課題研究報告書）作成 など
	7. 専門知識：スポーツウエルネス分野における高度な専門知識と運用能力	スポーツウエルネス分野における高度な専門知識を修得し、課題解決にむけた企画・開発をすることができるか	スポーツウエルネス学概論、スポーツウエルネス学方法論、スポーツシステムマネジメント論特講、スポーツシステムマネジメント論演習 1、2、課題解決型実習 I・II、スポーツウエルネスにおける生成AI 活用法､エビデンスベースのハイパフォーマンス支援策、関連領域の学会や研修会への参加など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	8. 倫理観：スポーツウエルネス分野の基礎的研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識	スポーツウエルネス分野の基礎的研究能力、倫理観、倫理的知識を修得しているか	スポーツウエルネス学概論、スポーツウエルネス学方法論、スポーツシステムマネジメント論特講、スポーツシステムマネジメント論演習 1、2、スポーツウエルネス医科学、実践的都市データ & 医療介護データ活用論、スポーツビジネス開発論、倫理講習会受講、APRIN など倫理関連の e-learning 受講など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって、以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 第 1 段階（1 年次秋学期）： 1 年次中間発表会を経て、指導教員がルーブリックに基づき第 1 段階達成度審査を行う。 最終段階（2 年次秋学期）： – 2 年次中間発表会を経て、研究指導担当教員がルーブリックに基づき第 2 段階達成度審査を行う。 – その後、主査および副査 2 名以上で構成される学位論文審査委員会においてルーブリックに基づく審査を実施し、教育会議において全教員による最終達成度審査を行う。		
学位論文に関する評価の基準	本学位プログラムでは、修士論文と特定課題研究報告書の二つを、学位論文として位置づけている。そして課程修了の学位として修士（スポーツウエルネス学）を取得することができる。 ＜修士論文＞ スポーツまたは健康に関するテーマに則した調査、実験結果の統計学的、科学的検討が行われていること、あるいは文献検討を通した論理的妥当性と内容の妥当性、ならびに理論的創造性があること。 1）研究目的の設定 2）先行研究の検討と本研究の課題と方法 3）結果と考察、あるいは研究の内容 4）結論および今後の課題 ＜特定課題研究報告書＞ スポーツまたは健康に関する特定の課題について、実践的技法を用いて課題解決や目標達成に取組み、その経緯と成果について妥当な考察がなされ、実証的創造性が認められること。 1）研究課題の設定とねらい 2）課題解決へのプロジェクト計画 3）プロジェクトの展開と評価 4）プロジェクトの成果と考察		

学位論文に関する評価の基準	（学位論文の評価基準） 1. 高度な課題解決力向上を支える研究力とマネジメント力 2. 俯瞰的な視野と柔軟な思考力 3. 様々な領域の人材とチームを組んで課題を解決する能力 4. 高度なプロジェクト推進力と解決力 5. 最先端の研究技法を駆使して、グローバルなレベルで問題解決できる能力 の 5 つの評価項目について妥当と認められること、選択した学位論文それぞれの目的・特徴に合致していることに加えて、スポーツヘルスプロモーション分野、スポーツウエルネスマネジメント分野における社会的、あるいは学術的意義の高い論文であると判断され、かつ最終試験によって合格と判定されること。 審査委員の体制：学位論文の審査等を実施するために設置する学位論文審査委員会は、主査 1 名と 2 名以上の副査で構成する。 審査方法及び項目等：学位論文、最終試験（発表及び口頭試問）により、総合的に判断する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学位プログラムはスポーツヘルスプロモーション分野とスポーツウエルネスマネジメント分野（協働大学院方式）からなる。

スポーツならびにヘルス領域の基礎的、実践的な知識や技能を身に付けるとともに、スポーツとヘルスの相乗的な推進効果を生み出す理念と方法を理解し、そのための基本政策や戦略を企画・立案・分析する能力、必要な資源を査定システム化する能力、高度なシステムを適切にマネジメントする能力、合理的なプログラムを開発する能力を身に付けるためのカリキュラムを設計している。更には、科学的探究心、論理的思考力、俯瞰力を身に着け、科学的、論理的、客観的かつ本質な課題解決法の構築力や開発力の向上を目指した科目、産官学の連携から高度な実践的能力を獲得し、地域・社会の発展や課題解決に貢献できるマネジメント能力を身に付けるための科目を通して、スポーツウエルネスに関連する高度職業人が育成できる教育課程を編成している。

教育課程の編成方針	− 知の活用力：スポーツウエルネス学概論、スポーツウエルネス学方法論、スポーツヘルスプロモーション研究方法論Ⅰ、スポーツシステムマネジメント論特講、トップスポーツ論特講などで修得する。 − マネジメント能力：スポーツシステムマネジメント論特講、スポーツシステムマネジメント論演習 1、スポーツシステムマネジメント論演習 2 などで修得する。 − コミュニケーション能力：スポーツヘルスプロモーション研究方法論Ⅰ・Ⅱ、スポーツ・プロモーション研究方法 論Ⅳ、スポーツシステムマネジメント論演習 1、スポーツシステムマネジメント論演習 2、スポーツシステムマネジメント論実習、学会発表などで修得する。 − チームワーク力：スポーツウエルネス学方法論、スポーツシステムマネジメント論演習 1、スポーツシステムマネジメント論演習 2、スポーツシステムマネジメント論実習などで修得する。 − 国際性：スポーツシステムマネジメント論特講、トップスポーツ論特講、健康開発プログラム − 論特講、コミュニティメンタルヘルス論特講などで修得する。

教育課程の編成方針	– 研究力：スポーツヘルスプロモーション研究方法論 I・II・IV、スポーツシステムマネジメント論特講、スポーツシステムマネジメント論演習 1、2 などで修得する。 – 専門知識：スポーツウエルネス学概論、スポーツウエルネス学方法論、スポーツシステムマネジメント論特講、スポーツシステムマネジメント論演習 1、2、課題解決型実習 I ・ II、エビデンスベースのハイパフォーマンス支援策、スポーツウエルネスにおける生成 AI 活用法などで修得する。 – 倫理観：スポーツウエルネス学概論、スポーツウエルネス学方法論、スポーツシステムマネジメント論特講、スポーツシステムマネジメント論演習 1、2、倫理講習会受講、APRIN など倫理関連の e-learning 受講などで修得する。 なお、学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、学術院共通専門基盤科目から 1 単位を履修することを推奨する。
学修の方法 特色的な教育	– 1 年次に、専門の基礎能力を修得するために、春学期に必修科目として、概論（2 単位）と方法論（1 単位）が設定されている。また、研究力の向上を目的として、2 年次では、研究方法論 I および II（計 2 単位、必修）が設定されている – スポーツヘルスプロモーション分野では、1-2 年次に、関連分野の基礎能力、プロモーション実践基礎能力、プレゼンテーション・コミュニケーション能力を修得するために、スポーツプロモーション領域、またはヘルスプロモーション領域のどちらかを選択し、選択した所属領域専門科目群（選択）の特講、演習、実習及び他領域の特講を中心に計 11 単位以上を履修する。また、スポーツヘルスプロモーション分野の専門科目群（関連）から 6 単位以上、研究主題に関連するスポーツウエルネスマネジメント分野の専門科目群(選択)から 2 単位以上を履修する。 – スポーツウエルネスマネジメント分野では、スポーツヘルスプロモーション分野の専門科目群、または他の学位プログラムの授業科目から 6 単位以上を履修する。また、スポーツウエルネスマネジメント分野の専門科目群（必修）を 22 単位履修する。更にウエルネスマネジメント分野の専門科目群（選択）から 2 単位以上を履修する。 – 以上計 30 単位以上取得する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	体育・スポーツの推進並びに心身の健康増進にかかわる実務実績と基礎知識を有し、これを基盤としたリカレント教育を通して研究能力を高めようとする意欲や関心を持ち、高度専門職業人として各種関連領域で活躍できる人材、企画・新規事業開発力・実践力を身に付けたい企業や団体等のマネジメント人材を求める。
入学者選抜方針	推薦入試（スポーツヘルスプロモーション分野及びスポーツウエルネスマネジメント分野）と一般入試（スポーツヘルスプロモーション分野のみ）を実施。 配点は、推薦入試（スポーツヘルスプロモーション分野及びスポーツウエルネスマネジメント分野）は書類審査 50 点、口述試験 50 点、一般入試（スポーツヘルスプロモーション分野のみ）は、書類審査 30 点、専門科目試験 30 点、口述試験 40 点でそれぞれ合計得点により選抜する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 情報処理演習室の設備充実と利用環境の改善（PC・ソフトウェアの最新化、快適な学習空間の提供） – 資料室における有料図書・学術雑誌の購入・更新の強化（学修や研究に必要な情報へのアクセス向上） – 外部研究所や企業との連携強化による学修・研究機会の拡大（共同研究・研究会の実施）
学生同士の交流機会	– スポーツウエルネス学概論でのグループワークプロジェクトの実施 – 中間発表会での全員参加による意見交換 – チームワークを重視した演習・実習科目により、協働的学習を推進
教員との交流機会	– 各演習科目での少人数制演習による直接的な指導。 – 修士論文指導や中間発表会での全専任教員からのフィードバック。 – 学位論文審査委員会による口頭試問を通じた双方向的な学問的交流。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの三つの方針に基づき、一貫性と体系性のある教育課程を設計している。
– 学位論文評価の基準を明確化し、透明性と公平性の高い評価を実施することで、教育成果の可視化と質保証を図っている。
– 学修成果について、定期的な達成度評価を実施し、その結果を教育課程の妥当性や指導方法の適切性の検証に活用している。
– 教員による個別指導体制とピア評価を組み合わせ、多面的な視点から教育の質を担保している。
– 外部機関との連携を活用し、教育内容の社会的妥当性を定期的に検証している。
– カリキュラム委員会等の組織を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に行うことで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。
– 定期的なカリキュラム見直しを行い、学生および教員からのフィードバックを反映させることで、継続的な改善サイクルを構築している。
– 倫理教育（APRIN などの e-learning や倫理講習会）の受講を必須とし、研究および教育活動の健全性を確保している。
– 年 1 回の学生アンケートを実施し、その結果を踏まえて学生懇談会を開催するとともに、改善案を提示して教育環境の向上を図っている。

芸術学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Art

■ 修士（芸術学）
■ Master of Science in Art

人材養成目的 / Program Educational Objectives

幅広い視野で造形芸術に関わる理論・実技の専門研究を行い、高度な技能と実際的な応用能力・企画力によって、今日の造形芸術の多様な展開に対応し、グローバル化した社会において指導的役割を果たすことのできる高度専門職業人および研究者を育成する。

養成する人材像	造形芸術に関する専門的な知識・技能と表現力、応用能力・企画力を基盤に、芸術ないしデザインの創造的な活動によって社会に貢献し、教育機関、行政機関、企業等において指導的役割を担う人材
修了後の進路	筑波大学大学院芸術学学位プログラム（博士後期課程）等への進学、中学・高等学校等の教員、美術館・博物館学芸員、行政機関や企業の研究者等。画家、版画家、彫刻家、書家、工芸家、陶芸家、漆芸家、造形作家、写真家、建築家、デザイナー、イラストレーター、映像作家、評論家等の造形芸術における創造的表現能力を有する高度専門職業人および研究者

芸術学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（芸術学）
Master's Program in Art / Master of Science in Art

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（芸術学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導する、研究・制作発表特別演習Ⅰ・Ⅱ、芸術学学位プログラム特別演習、芸術学学位プログラム特別研究と、基礎科目および各領域ごとの専門科目の履修、修士論文作成（特定課題研究報告書作成）、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導する、研究・制作発表特別演習Ⅰ・Ⅱ、芸術学学位プログラム特別演習、芸術学学位プログラム特別研究と、基礎科目および各領域ごとの専門科目の履修、学会発表、国内外コンクール等への参加、展覧会企画発表など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導する、研究・制作発表特別演習Ⅰ・Ⅱ、芸術学学位プログラム特別演習、芸術学学位プログラム特別研究と、基礎科目および各領域ごとの専門科目の履修、学会発表、国内外コンクール等への参加、展覧会企画発表など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導する、研究・制作発表特別演習Ⅰ・Ⅱ、芸術学学位プログラム特別演習、芸術学学位プログラム特別研究と、基礎科目および各領域ごとの専門科目の履修、TA 経験、チームでのコンクール参加、展覧会企画発表、学会等支援など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導する、研究・制作発表特別演習Ⅰ・Ⅱ、芸術学学位プログラム特別演習、芸術学学位プログラム特別研究と、基礎科目および各領域ごとの専門科目の履修、留学生との交流、TOEFL、TOEIC 等受験、国際会議発表、国際共同研究（留学生を含む）など
	6. 創造力：芸術学領域における新規で有用な研究を推進する創造的な能力	芸術ないしデザインにおける専門知識と高度な技能を持ち、それに基づく優れた研究能力・創造的表現力があるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導する、研究・制作発表特別演習Ⅰ・Ⅱ、芸術学学位プログラム特別演習、芸術学学位プログラム特別研究と、基礎科目および各領域ごとの専門科目の履修、論文執筆・学会発表、作品制作・展覧会発表など
	7. 理解力：芸術学領域の意義と役割を理解し、問題を発見し解決の重要性を判断する能力	芸術ないしデザインの意義と役割に対する深い理解力、多様な知識・経験に基づく問題発見力があるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導する、研究・制作発表特別演習Ⅰ・Ⅱ、芸術学学位プログラム特別演習、芸術学学位プログラム特別研究と、基礎科目および各領域ごとの専門科目の履修、論文執筆・学会発表、作品制作・展覧会発表など
	8. 問題解決力：芸術学領域における諸問題を適切な方法により解決する能力	①芸術ないしデザインに関する多様な知識・経験、論理的思考に基づく問題解決力があるか ②健全で高い研究倫理意識を持ち、芸術家やデザイナーなどの権利に関する倫理意識を持ち、芸術ないしデザインにおける問題を解決する能力があるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導する、研究・制作発表特別演習Ⅰ・Ⅱ、芸術学学位プログラム特別演習、芸術学学位プログラム特別研究と、基礎科目および各領域ごとの専門科目の履修、論文執筆・学会発表、作品制作・展覧会発表など
	9. 展開力：芸術文化の進展に寄与する研究発展性を見据える能力	①研究成果を積極的に発表する能力があるか ②多様な人々と協働できる能力、国際的なリーダーとして活躍できる幅広い視野と行動力があるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導する、研究・制作発表特別演習Ⅰ・Ⅱ、芸術学学位プログラム特別演習、芸術学学位プログラム特別研究と、基礎科目および各領域ごとの専門科目の履修、論文執筆・学会発表、作品制作・展覧会発表など

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「コンピテンス評価表」及び「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 【1 年次】 －「研究動向調査票」（4 月）によって研究計画及び研究準備状況を点検し、随時、学修・研究に関わる取組とその成果をもとに知識・能力の到達度について主指導教員と副指導教員による評価と指導を行う。 －「対応する主な学修」における成果（授業における試験・レポート・作品等、授業外の活動等）をもとに「評価の観点」に従って知識・能力の到達度を点検し、12 月に実施する「達成度評価 _ 中間評価」（コンピテンス評価表、達成度評価表）によって学位授与の方針に基づく知識・能力の修得状況を確認し、評価する。 【2 年次】 － 修士論文の提出（12 月）を見据えて、「修士論文計画届」（5 月）及び「修士論文題目（確定）届」（11 月）によって研究の進捗を点検し、随時、学修・研究に関わる取組とその成果をもとに知識・能力の到達度について主指導教員と副指導教員による評価と指導を行う。 －「対応する主な学修」における成果（授業における試験・レポート・作品等、授業外の活動等）をもとに「評価の観点」に従って知識・能力の到達度を点検し、12 月に実施する「達成度評価 _ 修了時評価」（コンピテンス評価表、達成度評価表）によって学位授与の方針に基づく知識・能力の修得状況を確認し、評価する。 － 学位論文審査委員会において修了研究（論文、作品及び論文、作品及び研究報告書）の審査を行うとともに、「達成度評価 _ 修了時評価」（コンピテンス評価表、達成度評価表）をもとに学位を受けるために必要な知識・能力の有無を判定する。
学位論文に関する評価の基準	学位申請論文または特定の課題についての研究成果を対象として行う。その際、以下の＜ a ＞＜ b ＞＜ c ＞のいずれかによるものとし、下記の基準に基づき行うこととする。 ＜ a ＞論文 1. 研究の意義・目的が明確に示され、方法が的確であること。 2. 結論が当該領域の進展に寄与しうるものであること。 3. 先行研究をふまえ、論旨が明瞭であること。 ＜ b ＞作品及び論文 （作品） 1. テーマ・制作意図・方法が明確で独創的であること。 2. 完成度が高く、当該領域の進展に寄与しうるものであること。 （論文） 1. 研究の意義・目的が明確に示され、方法が的確であること。 2. 結論が当該領域の進展に寄与しうるものであること。 3. 先行研究をふまえ、論旨が明瞭であること。

学位論文に関する評価の基準	＜ c ＞作品及び研究報告書 （作品） 1. テーマ・制作意図・方法が明確で独創的であること。 2. 完成度が高く、当該領域の進展に寄与しうるものであること。 （研究報告書） 1. 研究内容に作品との関連性が認められること。 2. 研究の意義・目的が明確に示され、方法が的確であること。 3. 論旨や結論に十分な妥当性があること。 〔審査体制及び審査方法〕 主査 1 名及び副査 2 名以上で構成する学位論文審査委員会を設置し、最終試験として当該研究及びその関連分野について口述試験を行い、上記項目の水準を満たしているか審査を行う。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

芸術学学位プログラムは、美術史、芸術支援、洋画、版画、日本画、彫塑、書、構成、総合造形、工芸、ビジュアルデザイン、環境デザインの 12 領域からなる。各領域の特性を活かした教育方針のもと、領域横断的で学際的な学修および研究を奨励し幅広い能力の涵養を図りつつも、専門性の高い表現力と豊かな学識を備え、博士後期課程の研究活動につながる専門的実践力を養成する。

教育課程の編成方針	－「基礎科目」により、造形芸術全般にわたる基礎的知識や論理的思考力を身に付ける。 －「専門科目」により、各領域の専門性に対応する研究能力や創造的表現力を身に付ける。 －「研究・制作発表特別演習Ⅰ・Ⅱ」により、授業や研究の成果を発表する機会を設け、プレゼンテーション力や自己の研究を客観的に分析する力を養う。 －「芸術学学位プログラム特別演習」により、修了研究につながる各専門領域における研究の遂行力を身に付ける。 －「芸術学学位プログラム特別研究」により、各専門領域に対応した修了研究の遂行力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	－ 1 年次では、「研究動向調査表」を提出し、研究内容に応じた主指導教員と副指導教員を決定する。 － 各学期途中および学期末に「作品展覧会」「作品講評会」「論文発表会」等を開催し、研究状況の確認と評価を行う。（研究・制作発表特別演習Ⅰ） － 2 年次では、修了研究に向けて、「修士論文計画届」と「修士論文題目（確定）届」を提出し、主指導教員と副指導教員による指導を行う。 － 各学期途中および学期末に「作品展覧会」「作品講評会」「論文発表会」等を開催し、研究状況の確認と評価を行う。（研究・制作発表特別演習Ⅱ）

芸術学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（芸術学）
Master's Program in Art / Master of Science in Art

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	造形芸術に関する基礎的な知識・技能と高い関心を持ち合わせ、現代社会の芸術に対する多様化し高度化した要求に応え、様々な課題の解決に向けて主体的に取り組もうとする意欲的な人材を求める。
入学者選抜方針	– 専門領域に関する試験を実施し、領域の特性に応じた思考力、表現力、構想力等を評価する。 – 専門領域に関する能力、語学力、学習意欲から総合的に判断し、合格者を決定する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 副指導教員体制により、研究指導の客観性を保ち、多様な相談に対応する体制を整えている。 – 授業時間外における自主的な学修・研究活動（論文・作品の発表、学内外プロジェクト参加等）を推奨し、自主制作・自主研究のような科目外の活動を学修成果の要素としてとらえることを学生に伝え、学生の研究意欲を高めている。
学生同士の交流機会	– 修了研究の成果（論文、作品等）を公開する「修了制作展」の開催（学外）に向けて、修了予定者及び在学生によるワーキンググループを組織し、学生の主体的な活動による企画・運営を通して学生間の協働を促している。 – 各領域（各授業）の学修・研究の成果を公開する作品展や研究発表会､学内外におけるプロジェクト等を企画し、学生間の意見交換につながる機会を設けている。
教員との交流機会	本学位プログラム主担当教員主催の研究プロジェクト等への参加によって学生と教員の交流を活性化するとともに、学外の研究者や作家等と交流する学会、美術公募団体、各種研究会への参加も促し、芸術分野における先達とのコミュニケーションによって学生個々の学修意欲を高め、研究の質の向上につなげている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

学修教育検討委員会等において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

– 教務情報や IR データにより学生の学修状況等を確認する。
– 芸術関連組織における学修・研究の課題を抽出し、各組織共催による FD 研修会を開催する。

デザイン学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Design

■ 修士（デザイン学）
■ Master of Design

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人のこころをより良い状態にする製品や環境を生み出す実践的な力を修得し、人と人のつながりを作り明るく充実したものとする社会システムの創造を目指し、豊かで建設的な地域や社会を育み維持再生するための創造力を活用できる、国際的トップリーダーの資質を持った高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	横断的・実践的かつ国際的な学修を実践し、地域や文化の壁を越えた問題解決策を提案する意欲と、成果を生み出す粘り強さを持ち、目利き力（課題抽出能力）、突破力（計画立案能力、論理的説得力）および専門力に裏付けられた任務完結力を備えた人材。
修了後の進路	デザイナー、建築家、企業などにおける企画開発者、エンタテインメント産業のデザイナー・アーティスト、デザイン理論や実践を行う研究機関の研究者、デザインコンサルタント、博士後期課程への進学等

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（デザイン学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導するデザイン学基礎論に加えて、デザイン学特別演習 1、感性情報学特講、建築計画論特講、作品制作・発表、デザインコンペなどへの応募、修士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導する研究倫理に加えてプロジェクト演習、インターンシップ、学会などにおける研究会などの運営、達成度自己点検、デザインコンペ等への応募、共同プロジェクトの運営など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	プロジェクト演習、インターンシップ、大学を開くデザインプロデュース、学会などにおける研究会などの運営、デザインコンペ等への応募、共同プロジェクトの運営など、横断的研究実践能力が必要とされる科目の履修または実践活動
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	プロジェクト演習、インターンシップ、大学を開くデザインプロデュース、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問など、研究組織運営能力が必要とされる科目の履修または実践活動
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	海外研修、感性情報学特講、建築・都市フィールドデザイン論特講など、国際性について学ぶ科目の履修または、国外での活動経験、留学生との交流、TOEFL/TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 構想・表現力：課題抽出能力（目利き力）と計画立案能力	専門的な問題の周辺にも精通し、課題抽出能力を活かして研究・制作を立案し、表現する力を身に付けたか。	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導するデザイン学基礎論学会・研究会・プロジェクト発表会等での成果を参考にする
	7. 分析力：広い視点から問題を解決する専門的問題分析力	専門分野における優れた研究を実施するための専門的問題分析力を身についたか。 広い分野から、総合的なデザイン課題を分析する能力を身につけたか。	視覚情報デザイン論特講を含む専門科目の講義科目、特別演習 1、2、学会等での発表成果を参考にする
	8. 解決力：専門力に裏付けられ、新しい解決策を生み出し、成果を社会や学術界に提案する力	インターンシップや実践的演習により問題解決力（任務完結力）・突破力（計画立案能力）を獲得したか。	当該学位プログラムの全ての学生が履修するデザイン学特別演習 1、2 に加えて、プロジェクト演習 A ～ D、およびインターンシップ、プロジェクトの外部発表 、インターンシップ先からの評価を参考にする
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 1 年次春学期に提出する研究計画届について全指導教員による研究準備状況の自己点検と審査および指導を行う。 – 1 年次の秋学期末に行う全研究指導教員による修了研究中間評価会において第 1 段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。 – 2 年次の、春学期末～秋学期前に全研究指導教員による修了研究中間評価ならびに、第 2 段階達成度審査を行い学修状況の自己点検と審査および指導を行う。 – 2 年次末に修了研究（論文または作品（プロジェクト含む））の公開発表会および主査、副査 2 名以上で構成される学位論文審査委員会による修了研究の審査を行うとともに、最終試験として最終達成度審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	学際的な視点を持ちながら、デザイン学の課題に関する分析力、応用力および複合的問題の解決能力を評価する。評価対象は以下の a. b. のいずれかによるものとし、それぞれの基準に基づき学位論文審査委員会によって論文または作品及び研究報告書を審査し、口述試験を経た上で合否を判定する。 学位論文審査委員会は主査および副査 2 名以上から構成され、口述試験により審査する。 ａ . 論文の基準 1. デザイン学に関する学際的な見識に基づく発想力や分析力、およびそれを社会に応用する能力が認められること。 2. デザインに関する専門知識と分析技術を有し、学際的な応用研究を推進する能力が認められること。 3. デザイン学の学識を基盤に、国内外の社会の現場でデザインやものづくりに応用する能力が認められること b. 作品及び研究報告書の基準 （作品） 1. 課題設定、制作方法、実現手段が明確で独創的であること。 2. 完成度が高く、当該領域の進展に寄与しうるものであること。 （研究報告書） 1. 研究内容に作品との関連性が認められること。 2. デザインに関する専門知識と分析技術を有し、学際的な制作を推進する能力が認められること。 3. デザイン学の学識を基盤に、国内外の社会の現場でデザインやものづくりに応用する能力として評価できること。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

デザイン学学位プログラムは、製品や企画、エンタテインメント、構成、建築、空間計画など、産業や社会にかかわる多様な課題をシステムとして捉えて研究・設計を遂行するために、専門的課題抽出力（目利き力）、専門分野と総合的方法論を合わせ広い視点から問題を計画立案する能力、任務完結力、論理的説得力、国際的なコミュニケーション能力と提案力を育てる。具体的には、構成学、感性科学、視覚心理学などを含むデザインの諸分野に加えて、システム情報工学、環境工学、生理学、人間工学、障害科学など、関連する分野の教員による分野横断的で実践的な学修課程を編成する。

教育課程の編成方針	– ディプロマポリシーに掲げた知識・能力に対応する主な学修を通じて学修成果を得られるように教育課程を編成する。 – 基礎科目により、デザインの基礎理論から応用・実践にわたる知識や論理的思考力を身に付ける。 – 大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目により、学際的な知識と幅広い知識を身に付ける。 – 分野横断的な専門科目により、幅広いデザインの理論とその応用を支える研究開発方法を身に付ける。 – プロジェクト演習により、デザインの実施に対応する課題抽出力、計画立案力、プレゼンテーション力を身に付ける。 – インターンシップ等により、実践的な課題抽出力、計画立案力、説得力を身に付ける。

教育課程の編成方針	− 海外研修等により、デザイン、設計、企画を成功させるための国際交渉力とネットワーク構築力を身に付ける。 − デザイン学特別演習により、総合的な計画立案力、任務完結力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 1 年次では、「研究計画届」を提出し、研究内容に応じた主指導教員と副指導教員を決定する。 − 基礎科目と隔年開講の専門科目に加えて大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目を履修する。 − プロジェクト演習およびインターンシップ、海外研修を計画的に履修し、研究を深める。 − 2 年次では、隔年開講の専門科目、デザイン学特別演習により研究指導を受ける。 − 2 年次秋学期（12 月末）に修了研究（論文または作品（プロジェクト含む）及び報告書）を提出し、審査を受けるとともに、最終達成度審査を行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	地域や文化の壁を越えた問題解決策を提案する意欲および資質のある人材、常に新しい解決策を生み出すことに挑戦し、成果を生み出す粘り強さを身に付ける意欲のある人材を求める。
入学者選抜方針	一般入試、推薦（自薦）入試、海外居住者対象特別選抜によって、デザインの表現技能に優れた者のみならずデザインに関連する多様な研究教育分野で優れた者を選抜する。 − 一般入試では、筆記試験と口述試験によって専門適性を評価し、提出書類を基に研究基盤力を評価する。 − 推薦（自薦）入試および海外居住者対象特別選抜では、書類審査と口述試験によって専門適性と研究基盤力を総合的に評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 入学時のオリエンテーション、研究計画届策定、および達成度評価の各段階において、学修成果を生み出すために必要な学びの状況を確認し、大学院共通科目・基礎的な科目などの履修機会を学生と共に検討しながら学修環境を継続的に改善し、整備する体制を整えている。 − 副指導教員体制により、研究指導の客観性と多様な相談への対応体制を整えている。 − 所属年次以外の演習や公開発表会への参加機会を供し、自身の研究体制を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。 − 著作権ワークショップ等の FD を実施し、研究を進める上で必要な知識や倫理観を高める機会を提供している。
学生同士の交流機会	− 所属年次以外の演習や公開発表会への参加機会を供し、質疑応答の場などを通じて、学年 / 組織を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みを教育課程に組み込んでいる。 − TA・チューター制度や学生プロジェクトの推進により、学生同士が学び合う機会を継続的に生み出す仕組みを創出している。 − 学術院で開催される学生の集いを通じて、専門を越えた学生同士の交流機会を供している。

教員との交流機会	– 学術院 / 学位プログラムで企画する FD について学生の参加を促し、共通の課題を認識することによる交流の向上を支援している。 – 学術院で開催される学生の集いを通じて、専門を越えた教員との交流機会を供している。 – プロジェクト演習、デザイン学特別演習等の成果発表会等に学位プログラム担当教員全員が参加し、意見交換などを通じて指導教員 / 指導以外の教員との交流機会を供している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 学位プログラムの理念、活動状況、授業・プロジェクト等の学生の活動状況等について、年度毎にまとめ、Design Discourse DPD として発行し、広報に繋げるとともに内外の指導を仰いでいる。
– 学位プログラム運営会議の中に、教務委員会（DP に関わる事項）、カリキュラム委員会（CP に関わる事項）、入試委員会（AP に関わる事項）、FD 委員会（教育力向上に関わる事項）、学生委員会（学修支援体制に関わる事項）を置き、それぞれの委員会で年度前半に過年度実績に対する点検を行い、次年度に向けての改善事項を検討する。
– 改善事項のうち、教育力向上に関わる課題、学修支援体制に関わる課題などについて FD 委員会で整理して全学 / 学術院と連携も含めて FD を立案し、教育力向上に努める。
– 運営会議において検討結果を総合的に確認し、必要な改善目標を立案したうえで点検評価報告書にとりまとめ、必要に応じてそれらを反映したスタンダードの更新計画を取りまとめ、次年度に向けた計画とする。
– 検討事項と対策をまとめ、学位プログラムの HP 等を通じて公表し、内外の指導を仰ぐ体制としている。

世界遺産学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Heritage Studies

■ 修士（世界遺産学）
■ Master of Heritage Studies

人材養成目的 / Program Educational Objectives

世界の文化遺産・自然遺産が直面する問題の所在を政治・経済・社会・自然環境など様々な側面から総合的に把握し、その保護のための課題を解決する理論・技術を習得し、世界遺産条約に基づく世界遺産はもとより、広く国内外の文化遺産・自然遺産の保護に貢献できる高度専門職業人を育成する。

養成する人材像	文化遺産・自然遺産の保護と評価のための理論、文化遺産・自然遺産の管理・修復のための技術、文化遺産・自然遺産が直面している問題の所在を総合的に把握し、国際社会が目指す目標との関係において課題を的確に設定し、解決できる能力を有し、文化・自然遺産の保護のため、一般社会の広範な領域にまたがる関係者と自在に交渉することができるコミュニケーション能力を持つ人材を育成する。
修了後の進路	博士後期課程への進学。国や地方公共団体の職員、研究員等。文化遺産保護・国際協力分野の公的機関やコンサルタント関連企業及びマスコミ各社等の職員、研究員 ほか

世界遺産学学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（世界遺産学）
Master's Program in Heritage Studies / Master of Heritage Studies

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（世界遺産学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	World Heritage and Civil Participation（世界遺産と市民参加）、国際インターンシップ、海外留学、海外学会発表など
	6. 共通知の活用力：文化・自然遺産保護に共通する知識を社会に役立てる能力	文化・自然遺産の保全に関する幅広い知識を社会に役立てようとしているか。	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
	7. 専門知の活用力：文化・自然遺産に関する高度な知識を社会に役立てる能力	文化・自然遺産の保全に関する専門的知識を社会に役立てようとしているか。	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	8. 共通技能の活用力：文化・自然遺産保護に共通する課題の解決に対応する能力	文化・自然遺産の保全のため、広い視野から問題解決に取り組むことができるか。	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
	9. 専門技能の活用力：文化・自然遺産保護の専門的課題の解決に対応する能力	文化・自然遺産の保全のため、専門的能力を活かして問題解決に取り組むことができるか。	世界遺産論、世界遺産特別演習、世界遺産特別研究、インターンシップなど
	10. 国際実践力：国際的視野を持って、文化・自然遺産の保護に取り組む意識	文化・自然遺産の保全のため、国際社会に貢献する意欲と語学力を身につけたか。	World Heritage and Civil Participation（世界遺産と市民参加）、国際インターンシップ、海外留学、海外学会発表など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「修士論文採点表」に基づく複数回にわたる段階的な評価、以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。 第一段階（1 年次秋学期）：修士論文構想会において、全教員がルーブリックに基づく採点を行う。 第二段階（2 年次秋学期）：修士論文個別審査において、主査・副査（2 名）がルーブリックに基づく採点を行う。 第三段階（2 年次秋学期末）：修士論文発表会において、全教員がルーブリックに基づく採点を行い、教育会議において全教員による最終達成度審査を行う。 加えて、開設している各科目が提供する知識や能力向上の観点を明確にし、学生が修業した科目によって得られた知識・能力の評価を基底とし、修了要件以外の履修科目の他、学会発表や学外調査、インターンシップ等の多様な社会的活動についても、それぞれの活動に応じた知識・能力の向上を考慮し、総合的に評価を行う。		

学位論文に関する評価の基準	（修士論文審査） 1. 修士論文審査専門委員会は、主査 1 名、副査 2 名により組織する。3 名のうち、主査を含む 2 名は世界遺産学学位プログラムの専任教員とする。 2. 修士論文審査専門委員会の主査・副査全員出席のもと、個別審査を非公開で行う。ただし、他の教員等の参加の必要がある場合には、主査・副査の協議により、その取り扱いを決定する。個別審査は、通常 1 回とするが、必要がある場合には、主査・副査の協議により複数回行うことができる。個別審査では、主査・副査全員の合意により合格、不合格を決定する。 3. 公開審査では、個別審査の結果を踏まえて、学位プログラム教員全員により審査を行い、合否判定は専任教員会議において決定する。病気等やむを得ない事情により、公開審査会を欠席した学生の取り扱いは、専任教員会議において協議する。 （評価基準） 1. 世界遺産学の修士論文として適切なテーマが設定されていること（問題意識・課題設定） 2. 先行研究を踏まえた論文の位置づけが明確であること（研究の位置づけ） 3. 課題にふさわしい研究方法が選択されその論拠が信頼できるものであること（研究方法、論拠の信頼性） 4. 論旨展開が十分で、全体に大きな矛盾がないこと（論文の構成） 5. 研究の実施および結果の公開において倫理的な問題がないこと（倫理） （評価項目） 1. 独創性:導入した概念や方法、発見した事実や法則のいずれかが新規であること。既知の方法の改良、異なる分野からの応用等を含むこと。 2. 萌芽性：研究の着手段階であるが、新規な発想、着想に基づく研究で今後の発展の可能性の大きなものであること。 3. 発展性：従来の定説を変え得る新事実の解明、あるいは新しい研究領域や研究体系・技術体系の開拓等の契機と成り得るものであること。 4. 有用性：技術の向上、あるいは実用上、学術上に価値のある有用な情報を提供するものであること。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

世界遺産のみならず文化財の保存・修復、文化・自然遺産の保全、遺産地域のプランニングとマネジメントに関する幅広い知識と専門的な能力を身につけるため、実践的かつ学際的な学修課程を編成する。

教育課程の編成方針	− 大学院生全員が履修すべき必修科目とそれぞれの専門技術を身につけるための選択科目に分類し、効率的な履修ができよう教育課程を編成する。 − 選択科目群については、国際遺産学、遺産の評価と保存、遺産のマネジメントとプランニングの 3 分野に分類し、大学院生の専門性に合わせてバランスよく単位を取得することができるように配慮する。

学修の方法 特色的な教育	− 1 年次では、必修科目「世界遺産論」において各々の研究計画を発表するとともに、必修科目「世界遺産特別演習」において指導教員から指導を受けつつ、1 年次末に研究計画をまとめる。 − 1 年次から 2 年次にかけて、国際遺産学、遺産の評価と保存、遺産のマネジメントとプランニングの各分野の選択科目の中から、大学院生の専門に応じた授業・演習を履修する。 − 2 年次では、必修科目「世界遺産特別研究」において指導教員から指導を受けつつ、修士研究中間発表行い、他分野の教員からの助言も受けながら、最終的に修士論文をまとめる。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	世界遺産の保護管理や活用のみならず、多様な文化の交流と継承に関する国際協力、生物多様性をはじめとする地球環境への取り組み、観光を含む地域振興の取り組みなどに対して、幅広い関心を有し、研究活動に必要な学力と資質を備える学生を求める。
入学者選抜方針	入学者の選抜は、外国語（英語）の提出スコアならびに口述試験に基づき、世界遺産学に必要な、語学力、基礎的な専門知識、研究能力を総合的に評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	専門的知識の習得と実践的な課題解決に寄与する修士論文の作成を最終的な課題とした学修を効果的に実施するために、既往文献や研究の収集や整理、論文の構造的理解と執筆方法、ヒアリングやアンケートをはじめとする調査手法、図表作成のソフトウェアの使用方法やプレゼンテーション技術、データの分析技法（統計・GIS・3D 計測等）、学術雑誌への投稿にかかる技術支援等を実施する。また、学位プログラム HP に「学生による研究業績」ページ作成して学生の研究業績を公開し、学生による論文投稿のモチベーション向上を図る。
学生同士の 交流機会	学年や研究室の垣根を超えた学生交流の機会として、各専門分野に対する集約的な学修の機会を設け、グループワークとそれに伴うピアレビューを行っている。また関連する他大学の研究室等を含む合同研究発表会や学外演習の機会を多く設け、視野と関心を広げるとともに、自身の専門性を明確にする機会とし、学習習慣やモチベーションの向上を図っている。さらに、日本人学生と留学生の交流を促進するために、グループワークやピアレビュー活動を通じて、異文化理解や協働スキルの機会を積極的に設けている。
教員との交流機会	学内での授業や研究指導に加え、多数の学外での複数日に及ぶ演習の機会を設けることで、学生の人格形成にも資する学生との交流や対話の時間を設けている。また、主指導教員だけでなく副指導教員を設定し、他ゼミへの参加も認めている。指導教員以外の教員とも相談しやすい環境を設けることで、学際的・複眼的な視点からの学修支援を行っている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育会議において、学生の学修成果の評価結果およびコンピテンスを用いて、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。修士論文の作成にあたっては、段階的な発表の機会と、他分野教員からの指導助言を含む機会を設け、評価を行うことで教育の質的向上と幅広い学問的視野の獲得ができるように設計されている。また、教員の FD 活動において、シラバスの相互点検と各科目の指導内容のバランスや包括性を確認し、カリキュラムの見直しや授業内容の更新を適宜行う。

情報学学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Informatics

■ 修士（情報学）
■ Master of Science in Informatics

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人間の活動において情報は重要な役割を果たして来たが、近年の技術の進展とともにその重要性は急激に増している。その様な状況に対応するため情報学学位プログラム（博士前期課程）では、文理融合の学際的アプローチにより情報を学術・教育・生活・文化等に活用するための専門的業務に携わる人材を養成する。

養成する人材像	人間と情報に関わる諸問題を理解し、専門知識・技術を身につけ、課題を遂行できる人材 – 最新の情報技術を駆使してデータ解析、システム開発、メディア制作を行うことができる人材 – 人間と情報の相互作用をふまえたコミュニティに最適な情報環境を提案できる人材 – 歴史と文化の多様性を理解し、知識情報資源の共有と継承を担うことができる人材
修了後の進路	博士後期課程進学者、研究者、大学教員 データサイエンティスト、IT・メディア系エンジニア、コンサルタント等の情報専門職、図書館・博物館・アーカイブズ等における専門的業務従事者

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（情報学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	データサイエンス実践、音楽と情報、知識情報分析、教育組織経営とデータ、行動経済学、文献調査法、Literature Survey、調査とデータ分析、Survey and Date Analysis、記録情報管理、情報学特別演習 A、情報学特別演習 B、情報学特別演習 C、情報学特別演習 D、情報学特別演習 E、情報学特別演習 F、学術論文の書き方など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	機械学習とパターン認識、教育組織経営とデータ、ライブラリーマネジメント、学術情報基盤、ユニバーサルサービス、研究法基礎、Research Foundation in Informatics、調査とデータ分析、Survey and Date Analysis、研究計画、業務計画、記録情報管理、情報学特別演習 A、情報学特別演習 B、情報学特別演習 C、情報学特別演習 D、情報学特別演習 E、情報学特別演習 F、文化施設の政策と実践など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	感性認知情報、教育組織経営とデータ、メディアとウェルビーイング、ユニバーサルサービス、文献調査法、Literature Survey、業務計画、コンテンツ開発、情報学特別演習 A、情報学特別演習 B、情報学特別演習 C、情報学特別演習 D、情報学特別演習 E、情報学特別演習 F、グローバル研究演習 Ia、グローバル研究演習 Ib、グローバル研究演習 IIa、グローバル研究演習 IIb、学術論文の書き方など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	ユニバーサルサービス、調査とデータ分析、Survey and Date Analysis、コンテンツ開発、情報学特別演習 A、情報学特別演習 B、情報学特別演習 C、情報学特別演習 D、情報学特別演習 E、情報学特別演習 F、TA 経験など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	知的財産と情報の安全、学術情報基盤、研究法基礎、Research Foundation in Informatics、文献調査法、Literature Survey、情報学特別演習 A、情報学特別演習 B、情報学特別演習 C、情報学特別演習 D、情報学特別演習 E、情報学特別演習 F、グローバル研究演習 Ia、グローバル研究演習 Ib、グローバル研究演習 IIa、グローバル研究演習 IIb、大学院共通科目（国際性養成科目群）、語学力養成科目、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、学術論文の書き方など
	6. 意味的研究力：適切な手法でデータを意味的に分析する能力	①研究のためのデータを入手し、意味的に分析するための手法を適切に選択できるか ②分析結果から目的に応じて合理的な解釈を得ることができるか	メディアデザイン、感性認知情報、音楽と情報、知識情報分析、デジタルヒューマニティーズ、知的財産と情報の安全、文化施設の政策と実践、情報プラクティス、教育組織経営とデータ、メディアとウェルビーイング、行動経済学、図書館メディア文化史、ライブラリーマネジメント、学術情報基盤、アーカイブズ、博物館情報メディア、情報組織化、メディア教育、研究法基礎、Research Foundation in Informatics、調査とデータ分析、Survey and Date Analysis、研究計画、記録情報管理、情報学特別演習 A、情報学特別演習 B、情報学特別演習 C、情報学特別演習 D、情報学特別演習 E、情報学特別演習 F、グローバル研究演習 Ia、グローバル研究演習 Ib、グローバル研究演習 IIa、グローバル研究演習 IIb など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 数理的研究力：適切な手法でデータを数理的に分析する能力	①研究のためのデータを入手し、数理的に分析するための手法を適切に選択できるか ②分析結果から目的に応じて合理的な解釈を得ることができるか	データサイエンス実践、機械学習とパターン認識、ビジュアライゼーション、生体生命情報、構造化データ、情報アクセス、情報プラクティス、情報推薦、ヒューマンコンピュータインタラクション、メディアとウェルビーイング、行動経済学、研究法基礎、Research Foundation in Informatics、調査とデータ分析、Survey and Date Analysis、研究計画、情報学特別演習 A、情報学特別演習 B、情報学特別演習 C、情報学特別演習 D、情報学特別演習 E、情報学特別演習 F、グローバル研究演習 Ia、グローバル研究演習 Ib、グローバル研究演習 IIa、グローバル研究演習 IIb など
	8. メディア専門知識：社会システムへの応用を意識して、新しいメディアを開発する専門知識	①メディアやネットワーク技術が社会に及ぼす影響を説明できるか ②情報デザインや社会への影響を踏まえてメディア開発できるか	データサイエンス実践、機械学習とパターン認識、メディアデザイン、ビジュアライゼーション、生体生命情報、感性認知情報、音楽と情報、情報プラクティス、ヒューマンコンピュータインタラクション、メディアとウェルビーイング、図書館メディア文化史、ライブラリーマネジメント、アーカイブズ、博物館情報メディア、メディア教育、研究法基礎、Research Foundation in Informatics、文献調査法、Literature Survey、調査とデータ分析、Survey and Date Analysis、研究計画、コンテンツ開発、文化施設の政策と実践など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	9. システム専門知識：人間と情報の相互作用を多面的に分析し、システムを設計する専門知識	①人間の情報行動を計算論的モデルとして構築できるか ②人間と情報の相互作用を踏まえた新しいサービスシステムを提案できるか	ビジュアライゼーション、構造化データ、情報アクセス、情報プラクティス、情報推薦、ヒューマンコンピュータインタラクション、デジタルヒューマニティーズ、教育組織経営とデータ、行動経済学、学術情報基盤、情報組織化、研究法基礎、Research Foundation in Informatics、文献調査法、Literature Survey、調査とデータ分析、Survey and Date Analysis、研究計画など
	10. リソース専門知識：資料をとおして歴史・文化の多様性を理解し、知識資源基盤を構築する専門知識	①歴史と文化の多様性を理解し、情報資源の将来展望を描けるか ②情報流通の諸課題を理解し、情報マネジメントや情報サービスを評価できるか	データサイエンス実践、構造化データ、情報アクセス、知識情報分析、デジタルヒューマニティーズ、知的財産と情報の安全、図書館メディア文化史、ユニバーサルサービス、ライブラリーマネジメント、学術情報基盤、アーカイブズ、博物館情報メディア、情報組織化、研究法基礎、Research Foundation in Informatics、文献調査法、Literature Survey、調査とデータ分析、Survey and Date Analysis、研究計画、業務計画、記録情報管理、文化施設の政策と実践など
	11. 情報倫理観：情報に対する倫理観と規範意識	①知的財産権に関する正確な知識を持ち、適切な判断ができるか ②情報の扱いに関して規範意識の下に行動できるか	知的財産と情報の安全、研究法基礎、Research Foundation in Informatics、業務計画、コンテンツ開発、情報学特別演習 A、情報学特別演習 B、情報学特別演習 C、情報学特別演習 D、情報学特別演習 E、情報学特別演習 F、学術論文の書き方など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「コンピテンス評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの獲得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 学生の振り返りに対し、研究指導担当教員がルーブリックに基づき達成度審査を行う。 – その後、主査、副査、審査員の 3 名で構成される学位論文審査委員会において、論文審査とともに、ルーブリックに基づきコンピテンスの獲得状況に関する直接評価を行い、運営委員会で学生のコンピテンス最終達成度審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが妥当もしくは達成されたと認められる学位申請論文を、最終試験を経た上で、修士論文として合格とする。 1. 研究テーマの意義 2. 先行研究の把握と理解 3. 研究方法の妥当性 4. 結論とそれに至る論理の妥当性 5. 体裁・構成の適切さ 6. 文献・資料の適切な引用 論文審査の方法は以下のとおりとする。 論文審査は、学位論文ごとに設置される学位論文審査委員会が論文の内容、公開による学位論文発表会、最終試験を総合的に判断して行う。 1）学位論文審査委員会は主査 1 人及び副査 2 人以上で構成する。 2）公開による発表は質疑応答を含めて 30 分程度行う。 3）最終試験は、学位論文を中心に、その関連分野について口述又は筆記により行う。ただし、公開の学位論文発表会をもって、口述試験に代えることができるものとし、必要がある場合は、更に口述試験または筆記試験を行う。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

文理融合の学際的アプローチにより情報を学術・教育・生活・文化等の人間の諸活動に活用するための専門的業務に携わる人材を養成する目的のために、ディプロマ・ポリシーに示した汎用的知識・能力と専門的知識・能力を獲得させる。汎用的知識・能力は主として大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目や必修の演習科目により、専門的知識は選択の講義科目を中心に獲得させる。また、春学期・秋学期入学者の両方を対象とする日本語と英語に対応したカリキュラムと、東京キャンパスで開講するカリキュラムを一体的に作成する。

教育課程の編成方針	– 教育課程は、大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目および、本学位プログラム独自の講義科目としてメディアサイエンス専門科目群、情報インタラクション専門科目群、図書館情報学専門科目群、演習・実習科目として方法論的基盤科目群、実践指導科目群、研究指導科目群から構成する。 – 大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目などにより知の活用力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、チームワーク力、国際性という汎用的知識・能力を身に着けさせる。 – メディアサイエンス専門科目群（講義科目）により、データの性質を読み取り、目的に適した方法を選択し、分析する能力および、情報システムや社会システムへの応用を意識したうえで、新しいメディアを開発する能力などから成るメディア専門知識を身に着けさせる。 – 情報インタラクション専門科目群（講義科目）により、人間の知情意とコンピュータの入出力の相互作用を多面的に分析する能力および、情報サービスや多彩な Web サービスを設計する能力などから成るシステム専門知識を身に着けさせる。

教育課程の編成方針	− 図書館情報学専門科目群（講義科目）により、歴史・文化に関する資料の意味を読み取り、社会への理解を養い、新たな社会を育てる能力および、図書館、文書館、博物館等の情報サービスや多彩な Web サービスを設計する能力などから成るリソース専門知識を身に着けさせる。 − 方法論的基盤科目群（演習科目）は、研究法基礎、文献調査法、調査とデータ分析から構成し、研究遂行の基礎力を身に着けさせる。実践指導科目群（演習・実習科目）は、研究計画、業務計画、コンテンツ開発、記録情報管理、MDA 関連科目から構成し、研究遂行の実践力を身に着けさせる。 − 研究指導科目群（演習科目）は、情報学特別演習から構成し、意味的研究力、数理的研究力、情報倫理観に加えてメディアの特性を活かしたデータ活用に関する理論と応用、コミュニケーションに焦点を当てた情報利用に関する理論と応用、社会基盤としての知識資源のマネジメントに関する理論と応用に関して、研究の実践によって、研究遂行力を身に着けさせる。 − 各科目はシラバスに記載している評価方法に従って評価する。
学修の方法 特色的な教育	− 専門科目群（講義科目）から 12 単位以上を修得する。 − 演習・実習科目は、方法論的基盤科目群・実践指導科目群から 6 単位以上、研究指導科目群から 4 単位修得する。原則的に、方法論的基盤科目群を 1 年次に履修することによって研究基礎力を固め、研究指導科目群を 1・2 年次に履修することによって、研究基礎力を地盤とした研究遂行力を身に着ける。 − 大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目、他学位プログラム科目、専攻の科目から 8 単位までを修得する。 − 入試区分及び教授言語にかかわらず、所定の単位を修得した場合には、修了要件に含むことができる。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	− 情報の利活用に深い関心を持ち、文理融合の学際的アプローチにより、問題の解明・解決に取り組もうとする意欲のある人材 − 情報学または周辺諸科学の基礎知識を持ち、コミュニケーション力、プレゼンテーション力、語学力を有する人材
入学者選抜方針	英語試験、口述試験及び書類審査の結果を総合的に判定する。なお、所属長の推薦を受けた学士取得見込み者に対する推薦入学試験と、社会的経験を有する者に対する社会人特別選抜では英語試験を免除する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 博士前期課程（演習科目）の方法論的基盤科目「研究法基礎」「文献調査法」「調査とデータ分析」において、学修するための基本スキルを教授している。

学生同士の交流機会	− 博士前期課程（演習科目）「研究計画」は、外部資金や奨学金への申請、研究職志望など、研究計画書を作成するにあたって具体的な動機を有する学生を対象にしている。受講生の個人個人の研究テーマを題材に、研究計画書作成の基礎を学びながら、受講生同士のピア効果を高めるために、計画書の相互評価をさせている。 − 図書館情報学図書館の春日ラーニングコモンズ（KLC）において、上級生が下級生の学修相談を行っている。 − 留学生を対象に学生チューターを割り当てている。
教員との交流機会	− 博士前期課程、博士後期課程合同で、学位プログラムへの意見交換を自由に行う「学生懇談会」を開催している。 − お互いの研究の進捗や異なる観点からのアドバイスを得ることを目的に複数の教員で集団指導を行っている。 − 月に 1 回程度、学際研究の促進を目指して開催されているランチコロキウムに学生も参加することができ、最新の研究テーマについて教員と対話する機会が設けられている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

学位プログラムとして、前年度のコンピテンスの直接評価データを参照しつつ、次年度以降の教育改善へとつなげる PDCA サイクルを構築している。具体的には、学位プログラムリーダーの下、教育課程グループ、研究指導グループ、学位審査グループを構成し、運営委員会における定期的な情報共有を通して、グループ間の連携を担保している。これにより、コンピテンス評価の結果を基点として、教育課程および研究指導の内容改善に一貫して取り組む体制が整えられている。

各グループでの審議・決定事項は、まず運営委員会において確認・調整を行い、その後、月 1 回開催される学位プログラム教育会議において全教員で共有し、議論する機会を設けている。これにより、プログラム全体として教育方針や改善点への共通理解を形成している。

さらに、これらの取組と並行して、人間総合科学学術院の FD への定期的な参加、教育課程グループが独自に設定したカテゴリーに基づくチェックリストを用いたシラバス確認の厳格な運用、授業評価結果に基づく各科目担当教員へのフィードバックを実施している。これらのプロセスを通じて、個々の教員における教育実践の質向上も継続的に図っている。

ライフイノベーション（病態機構）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation（Disease Mechanism）

■ 修士（病態機構学）
■ Master of Disease Mechanism

人材養成目的 / Program Educational Objectives

ライフイノベーション学位プログラムでは、分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度な専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いてライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、革新的医薬品・機能性食品の研究開発分野及びその保全と管理の分野でグローバルに活躍する高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	少子高齢化を迎える日本において、病態機構を解明することは急務の課題である。疾患の革新的な治療法の開発だけでなく、世界に先駆けて少子高齢化社会問題の解決策を創出することによる経済の活性化も期待されている。病態機構領域では、「研究成果の社会への還元を念頭において、生命医科学分野での革新的な知の開拓を行う優れた基礎医学研究者を目指すための博士論文研究基礎力を有する者、および幅広い知識を持って医療分野で多様に活躍する高度専門職業人」を育成する。
修了後の進路	企業や研究機関が本学位プログラム教育に携わる事により、社会が求める人材を育成することが可能となり、より即戦力をもつ人材として、本プログラム修了者の社会的需要は高まると期待される。生命医科学的知識、実験技術、研究マネジメントスキルを基盤として、「課題解決能力」を有し、難治性疾患の革新的な治療法の開発を目指す人材として、ライフサイエンス系、製薬系企業の研究者、技術者、コンサルタント、治験コーディネーター、イノベーションを創出する新業種の起業家、関連する官公庁職員として活躍する事が期待される。

ライフイノベーション（病態機構）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（病態機構学）
Master's Program in Life Science Innovation（Disease Mechanism）/ Master of Disease Mechanism

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（病態機構学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、修士論文作成
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、レギュラトリーサイエンス、達成度評価
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、T-LSI student workshop
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	レギュラトリーサイエンス、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、修士論文作成
	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野における新たな展開を切り開く能力	①ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得し、諸問題を俯瞰的に捉えることができるか ②専門分野に捕らわれずに新たな技能・知識を修得する意欲はあるか ③ライフサイエンス分野に関わる社会のニーズを理解しているか ④病態機構学に関する課題解決のために適切な研究計画を立案し、遂行することができるか	バイオインフォマティクス概論、創薬概論、食品科学概論、バイオリソース概論、ライフイノベーション修士研究、セミナーへの参加

ライフイノベーション（病態機構）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（病態機構学）
Master's Program in Life Science Innovation（Disease Mechanism）/ Master of Disease Mechanism

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：専門分野における高度な知識と運用能力	①病態機構学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した知識を課題解決に役立てることができたか	疾患の分子細胞生物学、細胞制御論、ライフイノベーション修士研究
	8. 高度英語実践力：ライフサイエンス分野において通用する実践的な英語の運用能力	①ライフサイエンス分野における諸問題に関して自身の理解や意見を英語で的確に説明できるか ②研究立案書や報告書などを英語で作成することができるか	ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、達成度評価、T-LSI student workshop、修士論文作成
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法により評価する。 － 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 － 1 年次末に達成度評価 I を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 － 2 年次に達成度評価 II および最終試験を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて審査する。		
学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施した、病態機構分野の発展に貢献する新奇な研究成果であること。学位論文が、論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査 1 名、副査 2 名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査 2 名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を 1 名以上含むものとする。専門委員会 3 名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ 1 名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会 3 名以上のうち、プログラム担当以外の者を 1 名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。その際、学位論文の内容に関する発表を論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、病態機構分野の専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。		

ライフイノベーション（病態機構）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（病態機構学）
Master's Program in Life Science Innovation（Disease Mechanism）/ Master of Disease Mechanism

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学教員だけでなく、つくばライフサイエンス推進協議会に所属する研究機関等の協働大学院教員が積極的に教育研究に参画する事により、学生は、社会の未解決課題を学修し、病態機構分野において新たな展開を切り開くことを目指し、研究活動を行う。本学位プログラムではグローバルに活躍する高度専門職業人を養成することを目的とするため、講義は全て英語で行われ、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者による講義・セミナーを編成する。分野横断的な俯瞰力を養成するために、ライフサイエンス分野に関する全般的な基本概念を学修する基礎科目を編成する。また、キャリア教育の一環として、インターンシップ科目や研究機関等の事業内容等を学修するための科目を編成する。さらに、病態機構に関する専門力を養うための専門科目を編成する。

教育課程の編成方針	− 病態機構領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム 6 領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体材料領域）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、病態機構に関する専門力を養うための講義のほかに、各自の所属する研究室において、病態機構に関する研究指導を受ける。 − 修士論文作成等により、知の活用力を身に付ける。 −「レギュラトリーサイエンス」等により、マネジメント能力を身に付ける。 −「ライフイノベーション修士研究」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 −「ライフイノベーションチーム型演習（基礎）」等により、チームワーク力を身に付ける。 −「博士前期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 − 基礎科目、「ライフイノベーション修士研究」等により、イノベーション力を身に付ける。 − 専門科目等により、専門知識を身に付ける。 − 基礎科目、専門科目等により、高度英語実践力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 指導教員の指導のもと、情報収集方法を学び、社会のニーズを理解した上で、病態機構に関する課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行し、研究成果としてまとめる。 − 得られた研究成果は T-LSI student workshop 等で発表し、その過程において英語での発表力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得するとともに、英語によるコミュニケーション能力を向上させ、専門分野に捉われない知識の運用能力を身に付ける。 − インターンシップを行うことにより、社会人としての実践力を養う。 − 専門科目を受講することにより、専門知識を身に付ける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	病態機構分野におけるイノベーションを実現する意欲、その実現に必要な専門知識および高度英語実践力を修得するに十分な素養を持つ人材を求める。

入学者選抜方針	– 書類審査により、本学位プログラムで学ぶために必要な学士レベルの知識を有しているか、研究背景・将来の展望を英語により文章で説明できる能力があるかを評価する。 – 英語能力試験および口述試験により、病態機構分野におけるイノベーションを実現するための意欲、本学位プログラムで学ぶために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士前期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価については、面談を行い、普段の研究活動をデータに基づいてフィードバックしている。
学生同士の交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学毎年、所属教員に本学位プログラムの 3 つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための意見交換を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

ライフイノベーション（創薬開発）学位プログラム（博士前期課程）
Master's Program in Life Science Innovation（Drug Discovery）

■ 修士（医科学）
■ Master of Medical Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

ライフイノベーション学位プログラムでは、分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度な専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いてライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、革新的医薬品・機能性食品の研究開発分野及びその保全と管理の分野でグローバルに活躍する高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	社会情勢に応じたアンメットメディカルニーズを解消するような革新的な医薬品が求められている。創薬開発領域では、「時代に応じた医療ニーズの動向を把握し、レギュラトリーサイエンス、有機化学、創薬化学、薬理学を通じて、薬品をデザインする能力、薬品の効果を検証する能力を修得し、革新的な医薬品の創出へ寄与できる研究者を目指すための博士論文研究基礎力を有する者および高度専門職業人」を育成する。
修了後の進路	企業や研究機関が本学位プログラム教育に携わる事により、社会が求める人材を育成することが可能となり、より即戦力をもつ人材として、本プログラム修了者の社会的需要は高まると期待される。創薬開発に関する知識、実験技術、研究マネジメントスキルを基盤として、「課題解決能力」を有し、アンメットメディカルニーズを解消する革新的な医薬品開発を目指したライフサイエンス系、製薬系企業の研究者、技術者、コンサルタント、研究コーディネーター、イノベーションを創出する新業種の起業家、関連する官公庁職員として活躍する事が期待される。

ライフイノベーション（創薬開発）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（医科学）
Master's Program in Life Science Innovation（Drug Discovery）/ Master of Medical Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（医科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、修士論文作成
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	ライフイノベーション修士研究、修士力実践プログラム、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、レギュラトリーサイエンス、達成度評価
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かりやすく伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、T-LSI student workshop
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	ライフイノベーション修士研究、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	レギュラトリーサイエンス、ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、修士論文作成
	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野における新たな展開を切り開く能力	①ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得し、諸問題を俯瞰的に捉えることができるか ②専門分野に捕らわれずに新たな技能・知識を修得する意欲はあるか ③ライフサイエンス分野に関わる社会のニーズを理解しているか ④創薬開発学に関する課題解決のために適切な研究計画を立案し、遂行することができるか	バイオインフォマティクス概論、創薬概論、食品科学概論、バイオリソース概論、ライフイノベーション修士研究、セミナーへの参加

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：専門分野における高度な知識と運用能力	①創薬開発学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した知識を課題解決に役立てることができたか	創薬化学概論、創薬トランスレーショナルサイエンス、ライフイノベーション修士研究
	8. 高度英語実践力：ライフサイエンス分野において通用する実践的な英語の運用能力	①ライフサイエンス分野における諸問題に関して自身の理解や意見を英語で的確に説明できるか ②研究立案書や報告書などを英語で作成することができるか	ライフイノベーションチーム型演習（基礎）、博士前期ライフイノベーションセミナー、達成度評価、T-LSI student workshop、修士論文作成
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法により評価する。 − 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 − 1 年次末に達成度評価 I を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 − 2 年次に達成度評価 II および最終試験を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて審査する。		
学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施した、創薬開発分野の発展に貢献する新奇な研究成果であること。学位論文が、論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査 1 名、副査 2 名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査 2 名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を 1 名以上含むものとする。専門委員会 3 名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ 1 名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会 3 名以上のうち、プログラム担当以外の者を 1 名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施 する。その際、学位論文の内容に関する発表を論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、創薬開発分野の専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。		

ライフイノベーション（創薬開発）学位プログラム（博士前期課程） ／ 修士（医科学）
Master's Program in Life Science Innovation（Drug Discovery）/ Master of Medical Science

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

本学教員だけでなく、つくばライフサイエンス推進協議会に所属する研究機関等の協働大学院教員が積極的に教育研究に参画する事により、学生は、社会の未解決課題を学修し、創薬開発分野において新たな展開を切り開くことを目指し、研究活動を行う。本学位プログラムではグローバルに活躍する高度専門職業人を養成することを目的とするため、講義は全て英語で行われ、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者による講義・セミナーを編成する。分野横断的な俯瞰力を養成するために、ライフサイエンス分野に関する全般的な基本概念を学修する基礎科目を編成する。また、キャリア教育の一環として、インターンシップ科目や研究機関等の事業内容等を学修するための科目を編成する。さらに、創薬開発に関する専門力を養うための専門科目を編成する。

教育課程の編成方針	− 創薬開発領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム 6 領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体材料領域）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、創薬開発に関する専門力を養うための講義のほかに、各自の所属する研究室において、創薬開発に関する研究指導を受ける。 − 修士論文作成等により、知の活用力を身に付ける。 −「レギュラトリーサイエンス」等により、マネジメント能力を身に付ける。 −「ライフイノベーション修士研究」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 −「ライフイノベーションチーム型演習（基礎）」等により、チームワーク力を身に付ける。 −「博士前期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 − 基礎科目、「ライフイノベーション修士研究」等により、イノベーション力を身に付ける。 − 専門科目等により、専門知識を身に付ける。 − 基礎科目、専門科目等により、高度英語実践力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 指導教員の指導のもと、情報収集方法を学び、社会のニーズを理解した上で、創薬開発に関する課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行し、研究成果としてまとめる。 − 得られた研究成果は T-LSI student workshop 等で発表し、その過程において英語での発表力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する基本的概念を幅広く修得するとともに、英語によるコミュニケーション能力を向上させ、専門分野に捉われない知識の運用能力を身に付ける。 − インターンシップを行うことにより、社会人としての実践力を養う。 − 専門科目を受講することにより、専門知識を身に付ける。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	創薬開発分野におけるイノベーションを実現する意欲、その実現に必要な専門知識および高度英語実践力を修得するに十分な素養を持つ人材を求める。

入学者選抜方針	– 書類審査により、本学位プログラムで学ぶために必要な学士レベルの知識を有しているか、研究背景・将来の展望を英語により文章で説明できる能力があるかを評価する。 – 英語能力試験および口述試験により、創薬開発分野におけるイノベーションを実現するための意欲、本学位プログラムで学ぶために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士前期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価については、面談を行い、普段の研究活動をデータに基づいてフィードバックしている。
学生同士の交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学毎年、所属教員に本学位プログラムの 3 つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための意見交換を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

教育学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Education

■ 博士（教育学）
■ Doctor of Philosophy in Education

人材養成目的 / Program Educational Objectives

社会の急激な変化のもと対応を迫られる教育の具体的課題と、地球的視野をもって解決されるべき教育の本質的課題のそれぞれについて、教育学の幅広い学問的知見を基盤として的確な研究方法をもって追究し、独創的な研究成果を国内外に向けて発信し、政策と実践の改革を国際的に先導することのできる教育学研究者ならびに高度専門職業人を養成することを目的とする。

養成する人材像	– 修了者は、国内外の教育系大学・学部・教育研究機関で教育学の教育研究に従事するとともに、各専門分野の学会活動をリードすることのできる人材である。また、国際学会や国際機関等において教育学研究の最新成果について積極的に発信し研究交流することができる人材である。 – 研究実績を生かして国内および海外における国・地方自治体・関係組織等の教育政策の策定・実施および学校教職員・教育行政・民間組織等の職能開発に対して貢献できる人材である。
修了後の進路	修了後の進路は、国内外の教育系大学・学部および教育研究機関の研究者、国際的な機関における教育学研究者、開発途上国等における国際協力の場で日本の教育経験及び教育学の知見に基づいて貢献する者、あるいは民間組織のリーダーとしての高度専門職業人等である。

教育学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（教育学）
Doctoral Program in Education / Doctor of Philosophy in Education

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（教育学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	基礎科目、専門基礎科目、専門科目、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	他研究室と共同の基礎科目、専門基礎科目、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	基礎科目、専門基礎科目、専門科目、学会発表、ポスター発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	他研究室と共同の基礎科目、専門基礎科目、大学院共通科目、TA・TF 経験、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	教育学演習、大学院共通科目（国際性養成科目群）、国際的な活動を伴う科目、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文など
	6. 研究力：教育学分野における最新の専門知識に基づいて本質的な研究課題を設定して、自立して研究計画を遂行できる能力	①教育学の先行研究を踏まえて、本質的な研究課題を設定できるか ②設定した課題にふさわしい研究方法を用い、学術的な研究成果を生み出しているか	教育学演習、各研究法、博士論文中間研究発表会、学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：教育学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①専攻する分野の教育学的専門知識に裏付けられた研究成果があるか ②関連する教育諸科学の専門知識を積極的に吸収しようとする意欲があるか	教育学演習、各研究法、投稿形式論文発表会、博士論文中間研究発表会など
	8. 倫理観：教育学分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①教育学の分野の研究者としてふさわしい倫理観と倫理的知識を有しているか ②専攻する特定分野に関する倫理観と倫理的知識を有しているか	教育学演習、各研究法、投稿形式論文発表会など
	9. 国際性：国際的な視野で教育課題を捉え、その解決策を国内外に発信できる能力	①国内外の教育課題を的確に把握し、国際的な視野で研究課題を設定できるか ②研究成果を国内外に積極的に発信しようとしているか	教育学演習、各研究法、国外の大学との交流活動、国際会議発表、英語論文など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は､学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を「達成度評価表（ルーブリック）」により確認・評価することで行う。 第 1 段階：1 年次には、投稿形式論文発表会において、主査・副査がルーブリックに基づき第 1 段階達成度審査を行う。 第 2 段階：2 年次には、博士論文中間発表会において、主査・副査がルーブリックに基づき第 2 段階達成度審査を行う。 第 3 段階：3 年次には、予備審査会において、学修状況の確認と最終達成度審査に向けた指導を行う。 最終段階：論文審査委員会において、博士学位論文の審査を行い、それと同時に最終達成度審査を行う。		
学位論文に関する評価の基準	1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、教育学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 教育学分野の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、学術論文として発表するのにふさわしい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、教育学分野の博士論文にふさわしい形式にまとめてあること。 なお、学位論文の審査を願い出ようとする者は、事前に学位プログラムにおける予備審査に合格しなければならない。論文審査委員は、3 名以上 5 名以内から構成される。審査委員のうち少なくとも 1 名は申請者が所属する学位プログラム以外の者（あるいは教員）から選出するものとする。		

教育学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（教育学）
Doctoral Program in Education / Doctor of Philosophy in Education

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

博士前期課程修了までに教育学の専門的知識を習得した上で進学してきた院生、修士学位をもって大学や小・中・高等学校等で教鞭をとりながら教育学研究に取り組んできた現職教員院生、教育行政や民間組織（企業、NPO 等）等で教育関係の業務を遂行しながら研究的関心を高めてきた社会人院生等に対して、専門分野の研究に必要な研究力量を高め、研究法を習熟させることをねらいとして教育課程を編成する。ディプロマ・ポリシーに掲げた能力の修得を系統的かつ効果的におこなうため、授業科目を「共通基礎科目」、「共通選択科目」、「専門科目」によって構成して教育課程を編成する。

教育課程の編成方針	– 「共通基礎科目」により、教育基礎学および学校教育学の全領域にわたる教育学の教養を修得し、教育学研究の発展に対する貢献意欲を身につける。 – 「共通選択科目」により、共同研究の企画・推進に必要なリーダーシップ、海外研究者と学術的討議を円滑に行うためのコミュニケーション能力、適切な文献資料を探索して読解し的確に考察することのできる能力を身につける。 – 「専門科目」では、各自の研究テーマに対応した専門分野の教員から論文指導を受けることで、専門的知識を深め、研究倫理的問題への見識を養い、専門的学会等で研究成果を発表して討議するための様々な能力を身につける。 – これらの課程履修および学外での研究活動等への参加を通じて、自立した研究者としての能力とともに、地球規模の教育課題を幅広い視野で捉え、その解決策方策を国際的視野で考察できる能力を身につける。
学修の方法 特色的な教育	1 年次は共通基礎科目を履修するとともに、各自の研究テーマに応じた研究法の履修により、専門分野の論文指導を受ける。1 年次及び 2 年次においては、個別の論文指導と併行して、共通基礎科目及び共通選択科目の履修により、教育学の教養とその研究方法についても習得する。なお、社会人特別選抜による入学者には、フィールドワーク研究の演習を設け、その学習ニーズに対応する。1 年次の秋学期からは投稿形式論文発表会において、専門分野以外の教員からの指導も受ける形で論文の作成方法を学ぶ。2 年次後期の博士論文中間発表会において博士論文の構想を発表し、3 年次において研究指導委員会のもとで複数の教員から博士論文の指導を受ける。なお、特に教科教育学の領域では教科専門と教育学の統合が求められることから、他の学術院に設置される学位プログラムで開設される科目についても積極的に履修するよう指導する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	教育の現実的問題と本質的な問題に深い関心を抱き、博士前期課程において教育学の基礎的知識並びに研究方法の基礎を習得し、明確な研究課題をもって、主体的かつ意欲的に研究する姿勢のある人材を求める。教育学の学問的知見に基づいて、幅広い視野と深い専門的知識をもって様々な教育課題を解決しようとして国内外の専門学会で活躍できる素養をもった人材を求める。
入学者選抜方針	入試委員会による管轄の下、年間 2 回（10 月期・2 月期）に分けて選抜を行う。選抜方法は、修士論文（または修士論文に代わる論文）の内容についての審査、及び本学位プログラムでの研究計画に基づく口述試験による。また、募集人員を定めて社会人特別選抜を実施する。

教育学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（教育学）
Doctoral Program in Education / Doctor of Philosophy in Education

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	副指導教員体制により、研究指導の客観性と多様な相談への対応体制を整えている。博士論文構想発表会への参加機会を供し、自身の研究体制を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。また学生を対象とした FD を開催し、学習に必要な研究倫理等について学ぶ機会を提供している。
学生同士の交流機会	研究領域ごとに学生の研究室又は学習室を設けることにより、学生の交流の機会を確保している。また、博士論文構想発表会等への参加機会を提供し、学年を超えた交流機会を促進する仕組みをとっている。研究領域を超えた読書会や情報提供の機会も推奨している。
教員との交流機会	博士論文構想発表会等に学位プログラム担当教員全員が参加し、指導教員以外の教員との交流機会を供している。また、学生と教員の懇談会を開催し、学生からの学修環境等の要望を聞くとともに、懇談会も開催している。また、学術院で開催される学生の集いを通じて、専門を越えた教員との交流機会を供している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

学位プログラムカリキュラム委員会において、ルーブリック評価を集約し、検討・分析することにより、教育課程の妥当性を確認するとともに改善の必要がある場合はその方策を教育会議において審議する。

心理学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Psychology

■ 博士（心理学）
■ Doctor of Philosophy in Psychology

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人の心と行動に関して、現代の日本と世界が直面する未解決の学術的並びに社会的課題について、心理学の観点から新たな問題を自ら設定し、その解決のために、国境・文化、学問領域、職業分野を超えて連携し、高い倫理観を持って、新たな心理学の理論、方法論、支援技術等を創出することにより、様々な対立を止揚し、日本と世界の発展に寄与する、心理学研究者並びに高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	上記の学位プログラムの人材養成目的を踏まえて、最新の心理学の方法論や知識・技能を体得し、学際的な観点も踏まえて、自ら問題の設定、知見の創出、新たな価値の創造を行い、国際的な舞台で活躍できる、自立した研究者を養成する。具体的には、民間企業、官公庁、心理臨床の現場等で、心理学の高い研究能力によって、直面する課題を創造的に解決し、広く社会に貢献ができる高度専門職業人や博士リーダー人材を養成する。
修了後の進路	国内外の大学や研究機関などの研究職、その他、民間企業の研究員やデータアナリスト、並びに、医療、教育、福祉、司法・犯罪、産業・労働領域における心理職他。

心理学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（心理学）
Doctoral Program in Psychology / Doctor of Philosophy in Psychology

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（心理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	心理学特別研究、博士論文作成、学術雑誌への論文発表、学会発表
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	心理学特別研究、心理学実験実習、心理学研究マネジメント実習、達成度自己点検
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	心理学特別研究、心理学実験実習、心理学研究マネジメント実習、学会発表、達成度自己点検
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	心理学特別研究、心理学実験実習、心理学研究マネジメント実習、TA、TF（大学院セミナー等）経験
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	心理学特別研究における論文指導、博士論文作成（先行研究レビュー並びに研究上の問題検討）に加え、心理学先端研究、大学院共通科目（国際性養成科目群）、心理基礎科学英語の履修、国際会議発表、国際雑誌への論文発表、海外研究者との共同研究

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 心理学的人間理解力と問題発見力：人の心と行動の科学的理解に基づき、未解決の心理学的問題を独自に発見できる能力	①現代社会において、人々が直面する問題について、未解決の重要な課題を発見し、心理学的観点から理解し、独自に問題設定ができるか ②独自に設定した心理学的問題について、国内並びに海外における現状や背景を、網羅的・系統的に調べて把握しているか	心理学研究マネジメント演習 1、同 2、心理学先端研究 1 、同 2、同 3 、心理学特別研究 D1、同 2 、同 3、心理統計学応用、博士論文作成、学会発表、論文投稿
	7. 心理学的問題解決力：研究倫理を遵守し、人の心と行動の問題を、心理学の方法論と理論や知見を活用して独自に解決し、現代社会に貢献できる能力	研究倫理を遵守して以下のことができるか ①人の心と行動についての未解決の重要な問題を、心理学の方法論と知識を活用しつつ、独自の解決策を、十分に構造化して立案し、実行できるか ②実行した解決策の結果や得られた知見を、客観的に観察・記録し、妥当な考察を加え、解決策や知見の評価と修正ができ、現代社会への貢献ができるか	心理学実験実習、心理学マネジメント演習、心理学先端研究、心理学特別研究 D1、同 D2、同 D3、博士論文作成、学会発表、論文投稿
	8. 心理臨床実践力：自立した心理臨床実務者として、職業倫理を遵守し、心理学の知識・方法論と心理臨床技能を活用し、心理臨床的支援を実践するとともに、同僚や後進者を支援できる能力	職業倫理を遵守して以下のことができるか ①自立した心理臨床実務者として、心理臨床的支援を実践できるか ②心理臨床的支援について、同僚や後進者に助言を与え、支援できるか	心理実験実習、心理学マネジメント演習、心理学インターンシップ、臨床心理学特講 D、臨床心理学実習 D Ⅰ 、同 D2

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	9. 心理学的情報発信力：研究倫理を遵守し、国内と海外に向けて、心理学の理論、方法論、研究知見を発信し、社会に貢献し主導する能力	研究倫理を遵守して、国内と海外に向けて、以下のことができるか ①心理学の理論、方法論、研究知見を、論文や書籍としてまとめ、発信することができるか ②心理学の理論、方法論、研究知見を人々に伝えることによって、社会に影響を与えようとしているか	心理実験実習、心理学マネジメント演習、心理学先端研究 2、同 3、心理学特別研究 D1、同 D2、同 D3、心理学英語プレゼンテーション 1 、同 2 、同 3、心理統計学応用、心理学インターンシップ、臨床心理学特講 D、臨床心理学実習 D I 、同 D2
	10. 多領域間コミュニケーション力：心理学の専門性を発揮して、他領域・多職種の専門家と議論・協働・リードできる能力	①心理学の専門家として、他領域・多職種の専門家が理解できるように伝え、話し合い、まとめることができるか ②心理学の専門家として、他領域・多職種の専門家を尊重しつつ、協力したり、リードしたりできるか	心理実験実習、心理学マネジメント演習、心理学先端研究 2、同 3、心理学特別研究 D1、同 D2、同 D3、心理統計学応用、心理学インターンシップ、臨床心理学特講 D、臨床心理学実習 D I 、同 D2
学修成果の評価に関する方針	①当該年度に行う博士論文各審査会（中間・予備）で、研究指導担当・研究指導補助担当全教員が、各学生の提出した資料、プレゼンテーション、質疑応答について、ルーブリックに従って汎用コンピテンス・専門コンピテンスの到達状況を判定する。 ②当該年度に提出された博士論文の内容と審査会でのプレゼンテーションと質疑応答を総合して、2 名の副査が汎用コンピテンス・専門コンピテンスの到達状況を判定する。また、論文公表、学会発表、競争的資金の申請・獲得、受賞等についても把握し、学修成果を示す補助的な成果指標として参考にする。		

学位論文に関する評価の基準	筑波大学大学院学則に定められた要件をすべて満たしたうえで、学位論文が以下の評価項目に照らして妥当であると認められ、かつ、最終試験において下記の2つの基準を満たしていることが確認された場合、合格と判定される。 ＜最終試験における合格基準＞ 1. 学位論文に、心理学分野における新たな学術的知見が十分に含まれていること。 2. 心理学分野において自立した研究者として研究活動を遂行するに足る高度な研究能力を有していること。 ＜評価項目＞ 1. 関連分野における国内外の研究動向および先行研究を的確に把握したうえで、当該研究の心理学分野における学術的意義や位置づけが明確に述べられていること。また、論文作成の全過程において、研究不正（捏造・改ざん・盗用）やその他の有害な研究活動を行っていないこと。 2. 心理学分野の発展に資するオリジナルな研究成果が、学術論文として公表するに相応しい水準および分量で含まれていること。 3. 研究結果に対する考察が妥当であり、結論が客観的かつ論理的な根拠に基づいて導かれていること。 4. 研究の背景・目的・方法・結果・考察・結論・引用文献等が、心理学分野における博士学位論文としてふさわしい形式と水準で適切にまとめられていること。 なお、学位論文の審査を申請する者は、事前に学位プログラムにおける予備審査に合格している必要がある。 ＜学位論文審査体制＞ 博士学位論文の審査を行うために設置される学位論文審査委員会は、主査 1 名および副査 3 名以上で構成する。副査は、心理学学位プログラム（DP）から 2 名、他の学位プログラムから 1 名を選出することを基本とする。なお、教育会議の承認があれば、学外から副査を選任することも可能とする。 ＜学位論文の評価方法＞ ①学位論文本体への評価：学位論文は査読を行った副査全員が、上記 4 つの評価項目につき、各項目のルーブリックに従って評定を行う。 ②予備審査会でのプレゼンテーションと質疑応答への評価：心理学学位プログラムの主担当・研究指導補助担当以上の教員全員が、予備審査会での発表内容、プレゼンテーションの仕方、質疑応答について、ルーブリックに従って評定する。①と②の評価を総合して博士論文全体の評価とする。

心理学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（心理学）
Doctoral Program in Psychology / Doctor of Philosophy in Psychology

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

教育課程の編成方針	心理学学位プログラム（博士後期課程）には、心理基礎科学サブプログラム、心理臨床学サブプログラムの両方に共通の共通科目を設け、さらにサブプログラムごとに、サブプログラム専門科目を設けている。共通科目の「心理学先端研究 1」、「心理学先端研究 2 」、「心理学先端研究 3」、「心理学統計応用」の履修により、主に心理学的人間理解力と問題発見力を獲得する。共通科目の実習科目である「心理学実験実習」、「心理学研究マネジメント実習 1 」、「心理学マネジメント実習 2 」は、統計演習やグループ研究を心理学類学生対象に指導する科目であり、これらの履修により、主に心理臨床的実践能力、心理学的情報発信力、多領域間コミュニケーション力を獲得する。共通科目の演習科目である「心理学特別研究 D 1 」、「心理学特別研究 D2」、「心理学特別研究 D3」は、指導教員・副指導教員による博士論文指導の演習科目で、これら科目の履修と、構想発表、中間発表、予備審査等の各審査会での発表と質疑応答により、心理学的人間理解力と問題発見力、心理学的問題解決力、心理学的情報発信力、多領域間コミュニケーション力を獲得する。以上に加え、「心理学英語プレゼンテーション 1 」、「心理学英語プレゼンテーション 2」、「心理学英語プレゼンテーション 3」等の科目を設け、特に国際学会等での英語による研究のコミュニケーション力を高める。心理基礎科学サブプログラムでは、国際学会での活動や海外のオンデマンド講座の履修を単位として認定する「心理学基礎科学英語 1 」「心理基礎科学英語 2」を設け、汎用コンピテンスの国際性を培う。また、「心理学インターンシップ」を設け、実社会で 5 つの専門コンピテンスすべてを高める。心理臨床学サブプログラム専門科目には、講義科目である「臨床心理学特講 D」の履修により心理臨床の高度な専門知識を獲得し、実習科目である「臨床心理学実習 D1」「臨床心理学実習 D2」の履修により、特に心理臨床実践力を獲得する。各科目の評価は、客観式テスト、レポート、その他の成果物、実技、実習時の行動観察等に基づいて行い、評価方法は、各科目のシラバスに記載する。
学修の方法 特色的な教育	心理学学位プログラム（博士後期課程）における学修の方法は、講義と演習と実習に大別される。講義科目には、「心理学先端研究 1 」、「心理学先端研究 2 」、「心理学先端研究 3」、「臨床心理学特講 D」等があるが、これらの科目では、担当教員による講義と質疑応答、受講生による討論を行う。演習科目には、「心理学特別研究 D1」、「心理学特別研究 D2」、「心理学特別研究 D3」、「心理学英語プレゼンテーション 1 」、「心理学英語プレゼンテーション 2 」、「心理学英語プレゼンテーション 3」等があるが、学生が主体となって話題提供、担当部分の発表、実演等と討論を行う。実習科目のうち、「心理学実験実習」、「心理学研究マネジメント実習 I 」、「心理学研究マネジメント実習 II 」は、心理学類学生対象の統計演習やグループ研究を大学院生がインストラクターとなって指導する経験を積ませる。心理臨床学サブプログラムの「臨床心理学実習 1 」、「臨床心理学実習 2 」は、主に筑波大学心理相談室、筑波大学子ども相談室、あるいは学外の施設において、教員のスーパービジョンの下で心理臨床活動を行う経験を積ませる。 心理学学位プログラムの特色あるカリキュラムは以下のとおりである。 ①「心理学インターンシップ」は、一定の基準を満たす企業等でのインターンシップ経験を単位として認定する。 ②「心理基礎科学英語 1 」、「心理基礎科学英語 2 」は、一定の基準を満たした国際学会での発表と活動、海外大学開校の講座の履修を単位として認定する。

学修の方法 特色的な教育	③汎用コンピテンスと専門コンピテンスの達成度評価は、入学時に自己評定を行い、その後２年進級時、３年進級時、予備審査時に TWINS の達成度評価支援システムにより自己確認を行う。コンピテンスの達成度は、各時点で指導教員が共有し、科目履修などの指導・助言を与える。 ④博士論文の指導は、入学後の早期に副指導教員を決定し、指導教員と副指導教員による共同指導体制で集中的な研究指導を行う。 ⑤学位プログラム全体として、構想、中間、予備の３段階の審査過程を設け、博士論文の質保障に努める。構想発表会は１年次に行い、博士論文の全体構想を審査する。中間発表会は２年次に、構想発表会合格者を対象に行い、進捗状況等を審査する。予備審査は標準的には３年次に、中間発表会合格者で、参考論文、コンピテンスの達成度、修了要件充足見込みの要件を満たす学生対象に実施し、博士論文として、内規に定める水準に達しているか審査する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	心理学学位プログラム（博士後期課程）では、心理学に関わる研究者・大学教員あるいは高度専門職業人・博士リーダー人材を目指す人材を募集する。大学院前期課程（心理学関連）を修了したばかりの者ではなく、既に社会人として、心理学に関連した専門の業務に携わっている人材も募集する。
入学者選抜方針	入学試験は一般入学試験と内部進学入学試験により選抜を行う。一般入学試験は、専門外国語（英語）ならびに口述試験により選抜を行う。専門に関する外国語能力、学位論文作成のための研究実施能力ならびにコミュニケーション力を総合的に評価する。内部進学入学試験は、心理学学位プログラム（博士前期課程）から特に優秀な学生を口述試験により選抜を行うもので、学位論文作成のための研究実施能力ならびにコミュニケーション力を総合的に評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	以下の方法により、効果的な学修支援を行っている。 ①副指導教員体制を採用することによって、学生が指導教員とは異なる観点からの指導を受けられる機会を保障する。 ②学生支援チームを、学位プログラムリーダー、正副指導教員、学生相談のスタッフから構成し、一人一人の学生にとって最適の体制で、心理的適応支援を行う。 ③キャリア支援委員を設け、学内の様々なキャリア支援企画情報の提供を行っている。
学生同士の 交流機会	以下の方法により学生のピア効果を高め、学修意欲と研究の質の向上を図っている。 ①原則として、全ての学生に院生控室に一つデスクを与えることにより、各学生の学内での居場所を提供し、前期・後期の他学生と交流しやすい学修環境を整備する。 ②1 年次には、２年生が受ける博士論文中間審査会への出席を義務づけること、全学年の学生に博士論文予備審査会・審査会への参加と見学を可能にすることにより、研究についての学生間の交流を促す。 ③学術院主催の「学生の集い」への参加を推奨し、他学位プログラムの学生との交流を促す。

教員との交流機会	以下の方法により、教員との交流機会を提供し、学修意欲と研究の質の向上を図っている。 ①博士論文の指導会・審査会に学位プログラムの全ての担当教員が参加し、各学生に質疑と助言をすることで指導教員以外の教員との研究交流の機会を提供する。 ②学生・教員懇談会を開催し、学生から心理学学位プログラムにおける教育、研究指導、心理臨床実習、学生生活について幅広く要望を聴取し、学位プログラムが改善に向けて努力する。 ③学術院主催の「学生の集い」への参加を推奨し、専門を超えた教員との交流を促す。 ④新入生歓迎会など、学生主催の親睦会に、教員も参加して交流を図る。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年度末に、学位プログラム教育成果検討会議を開催し、博士論文審査会の評価結果および学生の研究活動状況を踏まえ、サブプログラムごと・学位プログラム全体の教育成果を確認する。これらの結果を経年的に分析し、教育上の強みと改善点を把握した上で、必要な改善策を立案・実施し、教育の質保証につなげる。

障害科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Disability Sciences

■ 博士（障害科学）
■ Doctor of Philosophy in Disability Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

障害に関連する多様な課題に即した先進的研究を行うとともに、グローバルな視点に立った障害科学関連分野における先導的教育を行うことのできる研究者等を養成する。

養成する人材像	障害のある人に関連する諸問題に対して、科学的な視点から、専門的な問題解決が可能な人材。具体的には、障害に関して幅広い知識を有し問題解決に寄与することができると共に、現実場面での問題の中から研究課題を見出すことができる人材。また、その課題を解決するために、協力者とともに研究計画ならびに研究の実行を推進することが可能な人材。
修了後の進路	高等教育機関の教員あるいは独立行政法人等における研究者または研究能力を有する高度専門職業人

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（障害科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	視覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、聴覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、知的・発達・行動障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、運動障害・病弱講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、音声・言語障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害福祉学講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害原理論講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、博士論文作成、学会発表、論文投稿（下線部は選択必修科目あるいは修了要件）
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	障害科学研究実践法、博士論文作成、学会発表、論文投稿、相談活動（下線部は必修科目）
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	障害科学研究実践法、障害科学フィールドワーク・アドバンスⅠ・Ⅱ・Ⅲ、海外研究活動Ⅰ・Ⅱ、博士論文デザイン・中間・最終発表、学会発表（下線部は必修科目あるいは修了要件）
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	障害科学研究実践法、博士論文作成、TA・TF 経験、相談活動（下線部は必修科目）

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	海外研究活動Ⅰ・Ⅱ、視覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、聴覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、知的・発達・行動障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、運動障害・病弱講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、音声・言語障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害福祉学講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害原理論講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、博士論文作成、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、国際会議発表、英語論文投稿（下線部は選択必修科目）
	6. 研究発想力：障害科学に関する課題を発見し、独創的な研究を生み出す能力	①専門的な立場から障害科学に関する研究課題を見出し設定することができるか ②独創的な研究計画で障害科学に関する課題解決を図ることができるか	視覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、聴覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、知的・発達・行動障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、運動障害・病弱講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、音声・言語障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害福祉学講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害原理論講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、博士論文デザイン・中間発表（下線部は選択必修科目あるいは修了要件）
	7. 研究計画実行力：障害科学に関する先端的な研究を計画実行する能力	①障害科学に関する重要な課題に対して長期的な研究計画を立案することができるか ②立案した研究計画に基づき、かつ適宜修正を行い、障害科学に関する研究を実行することができるか	視覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、聴覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、知的・発達・行動障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、運動障害・病弱講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、音声・言語障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害福祉学講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害原理論講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、博士論文デザイン・中間・最終発表、博士論文の作成（下線部は選択必修科目あるいは修了要件）
	8. 研究発信力：障害科学に関する研究成果を学術雑誌を通じて発信する能力	①授業等で障害科学に関する自らの研究成果を発表し討論することができるか ②障害科学に関する自らの研究成果を学術雑誌等に発表しているか	海外研究活動Ⅰ・Ⅱ、視覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、聴覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、知的・発達・行動障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、運動障害・病弱講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、音声・言語障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害福祉学講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害原理論講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、博士論文中間・最終発表、学会発表、論文投稿（下線部は選択必修科目あるいは修了要件）

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	9. 障害に関する理解・伝達力：障害科学に関する高度で広範な知識をもち、他者に教える能力	①障害科学に関する専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか	障害科学研究実践法（下線部は必修科目）、博士論文作成
	10. 倫理に関する理解と態度：障害科学に関する研究や実践に必要な倫理の手続きを実行し、他者に教える能力	①研究倫理申請を終了しているか ②障害科学に関する研究に必要な倫理観と倫理的知識を習得し、分かりやすく伝えられるか	視覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、聴覚障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、知的・発達・行動障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、運動障害・病弱講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、音声・言語障害講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害福祉学講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、障害原理論講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、博士論文作成（下線部は選択必修科目）
学修成果の評価に関する方針	− 学修成果の集大成としての博士論文を重視し、博士論文の作成および博士論文デザイン・中間・最終発表会を通じて、学位授与の方針に基づく学習成果の到達度を総合的に評価する。博士論文の審査等は、主査１名、副査３名で構成される学位論文審査委員会で評価する。 − 学位論文に係る評価の基準、ならびに学位授与に掲げる知識・技能（コンピテンス）のうち、未来社会に貢献し得る新たな知の成果またはその期待を有しているか（「知の創成力」）、広い視野から研究課題を設定し、課題を解決する能力を有するか（「マネジメント能力」）、研究内容および研究成果を分かり易く論理的に伝えるとともに、質問に的確に答えられる能力を有しているか（「コミュニケーション能力」）、研究協力者含めさまざまな関係者と協力してリーダーシップを発揮して研究目標を達成できているか（「リーダーシップ力」）、研究知見を国際社会に貢献しようとする意識、国際的な情報収集や国際的成果を発信するための行動に必要な語学力を有しているか（「国際性」）、障害科学に関する独創的な研究を生み出す力を有しているか（「研究発想力」）、障害科学に関する先端的な研究計画および実行力を有しているか（「研究計画実行力」）、研究成果を学術雑誌等に発信できる能力を有するか（「研究発信力」）、障害科学に関する専門知識を分かり易く論理的に説明できる能力を有するか「障害に関する理解力」）、障害科学の倫理観、倫理的知識に基づいて適切に研究を実施できる能力を有しているか（「倫理に関する理解と態度」）、等の観点から評価する。		
学位論文に関する評価の基準	− 博士論文の評価は、提出された論文の査読と最終発表における発表内容及び口頭試問の結果により、以下の観点から総合的に行う。 1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、障害科学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 障害科学分野の発展に寄与するオリジナルな研究の成果が、学術論文とする相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が障害科学分野の博士論文に相応しい形式にまとめてあること。		

障害科学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（障害科学）
Doctoral Program in Disability Sciences / Doctor of Philosophy in Disability Sciences

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

障害科学学位プログラム（博士後期課程）においては、それぞれの専門領域を中心に障害を有する人の特性の理解およびそれに伴う困難さの克服・解消に向けての研究を自立的に遂行し、その成果を国内外に向けて発信できる研究者または研究能力を有する高度専門職業人を育成する。

教育課程の編成方針	− 専門科目（専門分野の講究）により、指導教員と 2 名の副指導教員との研究課題に関する個別・集団のディスカッション等を通じて、研究計画実行力、研究発想力、研究発信力、倫理に関する理解と態度を身につける。 − 基礎科目（障害科学研究実践法）により、障害に関する知識・研究法について、授業担当教員の指導を受けながら、障害科学類の授業補助を行うことで、障害に関する理解・伝達力を身につける。 − 基礎科目（海外研究活動）により、国際学会における研究発表や、交流協定を締結する海外の大学等の大学院生との研究交流を通じて、研究発信力を身につける。 − 研究倫理に関する研修会により、倫理に関する理解と態度を身につける。 − 博士論文に関する発表により、研究発信力を身につける。
学修の方法 特色的な教育	− 博士論文の指導においては、学位論文提出までには指導教員 1 名（研究指導担当、委員長）、副指導教員 2 名（委員）の計 3 名で構成される研究指導委員会が指導にあたる 。 − 本学位プログラムの教育課程は、博士論文作成のための科目構成となっている。専門分野毎に講究科目を配置し、大学院生は自分の専門とする分野の講究科目群（講究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）のいずれか一群を必修科目として履修する。それぞれ講究Ⅰはデザイン発表会（1 年次の 10 月）、講究Ⅱは学術論文への投稿、講究Ⅲは中間発表会（3 年次の 6 月）に臨む要件としている。 − 1 年次の春学期には、研究倫理のための研修会を授業とは別に設けており、研究倫理に対する態度と、具体的な研究倫理の審査手続きに関する研修を実施している。また、1 年次の秋学期には、障害科学研究実践法において、自分の専門分野の研究法を、授業担当教員の指導のもとで、障害科学類開設の授業科目の授業補助者として関与することで教育能力を育成する。 − また国際学会での発表や国際交流協定大学の大学院生との研究交流セミナーのための授業（海外研究活動）を通じて、研究者または研究能力を有する高度専門職業人として必要なコミュニケーション能力、国際性、研究発信力を育成する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	障害科学に関わる研究能力を備え、国内外の最先端の研究に強い関心をもち、将来、障害に関わる教育、福祉、臨床、行政、国際協力等の分野におけるグローバルな視点に立った研究者または研究能力を有する高度専門職業人をめざす人材を求める。
入学者選抜方針	− 英語能力検定試験のスコアによる評価、修士論文等の審査、研究計画に関する口頭発表および口述試験により評価を行う。 − 入学試験を通じて、入学者の英語力、障害科学に関する研究能力について審査する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 博士論文の指導では、指導教員 1 名、副指導教員 2 名の計 3 名で指導にあたり、学習スキル・時間管理・プレゼンテーション力の支援がさまざまな専門性を有する教員からの支援が行われている。 − 年に 4 回の論文発表会（6 月、10 月、11 月、2 月）を設定し、いずれの発表会ででも、個々の学生の準備状況・進度に応じて、デザイン・中間・最終発表（プログラム内予備審査）が可能なように環境を整えている。 − 標準的学修課程として 1 年生の 10 月期にデザイン発表、3 年生の 6 月期に中間発表、3 年生の 11 月期に最終発表を計画的に行うよう指導している。 − 情報収集能力、分析能力、論理的思考力等の学習スキルやライティングスキルの支援については、各障害学講究を通して、研究論文のレビュー、研究経過進捗確認、研究成果発表を通して支援が行われている。 − 例年、科学技術振興機構（JST）次世代研究者挑戦的研究プログラムの公募について、後期課程学生ならびに指導教員に周知し、申請を促している。 − 英文学術雑誌への掲載料・校閲費の一部を独自に助成し、大学院生の国際的な研究発信を支援している。
学生同士の交流機会	− 国際交流では、定期的に CIC パートナー校や部局間協定を締結しているアジア並びに北米大学との共同で学生が交流できる機会を設け、国際性の意識向上や国際的研究活動の意欲を高めている。 − 年度末に前期課程・後期課程合同の学生懇談会を実施し、学位論文作成や就職活動、その他学生生活に関する情報交換の機会を設けている。 − 後期課程修了者の講話と交流を含む内部進学希望者向けの説明会「『障害科学』と歩む自分らしいキャリア」を開催し、上級生や修了生との交流機会を作り、学位取得後の活躍のあり方について考える機会を設けている。 − 大学院進学説明会において、修了生に学位取得後のキャリアについて講話ならびに在学生とのディスカッションを実施し、修了生と受験希望者・在学生との交流活動がある − 大学院共通科目で本プログラムが開設（BHE 企画）している科目では、多様な専門性を有する大学院生がチームを組み、新事業を提案する試みがあり、社会課題の解決や学修意欲を高める交流ができている。
教員との交流機会	− 博士論文指導体制では、原則主指導教員 1 名と副指導教員 2 名による研究指導が行われており、多様な専門性を有する教員との交流機会がある。 − 教員主催の合同研究会や研究プロジェクトへの参加を通した交流から、研究意欲を高める機会となっている。 − 社会で活躍する修了生との交流会を通して、進路相談や研究キャリアの相談機会を設けている。 − RA や研究プロジェクトの研究分担者として共同研究を進める研究領域がある。 − 修了時に修了生全員に、修了後も実際に使用するアクティブなメールアドレスの提供を求める形で、同窓会ネットワークを構築している。 − 年度末に学位プログラム独自の学生アンケートならびに学生懇談会を実施し、プログラムの教育・研究指導に対する意見交換を行っている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

- 社会で活躍する修了生に本学位プログラムの外部評価委員を依頼し、修了生から学位プログラムの教育研究指導改善に関するコメントをもらい、ディスカッションをおこなっている。外部からのフィードバックを参考に、教育の質保証と改善の方向性を検討する。
- 年度末に学位プログラム独自の学生アンケートならびに学生懇談会を実施し、プログラムの教育・研究指導に対する意見交換を行い、教育活動の点検と次年度以降の教育改善に向けた取り組みを検討する。
- 前期課程修了後に高度専門職業人として、障害科学の実践現場で従事したのち、実践的課題を十分に理解した者が、後期課程に戻り、研究を再開するようなキャリアパスを継続的に検討することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

カウンセリング科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Counseling Science

■ 博士（カウンセリング科学）
■ Doctor of Philosophy in Counseling Psychology

人材養成目的 / Program Educational Objectives

カウンセリング関係の研究者、専門職業人に対して、カウンセリングの包括的基盤教育を行うとともに、国際的・学際的な研究の成果と方法論を習得し、他職種と連携して、職場や社会での諸課題について、科学的・実践的・開発的に解決し、社会に貢献する高度専門職業人や大学教員（研究者）を養成する。

養成する人材像	カウンセリング科学の分野において独創的で優れたテーマの設定を行い、適切な手法で体系だった論理構造を持つ論文を作成でき、当該学術分野において高い学術的評価が得られるとともに、その成果が社会において応用され、社会貢献に資する研究を行える人材を育成する。
修了後の進路	本プログラム在学中の人材は大学教員や研究職として教育・研究分野で活躍している人も多い。本プログラム修了後の博士人材は、大学教員や研究職として教育・研究分野に転じる人も少なくないが、大学院生としての在籍時の職場において指導的立場で活躍する人も多い。例えば、企業や学校教育関係（特別支援教育を含む）、心理関連領域、医療・保健機関、社会福祉施設・教育施設、心理専門職養成校、職業支援センターや障がい者雇用企業、官公庁・行政機関などで、高度専門職職業人としてのキャリアを展開している。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（カウンセリング科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	カウンセリング科学基礎論、カウンセリング科学演習Ⅰ～Ⅱ、カウンセリング科学特論Ⅲ、国内外学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	産業・組織心理学特論、組織メンタルヘルス特論、対人社会心理学特論、キャリア形成特論Ⅰ～Ⅱ、TA 経験など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	カウンセリング科学特別演習Ⅰ～Ⅱ、カウンセリング科学特論Ⅰ～Ⅲ、学校生活支援カウンセリング特論、家族発達援助特論、精神健康科学特論、国内外学会発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	カウンセリング科学演習Ⅱ、カウンセリング科学特論Ⅰ～Ⅱ、国外での活動経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	カウンセリング科学特論Ⅰ～Ⅲ、博士論文作成、学会発表、学術論文投稿、国際学会発表、TA 経験など
	6. 研究力：カウンセリング科学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①カウンセリング科学分野における最新の専門知識に基づき先端的な研究課題が設定できる ②カウンセリング科学分野における最新の専門知識に基づき自立して研究計画を遂行できる	カウンセリング科学基礎論、カウンセリング科学演習Ⅰ～Ⅱ、カウンセリング科学特論 Ⅰ～Ⅲ、国内外学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：カウンセリング科学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①カウンセリング科学分野における先端的かつ高度な専門知識を修得している ②カウンセリング科学分野における先端的かつ高度な運用能力を修得している	カウンセリング科学特別演習Ⅰ～Ⅲ、産業・組織心理学特論、組織メンタルヘルス特論、対人社会心理学特論、キャリア形成特論Ⅰ～Ⅱ、学校生活支援カウンセリング特論、家族発達援助特論、精神健康科学特論、学会発表、学術論文投稿、国際学会発表、TA 経験など
	8. 倫理観：カウンセリング科学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①カウンセリング科学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識を修得している ②カウンセリング科学分野の専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識を修得している	カウンセリング科学特論Ⅰ～Ⅲ、国内外学会発表、INFOSS 情報倫理など
学修成果の評価に関する方針	− 学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階ごとに学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を確認し、評価する。 − 1 年次の春学期に実施する「研究計画発表会」について、発表抄録および発表内容に基づき、主指導教員およびその他の教員による研究準備状況の自己点検と審査および指導を行う。 − 1 年次の秋学期に実施する「文献研究発表会」について、発表抄録および発表内容に基づき、主指導教員および副指導教員、その他の教員により、博士論文の理論的検討部分に関する自己点検と審査および指導を行う。加えて、指導教員が第 1 段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。 − 2 年次春学期と秋学期に行う 2 回の「研究経過報告会」について、各回の発表抄録および発表内容に基づき、主指導教員および副指導教員、その他の教員により、博士論文の実証的検討部分および総括部分に関する自己点検と審査および指導を行う。加えて年度末には、指導教員が第 2 段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。 − 3 年次春学期に行う「研究経過報告会」について、発表抄録および発表内容に基づき、主指導教員および副指導教員、その他の教員により、博士論文の理論的検討部分に関する自己点検と審査および指導を行う。 − 3 年次には、予備審査会として、主査および副査 2 名が博士論文を査読するとともに、口頭試問において審査を行う。予備審査会に合格した場合には、続いて主査および副査 3 名（うち 1 名は、学位プログラム以外に所属し、かつ、博士論文審査に足る専門性を有すると教育会議により承認された者とする）が博士論文を査読するとともに、最終審査会を実施し、口頭試問において審査を行う。加えて年度末には、指導教員が第 3 段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。		

学位論文に関する評価の基準	1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、カウンセリング科学領域における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 一貫した研究目的のもとに行われた複数の研究から構成された博士論文であること。 3. カウンセリング科学領域の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、学術論文として発表するのに相応しい量含まれていること。 4. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 5. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 6. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、カウンセリング科学の博士論文に相応しい形式にまとめてあること。なお学位論文の審査を願い出ようとする者は、事前に専攻における予備審査に合格しなければならない。 学位論文が満たすべき水準：主査・副査のいずれもが、上記の 1 ～ 6 を満たしていると判断できること 審査委員の体制：主査 1 名、副査 3 名（うち学位プログラム外委員 1 名以上を含む） 審査方法：博士論文、論文発表会、口頭試問により主査・副査が学位論文が満たすべき水準の観点から判断 審査項目：博士論文、論文発表会、口頭試問

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

現職社会人に最適化したコースワーク・リサーチワーク複合型のカリキュラム・ポリシーに基づき、学位取得に至るまでの論文作成指導や学位論文審査などを柔軟かつ有機的に関連づけた指導を行う。

教育課程の編成方針	発達心理学、社会心理学、臨床心理学、産業・組織心理学、教育心理学、犯罪心理学等における研究力・専門知識・倫理観とともに、カウンセリング科学領域における幅広い基礎的素養、広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。 具体的には、原則として通算 3 年以上在籍する。カウンセリング科学の概念的理解と学問的基礎を構築 する各コースの必修科目 6 単位の履修と研究課題に即した選択性に富む選択科目 4 単位以上を履修する。 指導教員および副指導教員が指定する科目を選択科目から 4 単位以上を履修し、博士論文作成のために必要な研究指導を受け、研究を実施する。博士論文の予備審査および最終試験に合格する。博士論文審査においては、科学的論理性のみではなく、実践に即した課題設定や現場における有用性・有効性・新規性などを積極的に評価するものとする。学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、学術院共通専門基盤科目から 1 単位を履修することを推奨する。なお、最終試験に合格した者には、「博士（カウンセリング科学)」の学位が授与される。
学修の方法 特色的な教育	1 年次に研究計画発表会、博士論文作成に必要な文献研究発表会および文献リストの提出、2 年次に経過報告会、中間発表会、3 年次に経過報告会を行う。あわせて、原則として各指導教員のゼミに参加するとともに、各報告会後には副指導教員の指導を仰ぐこととする。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	本プログラムでは、現職社会人の立場と経験を活かしつつ、カウンセリング科学に関わる実践的課題について、カウンセリング科学の技術を駆使して主体的かつ意欲的に研究的探求を行うことができる人材を育成することを目的としている。特に、企業や学校教育関係（特別支援教育を含む）、心理関連領域、医療・保健機関、福祉施設・相談施設、心理専門職養成校、職業支援センターや障がい者雇用企業、官公庁・行政機関などでの職務経験を有し、新しい研究創出と、実践臨床に高い関心を有する者が望ましい。
入学者選抜方針	原則として入学までに概ね 2 年以上の有職経験を有することを条件に、入学候補者の選抜は、外国語試験、口述試験及びその他の出願書類の審査結果を総合的に判定して行う。11 月に行われる入試について、入試情報を 5 月に公開し、募集は 10 月上旬を締め切りとする。合格者は 12 月上旬に発表する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 所属年次以外の発表会への参加機会を供し、自身の研究体制を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。 − 指導教員を中心に全教員が、社会人大学院生固有の相談内容（仕事と学業の両立、子育て・介護等の家庭状況）について、個々に相談できる体制をとる。 − 社会人大学院生が、勤務と学習・研究活動の両立ができるように、データ解析室、大学院生研究室の環境を整える。 − 社会人大学院生にとって勤務に支障が生じないよう、集中講義に関しては原則的に土日に実施している。 − 論文投稿をはじめとする研究成果の総括の仕方や、修了後のキャリア形成の具体例などについて、他学位プログラムも交えて幅広い視点から紹介する FD プログラムを定期的に開催している（年 2 回）。 − 社会人大学院生にとって、学生単独での学習が困難であると考えられる各種研究方法の知識・スキルの習得に関しては、教員とは別に専属の指導員を設け、スムーズな修得が可能となるようなサポート体制を整えている。
学生同士の交流機会	− 所属年次以外の発表会への参加機会を提供し、学年を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みを教育課程に組み込んでいる。 − 上記の FD プログラムの際に、相互に質疑応答ができる場を用意し、交流機会を創発する仕組みを設けている。
教員との交流機会	− 毎回の発表会において、学位プログラム担当教員全員が参加しており、意見交換などの機会を確保し、指導教員以外の教員との交流機会も提供している。 − 加えて、発表会後にも、副指導教員を中心に、全教員が、発表会後の事後指導に関与し、学生自身がスムーズに学習・研究活動を継続できるような機会を確保している。 − 毎年学生教員懇談会を開催し、学生からの意見を積極的に取り入れている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

- 学生の修学状況を運営会議で確認し、必要に応じて改善策を検討する。
- 運営会議において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
- 組織的な教育課題に関しては、学位プログラム担当教員全員が参加する FD において議論する。

リハビリテーション科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Rehabilitation Science

■ 博士（リハビリテーション科学）
■ Doctor of Philosophy in Rehabilitation Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

リハビリテーション関係の研究者、専門職業人に対して、リハビリテーションの包括的基盤教育を行うとともに、国際的・学際的な研究の成果と方法論を習得し、他職種と連携して、職場や社会での諸課題について、科学的・実践的・開発的に解決し、社会に貢献する学際的な高度専門職業人や大学教員（研究者）を養成する。

養成する人材像	現職社会人が職場において遭遇し、かつ早急にその解決が求められている諸問題について、広い視野での対応と発展に必要な、総合的・包括的リハビリテーションに関する総合的な能力を有する人材を養成する。とくに、総合的・包括的リハビリテーション領域の中でも現場的課題の科学的解決に関わる実践的な研究能力・開発能力の高い高度専門職業人や大学教員などを養成する。
修了後の進路	本プログラム在学中の人材は大学教員や研究職として教育・研究分野で活躍している人も多い。本プログラム修了後の博士人材は、大学教員や研究職として教育・研究分野に転じる人も少なくないが、職場において指導的立場で活躍する人も多い。医療・保健機関、社会福祉施設、学校教育関係などで、高度専門職職業人として活躍することが期待できる。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（リハビリテーション科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	リハビリテーション科学基礎論、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	リハビリテーション科学演習 I、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	リハビリテーション科学特論 I、学会発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①研究的に魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	リハビリテーション科学基礎論、職業リハビリテーション特論、TA（大学院セミナー等）経験、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	リハビリテーション科学演習 II、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文など
	6. 研究力：リハビリテーション分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①リハビリテーションに関する先端的な研究課題を設定し、その計画を他者に適切に伝えることができるか ②リハビリテーションに関する先端的な研究成果を、国内外の専門誌に掲載することができるか ③リハビリテーションに関する先端的な博士論文を完成させ、その成果を適切に発表することができるか	リハビリテーション科学特論 I、国内外の専門領域での論文発表、博士論文作成など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知識：リハビリテーション分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	リハビリテーションに関する先端的高度な専門的知識を習得し、自らも発信できる能力を得られるか	リハビリテーション科学特別演習 I、各専門的な学会が開催する研究会への参加や研修会での講師など
	8. 倫理観：リハビリテーション分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	リハビリテーションに関する高度な研究能力、倫理観および深い倫理的知識を得られているか	リハビリテーション科学基礎論、APRIN など関連する内容の e-learning の受講など
学修成果の評価に関する方針	− 学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階ごとに学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を確認し、評価する。 − 1 年次の春学期に実施する「研究計画発表会」について、発表抄録および発表内容に基づき、主指導教員およびその他の教員による研究準備状況の自己点検と審査および指導を行う。 − 1 年次の秋学期に実施する「文献研究発表会」について、発表抄録および発表内容に基づき、主指導教員および副指導教員、その他の教員により、博士論文の理論的検討部分に関する自己点検と審査および指導を行う。加えて、指導教員が第 1 段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。 − 2 年次春学期と秋学期に行う 2 回の「研究経過報告会」について、各回の発表抄録および発表内容に基づき、主指導教員および副指導教員、その他の教員により、博士論文の実証的検討部分および総括部分に関する自己点検と審査および指導を行う。加えて年度末には、指導教員が第 2 段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。 − 3 年次春学期に行う「研究経過報告会」について、発表抄録および発表内容に基づき、主指導教員および副指導教員、その他の教員により、博士論文の理論的検討部分に関する自己点検と審査および指導を行う。 − 3 年次には、予備審査会として、主査および副査 2 名が博士論文を査読するとともに、口頭試問において審査を行う。予備審査会に合格した場合には、続いて主査および副査 3 名（うち 1 名は、学位プログラム以外に所属し、かつ、博士論文審査に足る専門性を有すると教育会議により承認された者とする）が博士論文を査読するとともに、最終審査会を実施し、口頭試問において審査を行う。加えて年度末には、指導教員が第 3 段階達成度審査を行い、学修状況の自己点検と審査および指導を行う。		

学位論文に関する評価の基準	1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、リハビリテーション科学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. リハビリテーション科学分野の国内外の発展に寄与するオリジナルな研究成果が学術論文として発表するのに相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な証拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等がリハビリテーション科学分野の博士論文に相応しい形式でまとめてあること。 学位論文が満たすべき水準：主指導・副指導教員のいずれもが、上記の 1 ～ 5 を満たしていると判断できること審査委員の体制：主指導 1 名、副指導 3 名 審査方法：博士論文、論文発表会、口頭試問により主指導・副指導教員が総合的に判断審査項目：：博士論文、論文発表会、口頭試問

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

リハビリテーションの 4 分野（医学的リハビリテーション、特別支援教育、社会リハビリテーション、職業リハビリテーション）にわたる高度な研究力、専門知識、倫理観とともに、学際的なリハビリテーションに基盤の置いた学際的かつ高度専門職業人とリハビリテーション専門職養成校等の高等教育教員等を育成するための汎用的知識･能力を養う教育･研究指導を行う。現職社会人に最適化したコースワーク・リサーチワーク複合型のカリキュラム・ポリシーに基づき、学位取得に至るまでの論文作成指導や学位論文審査などを柔軟かつ有機的に関連づけた指導を行う。

教育課程の編成方針	学生の専門分野を軸として、関連するリハビリテーション分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するようリハビリテーション科学基礎論およびリハビリテーション科学演習、リハビリテーション科学特論を必修とするとともに、より広い関連分野についての知見の修得に資するよう、学術院共通専門基盤科目から 1 単位を履修することを推奨する。具体的な履修科目や副指導体制の配置は個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。 原則として通算 3 年以上在籍する。リハビリテーション科学の概念的理解と学問的基礎を構築する必修科目 6 単位の履修と研究課題に即した選択性に富む選択科目 4 単位以上を履修する。指導教員および副指導教員が指定する科目を選択科目から 4 単位以上を履修し、博士論文作成のために必要な研究指導を受け、研修を実施すること。博士論文の予備審査および最終試験に合格する。博士論文審査においては、科学的論理性のみではなく、実践に即した課題設定や現場における有用性･有効性･新規性などを積極的に評価するものとする。最終試験に合格した者に、「博士（リハビリテーション科学)」の学位が授与される。
学修の方法 特色的な教育	1 年次に研究計画発表会、博士論文作成に必要な文献研究発表会および文献リストの提出、2 年次に経過報告会（1)、中間発表会、3 年次に経過報告会（2)、に博士論文研究の進捗状況の報告を行う。あわせて、原則として各指導教員のゼミに参加するとともに、各報告会後には副指導教員の指導を仰ぐこととする。

リハビリテーション科学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（リハビリテーション科学）
Doctoral Program in Rehabilitation Science / Doctor of Philosophy in Rehabilitation Science

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	本プログラムでは、現職社会人の立場と経験を活かしつつ、リハビリテーション科学に関わる実践的課題について、リハビリテーション科学の技術を駆使して主体的かつ意欲的に研究的探求を行うことができる人材を育成することを目的としている。特に、医療・保健機関、福祉施設・学校教育関係（特別支援教育を含む）、リハビリテーション専門職養成校、職業支援センターや障害者雇用企業、官公庁・行政機関などでの職務経験を有し、新しい研究創出と、実践臨床に高い関心を有する者が望まれる。
入学者選抜方針	原則として入学までに概ね 2 年以上の有職経験を有することを条件に、入学候補者の選抜は、外国語試験、口述試験及びその他の出願書類の審査結果を総合的に判定して行う。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 所属年次以外の発表会への参加機会を供し、自身の研究体制を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。 − 指導教員を中心に全教員が、社会人大学院生固有の相談内容（仕事と学業の両立、子育て・介護等の家庭状況）について、個々に相談できる体制をとる。 − 社会人大学院生が、勤務と学習・研究活動の両立ができるように、データ解析室、大学院生研究室の環境を整える。 − 社会人大学院生にとって勤務に支障が生じないよう、集中講義に関しては原則的に土日に実施している。 − 論文投稿をはじめとする研究成果の総括の仕方や、修了後のキャリア形成の具体例などについて、他学位プログラムも交えて幅広い視点から紹介する FD プログラムを定期的に開催している（年 2 回）。
学生同士の交流機会	− 所属年次以外の発表会への参加機会を提供し、学年を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みを教育課程に組み込んでいる。 − 上記の FD プログラムの際に、相互に質疑応答ができる場を用意し、交流機会を創発する仕組みを設けている。
教員との交流機会	− 毎回の発表会において、学位プログラム担当教員全員が参加しており、意見交換などの機会を確保し、指導教員以外の教員との交流機会も提供している。 − 加えて、発表会後にも、副指導教員を中心に、全教員が、発表会後の事後指導に関与し、学生自身がスムーズに学習・研究活動を継続できるような機会を確保している。 − 毎年学生教員懇談会を開催し、学生からの意見を積極的に取り入れている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

リハビリテーション科学学位プログラム教員会議及びカリキュラム委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。

ニューロサイエンス学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Neuroscience

■ 博士（神経科学）
■ Doctor of Philosophy in Neuroscience

人材養成目的 / Program Educational Objectives

脳の働きに関する広範かつ深い学術基盤を有し、高次脳機能としての人間の心の理解に貢献するとともに、社会が抱える心と行動に関する複雑な課題に敏感かつ真摯に向き合い、それを支える豊かな人間力を備えたプロフェッショナルとしての意識を持つ神経科学の専門家として、研究者および高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	− 神経科学における学際的見識を基盤に、国内外の多様な現場で、現代社会が直面する心と行動に関連する複合的課題に柔軟かつ責任を持って対応できる人材 − 国内外の教育・研究機関において、研究者倫理に基づき、神経科学分野のプロフェッショナルとしての行動意識、自己管理能力、および豊かな人間力を発揮し、人材育成や学際的研究を牽引できる人材 − 正常および障害のある脳機能について、最高度の学際的知見を持ち、基礎研究および応用研究を推進できる人材
修了後の進路	− 国内外の大学、研究機関、企業研究所の研究員 − 国内外の高等教育機関の教員および障害科学領域の専門職

ニューロサイエンス学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（神経科学）
Doctoral Program in Neuroscience / Doctor of Philosophy in Neuroscience

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（神経科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	学術院共通専門基盤科目、神経科学専門セミナー 1・2・3、博士論文研究指導 1・2・3・4・5・6、学会発表、投稿論文作成など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	キャリアプラン・研究者倫理・TF トレーニングセミナー、神経科学専門研究インターンシップ、学会発表、投稿論文作成など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	キャリアプラン・研究者倫理・TF トレーニングセミナー、高度専門科学英語 1・2、神経科学専門研究インターンシップ、学会発表、一般の人が参加する講演会での発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	キャリアプラン・研究者倫理・TF トレーニングセミナー、神経科学専門研究インターンシップ、ＴＦでの経験、学外の研究者への共同研究の提案など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	高度専門科学英語 1・2、博士論文研究指導 1・2・3・4・5・6、留学生との交流、外国人との共同研究など
	6. 高度専門知識：神経科学分野において、先端的な研究計画の立案・実施と、優れた研究成果を得られるだけの専門的な知識	①神経科学分野の専門的知識に基づいて新たな課題を発見することができるか ②発見した課題を解決するための研究計画を立案、実施することができるか	神経科学専門セミナー 1・2・3、学会発表など

ニューロサイエンス学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（神経科学）
Doctoral Program in Neuroscience / Doctor of Philosophy in Neuroscience

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 高度研究実践スキル：研究者倫理に基づき、神経科学分野において、人や動物を対象とした先端的な研究（実験・調査）を実施できる能力	神経科学分野における先端的な研究手法を用いて、研究課題を解決することができるか	神経科学専門セミナー 1・2・3、神経科学専門研究インターンシップ、博士論文研究指導 1・2・3・4・5・6、RA での経験、学会発表など
	8. 研究情報収集・成果発信力：英語を適切に使用し、研究成果の発表や、研究上のディスカッション等を行うに足る文章力、表現力、ディベート力。	①国際誌に掲載された神経科学分野の最新の研究動向を把握し、自らの研究に活かすことができるか ②神経科学分野の専門知識や研究成果について、国際的な場面においても論理的思考に基づいて的確に説明することができるか	高度専門科学英語 1・2、神経科学専門セミナー 1・2・3、神経科学専門研究インターンシップ、博士論文研究指導 1･2･3・4・5・6、学会発表、学会での質疑応答、セミナーでの質問など
学修成果の評価に関する方針	− 学修成果の評価は、学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を「達成度評価表（ルーブリック）」により、確認・評価をすることで行う。 − 第一段階（2 年次秋学期末）：QE3 の提出に関わらず、博士論文経過報告会において、全研究指導担当教員がルーブリックに基づき審査を行う。 − 最終段階：博士論文研究審査会において、学位論文審査委員会のニューロサイエンス学位プログラムの教員がルーブリックに基づき審査を行い、教育会議において全教員で最終達成度審査を行う。		
学位論文に関する評価の基準	博士論文研究資格試験（QE)1、2、3 の合格を博士論文提出の要件とする。学位論文が下記の評価項目について妥当と認められ、かつ、最終試験によって以下の 2 つの基準を満たすことが確認され、合格と判定されること。 1. 学位論文において、神経科学分野における新たな学術的知見が十分含まれる。 2. 神経科学分野で自立した研究者として、研究活動を行うに必要な高い研究能力を有する。 （評価項目） 1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、神経科学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 神経科学分野の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、学術論文として発表するのに相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。		

学位論文に関する評価の基準	5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、神経科学分野の博士論文に相応しい形式にまとめてあること。なお、学位論文の審査を願い出ようとする者は、事前に予備審査に合格しなければならない。 （審査委員の体制・審査方法） 学位プログラム内の 3 名の教員（主査は研究指導担当教員）および学位プログラム外の 1 名の教員等、計 4 名により学位論文審査委員会を構成し、全員の出席のもと最終試験として学位論文およびその関連分野に関する口述試験を行ったうえで、合否を判定する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

1）神経科学全般の専門的知識や研究手法の修得に基づく研究力、2）論理的思考力、文章力、高度な英語表現力、ディベート力、3）他領域の専門家との協働に必要なコミュニケーション力、研究企画力、4）研究者倫理の理解と実践、研究者としての自己管理能力及び研究指導力、5）基礎科学の研究成果を社会へ発信する力、社会が抱える心の課題に敏感かつ真摯に向き合うプロフェッショナルとしての意識とそれを支える人間力を修得するためのカリキュラムとする。

教育課程の編成方針	– 「キャリアプラン・研究者倫理・TF トレーニングセミナー」を必修科目とし、神経科学の専門研究者、教育者としての基盤を養成する。特に、MyIDP などの活用によるキャリアプランの明確化、自己管理力の強化を促す。 – 自由科目として、前期課程で未履修の「学術院共通基盤科目（科目は自由に選択）」、大学院共通科目の「研究倫理」、「応用倫理」などの履修を推奨し、より幅広い視野の涵養を図り、既存の学問体系にとらわれない柔軟な思考力、研究企画力を養成する。 – 専門基礎科目として「高度専門科学英語」を開講し、英文投稿論文・博士論文作成、国際学会や国際共同研究の場でのコミュニケーション、ディベートに資する高度な科学英語力を養成する。 – 学内・外の研究組織が開催する研究セミナーに参加する「神経科学専門セミナー」、国内外の教育・研究機関が提供するトレーニングコースへの参加を奨励する「神経科学専門研究インターンシップ」を開講し、神経科学の専門的研究に必須となる最先端の技法や知識の習得や、実践的現場での研究活動の実体験を促す。 – 前期課程開設科目である神経科学基礎論の Review/Discussion、英語ジャーナルクラブ、神経科学先端研究セミナーでのファシリテーターでの TF 経験を通して、研究指導力を養成する。 – 「博士論文研究指導」として、6 つの必修科目の開設し、博士論文研究のテーマ決定、研究の実施、3 回の博士論文研究資格試験、博士論文作成、博士論文最終試験、博士論文最終公開発表、博士の学位取得までの過程を段階的に指導することにより、標準年限内での学位の取得と質の保証を図る。

学修の方法 特色的な教育	1 年次の学修 – 入学直後開講される「キャリアプラン・研究者倫理・TF トレーニングセミナー」を履修し、博士取得までの学修計画および修了後の進路計画を自ら考え策定する。また、研究者倫理について学習するとともに、前期課程開設科目等（学士課程で開講する自由科目を含む）の TF として指導に関わるための基礎講習を受講する。 –「学術院共通基盤科目（科目は自由に選択）」を履修し、研究者としての幅広い視点を身につける。 –「高度専門科学英語 1」、「神経科学専門セミナー 1」の必修科目を履修し、高度な英語コミュニケーション力、ディベート力、英語読解力および神経科学の専門的、先端的知識や研究手法を身につける。また、「神経科学専門研究インターンシップ」を履修し、国内・外の大学・研究機関での研究体験を積む。 –「博士論文研究指導 1」を履修し、博士論文研究のテーマ決定、文献研究、予備研究を実施する。「博士論文研究指導 2」では、博士論文研究を進める。合わせて、博士論文研究資格試験（QE1）の準備を進める。 2 年次以降の学修 –「神経科学専門セミナー 2」の必修科目、自身の学修計画に応じて「高度専門科学英語 2」、「神経科学専門セミナー 3」の自由科目、「学術院共通基盤科目（科目は自由に選択）」や他学位プログラムが開講する科目を履修し、神経科学の専門研究者としての学修を進める。 –「博士論文研究指導 3」を履修し、博士論文研究を進める。合わせて、博士論文研究資格試験 2（QE2）の準備を進める。「博士論文研究指導 4」では、博士論文研究を進める。合わせて、博士論文研究資格試験 3（QE3）の準備、国際誌投稿論文の作成を進める。 –「博士論文研究指導 5」を履修し、博士論文作成を進める。「博士論文研究指導 6」では、博士論文を完成する。合わせて、博士論文最終試験、博士論文最終公開発表に向けての準備を行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	博士前期課程において、神経科学、心理学、障害科学、生物学、基礎医学を専攻した者。前期課程で一定の研究力をつけていることを前提とし、修了後研究者として自立する能力と意欲を有する人材。
入学者選抜方針	入学試験は口述試験により行う。選抜に当たって重視する資質は、①博士前期課程（修士課程）で行った研究の内容と理解度、②研究企画力、③プレゼンテーション能力とする。

ニューロサイエンス学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（神経科学）
Doctoral Program in Neuroscience / Doctor of Philosophy in Neuroscience

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– IBRO（International Brain Research Organization）が開催するトレーニングコース（IBRO スクール）や国立台湾大学での神経科学サマーキャンプへの参加を支援し、単なる国際交流にとどまらず、将来の研究活動につながる国際的なネットワーク形成の場を提供している。 – 筑波大学・国立台湾大学・モナーシュ大学マレーシア校が共同開催する Tri-Institutional Neuroscience Graduate Seminar（TiNGS）をオンラインで実施し、海外での発表に先立ち、日常の延長で挑戦できる国際学術交流の場として、英語による 3 分間のフラッシュトークに取り組む機会を整えている。 – 春学期の修士論文研究資格試験口頭発表会（中間発表会）、秋学期の構想発表会や公開発表会は、博士後期課程の学生の参加を必須とすることで、質問やコメントの練習機会を提供している。
学生同士の交流機会	– 人間総合科学学術院・研究科学生の集いには、学位プログラムとして積極的な参加を呼びかけ、学年や分野を超えた交流を促している。 – 春学期の修士論文研究資格試験口頭発表会（中間発表会）、秋学期の構想発表会や公開発表会は対面で実施し、前期・後期課程のすべての学年が互いに学び合う機会としている。 – 海外研修等の終了後には、公開報告会を開催し、学生同士が自由に交流できる場を設けている。
教員との交流機会	– 修士論文構想発表会では、当該学位プログラムの主担当教員と博士後期課程の学生の参加を必須としており、教員と学生が交流できる場を設けている。 – 海外研修等の報告会においても、教員と学生が交流できる場を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

各年度の前半に前年度の活動の振り返りを、後半に春学期の振り返りを FD で実施している。主担当教員全員が参加し、講義、実習、学位取得の流れを検証し、改善を行っている。

医学学位プログラム（医学を履修する博士課程）
Doctoral Program in Medical Sciences

■ 博士（医学）
■ Doctor of Philosophy in Medical Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

発生、出生、成長・発達、加齢、老化、死という人間のたどるプロセスの中で生じるあらゆる生命現象の根本的理解、あるいは、その過程で人間が経験する疾病の克服に向けた病態解析や予防・診断・治療の研究・開発、それらの社会への還元に貢献できる人材を養成する。

養成する人材像	あらゆる生命科学研究手法を駆使して、ヒトの生命現象の解明を目指す人材、ゲノム、分子、細胞からヒト個体、人類集団およびそれをとりまく病原体や環境を対象とする研究により、疾患の病態を解明し、疾患の予防、診断、治療の開発に貢献することを目指す人材、医学知識を駆使し、質の高い臨床研究、技術開発、社会医学研究を科学的な手法で実践することで、医療や公衆衛生、感染症危機管理の向上に貢献することを目指す人材を養成する。
修了後の進路	大学教員（医学系、生命科学系など）、大学・公的研究機関における研究員、医療機関における医療専門職、企業（製薬、食品、化粧品等）における研究開発職、医療・保健福祉行政関連職、国際保健機関職員など。

医学学位プログラム（医学を履修する博士課程） ／ 博士（医学）
Doctoral Program in Medical Sciences / Doctor of Philosophy in Medical Sciences

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する一貫制博士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（医学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	医学特殊研究、医学特別演習、統合医学研究特論、博士論文作成などで、全学生が学修する。 その他、学会発表など。
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	医学セミナー、博士論文作成やその関連科目を通して全学生が学修する。 その他、最先端医学研究セミナー、橋渡し研究マネージメント、キャリアパス・セミナー、インターンシップ、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	医学特殊研究、医学特別演習、中間発表、学会発表・ポスター発表などで全学生が学修する。 その他、国際実践医学研究特論、メディカルコミュニケーション演習、研究発表と討論、医科学国際討論、外国人医学者とのコミュニケーション演習など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	国際実践医学研究特論、医科学教育実習、キャリアパス・セミナー、大学院共通科目（JAPIC 科目）、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	医学専門英語、国際実践医学研究特論、メディカルコミュニケーション演習、医科学国際討論、外国人医学者とのコミュニケーション演習、English Topics in Science、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、英語論文など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究課題設定力：疾病や生命現象に関する課題を発見し、独創的な研究を生み出す能力	研究対象分野における最新の専門知識に基づいて重要課題を見出し、独創的な研究を考え出すことができるか	医学セミナー、医学特殊研究、医学特別演習、各分野（分子医科学、システム統御医学、ゲノム環境医学、睡眠医学、臨床病態解明学、臨床外科学、臨床内科学、社会医学、生物統計学）の特論・演習などで全学生が学修する。 その他、臨床試験論、最先端医学研究セミナー、博士論文作成、学会発表など
	7. 先端研究遂行力：疾病や生命現象に関する先端的な研究を計画し完成させる能力	①最先端の研究方法や異分野の手法を理解し研究に応用することができるか ②研究を完成させるために必要な情報収集、体制構築、交渉などを主体的に行うことができるか	医学セミナー、医学特殊研究、医学特別演習、統合医学研究特論、各分野（分子医科学、システム統御医学、ゲノム環境医学、睡眠医学、臨床病態解明学、臨床外科学、臨床内科学、社会医学、生物統計学）の特論・演習などで全学生が学修する。 その他、各分野の実験実習、最先端医学研究セミナー、臨床試験論、疫学特論、中間審査、博士論文作成、学会発表など
	8. 専門知識運用力：疾病克服や生命現象解明に関する高度な専門知識と運用能力	疾病の克服や生命現象の解明に貢献する基礎医学、臨床医学、および社会医学領域に関する知識を有し的確に運用できるか	医学セミナー、医学特殊研究、医学特別演習、統合医学研究特論で全学生が学修する。 その他、橋渡し研究マネージメント、中間審査、学位審査など
	9. 倫理観：疾病克服や生命現象解明に関わる研究者・高度専門職業人にふさわしい高い意識と倫理観	①疾病の克服や生命現象の解明に対して高い意識と意欲があるか ②医学関連の研究者や高度専門職業人としてふさわしい倫理観と倫理知識を備えているか	医学研究概論、中間審査、学位審査で全学生が学修する。 その他、臨床研究方法論、橋渡し研究マネージメント、など

知識・能力	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
	10. 情報発信力：疾病克服や生命現象解明に関わる研究者・高度専門職業人としての論理的思考力と表現力	母国語および外国語により専門知識を論理的にわかりやすく説明することができるか	各分野（分子医科学、システム統御医学、ゲノム環境医学、睡眠医学、臨床病態解明学、臨床外科学、臨床内科学、社会医学、生物統計学）の特論・演習、中間審査、学位審査で全学生が学修する。 その他、医学専門英語、メディカルコミュニケーション演習、医科学国際討論、研究発表と討論、EnglishTopicsin Science、学会発表、など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価はコンピテンス自己評価表及び達成度評価表に基づく達成度評価によって以下の段階毎に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 第一段階（標準的には 3 年次春学期）：中間審査において、コンピテンス自己評価表を指導教員及び審査委員会が確認、評価する。 – 第二段階：博士論文予備審査会において、コンピテンス自己評価表を指導教員及び審査委員会が確認、評価する。 – 最終段階：達成度評価表に基づき審査を行い、運営委員会において最終達成度審査を行う。		
学位論文に関する評価の基準	学位論文が満たすべき水準 1. 医学の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、科学論文として発表するのに相応しい量含まれていること。 2. 研究の目的、方法、結果、考察が学位論文に相応しい形式にまとめてあること。 3. 研究成果の信頼性が充分に検証されていること。 4. 研究成果に対する考察が妥当であること。 5. 関連分野の世界における研究動向が把握され、当該研究成果の意義が明確に述べられていること。審査委員の体制 – 学位論文審査委員会は、主査 1 名および副査 3 名により構成される。 主査と副査の候補は、医学学位プログラムリーダーと教務委員会委員の合議により選出し、人間総合科学学術院運営委員会において学位論文審査委員会の設置が決定される。 – 主査候補は人間総合科学研究群の研究指導教員から選出する。 – 副査候補は、人間総合科学研究群の研究指導教員または授業担当教員から選出する。 なお、本学大学院の他研究科、他大学の大学院教員、またはそれと同等以上の研究業績を有すると医学学位プログラム運営委員会が認めた者を副査候補に加えることができる。 – 学位論文審査委員会は、学位論文予備審査委員会と同一の主査・副査を候補者とすることを原則とする。審査方法および項目 – 標準的履修スケジュールにおいては、3 年次前半に公開発表会が行われ、学位論文研究の進捗状況を発表する。 主査 1 名、副査 3 名により中間評価委員会が構成され、発表内容および中間研究報告書に基づき、学位論文作成に向けての評価と指導を行う。 – 4 年次後半に、主査 1 名、副査 3 名により学位論文予備審査委員会が構成され、公開発表会および予定される学位論文の内容に基づき、評価と論文作成指導を行う。		

学位論文に関する評価の基準	– 中間評価に合格し、審査制度の確立している学術雑誌に、英文の原著論文 1 編以上を第一著者として発表（印刷中を含む）しており、かつ、学位論文予備審査委員会に合格と認定された場合、学位論文提出資格が満たされる。 – 学位論文提出を受けて、学位論文審査委員会が設置され、学位論文審査および最終試験が行われる。 最終試験合格基準 1. 博士（医学）を授与するに値する人格とコミュニケーション能力が備わっていること。 2. 医学研究を行う際に準拠すべき法的及び倫理的要件について説明できること。 3. 当該博士論文研究の目的、方法、結果とその意味について説明できること。 4. 研究成果の信頼性について科学的に論考し、説明できること。 5. 関連分野の世界における研究動向を把握し、当該研究の意義について説明できること。 6. 当該研究成果に基づき、関連分野の動向を正しく理解し、オリジナルな研究をより進展させるためのさらなる研究を主体的に計画し実施し学術論文として公表する能力があること。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

医学、生命科学のめざましい発展は、医療の現場に着実な進歩をもたらしているが、なお、大多数の疾患において、根本的治療法、予防法の開発が求められており、このためには、人間の生命現象全般の根本的理解に基づく疾患へのアプローチが必要である。 これまで、生命システム医学専攻は主として生命科学・基礎医学、疾患制御医学専攻は主として臨床医学・社会医学の観点から、生命現象の理解と疾患の克服をめざした教育と研究を進めてきたが、ヒトゲノム解析に基づくプレシジョン・メディスン、幹細胞生物学に基づく再生医療の例にみられるように、生命科学・基礎医学と臨床医学、社会医学は不可分のものとなっている。 医学学位プログラムでは、今後の医学・医療分野において国際的に通用する研究者、大学教員等を養成するために、これまでの両専攻を統合し、これまでのディシプリンを超えた教育・研究指導を行う。 具体的には、主体的に研究課題を設定し、研究計画を立案して実行し、研究結果を評価し、研究成果を国際的に発信しうる能力の養成を目的とする必修科目群と、学生自身の研究成果に基づく討議を主体とする推奨科目群から構成され、複数教員による研究指導体制、留学生とともに英語で学修する環境、国際的研究教育活動を重視した教育課程を編成している。

これらにより、生命科学、基礎医学、臨床医学、社会医学、感染症危機管理学における研究力・専門知識・倫理観とともに、人間総合科学研究群に属する、広く「人間」を対象とする各学位プログラムからの教育・研究指導を確保し、医学における幅広い基礎的素養、人間総合科学全般にわたる広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	教育課程は、研究を進める上で必須である倫理的および法的要件、自ら研究を主体的に計画し、実施する能力、英語によるコミュニケーションやプレゼンテーション能力を涵養し、幅広い分野の方法論や研究動向、研究者としてのキャリアパス等を学ぶ基礎科目と、各専門分野における方法論や最新の研究動向等を学ぶ専門科目から構成される。 学生は研究指導教員が担当する授業のみならず、他の研究室で行われる教育にも参加し、分野融合的視点を涵養する。授業は、原則として、留学生と日本人学生が共に英語で学ぶ環境で行う。また、履修単位の上限を 50 単位と制限することで、選択した学修内容の充実を図っている。日本人学生ならびに英語よりも日本語が堪能な留学生に対する指導と審査には日本語も用いられる。

教育課程の編成方針	－「医学研究概論」では、生命倫理、研究倫理、情報倫理、組換え DNA 実験や動物実験に関する法知識などを身に付ける。 －「医学特別研究」および「医学特別演習」では、研究指導教員との議論を通じて、学位論文研究課題を設定するとともに、研究計画を主体的に計画して実施し、個々の研究成果を評価し、次の研究実施計画を立案し、最終的に個々の研究成果を積み上げて論文を作成する能力を身に付ける。 －「医学セミナー」では、医学のさまざまな分野について詳細に議論し、応用力を磨くとともに、科学的文章に対する理解と、文章作成のための技術を身に付ける。 －「国際実践医学研究特論」や「メディカル・コミュニケーション演習」では、海外の研究者と研究に関して議論し、自身の研究に生かす能力、英語による実習指導を通して、国際的な教育研究者となる能力、自分自身の研究成果について英語で発表し、当該分野の世界の研究者と討論する能力、医科学の広い分野の英語での研究発表を理解し、他の発表に英語で討論する能力を身に付ける。 － 専門科目群の「特論」では、自らの研究成果の発表とそれをもとにした討論を通じて、自立して実験研究を企画・実施・評価する能力を身に付ける。 － 専門科目群の「演習」では、英文原著論文の抄読を行い、専門とする分野における一流の研究の内容と水準を理解し、世界の動向と水準を踏まえて、研究を企画・実施・評価できる能力を身に付ける。 以上の医学分野の科目に加えて、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目から 2 単位を履修することを推奨する。
学修の方法 特色的な教育	標準的履修スケジュールを以下に示す。 － 2 年次終了までに、必修科目、選択科目で 30 単位を取得する。 － 3 年次前半に、中間評価委員会により、中間評価が行われ、学位論文作成に関する指導を受ける。 － 中間評価に合格し、審査制度の確立している学術雑誌に、英文の原著論文 1 編以上を第一著者として発表（印刷中を含む）しており、かつ、4 年次後半に設置される学位論文予備審査委員会に合格と認定された場合、学位論文提出資格が満たされる。 － 学位論文提出を受けて、学位論文審査委員会が設置され、学位論文審査および最終試験が行われる。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	生命現象の理解や疾病の克服に貢献できる人材養成を目的としており、この目的にふさわしい能力、倫理観、目的意識をもつ人材を求める。より具体的には、英語で履修する能力と意欲を有し、独創性を追求し、人類の未来に貢献する強い意思を持つ学生を、広く世界から受け入れる。学部（学類）並びに修士課程での専門分野は問わない。

入学者選抜方針	– 筆記試験および口述試験を行い、入学者を選抜する。 – 筆記試験は、英語の能力および医学・生命科学に関する基礎知識の両方を評価しうる問題を作成する。 – 口述試験は、日本語あるいは英語で行い、目的意識、倫理観、専門分野における基礎知識、研究意欲、コミュニケーション能力等を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	医学学位プログラム事務室を設置し、中間審査、予備審査、コンピテンス自己評価、学位審査時のサポートや随時の問い合わせ対応などの各種学修支援を行っている。所属学生が筆頭著者である原著論文作成にかかわる支援を行っている。
学生同士の交流機会	特論、演習では所属研究室以外の研究室セミナーへの参加を推奨または必須としており、異なる分野の教員や学生との交流機会としている。
教員との交流機会	「統合医学研究特論」（必修）において、医学学位プログラムを担当する基礎系および臨床系の各指導教員の研究内容を学び、自らの研究に有用な手技を異分野教員から学ぶことを推奨している。特論、演習では所属研究室以外の研究室セミナーへの参加を推奨または必須としており、異なる分野の教員や学生との交流機会としている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 運営委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
– 教務委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

看護科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Nursing Science

■ 博士（看護科学）
■ Doctor of Philosophy in Nursing

人材養成目的 / Program Educational Objectives

さまざま文化的背景を持つ人々の多様な医療ニーズに創造力をもって科学的にかつ柔軟に応えることが可能な医療の専門家が求められている。本学位プログラムでは、学際的および国際的な視点に基づき、看護学の高度専門職者、教育者、研究者、政策・行政分野の看護・医療の専門家として専門的知識、技術を有するに留まらず、常に研究マインドを持って看護実践を検証していくことのできる人材を養成する。さらに、看護の専門領域だけではなく、「学際性」と「科学性」に基づく新しい看護の技術や教育・研究方法を開発できる人材を養成する。

養成する人材像	次代に向けて必要となる新たな知識の創造と技術開発の基礎となる教育・研究方法について体系化できる力を備えた教育者、研究者、実践と理論の架け橋となる高度専門職者となりうる人材。
修了後の進路	大学等の高等教育機関における教育者、研究者、看護・医療の管理・政策・行政に貢献する高度専門職者等

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（看護科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	看護科学の基盤と原理、看護科学特論、看護科学演習Ⅰ、看護科学研究、博士論文作成、学会発表
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門領域以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	看護科学特論、達成度自己点検
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	看護学教育、看護科学演習Ⅰ、看護科学特論、学会発表、ポスター発表
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	看護学教育、学内外セミナー等の参加経験
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、看護科学演習Ⅰ、国際セミナー参加、会議発表、英語論文作成
	6. 科学的根拠の創成力：看護実践の基盤になる新たな知を創成する研究能力	①新たな知の創成といえる研究成果があるか ②看護科学の発展に寄与する知を創成することが期待できるか	看護科学研究、看護科学特論、看護科学演習Ⅱ、論文作成、学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 看護科学の専門知識：看護科学に関する高度な専門知識を深める能力	①看護科学に関する専門知識の本質を探究することができるか ②看護科学の現象を捉えて、具体化・抽象化できるか	看護科学の基盤と原理、看護科学研究、看護科学演習Ⅱ、論文作成、学会発表など
	8. 研究・教育者としての倫理観：確かな倫理観をもって研究・教育が出来る能力	①人の尊厳を擁護する倫理規範に基づいた、判断や行動ができるか ②高度な研究課題に対して、研究倫理に配慮した研究計画を立て、的確に遂行することができるか	看護学教育、看護科学研究、看護科学演習Ⅰ・Ⅱ、論文作成、学会発表など
	9. 国際的な研究・実践能力：国際水準に見合った研究・実践能力	①国際的な学術交流の場において自己の成果を発信できるか ②母語を日本語としない学生や研究者と専門知識について議論できるか	看護科学の基盤と原理、看護科学研究、看護科学演習Ⅱ、国際的な活動経験
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた各知識・能力（コンピテンス）について、以下の指標と方法により評価を行う。 【数値指標による評価】 各科目および学生の学習活動に対してコンピテンス項目ごとに数値指標を設定し、客観的な評価を実施する。各知識・能力項目には達成目標となる基準値を設定し、学生の到達度を定量的に測定する。 【評価プロセス】 ≪年次評価≫ 年１回、指導教員と教務委員会が連携し、各学生のコンピテンス到達度を確認・評価する。評価は以下の観点から実施する – 各科目における数値指標の達成状況 – 設定された基準値に対する到達度 – 研究活動における知識・能力の発揮状況 ≪最終評価≫ 学位論文審査時に学位論文審査委員会において、全てのコンピテンスが基準値を達成していることを確認する。数値指標による定量評価結果と学位論文における知識・能力の具現化を総合的に評価し、最終的な達成度を判定する。		

学位論文に関する評価の基準	（評価基準） 1. 研究の内容が看護科学に寄与するものであること。 2. 論旨が独創的であり、創意を支える論証が確かであること。 3. 研究の意義、目的を明確に設定し、適切な方法を用いて研究し、適切な形式や表記で論文を記述できていること。 4. 使用したデータは申請者が研究の目的に沿って収集したものであること。一方、データが従来（博士後期課程入学以前）のものを含む場合は、その分析が斬新であること。 5. 研究の実施、もしくはその結果の公開において倫理的な問題がないこと。 （審査手順） − 研究計画書審査では、主査 1 名、副査 1 名で構成する審査委員会を組織し、研究計画書と研究計画書審査会での発表をあわせて審査する。 − 研究計画書審査会終了後、審査委員会は評価基準に基づいて合か再審査かを判定する。 − 学位論文の合否は、学位論文予備審査委員会（以下、予備審査会）による予備審査を経て、論文審査委員会による論文審査と最終試験によって判定する。 − 予備審査会の役割は、申請資格の確認と、申請論文が学位論文審査会における審査に値するレベルであることの確認、とする。論文の質を高めるために、提出論文を一定の期間内に加筆修正させることを要求できる。 − 予備審査会は、指導教員と副指導教員以外の看護科学学位プログラムの担当教員 3、4 名で構成する。そのうち主査と副査 1 名は、研究計画書の審査委員会の委員が担う。 − 予備審査会は、発表会を開催して申請者により研究内容を説明させ、それに関連する事項について質疑応答を行う。発表会は原則公開として、日時、場所、論文課題名、申請者氏名等を事前に掲示する等して周知する。 − 論文審査委員会は、指導教員と副指導教員以外の看護科学学位プログラムの担当教員と看護科学学位プログラム以外の教員をあわせて原則 4、5 名で構成する。主査は、看護科学学位プログラムの研究指導を担当する教員とする。主査と副査 2 名は、当該学位論文の予備審査委員会の委員が担い、新たな副査として本学の他の学位プログラムあるいは学外の教員を 1 名以上含める。審査委員は原則博士の学位を有する者とする。 − 論文審査委員会は、発表会を開催して申請者により研究内容を説明させ、それに関連する事項についての質疑応答を行う。発表会は原則公開として、日時、場所、論文課題名、申請者氏名等を事前に掲示する等して周知する。発表会後の主査副査による合否の判定のための審議は非公開とする。審査委員の合意により、提出論文に加筆修正が必要と判断された場合は、一定期間内に加筆修正を申請者に対して要求できる。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

学融・学際的な発想を重視して、新しい看護科学の創造に向けた取り組みが可能となるようなカリキュラム編成とする。学修を高めるための方策として、学問領域の狭義な枠組みを超えて、真の意味で実践と理論のバランスのとれた人材の育成を目指し、科学的根拠に基づく理論の学修が深められ、実践科学としての看護学の発展につなげることが可能となる科目構成とする。

また、学術協定をもつ大学への学生の留学や教育・研究に関する学術交流の活性化により、国際水準の研究能力を培う環境を提供する。

教育課程の編成方針	− 既成の看護学領域にとらわれずに、全教育課程を 1 領域（看護科学）とし、学融・学際的な発想を重視したカリキュラム編成とする。 − 学生の専門領域を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目から 2 単位以上を履修することを求める。 − 専門的な分野での卓越した研究を実施するための科目として専門基礎科目を置き、「看護科学の基盤と原理」により看護科学の専門知識を深める能力を身につけ、「看護研究方法論」により科学的根拠に基づき知を創成する研究能力を身につける。 さらに「応用統計学」「看護学教育」により研究・教育者としてのデータ分析能力や倫理観を身につけ、研究・教育者としての基本的な能力と資質の向上に向けて焦点化する。 − 専門基礎科目で身につけた知識・能力を基に、専門科目の「看護科学特論」「看護科学演習 I 」「看護科学演習 II 」等により、看護に関する高度な知識と看護実践の基盤になる科学的根拠を創出する研究能力を醸成させる。 − 専門科目の「看護科学研究」、専門研究領域におけるゼミナール、学術協定校講師による特別講義等により、学位論文に取り組む過程で国際水準の研究能力を身につける。 − 大学院共通科目、eAPRIN、臨床研究における倫理講習、「研究倫理学演習」等からも、確かな倫理観と価値基準に裏付けられた研究能力を身につける。
学修の方法 特色的な教育	− 修了に必要な単位数は、25 単位以上とする。 − 修了のために履修すべき専門基礎科目は、「看護科学の基盤と原理」(2 単位)、「看護研究方法論」(2 単位) を必修とするほか、選択科目「看護学教育」(2 単位)、「応用統計学」(2 単位)、大学院共通科目、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目の中から選択して、あわせて 10 単位以上とし、1 年次前半に履修することを奨励する。 − 修了のために履修すべき専門科目は、「看護科学特論」(2 単位)、「看護科学演習 I 」(2 単位)、「看護科学演習 II 」(1 単位)、「研究倫理学演習」(1 単位)、「看護科学研究」(9 単位) を含む 15 単位以上とし、博士論文への取り組み状況に合わせて適宜履修する。 − 研究課題について国内外の論文を検討し、系統的・論理的に研究目的と研究方法を立案・発表し、研究計画書審査に向けて建設的に討議をする「看護科学演習 I 」を 1 年次の後半に履修する。 − 研究計画書を立案できた学生は研究計画書審査会で研究計画を発表し、研究計画の審査を受ける。 − 研究計画書審査に合格した学生 (2 年次を想定) は、研究計画書に沿って研究を進めることができるように「看護科学演習 II 」を履修し、各自の研究課題の独創性や新規性について根拠をもって発表し建設的に討議をする。

学修の方法 特色的な教育	− 博士論文を作成するための科目である「看護科学研究」を必修とする。 1 年次の 4 月に指導教員と副指導教員（2 名まで）を決定し、学生が研究指導を受けられる体制を整える。 人を対象とする研究課題については、研究の開始までに、該当する倫理審査委員会から計画書の承認を得たうえで実施する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	博士前期課程や修士課程で養った看護実践能力や研究能力を活かし、新たな知識の創造をとおして看護科学の知識体系に寄与する意欲を持つ人材を求める。さらに、学際的および国際的な視点に基づき、実践と理論の架け橋となるための研究者、教育者、高度専門職者を目指す人材を求める。
入学者選抜方針	− 8 月に入学試験を実施し、8 月期の入学試験において定員に満たない場合には 2 月に再度試験を実施する。 − 募集人数は 8 名とする。 − 出願資格は、次のいずれかに該当する者とする。①修士の学位を有する者、あるいは入学前年度 3 月までにその見込みのある者、②専門職学位を有する者、あるいは入学前年度 3 月までにその見込みのある者、③外国において修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者、あるいは入学前年度 3 月までにその見込みのある者、。④本学大学院において行う出願資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者で、24 歳に達した者及び入学前年度 3 月までに 24 歳に達する者。 − 入学試験では、専門科目と英語の筆記試験、口述試験により、学力査定と人物評価を行う。専門科目の試験では、受験者の看護に関する専門知識を評価することを目的に、看護や医療に関連する文章を用いた出題をする。英語の試験では、海外の学術論文を活用するだけの英語能力があるかを評価することを目的に出題する。口述試験では、独創性のある研究を大学院生として行う力量があるか、また研究者あるいは教育者、実践家としての看護科学分野における適性、資質、将来的な可能性、及び明確な目的意識を有するか否かを評価する。 − 外国人留学生が受験する場合には、英語による問題ならびに設問の作成等の配慮をする。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	大学院生の効果的な学修を支援する以下の活動を実施している。 − 研究指導、論文執筆指導の個別支援（面談） − 学内外の演題発表前の予演会などのプレゼンテーション指導 − English ライティングサポート
学生同士の 交流機会	ピア効果を高め、学修意欲や研究の質を向上につながる以下の制度や枠組みが存在する。 − 各専門研究領域におけるゼミ − 領域を跨いだ特論・演習の授業設定、学生同士のディスカッション − 計画書発表会や論文発表会での協働活動 − 学生チューター制度

教員との交流機会	教員との対話や指導を通じて、学修意欲や研究の質を高める以下の活動を実施している。 – 研究指導体制の整備、定期的な個別面談 – 教員主催の勉強会・研究会 – 年に 1-2 回の専門領域内での食事会での交流 – 教員との協働による研究プロジェクト

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育の質向上を検証・改善する以下の活動を実施している。

- FD（Faculty Development）活動
- 学生アンケートの分析とフィードバック
- 教育課程の定期的な見直し
  - 学位プログラム教育会議において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。
  - 教務委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化している。

パブリックヘルス学位プログラム（3 年制博士課程）
Doctoral Program in Public Health

■ 博士（公衆衛生学）
■ Doctor of Philosophy in Public Health

人材養成目的 / Program Educational Objectives

超少子化社会や地球規模で直面する多様な健康問題の解決にむけて、人々の身体的・精神的・社会的健康と生活の質の保持向上に関わる専門知識および関連領域の学際横断的知識と研究能力を備えた高度な公衆衛生学専門家を養成する

養成する人材像	人々の身体的・精神的・社会的健康と生活の質の保持向上に関わる高度専門知識と学際的知識および研究教育能力を十分に兼ね備えた人材、公衆衛生行政や地域・学校・職域・国際保健の向上に貢献する人材
修了後の進路	国内外の大学および研究機関の専門教育研究者、保健医療福祉行政官、保健医療機関の専門管理職

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する 3 年制博士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（公衆衛生学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	パブリックヘルス特論Ⅰ－Ⅵ、パブリックヘルス演習、パブリックヘルス特別研究、博士論文作成、学会発表、論文投稿、審査 会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	パブリックヘルス特論Ⅰ－Ⅵ、パブリックヘルス演習、パブリックヘルス特別研究、博士論文作成、学会発表、論文投稿、審査会発表など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	パブリックヘルス特論Ⅰ－Ⅵ、パブリックヘルス演習、パブリックヘルス特別研究、博士論文作成、学会発表、論文投稿、審査会発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	パブリックヘルス特論Ⅰ－Ⅵ、パブリックヘルス演習、パブリックヘルス特別研究、TF、TA、成果発表会など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	パブリックヘルス特論Ⅰ－Ⅵ、パブリックヘルス演習、パブリックヘルス特別研究、英語論文投稿など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：公衆衛生学分野における最新の専門知識に基づいて現代的・将来的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①最新の専門知識に基づき、公衆衛生学分野における現代的・将来的課題を設定できるか ②設定した研究課題に対して、自立して研究計画を遂行できるか	パブリックヘルス特論Ⅰ－Ⅵ、パブリックヘルス演習、パブリックヘルス特別研究、博士論文作成、学会発表、論文投稿、審査会発表など
	7. 専門知識：公衆衛生学分野の先端的かつ高度な専門知識、および関連する諸科学の学際的専門知識	①公衆衛生学分野の先端的かつ高度な専門知識を有しているか ②関連する諸科学の学際的専門知識を有しているか	パブリックヘルス特論Ⅰ－Ⅵ、パブリックヘルス演習、パブリックヘルス特別研究、博士論文作成、学会発表、論文投稿、審査会発表など
	8. 倫理観：公衆衛生学分野の研究者にふさわしい倫理観と倫理知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①公衆衛生学分野に関する深い倫理的知識を持っているか ②専攻する特定分野に関する倫理観と倫理的知識を持っているか	パブリックヘルス特論Ⅰ－Ⅵ、パブリックヘルス演習、パブリックヘルス特別研究、博士論文作成、学会発表、論文投稿、審査会発表など
	9. 学際的応用力：公衆衛生学に係る学際的知識と技術を現代的・将来的課題の解決に応用する力	①公衆衛生学の現代的・将来的課題に対して、学際的視点から取り組んでいるか ②公衆衛生学の現代的・将来的課題の解決に、学際的・総合的な応用を試みているか	パブリックヘルス特論Ⅰ－Ⅵ、パブリックヘルス演習、パブリックヘルス特別研究、博士論文作成、学会発表、論文投稿、審査会発表など
学修成果の評価に関する方針	学修成果は「学修指導記録」を用いた個別の学修状況に基づく評価と、「コンピテンス評価表」を用いた学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況の評価から、客観的に達成度を評価する。具体的には、学修成果については、指導教員が学生との協議のうえで「学修指導記録」に基づき各学期末に評価し、教育会議にて各学生の学修成果を確認する。コンピテンスについては、1 年次末、2 年次末、修了時にコンピテンス評価表に基づき自己評価と指導教員による評価を行い、教育会議ならびに学位論文審査委員会で審査する。		

学位論文に関する評価の基準	筑波大学大学院学則に規定する要件を充足した上で、主査 1 名、副査 3 名以上で構成する学位論文審査委員会により、学位論文が以下の評価項目を満たす水準であることが確認され、かつ最終試験で合格と判定されること。 1. 学際的・複合的な学問領域である公衆衛生学において、関連する先行研究を十分にふまえて独創的で新奇性に優れたテーマを設定であること。 2. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論が論理的な構成で学位論文の形式にまとめられていること。 3. 公衆衛生学における妥当な研究方法により社会貢献性の高い成果を得て、健康課題の解決に寄与すると認められること。 4. 研究倫理上の問題がなく公正性が認められること。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

人間系・体育系・医学医療系の多分野横断さらに国立保健医療科学院との連携大学院によって、人々の身体的・精神的・社会的健康と生活の質の保持向上に関わる学際融合の専門知識を学び、高度な研究能力、倫理観、課題解決能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	人間系・体育系・医学医療系および国立保健医療科学院の連携教員からなる分野横断の教員構成によって、教育学、心理学、体育学、保健学、看護学、医学など、広範な専門分野の理論や研究法を学ぶとともに、複数の専門分野の教員から研究指導を受ける教育課程を編成する。これにより、個人、社会、環境の多角的な観点をふまえた公衆衛生学に関わる学際的な専門研究能力と課題解決能力を修得する。 – 専門基礎科目「パブリックヘルス特論 I・II・III・IV・V・VI」（各科目 1 単位、合計 6 単位必修）により各公衆衛生学やその関連分野の理論や研究法を学び、人間の健康と生活の支援に関わる学際横断融合の視座と専門知識を修得する。 – 専門科目の「パブリックヘルス演習」（3 単位、必修）により専門分野に関する最先端の高度な専門知識を、「パブリックヘルス特別研究」（3 単位、必修）により論文作成と発表に係る高度な研究手法と倫理観を、それぞれ修得する。 さらに、複数の教員から研究指導を受けることにより、学際融合の広い視座にたつ研究能力と課題解決能力を修得する。
学修の方法 特色的な教育	標準履修年次である 3 年間の修了（学位取得）をめざし、標準学修課程フローチャートにより計画的・継続的に複数の教員から指導を受ける。 – 1 年次では学位論文の研究計画の立案、研究倫理審査を経て研究に着手する。 – 1、2 年次に専門基礎科目である「パブリックヘルス特論 I ・ II ・ III ・ IV ・ V ・ VI」により、各分野の学際横断的知識を修得する。 – 2 年次以降は、専門科目である「パブリックヘルス演習」と「パブリックヘルス特別研究」により、専門分野の最先端の知識と研究手法を修得するとともに、指導教員・副指導教員より学位論文作成の指導を受け、学会発表や論文投稿を積極的に行う。 – 入学直後、毎年度末、学位論文審査の申請時に、コンピテンス評価表（ディプロマ・ポリシーに掲げる知識・能力の獲得について、学生による達成度評価ならびに教員による確認）を提出する。

学修の方法 **特色的な教育**	– 中間審査会に合格するまで、学期毎に学修指導記録（指導教員・副指導教員による学修成果および研究進捗に関する確認と指導の記録）を提出する。 – 中間審査会、予備審査会、学位論文審査会、博士論文成果発表会において、プレゼンテーションを行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	私たちが国内外で直面している公衆衛生学やその関連領域の問題に深い関心を持ち、その解決に高度な専門知識と技術を用いた学際的な研究を通して意欲的に取り組む姿勢を有する人材を求める。公衆衛生学やその関連領域の学修実績・実務経験を有することが望ましい。
入学者選抜方針	選抜は、研究・実践・国際連携の能力を中心に、専門および英語の筆記試験、研究計画に基づく口述試験が行われ、総合的に評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	社会人学生における円滑な学修の保障と反復学習による学修の効果に鑑み、本学位プログラムが開設する専門基礎科目はオンデマンド型あるいはオンライン（同時双方型）で実施している。学術論文の投稿に際しては、英文校正や掲載に係る費用を支援している。学生の学修に対するニーズに応えるため、学位プログラム内に学生支援対応チームを設けている。
学生同士の交流機会	入学時のオリエンテーションや博士論文成果発表会の際に情報交流の機会を設けている。中間審査会においては、学生同士の学術交流を深めるため、学生同士のピアレビューを行っている。
教員との交流機会	教員と学生がともに研究力を高めることができるように、学生参加型のファカルティ・ディベロップメント（FD）を実施している。また、授業や学修環境を改善するため、教員との対話の機会を設けている。また、学術院で開催される学生の集いを通じて、専門分野を超えた教員との交流の場を設定している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育・ファカルティ・ディベロップメント（FD）委員会を設置し、授業評価アンケートの結果や学生の学修成果に基づき、教育課程の点検と改善を継続的に実施し、その結果を教育会議で審議・確認することで、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。また、教育の質向上に向けた FD を開催している。

スポーツ医学学位プログラム（3 年制博士課程）
Doctoral Program in Sports Medicine

■ 博士（スポーツ医学）
■ Doctor of Philosophy in Sports Medicine

人材養成目的 / Program Educational Objectives

スポーツ医学に以下の観点から貢献でき、国際的にも通用する研究者や高度専門職業人及びこれらの人材を育てることのできる大学教員を養成する。

- 競技スポーツにおいて、科学的な見地から競技者の競技力向上に貢献できる人材。
- 生活習慣病や老化の予防を科学的見地から評価し、健康の維持・増進や疾病の予防・改善に貢献できる人材。

養成する人材像	スポーツと健康、競技者の競技力向上、外傷と障害及び疾病の予防に関する基礎知識を有し、これを基盤としてスポーツ医学に関する研究能力を高めようとする意欲を持ち、競技スポーツ支援や健康スポーツなど各種の関連領域で活躍できる人材。
修了後の進路	大学教員に加えて、行政機関や産業界において、スポーツ振興をグローバルな視点で推進する研究者や指導者。

スポーツ医学学位プログラム（3 年制博士課程） ／ 博士（スポーツ医学）
Doctoral Program in Sports Medicine / Doctor of Philosophy in Sports Medicine

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する 3 年制博士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（スポーツ医学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	博士論文研究指導Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、博士論文作成、論文発表、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	スポーツ医学セミナーⅢ、博士論文研究指導Ⅰ、研究計画発表会、論文予備審査会など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	博士論文研究指導Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、研究計画発表会、論文予備審査会、学会発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	スポーツ医学セミナーⅢ、博士論文研究指導Ⅰ、研究計画発表会、学生主体による行事など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	スポーツ医学セミナーⅢ、博士論文研究指導Ⅰ、大学院共通科目（国際性養成科目群）、国際学会発表、英語論文発表など
	6. 研究力：スポーツ医学の独創的な研究を独自に行える能力	①スポーツ医学の独創的な研究成果等があるか ②スポーツ医学の発展に貢献することが期待できるか	スポーツ医学セミナーⅠ、Ⅱ、博士論文研究指導Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、博士論文作成、論文発表、学会発表
	7. 専門知識：スポーツ医学に関する先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①スポーツ医学に関する先端的かつ高度な専門知識はあるか ②スポーツ医学に関する研究成果等があるか	スポーツ医学セミナーⅠ、Ⅱ、博士論文研究指導Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、博士論文作成、論文発表、学会発表

スポーツ医学学位プログラム（3 年制博士課程） ／ 博士（スポーツ医学）
Doctoral Program in Sports Medicine / Doctor of Philosophy in Sports Medicine

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	8. 倫理観：研究者または高度専門職業人にふさわしい高い倫理観と倫理的知識	①高い倫理観と倫理的知識のもとに研究に取り組むことができるか ②誠実で責任ある研究活動ができるか	スポーツ医学概論Ⅰ、Ⅱ、博士論文研究指導Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、博士論文作成、論文発表、学会発表
	9. 学際性：スポーツ医学の学際的な特徴を存分に発揮する能力	①スポーツ医学の学際的な特徴を発揮した研究に取り組むことができるか ②学際性のあるスポーツ医学の研究成果等があるか	スポーツ医学概論Ⅰ、Ⅱ、スポーツ医学セミナーⅢ、研究計画発表会、博士論文作成
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 学修成果の評価は､学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を「達成度評価表（ルーブリック）」により、確認・評価をすることで行う。 評価の対象と方法：コンピテンスの評価は、履修科目の成績だけでなく、研究報告会、口頭試問、日常的な研究活動、および研究成果（学会発表、論文掲載）に基づき行う。 評価の時期と体制：学位取得までに 4 段階（研究計画発表会、中間報告会、予備審査会、本審査会）実施する。指導教員による評価に加え、最終試験においては指導教員と副指導教員が連携し、達成度評価表に基づき審査を行い、教育会議において全教員で最終達成度審査を行う。		
学位論文に関する評価の基準	筑波大学大学院学則に規定された要件を充足した上で、学位論文が下記の評価項目について妥当と認められ、かつ、最終試験で合格と判定されること。 （評価項目） 1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、スポーツ医学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. スポーツ医学分野の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、博士論文に相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、スポーツ医学分野の博士論文に相応しい形式にまとめてあること。 （審査体制、審査方法等） 1. 博士論文が完成した後、予備審査を行い、学位論文を評価し、最終試験に進めるか否かを審査する。 2. 最終試験は、学位論文の提出とそれについての質疑応答を行い、主査（主指導教員以外）及び 2 名の副査に加えて､本学位プログラム担当教員以外の教員が少なくとも 1 名加わった審査委員会で行う。 3. スポーツ医学の分野において、博士の学位に相応しい成果が得られ、相応しい体裁にまとめられていることを合格の基準とし、審査は公開で行う。		

スポーツ医学学位プログラム（3 年制博士課程） ／ 博士（スポーツ医学）
Doctoral Program in Sports Medicine / Doctor of Philosophy in Sports Medicine

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

スポーツ医学の基礎となる基礎的知識・能力、汎用的知識・能力、倫理観を養うとともに、既成の分野では包括できないカリキュラムを体育系、医学医療系及び人間系に所属する教員が担当し、スポーツ医学の広範囲なカリキュラムを編成することで、スポーツ医学に関する研究を自立して行うために必要な高度の研究能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	− 学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、研究群共通科目、学術院共通専門科目、大学院共通科目から数科目を履修することを推奨する。 − スポーツ医学の広範囲な領域における知識や研究方法論を学ぶ基礎科目を配置する。また、最先端のスポーツ医学研究や研究手法を学ぶ専門科目を配置する。 −「スポーツ医学概論Ⅰ・Ⅱ」により、スポーツ医学の基礎的な知識と研究方法論を学び、学際性や倫理観を身に付ける。 −「スポーツ医学セミナーⅠ・Ⅱ」により、最先端のスポーツ医学研究の研究手法を学び、研究力と専門知識を身に付ける。 −「スポーツ医学セミナーⅢ」では、国内外で活躍する研究者から、最先端のスポーツ医学研究やキャリアパス形成について学び、マネジメント能力、リーダーシップ力、国際性、学際性を身に付ける。 −「博士論文研究指導Ⅰ」により、博士論文作成の基礎を学び、知の創成力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ力、国際性、研究力、専門知識、倫理観を身に付ける。 −「博士論文研究指導Ⅱ・Ⅲ」により、博士論文作成に必要な高度の知識や研究手法などを学び、知の創成力、コミュニケーション能力、研究力、専門知識、倫理観を身に付ける。 − 国内外における学会発表により、知の創成力、コミュニケーション能力、国際性、研究力、専門知識、倫理観を身に付ける。 − 学術誌における論文執筆により、知の創成力、国際性、研究力、専門知識、倫理観を身に付ける。 − 学位取得予定者の博士論文発表会等を企画、運営することにより、リーダーシップ力、マネジメント能力、コミュニケーション能力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 1 年次では、スポーツ医学に関連する基礎的知識・能力、汎用的知識・能力、倫理観を学ぶとともに博士論文の計画を立案し、研究に着手する。 2 年次以降は、より専門的にスポーツ医学を学ぶと共に研究を進める指導を行い、学会発表や学術誌における論文発表を積極的に行う。 − 1 年次に基礎科目である「スポーツ医学概論Ⅰ・Ⅱ」を履修し、スポーツ医学の基礎的な知識と研究方法論を学ぶ。 − 1 年次に「博士論文研究指導Ⅰ」を履修し、博士論文の計画を立案する。 また、当該科目では、博士論文の研究計画を発表し、指導教員より研究指導を受ける。 − 1・2 年次では、「スポーツ医学セミナーⅠ・Ⅱ」を履修し、最先端のスポーツ医学研究や研究手法を学び、各自の研究に生かす。 − 1・2・3 年次において、「スポーツ医学セミナーⅢ」を履修し、最先端のスポーツ医学研究に加え、キャリアパス形成についても学ぶ。 − 2・3 年次における「博士論文研究指導Ⅱ・Ⅲ」では、博士論文の研究指導を指導教員より受ける。

スポーツ医学学位プログラム（3 年制博士課程） ／ 博士（スポーツ医学）
Doctoral Program in Sports Medicine / Doctor of Philosophy in Sports Medicine

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	スポーツと健康、競技者の競技力向上、外傷・障害予防及び疾患の予防に関する知識を有し、これを基盤としてスポーツ医学に関する研究能力を高めようとする意欲を持ち、競技スポーツや健康スポーツなどの関連領域で活躍できる人材を求める。
入学者選抜方針	– 入学試験では、英語能力とこれまでに行った研究及び研究計画についてのプレゼンテーションにより、スポーツ医学の知識や学習意欲を総合的に評価する。 – 社会人のための特別な入学試験や科目履修のための配慮は行わないが、社会人は一般的に学習意欲や問題意識に富んでおり、積極的に受け入れる。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	指導教員による個別研究指導、論文執筆の添削、および学会発表に向けたプレゼンテーション指導を行う。また、英文校正や文章作成サポートの支援やキャリア面談を通じて、学習目標の設定や学習管理に関する助言を提供する。学位プログラムの修了生を招聘しての研究とキャリア支援、交流の両面を目的としたセミナーを開催している。
学生同士の交流機会	定期的に研究発表会を開催し、学生が自身の研究成果を共有する機会を提供する。発表後の質疑応答や、他領域の学生からのフィードバックを通じて、新たな視点を得ることで研究の質を向上させる。また、指導教員や大学の枠を超え、異なる指導教員の学生や他大学の学生と交流する機会を設けている。
教員との交流機会	学生が気軽に研究の相談や質問を行えるように教員ごとにオフィスアワーを設けている。また、指導教員と学生は、研究の進捗状況の確認に加えて、学修やキャリアパスに関する相談する機会として、定期的にミーティングを実施している。学位プログラム全体で定期的な研究進捗報告会を開催し、学生が自身の研究内容を発表する機会を提供し、他領域の教員との交流を図っている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育課程委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。また、教育課程委員会と研究促進委員会で合同委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。

体育科学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Physical Education, Health and Sport Sciences

■ 博士（体育科学）
■ Doctor of Philosophy in Health and Sport Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

体育・スポーツ・健康科学分野に関連する現代社会の課題解決への貢献をめざし、卓越した研究・教育活動を行うために必要とされる高度な能力及びその基盤となる豊かな学識や実践力を持ち、グローバルな視点にたってリーダーシップを発揮できる人材を養成する。

養成する人材像	– 体育・スポーツ・健康科学等の分野において高度専門的知識を持ち、教育研究機関において、国内外の教育・研究機関における教員や研究員 – 体育・スポーツ・健康科学等の分野においてリーダーシップを発揮し、行政機関やスポーツ競技団体において将来計画を立案・実行できる人材 – 最先端の研究技法を駆使して、グローバルなレベルで問題解決できる能力を持つ研究者 – 俯瞰的な視野と柔軟な思考力を有し、様々な領域の人材とチームを組んで課題を解決する能力を持つ研究コーディデーター
修了後の進路	体育・スポーツ・健康科学研究におけるリーダーとして、国内外の国公私立大学等の教育研究機関の教員・研究員、企業および公的研究機関における研究員、行政機関やスポーツ競技団体の主要な役職員。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（体育科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	研究方法論Ⅰ（必修科目）、健康スポーツ科学研究演習Ⅰ・Ⅱ（必修科目）、プロジェクトローテーション、課題解決研究Ⅰ・II、研究計画作成、学位論文作成（学位取得の条件）、学会発表（健康スポーツ科学研究演習Ⅰにおいて学会発表を行う必要がある）など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	研究方法論Ⅱ、健康スポーツ科学研究演習Ⅰ・Ⅱ（必修科目）、プロジェクトフォーラムⅠ・Ⅱ、体育専門学群「体育科学シンポジウム」企画・運営、国内・国際学会運営補助経験など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	研究セッション（必修科目）、学際ディベート合宿Ⅰ・Ⅱ、学会発表（健康スポーツ科学研究演習Ⅰにおいて学会発表を行う必要がある）、セミナーでの質問
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	研究方法論Ⅱ、健康スポーツ科学研究演習Ⅰ・Ⅱ（必修科目）、プロジェクトフォーラムⅠ・Ⅱ、体育専門学群「体育科学シンポジウム」企画・運営、国内・国際学会運営補助経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	健康スポーツ科学研究演習Ⅰ・Ⅱ（必修科目）、学際ディベート合宿Ⅰ・Ⅱ、国際フォーラムⅠ・Ⅱ、Global Communication Skills Training（大学院共通科目）、国際会議発表、国際セミナーでのディスカッション、英語論文など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：体育・スポーツ・健康科学分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定できるか ②設定した研究課題を解決するために自立して研究計画を遂行できるか	研究方法論Ⅰ（必修科目)､研究セッション（必修科目)、学位論文作成（学位取得の条件）
	7. 専門知識:体育･スポーツ・健康科学分野における先端的かつ高度な専門知識	体育・スポーツ・健康科学分野における先端的かつ高度な専門知識を身に付けたか	健康スポーツ科学研究演習Ⅱ（必修科目)、学位論文作成（学位取得の条件）
	8. 実践力：体育・スポーツ・健康科学分野の研究者または高度専門職業人として身につけた高度な専門知識を社会で活用する能力	①体育・スポーツ・健康科学分野における先端的かつ高度な専門知識を伝達できるか ②体育・スポーツ・健康科学分野における先端的かつ高度な専門知識を運用できるか。	課題解決研究Ⅰ、プロジェクトフォーラムⅠ、学会発表（健康スポーツ科学研究演習Ⅰにおいて学会発表を行う必要がある)、TA 活動
	9. 倫理観：体育・スポーツ・健康科学分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	①体育・スポーツ・健康科学分野に関する深い倫理的知識をもっているか。 ②研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観を持っているか。	研究方法論Ⅰ（必修科目)、健康スポーツ科学研究演習Ⅰ（必修科目)、研究倫理（大学院共通科目）

学修成果の評価に関する方針	– 学修成果の評価は、学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を「達成度評価表（ルーブリック）」により、確認・評価をすることで行う。 – 第一段階：博士論文研究報告会において、全研究指導担当教員がルーブリックに基づき審査を行う。指導教員は、論文審査と口頭試問、研究業績の定量的な評価、および研究計画書や進捗報告書の評価を組み合わせて評価する。 – 最終段階:博士論文研究審査会において、学位論文審査委員会の体育科学学位プログラムの教員がルーブリックに基づき審査を行い、教育会議において全教員で最終達成度審査を行う。具体的な指標としては、①履修科目を通して習得した高度な専門知識・能力、②博士論文の内容（新規性、論理性、貢献度）、③論文投稿の実績、④研究計画立案や課題解決能力の発揮状況などが挙げられる。
学位論文に関する評価の基準	筑波大学大学院学則に規定された要件を充足した上で、主査 1 名、副査 3 名以上で構成する学位論文審査委員会により、学位論文が下記の評価項目について妥当と認められ、かつ、学位論文に関する口頭発表および質疑による最終試験で合格と判定されること。 （評価項目） 1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、体育科学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 国際的な体育科学分野の発展に寄与する先進的かつ独創的な研究成果が、博士学位論文に相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が多角的に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、体育科学分野の博士学位論文に相応しい形式にまとめられていること。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

体育科学学位プログラムは、体育学学位プログラムのスポーツ文化・経営政策、健康・スポーツ教育、ヘルスフィットネスおよびコーチング科学等の教育・研究指導を、より高度なレベルで実施する学位プログラムである。

そして、体育・スポーツ・健康科学分野で卓越した指導・実践力、かつグローバルな視点でリーダーシップを発揮できる人材を養成するため、以下の二つの履修モデルを設けて教育・研究指導を行う。

– 標準履修モデル：体育・スポーツ・健康科学分野等の分野において幅広い基礎知識（専門基礎科目）と高度な専門的知識（専門科目：研究応用科目）を修得し、さらに様々な領域の人材とチームを組んで課題を解決する能力（専門科目：研究実践科目）、グローバルな視点で課題を解決する能力（専門科目：国際研究科目）を修得できるように教育・研究指導を行う。
– 次世代健康スポーツ科学履修モデル:体育・スポーツ・健康科学分野等の分野において幅広い基礎知識（専門基礎科目）と高度な専門的知識（専門科目:研究応用科目）を修得し、さらに産業・地域・競技団体などの「実践フィールド」における人材とチームを組んで課題を解決する能力（専門科目：研究実践科目）、グローバルな視点で課題を解決する能力（専門科目：国際研究科目）を修得できるように教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	下記に示す体育科学学位プログラムにおける科目を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目から3単位以上履修することを推奨する。 －「研究方法論Ⅰ」「健康スポーツ科学研究演習Ⅰ」などにより、新たな知を創成する能力を身に付ける。 －「研究方法論Ⅱ」「プロジェクトフォーラムⅠ・Ⅱ」などにより、俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力を身に付ける。 －「研究セッション」「学際ディベート合宿Ⅰ」などにより、学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力を身に付ける。
教育課程の編成方針	－「研究方法論Ⅱ」「プロジェクトフォーラム」「国内・国際学会運営補助経験」などにより、リーダーシップを発揮して目的を達成する能力を身に付ける。 －「学際ディベート合宿Ⅰ・Ⅱ」「国際フォーラムⅠ・Ⅱ」「国際会議発表」「国際セミナーでのディスカッション」などにより、国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲を身に付ける。 －「研究方法論Ⅰ」「研究セッション」「学位論文作成の指導」などにより、自立して研究計画を遂行できる能力を身に付ける。 －「健康スポーツ科学研究演習Ⅱ」などにより、高度な専門知識を社会で活用する能力を身に付ける。 －「研究方法論Ⅰ」「研究セッション」などにより、深い倫理的知識を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	－ 1年次において、「研究方法論Ⅰ」及び「研究セッション」を必修として、幅広い基礎な研究力・実践力を修得させる。 － 1年次において、「健康スポーツ科学研究演習Ⅰ」（通年）を必修として、研究の応用面についても学修させる。 － 1年次において、研究報告会Ⅰにおいて研究計画書を発表させ、学位取得までの課題を再検討させる。また、指導体制を確定させる。 － 1年次において、次世代健康スポーツ科学履修モデルでは、実践フィールド（学校、競技、地域、企業）を設定し、社会的課題等を設定させる。 － 2年次において、「健康スポーツ科学研究演習Ⅱ」を必修とし、また「課題解決研究Ⅰ、Ⅱ」を通して、より高度な研究力・実践力を修得させる。 － 2年次において、国内・国際学会における研究発表を通して、学位論文に向けた研究活動に関して外部からの評価・指導を受けさせる。 － 2年次において、次世代健康スポーツ科学履修モデルでは実践報告書を作成させる。 － 3年次において、研究報告会Ⅱにおいて研究の進捗を発表させ、学位論文作成までの課題を再検討させる。 － 3年次において、学位プログラム内指導教員3名と、できる限り学位プログラム外指導教員1名（副査予定者）を加えた指導体制において予備審査会を実施させる。 － 3年次において、学位論文審査会において、学位論文の審査を行う。

体育科学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（体育科学）

Doctoral Program in Physical Education, Health and Sport Sciences / Doctor of Philosophy in Health and Sport Sciences

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	スポーツ活動の実践や運動指導の経験を踏まえ、体育・健康・スポーツに関わる諸現象に対して高い関心をもち、そこから派生する諸問題の解決に向けた研究の推進及び成果の公開、さらに教育者・研究者として必要な知識・技能の習得並びに協同して社会的課題に取り組むことに情熱を持つ人材を求める。
入学者選抜方針	– 研究概要と研究計画書をもとに口述試験を行い、研究者としての基礎的な能力および標準履修年限内での学位取得が可能かを評価する。 – 外部英語試験（TOEFL, TOEIC）をもとに、国際情報発信能力を評価する。 入学後、次世代健康スポーツ科学履修モデルの履修を認める学生を別途選抜する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士課程における効果的な学修を支援するため、本学位プログラムでは以下の取り組みを実施している。まず、研究成果を論理的かつ的確に表現する力を養うため、段階的なライティングサポートを提供し、学術論文の執筆能力を育成している。また、複数教員による指導体制を整備し、異なる専門領域の視点を取り入れた学際的な研究指導を行うことで、研究の深化と視野の拡大を図っている。さらに、学会発表や口頭試問に備えたプレゼンテーション指導も行い、伝える力の強化に努めている。加えて、学位取得後の進路を見据えた支援として、本学位プログラム修了生との連携によるキャリア支援フォーラムを開催し、多様なキャリアパスの形成を後押している。これらの取り組みにより、博士課程学生の自立した研究者としての学修を総合的に支援している。
学生同士の交流機会	本学位プログラムでは、学修意欲および研究の質の向上を目的として、学生間のピア効果を高める取り組みを行っている。具体的には、月に一度開催している研究報告会への参加を特に D1 学生に対して義務づけ、発表内容に対する積極的な質疑応答や意見交換を通じて、相互の理解と研究姿勢の向上を図り、また、同学年間の交流を促進することで、学年横断的な学び合いの基盤を形成している。加えて、合宿型の授業を導入し、研究内容の討議や共同作業を通じて、学生同士の関係構築や学術的刺激を得られる環境づくりに努めている。これらの取り組みにより、学生が互いに切磋琢磨しながら学ぶ風土を醸成し、研究活動の活性化につなげている。
教員との交流機会	本学位プログラムでは、大学院生の学修意欲や研究の質の向上を図るため、学生と教員の交流を促進する以下の取り組みを行っている。各学期に開催するキャリア支援フォーラムの終了後に、教員・学生・修了生（OB・OG）を交えた懇親会を実施し、研究分野や立場を超えた自由な意見交換の場を設けている。特に、通常の研究活動では接点の少ない他領域の教員や学生、さらには他大学の教員とも交流できる環境を整えることで、新たな視点の獲得や共同研究の可能性を広げている。また、研究報告会後には、複数の教員からフィードバックを得られる事後指導の機会を設けており、研究内容の深化や課題の明確化に役立てている。これらの取り組みにより、学生の研究活動を活性化させるとともに、教員との信頼関係の構築や学際的な連携の促進を図っている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

博士課程における教育の質の向上に向けては、定期的な自己点検・評価をはじめ、他大学あるいは他専攻・学位プログラムの指導教員を含む第三者評価を実施することで、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程・指導体制の妥当性や指導の適切性を検証する。また、学生による授業評価アンケートや研究進捗の報告会を通じて、教育・研究指導の状況を把握し、個別指導の改善に活かしている。さらに、学位論文の中間発表や予備審査等の機会を設け、複数教員による多面的な指導と評価を行う体制を整えている。加えて、教員の FD（Faculty Development）活動への参加を促し、教育手法の高度化や研究倫理教育の充実にも取り組んでいる。これらの取り組みにより、博士課程教育の質の継続的な向上とその保証を図っている。

コーチング学学位プログラム（3 年制博士課程）
Doctoral Program in Coaching Science

■ 博士（コーチング学）
■ Doctor of Philosophy in Coaching Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

国際的な視野と高い倫理観を備え、コーチング領域における高度な研究能力とコーチング実践力を養うことで、コーチング学に関する研究および教育を先導できる研究者、大学教員および高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	グローバル化している現代社会において、創造的な知性と豊かな人間性を備え、コーチングにおける複合的な課題を実践現場と協働して解決できる人材。
修了後の進路	体育・スポーツに関する専門の学部および学科を有する大学・短大、一般体育の授業を行っている大学・短大、各種競技団体やスポーツ組織等。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する 3 年制博士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（コーチング学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	コーチング学研究法Ⅰ、研究指導科目、論文発表に関する科目、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	コーチング学研究法Ⅱ、研究指導科目、演習科目、他研究室と共同の演習科目、インターンシップ科目、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	コーチング学研究法Ⅰ、研究指導科目、演習科目、研究発表に関する科目、学会発表、ポスター発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	コーチング学研究法Ⅱ、研究指導科目、他研究室と共同の演習科目、大学院共通科目、TA 経験、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	コーチングの哲学と倫理、大学院共通科目（国際性養成科目群）、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、TOEIC 得点、国際会議発表、英語論文など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究マネジメント能力：コーチング学分野における専門知識の体系を理解し、自立して研究を計画・遂行する能力	①コーチング学に関する研究の対象について深く理解したか ②自立した研究者として新しい時代のコーチングに資する知を発信する方法について深く理解したか	コーチング学研究法Ⅰ、研究セミナー、博士論文作成、学会発表など
	7. 実践研究推進力：コーチングにおける実践力の構造を理解し、それを合理的に伝える能力	①コーチング実践に関する個別事例をわかりやすく報告する能力を身につけたか ②個別事例の本質を解釈し、事例研究を推進する能力を身につけたか	コーチング学事例研究法、コーチング事例報告会、学会での実践報告など
	8. 創造力：コーチング学分野の発展に貢献し得る新たな知を創成する能力	①研究成果を分野の異なる研究者にわかりやすく論理的に説明できるか ②研究成果を専門分野の研究者に適切に伝え、質問に的確に答えることができるか	コーチング学研究法Ⅱ、コーチングの哲学と倫理、研究セミナー、博士論文作成、学会発表など
	9. コーチング実践力：コーチング学分野における専門知識を総合して、合理的なコーチングを遂行する能力	①コーチング学において創造された知を総合する能力を身につけたか ②コーチング実践活動を省察し、コーチング学の構築に資する実践知を発信する能力を身につけたか	コーチング学事例研究法、TA、TF、体育スポーツ局活動など
	10. インテグリティ：コーチングに関する哲学および倫理について深く論考し、教育できる能力	①コーチング学分野の研究者にふさわしい倫理的知識を身につけたか ②新しい時代を担うコーチにふさわしい倫理観を身につけ、それを他のコーチに伝えられるか	コーチングの哲学と倫理、TA、TF、体育スポーツ局活動など

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を確認し評価する。 研究マネジメント力の基礎、コーチングにおける実践力の構造及びコーチングの哲学、倫理に関する知識の習得とコーチング実践力の向上を、コーチング学学位プログラム開設科目（4 科目必修）の授業での学修、討論、報告の内容によって授業担当教員が評価する。 3 回の研究セミナーを通して、新たな知の創生に向けての研究の進捗を確認し、コーチング事例報告会において、専門知識を統合した合理的なコーチング遂行力をセミナー及び報告会担当教員が評価する。 また、海外交流事業参加者らによる報告会では国際性への意欲を評価する。 さらに、関連学会における論文発表、日常のコーチング実践活動についての自己評価を行う。
学位論文に関する評価の基準	筑波大学大学院学則に規定された要件を充足した上で、学位論文が下記の評価項目について妥当と認められ、かつ、最終試験によって以下の 2 つの基準を満たすことが確認され合格と判定されること。 1. 学位論文において、コーチング学分野における新たな学術的知見が十分含まれる。 2. コーチング学分野で自立した研究者として研究活動を行うに必要な高い研究能力を有する。 （評価項目） 1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、コーチング学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. コーチング学分野の発展に寄与するオリジナルな研究成果が、学術論文として発表するのに相応しい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、コーチング学分野の博士論文に相応しい形式にまとめてあること。 （審査体制） 博士学位論文の審査等を実施するために設置する学位論文審査委員会は、主査 1 名と 3 名以上の副査で構成する。 1. 主査は、研究群における研究指導担当教員とする。 2. 主査、副査は博士の学位を有する者とする。ただし、副査については、博士の学位を有していない者を例外的に 1 名まで認めることができる。 3. 審査委員のうち少なくとも 1 名は､コーチング学学位プログラム以外から選出される者とする。なお、本学大学院の他研究群、他大学の大学院教員又はそれと同等以上の研究業績を有するとコーチング学学位プログラム教育会議が認めた者とすることができる。

コーチング学学位プログラム（3 年制博士課程） ／ 博士（コーチング学）
Doctoral Program in Coaching Science / Doctor of Philosophy in Coaching Science

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

コーチング学は、主に競技スポーツにおけるトレーニングの目標、原理、方法、計画などを体系化した理論である。1950 年代から東欧圏を中心に発生し、その後、国際的に研究が進んでいる。コーチング学はスポーツに関する国際学会においても、Coaching Study または Coaching Science として独自の領域を形成しており、博士（コーチング学）（Ph.D. in Coaching Science）は、国際的に通用する学位名称として認知されることになる。

本学位プログラムは、一般コーチング学、トレーニング学、スポーツ運動学、個別コーチング学（個人）、個別コーチング学（球技）、個別コーチング学（武道）の 6 領域における研究力・専門知識・倫理観とともに、人間総合科学における幅広い基礎的素養、広い視野、社会の多様な場での活躍を支える汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	本学位プログラムは、国際レベルの選手やチームへのコーチング経験と高度の研究能力を併せ持った教員によって教育と研究を展開する。 －「コーチング学研究法Ⅰ」（専門科目）により、知の創成力、コミュニケーション能力、および研究マネジメント能力を身に付ける。 －「コーチング学研究法Ⅱ」（専門科目）により、マネジメント能力、リーダーシップ力、実践研究推進力、および創造力を身に付ける。 －「コーチング学事例研究法」（専門科目）により、実践研究推進力、創造力、およびコーチング実践力を身に付ける。 －「コーチングの哲学と倫理」（専門科目）により、国際性、創造力、およびインテグリティを身に付ける。 －「コーチング事例報告会」により、コミュニケーション能力、実践研究推進力を身に付ける。 － 研究セミナー 1 ～ 3、学会発表 1 ～ 3、論文投稿 1 ～ 2、研究報告会、予備審査会、学位論文審査会により、知の創成力、マネジメント能力、コミュニケーション能力、研究マネジメント力を総合的に身に付ける。 － コーチング学学位プログラム海外交流事業により、国際性、創造力を身に付ける。 － コーチング実践活動により、リーダーシップ力、コーチング実践力を身に付ける。 － 体育系以外の修士課程を修了した者は、体育学学位プログラム（博士前期課程）が開設している科目から 10 単位程度履修し、主に初年度に研究の基礎となる専門知識を身に付ける。 なお、学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目から 2 単位を履修することを推奨する。
学修の方法 特色的な教育	本学位プログラムを担当する教員は、コーチング領域で国内外の指導者として活躍し、かつ極めて高度の教育研究上の指導能力があると認められる教員である。 － 博士論文のための研究指導は、本学位プログラムを担当する 3 名以上の教員によって構成されるアドバイザリーコミッティを中心に実施する。 － アドバイザリーコミッティは、指導学生に各種スポーツの競技団体等が主催する事業や国際大会、国際セミナー等への積極的な参加を促し、コーチングに関わる実務能力の向上とコミュニケーション能力の向上も支援する。

コーチング学学位プログラム（3 年制博士課程） ／ 博士（コーチング学）
Doctoral Program in Coaching Science / Doctor of Philosophy in Coaching Science

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	一定レベル以上の競技歴もしくは指導歴を有し、コーチングに関わる様々な課題に対し、研究を通して真摯に解決しようとする高い志を持っている人材を求める。さらに、世界に目を向けて活動しようとする情熱を持った人材を求める。
入学者選抜方針	以下の合計得点（500 点満点）によって選抜する。 – 書類審査（200 点） – 英語（100 点） – 口述試験（200 点）

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	コーチング学学位プログラムに所属する学生の国際性を涵養することを目的に、海外で開催される国際学会等で研究成果の発表、海外の大学、研究機関等での調査・研究、海外において研究テーマに関する資料の収集などに旅費、宿泊費等の経費を支援する。
学生同士の交流機会	学生代表を 1 名選出し、学位プログラム内の学生コミュニティの円滑な活動がなされている。また、専門領域が異なる複数の学生が共同利用する部屋を複数配置し、学生間の交流の場になっている。
教員との交流機会	入学時に、世話教員と 2 名の教員によるアドバイザリーコミッティを組織し、研究支援に限らず、コーチング実践や日常の生活に関わる多様な支援をする体制が整っている。研究セミナーや事例報告会後には、教員、学生による懇談会が行われ、学位プログラム内の教員、学生の幅広い交流の機会になっている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育課程委員会において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。また、教員会議おいて、授業評価アンケートの結果や、学生との懇談などから得られた教育の質に関するフィードバックを参考に、教育の体制や方法を検討する。さらに、トップレベルの指導者との交流などのコーチング学の特徴的な内容を含む FD の開催によって、教員の資質能力向上に取り組む。

スポーツウエルネス学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Sport and Wellness Promotion

■ 博士（スポーツウエルネス学）
■ Doctor of Sport and Wellness Promotion

人材養成目的 / Program Educational Objectives

すでにスポーツまたはウエルネス領域で活躍する修士号取得者に対し、更なる研究・分析能力を養い、本領域における課題解決能力として国内外における交渉力や高度な実践的マネジメント能力を育成する。すなわち博士レベルの高度な研究力を保有した上で、イノベーションが必要な難度の高い課題解決のための政策力・プロジェクト実行力・マネジメント力を併せ持つ高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	国内外において、スポーツウエルネス領域における難度の高い課題を解決するためのプロジェクトを上手くマネジメントし、一定の成果を出せる人材。
修了後の進路	政府各機関、関連シンクタンク、競技団体、地方自治体、企業、健康・医療系団体、NPO 等をはじめスポーツウエルネス関連組織または団体の幹部もしくは幹部候補生。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（スポーツウエルネス学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	課題解決型データ分析論特講 1、課題解決型データ分析論特講 2、スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、スポーツウエルネス研究演習Ⅱ、スポーツウエルネス研究演習Ⅲ、博士論文作成、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、スポーツウエルネス研究演習Ⅱ、スポーツウエルネス研究演習Ⅲ、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、スポーツウエルネス研究演習Ⅱ、スポーツウエルネス研究演習Ⅲ、課題解決型プロジェクトワークⅠ、課題解決型プロジェクトワークⅡ、学会発表、ポスター発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、スポーツウエルネス研究演習Ⅱ、スポーツウエルネス研究演習Ⅲ、課題解決型プロジェクトワークⅠ、課題解決型プロジェクトワークⅡ、プロジェクトに参加、プロジェクトのマネジメント経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、スポーツウエルネス研究演習Ⅱ、スポーツウエルネス研究演習Ⅲ、国外での活動経験、外国人（留学生を含む）との共同研究、国際会議発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：スポーツウエルネス分野における最新の専門知識に基づいて先端的な研究課題を設定し、自立して研究計画を遂行できる能力	①スポーツウエルネス分野に関する先端的な研究計画を立案、作成ができるか ②スポーツウエルネス分野に関する先端的な研究成果を得て、博士論文を完成させ、発表することができるか	課題解決型データ分析論特講 1、2、スポーツウエルネス研究演習 I 、II、III、課題解決型プロジェクトワーク I 、II、国内外の学会での発表や論文発表、博士論文作成など
	7. 専門知識：スポーツウエルネス分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	スポーツウエルネス分野における先端的かつ高度な専門知識を修得し、運用できるか	課題解決型データ分析論特講 1、2、スポーツウエルネス研究演習 I 、II、III、課題解決型プロジェクトワーク I 、II、専門領域の学会や学会が主催する研修会への参加など
	8. 倫理観：スポーツウエルネス分野の研究者または高度専門職業人にふさわしい倫理観と倫理的知識、および専攻する特定の分野に関する深い倫理的知識	スポーツウエルネス分野の高度な研究能力、倫理観、深い倫理的知識を修得しているか	スポーツウエルネス研究演習 I 、II、III、課題解決型プロジェクトワーク I 、II、倫理講習会受講、APRIN など倫理関連の e-learning 受講など

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって、以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 本学位プログラムでは、「スポーツウエルネスの推進に携わる高度専門職業人を養成する」という人材養成目的に基づき、所定の修了要件を満たした者のうち、下記の基準を充足した者を学修成果が十分であると認定する。 (1) 計画段階 1 年次秋学期に実施する博士論文計画発表を経て、各科目において定められた評価基準に基づき、知識・技能・態度の観点から達成度評価表（ルーブリック）を用いて成績評価を行い、学位授与の方針に掲げる各コンピテンスの修得状況を確認する。 (2) 中間段階 2 年次秋学期末に実施する博士論文中間報告会において、各研究指導担当教員および 2 名の副指導教員が達成度評価表（ルーブリック）に基づき、研究構想力・実践力・発信力、および研究の進捗状況の妥当性について審査する。 (3) 最終段階（博士論文審査） 最終成果発表会および学位論文審査においては、研究の目的・方法・結果の妥当性と学術的意義が示されていることを条件とし、学位論文審査委員会がルーブリックに基づく審査および口述試験を実施する。その後、教育会議において博士学位プログラムの全教員が最終達成度審査を行い、学修成果の到達状況を総合的に判定する。
学位論文に関する評価の基準	学位論文が満たすべき水準： 筑波大学大学院学則に規定された要件を充足した上で、学位論文が 1. 理念と方法に対する基礎的理解 2. 基本政策や戦略を企画・立案・分析する能力 3. 必要な資源を査定しシステム化する能力 4. システム効果的、効率的にマネジメントする能力 5. 社会変化を先取りする新たな総合的プログラムを開発する能力 の 5 つの評価項目について妥当と認められ、かつ本審査によって以下の 2 つの基準を満たすことが確認され合格と判定されること。 1. 学位論文においてスポーツウエルネス学分野における新たな学術的知見が十分含まれる。 2. スポーツウエルネス学分野で自立した研究者として研究活動を行うに必要な高い研究能力を有する。 審査委員の体制：博士学位論文の審査等を実施するために設置する学位論文審査委員会は、主査 1 名と 3 名以上の副査で構成する。 審査方法及び項目等：博士論文、予備審査、本審査（発表と口頭試問）により、総合的に判断する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

俯瞰的な視野と柔軟な思考力を有し、様々な領域の人材とチームを組んで課題を解決する能力及び最先端の研究手法を駆使し、グローバルなレベルで問題解決できる能力を育成するための教育課程を編成する。

教育課程の編成方針	− 知の創成力：課題解決型データ分析論特講 1、課題解決型データ分析論特講 2、スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、スポーツウエルネス研究演習Ⅱ、スポーツウエルネス研究演習Ⅲなどで修得する。 − マネジメント能力：スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、スポーツウエルネス研究演習Ⅱ、スポーツウエルネス研究演習Ⅲ、課題解決型プロジェクトワークⅠ、課題解決型プロジェクトワークⅡなどで修得する。 − コミュニケーション能力：スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、スポーツウエルネス研究演習Ⅱ、スポーツウエルネス研究演習Ⅲ、課題解決型プロジェクトワークⅠ、課題解決型プロジェクトワークⅡ、学会発表などで修得する。 − リーダーシップ力：スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、スポーツウエルネス研究演習Ⅱ、スポーツウエルネス研究演習Ⅲ、課題解決型プロジェクトワークⅠ、課題解決型プロジェクトワークⅡなどで修得する。 − 国際性：スポーツウエルネス研究演習Ⅱ、スポーツウエルネス研究演習Ⅲ、国際会議発表などで修得する。 − 研究力：課題解決型データ分析論特講 1、2、スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、II、III、国内外の学会での発表や論文発表、博士論文作成などで修得する。 − 専門知識：課題解決型データ分析論特講 1、2、スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、II、III、専門領域の学会や学会が主催する研修会への参加などで修得する。 − 倫理観：スポーツウエルネス研究演習Ⅰ、II、III、倫理講習会受講などで修得する。 なお、学生の専攻分野を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、学術院共通専門基盤科目から 1 単位を履修することを推奨する。

学修の方法 **特色的な教育**	− 1 年次に、専門基礎科目として合計 2 単位履修する。課題解決型データ分析論特講 1 では、自然科学及び社会科学のデータの分析手法や研究デザイン能力を身につけ、2 ではビッグデータの解析力を高める。 − 専門科目として「スポーツウエルネス研究演習Ⅰ」「スポーツウエルネス研究演習Ⅱ」「スポーツウエルネス研究演習Ⅲ」合計 3 単位履修する。 演習Ⅰ（1 年次）では中間報告会Ⅰの研究発表を行い、演習 II（2 年次）では、中間報告会 II における研究発表を行う。演習 III（3 年次）では、予備審査、博士論文審査での発表及びそれらに至る過程で内外からのアドバイザリーグループ教員による指導を単位化する。中間報告会Ⅰ・II、予備審査で次の段階に進むための合否判定を行う。また、1 ～ 3 年次の間に国際学会での 1 回以上の発表、または海外での調査研究を行う。国際学会は、論文審査委員会が認めたものに限る。 − 専門科目として「課題解決型プロジェクトワークⅠ」「課題解決型プロジェクトワークⅡ」合計 3 単位履修する。 スポーツ分野では、スポーツに関わる官庁、地方自治体、スポーツ統括組織、競技団体等の機関、ウエルネス分野では、健康増進に関わる官庁、地方自治体、NPO、民間等の機関において、学んだ知識や能力を実務に活かすための経験やトレーニングを行う。事前計画、フィールドワーク、事後報告（報告書の作成、発表）の 3 段階で構成される。 以上計必修科目 8 単位を取得する。 − 学生ごとに、複数指導体制（研究指導教員 1 名、メンター教員 2 名：うち 1 名は客員教員）を整える。指導教員及びメンター教員は、入学時から担当学生の指導にあたり、個別履修プランの設定をはじめ教育全般の指導にあたる。研究指導教員は、博士論文及び課題解決型プロジェクトワークの主指導を担当する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	体育学または保健学分野に関連する研究業績（修士号）、スポーツプロモーション分野またはウエルネスプロモーション分野で 2 年以上の社会人実践経験、ならびに国際的マネジメントが推進可能な語学力及びコミュニケーション能力を有する者を求める。
入学者選抜方針	入学者選抜は、1 次で書類審査を行い、2 次では口述試験による専門力審査を行う。配点は書類審査 80 点、外国語試験（TOEIC の点数）40 点、口述試験 80 点で合計得点により選抜する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 学生ごとに研究指導教員 1 名と副指導教員 2 名（うち 1 名は外部指導教員）による複数指導体制を整備 − 入学時から個別履修プランの策定支援を行い、研究・教育活動全般にわたる継続的な指導を提供 − 倫理講習会や e-learning（APRIN 等）を通じて、研究倫理の理解と実践を支援 − 国際学会発表や海外調査研究の機会を設け、語学力・国際的視野の育成を支援 − 博士課程大学院生室の設備充実と利用環境の改善（PC・ソフトウェアの最新化、快適な学習空間の提供） − 資料室における有料図書・学術雑誌の購入・更新の強化（学修や研究に必要な情報へのアクセス向上） − 外部研究所や企業との連携強化による学修・研究機会の拡大（共同研究・研究会の実施）
学生同士の交流機会	− 中間報告会、プロジェクトワーク発表会、成果発表会において、学生間のピアレビューを通じた相互評価とフィードバックの機会を提供
教員との交流機会	− 研究演習Ⅰ～Ⅲの各段階で、アドバイザリーグループ教員による指導を単位化し、継続的な対話と助言を促進 − 中間発表会での全専任教員からのフィードバック − プロジェクトワーク発表会では、主指導教員・副指導教員・外部指導教員との質疑応答を通じた深い気づきと学びを実現 − 学位論文審査では、複数教員による審査体制を通じて、専門的かつ多角的なフィードバックを得る機会を提供

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

− ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの三つの方針に基づき、一貫性と体系性のある高度専門職業人養成のための教育課程を設計している。
− プロジェクトワークおよび学位論文の評価基準を明確化し、透明性･公平性の高い評価を実施することで、学修成果の可視化と教育の質保証を図っている。
− 達成度評価表（ルーブリック）に基づき、博士課程に求められる研究構想力・実践力・発信力の修得状況を段階的に評価し、その結果を指導方針や教育内容の改善に活用している。
− 教員による個別指導体制とピア評価を組み合わせ、多面的かつ専門性の高い視点から教育の質を担保している。
− 国際学会発表、外部機関との共同研究・連携等を通じて、教育内容の社会的・国際的妥当性を定期的に検証し、博士課程にふさわしい研究水準を維持している。
− カリキュラム委員会等において定期的なカリキュラム見直しを行い、学生および教員からのフィードバックを反映した改善サイクルを構築することで、教育活動全体の質向上を図っている。
− 倫理教育（APRIN などの e-learning や倫理講習会）を必須とし､高度研究を担う者としての倫理性を養い、研究および教育活動の健全性を保証している。
− 年 1 回の学生アンケートを実施し、その結果をもとに学生懇談会を開催して課題を抽出し、改善案を提示することで教育環境の向上に取り組んでいる。

芸術学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Art

■ 博士（芸術学）
■ Doctor of Philosophy in Art

人材養成目的 / Program Educational Objectives

造形芸術に関する創造的な研究能力を有し、卓越した専門的知識と実技能力によって、公的機関および企業等、社会の様々な領域において貢献しうる研究者、および確固たる教育能力と研究能力を有する大学教員を養成する。

養成する人材像	造形芸術に関する幅広い学識と高度な研究・開発能力および実技能力によって、教育機関、行政機関、企業等、国内外における社会の様々な方面において、研究、教育の指導的役割を担う人材
修了後の進路	大学教員、美術館・博物館学芸員、行政機関や企業等の研究者。その他、画家、版画家、彫刻家、書家、造形作家、写真家、建築家、デザイナー、イラストレーター、映像作家、評論家等の、芸術ないしデザインにおける創造的表現能力を有する研究者

芸術学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（芸術学）
Doctoral Program in Art / Doctor of Philosophy in Art

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（芸術学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人物に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自身の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、TA・TF 経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、国外での活動、国際共同研究（留学生を含む）、TOEFL、TOEIC 等受験、DC 展での企画・運営・作品発表、国際学会・会議等における論文発表・研究発表、国際コンクール等への応募など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 独創力：芸術学領域において、一定の学術的意義を有した独自の研究を遂行できる能力	①芸術ないしデザインの分野において、独創的な課題ないし解決を発見したか ②先行研究に見られない、独自の観点をもって研究を遂行したか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	7. 活用力：芸術学領域において、信頼性ある学術的方法論を活用ないし提案する能力	①芸術ないしデザインの分野において認められた、信頼性ある学術的方法論を用いたか ②新規で有用な学術的方法論を提案し実証することができたか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	8. 開発力：芸術学領域の学術進展に寄与する、新規で有用な信頼性ある結論を導く能力	①芸術ないしデザインの分野において、学術進展に寄与するため、視野を拡大する課題を設定したか ②新しい課題ないし目標を設定し、新規で有用な知見を導いたか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
	9. 展開力：芸術学領域の学術進展に寄与する、研究発展性を見据える能力	①芸術ないしデザインの分野において、学術進展に寄与するため、発展性のある課題を設定したか ②将来、研究の展開が予想される結論を導いたか	芸術学特別演習Ⅰ A、芸術学特別演習Ⅰ B、芸術学特別演習Ⅱ A、芸術学特別演習Ⅱ B、DC 展での企画・運営・作品発表、論文発表、学会発表、公募展、コンクール等への応募など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度自己評価シート」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 －「研究計画書」（年度初め）及び「研究指導成果報告書」（年度末）によって、各年次における研究の計画と成果を点検し、学修・研究に関わる取組とその成果をもとに知識・能力の到達度について主指導及び副指導による評価と指導を行う。 －「対応する主な学修」における成果（「芸術学特別演習Ⅰ・Ⅱ」における研究発表、授業外の活動等）をもとに「評価の観点」に従って知識・能力の到達度を点検し、12 月に実施する達成度評価（達成度自己評価シート）によって学位授与の方針に基づく知識・能力の修得状況を確認し、評価する。 － 達成度評価におけるコンピテンス項目の数値基準（コンピテンス取得数：1 年次終了までに 18 個、2 年次終了までに 36 個、学位論文提出時までに 40 個）を設定している。 － 学位論文審査委員会において博士学位論文の審査を行うとともに、予備審査時に提出された「達成度自己評価シート」によって学位を受けるために必要な知識・能力の有無を判定する。		

学位論文に関する評価の基準	学位論文が満たすべき水準として、筑波大学大学院学則に規定された要件を充足し、学位論文が下記の評価項目について妥当と認められ、かつ最終試験で合格と判定されること。 1. 関連分野の国内外の研究動向及び先行研究の把握に基づいて、芸術学分野における当該研究の意義や位置づけが明確に述べられていること。 2. 芸術学分野の発展に寄与する独自の研究成果が、学術論文として発表するのにふさわしい量含まれていること。 3. 研究公正についての十分な知識に基づき、研究結果の信頼性が十分に検証されていること。 4. 研究結果に対する考察が妥当であるとともに、結論が客観的な根拠に基づいていること。 5. 研究の背景、目的、方法、結果、考察、結論等が、芸術学分野の博士論文にふさわしい形式にまとめてあること。学位論文審査委員会は、主査 1 名、副査 3 名以上、計 4 名以上で構成される。審査では 2 回以上の口述試験と公開発表を行うとともに、最終試験を受ける。 なお、学位論文の審査を願い出ようとする者は、事前に学位プログラムにおける予備審査に合格しなければならない。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

芸術学学位プログラムは、芸術ないしデザインの各領域を専門とする研究のほか、隣接関連領域と連携し学際性を強化した研究を展開する。主指導教員と副指導教員による、博士論文執筆の個別指導と助言を行い、全教員の参加による「芸術学特別演習Ⅰ・II」における指導と評価によって、国内外の学会における審査付研究発表および学術誌への査読付論文投稿に必要な力量や実技能力を養成する。

教育課程の編成方針	− 「芸術学特別演習Ⅰ・Ⅱ」（必修）によって、1. 知の創成力、2. マネジメント能力、3. コミュニケーション能力、4. リーダーシップ力、5. 国際性の各コンピテンスの能力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 各年次において、主指導教員と副指導教員による個別指導を行う。 − 各年次において、「研究計画書」および「研究指導成果報告書」を提出する。 − 各年次において、作品制作を主たる研究領域とする者は、作品展示によって研究成果を公開する。 − 1・2 年次において、各学期に「芸術学特別演習Ⅰ・Ⅱ」を実施し、複数の教員による口頭試問を行う。 − 3 年次において、予備審査委員会による審査を行う。 − 3 年次において、学位論文審査委員会は、最終試験と博士学位論文の審査を行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	理論研究を主とする場合には、専門領域に関する知識および知的探求能力とともに、芸術に対する深い理解と感受性を有した人材を求める。制作研究を主とする場合には、独自の表現世界を確立するための創造的態度と能力とともに、分析的・合理的思考力を有した人材を求める。
入学者選抜方針	修士論文またはそれと同等と認められる研究内容、および入学後の研究計画について口述試験を行う。またこれに基づき、専門領域に関する質疑応答を行う。

芸術学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（芸術学）
Doctoral Program in Art / Doctor of Philosophy in Art

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 副指導教員体制により、研究指導の客観性を保ち、多様な相談に対応する体制を整えている。 − 授業時間外における自主的な学修・研究活動（論文・作品の発表、学内外プロジェクト参加等）を推奨し、自主制作・自主研究のような科目外の活動を学習成果の要素としてとらえることを学生に伝え、学生の研究意欲を高めている。 − 教育組織の内部ないし外部における論文の投稿機会を周知し、学生の論文発表をサポートしている。
学生同士の交流機会	−「芸術学特別演習Ⅰ、Ⅱ」の研究成果発表会において、履修生が進行に関わるとともに、質疑応答等の機会を通じて学年や分野の異なる学生間の学びを促している。 − 主に制作系学生の研究発表の場として展覧会「DC 展」を開催し、研究の成果物である作品の展示・公開によって研究に関連する制作実践を検証する機会を設けている。同展では、様々な表現媒体の領域に所属する学生の作品展示のほか、制作系以外の学生の研究内容を紹介するパネルの掲示を行っており、多様な領域の出品者による主体的な企画・運営を通して異分野間の交流を促している。
教員との交流機会	−「芸術学特別演習Ⅰ、Ⅱ」の研究成果発表会に学位プログラム担当教員全員が参加し、指導教員のほか、指導教員以外の教員による助言・指導を通して多様な視点を交えた意見交換の機会を設けている。 −「芸術学特別演習Ⅰ、Ⅱ」において、博士後期課程修了者や学外の研究者による「特別講義」を実施することで、学生が研究者としてのキャリア形成について考え、学修意欲を高める機会を提供している。 − 本学位プログラム主担当教員主催の研究プロジェクト等への参加によって学生と教員の交流を活性化するとともに、学外の研究者や作家等と交流する学会、美術公募団体、各種研究会への参加も促し、芸術分野における先達とのコミュニケーションによって学生個々の学修意欲を高め、研究の質の向上につなげている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

学修教育検討委員会等において、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

− 教務情報や IR データにより学生の学修状況等を確認する。
− 芸術関連組織における学修・研究の課題を抽出し、各組織共催による FD 研修会を開催する。

デザイン学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Design

■ 博士（デザイン学）
■ Doctor of Philosophy in Design

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人のこころをより良い状態にする製品や環境を生み出す実践的な力を修得し、人と人のつながりを作り明るく充実したものとする社会システムの創造を目指し、豊かで建設的な地域や社会を育み維持再生するための創造力を活用できる、国際的トップリーダーの資質を持ち、産業界や行政など多様な研究・教育機関の中核を担う研究者を養成する。

養成する人材像	横断的・実践的かつ国際的な学修を実践し、地域や文化の壁を越えた問題解決策を提案する意欲と、成果を生み出す粘り強さを持ち、目利き力（課題抽出能力）、突破力（計画立案能力、論理的説得力）および専門的研究を遂行する任務完結力を備えた人材。
修了後の進路	産業界や大学等の研究組織における研究者、デザイン、建築にかかわる企画開発者、エンタテインメント産業のデザイナー・アーティスト、デザインコンサルタント等

デザイン学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（デザイン学）
Doctoral Program in Design / Doctor of Philosophy in Design

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（デザイン学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導するデザイン学特別研究 B に加えて、博士論文研究の推進、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導するデザイン学特別研究 B を含むデザイン学特別研究に加えて、研究倫理、研究会等の運営、達成度自己点検など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導するデザイン学特別研究 B を含むデザイン学特別研究に加えて、サイエンスコミュニケーション特論、学会発表、ポスター発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導するデザイン学特別研究 B に加えて、インターンシップ、TA、TF 経験、研究会の運営、プロジェクトの参加経験など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	デザイン学特別研究 D、海外研修など国際性について学ぶ科目の履修または、国外での活動経験、留学生との交流、TOEFL/TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 構想・思考力：高度な課題抽出能力(目利き力)と専門的研究計画立案能力	専門的な問題の細部にも精通し、高い課題抽出能力を活かして研究・制作を立案・実施する力を身に付けたか。	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導するデザイン学特別研究 B を含むデザイン学特別研究に加えて、学会等での発表成果を参考にする
	7. 分析力：高い視野に立って広い視点から問題を解決す高度な問題分析力	①専門分野における高度で優れた研究を実施するための高い専門的問題分析力を身についたか。 ②広い分野と高い専門的知識から、総合的なデザイン課題を分析する能力を身につけたか。	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導するデザイン学特別研究 B を含むデザイン学特別研究査読付き学術雑誌における論文発表審査制度の確立している組織によって国際的 に評価された作品を参考にする
	8. 解決力：高度な専門力に裏付けられ、新しい解決策を生み出し、成果を社会や学術界に提案する力	博士論文のための研究やインターンシップ等、研究の実践により高度な問題解決力（任務完結力）・強靱な突破力（計画立案能力）を獲得したか。	当該学位プログラムの全ての学生に対して履修することを指導するデザイン学特別研究 B を含むデザイン学特別研究インターンシップを行った場合はインターンシップ先からの評価を参考にする
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 1 年次春学期末に全研究指導教員による研究構想発表会を実施し、研究方針の確認と指導を行い、秋学期末に第 1 回達成度評価を実施する。 – 2 年次春学期末に公開発表会、秋学期末に第 2 回達成度審査を実施し、学修状況の確認と指導を行う。 – 3 年次春学期末に博士論文の予備審査（非公開）を実施し、学修状況の確認と最終達成度審査に向けた指導を行う。 – 予備審査合格後、本審査論文を提出されたものについて公開発表会を実施し、主査、副査 3 名以上で構成される論文審査委員会により博士学位論文の審査を行う。また、本審査と同時に、最終達成度審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	デザイン学や関連分野の複合的研究課題を自ら設定・解析し、得られた事実に基づいた論理的思考を経て、客観的な結論を博士論文にまとめ、学位論文審査委員会によって論文を審査し、口述試験を経た上で合否を判定する。 学位論文審査会は主査および 3 名以上の副査により構成され、口述試験により審査する。 1. デザイン学に関する専門的並びに学際的見識に基づいて理論を構築し、社会に発信する能力が認められること。 2. デザインに関する最高度の専門的な知識と技術を有し、デザインに関する研究を論理的かつ科学的に推進する能力が認められること。 3. デザイン学の深い学識を基盤に、国内外の教育・研究機関での人材育成や学術活動を牽引できる能力が認められること。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

デザイン学学位プログラムは、製品や企画、エンタテインメント、構成、建築、空間計画などの産業や社会にかかわる多様なデザインの研究を遂行するために、高次の専門的課題抽出力（目利き力)、専門的かつ総合的方法論を合わせ広い視点から研究を計画立案する能力、研究実施力、研究完結力、論理的説得力、国際コミュニケーション能力と提案力を育てる。具体的には、構成学、感性科学、視覚心理学などを含むデザインの諸分野に加えて、システム情報工学、環境工学、生理学・人間工学、障害科学など、関連する分野の教員による分野横断的で実践的な学修課程を編成する。

教育課程の編成方針	− 学位授与の方針に掲げたコンピテンスに対応する主な学修を通じて学修成果を得られるように教育課程を編成する。 − 専門科目 デザイン学特別研究により、総合的な研究計画立案力、研究実施力、研究完結力を身に付ける。 − 大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目による、学際的な知識と幅広いデザイン知識の修得を奨励する。 − デザイン学特別研究、インターンシップにより、実践的な課題抽出力、計画立案力、説得力を身に付ける。 − デザイン学特別研究、海外研修により、デザイン、設計、企画を成功させるための国際交渉力とネットワーク構築力を身に付ける。
学修の方法 特色的な教育	− 1 年次に、「研究計画届」を提出し、研究内容に応じた主指導教員と副指導教員を決定する。 − 1 年次、2 年次の各学期に設定された特別研究を履修し学期末の発表によりその進捗を確認する。 − インターンシップ、海外研修を計画的に履修し、研究の応用力、国際展開力を深める。 − 査読付き学術雑誌での論文発表、審査付き国際コンペでの作品発表等を通じて研究の専門性を深める。 − 2 年次中に博士論文中間指導を受け、3 年次 10 月に博士論文を提出する。

デザイン学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（デザイン学）
Doctoral Program in Design / Doctor of Philosophy in Design

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	デザイン学またはデザイン学に関連する研究業績があり、地域や文化の壁を越えたデザイン問題を理論的に解決する意欲および資質のある人材、常に新しい研究課題を生み出すことに挑戦し、成果を生み出す粘り強さを身に付ける意欲のある人材を求める。
入学者選抜方針	選抜においては、提出書類によって、研究歴、学力水準、能力をみると共に、デザインの表現技能に優れた者のみならず多様な研究教育分野からの応募が可能になるように専門領域に関する口述試験によって専門適性を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 入学時のオリエンテーション、研究計画届策定、および達成度評価の各段階において、学修成果を生み出すために必要な学びの状況を確認し、大学院共通科目・基礎的な科目などの履修機会を学生と共に検討しながら学修環境を継続的に改善し、整備する体制を整えている。 − 副指導教員体制により、研究指導の客観性と多様な相談への対応体制を整えている。 − 所属年次以外の演習や公開発表会への参加機会を供し、自身の研究体制を客観的に見直す契機とし、研究の深化を支援している。 − 著作権ワークショップ等の FD を実施し、研究を進める上で必要な知識や倫理観を高める機会を提供している。
学生同士の交流機会	− 所属年次以外の演習や成果発表会への参加機会を供し、質疑応答の場などを通じて、学年 / 組織を超えた学生同士の交流機会を促進する仕組みを教育課程に組み込んでいる。 − TA・チューター制度や学生プロジェクトの推進により、学生同士が学び合う機会を継続的に生み出す仕組みを創出している。 − 学術院で開催される学生の集いを通じて、専門を越えた学生同士の交流機会を供している。
教員との交流機会	− 学術院 / 学位プログラムで企画する FD について学生の参加を促し、共通の課題意識を認識することによる交流の向上を支援している。 − 学術院で開催される学生の集いを通じて、専門を越えた教員との交流機会を供している。 − デザイン学特別研究等の成果発表会等に学位プログラム担当教員全員が参加し、意見交換などを通じて指導教員 / 指導以外の教員との交流機会を供している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

- 学位プログラムの理念、活動状況、授業・プロジェクト等の学生の活動状況等について、年度毎にまとめ、Design Discourse DPD として発行し、広報に繋げるとともに内外の指導を仰いでいる。
- 学位プログラム運営会議の中に、教務委員会（DP に関わる事項）、カリキュラム委員会（CP に関わる事項）、入試委員会（AP に関わる事項）、FD 委員会（教育力向上に関わる事項）、学生委員会（学修支援体制に関わる事項）を置き、それぞれの委員会で年度前半に過年度実績に対する点検を行い、次年度に向けての改善事項を検討する。
- 改善事項のうち、教育力向上に関わる課題、学修支援体制に関わる課題などについて FD 委員会で整理して全学 / 学術院との連携も含めて FD を立案し、教育力向上に努める。
- 運営会議において検討結果を総合的に確認し、必要な改善目標を立案したうえで点検評価報告書にとりまとめ、必要に応じてそれらを反映したスタンダードの更新計画を取りまとめ、次年度に向けた計画とする。
- 検討事項と対策をまとめ、学位プログラムの HP 等を通じて公表し、内外の指導を仰ぐ体制としている。

世界遺産学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Heritage Studies

■ 博士（世界遺産学）
■ Doctor of Philosophy in Heritage Studies

人材養成目的 / Program Educational Objectives

世界の文化遺産・自然遺産の社会的・国際的役割を、地球環境と人間社会の持続可能性の達成を目的とする国際社会のアジェンダ、国際ガバナンスとの関係のもとに総合的に理解し、遺産が直面する問題の所在を政治・経済・社会・自然的要因に関連付けて分析し、その解決のための理論・技術を研究する高い能力を有する世界遺産学の研究者・大学教員、世界のトップリーダーとなる高度専門職業人を育成する。

養成する人材像	世界の文化遺産･自然遺産の保護において、世界に貢献するという明確な意思及び態度、倫理観、国際社会、特に国際機関における議論の場で通用するコミュニケーション能力・交渉力、国際社会におけるニーズを的確に把握して課題を解決する能力、世界の文化遺産・自然遺産を次世代に伝えていくことができる世界遺産学の研究者・教育者としての能力を持った人材を育成する。
修了後の進路	大学等教育機関の教員、研究者及び国や地方公共団体の職員、研究員等。文化遺産保護・国際協力分野の公的機関やコンサルタント関連企業等の職員、研究員 ほか。

世界遺産学学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（世界遺産学）
Doctoral Program in Heritage Studies / Doctor of Philosophy in Heritage Studies

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（世界遺産学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	世界遺産学特別研究、インターンシップ、学会発表など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	世界遺産学特別研究、インターンシップ、学会発表など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	世界遺産学特別研究、インターンシップ、学会発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	世界遺産学特別研究、インターンシップ、学会発表など
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	世界遺産学特別研究、国際インターンシップ、海外留学、海外学会発表など
	6. 共通知の展開力：文化・自然遺産保護に共通する知識を社会に役立てる能力	文化・自然遺産の保全に関する幅広い研究成果を展開し、社会に役立てようとしているか。	世界遺産学特別研究、インターンシップ、学会発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 専門知の創造力：文化・自然遺産に関する高度な知識を創造し活用する能力	文化・自然遺産の保全に関する専門的研究の成果を社会に役立てようとしているか。	世界遺産学特別研究、インターンシップ、学会発表など
	8. 共通技能の展開力：文化・自然遺産保護に共通する課題の解決に対応する能力	文化・自然遺産の保全のため、研究成果を展開し、問題解決に取り組むことができるか。	世界遺産学特別研究、インターンシップ、学会発表など
	9. 専門技能の開発力：文化・自然遺産保護の専門的課題の解決方法を見出す能力	文化・自然遺産の保全のため、専門的な解決方法を開発し、問題解決に取り組むことができるか。	世界遺産学特別研究、インターンシップ、学会発表など
	10. 国際的開発力：文化・自然遺産の保護の国際的課題に取り組む意識と意欲	文化・自然遺産の保全のため、国際社会に貢献する高い意欲と十分な語学力を身につけたか。	世界遺産学特別研究、国際インターンシップ、海外留学、海外学会発表など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は中間発表会、予備審査、本審査の各段階において実施する「博士論文評価」に基づき、以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。 学修成果の評価は「博士論文採点表」に基づく複数回にわたる段階的な評価、以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。 第一段階（2 年次秋学期）：博士論文中間発表会において、全教員がルーブリックに基づく採点を行う。 第二段階：学位論文予備審査会において、主査・副査（3 名）がルーブリックに基づく採点を行う。 第三段階：学位論文本審査会において、主査・副査（3 名）がルーブリックに基づく採点を行い、最終達成度審査を行う。 加えて、独創的かつ国際的に通用する研究能力の修得が主たる目的であることを踏まえて、研究の独自性・専門性・発展性・国際的意義を諮るために、査読付き論文の公表（国内外）、国際学会等での研究発表の有無、これらを通じた研究の学術的価値と研究者としての成熟度を総合的に判定する。また、教育活動（TA 経験など）や共同研究、学外活動（国際プロジェクト、政策提言等）に関しても、博士後期課程にふさわしい高度な能力育成の観点から、重視されるべき評価指標とする。		

学位論文に関する評価の基準	（博士論文審査） 1. 予備審査委員会は、主査 1 名、副査 3 名以上、計 4 名以上の委員で構成し、主査は世界遺産学学位プログラムの専任教員とする。予備審査委員会は、提出論文ごとに 1 回以上開催し、委員全員が一致して、12 ヶ月以内に申請者による学位論文の提出が可能であると判断した場合に「可」、その他の場合に「否」と判定する。 2. 論文審査委員会は、主査 1 名、副査 3 名以上、計 4 名以上の委員で構成し、主査は世界遺産学学位プログラムの専任教員とする。論文審査委員会は、提出論文ごとに 1 回以上開催し、学位論文の審査を公開で実施し、合否の判定を行う。公開審査の公表から実施までには原則として 1 週間以上の周知期間をおくものとする。 3. 論文審査委員会主査は、論文博士審査委員会の判定終了後、その結果を、速やかに世界遺産学学位プログラム教育会議に報告し、学位プログラムリーダーを通じて人間総合科学学術院運営委員会に報告する。 （評価基準） 1. 世界遺産学の博士論文として適切なテーマが設定されていること（問題意識・課題設定） 2. 先行研究を踏まえた論文の位置づけが明確であること（研究の位置づけ） 3. 課題にふさわしい研究方法が選択されその論拠が信頼できるものであること（研究方法、論拠の信頼性） 4. 論旨展開が十分で、全体に大きな矛盾がないこと（論文の構成） 5. 研究の実施および結果の公開において倫理的な問題がないこと（倫理） （評価項目） 1. 独創性:導入した概念や方法、発見した事実や法則のいずれかが新規であること。既知の方法の改良、異なる分野からの応用等を含むこと。 2. 萌芽性：研究の着手段階であるが、新規な発想、着想に基づく研究で今後の発展の可能性の大きなものであること。 3. 発展性：従来の定説を変え得る新事実の解明、あるいは新しい研究領域や研究体系・技術体系の開拓等の契機と成り得るものであること。 4. 有用性：技術の向上、あるいは実用上、学術上に価値のある有用な情報を提供するものであること。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

世界遺産の保護に関する社会的・国際的ニーズに応えるため、遺産保護に関する高度な研究を行う研究者、国内外の遺産保護の現場、国際機関等で高度の学識と専門的能力をもって遺産保護に従事するプログラムオフィサーを育成するため、実践的かつ学際的な学修課程を編成する。

教育課程の編成方針	遺産保護に関する高度な研究を行う研究者、国内外の遺産保護の現場、国際機関等で高度の学識と専門的能力をもって遺産保護に従事するプログラムオフィサーを育成することを目的に、「文化遺産政策・行政」、「自然遺産・自然保護」、「遺産整備」、「観光計画」、「景観計画」、「建築遺産」、「美術遺産」、「保存科学」、「国際遺産学」の 9 つの領域からなる教育課程を編成する。

学修の方法 **特色的な教育**	− 各学年次において、専門領域の特別研究に参加し、指導教員の指導を受ける。 − 2 年次秋学期において、全教員の前で博士論文の中間発表を行い、研究に対する助言を受ける。 − 3 年次において、予備審査を経た上で、博士論文を提出し、主査 1 名、副査 3 名以上で構成される論文審査委員会により博士学位論文の審査を行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	世界遺産の評価、保存、管理と活用に広い視野と柔軟な思考をもって取り組む意欲を持ち、研究活動に適した学力と資質を備えた学生を求める。
入学者選抜方針	入学試験は、口頭試問によって行い、専門に関わる研究能力とプレゼンテーション能力を重視して、選抜を行う。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士後期課程では、研究者としての自立を促す支援体制を重視し、学生の研究活動を後方から支援する体制を整備している。研究計画・論文構成・投稿戦略などの個別指導に加え、各種研究資金申請（海外渡航支援、民間助成）の作成支援や研究倫理指導を行う。また、専門技術（高度な統計解析、3D 解析、AI ツール活用など）や英語アカデミックライティングのスキル支援も提供している。
学生同士の交流機会	博士後期課程においては、学際的かつ国際的な研究ネットワーク形成を促すことを目的として、学生間の主体的な交流を支援している。異なる専門分野にて取り組む学生が相互に研究紹介や意見交換を行う合同ゼミやワークショップ、海外大学院生との共同発表機会を積極的に設けている。また、こうした活動についても学生自身がリーダーシップを発揮して運営し、自律的な研究者集団が形成されるよう支援している。
教員との交流機会	博士後期課程では、個別研究の深化に加え、複数教員による学際的・国際的視点からの継続的指導を重視している。 主指導教員のもとに副指導教員からの指導の機会を設け、特に博士論文の作成にあたっての段階的な研究進捗報告会においては広範な専門性からの指導と助言を受けられる機会としている。さらに、TF として学部教育や大学院授業の補助、学外実習における TA などを通じて、教育者としての教員の姿勢・指導技術・倫理観に直接触れ、自らの教育力と研究力、さらにはコミュニケーション能力等を育成する機会としている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育会議において、学生の学修成果の評価結果およびコンピテンスを用いて、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。学生の研究状況は、年次ごとの進捗報告・中間審査・最終審査を通じて把握し、その達成度や課題を教員間で共有する。また、博士論文提出前の査読付き論文数・質に関する基準を定め、その達成状況を可視化している。

さらに、学位取得者の進路・研究業績の追跡調査を通じてプログラムの成果を検証し、FD 活動によって国際的教育水準に基づいた教育改善を継続的に行っている。

学生アンケートや個別ヒアリングも実施し、学生の声を教育改善に反映する体制を強化している。

情報学学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Informatics

■ 博士（情報学）
■ Doctor of Philosophy in Informatics

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人間の活動において情報は重要な役割を果たして来たが、近年の技術の進展とともにその重要性は急激に増している。その様な状況に対応するため情報学学位プログラム（博士後期課程）では、文理融合の学際的アプローチにより情報を学術・教育・生活・文化等に活用するための研究に携わる人材を養成する。

養成する人材像	人間と情報に関わる諸問題を俯瞰し、専門知識・技術に基づいて研究課題を設定し、それを遂行できる人材
修了後の進路	研究者、大学教員、データサイエンティスト、IT・メディア系エンジニア、コンサルタント等の上級情報専門職、図書館・博物館・アーカイブズ等における高度な研究開発業務従事者

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（情報学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	情報学総合演習 IA、情報学総合演習 IB、情報学総合演習 IIA、情報学総合演習 IIB、情報学総合演習 IIIA、情報学総合演習 IIIB、情報学総合演習 E1、情報学総合演習 E2、博士論文作成など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	PBL、情報学総合演習 IA、情報学総合演習 IB、情報学総合演習 IIA、情報学総合演習 IIB、情報学総合演習 IIIA、情報学総合演習 IIIB、情報学総合演習 E1、情報学総合演習 E2、ジョブ型研究インターンシップなど
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	情報学セミナー a1、情報学セミナー a2、情報学セミナー b1、情報学セミナー b2、研究インターンシップ、研究指導実践、グローバル研究演習 IIIa、グローバル研究演習 IIIb、グローバル研究演習 IVa、グローバル研究演習 IVb、グローバル研究演習 Va、グローバル研究演習 Vb、ジョブ型研究インターンシップ、学会発表など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	研究インターンシップ、研究指導実践、PBL、ジョブ型研究インターンシップ、TA 経験、TF 経験など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	情報学セミナー a1、情報学セミナー a2、情報学セミナー b1、情報学セミナー b2、情報学総合演習 IA、情報学総合演習 IB、情報学総合演習 IIA、情報学総合演習 IIB、情報学総合演習 IIIA、情報学総合演習 IIIB、情報学総合演習 E1、情報学総合演習 E2、グローバル研究演習 IIIa、グローバル研究演習 IIIb、グローバル研究演習 IVa、グローバル研究演習 IVb、グローバル研究演習 Va、グローバル研究演習 Vb、大学院共通科目（ 国際性養成科目群）、外国語の演習科目、国際的な活動を伴う科目など
	6. 情報学分野における研究力：情報学分野における先端的な研究課題の設定と自立して研究計画を立案、遂行ができる高度な研究力	①人間の心身及び諸活動に関わる専門分野の先行研究を踏まえて、未来に資する本質的な情報学分野の研究課題を設定できるか ②設定した先端的な課題の解決に相応しい研究方法を用いて、独創的な研究成果を生み出しているか	情報学セミナー a1、情報学セミナー a2、情報学セミナー b1、情報学セミナー b2、研究インターンシップ、情報学総合演習 IA、情報学総合演習 IB、情報学総合演習 IIA、情報学総合演習 IIB、情報学総合演習 IIIA、情報学総合演習 IIIB、情報学総合演習 E1、情報学総合演習 E2、グローバル研究演習 IIIa、グローバル研究演習 IIIb、グローバル研究演習 IVa、グローバル研究演習 IVb、グローバル研究演習 Va、グローバル研究演習 Vb など
	7. 情報学分野における専門知識：情報学分野における先端的かつ高度な専門知識と運用能力	①情報学分野の先端的で高度な専門知識を運用できる能力を十分身につけているか ②情報学分野の最新の専門知識に裏付けられた独創的な課題を新規に発見したか	情報学セミナー a1、情報学セミナー a2、情報学セミナー b1、情報学セミナー b2、研究インターンシップ、研究指導実践、PBL、情報学総合演習 IA、情報学総合演習 IB、情報学総合演習 IIA、情報学総合演習 IIB、情報学総合演習 IIIA、情報学総合演習 IIIB、情報学総合演習 E1、情報学総合演習 E2、など
	8. 情報学分野における倫理観：情報学分野における高い倫理観と規範意識	①研究に関わる知的財産や情報の安全を守る知識を十分に持っているか ②情報学分野に必要不可欠な倫理観と知的財産や情報の安全を守る知識を説明できるか	研究指導実践、情報学総合演習 IA、情報学総合演習 IB、情報学総合演習 IIA、情報学総合演習 IIB、情報学総合演習 IIIA、情報学総合演習 IIIB、情報学総合演習 E1、情報学総合演習 E2、など

学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「コンピテンス評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの獲得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 学生の振り返りに対し、研究指導担当教員がルーブリックに基づき達成度審査を行う。 – その後、主査、副査、審査員等の 5 名以上で構成される学位論文審査委員会において、論文審査とともに、ルーブリックに基づきコンピテンスの獲得状況に関する直接評価を行い、運営委員会で学生のコンピテンス最終達成度審査を行う。
学位論文に関する評価の基準	以下の評価項目すべてが妥当もしくは達成されたと認められる学位申請論文を、最終試験又は学力の確認を経た上で、博士論文として合格とする。 1. 研究テーマの新奇性と意義 2. 先行研究の把握と理解 3. 研究方法の妥当性 4. 結論とそれに至る論理の妥当性 5. 結論の新奇性・独創性 6. 体裁・構成の適切さ 7. 文献・資料の適切な引用 8. 学術的貢献 論文審査の方法は以下のとおりとする。 論文審査は、学位論文ごとに設置される学位論文審査委員会が論文の内容、公開による学位論文発表会、最終試験を総合的に判断して行う。 1）学位論文審査委員会は原則、主査 1 人と、学位プログラム外有識者（学内の他学位プログラムの教員、他大学の大学院担当教員、研究機関等の研究者）1 人を含む 4 人以上の副査から構成される。 2）学位論文発表会は質疑応答を含めて 60 分程度とする。 3）最終試験は、学位論文を中心として、その関連分野について口述または筆記で行う。試験は非公開で 60 分程度とする。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

文理融合の学際的アプローチにより情報を学術・教育・生活・文化等の人間の諸活動に活用するための研究に携わる人材を養成する目的のため、ディプロマ・ポリシーに示した汎用的知識・能力と専門的知識・能力を獲得させる。また、春学期・秋学期入学者の両方を対象とする日本語と英語に対応したカリキュラムを一体的に作成する。

教育課程の編成方針	– 教育課程は、本学位プログラム独自の研究指導科目群と実践指導科目群から構成する。 – 研究指導科目群は、情報学セミナーおよび、指導教員による情報学総合演習 I、情報学総合演習 II、情報学総合演習 III から構成する。情報学セミナーでは、インタラクティブな研究指導を行い、コミュニケーション能力や国際性、情報学分野における専門知識等を身に着けさせる。情報学総合演習では、研究指導を受けることで、知の創成力やマネジメント能力、情報学分野における研究力や倫理観等を身に着けさせる。

教育課程の編成方針	− 実践指導科目群は、研究指導実践、PBL、研究インターンシップ、MDA 関連科目から構成する。研究指導実践は、将来、大学教員になって研究指導を行うことを想定し、学群生の卒業研究指導を当該学生の指導教員の監督下で行い、リーダーシップ力や情報学における倫理観等を身に着けさせる。PBL は、専門職につくことを想定した問題解決型のプロジェクトを実践することで、研究インターンシップは国際研究機関、国立研究所、企業の研究所、大学の研究室等、所属する学位プログラム以外の組織で研究活動に従事することで、実践的な研究方法とリーダーシップ力等を身に着けさせる。 − 各科目はシラバスに記載している評価方法に従って評価する。
学修の方法 特色的な教育	− 大学院共通科目、学術院共通専門基盤科目、研究群共通科目、他学位プログラム科目、専攻の科目は必要に応じて選択して学修する。 − 研究指導科目は情報学総合演習 I で研究の基盤を固め、情報学セミナーで多方面の研究に接し、情報学総合演習 II 及び III で研究成果の集約を行う。 − 実践指導科目は 2 単位以上を必要に応じて選択して学修する。 − 入試区分及び教授言語にかかわらず、所定の単位を修得した場合には、修了要件に含むことができる。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	− 文理融合の学際的アプローチにより、目的意識をもって情報の利活用に関する問題の解明・解決に取り組む意欲のある人材 − 十分な基礎的スキルを持ち、国際的に活躍できるコミュニケーション力、プレゼンテーション力、語学力を有する人材 − 研究遂行のためのスケジュール設定、研究遂行、成果の展開ができる人材
入学者選抜方針	口述試験と書類審査の結果を総合的に判定する。一般入学試験のほかに、研究業績を有する者あるいは推薦を受けた成績優秀な修士取得見込み者に対する推薦入試、社会的経験を有する者に対する社会人特別選抜、10 月入学の英語受験者特別選抜を実施している。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 博士後期課程（演習科目）「PBL」において、自分自身で研究の進捗管理ができ、担当教員からのアドバイスを受けて、計画を適切に修正できるスキルを身につけるための実践的な内容を教授している。 − 博士後期課程（演習科目・必修科目）「情報学セミナー」において、博士論文執筆のための時間管理支援として、複数の発表の場を設け、発表の中で学位取得までのロードマップを描くことを条件としている。またロードマップに対して、博士後期課程指導資格を持つ全ての教員と受講生から直接アドバイスを受ける機会を設けている。

学生同士の交流機会	− 博士後期課程演習科目「情報学セミナー」では、お互いの研究発表を評価し合うレポートを課すことにより、博士論文に向けたピア効果を醸成している。 − 博士後期課程演習科目「研究指導実践」では、研究室運営や研究指導方法などをお互いに発表し、議論している。 − 留学生を対象に学生チューターを割り当てている。
教員との交流機会	− 博士前期課程、博士後期課程合同で、学位プログラムへの意見交換を自由に行う「学生懇談会」を開催している。 − お互いの研究の進捗や異なる観点からのアドバイスを得ることを目的に複数の教員で集団指導を行っている。 − 博士後期課程演習科目「情報学セミナー」は、博士後期課程研究指導資格を持つ教員全員の出席を必須とし、研究室を超えて学生と教員が研究交流できるようなディスカッションの場となっている。 − 月に 1 回程度、学際研究の促進を目指して開催されているランチコロキウムに、学生も参加することができ、最新の研究テーマについて教員と対話する機会が設けられている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

学位プログラムとして、前年度のコンピテンスの直接評価データを参照しつつ、次年度以降の教育改善へとつなげる PDCA サイクルを構築している。具体的には、学位プログラムリーダーの下、教育課程グループ、研究指導グループ、学位審査グループを構成し、運営委員会における定期的な情報共有を通して、グループ間の連携を担保している。これにより、コンピテンス評価の結果を基点として、教育課程および研究指導の内容改善に一貫して取り組む体制が整えられている。

各グループでの審議・決定事項は、まず運営委員会において確認・調整を行い、その後、月 1 回開催される学位プログラム教育会議において全教員で共有し、議論する機会を設けている。これにより、プログラム全体として教育方針や改善点への共通理解を形成している。

さらに、これらの取組と並行して、人間総合科学学術院の FD への定期的な参加、教育課程グループが独自に設定したカテゴリーに基づくチェックリストを用いたシラバス確認の厳格な運用、授業評価結果に基づく各科目担当教員へのフィードバックを実施している。これらのプロセスを通じて、個々の教員における教育実践の質向上も継続的に図っている。

ヒューマンバイオロジー学位プログラム（一貫制博士課程）
Doctoral Program in Human Biology

■ 博士（人間生物学）
■ Doctor of Philosophy in Human Biology

人材養成目的 / Program Educational Objectives

ヒトの生命の維持、適応及び継承のメカニズムを理解し、ヒトの健康に関する地球規模課題の解決に貢献できる複合的専門力と高度な研究能力を修得し、ヒトが人らしく生きる社会の創造を先導できる国際的トップリーダーの資質を持った研究者及び高度専門職業人を育成する。

養成する人材像	本プログラムを修了した博士人材は、地球規模課題の解決のための国際的合意を形成する為の目利き力（課題抽出能力）、突破力（計画立案能力、論理的説得力）及び任務完結力を備え、産業界・科学行政機関で地球規模課題について国際的に実現可能な解決を先導する人材、問題解決に必要な新業種の起業を推進できる人材、さらには、大学運営に待望されている研究／教育／国際コーディネーター人材となる。
修了後の進路	本プログラムを修了した博士人材は、産業界はもとより、行政機関などでも地球規模課題について国際的に整合性のある解決を先導し、また、新業種の起業を推進できる人材が育成される。 さらには、大学運営に待望されている研究／教育／国際コーディネーターの資源となる。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する一貫制博士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（人間生物学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	1）世界のサイエンスリーダーズセミナー、2）ヒューマンバイオロジーのセレンディピティ、3）博士論文作成など
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	1）イニシエーションセミナー、2）適正技術、起業家マインド育成、海外企業におけるインターンシップ、国際研究室ローテーション、3）ポートフォリオ型達成度評価法 GLidD（Growth & Learning identification powered by Instructional Design）など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	1) イニシエーションセミナー、2) ヒューマンバイオロジー特論 I、II、起業家マインド育成・実践コース、3）ヒューマンバイオロジー演習 I、II など
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	1）世界のサイエンスリーダーズセミナー、ビジネスリーダーズセミナー、2）適正技術、起業家マインド育成、海外企業におけるインターンシップ、国際研究室ローテーションなど
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	1）世界のサイエンスリーダーズセミナー、2）ドミトリーでの外国人（留学生を含む）との共同生活、3）完全英語プログラム、4）適正技術、起業家マインド育成、ヒューマンバイオロジーの国際討論 I、II、海外企業におけるインターンシップ、国際研究室ローテーションなど

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 専門力：地球規模課題の解決に必要な人間生物学の学力	①人間生物学の分野において、独創的な研究テーマの設定と優れた研究成果を得られるだけの知識と技能を有するか ②人間生物学の分野において、多元的方法論を駆使することによって、新たな問題の解決に取り組むことができるか	1）人体解剖学・発生学、人体病理学・腫瘍学、ヒトの感染・免疫学、ヒトの内分泌・代謝学、ヒューマンバイオロジー研究 I 、II、ヒューマンバイオロジー研究室演習 I など
	7. 目利き力：パラダイムシフトとなりうる課題を自立して発見する能力	①新たに生じる未知の課題に対して、その本質を的確に捉えることができるか ②課題解決に向けて、従来の知識・技能だけに縛られることなく、柔軟で複眼的な発想に基づいた解決方法を提案することができるか	1）世界のサイエンスリーダーズセミナー、2）ビジネスリーダーズセミナー、3）ポートフォリオ型達成度評価法GLidD（Growth &Learningidentificatio npoweredby Instructional Design）など
	8. 突破力：誠実かつ真摯な態度で課題を解決する能力	①未知の問題の本質を突き詰めようとする確固たる意志をもっているか ②問題解決に向けた計画を立案し、高い意欲と倫理観をもって、粘り強く遂行することができるか ③リーダーとして、課題解決に向けて適切な人材を集め、ネットワークを構築することができるか	1）ヒューマンバイオロジー実験実習 II、2）ヒューマンバイオロジー演習 I、II、3）ポートフォリオ型達成度評価法GLidD（Growth &Learningidentificatio npoweredby Instructional Design）など
	9. 完結力：解決した成果を社会に発信し、社会貢献に応用できる能力	①研究成果を学術論文にまとめて発表することができるか ②社会的な規約や経済的な制度を理解した上で、自身の研究成果を知的財産化するとともに、国際的・地域的観点から社会のニーズに当てはめることができるか	1）ヒューマンバイオロジー研究 I、II、III、2）論文発表など

学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法を主体として評価する。 – カリキュラムに基づく評価：必修科目等に組み込まれた成果物を中心に、指導教員および授業担当教員が入学から修了までの学修成果を評価する。 – ポートフォリオ評価（GLidD）：本学位プログラムが独自に開発した GLidD（Growth & Learning Identification powered by Instructional Design）を用い、コンピテンスの達成状況を常時可視化し、継続的に評価する。 – Qualifying Examination1（QE1）：第 2 年次末までに実施し、所定の 60 単位以上を修得していることを要件とする。書類審査、口頭発表、口頭試験により、既定の水準への到達を審査する。 – 学位論文中間発表：第 4 年次に実施し、書類審査、口頭発表、口頭試験を通じて、所定のコンピテンス達成を確認する。 – Qualifying Examination2（QE2）・学位論文予備審査：第 5 年次に実施し、所定の 72 単位以上を修得していることを要件とする。書類審査、口頭発表、口頭試験により、既定の水準への到達を審査する。 – 学位論文本審査：第 5 年次に実施し、書類審査、口頭発表、口頭試験を通じて、学位授与に必要なコンピテンスの達成を確認する。
学位論文に関する評価の基準	学位論文が満たすべき水準 ヒトの生物学において、独創的で優れたテーマの設定を行い、博士の学位に相応しい成果が得られ、相応しい体裁にまとめられていること、および当該分野の社会のニーズを理解し、必要とされる実施目的を設定して、自らの力で研究・実践を推進する能力、総括する能力、産業界または学術界から国際的に高い評価を得られる学術論文を公表する能力を有すると認められること 審査委員の体制（専門委員会の体制） 専門委員会は、主査 1 名と副査 3 名以上で構成する。主査は学位プログラムの研究指導教員の中から、副査は学位プログラムの研究指導教員、研究指導補助教員、または授業担当教員の中から、審査委員会が指名する。副査には申請者の主指導教員を含めるものとし、また学位プログラムの教員のほか、他学術院、他大学の大学教員、またはそれと同等以上の研究業績を有すると審査委員会が認めたもの、副指導教員となっている海外からの教員または産業界からの教員 1 名を加えることができる。 審査方法及び項目等 学位論文をもとに口頭発表・質疑応答による。審査項目は、以下のとおりである。(1) 地球航海を先導できる世界トップリーダーにふさわしい人間力 (2) 企画力・独創性（テーマの設定、計画の意義、独創性、実現可能性、期待される成果を説明する能力）(3) 実践における成果（研究・活動成果の質と量）(4) プロジェクト推進能力（成果の信頼性、結果の意義の理解、計画性）(5) 総括力（結果を重ねて企画提案書または学術論文を構成する能力、論理的で説得力のある文書作成能力、プレゼンテーション能力）

ヒューマンバイオロジー学位プログラム（一貫制博士課程） ／ 博士（人間生物学）
Doctoral Program in Human Biology / Doctor of Philosophy in Human Biology

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

ヒトの生物学に関する概念を理解し、DNA 解析を中心とした従来のセントラルドグマでは扱えない生命素子（epi-genetic biomolecules）の科学及びその制御技術の専門力を修得し、これらの知見を社会の現場における課題を解決するために活用するための目利き力、突破力及び完結力を涵養するための教育課程を下記のとおり編成する。

教育課程の編成方針	− 基礎科目等により、①世界で活躍する強い意欲、②誠実な精神、倫理観、国際交渉力、リーダーシップ及びアントレプレナーシップの基礎、③環境に適応する能力の育成と錯綜した現実から解決すべき問題を抽出する地球航海型学修の実践力を身に付ける。 − 専門基礎科目「医科学」「分子科学」「数学と計算科学」により、①日本の医師と同等の水準のヒト生物学の知識、②化学物質に関する専門知識とその研究手法、③計算機を援用した生物学研究の演習を行う。実験研究が制限されるヒトを対象とする研究における計算機援用型複合研究法を身に付ける。 − 専門基礎科目「その他」により、ヒト生物学の最新の成果と生命科学の研究方法について系統的に学修する。 − 専門科目により、学生個々の専門性を向上させることを目的として、選択した分野における専門知識及び技能を深め、研究力を養成するとともに、計算科学を導入して動物実験の成果をヒトに外挿する方法を学ぶ。 − 3 年次から 5 年次は、各学生がそれぞれの個性を伸ばし、世界をフィールドとして自らの目指す将来のキャリアを確立する。 − 専門的研究において、主指導教員 1 名のほか、海外の大学、産業界または独法研究所から 1 名を含む副指導教員 2 名以上を選び、メールやインターネット等の通信手段も活用して定期的な複数教員指導により専門的な研究を行う。
学修の方法 特色的な教育	標準的履修スケジュールを以下に示す。 − 2 年次終了までに、必修科目、選択科目で 60 単位を取得し、QE1 に合格する。 − 4 年次前半に、中間評価委員会により、中間評価が行われ、学位論文作成に関する指導を受ける。 − 中間評価に合格し、必修科目、選択科目で 72 単位を取得し、一定の英語能力（TOEIC860 以上他）を習得したうえで QE2 に合格し、さらに審査制度の確立している学術雑誌に英文の原著論文 2 編以上（1 編は第一著者）を発表（印刷中を含む）し、かつ、5 年次後半に設置される学位論文予備審査委員会に合格と認定された場合、学位論文提出資格が満たされる。 − 学位論文提出を受けて、学位論文審査委員会が設置され、学位論文審査および最終試験が行われる。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	本学位プログラムは、ヒトの生命の維持、適応及び継承のメカニズムを理解する能力を有し、広く産学官にわたりグローバルに活躍できるリーダーとなる資質を持った人材を求める。
入学者選抜方針	現在持っている知識量を問うことはせず、人間力、具体的には与えられた環境及び現在持っている知識・技能を使って論理的に推論できるか、相手にわかりやすく説明できるか、相手の説明を理解できるか、困難が生じたときにどのように対処するか、を評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	ポートフォリオ型達成度評価法 GLidD（Growth & Learning identification powered by Instructional Design）を用い、学生が自身の学修状況を振り返り目標を明確にするとともに、指導教員が学生の学修状況を確認することで、支援・指導を改善する機会を設ける。
学生同士の交流機会	チューター制度により、上級生が新入生に必要な支援を提供し、学生間のピア効果を高める。
教員との交流機会	副指導教員制度により、学生と教員との交流を促進し、学習意欲や研究の質の向上を図る。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

- アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーについて、学生に対してはオリエンテーション、教員に対しては教員会議および部局内ファカルティ―・ディベロプメントで説明することで、学位プログラムの人材養成目的を学生と教員の間で共有する。
- シラバスについては更新の度に組織的チェックによる改善をおこない、成績評価については年度毎に方針の確認および共有をおこない、成績評価方針に基づいた成績評価分布の検証および改善活動をおこなう。
- 在学生および修了生へ向けてのアンケートを定期的に実施し、その結果を教員会議および部局内ファカルティ・ディベロップメントで共有することで、教育の質の向上を試みる。
- 教務委員会・学位審査委員会において学生の学修成果に関する評価とその取りまとめをおこなった後、取りまとめた結果を運営委員会において審議することで、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

ライフイノベーション（病態機構）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Disease Mechanism）

■ 博士（病態機構学）
■ Doctor of Philosophy in Disease Mechanism

人材養成目的 / Program Educational Objectives

分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いてライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、革新的医薬品・機能性食品の研究開発分野及びその保全と管理の分野で、国際的に評価の高い研究成果を創出し、グローバルに活躍する高度専門職業人または研究者を養成する。

養成する人材像	博士後期課程では、博士前期課程で修得した知識や技術を用いて、「研究マネジメントを高めつつ、難治性疾患の革新的な治療につながるような国際的に評価の高い独創的な研究を行い、得られた研究成果を国際的に情報発信し、生命医科学分野において即戦力となれる研究者および高度専門職業人」を育成する。
修了後の進路	生命医科学的知識、実験技術、研究マネジメントスキル、国際レベルの高い研究成果を基盤として、「課題解決能力」と「課題発見能力」を駆使し、難治性疾患の革新的な治療法の開発を目指す人材として、ライフサイエンス系、製薬系企業の研究者、独立行政法人研究所の研究員、コンサルタント、治験コーディネーター、イノベーションを創出する新業種の起業家、関連する官公庁職員として国際的に活躍する事が期待される。研究のグローバル化に伴い、海外との共同研究やコーディネートをする機会が今後さらに増加すると考えられ、博士課程修了者の需要は高まると考えられる。

ライフイノベーション（病態機構）学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（病態機構学）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Disease Mechanism）/ Doctor of Philosophy in Disease Mechanism

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（病態機構学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、博士論文作成
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、博士論文作成
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、学術論文発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野におけるイノベーションを実現する能力	①ライフサイエンス分野における新たな知を創出し、社会に還元する意識と意欲があるか ②ライフサイエンス分野におけるイノベーションの創出に繋がる理論や実践に関する研究手法および論理展開力を修得したか ③病態機構学における顕在化していない課題を発見し、解決できたか ④分野外の研究者と協働して、分野横断的な研究課題を発見・解決する意欲があるか	人を対象とした研究：基盤編、博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	7. 専門知識：専門分野における最先端知識	①病態機構学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した専門知識に基づき未解決課題を解決するための研究計画を立案できたか	ライフイノベーション博士研究、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	8. 高度英語実践力：国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力	①英語による研究成果の報告や発信に際し、国際社会にインパクトを与えられる発表能力を有しているか ②第一線級の研究者と対等に議論できるだけの英語力および知識を有しているか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、学術論文発表
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法を主体として評価する。 – 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 – 1年次末に達成度評価Ⅰ、修了予定の1年前に達成度評価Ⅱおよび中間審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 – 修了予定の5ヶ月前に達成度評価Ⅲおよび学位論文予備審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価し、最終試験の受験資格について審査する。 – 最終試験を実施し、論文審査・口頭試験によって学位論文を評価し、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて最終的に審査する。		

学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施し、病態機構分野の発展に貢献する、新奇かつ国際的に高い評価を得られる研究成果であること。学位論文が、英語で論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査１名、副査３名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査３名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を２名以上含むものとする。専門委員会４名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ１名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会４名以上のうち、プログラム担当以外の者を１名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。最終試験のうち、論文内容の発表と質疑応答を公開で行う。その際、学位論文の内容に関する発表を英語で論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、最新の研究動向を含めて、病態機構分野の高度な専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

病態機構領域におけるイノベーション創出のための未解決課題を発見し、それを解決するための研究活動を行う。イノベーション創出のためには、専門分野外の研究者と協働して、全く異なる分野における研究課題や分野横断的な研究課題に取り組む高い意識と意欲が必要であり、インターンシップ科目を編成する。分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を養成するために、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者によるセミナーを編成する。

教育課程の編成方針	− 病態機構領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム６領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体材料領）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、病態機構に関する研究指導を受ける。 − 博士論文作成等により、知の創成力を身に付ける。 −「博士力実践プログラム」等により、マネジメント能力を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 −「ライフイノベーション博士研究」により、リーダーシップ力を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 − 基礎科目、専門科目等により、イノベーション力を身に付ける。 −「ライフイノベーション博士研究」等により、専門知識を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、高度英語実践力を身に付ける。

学修の方法 特色的な教育	− 病態機構に関する最新の研究動向に把握した上で、顕在化していない課題を発見し、課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行する。さらに、指導教員らとの批判的な議論を通してライフイノベーション創出に繋がる研究へと展開する。 − 得られた研究成果は学術雑誌等で発表し、英語力を向上させ、その過程において論理展開力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する最新の研究動向を学ぶだけでなく、英語によるプレゼンテーション能力を向上させる。 − インターンシップを行うことにより、分野外の研究者と協働して新たな知を創出する経験を通して、研究力を磨く。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	病態機構分野におけるイノベーションの実現が期待される研究基礎力、その実現に必要な専門知識、国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力の修得に十分な素養、を持つ人材を求める。
入学者選抜方針	− 書類審査により、修士レベルの専門知識を有しているか（在籍課程での成績が優秀であるか）、研究背景・研究計画および研究成果の社会還元について英語で具体的に説明できる能力があるかを評価する。 − 英語能力試験および口述試験により、病態機構分野におけるイノベーションを実現するための意欲および必要な研究基礎力、本学位プログラムで研究活動を行うために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士後期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価の際は、面談を行い、活動データに基づいたフィードバックを行うこととしている。
学生同士の 交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が学術的に広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学位プログラムの３つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための議論を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

ライフイノベーション（創薬開発）学位プログラム（博士後期課程）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Drug Discovery）

■ 博士（医科学）
■ Doctor of Philosophy in Medical Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を身に付け、バイオリソースを用いてライフサイエンス研究の新たな展開を切り開き、革新的医薬品・機能性食品の研究開発分野及びその保全と管理の分野で、国際的に評価の高い研究成果を創出し、グローバルに活躍する高度専門職業人または研究者を養成する。

養成する人材像	博士後期課程では、博士前期課程で修得した技術や知識を用いて、「研究マネジメント力を高めつつ、革新的な医薬品の開発につながるような国際的に評価の高い独創的な研究を行い、得られた研究成果を国際的に情報発信し、革新的創薬開発において即戦力となれる研究者および高度専門職業人」を育成する。
修了後の進路	創薬開発に関する知識、実験技術、研究マネジメントスキル、国際レベルの高い研究成果を基盤として、「課題解決能力」と「課題発見能力」を有し、アンメットメディカルニーズを解消する革新的な医薬品開発を目指す人材として、ライフサイエンス系、製薬系企業の研究者、独立行政法人の研究員、コンサルタント、研究コーディネーター、イノベーションを創出する新業種の起業家、関連する官公庁職員として国際的に活躍する事が期待される。研究のグローバル化に伴い、海外との共同研究やコーディネートをする機会が今後さらに増加すると考えられ、博士課程修了者の需要は高まると考えられる。

ライフイノベーション（創薬開発）学位プログラム（博士後期課程） ／ 博士（医科学）
Doctoral Program in Life Science Innovation（Drug Discovery）/ Doctor of Philosophy in Medical Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（医科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、博士論文作成
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、博士論文作成
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	博士力実践プログラム、ライフイノベーション博士研究
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、学術論文発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. イノベーション力：ライフサイエンス分野におけるイノベーションを実現する能力	①ライフサイエンス分野における新たな知を創出し、社会に還元する意識と意欲があるか ②ライフサイエンス分野におけるイノベーションの創出に繋がる理論や実践に関する研究手法および論理展開力を修得したか ③創薬開発学における顕在化していない課題を発見し、解決できたか ④分野外の研究者と協働して、分野横断的な研究課題を発見・解決する意欲があるか	人を対象とした研究：基盤編、博士後期ライフイノベーションセミナー、博士力実践プログラム、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	7. 専門知識：専門分野における最先端知識	①創薬開発学に関する最先端の専門知識を修得したか ②修得した専門知識に基づき未解決課題を解決するための研究計画を立案できたか	ライフイノベーション博士研究、博士論文作成、セミナーへの参加、学術論文発表
	8. 高度英語実践力：国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力	①英語による研究成果の報告や発信に際し、国際社会にインパクトを与えられる発表能力を有しているか ②第一線級の研究者と対等に議論できるだけの英語力および知識を有しているか	博士後期ライフイノベーションセミナー、ライフイノベーション博士研究、達成度評価、学術論文発表
学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法を主体として評価する。 – 本学位プログラムが掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計したカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、各授業担当教員や指導教員・学位論文審査員が評価を行う。 – 1年次末に達成度評価Ⅰ、修了予定の1年前に達成度評価Ⅱおよび中間審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価する。 – 修了予定の5ヶ月前に達成度評価Ⅲおよび学位論文予備審査を実施し、書類審査・口頭試験によって、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）について達成状況を評価し、最終試験の受験資格について審査する。 – 最終試験を実施し、論文審査・口頭試験によって学位論文を評価し、「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）が修得できたかについて最終的に審査する。		

学位論文に関する評価の基準	【学位論文が満たすべき水準】学位論文の内容が、申請者が主体的に実施し、創薬開発分野の発展に貢献する、新奇かつ国際的に高い評価を得られる研究成果であること。学位論文が、英語で論理的かつ科学的に書かれており、学位論文として適切な形式であること。 【審査委員の体制（専門委員会の体制）】主査１名、副査３名以上で構成する専門委員会により審査を実施する。主査は、プログラム研究指導担当を受けた教員とし、副査３名以上のうち、プログラム研究指導担当認定を受けた教員を２名以上含むものとする。専門委員会４名以上のうち、学内と学外のプログラム担当教員をそれぞれ１名以上含むものとし、学内外の教員が協働して学位審査を実施する体制を敷く。また、専門委員会４名以上のうち、プログラム担当以外の者を１名に限り含むことができる。 【審査方法及び項目等】申請者に学位論文の内容について説明を求め、それに対する専門委員会委員による質疑応答を実施する。最終試験のうち、論文内容の発表と質疑応答を公開で行う。その際、学位論文の内容に関する発表を英語で論理的かつ科学的に実施し、審査員の質疑に対して、最新の研究動向を含めて、創薬開発分野の高度な専門的知識ならびに洞察力を持って回答し、審査員を十分理解させることができたか審査する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

創薬開発領域におけるイノベーション創出のための未解決課題を発見し、それを解決するための研究活動を行う。イノベーション創出のためには、専門分野外の研究者と協働して、全く異なる分野における研究課題や分野横断的な研究課題に取り組む高い意識と意欲が必要であり、インターンシップ科目を編成する。分野横断的かつ俯瞰的な考え方を修得し、世界トップクラスの高度で専門的研究能力を養成するために、海外の研究機関に所属する第一線級の研究者によるセミナーを編成する。

教育課程の編成方針	− 創薬開発領域の教育課程は、専門科目、本学位プログラム６領域（病態機構領域、創薬開発領域、食料革新領域、環境制御領域、生物情報領域、生体材料領）共通の基礎科目、および大学院共通科目で構成される。専門科目では、創薬開発に関する研究指導を受ける。 − 博士論文作成等により、知の創成力を身に付ける。 −「博士力実践プログラム」等により、マネジメント能力を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、コミュニケーション能力を身に付ける。 −「ライフイノベーション博士研究」により、リーダーシップ力を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、国際性を身に付ける。 − 基礎科目、専門科目等により、イノベーション力を身に付ける。 −「ライフイノベーション博士研究」等により、専門知識を身に付ける。 −「博士後期ライフイノベーションセミナー」等により、高度英語実践力を身に付ける。

学修の方法 特色的な教育	− 創薬開発に関する最新の研究動向に把握した上で、顕在化していない課題を発見し、課題解決のために適切な研究計画を立案・遂行する。さらに、指導教員らとの批判的な議論を通してライフイノベーション創出に繋がる研究へと展開する。 − 得られた研究成果は学術雑誌等で発表し、英語力を向上させ、その過程において論理展開力を身に付ける。 − 基礎科目、大学院共通科目を受講することにより、ライフサイエンス分野に関する最新の研究動向を学ぶだけでなく、英語によるプレゼンテーション能力を向上させる。 − インターンシップを行うことにより、分野外の研究者と協働して新たな知を創出する経験を通して、研究力を磨く。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	創薬開発分野におけるイノベーションの実現が期待される研究基礎力、その実現に必要な専門知識、国際社会において研究に関わるあらゆる活動を行うのに十分な英語の運用能力の修得に十分な素養、を持つ人材を求める。
入学者選抜方針	− 書類審査により、修士レベルの専門知識を有しているか（在籍課程での成績が優秀であるか）、研究背景・研究計画および研究成果の社会還元について英語で具体的に説明できる能力があるかを評価する。 − 英語能力試験および口述試験により、創薬開発分野におけるイノベーションを実現するための意欲および必要な研究基礎力、本学位プログラムで研究活動を行うために必要な英語能力（CEFR 基準で B2 以上）があるかを評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	博士後期ライフイノベーションセミナーでは、研究活動で必要となるスキル（プレゼンテーション、研究費申請、CV 作成など）について海外教員（グローバル教育院所属）が概説している。また、研究室における学修の成績評価の際は、面談を行い、活動データに基づいたフィードバックを行うこととしている。
学生同士の 交流機会	少人数グループでの研究発表およびジャーナルクラブをオンラインで行う（通年）ことにより、異分野の学生との間でも活発な議論を行なう機会を設けている。
教員との交流機会	筑波会議（西暦奇数年）や TGSW（西暦偶数年）においてセッションを開催し、学生と教員が学術的に広く交流するための仕組みを作っている。海外教員（グローバル教育院所属）が対面でのセミナーの実施する際は、それに合わせて学生との交流会を開催している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

毎年、所属教員に本学位プログラムの３つのポリシーを説明した上で、単位取得の考え方や成績評価の観点・方針、学位取得プロセスを確認している。さらに、授業アンケートの分析結果を共有し、意見聴取を行っている。また、達成度評価では評価委員のみでレビューセッションを開き、達成度状況を踏まえて、教育の質向上のための議論を行っている。加えて、運営委員会において、達成度評価のスコアの追跡に基づき、学生の学修成果に関する評価を継続的に行い、教育課程や評価基準の妥当性、指導の適切性を検証している。

スポーツ国際開発学共同専攻（修士課程）
Joint Master's Program in International Development and Peace through Sport

■ 修士（スポーツ国際開発学）
■ Master of Arts in International Development and Peace through Sport

人材養成目的 / Program Educational Objectives

スポーツ・体育・健康に関する理論的・実践的な知識を英語によって学び、国際平和と友好、豊かな地域社会の創造に寄与し、指導的役割を担うことのできる高度専門職業人・研究者を養成する。

養成する人材像	筑波大学大学院学則および鹿屋体育大学学則に規定する課程の目的を充足した上で、次の能力などを有することが最終試験において認定された者に修士（スポーツ国際開発学）の学位を授与する。 1. 国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力、使命感 2. グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ 3. スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識と実践力 4. 国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力
修了後の進路	国際機関、国内外のスポーツ関連組織、国内外の開発支援組織、大学等の教育研究機関等、国内外 NGO、NPO 機関、国内外グローバル企業等

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する修士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（スポーツ国際開発学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	スポーツ国際開発論 I、スポーツ国際開発論 II、オリンピックムーブメント論、日本文化伝播論、スポーツ・文化・社会、上級コーチ教育論、プロジェクトマネジメント論、研究方法論、社会開発のための公共政策、課題研究、中間発表会、修士論文作成、最終試験、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	スポーツ国際開発論 I、スポーツ・文化・社会、プロジェクトマネジメント論、NGO 等プロジェクト、各種 OJP 科目、学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	各種 OJP 科目、中間発表会、修論審査、学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	各種 OJP 科目、NGO 等プロジェクト、学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	スポーツ国際開発論 I、スポーツ国際開発論 II、オリンピックムーブメント論、日本文化伝播論、社会開発のための公共政策、留学生との交流、国際会議発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力、使命感	国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力、使命感を身につけているか。	社会開発のための公共政策、経済開発論など
	7. グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ	グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力、スポーツ・体育・健康に関する実践力、そして国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力を身につけているか。	スポーツ国際開発学課題演習、ＪSCセミナー、JSCプロジェクト、国外大学セミナー、国際カンファレンス・セミナー、スポーツ国際開発論 II、経営マネジメント論、プロジェクトマネジメント論、異文化交流・コミュニケーションなど
	8. スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識と実践力	スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識と実践力の基盤となる知識を身につけているか。	スポーツ国際開発論Ⅰ、オリンピックムーブメント論、スポーツマネジメント論、スポーツ・文化・社会、ヘルスプロモーション論、上級コーチ教育論、研究方法論、スポーツ国際開発論Ⅱ、経営マネジメント論、プロジェクトマネジメント論、セラピューティックレクリエーション概論、研究データ管理、分析法など
	9. 国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力	国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力を身につけているか。	スポーツ国際開発論Ⅱ、経営マネジメント論、プロジェクトマネジメント論など
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は、学位授与方針に基づくコンピテンスの修得状況を以下の段階毎の審査により確認・評価することで行う。 第１段階（2 年次秋学期始め）：中間発表会において、主指導・副指導教員を中心に共同専攻教員が修士論文の構成および進捗状況について質疑応答を通じて確認する。 最終段階（2 年次秋学期末）：主査および副査２名以上で構成される学位論文審査委員会において、学位論文に関する評価の基準に基づき審査を行い、教育会議において全教員で最終達成度審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	審査に当たっては、学位論文の提出を受け、主査および副査 2 名による査読とそれに続く口頭発表・質疑応答（主査副査に限らず公開で質問を受けつける）を行い、主査及び副査が 100 点満点による評価を行う。60 点以上を合格とする。 ＜修士論文の審査基準＞ 1. 研究テーマの適切性 ア 研究テーマ設定の背景・問題、現場への有用性や学術的・社会的意義が適切に示されている。 イ 研究目的や課題が適切で、明確である。 ウ 研究内容がスポーツ国際開発学に寄与するものである。 2. 文献研究の適切性 ア 研究テーマに関連する先行研究を適切に整理・概観している。 イ 自らの研究に対して先行研究を適切に関連づけ、活用している。 3. 研究方法の妥当性 ア 研究目的等を達成するために妥当な研究方法が選択されている。 イ 選択した研究方法の妥当性やその方法を適切に示している。 ウ 研究を遂行するに当たり、適切な倫理的配慮が示されている。 4. 論理の一貫性 ア 研究論文全体を通して、論理展開に整合性、一貫性がある。 イ 研究目的や課題に対して、資料・データ等から論理的に明確な結論が述べられている。 5. 研究の独自性・独創性 研究テーマ、目的・課題設定、研究方法、結論等に独自性や独創性が認められる。 6. 論文構成・体裁の適切性 本専攻を構成する大学の学位論文作成要領等に従って、適切に修士論文が作成されている。 ＜特定課題レポート＞ 1. 研究テーマの適切性 ア 研究テーマ設定の背景・問題、現場への有用性や社会的意義が適切に示されている。 イ 研究目的や課題が適切で、明確である。 ウ 研究内容がスポーツ国際開発学に寄与するものである。 2. 文献研究の適切性 ア 研究テーマに関連する先行研究を適切に整理・概観している。 イ 自らの研究に対して先行研究を適切に関連づけ、活用している。 3. 研究方法の妥当性 ア 研究目的等を達成するために妥当な研究方法が選択されている。 イ 選択した研究方法の妥当性やその方法を適切に示している。 ウ 研究を遂行するに当たり、適切な倫理的配慮が示されている。 4. 論理の一貫性 ア レポート全体を通して、論理展開に整合性、一貫性がある。 イ 研究目的や課題に対して、資料・データ等から論理的に明確な結論が述べられている。

学位論文に関する評価の基準	5. 研究の実践性 研究テーマ、目的・課題設定、研究方法、結論等に現場における実践性が認められる。 6. レポート構成・体裁の適切性 本専攻を構成する大学の学位論文作成要領等に準じて、適切にレポートが作成されている。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

体育学、国際開発学の 2 領域における専門的な知識、研究能力とともに、国際開発でリーダーシップを発揮するために必要な、多様性に対する理解など、汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

教育課程の編成方針	学位に相応しい専門的能力を身につけるため、以下の専門科目を実施している。また、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、関連科目を設置している。加えて、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目からも 2 単位の履修を推奨することにより、汎用的知識・能力をさらに涵養する。 **講義科目（14 単位以上履修）** – 基礎科目（スポーツ国際開発論Ⅰ、オリンピックムーブメント論、スポーツマネジメント論、スポーツ・文化・社会、ヘルスプロモーション論、上級コーチ教育論、比較体育科教育論、研究方法論など）において、獲得すべき能力の基盤となる知識を身につける。 – 応用科目（スポーツ国際開発論Ⅱ、経営マネジメント論、プロジェクトマネジメント論など）において、グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力、スポーツ・体育・健康に関する実践力、そして国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力を身につける。 – 関連科目（社会開発のための公共政策、多文化共生論、経済開発論、社会開発論、研究データ管理・分析法など）において、国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力を身につける。 **演習科目（10 ～ 12 単位履修）** – 学内科目（課題演習）では、スポーツを通じた開発と平和、スポーツを通じた教育・青少年育成、スポーツとジェンダー・人種・民族、健康と環境、アダプテッドスポーツ・高齢者の 5 領域を各自の研究テーマに合わせて選択し、獲得すべき能力についての専門的な知識とともに、グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力を身につける。 – 学外科目（JSC セミナー、JSC プロジェクト、国外大学セミナー、国際カンファレンス・セミナーなど）では、グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力を身につける。 **実践科目（6 ～ 8 単位履修）** – 国内 OJP（4 週間）と国外 OJP（16 週間）により、獲得すべき能力の実践現場での知識と実践力を身につける。

教育課程の編成方針	**キャリアパス形成** 本専攻は、筑波大学・鹿屋体育大学の両大学の特徴を活かし、かつ JSC との協働によって、講義・演習・実践とが橋渡しされ、キャリアパス形成に直結するような教育課程編成と実施がなされている。JSC が展開している事業に学生が参加する「JSC セミナー」「JSC プロジェクト」のほか、国内 OJP（4 週間）を実践する機関のひとつに JSC が位置づいており、国外 OJP（16 週間）実施の際にも JSC の情報やネットワークを活用している。国外 OJP は、学生のキャリアパス形成にとって重要であり、協定締結機関である国際協力機構（JICA）の長期ボランティア制度を利用できるほか、国外の NGO、IF、NF、大学等と連携を取って実施している。
学修の方法 特色的な教育	– 指導体制は主指導教員 1 名、副指導教員 2 名（副指導教員のうち 1 名は本籍大学以外の教員） – 1 年次において、各自の志望領域の課題演習を履修する。 – 1 年次後半から 2 年次にかけて、国外 On the Job Practice（16 週間）を実践。 – 2 年次において、課題研究を履修する。 – 2 年次において、中間発表会（10 月）、論文（または特定課題レポート）テーマ提出（11 月）、論文（または特定課題レポート）提出（1 月）、最終試験（1 月）を実施する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識を持ち、スポーツに関わる指導経験など実務経験を有し、英語によるコミュニケーション能力及び国際情勢と政策に関する知識を基盤として、国際開発と平和構築に対する使命感、かつ目的達成志向の強い学生を求める。
入学者選抜方針	– 口述試験（合計 200 点）：スポーツ・体育・健康に関する基礎知識の評価、研究計画のプレゼンテーション、質疑応答（海外在住の受験者に対しては、オンラインで実施） – 英語（TOEIC または TOEFL または IELTS を 100 点満点に換算）

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	修士論文のための研究に向けて必要な研究方法論や研究データ管理・分析法の授業を開講している。また、英語での論文作成に必要なライティング能力の養成および英語でのプレゼンテーション能力の養成のため、各課題演習を通じてライティング指導を行っている。さらに TA や課外活動での指導経験を通じて、教育・指導技術を高める機会を提供し、必要に応じて補講や個別指導を行うことで、学生主体の学修や時間管理を支える。
学生同士の交流機会	ピア効果を踏まえた学修意欲と研究の質を高めるために、課題演習や講座授業におけるグループワークを通じた相互学習や、学外演習での協働経験を通じた学修機会を提供する。また、同じく英語による教育研究を進めている TIAS2.0 との交流、さらに履修科目や研究によって形成された国際的なネットワークを活用する。

教員との交流機会	鹿屋体育大学との共同専攻である強みを活かし、所属校の主指導教員 1 名および所属大学外の教員を含む副指導教員 2 名による指導により、多様な意見を求められる体制を作っている。また、国際インターンシップ中の相談を含む対面およびオンラインでの個別面談や研究指導を通じて双方向的交流を行うと共に、中間報告会後の懇談会などを通じて、研究のみならず、学生生活の課題を共有できる機会を継続的に提供する。さらに、教員との共同研究や国内外インターンシップおよび学外演習において教員と学生が協働する機会を構築している。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育の質の保証と継続的改善を図るために、授業評価アンケートや修士論文審査結果をもとに教育課程委員会で指導方法を検討し、必要に応じて改善している。また、JSC や協定締結機関との協議を通じて、実践科目の教育内容を検証し、国際的な実務ニーズに即して改善している。さらに、学修プログラムおよび指導成果に関する研究を行い国際誌に投稿することで、教育の国際的妥当性を検証している。加えて、教員会議において定期的なカリキュラム点検を行い、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーとの整合性を確認し、必要に応じて改善している。以上、達成度評価表や授業評価などによって、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。

大学体育スポーツ高度化共同専攻（3 年制博士課程）
Joint Doctoral Program in Advanced Physical Education and Sports for Higher Education

■ 博士（体育スポーツ学）
■ Doctor of Philosophy in Physical Education and Sport Studies

人材養成目的 / Program Educational Objectives

筑波大学と鹿屋体育大学の大学体育スポーツに関する教育研究実績を活かし、大学体育スポーツを先導する確かな専門的知識と実技教育能力及びマネジメント能力を兼ね備え、現場の教育指導と研究の循環を効果的に行える学術的職業人としての高度な体育・スポーツの指導者・リーダーを養成する。

養成する人材像	− 大学体育スポーツを先導する確かな専門的知識と実技教育能力及びマネジメント能力を持つ人材。 − 大学体育スポーツ現場の実践知を探求し、その研究成果を教育や運営へと循環させることができる実践的研究能力を持つ人材。 − 高等教育における体育スポーツ教育の質保証を先導する高度指導者・リーダーに必要な教養を持つ人材。
修了後の進路	高等教育機関（大学・短大・高専）における体育教員、体育スポーツ関連機関の職員など

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する 3 年制博士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（体育スポーツ学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知識を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	大学体育研究演習、体育スポーツ実践的研究方法論、体育スポーツ実践的研究演習Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ、博士論文課題演習Ⅰ／Ⅱ、最先端スポーツ科学理論
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的視野から解決する能力はあるか	大学体育論、大学体育授業演習Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ、体育スポーツ実践的指導演習、大学スポーツマネジメント演習Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ、コーチングの哲学と倫理
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつわかりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質をわかりやすく倫理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	大学体育研究演習、大学スポーツマネジメント演習Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ、国際インターンシップ、コーチングの哲学と倫理、Presentation for General Audiences、体育スポーツ実践的研究演習Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	大学スポーツマネジメント演習Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ、コーチングの哲学と倫理、体育スポーツ実践的指導演習
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	大学体育研究演習、国際インターンシップ、Presentaion for General Audiences、地球規模課題と国際社会
	6. 実践的教育能力：大学体育スポーツの指導現場における教育実践能力	①対象者の特性に配慮した適切な授業やトレーニングの実施計画が立案できるか ②立案した計画を実施、検証、改善する能力があるか	大学体育論、大学体育授業演習Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ、体育スポーツ実践的指導演習

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. 実践的研究能力：大学体育スポーツ現場における事象を対象として、実践的かつ有用な研究を実施する能力	①オリジナリティが高く、有益な研究テーマを設定できるか ②的確な仮説の創出と論理的かつ客観的な仮説の検証が行えるか	大学体育研究演習、体育スポーツ実践的研究方法論、体育スポーツ実践的研究演習Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ、大学スポーツマネジメント演習Ⅰ/ Ⅱ／Ⅲ、博士論文課題演習Ⅰ／Ⅱ、最先端スポーツ科学理論
	8. 倫理観：体育・スポーツ・健康・コーチング分野の基礎的な研究能力を有する人材または高度専門職業人にふさわしい倫理的知識と倫理観	①指導・研究対象の人権を尊重し、常に公平公正な指導が行えるか ②社会的規範を遵守し、指導者・研究者としての自覚を常に持っているか	大学体育研究演習、体育スポーツ実践的研究方法論、博士論文課題演習Ⅰ／Ⅱ、国際インターンシップ、コーチングの哲学と倫理、応用倫理、環境倫理学概論
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – 学修成果の評価は、学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を「達成度評価表（ルーブリック）」により、確認・評価をすることで行う。 – 第一段階（1 年次秋学期末）：博士論文研究能力の達成度審査である Qualifying Examination（中間審査）において、全研究指導担当教員がルーブリックに基づき審査を行う。 – 最終段階：博士論文研究審査会において、学位論文審査委員会の大学体育スポーツ高度化共同専攻の教員がルーブリックに基づき審査を行い、教育会議において全教員で最終達成度審査を行う。		

学位論文に関する評価の基準	1. 研究テーマ及び研究内容の独創性 ア 研究テーマ、問題設定、研究方法、考察・結論等に独創性が認められる。 イ 研究成果は、現場への有用性や学界への貢献等、学術的・社会的意義が明確である。 2. 研究デザイン ア 研究テーマに沿って問題が適切に設定され、それを受けて論述が適切に展開されている。 イ 論理に一貫性があり、結論が明確に導き出されている。 3. 研究方法 ア 研究テーマ・目的及び問題設定に対して適切な研究方法が選択されている。 イ 研究方法を深く理解し、資料・データの適切な収集・取扱いや分析法を習得している。 ウ 結果の解釈、考察は妥当である。 エ 倫理的配慮がなされている。 4. 当該研究領域に対する理解 先行研究や当該分野の研究動向、関連研究について、幅広くかつ的確に理解している。 5. 論文の構成・体裁 緒言、方法、結果、考察、結論等の構成と内容、引用の方法及び注・文献の示し方等が適切であり、学術論文としての体裁が整っている。 6. 審査の体制、審査方法 学位論文審査委員会は主査 1 名と副査 3 名以上（他専攻教員 1 名を含む）の合計 4 名以上で構成される。主査または副査のいずれか 1 名は、主指導教員及び副指導教員に含まれない他専攻所属教員とする。学位論文審査委員会では学位論文の概要を 30 分で発表し、その後質疑応答を行い、申請者の単位取得の確認と合わせて、学位論文に係る評価の基準を満たしているか審査を行う。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

実践的教育能力と実践的研究能力の養成を目的として、遠隔講義システムを利用しながら、筑波大学と鹿屋体育大学の双方の教育・研究資源を活用できるよう、下記のような教育課程を編成する。

教育課程の編成方針	教育課程は、4 つの科目群「実践的教育能力育成科目」「実践的研究能力育成科目」「高度指導者教養育成科目」「博士論文研究能力育成科目」より構成する。 –「実践的教育能力育成科目」：大学体育や大学スポーツを先導する確かな専門的知識と実技教育能力及びマネジメント能力を身につける。 –「実践的研究能力育成科目」：大学体育や大学スポーツ現場の実践知を探求し、その研究成果を教育へと循環させることができる実践的研究能力を身につける。 –「高度指導者教養育成科目」：大学体育や大学スポーツを先導する指導者・リーダーとして必要な教養を身につける。 –「博士論文研究能力育成科目」：実践的研究論文や博士論文研究計画書の作成力やプレゼンテーション力、高度な大学体育スポーツ指導者・リーダーとして求められる実践的研究力を身につける。

学修の方法 特色的な教育	− 主に 1・2 年次において実践的教育能力、実践的研究能力、高度指導者教養とともに、博士論文課題演習を履修する。 − 2 年次 5 月以降に、博士論文研究能力の到達度審査として実施される Qualifying Examination に合格した者が博士論文の執筆に着手する。 − 3 年目に博士論文を作成し、審査に合格した者は博士の学位を取得する。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	大学体育・大学スポーツの教育指導や組織運営現場における問題解決のための実践的教育・運営・研究能力獲得に高い意欲を持つとともに、修士課程（専攻領域問わず）を経るなど一定水準の学術的研究能力を身につけた人材を求める。
入学者選抜方針	− 書類審査（150 点）：研究計画、研究実績、指導実績（運営実績を含む）、教育実績の評価 − 口述試験（100 点）：研究計画のプレゼンテーション、質疑応答 − 英語（TOEIC または TOEFL スコア：50 点に換算）

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	− 鹿屋体育大学の副査を含む指導体制により、研究指導の客観性と多様性を確保する。 − 体育系研究倫理講習会及び大学体育研究演習を通じて研究倫理の理解と研究倫理申請の方法を支援する。 − 1 年生から 3 年生の所属年次の学生に対して「学位論文研究セミナー（春学期開催）」、「研究報告会（秋学期開催）」での発表機会の提供と教員・学生間のフィードバックの機会を設け研究を支援する。 − 所属年次以外の学生に対して「研究報告会（秋学期開催）」での発表機会の提供と教員・学生間のフィードバック機会を設け研究を支援する。
学生同士の 交流機会	− 合宿形式で実施する「つくば実習（春学期開催）」を開講し、学生相互の模擬授業を通じた交流の機会を設け、学生の学修意欲と授業実践の質の向上を図る。
教員との交流機会	− 主査、副査による「学位論文研究セミナー（春学期開催）」と、全学生・全教員が参加する「研究報告会（秋学期開催）」を実施し、学生と教員がディスカッションを行う機会を設けることで、研究の質を高める。 − 人間総合学術院が主催する「学生の集い（秋学期開催）」への参加を通じて、専門の枠を越えた学生間の交流を促進し、学修意欲のさらなる向上を目指す。 − 教員主催の研究会や研究プロジェクトへの参画を推進し研究への興味関心を高める。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

- 授業評価アンケートを実施し、その結果を運営委員会で確認し、各教員が授業改善に役立てる。
- 学生の達成度評価（客観的評価）結果を実指導教員と教育委員会で確認し、運営委員会で報告する。
- 修了後の就職先に対するアンケート調査を実施し、専攻の教育成果に対する社会的評価を運営委員会で確認し、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。
- 大学体育・スポーツの課題の解決や授業改善のために、FD 委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、専攻の目的達成に向けた体制を強化する。

国際連携食料健康科学専攻（修士課程）
International Joint Degree Master's Program in Agro-Biomedical Science in Food and Health

■ 修士（食料健康科学）
■ Master of Agro-Biomedical Science in Food and Health

人材養成目的 / Program Educational Objectives

人類が地球規模で直面する健康の維持・増進や食料の安全供給等の課題に対して、「医食同源」の理念に基づき、食料が健康に及ぼす影響を科学的に理解し、グローバル社会のニーズと研究開発を橋渡しすることのできる専門力と実践力を備えた国際的な高度専門職業人を養成する。

養成する人材像	次の知識・能力を備えた人材を養成する。 – リテラシー：専門性に裏付けされた分野横断的な思考力、専門的知識・能力を活用する語学力 – コーディネーション力：海外フィールドにおける目利き力・企画力、多国籍間における対話・交渉力、異分野、異業種間でのマネジメント能力 – 実践力：アイデアを具体化・実行する実践力、プレゼンテーションや自己アピールなど表現力 – 健康と食資源を結びつける力：生物資源の機能性、医学的利用に関する知識、食品由来の疾患や生理的障害に関する知識、食資源や医療にかかわる政策に関する知識 – 健康安全保障問題を捉える力：食資源や医薬品を含めた化学物質の安全性を含む社会医学に関する知識 – 食料安全保障問題を捉える力：生物資源の評価開発（安全性を含む）と持続的食料生産体系の利用に関する知識
修了後の進路	– 海外展開の強化を計画する食品・製薬会社等において、「食と健康」に関する新たな社会的ニーズを理解し、国内外の市場・事業所と研究開発現場の橋渡しをする国際コーディネーターや技術コーディネーター – 国際的に事業展開している食料・酒類・漢方薬等を取り扱う商社・流通会社において、食品安全性、食料安定供給、健康維持などの「食と健康」にかかわる社会的ニーズを医科学及び農学双方の視点で理解することができるマーケティング担当 – 農林水産省などの行政機関における食料の輸出入管理部門、植物防疫所、動物検疫所 – 上記業種に関連するシンクタンク・コンサルタント会社におけるアナリスト 等

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する修士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（食料健康科学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. リテラシー：分野横断的思考力、語学力	①専門性に裏付けされた分野横断的な思考力があるか ②専門的知識・能力を活用する語学力があるか	食料健康科学概論、キャリアパス・セミナー、医学英語、基礎分子栄養学、食料健康科学グループセミナー、食料健康科学演習、国際科学セミナー、フィールドと実験室の融合（台湾）、フィールドと実験室の融合（フランス）、企業インターンシップ、達成度自己評価、特定課題研究レポートの作成と発表
	2. コーディネーション力：目利き力・企画力、対話・交渉力、マネジメント能力	①海外フィールドにおける目利き力・企画力があるか ②多国籍間における対話・交渉力があるか ③異分野、異業種間でのマネジメント能力があるか	アントレプレナーシップトレーニング、バイオアントレプレナーシップトレーニング、キャリアパス・セミナー、食料健康科学グループセミナー、就職キャリア支援セミナー、食料健康科学研究、生物医科学研究の橋渡しのためのブートキャンプ、フィールドと実験室の融、企業インターンシップ、達成度自己評価、特定課題研究レポートの作成と発表
	3. 実践力:実践力・表現力	①アイデアを具体化・実行する実践力があるか ②プレゼンテーションや自己アピールなど表現力	アントレプレナーシップトレーニング、バイオアントレプレナーシップトレーニング、キャリアパス・セミナー、食料健康科学グループセミナー、就職キャリア支援セミナー、食料健康科学研究、生物医科学研究の橋渡しのためのブートキャンプ、フィールドと実験室の融合、企業インターンシップ、達成度自己評価、特定課題研究レポートの作成と発表

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	4. 健康と食資源を結びつける力	①生物資源の機能性、医学的利用に関する知識があるか ②食品由来の疾患や生理的障害に関する知識があるか ③食資源や医療にかかわる政策に関する知識があるか	食料健康科学概論、基礎分子栄養学、オミクスとバイオインフォマティクスの食料健康科学への応用、橋渡し研究概論、地球規模課題と国際社会：環境汚染と健康影響、食料システム学特論、メタボロミクス、グローバルヘルス諸課題、分子栄養学、食品安全と健康、応用微生物学、水性及び食源性微生物病と食習慣、栄養、マイクロバイオーム、免疫、栄養・生体制御と主要疾患、欧州における食品安全・保健政策、達成度自己評価、特定課題研究レポートの作成と発表
	5. 健康安全保障問題を捉える力	食資源や医薬品を含めた化学物質の安全性を含む社会医学に関する知識があるか	食料健康科学概論、基礎分子栄養学、基礎毒性学、ガンの生物学、人体病理学・腫瘍学、地球規模課題と国際社会：環境汚染と健康影響、保健医療政策学、メタボロミクス、生体分子の細胞ネットワーク健康研究メソッドの原理と応用、グローバル環境衛生学、疾病負荷の測定：方法と応用、創薬、疾患、健康における DNA プロセッシング、達成度自己評価、特定課題研究レポートの作成と発表
	6. 食料安全保障問題を捉える力	生物資源の評価開発（安全性を含む）と持続的食料生産体系の利用に関する知識があるか	食料健康科学概論、基礎分子栄養学、グローバルフードセキュリティー特論、台湾農業、乳製品のバイオテクノロジー、農業生産への環境ストレスの影響、植物育種学の最先端とその利用、グリーンバイオテクノロジー、動物性食材の品質管理、達成度自己評価、特定課題研究レポートの作成と発表

学修成果の評価に関する方針	「学位授与の方針」に掲げた知識・能力（コンピテンス）は、以下の直接評価の方法を主体として評価する。 – 本専攻が掲げた知識・能力（コンピテンス）を達成するために設計されたカリキュラムに基づき、必修科目などに組み込まれている学生の成果物等を通して、入学時から修了まで、指導教員や各授業担当教員が評価を行う。 – 第 1 セメスターは筑波大学、第 2 セメスターは国立台湾大学、第 3 セメスターはボルドー大学、第 4 セメスターは学生の選択により三大学の中から 1 ヶ所にて学修する。セメスターごとに、本専攻が掲げた知識・能力（コンピテンス）について、書類審査、口頭発表、口頭試験等によって、既定の水準にまで達していることについて審査する。 – 第 4 セメスターにおいては、学位審査委員会から選ばれた審査員 3 名（主査 1 名、副査 2 名。各大学より 1 名ずつ選考）がレポ ー ト・口頭発表・口頭試問の結果をもとに審査及び評価を行う。
学位論文に関する評価の基準	①学位論文が満たすべき水準 1. 地球規模での食料の安全性評価と健康維持に関する基礎的な知識と技術を修得している。 2. 地球規模での食料の安全性評価と健康維持にかかわる現実の問題について、問題設定から専門的手法による解決までの過程を理解し、問題解決のための具体的な手段を考案・開発することができる。 3. 国際的視野と異文化適応力を携えて人類・社会への奉仕を実践する実行力を有する。 4. 国際的な活動の場において十分な意思疎通ができ、かつリーダーシップをとることができる。 5. 学際的な教養と高度な実践的研究によってイノベーションを生み出す創造力を有する。 6. 専門分野に留まらない分野横断的な考え方を身につけている。 ②審査委員の体制（専門委員会の体制）、 筑波大学、国立台湾大学、ボルドー大学の教員で構成される学位審査委員会が、審査員 3 名（主査 1 名、副査 2 名。各大学より 1 名ずつ選考）を選考し審査を実施する。 ③審査方法及び項目等 審査員 3 名により特定課題研究のレポート・口頭発表・口頭試問を評価し、総合的に合否を判定する。

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

教育課程の編成方針	＜全体的な方針＞ 食資源や健康食品の生体への効用・安全性にかかわる専門力を養うとともに、食料の生産・加工等も視野に入れて教育課程を編成・実施する。 授業科目は、「食と健康」に関する学問的な基礎及びマネジメント等の基礎を養う『基礎科目』、実践的学修を通じて課題発見・解決能力及び高度専門職業人としての資質を養う『専門科目 I』、健康と食資源に関する専門性を養う『専門科目 II』に区分して配置する。また、グローバル社会と研究開発を橋渡しすることのできる専門力と実践力を備えた国際的な高度専門職業人を養成するという目的を踏まえ、フィールド活動やインターンシップなど実践的学修を重視する。本専攻では、「食と健康」に関する現実の課題に対して、調査・分析を適切に行い、実践的・実務的な有効性が認められる提案を行うことのできる能力を養うことを重視するため、修士論文ではなく、特定の課題についての研究の成果として「特定課題研究報告書」の作成を課す。 なお、本学、ボルドー大学及び国立台湾大学の 3 大学による国際連携教育課程のメリットを最大限に発揮できるよう、第 1 セメスターでは本学で医科学の基礎を習得し、それを踏まえた上で第 2、第 3 セメスターでは国立台湾大学とボルドー大学で食と健康について発展的な学修ができるようカリキュラムを設計し、学生全員が、第 1 セメスターを本学、第 2 セメスターを国立台湾大学、第 3 セメスターをボルドー大学で学修する。第 4 セメスターは、学生の特定課題研究のテーマ及び修了後の進路希望等を踏まえて 3 大学のいずれかを中心に学修する。 ＜各セメスターの学修目標＞ 本専攻の人材養成目的に従い、3 大学が連携して順次性のある体系的な教育課程を編成・実施するために、各セメスターにおいて養う能力等を次のとおりとする。 【第 1 セメスター／筑波大学】 – 健康と食資源に関する専門基礎力、物質の生体への効用・安全性評価に関する専門力、起業家精神、マネジメント力、専門英語力 【第 2 セメスター／国立台湾大学】 – 健康と食資源に関する専門力、アジアの社会・自然環境における課題発見・解決能力、アジア企業における R&D やプロジェクトマネジメントの基本 【第 3 セメスター／ボルドー大学】 – 健康と食資源の結びつき及び食資源の評価開発に関する専門力、欧州の社会・自然環境における課題発見・解決能力、欧州企業事情・食料安全政策、キャリア形成・職業意識 【第 4 セメスター／各大学】 – 研究テーマに応じた一層の専門力、企業インターンシップを介したキャリアパスの充実、修了後の進路に応じた実践力

教育課程の編成方針	＜授業科目の配置の方針＞ 【基礎科目】 － 本専攻で身に着けるべきコンピテンスと学修内容を俯瞰的に把握し、2 年間の学修計画を立てるため、「食料健康科学グループセミナー」を必修科目として配置する（第 1 セメスター／筑波大学） － 系統的基礎知識と俯瞰的理解力・思考力を養うために、「食料健康科学概論」を必修科目として配置する。 （第 1 セメスター／筑波大学） － 専攻共通の専門基礎力を養うために、「基礎分子栄養学」を必修科目として配置する。（第 1 セメスター／筑波大学） － マネジメント等の基礎を養うために、「アントレプレナーシップ」に関する科目を配置し、4 単位以上必修とする。（第 1 セメスター／筑波大学、第 2 セメスター／国立台湾大学） － キャリア形成・職業意識を養うために、「キャリアパス・セミナー」を必修科目として配置する。（第 3 セメスター／ボルドー大学） － 専門英語を 1 単位以上必修とする。（第 1 セメスター／筑波大学） 【専門科目 I】 － 自国と異なる社会・自然環境において課題発見・解決能力を養うために、連携外国大学院 2 大学で「フィールドと実験室の融合」を配置する。（第 2 セメスター／国立台湾大学、第 3 セメスター／ボルドー大学） － 共通の演習科目として、「食料健康科学演習 I」「基礎毒性学」（第 1 セメスター／筑波大学）、「食料健康科学演習 II」（第 2 セメスター／国立台湾大学）、「国際科学セミナー」（第 3 セメスター／ボルドー大学）を配置する。 － 共通の実習・実験系科目として、「食料健康科学研究 I」（第 1 セメスター／筑波大学）、「食料健康科学研究 II」（第 2 セメスター／国立台湾大学）、「オミクスとバイオインフォマティクスの食料健康科学への応用」（第 3 セメスター／ボルドー大学）を配置する。 － 企業における R ＆ D の実際やプロジェクトマネジメントの基本を学ぶために、「企業インターンシップ」を 3 大学で開設し、1 つ以上必修とする。 また、R&D における社会関連・環境関連の課題に取り組むスキルを強化するために、「生物医科学研究の橋渡しのためのブートキャンプ」（第 2 セメスター／国立台湾大学）を配置する。 【専門科目 II】 － 物質の生体への効用・安全性評価に関する専門知識を中心に、健康と食資源に関する専門力を養うために、第 1 セメスター（筑波大学）に、『健康と食資源科目群 I』として、「橋渡し研究概論」「ガンの生物学」「人体病理学・腫瘍学」「保健医療政策学」「グローバルフードセキュリティー特論」「食料システム学特論」を配置する。

教育課程の編成方針	− 生体及び食資源にかかわるバイオ科学・技術に関する専門知識を中心に、健康と食資源に関する専門力を養うために、第 2 セメスター（国立台湾大学）に、『健康と食資源科目群 II』として、「グローバルヘルス諸課題」「生体分子の細胞ネットワーク」「健康研究メソッドの原理と応用」「環境と産業衛生」「疾病負荷の測定：方法と応用」「分子栄養学」「台湾農業」「乳製品のバイオテクノロジー」「応用微生物学」を配置する。 − 健康と食資源の結びつき及び食資源の評価開発を中心に健康と食資源に関するより深い専門力を養うために、第 3 セメスター（ボルドー大学）に、『健康と食資源科目群 III』として、「水性及び食源性微生物病と食習慣」「栄養、マイクロバイオーム、免疫」「栄養・生体制御と主要疾患」「欧州における食品安全・保健政策」「農業生産への環境ストレスの影響」「植物育種学の最先端とその利用」「グリーンバイオテクノロジー」「動物性食材の品質管理」を配置する。 − 第 4 セメスターには、『専門科目 II』として本専攻の授業科目は配置していないが、特定課題研究のテーマ等に関連して必要と認められる場合には他専攻開設の授業科目を履修する。
学修の方法 特色的な教育	− 学生は、第 1 セメスターは筑波大学、第 2 セメスターは国立台湾大学、第 3 セメスターはボルドー大学、第 4 セメスターは学生の選択により 3 大学の中から 1 カ所にて学修する。 − 単位の取得については、第 1 セメスターから第 3 セメスターの間に、必修科目および選択科目を合わせて、各大学にて 15 単位以上、トータル 45 単位以上を取得する。 加えて、第 4 セメスターでは、各ホーム大学で開設されるインターンシップ科目を必ず取得する。 − それぞれの学生に対して各大学より 1 人ずつ計 3 名の指導教員が配置され、各セメスターにて指導教員の指導のもと、特定課題研究のテーマに沿った学修と研究を進める。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	医科学又は生物資源科学の素養と協働の精神を持ち、健康と食料に関する地球規模の課題に対して国境も学問領域も超えて積極的に取り組み、人類・社会の未来構想に貢献するためのイノベーションを生み出そうとする強い意志を持つ学生を求める。
入学者選抜方針	出願書類の受付は各大学で行う。 受付に際しては、志願者が出願資格を満たしていることを 3 大学で相互に確認する。 第 1 次選考として、出願受付を行った大学において書類審査とグループ討論を、第 2 次選考として 3 大学の教員による面接試験を行い、それらの結果を 3 大学合同で総合的に評価して合否を判定する。出願書類の作成、グループ討論、面接はいずれも英語により行う。 第 1 次選考及び第 2 次選考の内容及び実施方法は次のとおり。 ＜第 1 次選考＞ 出願受付を行った大学において、出願書類に基づき書類審査を行い、その後グループ討論を実施する。 なお、第 1 次選考については、3 大学共通に定めるもののほか、第 1 次選考を行う大学の判断により、予備面接等の必要な選考を行うことができるものとする。

入学者選抜方針	書類審査は、志望動機、研究計画書、出身大学（学士課程）の成績・卒業証明書、推薦書、英語能力を証明する書類等とする。これらの書類により、受験者の学士課程における学修の内容・成果、本専攻での学修の目的・計画、修了後のキャリアプラン、英語能力等を確認し、受験者の「食と健康」に関するバックグラウンド、「食と健康」に関する地球規模課題の解決への意志、国際性と学際性への適性等を評価する。 評価項目は、志望動機、研究計画、学修計画、キャリアプラン、文章力とし、複数の審査員が採点する。 英語能力については、TOEFL-iBT：61 以上、TOEIC：600 以上、IELTS：5.0 以上を出願要件とする。 グループ討論は、「食と健康」に関する地球規模課題をテーマとして行う。 グループ討論の開始前に話題を提供し、数名の受験生と 1 名の教員がグループを作って、その解決策について議論する。これにより、受験者の持つ医科学又は生物資源科学のバックグラウンドの課題への活用能力、共同で物事を進めるコミュニケーション能力等を評価する。 評価項目は、「食と健康」に関する地球規模課題の理解度、発言力、他者への傾聴、発言の首尾一貫性、討論への貢献度合とし、複数の審査員が採点する。 受験者の「食と健康」に関する学問的素養については、学士課程における履修科目とその成績、研究計画書、グループ討論の内容から医科学や生物資源科学の分野において基礎的な素養を有することを評価する。 ＜第 2 次選考＞ 3 大学の教員による面接試験を行う。 面接試験は出願受付を行った大学で開催し、他 2 大学はテレビ会議システム等により参画する。 面接試験では、本専攻での学修の目的・計画、「食と健康」に関する基礎知識、修了後のキャリアプラン、課外活動・社会活動の経験等に関する質疑応答により、本専攻への適合性を評価する。 評価項目は、志望動機、研究・学修計画、キャリアプラン、プレゼンテーション、質疑応答とし、複数の審査員が採点する。 最後に、書類審査、グループ討論、面接試験の結果を 3 大学合同で総合的に評価して合否を判定する。以上の選考を通じて、「食と健康」に関する学問的素養と協働性・学際性・国際性をもって課題解決に向かう強い意志を備えた、本専攻の人材養成目的及び教育課程に相応しい入学者を確保する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	筑波大学、国立台湾大学、ボルドー大学の学生が 3 大学において効果的かつ円滑に共修できるよう、入学直後の約 1 ヶ月間イニシエーションセミナーを実施し、チームビルディングを行っている。また、3 大学の学生が常に共修できるよう、多目的ラウンジを設けている。
学生同士の交流機会	イニシエーションセミナーのグループワークやエクスカーション、人間総合科学学術院のイベントなどを通して、学生同士の交流を図っている。
教員との交流機会	イニシエーションセミナーの最後に筑波大学、国立台湾大学、ボルドー大学の教員が学生と面談を行い、3 大学において学生が各自の研究テーマに合った指導教員を選べるようにしている。また、セメスター開始時と終了時の歓送迎会、人間総合科学学術院や学生主催のイベントにおいて交流の機会を設けている。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教務委員会を設置し、授業評価アンケートの結果や学生の学修成果に基づき、教育課程の点検と改善を継続的に実施する。

グローバル教育院
School of Integrative and Global Majors

ヒューマニクス学位プログラム
Ph.D. Program in Humanics

ヒューマニクス学位プログラム
Ph.D. Program in Humanics

■ 博士（医学）
■ Doctor of Philosophy in Medical Sciences

人材養成目的 / Program Educational Objectives

生命の恒常性の原理、個としての「ヒト」の生理と病理を明らかにし、社会の中で「人」として健康で快適な生活が実現できる新たな科学・技術を生み出す学問領域である「ヒューマニクス」領域において、生命医科学と、理・工・情報学の 2 つの領域を有機的に結びつけられるバイディシプリンの専門力と研究力を持ち、これを基盤として、予測困難な未来に通用する柔軟で複眼的な発想力を有する「ヒューマニクス」人材を養成することを目的とします。

養成する人材像	本プログラムを終了した博士人材は、生命医科学と、理・工・情報学の最新の知識や技術を取り込み、両者とそれぞれの言語で会話ができ、両者を深く理解することで新たなパラダイムを着想し、それを実現するための両者を融合できる専門力（バイディシプリンの専門力）を備えた、卓越したヒューマニクス人材となります。
修了後の進路	ヒューマニクス研究を基盤に、新たな学際分野を創造できる研究者、サイバニクス・情報計算科学を駆使できる医療人、人機能の補完技術を産業化する起業家、新たなパラダイムをもって医療政策を立案する行政官、など幅広い進路を想定しています。

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（医学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Medical Sciences

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（医学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	1）世界のサイエンスリーダーズセミナー、2）ヒューマニクス研究フォーラムなど
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	1）ヒューマニクス研究フォーラム、2）インターンシップ、3）適正技術など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	1）ヒューマニクス研究フォーラム、2）国際ラボローテーション、3）インターンシップなど
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	1）ヒューマニクス研究フォーラム、2）適正技術、3）世界のサイエンスリーダーズセミナー、4）ビジネスリーダーズセミナーなど
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	1）世界のサイエンスリーダーズセミナー、2）国際ラボローテーション、3）適正技術など
	6. バイディシプリンの俯瞰力	①新たに生じる未知のヒューマニクス課題に対して、その本質を的確にとらえることができるか ②課題解決に向けて、バイディシプリンの専門力をもとに、柔軟で複眼的な発想に基づいた解決方法を提案することができるか	1）ヒューマニクス演習、2）ヒューマニクス特論、3）生命医科学概論、4）理工情報学概論など

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（医学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Medical Sciences

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. バイディシプリンの課題設定力	①ヒューマニクスの分野において、独創的な融合研究テーマを発想することができるか ②ヒューマニクス課題について、優れた研究成果を得られるだけの知識と技能を有するか	1）ヒューマニクス基礎実験、2）ヒューマニクス演習、3）ヒューマニクス研究フォーラム、4）世界のサイエンスリーダーズセミナー、5）ビジネスリーダーズセミナーなど
	8. バイディシプリンの研究実行力	①ヒューマニクス課題の解決に向けた計画を立案し、高い意欲と倫理観をもって、粘り強く遂行することができるか ②研究成果の学術的な意義、及び、その社会的意義を説明でき、その事業化を構想する能力があるか	1）ヒューマニクス基礎実験、2）ヒューマニクス特論、3）生命医科学基礎実習、4）理工情報学基礎実習、5）臨床医学演習
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は、「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階ごとに学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – カリキュラムに基づき、学修成果物及び学生個々のパフォーマンスをエビデンスとして、研究指導教員及び授業担当教員が評価する。 – 本学位プログラムが独自に開発したポートフォリオ型達成度評価法（CPx：Career Platform for Humanics）を利用し、コンピテンスの達成状況を把握・評価する。		
学位論文に関する評価の基準	1）Qualifying Examination（QE）に合格している。 2）ポートフォリオ型達成度評価で規定のレベルを達成している。 3）国際社会で自在に交渉することができる英語力とコミュニケーション能力がある。 4）医学医療分野の社会的ニーズを理解して、生命医科学と理・工・情報学を駆使することで解決が可能になる課題を学位論文の研究課題として設定している。また、学位論文の成果に基づき今後解決が求められる研究課題を自立して設定できる。 5）未知の問題の本質を突き詰めようとする確固たる意志および真摯な態度をもち、設定した課題を解決するために、自らの力で研究した成果が学位論文としてまとめられている。 6）学術界または産業界から国際的に高い評価を得られる学術論文を公表できる。 7）研究成果を社会に実装するために何が必要か説明できる。		

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（医学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Medical Sciences

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

未知の問題の本質を突き詰めようとする確固たる意志、生命医科学に加え、理・工・情報学を横断したバイディシプリンの専門知識、ヒューマニクス研究の基本技術とこの分野の世界の状況を理解し、パラダイムシフトとなりうる課題を自立して設定する能力、誠実かつ真摯な態度でその課題を解決する能力を涵養するための教育課程を編成します。

教育課程の編成方針	– 共通科目では、研究倫理の学修、アントレプレナーシップ教育、課程修了後のキャリアパスを想定したインターンシップ、及び海外ラボローテーション等を通して、世界で活躍する強い意欲、誠実な精神、強い倫理観、国際交渉力等を涵養します。 – 専門科目では、基礎医学と臨床医学、及び理・工・情報学のいずれかについて、e-learning と PBL（Problem-based learning）を組み合わせた講義とその実習により学修し、ヒューマニクス研究に必須なバイディシプリンの専門力を涵養します。 – ヒューマニクス専門科目により、学生個々の専門性を向上させることを目的として、生命医科学からメンター教員 1 名と理・工・情報学からメンター教員 1 名を選び、メンター同士の協働を基盤とした完全ダブルメンター制によって専門知識及び技能を修得します。
学修の方法 特色的な教育	標準的履修スケジュールを以下に示す。 – 1 年次のヒューマニクスフォーラムにより、大学院での学習計画を確認する。 – 入学後半年以内に副分野のメンターを決定する。 – 2 年次終了までに必修科目・選択科目から 35 単位以上を修得し、Qualifying Examination（QE）審査を行う。 – QE 後、年 1 ～ 2 回の進捗状況発表を専門委員会に対して行う。 – QE に合格し、必修科目・選択科目から 45 単位以上を修得したうえで、学位論文予備審査に合格した場合、学位論文審査資格が満たされる。 – 学位論文提出を受けて、学位論文審査及び最終試験（口頭試験）を行う。

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	ヒューマニクス領域でパラダイムシフトとなりうる課題の発見・解決を通して、人類の未来に貢献するという強い意志を持ち、下記のいずれかにあてはまる人材を求めます。 – 生命医科学あるいは臨床医学の基礎的な知識・技能を有し、さらに理・工・情報学のいずれかの分野の学際的な研究に高い関心を持つ人材。 – 理・工・情報学のいずれかの分野で基礎的な知識・技能を備え、さらに生命医科学あるいは臨床医学分野の学際的な研究に高い関心を持つ人材。

入学者選抜方針	本学位プログラムは、生命医科学と理・工・情報学の知識・技能を有機的に融合し、人類が直面する生命と健康上の課題を克服しうるパラダイムシフトとなる科学及び技術を研究する課程である。入学者選抜において、こうした学位プログラムの特性を生かし、生命医科学と理・工・情報学分野における専門性と学際性、先進的な創造性、国際性、そして専門外の研究者への説明能力を基調とした入学要件、選抜方式又は選抜基準を設定する。具体的には、生命医科学と理・工・情報学分野の専門知識を問う口述試験を実施し、加えて、生命医科学と理・工・情報学分野を融合した研究提案を英語で記載した研究計画書の提出を求め、その内容を複数の異なる専門分野の教員が参加する口述試験によって評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 出身学部と異なる概論科目および基礎実習での知識・技術の習得を通じて、異分野学修を支援する。 – 共通科目「Scientific Writing and Publishing」において、論文作成に必要な知識とスキルを指導する。 – ポートフォリオ型達成度評価を活用し、学生が自らの学修状況を振り返り、課題を明確化することで、自己省察を促す。
学生同士の交流機会	– 共通科目「ヒューマニクス研究フォーラム」にて、新入生同士及び上級生との交流の機会を提供する。 – 学生グループが中心となり、ヒューマニクスシンポジウムを企画・開催し、企画運営を通じた交流と協働の機会を提供する。
教員との交流機会	– メンター教員以外にも QE 審査員と研究進捗発表（半年に一度）を行い、博士論文研究への助言を得る機会を提供する。 – ダブルメンター制・リバースメンター制を導入し、学生を中心にメンター教員間の協働を促進することで、異分野学修・研究を支援する。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 教員会議およびカリキュラム委員会において、学生の学修成果に関する評価および在学生および修了生へ向けてのアンケート結果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

ヒューマニクス学位プログラム
Ph.D. Program in Humanics

■ 博士（理学）
■ Doctor of Philosophy in Science

人材養成目的 / Program Educational Objectives

生命の恒常性の原理、個としての「ヒト」の生理と病理を明らかにし、社会の中で「人」として健康で快適な生活が実現できる新たな科学・技術を生み出す学問領域である「ヒューマニクス」領域において、生命医科学と、理・工・情報学の 2 つの領域を有機的に結びつけられるバイディシプリンの専門力と研究力を持ち、これを基盤として、予測困難な未来に通用する柔軟で複眼的な発想力を有する「ヒューマニクス」人材を養成することを目的とします。

養成する人材像	本プログラムを終了した博士人材は、生命医科学と、理・工・情報学の最新の知識や技術を取り込み、両者とそれぞれの言語で会話ができ、両者を深く理解することで新たなパラダイムを着想し、それを実現するための両者を融合できる専門力（バイディシプリンの専門力）を備えた、卓越したヒューマニクス人材となります。
修了後の進路	ヒューマニクス研究を基盤に、新たな学際分野を創造できる研究者、サイバニクス・情報計算科学を駆使できる医療人、人機能の補完技術を産業化する起業家、新たなパラダイムをもって医療政策を立案する行政官、など幅広い進路を想定しています。

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（理学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Science

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（理学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	1）世界のサイエンスリーダーズセミナー、2）ヒューマニクス研究フォーラムなど
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	1）ヒューマニクス研究フォーラム、2）インターンシップ、3）適正技術など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	1）ヒューマニクス研究フォーラム、2）国際ラボローテーション、3）インターンシップなど
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	1）ヒューマニクス研究フォーラム、2）適正技術、3）世界のサイエンスリーダーズセミナー、4）ビジネスリーダーズセミナーなど
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	1）世界のサイエンスリーダーズセミナー、2）国際ラボローテーション、3）適正技術など
	6. バイディシプリンの俯瞰力	①新たに生じる未知のヒューマニクス課題に対して、その本質を的確にとらえることができるか ②課題解決に向けて、バイディシプリンの専門力をもとに、柔軟で複眼的な発想に基づいた解決方法を提案することができるか	1）ヒューマニクス演習、2）ヒューマニクス特論、3）生命医科学概論、4）理工情報学概論など

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（理学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Science

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. バイディシプリンの課題設定力	①ヒューマニクスの分野において、独創的な融合研究テーマを発想することができるか ②ヒューマニクス課題について、優れた研究成果を得られるだけの知識と技能を有するか	1）ヒューマニクス基礎実験、2）ヒューマニクス演習、3）ヒューマニクス研究フォーラム、4）世界のサイエンスリーダーズセミナー、5）ビジネスリーダーズセミナーなど
	8. バイディシプリンの研究実行力	①ヒューマニクス課題の解決に向けた計画を立案し、高い意欲と倫理観をもって、粘り強く遂行することができるか ②研究成果の学術的な意義、及び、その社会的意義を説明でき、その事業化を構想する能力があるか	1）ヒューマニクス基礎実験、2）ヒューマニクス特論、3）生命医科学基礎実習、4）理工情報学基礎実習、5）臨床医学演習
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は、「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階ごとに学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – カリキュラムに基づき、学修成果物及び学生個々のパフォーマンスをエビデンスとして、研究指導教員及び授業担当教員が評価する。 – 本学位プログラムが独自に開発したポートフォリオ型達成度評価法（CPx：Career Platform for Humanics）を利用し、コンピテンスの達成状況を把握・評価する。		
学位論文に関する評価の基準	1）Qualifying Examination（QE）に合格している。 2）ポートフォリオ型達成度評価で規定のレベルを達成している。 3）国際社会で自在に交渉することができる英語力とコミュニケーション能力がある。 4）医学医療分野の社会的ニーズを理解して、理学と生命医科学を駆使することで解決が可能になる課題を学位論文の研究課題として設定している。また、学位論文の成果に基づき今後解決が求められる研究課題を自立して設定できる。 5）未知の問題の本質を突き詰めようとする確固たる意志および真摯な態度をもち、設定した課題を解決するために、自らの力で研究した成果が学位論文としてまとめられている。 6）学術界または産業界から国際的に高い評価を得られる学術論文を公表できる。 7）研究成果を社会に実装するために何が必要か説明できる。		

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（理学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Science

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

未知の問題の本質を突き詰めようとする確固たる意志、理学と生命医科学を横断したバイディシプリンの専門知識、ヒューマニクス研究の基本技術とこの分野の世界の状況を理解し、パラダイムシフトとなりうる課題を自立して設定する能力、誠実かつ真摯な態度でその課題を解決する能力を涵養するための教育課程を編成します。

教育課程の編成方針	− 共通科目では、研究倫理の学修、アントレプレナーシップ教育、課程修了後のキャリアパスを想定したインターンシップ、及び海外ラボローテーション等を通して、世界で活躍する強い意欲、誠実な精神、強い倫理観、国際交渉力等を涵養します。 − 専門科目では、基礎医学、臨床医学、及び理学について、e-learning と PBL（Problem-based learning）を組み合わせた講義とその実習により学修し、ヒューマニクス研究に必須なバイディシプリンの専門力を涵養します。 − ヒューマニクス専門科目により、学生個々の専門性を向上させることを目的として、理学からメンター教員 1 名と生命医科学からメンター教員 1 名を選び、メンター同士の協働を基盤とした完全ダブルメンター制によって専門知識及び技能を修得します。
学修の方法 特色的な教育	標準的履修スケジュールを以下に示す。 − 1 年次のヒューマニクスフォーラムにより、大学院での学習計画を確認する。 − 入学後半年以内に副分野のメンターを決定する。 − 2 年次終了までに必修科目・選択科目から 35 単位以上を修得し、Qualifying Examination（QE）審査を行う。 − QE 後、年 1 ～ 2 回の進捗状況発表を専門委員会に対して行う。 − QE に合格し、必修科目・選択科目から 45 単位以上を修得したうえで、学位論文予備審査に合格した場合、学位論文審査資格が満たされる。 − 学位論文提出を受けて、学位論文審査及び最終試験（口頭試験）を行う

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	ヒューマニクス領域でパラダイムシフトとなりうる課題の発見・解決を通して、人類の未来に貢献するという強い意志を持ち、下記のいずれかにあてはまる人材を求めます。 − 生命医科学あるいは臨床医学の基礎的な知識・技能を有し、さらに理・工・情報学のいずれかの分野の学際的な研究に高い関心を持つ人材。 − 理・工・情報学のいずれかの分野で基礎的な知識・技能を備え、さらに生命医科学あるいは臨床医学分野 の学際的な研究に高い関心を持つ人材。

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（理学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Science

入学者選抜方針	本学位プログラムは、生命医科学と理・工・情報学の知識・技能を有機的に融合し、人類が直面する生命と健康上の課題を克服しうるパラダイムシフトとなる科学及び技術を研究する課程である。入学者選抜において、こうした学位プログラムの特性を生かし、生命医科学と理・工・情報学分野における専門性と学際性、先進的な創造性、国際性、そして専門外の研究者への説明能力を基調とした入学要件、選抜方式又は選抜基準を設定する。具体的には、生命医科学と理・工・情報学分野の専門知識を問う口述試験を実施し、加えて、生命医科学と理・工・情報学分野を融合した研究提案を英語で記載した研究計画書の提出を求め、その内容を複数 の異なる専門分野の教員が参加する口述試験によって評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 出身学部と異なる概論科目および基礎実習での知識・技術の習得を通じて、異分野学修を支援する。 – 共通科目「Scientific Writing and Publishing」において、論文作成に必要な知識とスキルを指導する。 – ポートフォリオ型達成度評価を活用し、学生が自らの学修状況を振り返り、課題を明確化することで、自己省察を促す。
学生同士の 交流機会	– 共通科目「ヒューマニクス研究フォーラム」にて、新入生同士及び上級生との交流の機会を提供する。 – 学生グループが中心となり、ヒューマニクスシンポジウムを企画・開催し、企画運営を通じた交流と協働の機会を提供する。
教員との交流機会	– メンター教員以外にも QE 審査員と研究進捗発表（半年に一度）を行い、博士論文研究への助言を得る機会を提供する。 – ダブルメンター制・リバースメンター制を導入し、学生を中心にメンター教員間の協働を促進することで、異分野学修・研究を支援する。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 教員会議およびカリキュラム委員会において、学生の学修成果に関する評価および在学生および修了生へ向けてのアンケート結果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

ヒューマニクス学位プログラム
Ph.D. Program in Humanics

■ 博士（工学）
■ Doctor of Philosophy in Engineering

人材養成目的 / Program Educational Objectives

生命の恒常性の原理、個としての「ヒト」の生理と病理を明らかにし、社会の中で「人」として健康で快適な生活が実現できる新たな科学・技術を生み出す学問領域である「ヒューマニクス」領域において、生命医科学と、理・工・情報学の 2 つの領域を有機的に結びつけられるバイディシプリンの専門力と研究力を持ち、これを基盤として、予測困難な未来に通用する柔軟で複眼的な発想力を有する「ヒューマニクス」人材を養成することを目的とします。

養成する人材像	本プログラムを終了した博士人材は、生命医科学と、理・工・情報学の最新の知識や技術を取り込み、両者とそれぞれの言語で会話ができ、両者を深く理解することで新たなパラダイムを着想し、それを実現するための両者を融合できる専門力（バイディシプリンの専門力）を備えた、卓越したヒューマニクス人材となります。
修了後の進路	ヒューマニクス研究を基盤に、新たな学際分野を創造できる研究者、サイバニクス・情報計算科学を駆使できる医療人、人機能の補完技術を産業化する起業家、新たなパラダイムをもって医療政策を立案する行政官、など幅広い進路を想定しています。

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（工学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Engineering

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士後期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、博士（工学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の創成力：未来の社会に貢献し得る新たな知を創成する能力	①新たな知の創成といえる研究成果等があるか ②人類社会の未来に資する知を創成することが期待できるか	1）世界のサイエンスリーダーズセミナー、2）ヒューマニクス研究フォーラムなど
	2. マネジメント能力：俯瞰的な視野から課題を発見し解決のための方策を計画し実行する能力	①重要な課題に対して長期的な計画を立て、的確に実行することができるか ②専門分野以外においても課題を発見し、俯瞰的な視野から解決する能力はあるか	1）ヒューマニクス研究フォーラム、2）インターンシップ、3）適正技術など
	3. コミュニケーション能力：学術的成果の本質を積極的かつ分かりやすく伝える能力	①異分野の研究者や研究者以外の人に対して、研究内容や専門知識の本質を分かりやすく論理的に説明することができるか ②専門分野の研究者等に自分の研究成果を積極的に伝えるとともに、質問に的確に答えることができるか	1）ヒューマニクス研究フォーラム、2）国際ラボローテーション、3）インターンシップなど
	4. リーダーシップ力：リーダーシップを発揮して目的を達成する能力	①魅力的かつ説得力のある目標を設定することができるか ②目標を実現するための体制を構築し、リーダーとして目的を達成する能力があるか	1）ヒューマニクス研究フォーラム、2）適正技術、3）世界のサイエンスリーダーズセミナー、4）ビジネスリーダーズセミナーなど
	5. 国際性：国際的に活動し国際社会に貢献する高い意識と意欲	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する高い意識と意欲があるか ②国際的な情報収集や行動に十分な語学力を有するか	1）世界のサイエンスリーダーズセミナー、2）国際ラボローテーション、3）適正技術など
	6. バイディシプリンの俯瞰力	①新たに生じる未知のヒューマニクス課題に対して、その本質を的確にとらえることができるか ②課題解決に向けて、バイディシプリンの専門力をもとに、柔軟で複眼的な発想に基づいた解決方法を提案することができるか	1）ヒューマニクス演習、2）ヒューマニクス特論、3）生命医科学概論、4）理工情報学概論など

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（工学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Engineering

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	7. バイディシプリンの課題設定力	①ヒューマニクスの分野において、独創的な融合研究テーマを発想することができるか ②ヒューマニクス課題について、優れた研究成果を得られるだけの知識と技能を有するか	1）ヒューマニクス基礎実験、2）ヒューマニクス演習、3）ヒューマニクス研究フォーラム、4）世界のサイエンスリーダーズセミナー、5）ビジネスリーダーズセミナーなど
	8. バイディシプリンの研究実行力	①ヒューマニクス課題の解決に向けた計画を立案し、高い意欲と倫理観をもって、粘り強く遂行することができるか ②研究成果の学術的な意義、及び、その社会的意義を説明でき、その事業化を構想する能力があるか	1）ヒューマニクス基礎実験、2）ヒューマニクス特論、3）生命医科学基礎実習、4）理工情報学基礎実習、5）臨床医学演習
学修成果の評価に関する方針	学修成果の評価は、「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階ごとに学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。 – カリキュラムに基づき、学修成果物及び学生個々のパフォーマンスをエビデンスとして、研究指導教員及び授業担当教員が評価する。 – 本学位プログラムが独自に開発したポートフォリオ型達成度評価法（CPx：Career Platform for Humanics）を利用し、コンピテンスの達成状況を把握・評価する。		
学位論文に関する評価の基準	1）Qualifying Examination（QE）に合格している。 2）ポートフォリオ型達成度評価で規定のレベルを達成している。 3）国際社会で自在に交渉することができる英語力とコミュニケーション能力がある。 4）医学医療分野の社会的ニーズを理解して、工学・情報学と生命医科学を駆使することで解決が可能になる課題を学位論文の研究課題として設定している。また、学位論文の成果に基づき今後解決が求められる研究課題を自立して設定できる。 5）未知の問題の本質を突き詰めようとする確固たる意志および真摯な態度をもち、設定した課題を解決するために、自らの力で研究した成果が学位論文としてまとめられている。 6）学術界または産業界から国際的に高い評価を得られる学術論文を公表できる。 7）研究成果を社会に実装するために何が必要か説明できる。		

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（工学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Engineering

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

未知の問題の本質を突き詰めようとする確固たる意志、工学・情報学と生命医科学を融合したバイディシプリンの専門知識、ヒューマニクス研究の基本技術とこの分野の世界の状況を理解し、パラダイムシフトとなりうる課題を自立して設定する能力、誠実かつ真摯な態度でその課題を解決する能力を涵養するための教育課程を編成します。

教育課程の編成方針	– 共通科目では、研究倫理の学修、アントレプレナーシップ教育、課程修了後のキャリアパスを想定したインターンシップ、及び海外ラボローテーション等を通して、世界で活躍する強い意欲、誠実な精神、強い倫理観、国際交渉力等を涵養します。 – 専門科目では、基礎医学、臨床医学、及び工学・情報学について、e-learning と PBL（Problem-based learning）を組み合わせた講義とその実習により学修し、ヒューマニクス研究に必須なバイディシプリンの専門力を涵養します。 – ヒューマニクス専門科目により、学生個々の専門性を向上させることを目的として、工学・情報学からメンター教員 1 名と生命医科学からメンター教員 1 名を選び、メンター同士の協働を基盤とした完全ダブルメンター制によって専門知識及び技能を修得します。
学修の方法 特色的な教育	標準的履修スケジュールを以下に示す。 – 1 年次のヒューマニクスフォーラムにより、大学院での学習計画を確認する。 – 入学後半年以内に副分野のメンターを決定する。 – 2 年次終了までに必修科目・選択科目から 35 単位以上を修得し、Qualifying Examination（QE）審査を行う。 – QE 後、年 1 ～ 2 回の進捗状況発表を専門委員会に対して行う。 – QE に合格し、必修科目・選択科目から 45 単位以上を修得したうえで、学位論文予備審査に合格した場合、学位論文審査資格が満たされる。 – 学位論文提出を受けて、学位論文審査及び最終試験（口頭試験）を行う

入学者受入れの方針 / Admission Policy

求める人材	ヒューマニクス領域でパラダイムシフトとなりうる課題の発見・解決を通して、人類の未来に貢献するという強い意志を持ち、下記のいずれかにあてはまる人材を求めます。 – 生命医科学あるいは臨床医学の基礎的な知識・技能を有し、さらに理・工・情報学のいずれかの分野の学際的な研究に高い関心を持つ人材。 – 理・工・情報学のいずれかの分野で基礎的な知識・技能を備え、さらに生命医科学あるいは臨床医学分野の学際的な研究に高い関心を持つ人材。

ヒューマニクス学位プログラム　／　博士（工学）
Ph.D. Program in Humanics / Doctor of Philosophy in Engineering

入学者選抜方針	本学位プログラムは、生命医科学と理・工・情報学の知識・技能を有機的に融合し、人類が直面する生命と健康上の課題を克服しうるパラダイムシフトとなる科学及び技術を研究する課程である。入学者選抜において、こうした学位プログラムの特性を生かし、生命医科学と理・工・情報学分野における専門性と学際性、先進的な創造性、国際性、そして専門外の研究者への説明能力を基調とした入学要件、選抜方式又は選抜基準を設定する。具体的には、生命医科学と理・工・情報学分野の専門知識を問う口述試験を実施し、加えて、生命医科学と理・工・情報学分野を融合した研究提案を英語で記載した研究計画書の提出を求め、その内容を複数の異なる専門分野の教員が参加する口述試験によって評価する。

学修支援体制 / Learning Support Framework

学修支援	– 出身学部と異なる概論科目および基礎実習での知識・技術の習得を通じて、異分野学修を支援する。 – 共通科目「Scientific Writing and Publishing」において、論文作成に必要な知識とスキルを指導する。 – ポートフォリオ型達成度評価を活用し、学生が自らの学修状況を振り返り、課題を明確化することで、自己省察を促す。
学生同士の交流機会	– 共通科目「ヒューマニクス研究フォーラム」にて、新入生同士及び上級生との交流の機会を提供する。 – 学生グループが中心となり、ヒューマニクスシンポジウムを企画・開催し、企画運営を通じた交流と協働の機会を提供する。
教員との交流機会	– メンター教員以外にも QE 審査員と研究進捗発表（半年に一度）を行い、博士論文研究への助言を得る機会を提供する。 – ダブルメンター制・リバースメンター制を導入し、学生を中心にメンター教員間の協働を促進することで、異分野学修・研究を支援する。

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

– 教員会議およびカリキュラム委員会において、学生の学修成果に関する評価および在学生および修了生へ向けてのアンケート結果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証する。

筑波スタンダード

筑波大学は、学士課程教育と大学院教育に係る2つの「筑波スタンダード」を策定し、本学の教育宣言として広く社会に公表しています。

▌学群スタンダード

学士課程の教育目標とその達成に向けた全学的方針を掲げるとともに、教養教育の目標とその達成に向けた具体的な教育内容、各教育組織における学位授与の方針と教育課程編成・実施の方針、教育の質の保証の方策等を明示しています。

▌大学院スタンダード

大学院の教育目標とその達成に向けた全学的方針を掲げるとともに、各教育組織における学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、教育の質の保証の方策等を明示しています。

筑波大学

ホームページ　http://www.tsukuba.ac.jp/

住所　〒305-8577
茨城県つくば市天王台1-1-1

大学院スタンダード

発行日　令和8（2026）年4月

編集・発行　筑波大学教育推進部

筑波大学

University of Tsukuba

2026.4